新群書類從

第九

一此巻收むるところは、古淨琉璃中所謂金平淨琉璃を主として採り、之に附するに同一系統を以て目するも不可無かる可き製作を以てしたり。

一世の所謂金平本なる名稱の包含する意義は、甚だ曖昧模糊として定かならず。坂田公時の子公平の上に就きて作り設けたる淨琉璃をも云ひ、又同じ公時の子にして公吉と稱するものゝ上に就きて作れる淨琉璃をも云ひ、(公吉卽ち公平なるや否やは的證を見ざるを以て未だ明らかならず、)公平の父公時ならびに其の同輩卽ち源賴光幕下の四天王一人武者等の上を作れるものをも云ひ、猶廣く武勇剛猛の事を旨として作れる淨琉璃をも云ひ、一轉しては其の性質に於ては全く異なるも其の體裁に於ては酷似せる普通六段物と稱する古淨琉璃等をもわいだめ無く金

平本と稱する人あり、愈々轉じては小夜嵐の如き勇武の事を主として作れる小說をも金平本と稱する人あり。日本文庫協會の主催にかゝる圖書展覽會に際して、金平本の名稱の下に包含され出陳されたる書目を一瞥して、所謂金平本なる名稱が如何に讀書の人々に解釋され居るかを推知すべし。然りと雖も金平本といへる名稱は、之を狹義に解しては金平を主人公とせる淨琉璃、之を廣義に解しては金平と系統相連なり、若くは性質相近き人物を主人公として武勇を旨と作れる淨琉璃と云はんを正しとすべきなり。此の卷收むるところ必ずしも皆公平が上に就いて作れる淨琉璃のみならずといへども、之を金平本と稱するに於ては因襲の慣例上蓋し異論無きものを取れり。

一金平本の作者は必らずしも岡清兵衞のみならずとおもはる。岡清兵衞の署名ある册子の今に存するものは甚だ稀有にして、江

戸名所咄の記事有るにあらざれば、金平本の作者の岡氏なる事を認めんも亦殆んど難きほどなり。時代久遠今詳しく知るを得ずと雖も、金平本悉く皆岡清兵衛の手に成るとせば、矮人觀場の陋に近かるべし。

一金平本、文法一貫せず、急遽の事を叙するに至つては、文章體のもの忽然として變じて口語體となる事、猶舞曲の如し。用語もまた甚しく蕪雜にして、横訛りの發音を其儘寫せるあり。假名遣に至つては、波行を和行に誤るあるのみならず、和行を波行に誤れる如き甚しき非違あり。然れども今皆改めずして其の舊を存す。覽者之を諒せよ。

明治丁未夏　　幸田露伴識

新群書類從第九目次

歌曲

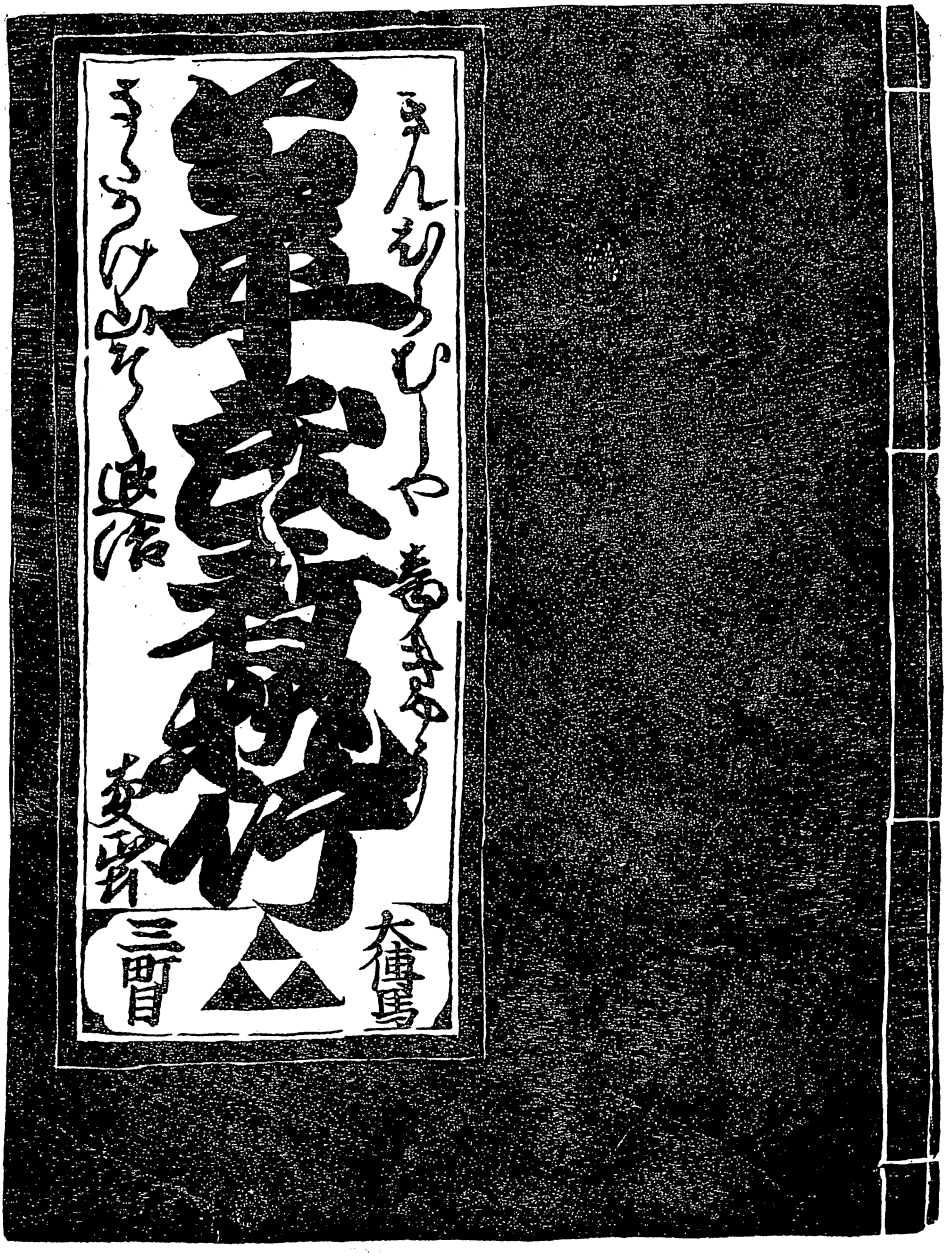
清原右大將……一
四天王若さかり……二五
四天王女大力手捕軍……四〇
京今宮本地……五七
日本両武將始……七五
源平武將論……九七
敵討のいこん……一一三
四天王筑紫責……一三四
末武印問答……一五二

ささきあらそひ……一七〇
天狗羽打……一八七
四天王むしや執行……二〇六
綱金時最後……二二〇
賴光蜘蛛切……二四〇
子四天王北國合戰……二五六
四天王最後……二七五
公平誕生記……二九四
滝根悪太郎……三一一
公平花だんやぶり……三三五
公平化生論……三五一
公平關やぶり……三七〇
公平末春いくさろん……三八九

公平天句問答……四〇九
八幡太郎誕生記……四一八
渡邊智畧討……四三二
やはき合戰……四五三
勇金平……四七五
渡邊三田合戰……四八三
菅原親王……五〇一
公平つるきのりつくわ……五二五
公平武者執行……五四二
公平入道山めくり……五六一
いかつち論……五七七
殿上闇討女袖鑑……五九七
よりまさ……六一五

頼朝三嶋詣……六三八
ごばん忠信……六五九
義経地獄破……六六八
あさいなしまわたり……六七六

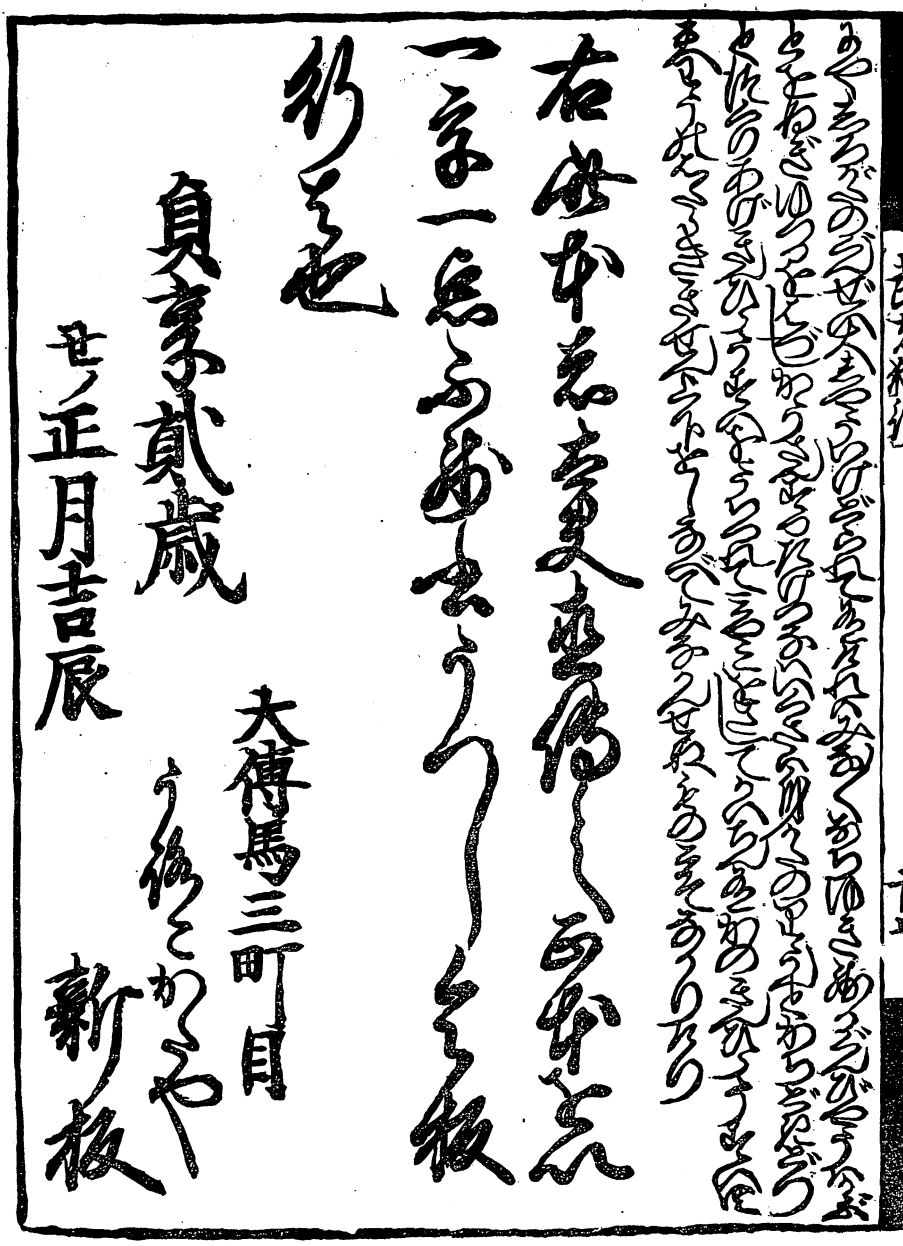
目次終


大傳馬
三町目

（公平武者執行本文の始）

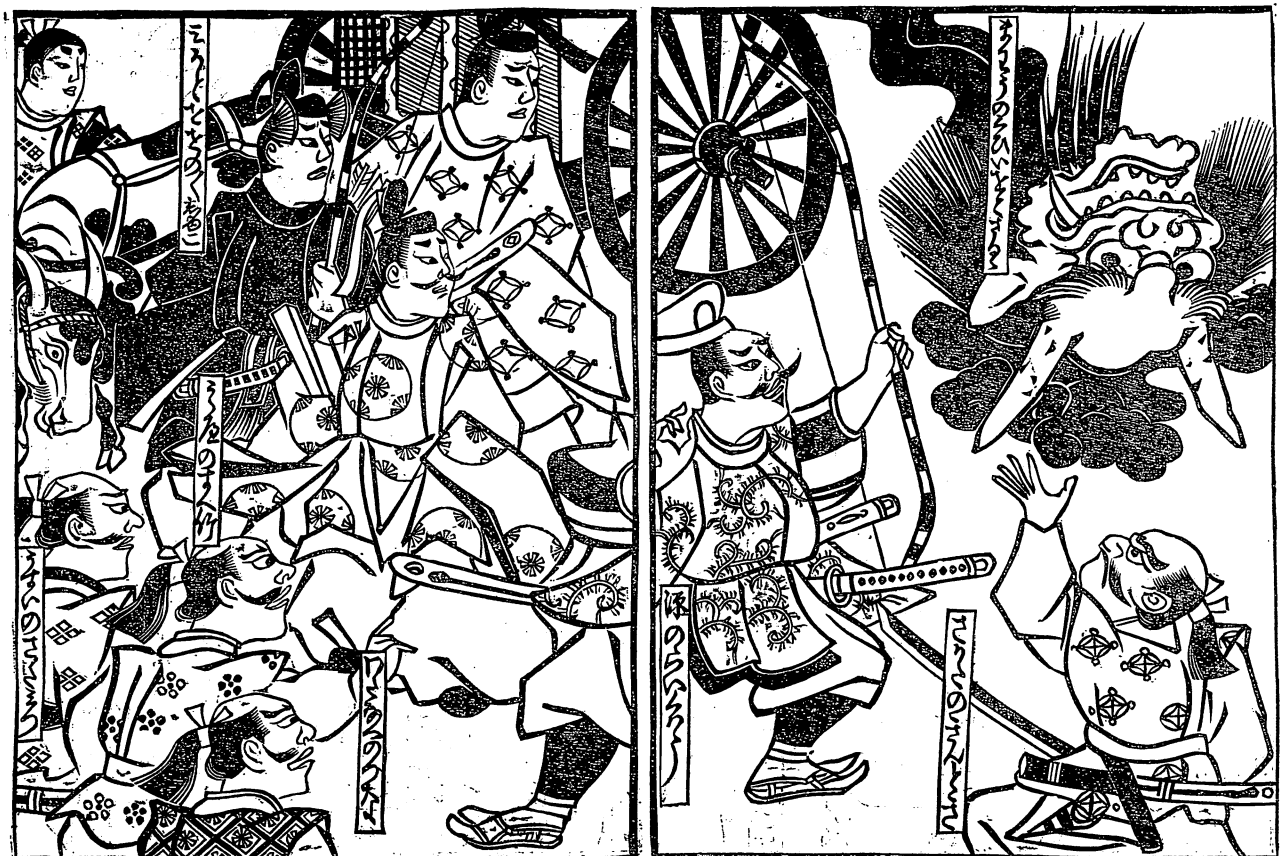
公平武者執行　初段

（公平武者執行本文の終）



（公平武者執行挿繪）

（京今宮御本地挿畫）



（なまくらのニンベエ筆絵）

（公平誕生記挿畫）

新群書類從第九

歌曲

清原右大將

第一

さてもそのゝちつら〳〵おもんみるにせんは人をめぐみ身をたすくあくはたみをくるしめおのれをせむよりてつゝしむべきはせんあく二つのさかいなりこゝにせいわのかうゐん六そん王のちやくなんとしまのさへもんまんちうとてるいたいのめい將ありふがうのほまれよにたかくいづするかの内にてすか所たまはりすんしうふちうにきよぢう有六そんのわうのはんゐいひをかさね御子兄弟持たまふちやくなんを左兵衞のせう頼光とて十八歳やうぎたいはい人にこゐたくひなきゆうしなり次はちよわか丸とて十二歳にそ成たまふ扨したかふ所のらうどうには山なたはやしたかた石川そのべむらいしひゝにしゆつしはひまもなしこゝに又わたなべの源五つなとて生年十七歳のわかもの有けれはむさしの國のちうにんにてありけるかちゝしゝてのち母かたのおばやういくしつの國のわたなべにてそだてしをまんぢうこいうけたまひ十一歳よりめしつかはれ御まへさらぬかうのものちから人にすくれよふほうゆふいの大の男日本めいよのつわもの也あるときのこと成にまんぢうみだい所にちか付我なか〳〵ざいこくしゐいりよのほどもおほつかなしいそき上らくいたすなりいかに頼光ざいきやうの其あとよろしく國をまもるべし源五をは是にのこすべけれどもさぞふるさとわたなへこいしかるべしいざもろともにと御かと出めでたく取おこない渡邊を御ともにて都をさしてど三重のほらるるていとになれは二條の御やかたにうつらせたまひみかとをしゆごし三重たまひける是は扨置其比又清原のう大將あきたゝとてかうけ一人おはしますとう

ぎん一の后せうていくわうくうの御あにとしてくはんいろくしやう共にふそくなくゑいくわをきはめたまひける然にすきつる比ひゑいさん御こんりうのぎに付まんぢうを御にくみふかくいかにもしてうしなはんと心をくだきたまへ共きこふるゆうしにてしんていにたつせず年月しんいをこがしたまひしが此たひのとらくをよきさいわいと御身ちかき人〳〵五條の中將さくら町のさいしやうあやのこうちの少將をひそかにまねきよせ此ことといかゝ有べきとひたすら頼たまひけるもとより三きやう時のけんにおそれへつらふ心いとふかくそれこそやすき御望來るしも月廿三日とよのあかりのせちゑのよかのまんちうもうちのしやうでんゆるされしゆつし仕ると承るかれいかに弓やの家にてもせちゑのさへ太刀をはよこたへ申ましまして家のこ郎等をつるゝこともかなはず只一人あからん所を待うけ打たんことなんのしさい候べきことやす〳〵とぞたくみける大將ゑつきかぎりなく方〳〵はせんろくの家なれ共ちりやくはふしにもまさりたりたのもし〳〵かまいて人にもらすなと悦ひいさんて其日をおそしと三重待たまふつゝむとすれとあくし千りをかくるとかやまんちううつたへ聞たまひ渡邊のつなを召れかやう〳〵のしさい有我ふゆふの家にせうをうけ今此はぢにあはんこと家のなをりたるへしさ有とてもせちゑのざへ太刀をよこたへ上るならばかさねて御とかめ有へしせんする所身をまつたうして君につかゆるはちうしんの法なりちりやくをもつて此なんをのかれん其むねほつすべし源五承り誠にてん上へは御とも召つれられんこともかなはず敵はくぎやう大じん一つなり是のんどにせむる大事しかしながらそれがし斗は人とかむる共もちゐずほうをやふつてのりこへ〳〵うつをはしらのもとまであひつめ申べし此渡邊一人をば千ぎ萬ぎの兵よりたのもしく思召たとひきまん國のき王らせん國のら王がへんし來る共何程の事か候べきましてことにもあはぬなま公家ばら有のたけ共存ぜすらうぜきに及ばゝ一々にくびねち切てすて申さんに何事か有へきさらはしたく仕らんと御前を能立はやようをそ三重したりけるせちゑのよにも成しかはおのおの御前に上らるゝはなやかなりけるぎしきなりまんちうはかねてよりの事なればよういの大太刀よこ

たへ御前をさして上らるゝあんのごとく大將さんきやうをはしめとして其外以下のでん上人六ゐのしん迄あいかたらひおそしとこそは相待けるまんちう御らんしこしの太刀をするりとぬき此太刀は家のてうほうひげ切是てうてきをばつせんため必かやうの折からはせんしやくまとてわさはいおこること有あはれふしきをこるなら太刀はなにあふつるきなりうでの力はおぼへたりあまさし物をとのゝしり二ふり三ふりふりまはし又さやにおさめおほくの中をおしわけ〳〵さあらぬていにてとをりたまふあい待たりしかいもなく此いきをいにおそれをなし中をあけてぞとをしけるあさましかりし次第なりされ共歸りには本ノマヽ（これの誤カ？）せひにをいてあまさしとてくすみして待所へ渡邊のつなくろかはおとしのよろいをき四尺八寸の大太刀こはきにかいこみせいする物をゆんでめてへはねたをしてん上ちかくしこうする大ゐみたまひうつほはしらより内へほいの物きたるはらうせきの至りなりあれおい出せ畏て候と我も〳〵と立より汝ほいのふんとしてすいさんの至なりいかに〳〵とのゝしれ共源五きかぬかをにておせ共引共物共せず只そらうそふいてぞいたりける人〳〵いよ〳〵腹を立おのれ何物なれば人の物いふにも返事せずかくらうぜきをふるまふそ其なをなのれとせめにける源五聞てらうぜきこは心へず扨はさき程より方〳〵それかしをおしつひいつしたまひしは罷出よといふ事か我はいなかふしのことなれは物のしやべつもわきまへずきん中のならばにて五せつのよは人をかやうにしたまふとのみ心へ物をもいはず有つるが今よく承れは罷出よとのことか尤仰にしたかい度は候へ共しうにて候まんぢうをこよひてん上にてやみ打にすべきくはたて有よし聞さもあらばしやつばらを五十も百もねぢくびにいたししうのなんをすくはんため參りたり其せんとをみさらんかぎりは天ちがさかさまにかへる共まつたくもつて出ましきと四方へばつとつきたをしはつたとにらみし有様は只身のけもよだつ斗なり人人大きにどうてんしやあこんやのやみ打は夢〳〵もつてかなふましせんなし〳〵とふゐひわなゝきみな〳〵かんちよに入にけるすでにせちゐはてけれはまんちう出させたまひける源五みて何と御入候と申せはいやしさいなしとて立出たまひしかいかゝ思は

れけんこしの太刀をとのもづかさにあづけをき御せんの出させたまへは渡邊いごの爲も有とつつ立上りすいさん成やつばらかなたふのうへにざをくみうたをよみしをつくるは家のなふむやうのことをたくみしもたてぬぶけのわざ只ひとへにはねなき鳥が千里をかけうをの木にのほらんとするにことならすあさましのふせいやと八めんにいかりをなす公家大臣いよ〳〵きもをけしとうざいひつそとしておともせず源五今は是迄と君のせんごをしゆごしやかたをさしてかへりけるかのまんぢうのちりやくわたなへがゆふりきせん上下おしなへかんせぬものこそなかりけれ

第二

其後よもあけ行はう大將いそぎ御前にあがりそれゆふけんのたいしてくるんにれつしひやうくの物をめしつれきん中へ上る事きやくしきのれいこゝんのいましめ是なり然にまんちう郎等にはらまきさせ其身も太刀よこたへせちるのさへつら成こときたいのらうせきざいくわかろきにあらするいりよいかにとそうもん有みかとげきりんかぎりなく其ぎならばいそぎまんぢう召せ承り候とやかてちよくし立にけるまんちうちよくしと打つれさんだい有みかとるいらんまし〳〵て右のりやうでうくはしく御尋ね有ければまんちうそれがし存すたゞしせちるのよそれかしに人〳〵はぢをあらためすいさん仕て候らはん次に刀のことはとのもづかさにあづけ置候召出され太刀のちつふによつていかやうにも仰付られ候へとおそれ入てそうもん有みかどるいぶんあつてそれ〳〵とてかの太刀を召れるいらん有に上をばさやまきのくろうぬつたりけるが中には木太刀にきんのもつてはくをおしたりけるみかとおとろかせたまひけにもひつでう其たんは重てせんぎ有べし誠にゆうしの心かなとうざのはぢをのがれん爲刀をたいするといへ共後日のとかめをあひはかり木太刀をよういいたすこと弓や取みのはかりこともつてかうこそ有へけれ又郎等かすいさんのことふしのならいしうのなんをすくはん爲其身をすてゝあかるだんゆふしのむねとする所なりまんぢうがとかにあうずしんべう〳〵罷歸

れゑいかんはなはだかぎりなく御前を立たまふまんぢうのふるまひほめぬ物こそなかりけれさればにやたい將は思ひの外にしそんしほう〳〵やかたに立歸りかさねてないだん有べきと後三きやうをつかいをもつてよひたまへ共まんぢうのちりやく郎等の渡邊本ノマヽがゆうりきにきもをけしゝよろうとかうし一せんさんくわいなかりけりあきたゝせんほうつきはて此うへは弓やをもつて本いをたつすへしさは有ながら我はしいかの家なればふけいのわざは叶ふましげに誠みなせのくらんどゆきはるこそおはり三川とう〳〵み三か國の大將にてせきより東の大名なりさいはい我としたしければよひよせて頼んとつかいをこそ立らるゝゆきはる何事やらんとつかいとつれて來りける大將きゑつほとんどあさからずさんかいのちんくわをとゝのへさま〳〵にもてなしすへんに及んで後いかにゆきはるゝごのふちん身の大事を申合度事有たのまれたまへかたるべしと右のあらまし打とけて申けるされば にやおちこちのたつきもしらぬ物にたになるゝはさけのなさけなりいはんや日比のよしみといひ又はかういの其人にひたすらにもてなされたるふしはいと竹の後のわざわいかへりみず其きにをいてはことやすしいさゝらはそれがしがふん國へ御けかうましませまんぢう本國へ歸る所を待うけやすやすと打取て參らせんと事もなげに申せはあきたゝゑつきかぎりなく尤此ぎ然べしへんしもはやくいそかんとしのひ〳〵に都を出三重とう國さしてぞ下りける是は扨置まんぢうは渡邊を近付今ははやたいはんあきぬれば本國に下らん其よういいたすべし源五御でう畏候とはやろしのけいゑ花やかにて本國さしてぞ三重下らるゝ急がせたまへば程もなくとう〳〵みの國はま松に付給ふ待かけたりしかたきのせい此よしをみるよりもすはや是ぞとなんほくにつら成時のこゑをぞ三重上にける時のこゑもしづまれはゆきはる一ぢんにすゝみ出いかにまんちう是にひかへさせ給ふは忝もたうきん第一の御后しやうていくはうくうのこぜうたうたいしやうあきたゝきやうなり日比のうつふんさだめて心へたるらんかく申はみなせのくらんどゆきはるけふのいくさ大將かうむりたり一人もあますまじかゝれ〳〵と下ぢすれば我おとらじと打てかゝるまんぢうの御馬の侍共心へたりとわ

りあひ爰をせんとたゝかいけるもとよりすはだのこととなればくつきやうの侍十一人まくらをならべ打れける源五みていひかなき物共やそれかしふせかん其ひまに物のぐせよやかた〳〵と大手をひろげてかけ合はせより物をかいつかみゆんでへなげめてへなげてさきまかせの人つぶてあへて近付ものもなし其ひまにみかたのせい物のぐひつしとさしかため兩ちんにむらかつておつつまくつつひはなをちらして 三重たゝかいけるもとよりよせてはたせいなりみかたはわつか二百よきかなふべきにはあらね共日本ふさうの渡邊うての力は覺たり太刀はきこふるつるぎなり八方を切つてまはりけるよせてたせいといへ共只一人に切立られはやまけ色にぞ成にける爰にゆきはるがかうけんみ山の兵とうたけとも同ゆはもと大藏もろみつとて大かうのゆうし有み山は生年廿一おもてにくまの如くにひげをい其たけ六尺三寸六十五人か力ゆはもとはつらあかくほねふとくせいは六尺二寸是もおとらぬ大力二人打つれ切て出渡邊にてあればとて何程のことの有べきと大太刀をふりかたけきつさきをならべきつてかゝる源五みてさき程よりそれかしが太刀さきにまはる物一人もあんをんにて歸らぬをみながらすゝんでよるはさだめておぼへ有へしけにこつから人にすぐれたりなを聞まてもなしいでいで一太刀とらせんと太刀ひつさげわたりあひしはしか程こそ三重きりむすぶしはしせうぶはみへざりしがいわもと何とかしたりけん渡邊が太刀をうけはづしから竹わりになりにけるみ山是をみてにげんとするをぼつつめすかさすくびを打おとす大將はかなはしと跡をもみすして 三重にげにける渡邊なをも打とめんと跡をもとめほつかけゝれ共へたゝり行ば力なくおくれはせのやつはらをばらり〳〵と切てすてみ方のちんへひつかへすつもるとしは十七歳行儀さこそ有へしたぐいなきつわものやときせん上下をしなへみなかんせぬものこそなかりけれ

第三

扨もそのゝちあきたゝやゆきはるはあやうき命にげのび大いきついていたりしが大將申けるやうはいかにゆきはる此うへは我しやうがいに及共まんぢうを

ほろほさずはかなうましげに誠我ふだいの侍そのたの藤太のりひでこそあんじや第一のもの成ゆへ兩なしはいの爲あふみの國しがのさとになか〳〵くだし置たりかれにないだんたつせんといそき藤太をめしませくたんのあらましのへにける藤太承り誠にまんぢうはふんふ二道のゆふしなれば弓やをもつては中々かない申まし只ざんげんにしくはなし去ながら右のしたいあしけれは大かたにてはみかどゑいりよをうつさせたまふまし年比の御おんにそれがしが一命を君に奉らん其ちうせつにはそれがしが一子國みつをひとへに賴奉る其手立といつはそれがしが六ゐのしんに出立君の御とも仕りたいりに上くろとのわさに立かくれあやまつたるふせいにてわさとあらわれにげされは人〳〵是はとあやしめしさいをとふ共申まし〻からばがうもんせんはひつでうなり其時是はまんぢうか家のこにて候がしゆくんまんぢうかやう〳〵のたくみにてそれがしにはごてんにひをかけよとの仰にて候とはくてう申さん折ふしゆきはる殿はまんぢうが方よりのむほんをめぐらしふみなりとにせふみをかきしたゝめさんだい有へしと手に取やうにぞたくみけるあきたゝ悦ぶことかぎりなく此たびのことなればせひ一めいを我爲にうしなふへしへんれいには國みつにいぶきかたゝ〻がのさと殘らずあておこなふへしとじひつに下しふみをかき國みつにとらせつゝぢこくうつしてかなはじと其やういをぞしたりける是は扨置まんぢうはあきたゝ〻がらうぜきいくさの次第をうつたへんとゝふたうみよりひつかへし都をさしてのほらるゝいそがせたまへは程もなく壬三月十五日入あひ比にていとに付たまひけるこよいは日くれぬ明日さんだい有べしとあくるを待てそ三重おはしますあきたゝ此よし聞よりも藤太を六ゐのごとくつくり立みめいより上りくろとのわきにかくし置折ふしせつしやうくはんばくさんたい有ぎよくざに近付かんとしたまふ所にくろとの内に人かげのみへければこはいかにくろどの内に人の有いかに〳〵とのたまへは藤太おどろきたるふせいにてすゝのまさしてにけゆくを人々ほつゝめ取ておさへ是はみなれぬ物なりととへ共〳〵申さすさらばかうもんせよやとおび切ほどけはひ打つけたけ出にけるいよ〳〵ふしぎの物なりとかうもんびまなくせめに

ける藤太はもはや是迄といかに八々今はつゝます申べし是まんぢうふだいの侍みつばの五郎と申しのひのものにて候扨もしうにて候まんぢうぎやくしんの存立それかしにはしのび入て御てんにひをかけよ其時おしよすべしとのあひづにてしのび入て候へ共うんめいつきあらはれて候と誠しやかに申ける八々おとろきよしをかくとそうもん有然所へかねてあいづのことなればゆきはるあはたゝしくはせ來りまんぢうてうてき心がけみかどをうらみ奉るとてかくのだんに頼て來り候ゆふさりやはんに必おしよせ申べし御よういい候へと大いきついで打たへけるみかどおどろかせたまひまんぢうはだいばんおきぬるうへはいまた都に有けるか時にたいしやうすゝみ出さればこそとよ過しよそれかし北のへさんけい仕り候へてまんぢうは下向と思しくてとりいの本にてあひ候今存合ばかやうのことをたくみぬるしゆくぐはんの爲にてぞ候らんとかむりをかたむけそうもんすみかどゑいふんまし〳〵て扨はうたがふ所なしまつみつはをはせつかいしまんぢうをめし取つの國すまのうらになかすへしとせんし有承り候と御前を罷立とうばんの侍共今や〳〵と待ゐたりかくとしらでまんぢうは右のだんを打たへんとさんだい有所をしゆごのぶし共立出せんしなりとゝこふのさたに及ばずうかりし舟に打のせすまのうらへと 三重なかしけるあきたゝはまんぢうをは思ひのまゝにざんげんし郎等のつながゆくへをたつぬるにはやさき立ておち行候と申けるゆきはる聞て其源五か母つの國渡邊に候なりかれがもとへおち行てぞ候らん打手を御つかい候へあきたゝげにもと思ひ郎等共に申付渡邊さしていそぎけるしゆく所になればとうざいよりみだれ入たづぬれ共源五はさらにいざりける扨はかくして有つらんと母を取ておさへおこと源五か行へしらぬことよもあらじ申せ〳〵とせめにける母聞てあゝはかなや八々たとへ存てあれはとてをいたる母か命をおしみつついまださかりの子の行へをは申ましましてしらさる事なれは何ととはせたまふともいふべきことの侍らずいかやうにもせめたまへと涙をなかし申さるゝ物のふ聞て腹を立かうしやう成女かな今こそさやうにちんずる共すいくわのせめにあふ時はよも申さでは有べきと取てひつ立こしにのせ 三重都をさしてそ

いそきけりさればにや源五はまんちうのしざいるさいをたしかに聞さだめんとらく中にはいくわいしていたりしがはい所にうつらせたまふと聞からに此うへは本國に歸り賴光へかくと申上せひのあんひをきはめんと本國さして歸りしが道にて母のしさいをつたへきゝ扨は只今山の下を人おほくこしを取まき行たるか母うへにてぞおはすらん我しつしの母にてもなしやうせうよりやしなはれ其ほうをんをはおくらすしてけつく我ゆへ母上をうきめに合せ申さんことじんりんの道ならず又我々かたきの手に渡りしやうがいに及び君のせんとをみとゝけずふちうのしんと成ぬべしとやせんかくやあらましとあんじわづらひいたりしかいやとよ賴光のふゆうぼんふのわざにあらされはよもや打れたまふまじ母はかたきの手にわたらばたちまちせめころさるべしさればおやよりもたつときは君なれ共子ゆへにしする母をよそにみてあらんことふかうのつみ第一なりなむ三ぼうとくはん念し跡をしたいて三重おつかくる程をへだてぬこととなれば道にてほつつめやあ方〳〵其母をつれ行は我行衞をきかんためそれかし參るうへは母をはかへせさなくはおのれらがくびねぢ切てすつべし又かへすにおいては我なわかゝらんとこしのなかえに取付ひたおしにおしもとす物のふみてあふごへん出たまふうへは母上かへし申さんとゝそきこしよりおろしける源五よろこびおやのためにしせんずる命つゆちり程もおしからしと太刀刀をなげすて我となわをぞ三重かゝりける母は御らんしてこはなさけなや源五我はおいきのはてなれはあすをもしらぬ露のみのなにゝ命のおしからんおことはいまだはたちにもたらぬ身かをいたる母をかなしみて出たる事の物うやといたき付てそなげかるゝ源五聞てよに有かたき仰かな去ながらあんしても御らんぜよそれかしはよふちにてふもにおくれみなし子にて侍りしを色〳〵にかいほう有かく人と成ぬる御心の程しゆみよりもたかし其御おんほうするまでこそなからめ我ゆへつみにしづませたまはんことみやうのせうらんもおそろしやそれかしはちよつかんの身なれば一つたん袈をまぬかれたり共つりばりをふくむうをあみにかゝれる鳥のことくにてついには打れ申べし只何事も何事もぜんぜのことゝ思召かまいてなげかせたまふな

よかへす〳〵も御おんをほうせすしてむなしくならんこそよみぢのさはり是なりとおにのやう成源五もとうざいしらずになきいたりじこくうつればけいこの物それこなたへと兩方へひきわくる母は夢の心ちしてさりとては今しはらくなこりをおしませたまはれとりうていこかれたまへ共みゝにもさらにきゝ入ず源五をひつたて都をさしてぞ歸りけるやかたになればよしをかくと申上る人々よろこひいそぎ六條川原にてうんきをはねよ畏て候とかはらをさしてぞ引にけるなわ取は山のゝ源内はるつぐとてなにしあふたる大ちから大事のめしうと是なりと源五につけたるなわを我たうにしつかとしめ付兩方へそひつはりける太刀取はむしや所のすへなが日比のいしゆあるゆへにわざと切手を望ける川原にも成ぬれはしきがはしかせ西むきになをしける源五四方をきつとねめまはしいかにするゑなが汝はつね〳〵のいしゆにより望て切手に成つらん源五程成侍をはれのしやうぞくしてなどきらぬぞおしく切なばつらばねにくいつくべしと申けるすへなが聞てなんでうわかてにかけてきらんすくひかいてくい付んむようの口をきかんよりさいごの念佛申せそれうれふべき所にていなげくべき所にてなげかざるはかへつてふかくのいたりなりじやまんがまんをふりすて誠の道におもむけいかに〳〵と申せは源五聞て有がたし〳〵さればせつせんどうしはとらをらいしてしせうとすしやくそんはきじんをらいしはんげをうくすがたこそぞくなり共とうりをもつてほつしとす我もごへんをちしきとたのみくかいをのかれんうれしさよとて物ことにゐんたうしてたまはれそくしに都へとひかへりあきたゝゆきはるはじめわどのばらのやうにひやうりむさんのやつはらを一々につかみさきしんいのほむらをはらさんそれよりべちに望さら〳〵なしけちゑんあれやすへながとかつら〳〵とぞわらひけるするゑながしきりにいかりをなし出御ぶんわらはせんと太刀ずいとぬきうたんとすればかいくゝりなは取ちうにひつ立 三重こくうにこそはしりけるくいにつなげるあらむまがはなれてかくるにことならず大力のくせとしてたゝとぶ鳥などのごとくにてあへてをい付物もなしむざんやなわ取はいしのうへをらつくわのごとくひかれみぢんになつてうせにけるわた

なべなむ八まんと念しさうの手をのべければさしもしたゝかにこしらへたるなわすん〳〵にきれにける然る所にすへながをさきとして我も〳〵とはせ來る心へたりといふまゝにやがてさきにすゝみけりすへながをはしりかゝつてかいつかみ大せいとうさいへおつちらし人のくびをはかやうにきる物ぞとくびふつつとねぢ切渡邊さしてぞいそぎけるかの源五かふるまひおにかみもかくやらんとおぢぬものこそなかりけれ

第四

扨も其後源五は渡邊に付しかば内につつと入かやうかやうの次第なりさだめてかたき來るべし先こなたへと母をはかたにおい奉り 三重とぶが如くに急ぎけるみのゝ國に聞へたるたるいのしゆくに年比よしみ有けれはあんないかうでたいめんしはじめおはりをかたりばんしは頼と申せはあるし聞て御心やすかれとたのもしくぞ申ける源五なゝめに悦び母にいとまをこいあるしに馬を所望し引よせゆらりとのり三重とう國さしてぞ下りける是は扨置國にまします頼光は都のさたを聞召ていとへ打て上りざんじやのくちをためすか又は城に引こもり打じにきはむるよりべちぎあらしとはげんさ（本ノマヽ）へぎり給ひしに御母上さまさまにかんげん有し故おんびんに國をひらかせ給ひ同御舍弟ちよ若殿幷に北の御かたてるひの上を引くし御しうとあふばのくんしよよしひてのたちを心ざし相模國へと急かるゝあふばにも成しかはあんないかうて此旨かくとの給へはよしひて驚きこはむねんの次第かな去ながら天とうは誠をてらし給へはざんじやいつまでさかゆべきまつ此所に忍ひ給ひじせつを御待候へともてなし給ふぞたのもしき然共よの中は八くの思ひたがへたくいたはしや頼光はしんしたへかたくおもきやまふを引うけたまふ人〳〵驚きせんご枕に立より様々かんびよやう有けれ共おもりこそすれげんもなし頼光おもきかうべを上それ人間のしめいはしやうするよりさだめりいきるもしするもじこくとうらいかなしむへきにはあらね共我むなしく成ならば父まんぢうをたれかはよに立申べき其うへ母うへをはしめ何れもあんやにまよふへしと思へ

はおしき命なりと涙にむせばせたまひける母うへ北の御方いよ〳〵きもきへ心たへいしおんやうしにきふつとあたへ 三重心をつくさせたまひけるさればにやはかりかたきは人のしん中よしひでにはやしんをさしはさみちやくし太郎國よし同次郎ひでみつを近付いかに汝ら頼光をちうとのみの上におもきやまふをうけたりよつく佛神三ぼうにすてられたりそれむこはいしやうたにんたりうんめいつきたる物共をひいきがほにかくし置せけんに此こともるゝならは我我一家のめつぼうたるへしいさめし取て都に上りちうを天下にかゝやかしあんどのしやうに預からんと思ふかいかゝあらんとかたりける兄弟聞て我々もないく〳〵さやうに存れ共父うへの御しんていをかねてあひ引かへ候尤よろしき御くわたてはやとく〳〵とそすゝめけるよしひてなのめに悦ひ頼光大力とはいへ共おもきやまふをうけぬれはゆめ〳〵はたらくことあらしこなたへこよや兄弟と家の子郎等引ぐし一とにはつとみたれ入取ておさへくもでゆいたるせばき所におしこめ 三重其よのあくるを待いたりあはれ成かな姫君は此よしを聞召夢うつゝ共わきまへず今ははや何と申とかなふまし所せんにごるよにながらへんよりめいどのたびにおもむかんしかしなから人々みつからも父と一所と思ひたまはんはつかしさよ心の内のくもらぬとをりをしらせ奉りともならばやと思召有し所を立出しのひいらんとしたまへ共四方をひやうとたてぬればいらせたまはんやうもなし姫君せんほうつきはてゝいのおもてをまわりやきりに上らせたまひ是よりもとふならばごたいも更につくましよし〳〵とてもしする命なればおしむべき身にあらずとたゝ一すちに思ひたまふ何か女しやうのことなれば兩がんくらみしはしきへ入たまひしかやう〳〵心を取なをし御そばに立よりこはうとましの御すがたやとくもてのこうしに取付てこゑを上てぞなげかるゝおつる涙のひまよりも誠に御めにかゝるもはつかしやさだめてわらはも父と一所と思召さるべしちはやふるかみもかゝみに聞しめせみつからゆめにも存せぬなりおもきやまふの其うへにかくおしこめられたまへはさこそと思ひやられたりなふみだいさま御心の内おしはかられていたはしやいかにちよわか殿さぞやかなしくましまさん心にまかせぬう

きよやと三人の人〳〵をみ上みおろしきへ入やうにぞなげかるゝみだい聞召御身の心をつね〳〵しりたることなれば一所とさらに思はぬなりたゝとにかくにか程までゆくさきかゝる我々かとがの程こそかなしけれかくて此よもあけゆかはかうせんのたびに思むくへしちぎりもこよひ斗なりふうふとなり子と成おや兄弟とうまるゝも一せならぬるんそかし今生のなごりおしまんとたがいに御めをみ合しのひ涙はせきあへずむざんや頼光はびやうきいよ〳〵しきりにしてせんごにほうしましませしがみたるゝ心を取なをしいかにやてるひのうへ御身もおやの子なれば日比のちぎりへんずへしと思ひしにか程に心をはこびたまふたのもしさよさすが頼光程の弓取かかくなり行くことよ思へをきうらみなし是天めいのきするところあつはれ我びようきにだにもおかされずはかやうにやみ〳〵とはならし物やまひはつらき物ぞかし御身はわかきのすへかけてにほひもふかきふじばかまさかりのはるを待たまへ身はあさがほの花ざかりひらきもやらてしほるゝなりちぎりをきにしかねことを思ひ出したまひなは一へんの念佛をもるかうしてたまはれやあけかたにも近付にとく〳〵歸らせたまへやと只ほう〳〵として涙にむせはるゝ姫君聞召何みづからにすへのはるをあひまてとは又よのつまをかさねていくよの道にちかへとや父上心かはりしことなればわらはも人とは思しめさぬもことはりなり去ながらもふいといふおにのこにせんさいびくとて佛有もくれんそんじやはふるによといふあく人の子有父こそ道をそむき候共我は貞女のみちをたかへましにこりしよにすみ人のうたかいうけんより是迄なりや人〳〵とまもり刀をすいとぬき心もとにさしあつと斗をさいごにてあしたの露となりたまふ人びとおとろかせたまひすくはんとするに力なく是は是はと斗にてなくより外のことぞなきよもあけ行はよしひで此よしをみてるゝあさましのこと共や是と申も父をさみし道にたかふによつておのれとぢめつしたりよし〳〵其まゝすておけとさらになげくけしきもなく三人をろうごしに打のせ都をさしてぞ三重上りけるいそけは程なくいつの國みしまのしゆくにぞ付にけるひせいさんにかたむけばりよしゆくにこそは三重とまりけるさる程に其日のあるしをはうら

べのにかうとてゆへ有物のゆかりなり然に此あらましを聞よりもいつしうらべの六郎を近付やあ是にとまりたまふめしうとをよその事に思ひしに我らがせんぞの御しうまんぢうのみだいきんだちにてましますなりそもおことが父はうらべの兵ごかねたかとて六そん王よりまんぢう迄二代そうでんのらうとう成しかふりよに御かんきかうむり此所に引こもりついにむなしく成さいごの一ごんにも我こそかくあひはつる共六郎をは君の御めにかけうらべの家をつかせよかへす〳〵と申置てあいはてしゆへおことせいじんせはいか成人をも頼君のげんざんに入ばやとけふよあすよとくらす所にまんぢうねいしんのざんによりる人とならせたまへば力及ず過ぬる所にかやうのちせつにあふこと君を年比たいせつに思ひ奉る天りまさにかないたりなんぢうまれ付のゆうりきはかやうの時のやうぞかし一めいにかへ君をうばい奉れいかに〳〵とかい〳〵しくぞいさめけるよこてを六郎てうと打日比の望是なり父のゆいこん君の御たのみはつた〳〵に成共君をうばい申べしへんしもはやくこなたへとふだいのけらい平次兵衛を只一人打つれうらみちよりぬけおもてへ出なふ母上君たち是へ御出有ならば御とも申あ〳〵からたうけにおち行侍りたまへいかに平次兵衛それ成もりにあいまてとかたはらにつつと入身のにくを少おし切其ちをおもてにおしぬりかみをばつとさはき大いきついてわかていへはしり入是は此へんちかき物にて候かあれ成もりにて只今ねんらいのおやのかたきを取候かあとよりかたきの侍おつかけ参り候間御大名の御とまりをさいわいとかけこみ候ばんしは頼奉るととんしゆしてこそいたりける侍共是を聞おくへかくと申よしひて聞てそれがしをみかけ頼て來る物をいかでせひなく出さんそれこなたへと立出る所をはしりかゝつて取てふせたちをむねにおしあて我かたき打たるとはいつはりなりかく申それかしはまんぢうのふだいのかうけんたりあの人〳〵をすみやかにもんぐわいに出すべしさなくはおのれがくびねぢ切て我も爰をは立さらしいかに〳〵と申けるよしひで聞てやあ子共とも父をふびんに思ひなばめしうとを出し我をたすけよとふるひわなゝき申ける次郎聞てかやうに成上は父の命も共かくももろ共にうたんととんでかゝ

るを太郎おしとめあのめしうとは我々か身にあてたるかたきにてなし只おんしやうにあつからんためなり父の命を所領にいかてか思ひかへんそれ〳〵とていそぎろうごしを打やぶり人々をおもてにこそは出しける待かけたる物共もりの内よりつつと出かやうかやうのきにて有はやこなたへと御とも申とぶがごとくにおちてゆく六郎今は心やすくしいかにかたかためしうとたまはるうへはさらは此人かへさんとひつたつるふせひにてくびねぢ切かつはとなけのこるやつはらを四方へはつとおつちらし跡をしたいていそぎけるかの六郎かふるまひ只はんくわいもかくやらんとみなかんぜぬものこそなかりけれ

第五

扨もそのゝち六郎はなんなくたせいをおつちらし跡をしたいあしから山にわけ入人々に尋ねあひ御前にひざま付あらましをのべにける頼光聞召扨はひでよしあくぎやくたちまちみにむくい思はぬしにをとげ此度のおことか忠せつゑつのはんれいか忠にもばづくんまさるべし殊にせんその郎等にめぐりあふこときゑつ誠にあさからす我きはまるさいこうをのがれたるしるしにやいれいも次第にかるく成ほんぶくせんことしさいなしされば過しよの夢竹のわかばのすへかけてさかふるはるといふずいむをまさにかふむりしが共我かくろうぐつにこめられてくるゝを待命にて何のさかふべき夢はこそふのわさなれば大病におかされこそふくるしむゆへあらさる夢をみることと我と心をうたがいしにおことかたすけにあふことと思へは誠のつけなり竹のわかばのすへかけてといふむさうの吉けうにまかせ汝がなのりをはすへ竹と付へしけみやうはせんぞの家なゝれは六郎をあらためうらへのきやうぶすへ竹とぞ召れけるにかう仰を承り忝の御でうやなつまの兵ご君の御かんきかうむりしことさいごまでくれ〳〵申せしにかゝるじせつに参りあひなのり迄下しあづかるめうがの程の有がたさよ草のかけ成父しやうれうさこそ悦び申べしかまひて〳〵すへ竹よいよ〳〵忠をぬきんて君を御よに立申せとあまりの有がたさに御前共はゝからずこゑを上てぞなきにけるげにしう〳〵のれいきの程ぞた

のもしきかゝる所にこくうよりさもやんことなき女しやう一人弓を持せつながまいり下り我は是たいとうのようゆうがそく女びんたら女といふ物なり然に父ようゆうは弓やを取てこゝんになをふるいし事さき立て日本迄かくれ有ましさればようゆうしやばのゑんつきし時ひせし所に弓のきよく我ゆつりゑたれ共女しやうのみなれば誰かにか是をゆつらんと思へとつたへんきりやうの物なくとかうもだして我身も此よをみまかりぬ家につたはる大事のきよく人におしへすしうしん今に殘つて三がいにるてんしくるしみはるゝことなし然に日本はしん國として佛法るふのちなれば大六天のま王けんぞく共をさしつかはしさま〳〵わざをなすべしそれをしつめんためしよじんの位にていにしへのはくた王しやうをかへこへんと生れ來りたりさるによつて我も又時ゑて是をつたゆるとつのゝつぎ弓じんつうのかぶらや一つ巻物あひそへ頼光にそうでんし今はまふしうはれたりくはたくを出るをみたまへとひかりをはなちて上らるゝかゝるきすいのしるしにや頼光の病もきもさめこすへをつたふ松風も悦ひの色をそへはる待たまふめでたさよ然る折ふしそはに有ける大のいわ二つにわれ一人のらう女十六七成わらはが手を引立出我こそはさんかをめぐるき女にて有されば此子をじんりんにましはらせりんゑのかうをまぬかれさせんとねがへ共あきつしまが其内にしうと頼んものなくむなしくもだす所に御身のみせういぜんのぶゆうけんざいのかうりき聞に付てたのもしゝ此くわいとを奉るしんかとなさせたまへ時ゑてつかゆる君なればかれかなのりをはきん時とめさるべしいかにくわいとおやとな思ひそおにぞかしつね〳〵申聞せしことく我じゆみやう二百よさいにきはまり來る十三日にちくらかをきにしつむなりりんゑのかうをはたすけてゑさせよはんしは頼人々とたちまちき女とけんしこくうにとんでうせにけるくわいとはおんあいのなごりたへかたくしはしはあきれて立にける頼光御らんじていできやつが心をみんとみれん成こくわじやとそは成大石おつ取なげたまふをゆんでへひらきむずと取有し所にそつとをきおとろくけしきなかりけり頼光みたまひしんびやう〳〵それつたへきくせきかうは兩とまで大がにくつをおとし長良が心をみ

る我もかしんとなすうへはわとのかしんていをよつくしらではかなはぬなり今のあしふみ身のひらき心かうにて大力頼光かしんかと頼くるしからざるきりやうなりいでしう〳〵のけいやくせんなのりははばかりにまかせ坂田のすくねきん時とぞ付たまふかりそめながら三せのきゑんあさからず大ゑ山迄御とも申あまたのきじんをほろほしなをせうにふれたりし坂田のきん時とは是なり頼光うきよの中をくはん念有是に付てもいにしへのかうけん源五は何と成て有やらんかれら二人につなをあひそへ持ならばあきつしまが其内に我にうへこす物あらじよし〳〵それもしこくとうらいまつこなたへとそま人のむすびすてたるあばらやに母上を御供有かくて月日を三重おくらるゝ是は扨置渡邊のつな君の御行衛を尋ねかねあしから山にさしかゝりなをしもおくへぞ下りける行べきすへをみわたせはいわのうへにだんをつき四方につるきをうへならべ何とはしらず七尺ゆたか成物手ほこ引さけあたりをにらんでひかへしは人かおにかとうたかはるゝとをらん道には大のこぼくを十もんしによこたへ其せんごに切すてたるしにんはたゝ人つかなんどのごとくなりじよのものこれをみばたちまちきへもうすべきか渡邊更にとうてんせず先ならべ置たるこぼくをひつさけ〳〵たにへなげうへに望し折ふしまふけさかな是なりとし人のにくをおしきりさもうまそふにぞしよくしいるくだんの男是をみてあつはれ心ちよき男かなとて物の事に是をたまはれとしゝむらきつてさし出す源五みてよになさけ有かなふれい御めん候へと立よつて口にふくみした打してぞくいにけるあらどうよこでを打扨は我尋る人にて有べしゆへをかたり申さんかく申すそれがしはしんしううすいのあらとうと申ものにて候が七歳よりぶもにおくれいたつらにせい長いたしはやわざするにこと〳〵くして我身なから力人におとるまじ弓や打物取てもおそらくはと存れ共いまだふのうのなをとらずあまりのことのむねんさにうちがみとがくし明神にさんろういたしきせいをかけ七日まんずるよの夢にあしから山にわけ入ゆうりきをはけまはさ兵へのせうとしまの頼光と云物にあふへしそれこそ三國一のゆうしやなり主君と頼ふゆうのなをまつ代迄とゝむへしとあらたにずいむを蒙り此

所に打こへゆきゝのものに渡りあい心をためすに是こそと思ふ物もなくみたまふごとく切すてたるしにんおよそ三百も有へし然るに御身のてい只人とはみへず頼光にてはましまさずやいかに〳〵と尋ねける渡邊聞て扨は君のふりやくしんりよにかないたりとうれしさ中〳〵かぎりなく頼もしきしんていかな我こそ頼光のしつけん渡邊のつなと申物なりかやうかやうのしさいにて御行衛を尋るなり君御よの時ならば尤同道すべけれ共今はおちうとの御身といひ我も日かけ物なりとかなきこへんをもろ共にしつめてせんなし君御よに出たまはゝ必尋ね給へいとま申てさらばとてわかれんとするを引とゝめよに有人を頼はつねのならひ今のせんとをみつかんこそ忠しんとは云べけれ御へんにはあはぬことばかな只それかしか心をひかん爲成かかく申出すからはぜひ一所に頼光の御行へを尋ね行すへなかく我かしんていをみせ申さんと申切てぞいたりける渡邊聞て此うへはさらはこなたへと二人打つれ山ふかくそ 三重入にけるかゝる折ふし金時すへ竹は人〳〵をはごくまん爲このみを取に出けるかすへ竹はやくもみ付此物共はよのつねの物ならすもし君の打手にやむかいたるらんおほつかなしと申せは公時聞て何にてもあらばあれ我手にかけ引さきすてん尤然〳〵しと二人手に手を取くみせばき道をそふさきけるあらとうみてゐゝしれたるやつばらやたにのすもりとなさんとかけ出るを渡邊おしとめあらきは人のきすなり何事も我にまかせたまへと立よりかくわらはの道をふさくはてうていよりのせんしか又はしゆこの仰かゆへをきかんと尋けるすへ竹只打ふせよとそば成大石引さけけれはあらとうみてやさしきやつめかふるまひやと大の松の木ふつつとねち切てころにきつとふりまはせは渡邊もすへ竹も思ひすさつて太刀をぬき打てかゝる所を頼光はるかに御らんしやあしはし〳〵とかけ入たまひあやうかりける事共かな何れも一家の郎等なりとゆへを語らせたまへは四人共につゝしんで畏る其後頼光やあ源五それ成物はいかにと御尋有ければ渡邊はしめおはりを申上る頼光聞召扨はさやうに有けるか我かふゆう諸じんにかなふうれしさよせんぞはいかにわうしん天王のはつそんうすいのせうしに三代のはつやうにてけみやうはうすいのあらとうさ

らはなのりを頼光といふ光の光のしをゑさせんとうすいのあらとうさた光と付させたまひかしんとこそはなりにけり頼光ゑつきしごく有一人ならず二人ならず汝かやう成郎等を四人迄持こと い國にも本朝にもならべて又とめしなき事なればしゆみの四しうそうちやうかうもくの四天をかた取方〳〵を四天王となつくへしと御悦ひはかきりなし時に四人の物共かうへをちに付こは有かたき仰かなもはや君しんりよにかなはせたまふ上は御うんは光明成へしせひ此うへは敵ひやうりのさん人ばらせひもなくまつ一々にふみころし思ひのまゝにあんひをきはめ申へし先こなたへ〳〵御入あれと君の御供仕りいおりの内へそ歸りける此もの共か有さまおそろしき共中〳〵申斗はなかりけれ

第六

其後頼光は四天王を近付かたきめつはうの御ないだんをぞなされける四人の物共承りとかくのさたに及ずいそぎ上らく有べしか程のとをり有なからひきのつみにおとされば天しもはゞからし公家大臣めら一一にふみひしきうむのあんひをきはむべしはやとくとくと君の御とも仕り都をさして上るゝみのゝ國あふはかしゆくのはつれにあたらしきふだ有立よりみたまへは何〳〵あふみの國かうかけ山にきしんすんでしんりんは申に及ず弓馬りくちく迄國のさはきなりかれをちうばつするにおいてはほうびは望たるべしよつてせんしのおもむきくだんのごとし三條の大臣なりもろ時とかいて有頼光御らんし是こそくつきやうのさいわいきしんを打取さんたいし父まんちうのとかなきだん打たへ本いをとげん何れも此ぎ然へう候母上ちよわか殿をはつながらうほかくれいたる所へ渡邊御供申あつけ奉りやがてふたをくわい中しう〳〵五人かうかけ山へそ三重いそかるゝ山にもなれはあなたこなたと尋たまふか大き成もり有立入みたまへはこすへ〳〵にかけならへたる人のにくつみかさねたるしこつはあたかも山のごとくなり扨は爰そと打うなつき木のねやしばにこしをかけ今やと待たまふ頼光仰けるは此山にすむといふはいつはりにてぞ有らん何のふしきも是なし方〳〵との

たまへもあへぬにもりのうへにこゑあつてふしきをみよとよばゝり人のかしらししむらをなくる事ふる雨などのごとくなり頼光御らんしこはいかに人の首かよにめつらしき物となげたるくび引よせ枕としゆたかにこそはふしたまふ時に大き成ほうし馬にのりこくうをかけつかへしつのりにけるさだ光みてあゝのつたりほつし馬もくつきやうの一もつなりよの中の見物是に過しとあさむけばすへ竹誠にこぼうはのりてなり去ながらじまんはむやくゆんてのあぶみさがりたりおちてけがばししたまふなと一どにとつとぞわらひける是もしらけてうせにけり其後もりの内に五尺斗の女のくひかねくろく付たるかこずへにあらはれこよひの客はけなけなり去ながら更行よはを待たまへと申金時みてあつはれゑかほよき女しやうかな是へ〳〵とまねかれにつことわらいうせにける其時頼光枕を上させたまひあつはれしれたるふるまひかなむようのことをせんより誠をあらはせたゝし我々がけしきにおそれ近づかぬかいかに〳〵とよはゝりたまへは四方一どにひゝき渡りらいてんいなつま三重ひまもなく二丈斗のあつきくわゑんをふきてまはりける渡邊みて望所とはしりかゝつてむつとくみけれは一どにかけよりおさへてなわをかけにける頼光御らんじて御悦ひはかきりなく今ははや是迄ときじんをさきに引立させ都をさしてぞ上らるゝ都になれはすぐにきんりに上よしをかくとさうもん有みかとゑいぶんかきりなくいにしへよりきじんたいぢする物有といへ共いきながら取ことためしなき高名しんひやうの至り何にても望にまかせんとのりんげん頼光承りさん候我々は何の望も候はす少打たへ申度事御座候とおそれ入てそうもん有みかとゑいふんあつて何事なり共とく〳〵とせんし有其時頼光しやく取なをしそれかしはすんしうとしまのまんぢうがちやくし左兵衛のせう頼光と申ものにて候然におやにて候まんぢうはずいぶんの忠しんにて候ひしに清原のう大將あきたゝならびにとう〳〵みの國みなせのくらんとゆき春がざんげんにてとがなきつみにしつみ候此度の御ほうびにかの兩人を我々に引合られせひの次第をゑいぶんにあつからばおゝい成御かうをん是に過候とつつしんでそうもん有みかともう大將の事なれは此きいかにとゑいりよをくだかせ

たまふ御前しかうの公家大臣すは大事と我も〳〵とさしよりそれはもつての外の次第何と打たへたまふ共りんげんはあせのことし出て二度歸らす一たびとがにおちたる事なればゆめ〳〵かないかたし只所領を望べし口〳〵に申さるゝ賴光何りんげんはあせのことしとや尤にて候とくだんの札を取出し然らば此ふだをきじんたいぢのともからは何にてもほうびは望としるされて候我々か望はべちき更〳〵候はず此物共を召出されりひあきらかに聞召わけられたまは れ此きじんをいけ取にいたせしことよにおこかましき事なれ共かくにこりたるよの中なればくびを持て上りたるぶんにてはよもたいぢしたるとはのたまふましと存扨こそかく仕つたりあんにもたかはずいきながら取たるにはうたがはせたまひほうびは望としるされたるせいさつのことはそらごとかなかくたらさせたまふりんげんのなとあせのごとくなかるらんそれい國のけん王はじきにけんたん所にしゆつぎよ有萬みんのぜひをかんかみたまふ是天道は一もつの爲にくらからざるしるしなりそれ程迄こそ御ざなく共ねいじんを御ひいき有つみなき物をるにんとなしいたんの道におち入たまふこと只ようぼくかみちなりにこりたるよの中に生を請賴光がうの程こそ口をしけれ忠有物のとかにおつる御まつりごとにまかせいそぎ首を召れ候へとめんかくすぢをいゝらけはがみしてこそおはします四天王是をみていやとかくのことは御無用天かの大事をしつめし物かどうりを持たることを聞召入られぬみかとは天子共存せず所せん此きじんに付たるなわをおし切て本のすみかにかへし我々四人はかばねをさらし申さんしやいつ迄とすでになわを切らんとす公家大臣きもをけしいかやうにも方〳〵の望をかなへんまつひら〳〵とふるいわなゝきたまひけるみかどおどろかせたまひげにたうりなりさらば望にまかせんそれ〳〵と兩人の方へちくし立ければ四天王もいかりをおさへきじんをかん所へ三重引にける有かたくも天ていぢきにけんたん有へきとこてんにりうかう有げにためしなき次第なり時もうつさず兩人ちよくにしたがいさんだいす四人の者共是をみてたゞ此事かつとまくるとおのれらをはあんおんにはおかし物をとこぶしをにぎつてひかへける賴光みたまひいかにあきたゞ御へ

んはまんちうをきやくしんのくわたてとは何とてそうもん仕つては有ける其だんつふさに承はらんいかに〳〵と有けれは大將聞もあへず我まんちうにいしゆいこんあらざればぎや〳〵心共むほん共そうもん申せしことなしそこつ成事共やとよそかましくそ申けるつないらつてすゝみ出何まんぢうにいしゆなきとはいつはりなりとよのあかりのせちゑのよやみ打にせんとたくみしはいかに然共まん中太刀をもつて方〳〵をたばかりつゝかもなくなんをのかる其だんをはい前ゑいふんにたつしぬれはくぎやう殿上人もよつくおほへたまふへし其だんのくはたてにはそれ成ゆきはるをかたらひすせんの軍兵をもよおしゑんしうはま松に相待といへ共懸ちらされほう〳〵都へにげ上る樣々ひやうりをかまへとかなきまん中をつみにしつめしだんちんしてもかいあらしいかに〳〵とたゝみかけてぞ申けるゆきはる聞てこは跡方もなきこと共かなまん中むほんのしるしにそれかしか方へのめぐらしぶみ是に有とうしろをきつとみたまへは六ゐの臣はしり行み藏をひらきくだんのふみを取出しまん中にさし出す頼光みたまひ是は父か手にてなし汝らがかきたるにせふみにて有へし只しきせうこ申せ時に大將ひさおしなをしやあ頼光我はしらざる事なれ共あまり汝ら口聞に出たゝしきせうこみせん先年まん中が家のこかはくしゞつせしかきとめ有へしそれ〳〵と有ければ又六ゐの臣はしり行持ておまへにさし出す大將みて是はまん中我よ打にいらん時御殿に火をかけよとやくたくししのびの物を一人六ゐの如くに出立せくろとのわき迄しのび入しを攝政くはんはくみ出したまひけんひいしに仰付られおさへてかうもんしければかやうにはくてうしたり此ぎには我一人にあらず公家大臣何れも存の道あらそふ共叶ふましふびんの物の有樣やとあさはらつて申せはくぎやう殿上人げに其きは大將殿の仰少もちかはず我もみたり何かしも聞たりと皆口〳〵にのたまへば大かう一の頼光おにをあさむく四天王もあたるだうりにつめられせきめんするこそ口おしき其中に金時はしんざんゆふことをすみかと、てわうどうをもははからずりひはともあれかくもあれ我君をあつこう申くせものをいかで置べきととひかゝる所をさだみつすへ竹おさへあまりにあらし公時せひことつ

まり我々思ひ切ならばおそらくは日本の人たねはたつべしまつしづまれいかに〳〵とせいしける時にしも口より下官の男つつと出其しさいはそれかしよつく存候かのしのひのものはまん中のけらいにて候はず大將殿の家の子そのたの藤太みつひでとてそれかしをやにて候然るにそれ成二人の人々はま松の合戰にまん中におつちらされせんほうつきてそれかしおやを色〳〵たのみたまふ父にて候物も子をすつるとなればぢたいに及しか共ちう代の主君のひたすらのたのみたまふにせひなくたのまれ六ねにいで立くろとにかくれいてわざとあらわれまん中の家の子なりと申候されば其時大將殿此こと思ひのまゝにしおゝせは此度の忠せつに汝か子をよに立ゑさせんとじひつにくだしふみかきてたまはりなからかつて其ぎなくけつくそれかしになんだいをいひかけてうしなはんとたくまれし間よのまににげ出只今はからす丸こうの中官のものとなりしせつをうかゝふ折ふし此こと承り罷出て候是を皆々よつくみたまへとれいのくたし文をさし出すみぶのひろつぐおつ取あげ高くよみあけけるそのふんにいはくくだすしやうのおもむき一めいをくんしのみちにほつしかたきめつほうのちりやくかんせしむるあまりありそのちうせつとしてそくなん國みつにいふきかたゝしがゑいたいあておこなふべしせうこはくらんとゆきはるらくわう二年三月十二日きよはらのうたゝ將あきたゝとたからかによみあげければさしもくちきゝたる二人のもの共いろをうしないたゝどうてんしてこそいたりけれみかど゛ゑいぶんまし〳〵てさたのほうぎはまつたりいそぎまん中めせとはい所へちよくしを立ければまん中夢さめたる心ちにて御せんにあがりたまひけるをくよりのせんしにはつみなきはい所のすまいふびんなり是なんぢかあやまりによつてほんりやうにあいそへやまとかわちならひにみなもとうぢをたまはりかうづけのかみたゝのまん中にそふせられけるさればげんしといふこと此時よりはしまれり同頼光にはいつみの國を下されせつつのかみみなもとの頼光とぞなされける扨だい將をはきかいがしまになかすべしゆきはるをはまん中にとらすると御てんにいらせたまへは一人をひつたておの〳〵御せんを立たまふやかたになれはたるいのしゆくにつかい立みだい

わか君をはつなすへ竹からうば御とも申參りけるたかいのうきつらきちよをふるともよもつきし扨四天王には其ちうにしたかつておんしやうすか所たまはりまさきのかづらすへなかくまつ代までもけんしのはんじやうめでたきともなか〳〵申はかりはなかりけれ

延寶五丁巳曆正月吉日　八文字屋八左衞門板

四天王若さかり

初段

さても其後そも〳〵仁王六十一代れいせんゐんの御宇かとよ、其比都にははりまのかみ多田のまん中とてたぐいまれなる名將有せんぞをくわしく尋るにせいわ天わうのわうじ、六そん王經元しん王の御子也、その身のゐいぐわひをおつて御子二人おはしますちやくし左ひやうへのせうらいくわうとて十八さいはかり事をいやくの内にめぐらしかつ事を千りが外へ本ノマヽかうせきかうがとらをばくせしゆふ力をもさみする程のゆふし也、次はかくどう丸よりちかとて十五歳に成たまふその上家のしつけんに藤はらの仲光とて上をうやまひしもをなでじんぎ正しき兵の有こゝに天下のまれものにわたなべのつな坂たの金時すへ竹、定光とていこく本朝にならびなき大力、かうもくぞう長の四天王とかうしばんみんおそれをなしにけりされはまん中御心にふそくなくはるのあしたの花のゐん、秋のゆふべの月のがくよにゆゝしくぞおくらるゝくわほうの程こそめでたけれ是は扨置その比又ぶんこぶせんちくご三が國のあるしをはゐかはし治部の太夫安かげとておごり第一の弓取有されは此程つくしよりこゝんめいよの大力とてかたちやしやのことく成しゝふんじんの大男四人つれやすかげをみかけ閏九月のすへよりもかれに付そひいたりける先一ばんはらぐいの道くわんがうせきげんかくてつしん、ゆつぎの大がう宗とら八天句のりん正坊とてそのたけ八尺計にてかうりきはつたるゐせ物也有時やすかげ四人の者を近付御へんたち我を頼て來りしもあのらいくわうが四天王と力をためしなをあらはさんためにて有されはらいくわうにつかへしものゆふりきはつたると云共いまだはたちにもこすやこさしの若ものにて力かたまる事あらじ御へんたちはたぐいすくなきものにて有然るにあの若物を天下の四天王といわせつゝまさるかた〳〵人しらずいざやだいりに上りみかどにそうもん仕りていしやうにてきやつばらと力をためしいち〳〵取てなげちらし人にぢぼくをおどろかさせまん中おやこめんぼくな

くいせひもおとりすいびせん其時は此やすかげまん中にまさりはするとゝおとらざる名大將にて有間天下のけんへい取おこなひかた〳〵を四天王とかうしうへみぬわしとさかへんは人々いかにと申ける四人のもの共承りそれこそ望にまいりたり君のふるまひまん中よりばつくん也人おゝき中にてもすぐつて奉公申さんいそぎだいりにさんだい有我等が事をそうもんしきやつばらとはれわざの力をろんしいち〳〵取てねぢすへちじよくをあたへ申さんいかにと申けるやすかげ大きに悦びさあらは我だいりにて申上んとてゐもんつくろいだいりをさしてぞ上りけるだいりになれはからす丸大なごんに申やう此程つくしよりめいよの大力四人迄まいり満中が四天王と力をためし申さんと望申候あはれ庭前にて兩方を召出しちからの程をゐいぶんに入申此ものが望の程かなへ申度とそうもんす大なこん聞召めつらしき事共やと急き此由そうもん有みかどゐいらんかぎりなくはればれしき見物かないそき力をためさせんまん中めせとのちよくでう也承候とて頓てちよくしを立にけりまん中何事やらんとさんたい有うちよりのせんしには

いかにまん中治部の太夫が申するは此程つくしよりめいよの大力四人上りなんぢか下人四天王と力をためさんとそうもんすいそき召よせたためさせよいかにいかにとせんし有まん中聞召こは珍らしき望也いかにやすかけいらざる事を取立て御望さるゝたとへこなたがかちたるとも又はそなたがかちたる共あまりよからん事にて有おとなけなくも御所望を申さるゝ事はひが事やと大よふに仰けるやすかけ聞てなふ我も左様に存しがせひなくそうもん申候まん中殿と申さるゝその時らいくわうさらばかの者召よせたまへやすかけ聞て頓て使を立けれは四人悦びさんだいす又らい光も四人をめしたまふ互にあいをへだてつゝまなこのそこにかとをたてゆう〳〵となみいたりらいくわうつなにむかい安かけが望にてあの四人の者共と力をためす事にて有ずいふんはげませ物共と仰けれは承り候一々つかみひしがんとおの〳〵思ふ所存いわねと上へあらはれたりかの四人のもの共もわかやつが何程の事有へしとこぶしをにぎりける其時六ねのしん共くろがねのほうを二三十人にてかきて出まんなかにどうど置からす丸殿立出いづれにても

罷出あのぼうをねぢ取べし承り候と定光つつと出ぼうのはしをむずと取八天句のりんせう坊つゞゐて是も又ほうのはしをおつ取ゑいや〳〵とねちあいしがさし物かなぼうけふり立中よりふつとねぢきつたり人々御らんし是は何れもせうぶしれず一人つゝの力を見せよ承候と申所に六ゐのしん百せうのもてあつかうあらくわ十枚ぢさんするゆつきの大力罷出かのくわ四枚おつ取二つにさつと引さいたり人々御らんし殘六まい一度にさけ承候と申六まいのくわおつ取ゑいといふて引共さくる事はなしその時すへ竹罷出是ゑたまはり候へと六まひのくわうけ取さつと引さき是程の物はものゝかずにて候はすさきの定光のぼうは是よりばつくんましたるゆふ力也坂たのきん時罷出ていせんの松の木二本兩のまんなかむすと取ゑいといふて引よせ二本の松をねぢ合是をはなせと云けれは山がきげんかく立より力にまかせゑいや〳〵と引はなせとちつ共はなれずわがうでにはかなはずとせきめんしてこそ入にけるまんざの人〳〵金時がかう力ばつくん也とのたまひてしたをまいてぞおはしけるおさめのせうぶに也ければ四天王ずい一わたなへのつなゆらり〳〵罷出なにを持てせうぶをせんとおにをあざむく力うでなてさすりさらぬていにていたりけり然るにくろがねのたて二枚かさね七八十人にてかきて出うちよりのせんし也是をふみぬきたまへかた〳〵つな承何とそれかし仕らふからくいの道くわんいや某さきをせんとする〳〵とはしりよりゆんでのあしをふり上ちからにまかせ二つ三つとうとうとふみけれとちつともぬけん様もなしその時わたなべ立よりそこのきたまへと云まゝにめてのあしをふりあけ天ぢもぬけよとだう〳〵とふめば二まひのたてをふみぬきたりてい上の人々あはやめいよのわたなへとだうをんによばはる聲しばしはなりもしづまらすどうくわん大きに腹を立只今のは某が大かたふみぬき候を跡よりつながふみぬくはそれは我があらごなししたるゆへと申やすかけ聞て尤それはさぞあらんと大きにあざむくらいくわう御らんしつなが力てふみぬきしはかくれなしと申せはさやうにあれは力なしとかうはいらず力ずもふ一ばんとれと有けれはわたなべじするに及ず、すまひにせん道くわん悦び望は是にて候とわたなべにつかみ付つなわら

つてなふひきやう者めがいまだやういもせずだしぬきたるふるまひと上おびつかみくるり〳〵とふりまわし大ぢへ入と取てなげはしりかゝりこうべみぢんにふみくだくやすかげを初め三人の者共こはいかにらうせきと太刀のつかにてをかくるわたなへわらつてあふわが力をあらそふものゝせうこにはかくするぞよくみよと少もさはくけしきなしうちよりのせんしにはやすかげふるまひびろう也すてに力はらいくわう方かちたり両方共にたいしゆつ仕れとのせんし也やすかげあまりの口をしさにしさい有げに御せんをたつわたなへみていかにやすかげ所望ならば望たまへ但御へんからすまふに出られうかと小がいな取て引たつるやすかげ めんほくうしなひすこ〳〵と御前を立四天王きつとみてうでもかなはぬ力わざとはきやつばらが事也とどうをんに打わらい君の御供仕りやかたをさしてかへりける此者共がふるまひぼんふのわざにてあらずやとて見る人聞物おしなべてみなかんせぬものこそなかりけれ

二たんめ

さる間あかし治部の太夫やすかげはいそきしたくへ立かへり三人のもの共を近付いかにめん〳〵今日たいりにてらいくわうがふるまひむねん也いそぎだいりをふみつぶしまん中ふしに腹きらせんされ共なにあふゆふしそれかし思ひ出せる事有と頓てゑちごゑつ中の大将ゆはらの右門つね光へ使をこそは立にけりつね光何事ならんと使と打つれ來らるゝやすかげゑつきかぎりなく是へ〳〵とせうじしゆ〳〵にもてなしなふいかにつね光殿かやう〳〵のしさいにてだいりにてまん中と力くらべのいしゆの有御へんもよからぬ中なれはいざや二人といたしかのまん中をほろぼしてきん中をふみやぶり天下一とうに両人してむさほらんはいかに〳〵と申けるゆばら聞て尤それこそ望たりらい光未だ若物とは申せ共なんぞ我こそ天下のしつけんをかうふるとてよをわがまゝにふるまひ見るにしんいのほむら也そも両人してぎへいを上はそくしに國〳〵みだれおのれとまん中じがいせん其時両人立わかれ日本をはん國つゝちぎうせん事うたがいなしはや〳〵思ひ立たまへやすかげ悦び

某がちりやくにはまん中を國中に置かなふまし御へんはくにへくたりゐちこゐつ中のせいをもよふしくち〳〵を切ふさきろう城なされ候べし定てせけんにかくれなくまん中おや子むかふべしそのるすにそれかしみかどをいけ取らく中をくろつちとなしさいかいなんかいきりしたがいあはた口を大てと定めまん中を待うけん御へんはていたきいくさもせす時々かけ出ふせぎに心をくだかせは付そう者共みなちりちりにおちゆかんさあらばまん中京へ入もかなはすおくへおちんもかなはずしかいなく腹を切へきぞいかに〳〵と有けれは是こそ望のちりやく也へんしもはやくいそかんとやすかげにいとまをこいひそかに國へぞくだりけるくにゝもなれはさいそくまはしせいそろへおくかい道にせきをすへみつき物をばい取いきをひかゝつて待にけりされはにや大はかたちよりひきやくとうらい仕りそうもん申ける様はゐちごゐづ中の大將ゆばらのゐもんきやく心のくわだてあたりちかきくに〳〵へみだれ入兵らうをうばい取城をかまへおくかい道を切ふさきむほんのくわだてしきりにて候すてに天下の大事也と大いきついてそうもんすみかと大きにおどろかせたまいまん中ふしを召たまふまん中おや子やかてさんだいなされける内よりのせんしにはゐちごゐつ中のしゆごゆばらのゐもんきやく心のくわたつるいそぎ向てついはつせよ承候と頓てだいりをたいじゆつ仕り五きないのせい共へふれ狀まはしせいそろへつかう官くん五百よきあんな元年二月二日くわらくを立てほつ國さしてぞむかはるゝあかはし時分今成とて一もんいへの子八千よき馬ものゝぐとやういして上を下へとかへしける此事よもにかくれなくみかど大きにおどろきたまひまんぢうの次なんかくどう丸を召たまふよりちかせんぢん承り仲光を御供にて頓てさんたいなされける内よりのせんしにはすでに都にぎやくしんの者有きんりをしゆこせと有けれは承り候とざい京の人々にいち〳〵次第にふれたまふされともぐんせいときのけんにおそれをなしやすかげ方へと成にけりされ共だいりにつめたるはぎをむねとする兵共少もぎゝするきしよくなくもん〳〵をかためわつか六百七十きよせくる敵を待にけりあんのごとくやすかげは大てからめてふたてに也東西より時の聲をそ上にけるろ

くししんどうおびたゝし時のこゑもしづまれはなか光やかてかけ出てなにものなれはきん中へもつたいなくもをしよするいかに〳〵と有けれは安かけ聞て事めつらしきゝ事かな是こそあかはし治部にて有いらざるぬるきなまくけに一身いたししなんぞやただねんぶつを申さいこをまてとよばはつたり仲光聞てうちわらいさてはちぶにて有けるかむかしはせんちを向てよみけれはかれたる木にも花さきとぶ鳥もちにおちあつきあくしんもしたがいきまつだいぎやうきなればとていかで十せんの君に向て弓を引矢を放すべきかへつてなんしか身にたちしせんとかんら〳〵とわらひけるやすかけ聞て腹を立あれ引さけてまいれさげ切にいたさんぞ承り候と三人の郎等共一めんに打て出だいり方には中みつうたせかなはしとあしたの二郎大たちふりかざし一もんしにはせよるをでんしんやがてかいつかみ是いかゞいたすべき大かうみてこなたへと云まゝにたがいにもゝをむすと取二つにさつと引さいたりいわ松八郎むねんと思ひとんでかゝる所をりんせう是をかいつかみめよりたかくさし上二でう計なげたりけるくわんぐんぎゝし

て見へけるを仲光ざいを打ふつてかいなき物のふせいかなかけよ〳〵とよばはれば人々これに力をへて一度に木戸をひらきやうめいもんのすしかいにおつつかへしつひはなをちらしてたゝかいけりだいりはふせいと申せ共なをおもんしぎを守るものなれは命をちんかい共おしますこゝをさいことたゝかへばよせて一千よきうたれ身かたはわづか百き計しんたりけりかくてその日もくれけれは軍はあすのうのこくこそしからんとそうもんをかたむれはやすかげぢんをぞ取にけるこゝに八天ぐのりんせう坊今日のたたかいにわがてにかけ五六十もなぎふせたりとは思へとも打ごみのいくさにてめにたつ事なしこよひぬけかけし大将とくむか又なか光めをつかみさくか二つの内ははづさしと只壹人しのびたいりをさしてぞいそきける爰に又仲光もけん見のためにたいまつもつて辻〳〵をまいりしか道にてはたと行あひて中光やかてことばをかけそれにしのびてまいりしはなに人にて有けるぞりん正聞てさゆふはたそ是こそ藤原の仲光ゑゝ望所のさいわい林正ほうにて有けるはとはしりかゝつてむずとくむなか光もぐわんらい心聞

たる大力と申せ共りん正事共せず取ておさへくびをかゝんとしたりけり中光上成てきの左右のかいなをとつてりん正ぼうをくみとめたりよれや〳〵とよばればさき坂兄弟はせ来りいづれか敵ぞ中光とてたいまつ取てきつとみてゐゝうへなるこそかたきぞとて左右よりむんずとくみけるをりん正ゐたりといふまにあにの太郎をかいつかみ七八間なげすておしかかつてくびねぢきるそのひまになかみつさしぞへするりとぬきつかもこぶしもとをれ〳〵と三かたなさしさゝれてよはるをはねかへしくびかき切て立あがりおに神と聞へたる八天句のりん正を仲光うつて有けると本ぢんさして引かへすかの中みつがてからの程ほめぬものこそなかりけれ

三たんめ

▲去程によはほの〳〵と明けれはよせておこり出ゐびらやなぐい打たゝきて時の聲をぞ上にけるよりちか此由御らんして身かたはもはやせいもなしいでちしんのせうふにせんつゞけや〳〵とのまひて切て出させ給へは御まへさらぬ若者共い上三十八人前後につらなりたせいの中へわつて入おもてもふらずたゝかいけるおの〳〵ぶん取あまたしてついぢの内に入にけりみかどなんでんのひろびさしに出させたまひゐんのせんし承り惣大將よりちかを御めし成はと有承候とよろひにたつやその數しらず三か所てをおいたまひしろいとのよろひを、くれなゐの如くそめかへしながるゝちをもぬくはずきしよくかうだるふせいにて庭上に畏るつゞいてなのる者共もいまた十五十六の若侍あるひはきず五か所か七か所おいながら事共せざるていたらくけみやじつめうはちがへ共つら玉しゐにをいては何も同事ならんと上下かんしたまひけるみかどつく〳〵御らんし是らがふせい何にたとへんかたもなしいくさの次第をかたるへしとせんし有よりちかこうべをちに付さん候敵大せいと申せ共身かたは命をぎろにかけおつふせ〳〵きりふせられよせて八千七十き八方（本ノマヽ）にやぶられて七條かはら迄五六度迄おい出し候あはれ君の御事だにも心にかからすたとゐ天ちく迄もおい行やすかけをさげ切にいたさんと申けるみかと大きにゐいらん有あの者共

に酒をのませよとのせんし也さいしやう承たいへいひとつかき出し三うらの五郎にわたしける五郎たいへいたまはり、よりちかに奉る大将御かはらけ取上三ごんさらりとほしたまへは御めん有ぞかた〳〵承るとてたがいにのふづうたふつしばらくしゆゑんぞなされけるかゝる所へ中光敵のくび三つたちにつらぬきまいり某ゆうわうもんに候ひしが餘り御内の酒ゑんのおと高くいくさ心にそまづして是迄まいり候御さかなは何より御すきのやすかけがしやてい兵衛の介がくびさて郎等がくび二つ是〳〵御らん候へと御前にさしいだし敵はせいつきみかたは皆々打しに仕り候かくてはかなはせたまふましいそきみかどはゑいさんにりんがう有しゆとをたのませ奉らん敵はやみだれ入候へんしもとく〳〵と申けるゑんのさいしやう尤也はからへやと仰もはてぬにかたきうんかのことくみたれ入ときの聲をぞ上にけるすはやと云まはおそかりける頓てみかど八歳の宮一つこしにのせまいらせよりちか仲光其外いせの住人山田の九郎い上三十二人せんご左右にかこみ大せいをおつはらいひへい山へとおち給ふされ共敵跡をしたいおつかけるかなふへき樣更になしその時仲光山田に向てやあ御へんは君の御供申はや〳〵おちのびたまふべし我々爰にふみとまりしはらくかたきを防くべしとく〳〵と有けれは承候と四五町計は行と見へしが忽心かはりかたきの方へとくわはりけるよりちか仲光おどろきなむ三ぼうきやつめに君をうばはれしな此うへはなにといふ共君をとりごとなさせいかゝせんとおとり上り申せ共かなふへき樣あらざれはさらば敵をおつはらいほつ國へくたらんと大せいを四方へはつとおつちらしい上十三ぎほつ國さしてそくたりける去間やすかけは思ひのまゝに軍にかち其うへみかどをいけ取悦事かぎりなく山田の九郎をめされ御へんがちうかうばつくん也とていつみの國五千てうくだしたまはる又みかどを汝にあつけ置也きびしくしゆごせよと有けれは承り候と御前を罷立いそき宿所にかへりける一間所にみかどをおし入奉り八歳に成たまふ御宮をはわざとひとしきりとをへたてゝし入申物おもはせんものをやとなさけもしらずふるまひしをにくまぬ者こそなかりけりあらいたはしやみかどはそも思はざる御なんにあひぎよいのかはく

ひまもなくあゝ定なの次第かな昔が、いまに至迄十ぜんのていとしかやうのなんにあふ事は聞たる事も更になしされはちんばんしやうの位をうけ四かいのまつり事わたくしなしと思へ共あやまる所あれはこそかやうに成ゆくらん是ぎやくしんのわざならず天のばつするけい也よをも人をもうらむましあら定めなやとたからかにりんけん有泪にむせばせたまひけるあらいたはしの御事や八さいの宮きり戸のあなたにて父みかどの御こゑを聞召こは夢かと計にてなふそれなるはちゝうへ様にてましますかやあらなつかしや父うへさま此戸をあけてたひたまへうさやつらさをかたり申さんときりとをたゝきこゑを上あめやさめとぞなきたまふみかど此由ゑいぶん有やれそれなるは宮なるかこはうらめしのやすかけや我といつ所に置たりとて何程の事有べしやなさけもしらぬふるまいかなさこそおさなき物として一人すこ〳〵とくらさんこそよにもさびしく有べきさ程のとかめも有ましきぞ爰をあけて今一度あはせてくれよしゆごの者いかに〳〵とせんしにてりうていこがれなきたまふさすかにたけき物のふも御斷を聞からにそゝろに袖をうるをしいかにかた〳〵宮を御めにかけたりとてさまでのとかめも有ましき餘りになさけなきふるまい天道の程おそろしやいざや戸をあけて御めにかけん人々いかにとだんかうすみな一同に尤いわれたりたとゑつみにしづむ共君の御ためそのうへさ程のとがにてよもあらじなにかくるしかるへきときりどをあけ奉れは宮は夢共わきまへすする〳〵とはしりより父のみかどにいたき付きへ入様にぞなきたまふみかど御らんし御泪をおさへさせたまひみやの御ぐしかきなでゝあらくわほうなの次第かなちんははやよもすでにかたふけはくらいをゆづりほつたいほう王とあふがれ御身におもくもてなされくらさん物をと思ひしはみないたつらに夢と也たりかなしやといたき付てぞなげかるゝあらいたはしやみやはそもみかどに向何とて日本のあるしとしあのぼんけの安かげにかやうにせばめられけるなどしよこくのぶし共にりんしをなされ打たまはんかいなやとおとなしやかにのたまへはみかど此よし聞召あふおと高し〳〵やすかけ聞ならば又うきめにやあふべきにものな申そ我子とて又さめ〳〵となきたまふかゝる所

へ山田の九郎きたり此由を見るよりもこはいかになんしら何とて此とをひらきいつ所にみかどを置けるなるゝ天めい付たるやつばらやいち〳〵切てすつべきとはつたとにらみする〳〵とはしりより宮の御てをあらく取あいそふなけに引たつるみかどはすがりたまひつゝこはなさけなの九郎かなさすか天てるわうしのながれをつくへき此みやを左様にいたすほうや有いかに〳〵とせんし有九郎聞てうちわらいあふ十せんのくらいか廿せんかはしらす只安かけより外はおそろしき人もなしはなさせたまへといふまゝにかしこへかつはとつきたをしみやを引たて一まの所へおし入あいのとをはたとたてばんのやつらくびいち〳〵にうつてすつへきぞにくきやつがふるまひとあたりをはつたとにらみつけしたくへこそは入にける山田の九郎がふるまひあつはれめうがをしらぬぐにんやとみなにくまぬものこそなかりけり

四たんめ

▲去程にほつ國へむかはせたまふまん中おや子の人人は北國事ゆへなくしづまれはくんせいを引くしていとへのぼらせたまひしが其ひはみのゝ國たるいの宿に付たまふかゝる所によりちか中光を御供にて以上十三ぎ來られしが人〳〵を御らんしいそき御まへに畏り都にての有様くわしく御物がたり有けれはまん中を初人〳〵よこてをうつて是は〳〵と計也まん中仰ける様は先こよひは爰にりよしゆくして明日早天に打たて一もみにうつて上り一時にせうぶを決せんいかに〳〵とのたまへはおの〳〵陣をぞ取けるされはにや夜のまにかはる人心付したがふくんせいとも心の内に思ふ様たのみがたなき事共かなかたきにひゝにぐんせい付みかたは次第にせいおとりはかはかしき事あらしされはとて君を見すてやすかげをたのまばこそ國〳〵かへりいかなる山にもとぢこもりさいしをはごくみすぎんとて其夜の内にぐんせいとも五人三人うちつれてをのかちり〳〵成にける五かうの天もひらくれは仲光やくしよ〳〵にはせまはれど人一人も更になしさてはおち行ありけるかとむね打さはき大將にかくと申まん中聞召さぞ有らん頼かたなの人心いかゝはいたさんせいはいか程のこり

しぞなか光聞てさん候わづか六十八き敵のせいにくらふれはきう〳〵が一もう大かいのいつてきふせかんとするにたよりなし是ぞげんしのめつぼうと仰けれは四天王承りあら御大将共思はざりし御ことば我我はなにのためにて候敵二十萬三十まんぎより此四人をたのもしくおぼしめせてにだにあたる物ならば取ては引よせ太刀のかねこそかぎりなれじこくもうつり候にはや〳〵うつたちなされよと人〳〵の御供し都をさしてぞいそぎけるいそけば程なくあふみ成やばせにこそは付たまふそつしに都へ入へからずまつ〳〵是にしはらく有都のやうすをうかゞい申さんと有所に宿を取おの〳〵ひやうでうかぎりなし中にも頼光すゝみ出のたまふにはこよひ某つな公時をめしつれまつ〳〵都にまいりらく中の様子をうかゝいひまだにうらば敵のやかたにしのび入やすかけを引さげ御めにかけんと事もなげに申けるまん中聞召あらふてきなのらいくわうかなさやうにもの事成へき物ならば軍をする迄もあらずとてから〳〵とわらはせたまふらいくわう聞召せひは某あまりふかく成事いたすましむねに覺への候いそき供せよ二人の者つな金時承りあつとこたへて立けるを定光すへ竹君にすがり扨此二人は御やくにたつましと思召れ御殘しなさるゝ事にて候からいくわうにつこと打わらいあふ申所しごく也といまるも供するも同ちうせつ汝はちゝ上しゆごすべき時こそうつれとのたまひて二人のもの共引ぐして都をさしてぞいそがるゝかのらいくわうの御所ぞんぶんぶ二道の侍やとかんせぬものこそなかりけれ

五たんめ

▲是はさて置治部の太夫安かげ御まへに山田の九郎を召れやあいかに山田いつ迄みかどをめしこめおかんされ共がいする物ならは人の思はん所も有こよひそかにみかとゝ宮を引ぐしてかも川にしつむべしいかに〳〵と有けれは承り候と御まへを罷立安かげしばしとをしとゝめ御へんうたがふにあらねども一つはなんしがためなるぞけんしをそへんと朝くらうこんをさしそへ給ふ二人御前を罷立其日のくるゝを今や〳〵と待にけるすでに其日もくれけれは山田み

かどのおはします一ま所にたちより木戸をひらき申
様君すでにこよひ御さいこにて候とく〳〵出させた
まへと云みかど夢共わきまへすこよひかぎりで有け
るか、みやはいかにとせんし有山田聞て同御さいこ
候といひもあへず御てを取引出し宮をは下人がかた
にかけ、たいまつもたせうこんもろ共かも川さして
ぞいそきけるしかもそのよはきさらぎ二十五日めさ
すともなきやみよに忝も十せんのてい王都のつちを
ふませたまふ事共は昔も今もためしなしなみだぞ道
のしるべなれ御あしよりもあへるちはたきのおつる
かごとく也ひろいかねさせたまひけるうこん餘りに
もつたいなく思ひ御前にひさまづき何かくるしくは
んべらんかたにかゝらせたまへやとみかどをかたに
かけまいらせしつかにろしをあゆみしはなさけ有て
ぞ見へにけるかもかはに成しかはと有石のうへにお
ろし申宮はみかどのそばによりそも〳〵いづちへゆ
かせたまふぞやみかととかうのへんじもなくなみだ
にむせばせたまひける朝倉あまり御いたわしく存み
やの御まへにまいり君すでにしやばの御ゑんつきさ
せ給ひあの浪のそこにあんらく國と申てめでたき國
の候それへりんがうなさるゝ也御ねんぶつと申させ
たまへと有ければ山田立よりゑゝいらざる御へんの
あを道心何のやくにたち申なふ君こそは只今某がて
にかけ浪のそこへふしづけにいたす也よをいなされ
候へとあいそうなげに申御てを取引よするみかどし
ばらくなさけなや我々さきへしづめて其後みやをい
かにもいたせいかに〳〵とのせんしにてすがりつか
せたまひけるあさくら見るにもつたいなくやれなん
しそれ程物をしらざるな忝もてい王に左様にあたる
天はついかでのがれんあら物しらずのぐにん哉いか
なる鳥類ちくるいも物のあはれはしる物をとはつた
とにらんで申ける山田聞て心へぬ事ばかな御身は心
かはりかや我をけだ物にたとゆるはいかであくにん
のこさんと太刀のつかにてをかくる心へたりと云
まゝにはしりかゝつてむずとくむ山田が下人とびか
かりあさくらに取つきしをゑたりといふてゆんでの
あしにてかも川へけをとし上になり下に也ころりこ
ろりところびけるかゝる所にらいくわう二人の郎等
引ぐしてきやうをとをらせたまひしが人のくみあふ
おとを聞わたなべ金時はしより二人の者をかいつか

みうこん二人の物を見るよりもなふつなきん時にてましますかかやう〳〵の次第にて候とかたりける公時聞て扨は左様で有けるかとうにんをはゆるしわたなへ山田をかいつかみ君の御めにかけにけりみかどらいくわうを御らんしやれそれ成はより光かとするするとよらせたまひ初おはりをかたらせたまふらいくわう聞召扨は左様て候はんいかにわたなへものもしらぬぐ人めをはからへと仰けるつな承りおのれてんめいしらざるゆへはやくもあたるいんぐわぞとくびねぢ切てすてにけり扨らいくわうこしよりやたて取出しそばなる岩に思ふ所ぞんをかき付扨みかどをはわたなへおい奉りきんときは若君をしゆごし奉りやばせをさしてぞいそがれけるあやうきみかどの御いのちたすかりたまふ御事も是ひとへにらいくわうのゆふりきはつたる故也こゝんぶそうの大将やときせん上下をしなべみなかんせぬものこそなかりけり

六たんめ

▲去程に山田の九郎が下人共いそきやかたにはせかへり安かけまへにまいり宮みかどをはらい光御供仕りおちうせて候があたりの石にかやうにかき付候をうつしてまいり候と御まへにさし出すてつしん書付うけ取たからかによみ上るそも〳〵左兵衛のせうらいくわうみかどをうばいそのうへ山田がくびねぢ切てすつる也それのみならずそれへおしよせやすかけを初付そうやつばらいち〳〵つかみひしかんかまへてゆだんいたし候なめん〳〵いかにとたからかによみ上たりやすかけ大きにりつふくし扨は大事出來るきやつはらがかやうにいたす上は定てこれへおしよせん此うへはなま〳〵にてかなはしとくち〳〵によせて共いつ所にあつめてかたきをふせかんとみなこと〴〵くめしあつめやすがけがまへをとへはたへに取まはしよせくる敵を今やおそしと待いたり去程にやばせのうらにも爰かしこよりはせあつまり三千よきと聞へけるらいくわうなのめに思召みかた三千き有うへは敵三十萬ぎにおとるまし先此度のせんぢんは四天王いたすへし某はぐんせいわづか引ぐしごぢんにひかへ有べきそいかに〳〵と仰ける四天王共承り我々せんぢんいたさんうへは後ぢん迄も事な

らす只四人に御まかせ候へと事もなげに申上るまん中なゝめに思召あふいさきよし〳〵このたびのかつせんさぞおもしろからんはやうたてやめん〳〵とやばせのうらを打立て都をさしておしよせける都になれはときのこゑをぞ上にける城にも兼てよういの事なれはきくちのせんじ矢くらに上りなに程の事が有べきあれけちらせよとげぢすれは我も〳〵と切て出四天王共是をみてんでにかなぼう引さげ四かく八めんにひしぎつけ大せいのぐん兵をむら〳〵はつとおつちらすされ共爰にいよの國の住人河のゝあん平としすけこまのたづなかいくつて一もんしにかけよるをすへ竹つつとはしりより川のを取て大ぢに入とどうどなげ馬のまへあしおつ取て中に引たてかたにかけけふのとくぶん是也とにつことわらひ引にけるここにつくしちんせいの住人天のや兵内宗しげとて大力のおのこおどり出て申様たとへ四天王にてもおはしませ我きう州にてつねにすまふをこのみしに九が國がその内に又てにたつものなきぞかし此宗しげを打てのち四天王とはなのられよとにくげにぞのゝしりける定みつ聞てあふやさしき男のことばや出けんざんとはしりよりもろひざ合はたとけまつさか様にはねたをしのりかゝつてくびを打かれが郎等せんごより三人おり合しを左右のわきにさしはさみ是をはいけてかへり君のみやげにいたさんとかうげんはいてたちかへるてつしん大かう是をみて是らはよ人かなふましいで二つとなき命やすかけに奉らん見物せよや人々と大かう一ぢんにすゝみ出おびたゝしの人人のふるまひやどなたにても出たまへはれいくさしてなぐさまんとてつぼうをふりまはしにわうだちに立たりけるきん時みてあふおのれらはだいりにてふかくをかきめんぼく有てたゞ今出て有けるぞとかなぼうおつ取うちあひしがよれくまん大かうとおしならべむずとくみかしこへとうどまろび上になりしたになりゑいこゑを出しくみけるがついにきん時うへに也大かうが左右のうでをつかみゆんでゝそば成がんせきをゑいと云て引よせその下におし入てかうべ少出たるをわれよくだけよとてつぼうにて打程みちんになつてうせにけりてつしん今はこらへかねそこを引なとかけよるをわたなへすかさすはしりより是はそれかしうけ取とてつしんとだうどくみしばしね

ぢあいたりけるがうちからみにひつかけてかしこへはたとなげたをしすかさずうへにのりかゝり八つしたのほこ取なをしちのしたよりかたさきへくしざしにつらぬきめよりたかくさしあげ山ざるの木のぼりになられたるとにつことわらつて立たりしがきくちをはしめしよぐんぜいこはあくまにて有けるとどつとくづれて城中へにげ行を二の木戸までぼつこみけるやすかげかなはしと思ひからめてへまはりぼつつめひきやうものと高てこてにからめ本ぢんに引かへすごちんにひかへしまん中かう頓て城へのりかけたまふらいくわうゑつきかぎりなくいかにやすかげ十ぜんの君をなやましたてまつるむくいの程をしらざるやとくび中にうちおとしきつさきにつらぬき今は心にかゝる事なしとみかとをうつし奉りいよ〳〵天下のけんへいまん中ふしにくたされける源氏の御代すへはんじやうめでたさよとも中〳〵申計はなかりけり

右此本者太夫直傳之正本を以て令板行者也

大傳馬三町目　うろこがたや新板

四天王女大力手捕軍

初段

さても其後それぜんあくの二つをつら〳〵おもんみるに善はかすかにあく道にかくれ有といへどもそのせいすい天道にかないあくは一たびせい有て大いにほこるとついにめつしうせぬべし爰に人王六十六代のみかどをは一條のいんと申奉るその比天下のぶ將をはせつつの守源のらい光と申ける御父まん中公御たかい有いまだきちうのうちなれは出仕をやめておはしますあいしたがふ人々にはわたなべのつな坂田の公時うらべのすへ竹とを〳〵みの守定光さて又平井のほうせうとてかれはらいくわうの御いとこ過にし比はりまのしよしやにすみけるをまん中御ゆいげん有てめし出されいまだむくわんにてかくどうとかうしけりらい光ほうせうを召れ御へんは我一るいなれはいづれへだてはなけれ共取わけ大せつに思ふなり御へんはいまだくらいなしけふかうあらためすなはちはりまの守平のほうせうとかうすべしちうをつくしたまはれとひせんはりまのおさへに仰つけらるるほうせうつつしんでおうけを申時のめんぼく世の聞へ何か是にこさんなれ萬一しせんの事も候はばまつさきかけてのり出し御せんど守り奉らん四天王の人〳〵いまだふあんのものなれはよきにたのみ申ぞとれいぎ正しくのたまへはつな公時もなにゝおろかの候べしきやうかう申合すべしと四天王に一人ましひとりむしやとぞなのりけるらいくわう御きげん淺からず御ざをたゝせ給へはおの〳〵君に禮ぎ有次第次第にたいじゆつ有かのらい光の御いせひうら山ざるはなかりけり爰にかゝの國しら山の城主立花もろへ公のこういん立花のとうやすが一なんたち花の大じん正とうがごけに立花のにかう正とうつまをばさなたひめとぞ申ける大臣正とうが一子きんしゆわうとかうす然にたち花大臣はぶゆふの譽れよに聞へまん中に上をこす弓取ゆへ天下のぶ將正とうに仰付られんと世のさたもつはら成しかばまん中わがぶゆうの劣れる事をかなしみゑんゆふゑん御ざいの時なきそら事をざんげん有おきがしまになかさるゝ立花の

とうやすはふぢ原のすみともを打取ぶゆう第一の弓取とてかゝのとゑちせん三が國をりやうちなす所一ゑんに召上けられわづか三千てうの所をにかうにくだしたまはつて有かいもなくぞくらしけるにかう金しゆ王をともないたいめん所に出たまへは御家のかうけんやばとみ鬼丸やだの八りやう國宗かれらは其たけ八尺にあまりひげ空さまにはへ上りこんがう力のくせもの代々立ばなの御家につたはり御ふだいのちうきん成まつたやばとみのうばつらとてかれは鬼丸が母にてせいは九尺二分すみ友とくんでなをあらはせし矢ばとみのおにとみがつまにてとしつもつて八十三力のつよき事かずしらすすどの高名なをあらはし人々おそれうやまいける其次はやたの八女とてやだの八りやうがいもふとせいは七尺二分年つもつて卅一力は五十人か力めいよのはやわざのあら馬のりの女むしや又すゝい力女とて生年としは十七才せいは八尺ゆたかにしてさなだ姫の御そばさらずよこめにてあさ夕うやまひ申ける立花のにかうさなだひめきんしゆ王にのたまふ様物をかたらはおさなく共みゝをすまし聞たまへわがつま立花のとうやすはしゆしやくゑんの御宇のとき鬼をつかゆる藤原のすみ友をちうばつしそのなよに高く弓や打物取てかたをならぶる者もなし其子なればゑんゆういん御身の父立花の大臣正とうを天下のふ將にそなへんとひやうでう有を定すみしん王が孫に源のまん中おのかいせひ正とうにおとる事をかなしみざんげんのなされおきがしまにてむなしく成そのこなれば御身十五才に成ならばさつそく家のはたを上させまん中をうらみとがなき由を申ひらき本領なさんと思ひしに此度まんけいむなしくなり人をさしんしよをたもつといへ共おのれもめつしした三寸のからくみにておほくの人我々にねをのみなげかする事むねんなりせうねんわとのも十五才父の經やうにらいくわうをせめほろぼし一度家を引おこしなを高く上たまへいにしへはかゝのとゑちせん三が國の主たれは此國の者共は代々ふだいの侍なりくわいぶんを以まねきなばはせつかはんはぢでうなりいかに〳〵と仰けるやばとみのうばつらする〳〵と罷出そのぢぶんにも水からせひ御むほんと申せしににかう上いなければ力なし今迄は御ゆたんなりはや〳〵用いせよおに丸とすゝめ立

てそ申けるさなだひめ聞召うばつらののたまふことく水からつまのかたきなればさつそく打たゝんと思ひしに其比金しゆ王はようちにて女のむほんと有ならばよにあさまに思はれんと思ひ今まで打過ぬそのにくきまん中ははてゆけばそのこらいくわう成共せめてうつてうらみをはらすべし八りやう鬼丸罷出今時いたる御むほん成御一家のかすあまた候へはないたんを以みかたにくわへ中國をあいなびけぞんぶんにまかせ候べしとつつしんで申けるきんしゆ丸はきこし召われはいまだようせうなり頼にかう母上は女せうにてましませは軍の方おぼつかなし鬼丸八龍がぐん法にまかせ我を一たびよにたてよとかくはたのむとのたまへは鬼丸八りやう兩がんになみたをうかめせんだんな二ばよりかんばしし今の上いいかでそまつなし奉らん我々一めいをなげうたば天下は手の内にとつくとおさめ候べし御心やすかれとひそかにふれをぞなしにけるかゝのとゑちぜんのぐん兵共まねかざるにはせあつまるうばつらみていかにおに丸とかくてきのきにはかるは手だてなりものゝかずにはあらす共此國のとがしふんぜいはきんしゆ丸御いとこよも一身にいなとは申まし國大名二三十人ひづをおさへてたのむべしやたの八女此うはつら二人打こへてひそかにたのみかへらんと申さるゝ鬼丸聞ていやとよ母上かゝる大事をかたらせ申いなといへんせば事の大事出きなんこなたにまねきおさへて四はんのなさせむりに一身となし申さんはやよをいせよ者共よとよろいものゝく取そろへやのねをみがきほりさらへしのびにやういなしにけるかのおに丸八龍が有様あつはれかうの兵のやとかんぜぬものこそなかりけり

二たんめ

其後立花のにかうさなだひめは思ひ〳〵の物のぐして上にはしろきほろぎを打はをり其名をゑたるゆふ力にておに丸を召れやくだくかたくおいきはめ一門の其内いさゝないだん申へき事有とこま〳〵と書したゝめこばやの七郎に相わたしかゝのとゑちぜんゑつ中をしのびやかにふれにける立ばなのにかうはとうやすのみだひ御いせひつよけれは一もんいつけひ

ろくして我も〳〵とはせあつまり一ばんにかゝの國にとがしのぶんせいはやしの左衞門いのうへはんぐわんのとに土田の八郎石ぐろ宮さきおの〳〵御所に入たまふやはとのみの鬼丸やだの八龍きんしゆ丸にこがねさねさせその身もくろかはのよろいきてさゆうをしゆごし立出る一門の諸大名ぎやうさめて見る所に鬼丸つつしんで畏此度きんしゆ王父のとかなき由を申ひらき父大臣のかたきをほろぼしくわいけいのちじよくをそゝぎ奉らんとおさな心に存たつ近比そこつに候へ共一家の事に候へばかとうど有てたまはるべし又いなと思召れん御方には少もうらみと存候ましいへんなされ候へとことばすゝしく申ける時ばつざに矢ばとのみのうばつらかみを四方にふりみだしひおどしのよろひ五れうかさねくさすりながらざつくときて六尺八寸の大たち四尺二寸の打がたな十もんしによこたへ一ぢやう斗のてつぼうの三かくにのべたりしをかる〳〵と引さけいやと言をはたのむまし一家のはぢは身のはぢなりたのまず共みかたにはみな〳〵くはゝりたまふべしくどき今の口上やと二王たちに立たりけるさ中の大名小名ふるい〳〵とかくの事は候はすわれ〳〵立花の氏をけがしいかでいへん候べしともかくもにかうの仰次第とぞ申ける其時立花のにかうゆんでめてに強力の女引ぐしらへの長刀取もたせ其身むらさきすそごのきせながにくれないのはかまながくふみしたき金のざいひさけつ上だんになをらるゝさなたひめはこがねのよろひにかうばい色のうちはをり同くれないのはかまいろはさくらのうすやうにゑんゆういんの御ざいの時日本ひじんのそろへし時しなのゝ國さなだの官じやいゑよしのひめ君にて大力の上郎とみかどへ三人のかたちにゑらまれ出たまひし大じん君よりたまはり正とうとひよくれんりにましませしがいつしかあかぬわかれとなりたまひけるがひすいのかんざしたをやかにしほうにさつとふりみたき御一門とは存れ共御げんざんははしめなり此度きんしゆ王がうしろみとて御身かたあらんよし身にあまりくわぶんなりそれ〳〵れんばんなさせ申せと有畏て候とやだの八女こざくらおどしのよろひにうすむらさき打はをりすそをながくひかせつゝ大たち十もんしによこたへとがしのまへになをしけるうばつらみてやあ方

方今がいのぶのかためなりれんばんなすべきかいやとは更にいわせぬそ御らんのことく此女そつとよばんにかはりなまくどき事がきらいにて見るきくもいやなれはよく〳〵しあん候へとあいそうなげに申ける大名小名いはひに及はす次第〳〵におしつゞめ戸田の五郎にまはりける此五郎らいくわうとたじなくいゝかはすなかなればしあんがほに見にける八女是をさとり何とやらん此とのはむつましき有様かないやと思わばそれ迄よ今二三人におしつゝまりしあんがほはなに事ぞうけたまはらんとつめかくる土田石くろみやさきはたとへ此まゝしするともしはんかならすおすへからすと申合有けるがひざ立なをしされははん行をなし申度候へ共われ〳〵はげんしのおんふかく今身方にいまる事ぶしの道をちかへむとどうじはん行して敵たへんな道ならす御めん候へ御身方にまいらす共せんぞかたき打なれはいへん申に候はすと返ごんふつゝかげにぞかうへりけりにこう聞ておゝよくこそあれ八女さのみつよくみせつけそあれこときのおく兵者身かたになしてゐきもなしはやはややかたをいで命をたすかり候へや御一身門のはぢをだにはじと思わぬせは人はよそのみかたになりたまへはや〳〵立さり候へとはつたとにらみのたまへは石ぐろ宮ざきすこ〳〵とさしきを立出る所をうばつら道の中に立ふさがり汝が様成おくひやう者此道はけがれなりあとへゆけとにらみつくる三人の者共跡へかへりいでんとすれはおに丸八りやう太刀にてをかけにらみつければ中にほうまいなしにける八女みてあゝめんどう成うろたへ人大事のざしきにやうなくてなんぞやゐぼしひたゝれは中〳〵見にくしと三人のゐぼしを取てなげすて命おしくははやくかへれとゐんよりしたになげおとす土田石くろ宮ざきはいきたるこゝちはなかりけりされ共よう〳〵にしのび出ためいきをほつと付三人めとめを見合あゝあやうきめにはあふたりや都へはやくうつたへんと駒引よせ打のつてやかた〳〵にかけ歸るそれよりもにこうはつがうそのせい八千よき軍のかど出に石くろの城せめつふさんやばとみのおに丸やたの八りやう大將にて寛弘元年三月三日にかゞの國にはたをあげ石くろみんぶ安村が城におしよせ時をどつとぞ上にける安村大にどうてんしてうらの山よりおち行を

やばとみのうばつらごぢんにまはり有けるが石ぐろを見るよりもかたきをすてゝいづくへたこくましますぞひらに〳〵とよばはればみんぶ馬にふち打ていつさんにのり出すやだの八女は是をみてあゝきたなしや石ぐろあますましとかけあをり馬のたつなかいくり一文しにのり出すみんぶつよくのりかけられ馬をかしこにのりすてゝと有岩あなにくぐり入八女みてきたなしや石くろ殿御身をつよくおいかけしも命取んためならず水から御へんをたのみ物申す方あれは是迄はおい來りひらに立出候へとこま〳〵とのたまへは石ぐろふるい〳〵女郎の事なれはさのみ荒はなしたまわしなにやうばし候とおつ〳〵あなよりはい出る八女につ事わらい御身とわれかだんかうなりさのみ心な置たまいそよちかへより給へと云石くろ今は打くつろぎちか〳〵と寄所をあへなく取てふせ御へんにむしんは力はすぐれ候へ共ねぢくびといへる事今はしめにて候へはきるゝものかきれざるかくびをからんためなりとうしろをまへゑねぢまはす石ぐろこへをたかくあげなさけなし女朗たすけてたべとなげきける八女はけいかうだになすならば命はそなたの者なりとふつつとねぢ切かしこにすてそれより土田宮さきの城その外七か所せめおとし白山に引かへすかのやだの八女がゆう力あつはれめいよの女やとほめぬものこそなかりけり

三たんめ

其後此事都にかくれなくらい光みかどにさんだい有立花のにかう正とうが一るいぎやく心の思ひ立ろう城の由せ上に申あへ候なりいか樣すぢなき事はさた有まし國〳〵の諸大名きんりに召れじつぶをたゞさるべしとうつたへたまう所に土田の五郎が方よりはや打を以ごん上す立花の金しゆ丸かゝのとゑちぜんゑつ中をあいなびけはたを上る所に我〳〵かけ合ふせぐとすれ共かれはたせいふせぐとするにかなはずめんほくなくせめおとされるろうの身と罷成候天下の大事たるべしさつそくうつてをむけさせたまふべしと申もはてぬにゑちごの國の住人わたべのみんぶはやくにか方よりはや打を以そうしける御門大きにおどろかせたまひらいくわうはからへとのりんげん

なり頼光つつしんでおうけを申やかたにかへりたまひて四天王平井のほせうを召れ軍ひやうでうましますす所に金時すへ竹両人罷出我々打てを蒙らんと申上る頼光しばらく御しあん有うすいの定光に三千よきを相そへられ引田の判官時かぬ國のあんないかうふりていそぎ御前を罷立定光いくさ大將たまはりたとへ立花のにかうはんくわいがぶゆうをかねこんかうりきちにまさる共ぢたいなまぬるき女原手にたつ程は候まし急一々に搦取立歸候へしと先ぢんは三月十五日の午のこくに都を積てかゝの國へそおしよするごぢんはすへ竹公時両人大和河内の官ぐん木村かしはき高やすねのび村岡さきとし同十八日たつのこくに都を出次第〳〵によせにける此事なをもかくれ無やばとみの鬼丸此由をつたへ聞立花のにかうにまいり都よりの官くんさつそくせめ上るよし承本より望所に御ざ候我うはつら二人なをいのうらに人じゆをめしつれつかれはてたる官ぐんを一あてあてゝたゝかい都におつかへし申さん此ぎいかにと申けるにかう聞召とかく御へんがしんいにはかるべしと立花のいへのうすくれなゐのふきながし空ふくかぜになびかして白山の城を出なをいのうらにぢん取てよせくる敵を今や〳〵と待にける是はさて置都せいよを日についてうつ程にゐちせんの國にきこへたるなをいのうらに付にける両ぢん互にすはやかたきと見るよりもゐびらやなぐいたゝきたて両方一度に時のこへをぞ上にけるよせてのぢんよりむしや一きこま一ぢんにのり出し仰かたしけなくも十ぜんのちよくによつて引田の判官ときかぬせんぢんと云國のあんないかうむり只今爰にをしよするたかいにせうぶぢんでうに心しつかにたゝかふべし敵のけしきはいかにたからに呼はりける其時九尺ゆたかのむしやこ山のごとくおどり出事もおろかや立花もろへ公の御時より代々つたへきたるきんしゆ王のこうけんにやばとみのうばつら同その子に鬼丸とはわが事なり都方の官くんせんぢんと有からははな〳〵しく軍して敵身方の名をあけんかゝれ〳〵とげちをなすいさみにいさむ都せいきつさきをならべつゝ両ぢんたがいに入みだれ軍は花をちらしけるかゝる所によせてのぢんよりむしや二き一ようにかけ出たゝ今爰元にすすみ出たる者は大和の國の住人かしは木小藤太宗正

かく申某は河内の國住人高やす八郎とはかねても聞及らんたかいに太刀のかねをためしはな〳〵しく軍せんかけよ〳〵とよばわつてまつた立花かたよりむしや二き一もんしにかけ合かく申われ〳〵ゑちぜんの國の住人あまの源内やすかげしのさき十郎高のりとはわが事なりたかいにせうぶをきはふる本よりぶしのならい都方の御くびをたまはりくんかうにあづからんと両方たがいにわたりあいおつつまくつつたたかいけるたかやすめいよの太刀じゆつにて天野源内がくび打おとししのざきかしはぎとしのぎをけづる所をあへなく取てをしふするかしはぎみてこはいかに高やす両方せうぶを見合せずたが頼てはかくなすぞすは八まんあまさしと高やすがたぶさを取下成しのざきそのひまに高やすを二かたなさしとをしよはる所を心ねかへし柏木を取てふせうつればかはる世の中やたゝ今わがくびをあらそひてとらるゝくびにりをそへ二つ取ばま事に時の仕合なりと柏木が首かきおとし二つ引さけしづ〳〵とひいて入よせてのちんより引田の判官こま一ぢんにのり出ししのざきをゆんでにおいつけてうどうてばふたつに切はりけりやばとみのうばつら此由を見るよりあますましとてつほう引ざけかけ合さん〳〵にかけむかふ官ぐんをさんのみだいてなぎたをす引田此由を見るよりもきやつはなにあふ大力なりよも馬上に合かけたてば大力とはいわすましと太刀引そばめこまにたつなをかいくられ一もんしにのりよするうばつらみてくわんたいなりよせてのせい馬上のふれいゆるさしと馬共にかいつかみはるかのたにゝとつてなげさも候はんと二わう立にたちぬれは官ぐんすゝみかねてみへにける定光みてあますましと打てかゝるうばつらから〳〵と打わらい人もおゝきになんし一人かゝるはくせ者かないて〳〵てなみを見すべしおしならべて引くみしがうはつら是を事共せず定光かたてにてさし上念佛申せ官くんと十間斗人つぶてにどうと打定光ゑたるかるわざにて中にて二三とくるり〳〵ととびかへりさてもめいよのゆふ力かなさるにても汝人間にてはよもあらじ此定光をかくなさん者日本に覺へなしさてもあやうきおのこかな汝今はうぶの神のよけ成ぞはやくにけてかへるべし又ものみせん子共とてつでうをふるいきをいはこんごう力しと申共

是にはいかでまさるべし定光みて先此ぢん引しりぞけちりやくを以討べしとぢんをさつと引取けるうばつらみてさもそふづ〳〵と兩ぢん互に引とつてかゝの國に引入るゝかのうばつらがはたらきあつはれめいよの女やとほめぬものこそなかりけり

四たんめ

其後ごぢんにつゞく金時すへ竹は先ぢんの定光が方よりないつうを以聞けるはかたきてごはく聞よりもきん時いかつてたとへはんくわいかわたりきてけんのふらし戰かふ共いか程の事かあらんわれせんぢんに入かはらんと二千よき二てにわけ一きを引つれごぢんにつゝけすへ竹とむほうやぶりにかゝの國に取かけしら山の城をふたへみへにおつ取まき時をどつとぞ上にける城の內よりやたの八りやう矢くらに上りめつらしや都ぜいよろひものゝく花やかにさいこの出立見事なりよせての大將のけ名を慥に承らんとよばはつたり其時金時こま一ぢんにのり出しくわんたいなるおのれ原王位をそむきてうてきと成身にてのちのなげきに今のかうげんくらへてみせんかけ合てせうぶをせよけみやうを名のりきかせんと大おんによばはりたり八りやう矢くらの上にてから〳〵と打わらいせんなきあくこんなさんよりこなたへちかくせめよれと女むしや花やかに三十き程出立てあふぎをひろけひらり〳〵とまねきけるきん時みしかきくせなれはなまぬるき女原あれけちらせとざいふり上せめよらんとする所をすへ竹おさへてあゝそこつなり金時いか樣にあのへいは敵をちかよせかけてきつておとすつりへいなり色よきゆふくんそなへ置かたきをあな取てだてなりひらにむやくととゝめける公時みてたとへ石をつりてひかゆる共いつ迄時をうつしなんかゝれとさいふれは公時が一千よき一もんじにのり上る八りやうみて御太儀や敵のせいさらばいとまを取せんとあいづのつりへい一どにきつておとせは先ぢんにかけよせて一ばんのりとなのりける三百よきは一どにわつとくつれおきへいの下にうつまれけるきん時大きにいかりをなし一そくも引へからずせめ入〳〵身方のせい人はくわんらい土より出つちにかへるはならいなり君のためにに命をすつるは

日比さいしのはごむおんをくりしねばかたきもいさしらずといのしゝむしやにのりかけ一のへいをのつとり二の門外に取かくるまつたかたきの方より矢ばとみのおに丸やくらの上に立上りけふの軍の大將四天王の其内坂田殿と承るはる〳〵の御しんらうにゆうくんにまいひとつきよくさすべし一かなてけんぶつなしたまへとよばはりけるきん時いかつてにくき敵のふるまひかなわけかけ入てほんまふをたつせんとほこ引さげかけ出るすへ竹定光おしとゝめふかくなりきん時御へんなさ程ふあん人とはゆめ〳〵しらず敵は御へんのきをはかりしゆ〳〵のてぬるきてたてをなしこなたをあな取しろぎはにせめよせさせ右の手立のことくねつたうをわかしかくるか大石をおとさんか二つの内のてたてなりさ有に御へんわがまたんきも事による身方一きうたるれはかたき千ぎのつよみなりむねをさすりめをふさきしばしか内待たまへなにとぞかたきをおびき出してつめのせうぶになすべし其時は御へんが心にまかすへし心ながにひかへたまへきんときと定光すへ竹せいすれはきんとき力なくはがみをなしてひかへける鬼丸わらつてなにとだんかうきはまり候や四天王はきゝしよりおくれたりかけよ〳〵とよばはりけるすへたけ聞ておゝをもしろきゆふくんやそのてたにはよもあらし門のひらいててつめのせうぶ仕れ四天王がてなみはなはなしくいくさせんかけてみよとよばはりけるやたの八りやう木戸をひらきてせい五十き斗相ぐしまつしくらについて出すへ竹がくん兵一千よきにわたりあいさん〳〵にたゝかいけるいくさ中はの事なるにむしや一きひおどしのよろひに五まいけのかぶとをきてくろきこまに白くらをかせ左右のあぶみをけはなつて大長刀をちらしつゝゆんでにあい付めてによせむかふものゝまつかふにくる者のこしのつがい大ちをめぐるくるま切から竹はりといふものにさんのみだいてかけちらす金時すへ竹きつとみてあますましととびかゝり二人なから押ならへひつくんだ本よりやだはゆふ力にてこんがう力をいたしつゝゑいや〳〵とくみあいける公時力やまさりけんやだの八りやうをくみふせ首かきおとし立あがれはすへ竹はと有小石にけしとんでやだ八女がしたにくみふせられ今はかうよとみへにける所にきん時とびかゝ

り八女があげまきつかんでのつけにとつて引倒すへ竹上にのりかゝりかぶと取てみてあれはいつくしき女なりきん時みて是はいかにすへたけ女むしやにて有けるはさすがなをへし我〳〵か女を二人にてうつたりとさたあらんなむねんなり命助け御へんのふさいとなしたまへとにつことわらいさゆうにひつたて引て入城中より鬼丸うばつら是をみてすはやた兄弟ぶん取するはあまさしと馬引よせふちのつて三千よきのむらかる中にうつて入かいこひゞきといふものにひつし〳〵と打つぶすきん時みてあますましとかけよるを定光おさへきやつはやばとみのうばつらとてそのなをゑたる大力たやすくよつてかけらるゝなとをやにいとれととゝめけるきんときみてこととしやいか程の事あらんやかゝれ〳〵と云すてゝをしならべてひつくんだうばつらみてあゝおのことてやさしさよなんしが様なるこをとこはとをも廿もかいつかみて玉になしてあそぶそと上おびをかいつかみあへなく取てなげ出す金時こはむねんとかけよればものにこりぬくせものかな城のみやけになさんと十四五間中に引たてはしりけるすへ竹定光かけ合金時をとられじと三人おしならべむんずとくむうばつらわらつて一人とこそ思ひしに三人つれて行とかやいざまいらん人々と三人をいつ所にむんずとだきこめて木戸をひらけとよばはりけるすへ竹今はかなわしと身かたはなきかとよばわれば三千よきのくん兵おめいてついていらんとすうばつら今はかなはずして三人をつきはなし大てをひろげ馬人にきらいなくあたるをさいわゐに取てねぢくび人つふて三千よきのぐん兵をかしこのつまり爰のたになん所〳〵をおいをとしわづか千ぎ斗に打なしける都かたのくわんぐん此いきおひにおそれしのび〳〵におち行てきん時すへたけ定光い上五十き斗になりにけるきんときすへ竹定みつはかくては中〳〵かなふまし先此ぢんやめて引やとて軍をやめてひいて入かの者共が有様にか〳〵しくぞみへにける此うばつらがゆふりきをほめぬものこそなかりけり

五たんめ

其後都にはてうてき大きにほこり四天王の者共さん

さん手取軍におよぶよしはやうちを以ごん上すらいくわう事なんぎに思召御馬むけらるべきやと上い有わたなべ承りま事にれき〳〵てをとらるゝだん尤にて御ざ候さしも立花のとうやすはふぢ原のすみともを打てくん法第一の人にてにこうは心ゆうにしてけんぞくをあまたもつ矢ばとみの鬼とみとてふゆうすくれ大力の者にて御さ候がちやくし鬼丸と申はいこくのかんしん長良が一まきをあざむく程のぐんしやと承たゝおろそかには中〳〵此城おとさるへき共存せず候小てきの大てきとは此度の敵となりいわれはわづかの城くわくといへ共その名きこへ有やうがいこもり入は千ぎ一きにまさる兵共何とそおに丸を打とらは心やすく候べし御ゆたんのていにもてなしていとをかたく御守り候べし我しのびはせくだりてたてよを以て打取候か若つのつて敵はいくわいせばあれよりいさひこ御上申べしていとにほうせうをのこし置たく候へ共敵かう力と承若かけ合におよんでは一きを千ぎになし申度事も御ざ候間はりまの守をともない申へしとつつしんで申けるらい光御聞有てともかくもわたなべがむねにまかせめでたくきこく仕れとほうせうつなに御いとまたまはれば二人御まへを罷立人めをしのぶ事なれはあらはれてかなわしとつなはものゝくくさつとに引つゝみ重代の太刀を竹のつゝにおし入ほうせう二人とみんのかたちにさまをかへやふれかさにきれ衣たびのしやうぞく取そへ花の都をしのび出やたけ心の物のふのいさむ心を引とめてはなちかねたるあつさ弓てきによはみを見すましと思ふ斗のたよりにていさむ心は春こまのいそぐとすれど玉ぼこのたどりたどろと行道の草のやどりに日かずへてあくるあしたの朝ぼらけうつあしなみのひまもなくけふもくれぬと入あひのかねもしゆしやうにひゝきつゝ心ぼそさはかぎりなしほうせうつなに打向ひかたきは今にじやくめつのいらくにしづみ我々はしよぎやうむ上をさいごしてげきとをしづむる四天王敵はあのなみの下打はうしをのさつと引てはかへし水浪をさつ〳〵とけたてつゝ國土にほこるあくしゆをは太平樂に打しづめきこくのゑだ花ひらけめでたくかいぢんなすべしと互にいさみたわふれてかゝの國にきこへたるあたかのさとに付たまふすへ竹定光立出たいめんし右のあらましか

たりけるわたなへ聞てかた〳〵の有様いくさのかけ引おろかなるべしと不存時の仕合うんのなす所なり扨きん時はいづくにわたり候ぞすへ竹聞てきん時はけさも御へん御くだりと聞たまひめんほくなくおもてむくべき様なしと引こもりふされたりわたなべ聞て尤なり去ながら軍にまさしくかつ斗はなき物なりうてばうたれかくれはひき時のせうぶにまかする事ちじよく共めんほくともたれか申候はんとあいのせうしをさらとあけ公時わたなべくだり候はなどたいめんはなしたまはぬそおきあへたまへと申けるきん時よう〳〵おきなをりめつらしや御兩人かた〳〵にいきておもてをむくる事去とはめんぼくなき仕合なりかけ入打死とは思へ共一つは君のためならず何とそ敵をしたがへ二たび都に上りなんとかくなからへ候なりわたなべの思召もはつかしやとあふぎをかほにさしかさしいこはものもいわざりけりわたなべきいてきん時がてにあまる敵ならはよく〳〵かうの者と見へたりといへば定光聞てされはつな聞たまへ矢ばとみのうばつらとて九尺ゆたかの女有かく申それがしもくみはくんで候へしが七八間もん取かへし人つふてにうたれ金時もすへ竹もあやうくひんずの命をのがれ二度たいめん申なりとかたりけるほうせうわたなへ聞てさては敵はゆふ力けつきのてきなりこなたよりちりやくにて打とらんさ有けつきのやつばらをはおとしあなをしゆつらいてその内におとし入上よりばんしやくをなげ入たやすくうち取かどくを以うしなふかかけあいのせうぶなす事なかれとよのまに人ぶをめしあつめ軍のてたてをなしにけるかのわたなべがちりやく長良かんしんたいかうほうしんのくはてきと申共是にはいかでまさるべしわたなべはくろかはの大よろい三兩かさねざつくときて敵の城くわくまぢかくのりよせて城のやうがいものみせんとこたかき所にのり上り一々にみはたしけるゆんではそうかいまん〳〵と海にてばりて矢くら七つぞ上にけるめてはふかたあらやまこものさは〳〵とかぜになびきて水流そこなめらかにこまよせなん様もなくうしろはいんざんくんしよをたがゑすかまへける矢さまついぢ馬だし物みのまどよこあいよりいとらんと矢さきをそろへ待かけたりされ共爰によはみ有此城に水をこうと打みへてやくら〳〵のその上

かずはこにかめをすへて有けるは天水をうけて水つかうと見たはひがめかわたなべ爰にのつ取てたて有うしろの山よりおつるたきを切おとさばかたきはすなはち水にはなれしうをとひとしくかう力がまんも水にかつへてよはらん敵は此わたなべかむねの内にとつくと取ておさめたるとものみのあんないくもりなしとそれよりたつるもん〳〵馬しるし家のはたをぞみたりける先一ばんにとかしかはたと打みへてあさきにこんの水くるま浪の内よりあらはしてばせうのはには半月有〳〵とうつたる大馬印と見へにけるそれより北に白きはたにくろくきつかうわちがへ雪おれ竹三本からかさ三つもつかう三がい松のはたのてはゑちぜんのあまのしのさきほりへ本てうの家のもん又こなたの山かげにくれないのふきながしきんのばれんと打みへてゝる日にかゝやきみへたるは立花の金しゆ王が馬印おなじくくれないのはたす百本なみあらせて立にけるそれ八町程へたゝりてくろき白きのはたの有是こそのとの住人石くろ宮ざき土田の一とう三本しないにたううちはつたのからくさ竹にとらくもにまいたる龍のもん二つ引りやう三つ引りやうあふぎながしきくながしさくら川にたつた川はなともみちを付させて月をみがくはとくさのもん家々國〳〵つたはり申まくのもんにはたのもんあふぎやう〳〵しの有様や今に此わたなべかむねの中より白うんのきへしごとくになすへしと城のあんない見すまして本ぢんに引かへすかのわたなべか有様あつはれめいよの兵とかんせぬ者こそなかりけれ

六たんめ

其後四天王ひとりむしや思ひ〳〵のものゝくしてはいくんのてせいかりあつめ五百よきのちやくとうつけわたなべかちりやくにまかせてきの城ちかくぞひかへける城の内よりやばとみの鬼丸此由を見るよりもすはかたきのしよりをつくる事ながちんをはつて城をひやうらうつめになさんのたくみ此てきをおつはらへととかしのぶんぞい二百よきをいんそつし一もんしにうつてかゝるわたなへいさんでたゝかいしがかなはぬてにもてなしさつとひいてかへしけるぶ

んぜいきをはかゝつておいうちせんと二百よきいさみすゝんでおいかけしが一きも殘らすちりやくのあなにどうとおつるわたなべ下知して見たまひたるか八々一きものこさず打ころせときん時すへたけ定光岩ばんじやくをなげ入みぢんとなしてうしないける鬼丸うばつら怒りをなしあゝしなしたる事かないで物みせんとてつほう引さけむ二むさんにうつてかゝるほうせうもの〳〵しやとわたり合爰をせんとゝたたかいけるうばつらみていでもの見せんいさくまんとて大でをひろけおいめぐるわたなべみてはうせうくむな太刀わざにせうぶせよ敵はがうてき此ぢんひけとたけたばぢんやをふのすてゝ仰をも見ずしてにけ行けるうばつらおに丸是をみて日本にてあら人神といわるゝ四天王聞と見しとはちがいつゝにげあしのたつしやさよ見ればしゆゑんをなしぬるかていたく我にせめ立られ大つゝたいへいすておきてにげしはいさぎよかりける人のしゆゑんをわが酒もりとなすへきはと城なる身かたを打まねきかめにひさくをざんふと入いかに身方の人〳〵よ此比うちのもふきをはれ一つのんでさすそとてひつくみ〳〵ほしけるがくつきやうのむしや日本一のおに丸をはしめ大どくの酒なれはなにかはもつてたまるべき天かしたへかゑしつ大地はてんにくるり〳〵とめくりつゝむねんやかたきにたばかられどくしゆのんたる口おしやとちをはいてしするむしや八百よきぞふしにけるうはつらは大とくをも事共せずゆいかいなきおに丸やとたふさを取て引たてしがそのかいなくみへけれはあらむさんなり本らいくうにかへりしはくやむにかへはなきものと上おび取てついちのうちになげ入れは矢くらのとだいに打あてられみぢんになりてうせにけりうばつらおに丸をうたせつゝ命をしむにあらばこそかたきのはたのてみへぬればのも山もかへり見すかけみだしあたりによるをさいわひにめにさへぎるをぼつかけ〳〵ひつつかみ取てねじくび人つぶて馬も人もきらいなくみぢんの如くなすふぜい虎が風にうそをふきたけつて龍をにらみつけ二つのなかさけられていかるふぜいもかくやらんとおもてをむくる者もなしうばつら今は手にたつ敵あらざればてつほう打かづきむさんやおに丸はわれよりさきにはてぬるよなむあみだ佛みだ佛あはれかたきの五

百も六百もかゝれかしめいどのとぎにうちひしぎたむけんものをとひとりつぶやきひいて入わたなべきん時をまねきなにと坂田定光すへ竹みたまへ人はつよき斗にてうたるゝものに更になしおに丸をだに打とればもはや此城らく城したりあのみへたる山におくりたきを切ておとし水ほしとなすべきはほうせうすへ竹いそがれよ城の内のくん兵はわれとめつしうせぬべしはや〳〵と申けるすへ竹ほうせう心へたりとうしろの山にしたいあがり水といを切おとせはたにゝたきはおちにける城中のくん兵共わたなへかけいりやくにて水にはなれしうをのごとく水にかつへ馬を引よせさしころしながるゝちをぞのみにけるうばつらりき女にかうのまへにまへりかくては此城たもちがたく御ざ候かたき水の道をしつて切ておとせば力なし此しだをすておきのとの國に引しりぞきあれにやうがいかため候へし御やういあれと申けるにこう聞しめされま事につまのとうやす此しろのおさとは水のて成へしとあさゆふのたまひしはこゝならんいざやうつたてきんしゆ王さなだひめもろ共にすゝいの力女やばとみのうばつらはくろき馬のたくましきにほこ長刀をからみ付し う〳〵五きのり出本ノマヽし千き斗にて取かこみよこさまのりとをるわたなべ身方にげしをなしさいふりあげかゝれ〳〵といさむれは坂田うらべうすい平井をさきとして一もんしにのりかくるうばつらみてすいさんなりおのれ原そこを引なと打てかゝりきん時がのつたる馬のまへあしづんどはらいのりとをりすへ竹をみぢんになれと打所をとびちがへゐりたてば馬はらつくわとなりにけりにこうは下ぢしてかゝれ〳〵とのたまへば千き五百きかけ合みだれいくさのぶん取といのちをすてゝたゝかひけるうばつらがうつぼうにあたりてしするぐんびやうはいくらといゑるかずしらずきんときすへ竹馬にはなれかち立になつて爰をせんどゝたゝかいけるがりき女わたり合火はなをちらしたゝかいけるきんとき太刀つばもとより打おられすへ竹のぶかにふかでをおいすてにあやうく見へにけるきん時すきなくとんで入りき女をとつておしふせくびかきおとし立あがりすへたけをかたにひつかけひいて入わたなべほうせうさだみつは大將にこう金しゆ王を打とらんとせめより〳〵たゝかいけるにこうみていて

いててなみを見すべしと定光をかいつかみひさのしたにひつしいてくびをとらんとする所をばほうせうくびをたまはつて太刀つらぬきよばはれば定みつさなだひめをとつてふせ御くびをかきおとし立上るわたなへすかさす金しゆ王をからめ取うばつらかくとはしらでかたき西になびけひがしにとつておいまわしさん〳〵にたゝかいしが大將をうつたりとよばはるこへをきくよりも今はなにをかこすへしとむかふによるをさいわゐにかたきのうつをも事共せずやばとみのうばつらがけふをかぎりのしにくるいかゝれかゝれとよばはつてさん〳〵に打破れは一きちかづくものはなしきんときはうばつらを打とらんとつけもはなれずかけめぐりうしろ様にむずとくむうばつらもの〳〵しやととつてふせくびねぢきらんとする所にわたなべほうせうかけよするを三人共におつふせふみつぶさんとする所にさたみつするゑ竹かけよするうばつらみてもの〳〵しやとすへ竹をかいつかみ七八間とつてなくれはふかておいぬ心はやたけにはやれども大ちからになげられて五たいすくんでかなはずさだみつなむ八まんときせいしてやばとみかの右のうでをしつかと取ふれ共きれ共爰を大事と取ふせけるうばつらあゝ身かたはなきかとよばはれとさしもめいよのくせもの共さうないちかづく事もなく四方に立わかり見物する所に互にこんがう力にてゑいやゑいやとねぢあいける折ふし主はたれ共しろきはたに三つほしに一もんしをつけたるむしやせいは六尺ゆたかなる大男しらひげそらになでとぶがことくにかけ來りうばつらを何の手もなくかいつかみ取て引よせおしふせくびとれやといふわたなべ公時とびおきてあへなくくびを打おとすみれはわたなべのはや國なりゑちごの國よりたゝ今こゝにきたる事天のなす所なりめでたし〳〵若とのばらとわたなべにたいめんしてゑちごの國へ歸ける四天王の者共は金しゆ王を引立て都をさしてかいぢんす天下太平におさめけるすへはんじやうめてたし共中〳〵申斗はなかりけり

右者太夫直之正本也

いろこかたや　新板

京今宮御本地

初段

さても其後つら〳〵世のくわんらくをかんずるにせい有てぎ有ものは二たび身のかうたいをはかりいたつてせいなきときんば身をいたつらにくちぬとかや本てうのみかどをは仁王六十六代一でうのゐんと申奉る花山のいんの御いとこみかど御出家の後御位につかせたまひける然に此君わかの道に心をうつさせたまひ御ささきは上東門ゐん御だうのくわんばく道ながの御むすめせいせうなごんあかそめゑもんその外いせの太夫いづみしきぶ小式部とて天下めいよの歌人にて日や朝ぼの御ゑいか公卿わかにかむりをかたふけむねをくだきはなにゑいじ月によそへ四きおりおりの歌のくわひ天下一ようにおさまりてぶげい弓をうちおさめ太平らくにおさまりけるその比のぶ將は源平兩わにわかつてげんしは多田のまん中公にてわたらせたまひしがほつたい有てまんけいとかう

し御ちやくしせつつの守らい光東三十三が國のふ將御いへのじつけんわたなべのつな坂たのきん時うらべのすへたけうすいの定光とて四天王とかうし日本一の兵にてかたをならぶるものもなし又平けはたいらのさつまの守かねもりとて西三十三が國をあい守り君をうやまひ奉るかの人々の御いせひなびかぬくさ木はなかりけりその比はりまひせんの大將をはものゝべだん正のちう道かせとてちかたがすへのながれをくみあゝ第一のゑせものにて神づうま道の兵なり然るにせんていかうきでんの女御の御くけたれは日本しやめんをかうむりあまつさへ兩國をしよちしてわがまゝぶ道にくらしおにがしまよりけ道をめしよせおさなき時よりのなしみとて日やひざもとさらすのくせげ道あをんき、しやう王きとてそのたけ九尺あまりかみは四方にはへわかりつのはさゆうにうしとひとしくみへにける其外こま鳥源八うしだに山のは九八てたれの二郎あしかは小六さまなのたもんいへつねとて山〳〵たに〳〵のあふれものをめしあつめくわぶんにれいおんゑさせつゝゑぼしひたゝれきかさね道かせがあくを尤とどうし人のなげきも

かへり見ずくわへんまんしん日にましてちやうじほこるぞうたてけれものゝへの道かせ二人の外道其外かしんまねきあつめけふのすいめんさまさんときよくろくに打かゝりよも山の物かたりくわん〳〵と打聞あゝめんどうなるしやばせかいなんぞや小國わつか二か國あんどしてよに有がほのむねんさよなまなか國の廿か國も卅か國も所領せんこそ人共更におもはれんあまつさへたいら源なととて同しくけのながれにてわれ藤原のばつよう、おきかせがちやくしとしてうぢもくらいもしやつはらにおとるべきにあらずさん〳〵に打ちらしせんぞのとふらい軍はしむへしそのむねよつくたもてなんし原とわがまゝにそはんへりけるさまなのたもん家つねする〳〵と罷出げに御所存のだんおしはかり奉るされ共あくぎやくに身をくだき國のさはぎをなす時は天のせめちかくして昔よりてうてきと成し者かず有といへ共御せんぞちかたふちはらのすみ友御いせひばくたいたりといへ共御身をうしなひたまふされはわが君も御いせひばくたいにて日本にたれ有へし共存せず候へ共然るに源のらい光其外四天王そのほまれよに聞へたくいまれなるくせものなり若しそんしてはおしかりなんひらさら思召留まらせ候へしと言ばをつくしかんげんす道かせ聞てへんしよくかはりやあすいさんなりさまなせんぞのちかたすみ友はわかごとくき神のつかはしむるといへ共その比ぶこつにしてぐんのしらずむほうやぶりにつよきを一すぢにかけ引をしらざるうへおのれとかばねをめつしたり大事のむほんのさまたけはなに事ぞ一めいをまとにかけ、天下を望はふしのほう又らい光がけんぞく四天王とてかしつけば我も二人の外道その外名有郎等有汝は心おくしかんげんだてはむやくなり罷立とぞいかりけるたもん少もはゝからず御上意にて候共今世の有様ときめきてらいくわうにかしつき候へばじせつとうかがいそのうへ名有諸らう人又はゆふ力はやわざのくせものをしのひ〳〵あいまねき御身かた十ぶんたる時うつたゝせたまふべし此ぎいがにとくりかへしとどめける道かせしばらくしあんして尤なりたもん名有きりやうのものあらばいち〳〵めしかゝゆべしそれぞれと悦びて色をなをす所にこまどり源八こしたにすゝみ出申様しよしやてらのかくとうほうせうと

てたゝのまん中がおいらい光にいとこなり然るにみつながのかんきをゑはんぞくのかたちにて今がくもんだうに候へ共その心たくましく大力のくせ物なりかれを御めしかゝへかしんとなさせたまふへしいまだらい光とはたいめんなくまん中を打うらみ此年月罷有ひそかにたのませたまふへしとはゝかりなくうつたへける道かせ聞てそのくせものこそのぞみなればはや〳〵召してまいれしよりやうは望にとらすべしはや〳〵と申けるこまとり源八承りはりまのしよしやに急きける是はさて置平井のほうせうかくどうはまん中のかんきをゑはりまのしよしやにすみけるが郎等を近つけ父ひらいの經やうに出家となれとはのたまへ共なが〳〵ほつしにならん事と思へば〳〵むねんなり然にまん中はわれがつみをはゆるすまし然にちやくしらい光天下のふ將をかうむるよし都に上りたのまんか又此國にいつ迄もわがまゝらくにくらさんかげんしにやつかへん平けにやおもむかんいかゝはせんけんもつと大たちをよこたへしばらくしあんする所にこまどり源八あんないかふて中に入りほうせう立出たいめんして右のあらましかたりけるかくとう聞てあゝすいさんなることはとは思へ共いや迄しばしわが心きやつはら心のまゝにたふらかさんと思ひさらぬていにてま事に道かせには我を人と思し召御ふちあらんとは近比くわぶんしごくせりされ共我は御存のごとくまんけいがおいとして今らい光のいとこなり國の二かこくや三かこくたまはるとてもなにならず道かせはわつかはりまびぜん兩國なりそれをわれにたまはらばだんじやうには所領に事をかゝるべし但我に兩國ゑさせつゝ此ほうせうを大將とだにあをぎたまわらばふせうながら道かせをけらいとして二か國も所領せんものゝべかことばには此ほうせうがしんなどゝはそつとくわんたいしごくなり此ぎかへりうつたへよとから〳〵と打わらう源八めんほくうしないやあすいさんなるかくとう此はりまのちは道かせが所領なり國中に身をおきてこくしの事をもどくものはおこの者よつくしあんしてへんごんなせばうずのくびのうせたらんは見にくきものとあいそふなげに申けるほうせう聞てけに汝がいふことく此しよしやに十二才よりがくもんしてほつしにならんと思へ共なんじかやう成くせ者をいけ

ておかんきのどくさにはんぞくにてくらすなりぢよのほつしとはちがふへしいで〳〵なんじでしとなさんとかくうき世は夢なれはのちのよをたすかるへし又ものゝふのいつそかみをすらんもなまぬるしかたびんをすりのこしはんぞくに成たまへとかたびんすつてたかてこてにいましめはりまのしよしやのどうじゆくはんぞく源八入道とふだをかき太刀をくびにからみつけ其身もけんもつともないて都へ上り候なり御ゑんあらば又こそめぐりあふべしと源八をつきはなし都をさして上りけるかのほうせうがはたらきあつはれきらくのくせものとほめぬものこそなかりけれ

二たんめ

▲其後こまどり源八こしだにはおもひの外におくれを取ほう〳〵にてにけかへり道かせにうつたへけるものゝべ大きにいかりをなしよもおゝくはへだゝらしおつかけてうてと下知をなす山のは九八てだれの二郎あをんきしやうげ道四人ものゝぐ取てなげかけ五十き斗おつかけたり是をはしらでほうせうはけんもつ一人供として兩わのほこ取もたせ今はあかしのうらに付びんせんかふてのらんとする所におつてのせいのがすましとこへ〳〵によばはりゆんでめてよりおつ取巻かく道みてあふ心へたり定召道かせかものならんはる〳〵のかとおくりいわれぬ御ほうしされ共是迄の見おくりにほうびなふてはかなふましとそばなる舟のかないかり七十八斗にてうがちかたきをかる〳〵とふりまはし是へ〳〵とまねきける道かせかおつての者さうなくあたりへちかづかずとをやにいよとひしめきけるてだれの二郎きつと見てあゝゆいかいなしめん〳〵われくみとめんと太刀ひんぬきうつてかゝるほうせう見て念佛申せかくどう坊がいんどうよと怒りふりあげてうどうてばかうべみぢんとなつて失にける山のは九八是をみていさぎよし御ぼうそこを引なと平井がうついかりをひらりとはつしてうど切かくどうにつ事わらいなんぢらがへらへら太刀に此ほうせうは及ましいて〳〵いとま取せんと一もんじにかいつかみまいに引よせ首ふつつとねぢ切かたきのぢんへなげ入けるあをんしやう王き

げ道みてあゝじひにんにくの衣はかばねにきたるとも心はおにもかなふましいて〳〵つみふかきくせ入道あび大ぢごくへつれゆかんと二人さゆふより取こむるかくどうみていざやつはらかなない（本ノマヽ）〳〵おのれ原おにがしまより出來してみちかせにつかゆると聞及たり我はりまのしよしや寺平井のかく道ほうせうとてしやかむ二佛のほうをるつうしてあくふかきざい人をさいどするほつしなり近比大事の法なれといで〳〵ゆるしゑさせんとれいのいかりをかる〳〵と打ふつてむ二む三にうつてかゝるげ道共是を聞ああ心ふときくせもの共手取にせんとさゆふよりひしひしと取こむるかく道さらぬていにてよつくとれ此ほうせうは手の下にあれ共今にぬけて出べきぞよつく取こめよとさらに事共せざりけるげ道共聞ていきながら物思わせんいざゆけゆかんとひけどもうてどもばんじやくに事ならずはたらくけしきはなかりけり外道みて身方はなきかかく道を組とめたりかゝれかゝれとよばわれば廿き斗かけよせて四方八めんに取かこむけんもつ太郎是を（本ノマヽ）太刀ひんぬき打てかゝるかく道みてやあせんなき事をし出してげ道をにがすましそれにてよつくけんぶつせよといふこゑのしたよりあをんせう王きゆんでめてになげすて四五間うへにとび上りなひ〳〵しよしやにさるもの有とは聞つらんいて〳〵てなみを見すへきと両はのほこおつ取むらがるなかにわつてむかふものゝまつかうにくる者のほろつけせんだんいたがへしつゝぬきねぢくび人つぶてさん〳〵に打ちらしよせてのぐんぜいは是をみていや人けんにてはよもあらしいか様かうもく四天王べんさんしてしよしやにすませたまふと覺へたり叶はんひけと跡をも見ずにけかへるかく道ほうせう是はめん〳〵ひきやうなりせんなきたびのかど出にむだほねおつたるよしなやとけんもちを引ぐし明石のうらより舟にのり都につけよせんどうとふなばりを枕としてゆたかにふしてこぎいだすかのほうせうがはたらき日本一の兵とかんせぬ者こそなかりけれ

三たんめ

其後二人のげ道ものゝべ道かせかへり此よし申なか

なかかく道ほうせうと申くせ物人間とはみへ申さずかくてはかなはせたまふましとかく我〳〵か一ぞくやくじんげ道をあいまねき御みかたと仕るべし此ぎいかにと申ける道かぜきいてゐみをふくみそれ〳〵まねぎしたがへよはや〳〵と申けるあをんげどう、せう王き天に向打まねけばいるひいきやうのくせ外道うつせんと道かぜかまへに現れ出われ〳〵はしきむてんにすまひなしさいどをさまたけ人みんなやますしゆらにて候かたゝ今あをんしやう王きつうりきしきくきやうにつうじわれ〳〵御身方に參たり然に君御はたを上られあをんしやう王き二人てつくわをふらしせめ上らせたまひなば天かは君の御手のしたたな心にとつくとおさめさせたまふへしその時はわれ〳〵にげ道の法すへひろく御ゆるされをかうむらん此ぎいなやとことばをそろへ申ける道かぜ聞てゐみをふくみよく申たれ此事しあふするものならば御ぶんらが望にまかせはかろふべしさてかた〳〵かはかり事はいかに其時ふうてんくわつきねつき三方に立わかりそも〳〵我々がつう力は今有と見れ共そくざになくちりにましはりひにくわゝり水にうかんで浪にのり空をかけりちにおちてふうてんかぜをふかすれはくわつきねつきはゐたりあふとすかたをみぢんとあらはして人のひにくにわけ入て五たいはなれてしにうせよとくわゐんのいだしなやませはふうきはいさんでみなみにまはりなまあたゝかなるかせをふかしむざんやなほんぶのよつ五たいをしつかとしめあしもこしもたゝせばこそ此さつすをもつてくびをさしつめてのんどのいきのかよひをとめ此さいつちはしんきづつうのさいつちなりがまんのつよきぼんぶをは二百も三百もくだけてのけと打ふせてしんばのゐんつきゆけばそつと五たいをくゞりいでそばなるぼんぶをたちまちに火水になれとなやませばたとへ今一天に其名をゐたるつなどのも公時うらべ定みつもそくざにひしと取なやまし五たいはさながら大とくにゐふしたることくにてあさかぜのあさ日にむかふにたるべし御心やすかれとてに取やうに申けるあをんきせう王き立むかいいさきよし〳〵去ながら日本は神國の事なれはしんれいを以いのりせばふうてんごたへそれこそのぞむ所いのるほつしがしやだんにのりほんぶくの御へいをばまつさか樣

にたて置てこなたもつうをおこなはんあをんき聞て尤なり人間さとつてやうじんせばくわつきこたへああやすきひまなくなやまさばふしたるそのまにとをのゆびつめをわけひにくをくゝり入ぬべし四そくのつめはひにくのもんおうんのいきにのつとつて五たいに入て御ぞうをくみ六ぶをみだし取ころさんしやう王きすゝみいでくすりを以かんげんせばねつきこたへじやまんくわゑんのひさくを以むねにたもたばくみいたしたいないにまはさばこそときやくとなしてこらしめん三日が内に取つめばいこくのぎばが本ノマヽきたりつゝせむるともるともちいばこそやまふは四百四病なり日にはちたびよに千たび入かへもみかへみやくのしんかんめいもんの道こだはりさまたけはくすりかへつてどくとなり思ひのまゝに候べし道かせ大きによろこびてとかくたのむめん！〳〵先ぶ将をなやましうしなふべし三人のやくしん御心やすかれやかて吉そう申べしさらばとてふうてんたちまちさまをかへいざさらばといふかと思へばくわつきねつきはすまんのちやうとあらはれてあくふうにもまれつゝくも井かすかにあがりつゝ都のかたへとび行はものうかりける次第なり是はさて置爰にふしぎぞ出きたり其比年號はゑいろく元年八月三日の事成に朝日きた西ひがし三方にあらはれ日のいろくれないにひとしくしてくるり〳〵とまはりける天下の人みんふしぎの思ひをなしいかなる事かいできなんとかたづをのんでかなしみけるみかどにはけい上うんかく雨ぶ将平のかねもり源のらいくわう四天王を召ぐしかゝるきたいの天のつげいか様昔よりこうきにしるし候べしはかせをめしよせかんがへさせゑいぶん有べしとそうもん有みかどげにもと思召くわんばく道長をもつてあべのせいめいを御てんにめしかんがへ申せとりんげん有せいめいつゝしんでおうけを申しばらくかんがへしやく取なをし是は天下のわづらい又日りんはいつたい然るに三方に出る事是きたいのくせものきんだいゑんゆういん御ざいの時大ゑん三年いの八月廿四日にし東さるのかたにまん月あらはれ同九月十六日におよへ共月あしなくやみとなり天下のわざはひおびたゝしく十八日大ぢしんらいてんして國をなやます去によつてていけん元年とねんがうおくりかへおだやかにおさまりぬされ共大か

せふきおちて此あくふうにやまふをうけ天か一ようにわづらはしむる事うたがいなし然るに今御代にあたつて三方のあさひ天下の煩まのまへたりゑいろくおくりかへしやうれき元年とまつりかへ候べし其上都まのあたりにやくしんきらくして御門をかたふけ奉らんと仕るいそきふなをか山にりんがう有て御れうしをはしめやくしんまつり候はゝ天下太平成へしと見とをすことくうらなひけるみかどを初両ぶ將聞召いそきふなをか山にみゆき有べしとくぎやう大臣はなやかにふなおか山にくわいかう有そのほかたいらのかねもり源のらい光おの〳〵四天王を御供にて道のさいれいにぎやかにさきをはらつてとをらるゝ所にふしぎやかせばつとふきおち道しばをまくりたて三ぼうの日一おもてにとびつらなりくわゑんと成てもへあがれはまつさきのつゆはらい平のかねもりののつたる馬三どいなゝき身ふるいしていぬいにとうとふしにけるかねもり馬ののりかへとつてのらんのらんとしたまふが両がんくらみ大ちにおち遂にむなしく成たまふらい光つな公時定みつすへたけ御車をと有木かげにとゝめいか様しよい有へしと天のにらんで立所につむじかせはつとふきてらい光をまきあけんとしたりけるらいくわう心へたりとひげ切ぬきもちはらいたまへは手ごたいして大ぢにおつる金時すかさすとびかゝつておさへみれはひりやうのくびのこりけるらいくわう御らんしそれしさい有くせものならんとゑいらんにたつする所にくぎやう大臣六ゑほくめんこと〳〵く五たいのふらんしていぬいにふしまろぶわたなべ太刀ひんぬき諸天に向やあすいさんなりおのれ原日本一の四天王御車をとのい仕その生たいをあらはすべしもつたいなくも十ぜんのみかどをさまたけ申事たとへてつへきをふらしさいれいをさまたくる共りんげんいかでむなしくしてふなをか山にりんがうをやむべし今めにさへぎるものならばいでものみせんと四人たちぬきそばめひかへたりされ共かせはとゞまらず一おもてにとびつらなりし日月しやりんのごとくひかりものとなつて御車ちかくめぐりよるつなきん時さだ光すへ竹きつとみてそれこそのぞむ所ゑたりやおふととびかゝつて四人さほうに立わかり太刀ひんぬき切われはたちまち内よりあつき三人あらはれていよ〳〵しやうげなす

へしとくも井はるかにあがりける四人のもの共こはむねんおのれはらうちに有をしるならば思ふまゝになさんものむねんなり去ながら今にくびをうしなはんと御車をふなをか山におしむくるかの四天王のはたらきあつはれめいよの兵とほめぬものこそなかりけり

四たんめ

其後ふなをか山に御車つきしかばくげ大臣御こしをしゆごし御まつり事はじまりけるらい光つな公時定光すへ竹御供にてぜんごをしゆごし奉れば神道にはせいめい佛道にしやうくう上人しんごんひみつの大法ひほうおこなはるせいめいへいはくおつ取日本六十餘州の御神くわんじやうおろし奉りくぢきつてうやまへば三井寺の僧正ゑいざんは天台ざす一ぢきんりん五だんの法さんごさいはい〳〵うやまつて申忝も日本は神國なり先げかいのちにいたつてはいせはしんめい天照太神ないくう外くう百廿まつしやぎおんかすが住吉ひよし大明神やはたは八まん大ほさつきたのは天まん天神あたごはぢぞう大ぼさつあさまにふく一まんこくうぞう天の川のべさい天川しもにさがつてはしんくうがあみだなちがひりうごんげんたき本がせんじゆくわんおんかうやにこう法大しねごろにかくばつくば大こんげんおたがしらひげ松しま小島ならは七道大からんかゝに白山ゑつ中に立山ほうきに大ぜんあはに入てはてうさうかん四國にこんひらおはりたつたふちうに六しや大明神かしまかんどりうきすのみやかうづけにいたつてははるな八まんきやうこんげん一の宮か女たいにてめうぎははくうん大てんぐかつらきたかまひらよがは力を合あくれいを千里か外にはらいたまへ忝も十ぜんのていわうくわんかう有てかぢあればぶつじんきみやうをあらはしたまへともみたていのらるゝふしぎやへいはくたちまちにまつさか様につつ立てしんごん天たいのこまのだんをけやぶりてあつきは四方にとびさりける人々きいの思ひをなしいよ〳〵さかつていのりける所にうしとらのかたよりくろくも一つまへさがるうん中にけしたるかたちあらはれけるくび八つのうしにのりそも〳〵是は天ちくしきむ天にすまひ

なすやくじんのづい一ばつらつたげどうなりおのれはらが一めいことことく取つくさんそのためつやくじんとあらはれるゝ今思ひしらせんとてつくわをふらしほのをゝふきくもにかけりぢゆうじざいのほうをみせ東にとびにしに行こくうにひぎやうしてじんべんいりきをふるまいけるらい光は御らんし引めのかぶらや打つがい此弓はようゆうがたもつてはなつめいきうなり請て心みせよとよつ引すばといたまへばあやまたすうん中にひかへたるやしやつらだつかみつけんにつばとたつ夫事のてなれはあやまたずろくぢにどうどおちにけるわたなべすかざず首ちうにうちおとしやく神まつり御かど出めでたしと太刀につらぬきさし上るとくもの内のげ道共しだいにかげきゆるがことく行へもしらずうせにけるそれよりもせいめいはやく神はらいの御へいす百本切したゝめ御とのいの公卿いち〳〵にさしつらなりふなおか山に五りう宮とまつる事此ときの事なりとやおの〳〵御門をしゆごしくわぎよなるせいめいへいはくいちいちに取あつめれんだいのにまつりすてかへりけるされどもくぎやうきさきをはしめ國々の大名小みやう高位下官たみ百せいに至迄やく病になやまされまくらをならべゆ水をたへてくるしみけるらいくわうの御うちにはうすいうらべをさきとしてみな大ねつさにおかされてさんのみたいてふしにけるらいくわう御らんし是天下の煩ならんと両人わたなべ坂たをめされ上い有きん時承げにめにさへぎるにおいてはやく神もかうじんもあますべきに候はずされ共かげもかたちもなくめにまみへねば力なしいか様やきやつばらをおもふ様に打ほろぼし天かのなげきをやめ候へしとはかみをなして申けるつな聞てきん時ののたまふことくめにさへきらぬくちをしさは心はやたけにはやれ共うすいうらべも力なくついになやみ打ふしぬ此上は御ぶんも我もすいふんやくじんやうじんかたく守り申べし身あやしくちかづくくせものあらばたとへ夢まもぼろしにさへきる共切はらはんにしくあらじ君も御ゆだん有べからずと御いさめん申ける頼くわう聞しめされとかくつゝしみかんやうなりとれん中に入たまふわたなべ金時御ざまのつきの間に二人まくらをならべふしにけるすでにやはんもすぎ行ば西の間のしやうじさら〳〵とあくるを

わたなべかみ〳〵にうつ〳〵のことく入にけるつな枕をさしあげみれはあをさめたる女ぢぶんなよしはやきたれと打まねくを見ればやくじんさいづちさすまた引さげきんときがまくらもとに立よりわれなやまさん人なやまさんとうばいやうれいの女われかれもむつかししそれがしきやつを打ころさんとふすよと見れば金時かつはとおきわたなべおきあへへんげをくみとめたりとひしめけばつなはすはよとおき上り四方八めん切はらいなんなく神打とめてたいまつとよばわればとのいぶしかけ合火をさし出しみれば金時がくみとめしはれんだいのにすておきしやく神まつりの御へいなりわたなべが切とめしはふるきそとば岩切にのりこと〳〵くつきてさしきはくれないにそまりけるきん時はこはむねん打もらしぬ是は正しく清明かふなをか山にてきりはらいたる御へいなりいか様此そとばを見るにれんだいのにきやつばら有と覺へたりあけなばのりをしたはんとあいづを定いたりけりこれはさて置平井のかくとうほうせうはけんもち一人召ぐし都には入ぬれとまん中のいかりはかりかたくおりをうかゞひ申わびんとかくらく中は事さはがしくむつかしとむらさきのの方はらにくさのやかたむすびあけ心をすましいたりける所にたれとはしらずやはん斗にしばのあみ戸をはた〳〵とおとづるかく道聞てふしぎや此れんたいのは人のやちうにきたるべし共覺へすいか様さんぞくがうとうならんうんのつきたるやつばらかな出ものみせんと両はのほこひつさけしばのとに立いでいかなる者とたづねけるやくじん聞ていやくるしうも候はす此あたりの者成か都ににくしむものの有本望はとげぬれど存の外にふかでおひおちゆかんにかなはす御やかたを見かけ申たりかけをかくしたまはれといそがわしけに頼けるかく道聞てとかくの事はしらね共手をあふたるとや侍はたがいの事うちにとをり候へとおくにせうじみればおのこ三人一人はぞんめいぶじやうにして二人は力なげになをりけるかくてほうせうはげにいたはしき次第かな見たまふごとく爰は人ざとはなれしれんだいの心しづかにかん病有いづくへもおちたまへさてかた〳〵はたれやの人のかしんそやそのなをなのりたまへたとへおつてす百きにてしたいきたり共心やすかれあるじがうでに覺へありよせ來

らんやつばらをかたひしきにとつてねぢくび八つぶてかいこつぶしといふ者にらつくわみちんに打ひしき此身は八ざきになるとてもかた〳〵をばわたすましはや〳〵なのり候へといさぎよくそ申けるやく神共は是を聞たのもしき御ことば我〳〵はりまの國の住人ものゝへだんじやう道かせがけらいの者にて御さ候やせんいしゆ有物を打取是迄おちのひ候なり此者へいゆふのおりまで御なさけに御かくまひたまはるべしひとへにれのみ奉るとかうべをうなだれ申けるほうせう聞てなに道かせのかしんとやものゝべの御事はたねんなく存たり所はなにあふのへんにて人のしる事よもあらじ心ながくかんびやうして國にかへり候へとさま〳〵いたはりもてなしけるかのかく道ほせうが情の程あくあれは善心有ぶんふ二道の兵とかんせぬものこそなかりけれ

五たんめ

▲其後わたなべのつな坂たのきん時両人は五かうの天もひらくれは両人御前に罷出らい光に申上右のあらましうつたへけるらいくわう聞し召れふしき成次弟かなそれ〳〵きやつばらかすみかなき事は候ましはや〳〵とのたまへばつな金時両人はけんそくをともなひてのりをしたいてあそこ爰よと尋行の道山みち行過てれんだいのにつたへ行てみれは一つのしばのいほり有きん時すは是に有とかけいらんとしたりけるわたなへおさへそつしに内に入るべからずおんびんにたつね申いはひせばくびねぢ切てすつべしとあんないかふて申けるかく道みて三人の者をかくし置其身さらぬていにてとこのふちをまくらとなしそらねいり初けるけんもち太郎立出是はいつくより御出ぞあるしは今やすらい罷有御用ばし候へば仰おかれ候へとなにげなく申けるきん時きいて何あるしやすらい有とやながきよをばなにをなして時ならぬ高いびきあるしにたいめんせんとおくのでいにつつと入御ぼう〳〵とおしうごかしけれはかく道よう〳〵めをさましたま〳〵すいめんなしぬるになにのやう有てかは來りしぞかたれきかんと申ける公時聞ていやとよ御ほう御へんのいへにふしき成ものは候はすややぜんやく神を切はらいのりをしたひきたりしに

此しばのやにつたいたり御へん身に覺へはあらざるかよつくめをさまし心をしづめかたられよねまよいたりや山ふしとあらけなく申けるかく道聞てなにやくじんのわがうちへのりを引て來るとやたとへやく神にもあらはあれ我をたのみきたらんにかた〳〵におそれ是に有やとわたさんや其上我はやくじんのかしらはせすやくじんもかう神も我はしらすちか比そこつのおのこかなりふじんにふしたるものゝやのうちにあんないなくみだれ入びろうのふるまひきやつくわいなりねつびやのそのうへにくびをうしないかへるましけがなきさきにとつくかへれあゝようがましやと又打ふしいたりけるわたなへきんときよこでを打てから〳〵と打わらいさても〳〵も世の中や心ふとき、くせものかな金時我兩人にてうたんにはんくわいなり共あまさんやされ共かゝるものをたすけおきわが君のかしんとなし家の寶とあをくべしと二人が中に立入兩方先しつまれ〳〵あるしの一りもこゑたりぶしたる身のわがうちに見かけたのみ來らんにむげに出すほうはなし又御ぼうと打はたしいのちをすてゝかいあらすとかくわたんの以きたいの有様かたるべし先しづまれとおしはけわれ〳〵は聞及たまふへしらい光の御内につな金時と申者なりやせんむちうにやくじん來り二人の者をなやます我〳〵むちうに太刀ひんぬきはらへばてごたへしてのりを引したいきぬれは御身のやかたにつゝきたりさ有に互にろんし打はたさんな是ねつにおかされ命うしのふにににたり御身はいかなる人ぞなのりたまへ向後たかいに申合へしといんぎんにのべにけるかく道聞てよこでうち扨源こうのかしんとやとくにもなのりたまはてせんなき命あやうかりし事まづめでたし〳〵我ははりまのしよしやに有ける平井のかくどうほうせうなりまん中我を出家となさんとしやうくう上人にあづけたまふされ共がくもん身に(脫カ)しまずはんぞくにてくらせしかあまり都のなつかしくさんぬ比上り候へ共みつながのいかりおぼつかなくおりをうかゞひ此所にあんやをむすび日をくらし候是天の御引合つな殿も金時も今のぶれい御めんなされてやせんのくせ物はわがたちにかくしをく是をみやげにらい光の御めにかゝり候べしとれいのやつばらをかくし置たるひとま所をみてあればいづくへかもれ行けんきじ

ん一人あけにそみしにいたりほうせうあきれこはむねんとかうくわいすれどかいぞなき公時わたなべみてやく神がくびかきをとし引さげほうせうをともないらい光の御まへにまいりける源御らんしかく道とは御へんの事候そ内々そんしの事なれ共おりをゑざれはたいめんなくむなしく過候なり然に此たびのわさはひふしぎ成しだいかなそのくびらくくわいにさらすべしとごくもんにかけさせけるほうぜうかうべをちにつけむねんのしだいやく神とそんぜす打もらし候去ながら此一きと申ははりまの國の住人ものゝべのだん正道かせとて君も御ぞんしられ候べしものゝべの道おんが一子くわさんのていにゑんとうをしやめん有ひぜんはりま兩ちして罷有といへ共その心ふてきにしておにかしまよりあをんげ道正わうきとておにをつかいちかたすみ友にばつくんまさるくせ物なりそれかしをもかしんにめしつかへよと使を立候へ共あく人にくみせん事道ならすとぞんしはりまを罷立候ぢぶんもうつてをさしむけ候へ共我事共せず切ちらし都に上り候に御めみへ申上べきぢせつもなくむらさきのゝへんにしばのいほりをむすび罷有候へはやちうに來りきづをかうむる由をなげき頼候にそれがしぶしの道をぞんしつなきん時にも相わたさず打もらし候事めんぼくなき次第にて御ざ候去ながら此やつはらなのり候は道かせかけらいと申候いか樣道かせめしつかふきじんをまねきあくれいを一身として世をなやまし候我はりまに下ちやくいたし道かせにしたがいおりよきぢぶんないつうを以申上候べし御いとまと申上るらいくわう聞召とかくはほう正心にまかずべしと小ざくらおどし御腹まき五尺貳寸のしやくどうづくりのやしや切と云御太刀そへてたまはりけるほうせう三どいたゞきつな金時にいとまをこいけんもち太郎召ぐしてはりまのしやしやへと急けるとにもかくにも此八々の心中あつはれふしの手本やとかんせぬものこそなかりけれ

六たんめ

▲其後御父まんけいは御よわいかたぶきてゑいくわをきはめましませは御子げんちん上人御ともない有て西のでんのぶつせんに入らせたまひかうをもり花

をつみ此よはわづかかげらうの有かと見れはひを王
ののべにこがれて跡もなしとかく此身はあだしみの
ゑいくわの花もいつしかにちりて昔と成ゆかん心な
とめそ夢のよにゆふへにしゝてけさは又のべのくさ
ばにおくつゆのもろきは人の命なりとかたらせたま
ふその内にいたはしやまんけいは大ねつきにおかさ
れたまひつゝやまふのゆかにふしたまふらいくわう
はじめ四天王みな〳〵おどろき天やくのかみさまさ
まくすりを奉れ共おもりこそすれげんはなしまんけ
い今をかぎりと見へたまひしが御ちやくしらい光け
んちんほうねんよりのふを召れすでにわれしやばの
ゑんつきこよひとてもすこしまし我むなしく成なら
はほうれん出家の事なればきへ行跡ともかくも思ひ
殘す事はなしさてらいくわうは天下のせい道みち
すぐに國のしをき正しくして君をうやまひきをおも
んし是第一るいうらみなくあには弟をあはれみ弟は
あにをしたいつゝ國のみたれなき樣にかもんのはん
じやういへながくじひはかみよりくだしつゝいへの
子ふだいのめん〳〵をなさけをかけてつかふべしさ
て又はりまにくだしぬるほうぜうを召のぼせかしん
となして國の一つもゑさせよや是一門のはしなれは
あしかれとは思わねどもわが一言をそむくゆへ今迄
かんとうなしぬるぞそれ〳〵四天王ちかふまいれと
上い有おの〳〵わたなべ坂たうらべうすいかうべを
ちにつけつつしんで承やあいかになんぢらゆふ迄はな
けれ共らい光わかけの有時は一めいをかろんし身
をなげうつてかんげんするはかしんの道一家の内に
大事有その時はあやうきをしぞきりをもつて家をお
さめ國にらんげきおこりなば四天王いつ所にかけよ
せ跡をあくる事なかれらい光馬を出しなばわたなべ
跡にとゞまりよりのふを大將にてきんりをしゆごし
申へし金時とも〳〵うつたつてわたなべむかふ其時
はうすいうらへ一身せよひがし卅三が國いつゝにわ
けてほう正かた〳〵おつどなくしをきせよげんしの
家はんじやうにめつぼうなき樣にすへめでたくおさ
むべしらい光よりのぶはいふ迄は候はねと老母にか
う〳〵つくしたまへいひ置事是迄ぞたとへむなし
くなるとてもわれ有ことくおこなふべしさらばすこ
しやすらはんと御めをふさぎたまひしがかなしきか
な秋の比のつらにすだく虫のねと長とく三年酉の八

月廿七日ひつしのこくと申にはついにたかいましませはらい光を初源氏三十三ヶ國の諸大名はつと斗にうれいつゝおくからと様に至迄なげきかなしむ斗になりわたなべきん時罷出今はなげきてもかへらせたまふ道ならずと御しかいをかいしやくしてのへにおくらせたまひつゝむじやうのけふりとなしまいらせなく〳〵やかたにかへらるゝあはれといふもあまり有是はさて置やくじん共はりまの國ににげかへりものゝべの道かぜがまへにひさまつきかやう〳〵にわれ〳〵ひじゆつをつくしさま〳〵なやまし平のかねもりたゝのまんけいか命のきづな引ちぎるといへ共四天王のやつはらうすへうらへ兩人をなややましふせ候へ共かへつて我〳〵きやつはらになやまされくわつきはついにわたなべのてにかゝりむなしくなつて候われ〳〵二人もきやつはらにしふせられん所に平井のほうせうかく道坊がなさけにてよう〳〵にげのびまいりたりとかたりけるものゝへ聞てゑみをふくみそのほうせうといへるくせものははりまのしよしやのあく僧なりまんけいがおいなるが源氏をうらみ有ときく我がしんになさんと使を以ていゝ入じにかへつて我をけらいになさんとあくこんして有つるが此度かた〳〵がめいをすくいあんおんにかへす事さりとはきどくのくせものなりかたてにかへてほしきは此ほうせうとうれしげにかたりける所にあんないのぶし御前に罷出平井のかく道ほつしとてわが君に申上べき事有と申來り候此ぎいかゞ仕らんとうつたへけるものゝへ聞て是天のあたへたまふ臣下なりうれこなたへと申けるほう正おめずおくせず道かぜがまへにひさまつくものゝべみてほう正とはわとのの事か此度都にてのかたうどしうちやくいたし候なりふうきねつき罷出れんたいの御情いつのよにかはわすれ候べしちか比ゆいかいなく思われんされ共おつての二人らい光か一二のしんかつな金時とてもてあつかふたるくせ者かけ合てはかなはしとにげ來り候去ながらまんけいがめいを取て候とかうげんがましく語けるほうせう聞てこはなむ三ぼうと思ひしがいやまてしばしわが心さとられてあしかりなんとてもきやつぼらいけておくにあらばこそと心の中に取なをしいさぎよし〳〵其まんけいだに取ふせたまへは天下は君のての内それがしちりやくを廻し候

へし君御存のことく我はらい光がいとこなりまんけいひだうのつみにふせ候事なんぼうむねんに存るなり此たび御はたをあげたまへ又こゝに一つの手だて有是成あをんきしやう王きをともないらい光へかうさんの體にもてなしなば本より一家の事なればふびんのくわへらい光ぶゆうの兵にて此人々を見ならば悦び一がんかめのふぼくにあへる如く玉をもとめし心ちして相したがい候べし時ぶんをうかゞい三人一どに心を合頼光をさしころしほんもふをたつし候べし此ぎいかにと申けるものゝべ聞てしばら〻しあんしたりしがとかくはわとのにまかするとれん中に入にけるほうせう四人のげどうをちかつけいづれ成共二人なわをかゝり候へちりやくにつくるなは是以てちじよくならずしうにかうあらん時は天道まさ成所なりいかに〳〵と申ける四人の外道あきれはてとかうのへんじなかりけるほう正みてとかくわれ人むつかししうらみこいなく四人なわを付たまへほう正がなはかゝり敵に行手たてあらばいつとてもはぢならす命は君のためぞかし君あれは家たのしくいこくのかんじん百人のまたをくゞりぶ人のかたをこすちりやくなればちしよくとせすこうきにとゞめうやまへりはや〳〵と申けるあをんきせう王き聞てとかくのろんむやくなりたとへしそんする共神つうをゑたるわれ〳〵がちりにましはり火に入てもぬけ出んと四人うしろをならへさし出すほう正みてあゝいさきよき四人のやく神と高てこてに引くゝりいざゆかんめん〳〵と郎等を引ぐし都をさして急けるほう正と有所にていかにめん〳〵都もはや程ちかしらい光と云くせ物はすきまかぞへのふてき者人々のなわゆるかせにかけゆかばふしんのなさんはひつでうなりかけなをし申さんと一々にしめ上て何とめん〳〵今かかりたるなわはあくまがうふくふだうのばくのつな何とくるしう候や我はふどう明王につかゆるこんがらせい高坊とてやく神をたいらくるやくなりと手ごろのこばくねぢ切たゝき立て行程に頼光の御前に引出すらい光を初一ざのめん〳〵ほう正かはたらきほめぬ者こそなかりけりそれよりれんだいのに引出し首一々に打をとしやく神の事なれば今みやといわいたまふ其後四天王はりまへおしよせ道かせをからめ取はく中にかうべをはね天下太平に納られ平井の

ほう正をはりまの守ひとりむしやと名つけせんたいみもんの兵ときせん上下をしなへてみなかんせぬものこそなかりけり

右者太夫直之正本也

うろこかたや　新板

日本兩武將始

初段

つら〳〵四きてんへんのうきよの中ふゆの白雪いつとなく春のとうくわと引かへしらうにやくなん女をしなへで色めきわたるよもの空のとけき國こそ久しけれこゝにしんむ天王より六十三代のてい王をはれいせいゐんとかうし奉る御まつりことしゆんちよくにたへたるをおこしすたれたるを取たて下をめくませたまへはばんみんふかくたつとみ御せいとくちよはんせいとあふかぬ者こそなかりけれ比は八月一日はつさくの御いはゐとてくきやうてん上人玉をみかく將そくにてかふりをならへさしたまへは下たんの右のさにはかうつけの守たゝのまん中其ちやくしせつつのかみらいくはう二男かはちの守よりのふ左のちやくさには二かいどうしなのゝ守うちひで其弟ぎやうぶの善次うちもり其外諸國の侍袖をつらねて相つむるかくてきよゆふ事をはりかく國土せいひつにおさまる事しかしまん中とうちひでかふゆうのはけみつよきゆへ其ちう誠にばくたいなりとてまん中には源氏のせうをたまはり源うぢにふせらるゝ是より源氏といふ事はしまれり扨しなのゝ守をとよ原うぢにふせられ二人に天下のふ將をたまはりける是日本のふ將の初なり時のめんほくよのきこへうら山さるはなかりけりかさねてのせんしには近年きうしうやもすれはみたれけきらんに及はんとする是しゆこけんたんなきゆへなりまん中か次男かはちの守よりのふうちひてか弟きやうぶの善次うちもりをつくしのけんたん仰付らるゝいそき罷下よろしくせいたう取おこなへとく〳〵と有けれは兩人ちよくせんかうふりつつしんでお請を申おの〳〵御前を立たまふされはにやまん中はやかたにかへらせたまひよりのふを近付それ物のあいやくは大事の物兩ゆうは必あらそふならひ有つくしにてうちもりとのましはりばんしをひかへん何とふれいをつくす共かまいてとかむる事なかれおことはいまたはたちにもたらぬ者にたんたいを仰付らるゝ事君よつく此一門をよろしく思召るゝゆへかうちもりはすてに卅に及へりされはおひ

たるを親とせよといふせわ有何事もかれにまかせよとこま〳〵としめさせたまへはよりのふ仰の趣いさい畏候扨少そせうの候事かりそめなから九か國のけんたんしよくはよりのふか身にははくたい過たるやくぎ一つは家のかさり又はしせんの時のためと申五人の若殿原か内一二人申あつかりたく候かいかゝ御さ候はらんみつなか聞召しよまふのたんことはりなりしかしなから五人のわか者共はまん中か物ならすらいくはうしんのはたらきにてもとめたる事なれはよりみつかはからひたるべしらいくはう聞召たとひよりのふのそます共我申上たき折からよく所望仕候つなきん時をさしそへられ然へう候みつなか聞召まことに都にはおことか有といひいまたさたみつすへ竹ほうせう三人けつせんたれは一ちぎなしつくしはたもんのまじはりなりみつから此度のはなむけにつなきんときを兩年か間よりのふにかしゑさせよすてにはやうぢもりは此日くはらくを立たりいそいて罷下れ畏て候と吉日ゑらみ花の都をうつ立ちんせいさしてそ下らるゝつくしになれはうちもりはちくせんの國よこたの城にあいすみよりのふは同國だいふにこそ入たまふさる程に九州の諸侍一つ所にあつまり都よりの兩けんたん初ての國入いさやもてなし奉らんさいはゑ來る九月十三やあんらくしにて月見のくわい然るへしと事のないたん相きはまりうちもりへの使にはとうまの善次よりのふへの使にはとみ岡兵こなりすてに其日にもなりしかはさま〳〵のほうらいざしきのぎしき相かさり今や〳〵と待所へ兩けんたん思ひ〳〵の將そくにてうちつれ〳〵入せたまひけりいつれも出あい誠に御出忝と色々のちんくわをつみかへ〳〵もてなさるゝうちもりしゆえん一入にけにやもろこしにては八月十五やの月をのみもてなす日本にてもちかき比まてはこよひの月をはなかめさりしかんせう〳〵しへいおとゝかさんけんにて此あんらくしへなかされつれ〳〵をなくさみかねみそめたまひしより諸人あまねくけうをなす一しほこよひははれやかに雲ゑにかゝるさはりもなしけにや一じのえいようにはちとせのよはひをのふるとかやげこも上ごもをしなへてのめやうたへや人々と今やうらうゑいとり〳〵にをの〳〵けうをなしにけりうちもりしゆきやういやましにいかによりのふ殿我々

九國のけんたんしよくかうふり罷下なからちせつなくてはほいなしつら〳〵國のていをかんかみるにつくしにはよ國よりあなたの宮れうこなたの寺のおさめ所とてくんやくにあらさるゆうみんのついへ多し此しれうしやれうを半分つゝ召上たみ百姓に廿ふん一のくはやくをかけ其へいせんを以此はこ崎のうらよりすしかいに五りも七りも石のつゝみをつき所々にやくらをしたゝめ置ならはもろこしよりいく万きのせいにてよせ來り候共中〳〵上たて候まし此きいかにとまゆをひそめて相のふるよりのふもくねんとしてやゝ有て仰せらるゝ趣りなきにも候はすしかしなから我か存るたんをも申べしはこ崎のつゝみようがいのためよろしき事とは申ながらじれうしやれうをきやくせしめたみのさいさんをつくさんは何とか候はんそれわかてうは神國しんむ天王より此かた代々あかめてよせられししやれうを召上候はんなふるきをやぶるしんほう次に寺れうと申も其時々のこほり主親おほぢ兄弟のため付をかるゝじれうをついはうせんとはかつうはせんほうのれいをそむくせき惡とや申さん其上近年はきうしうひそんすいそんしたみに定る外にくはやくをかけられん事よろしきやうには存られすかくは申つ去なからふかき御心入も候はゞ御ないたんをはもれ候まし氏もり聞おもしろしよりのふ殿尤きん年打つゝき九州すいそんひそんとはいへ共さのみたみ百姓つかれたる共みへす其うへ是はよのきとはちかひ國土太平のかためのためなれははんみんをくるしめても悦所又しやれうしれう召あけんなせんほうをそむくよしたとひいにしへよりさたまるせんれいたれはとてあしきをよきにかへん事何のはゝかりか有べき何のよしなきしやれうしれうこと〳〵くついほうしくんやくにつとめんな是おゝいなる君のためあしくも心へらるゝ物かないかに〳〵とかんしよくかはり申けるよりのふ聞たまひ何共同意仕りかたき事共こさかしき事なからそもそもふつほうと申は忝も三かいとくそんひろめそめたまひそれよりもろ〳〵のそしたちつたへ來るみのりの道を我らごときのぼんげとして善惡のひはん及へき道ならすことに本てうは神國なれは神をすてんはなかれをくんてみなかみをにごしこかけにふしてえたをからすににたるへしよく〳〵御しあん候へか

くは申つ君の御爲よろしき道にて候はゝ御はからひ候へゆめ〳〵そむきは申ましとさも大やうにのたまへはうぢもりあたるたうりにせきめんししはしことはゝ出かねけるこゝに二かいたうの家のしんかいはせの太田左衞門すいさんかましく罷出りよくはいなからよりのふ公日のもとは神國しうにて候うちもりも一えんにすてさせたまへと申にはあらすしやれう半分さきとらんとの事次に佛法はあまりなくてもことかくへき道にあらすされは大せいじんのこうしもふつほうをはいたんの道とをとしたまふ扨又たみ百姓のあはれみのたん心へかたく候それふけ弓やを以天下を切しきはんみんをゆたかにならしむる其ほう〳〵の爲さし上るへいこくたりされは鳥はたかにとらるゝかやくたみ百姓ははんもつをかみへさゝくるかやくあたりそもはこ崎につゝみいてきなばまつだいまで日本太平のようかいとつくと御くふう候へわかけのゆへ物のこくびやくわきまへたまはぬせうしさよとなんしける坂田の金時は次にひかへゐたりしがあまりに聞かね罷出やあうへ〳〵の御ひやうでうのさしきへひろうをかへりみぬそんくわいさよ尤ふけぶんふ兩道をもつてこつかをおさむる其こうをんにたみ百姓は万物を上へ上るやくなりとて定るおさめ物の外にくはやくをかけんはたかゝ鳥を取ての上にねつみを取ににたるへし扨又佛法の道を御邊おことかふんとしてよしあしのひごんはまうもくかふし山へのせんたちひきかへるか海をわたらんとするにことならすたけに及はぬ大かいのせふみ御むよう〳〵とあざわらつて申ける次にひかへし大河きゝもあへすやあいはせみゝもあかさるくにんにむかつて何のけうけそそうしてげんしのともからは家にそなはるふけいをはけます道にもあらぬ僧ほつしをたつとふ明日にも事をこらは衣をくそくにちやくしたたきかねをかふとゝししもくをたちとひつさけかけ出みつけん二つに打われをくれをとらんせうしさよとことばをはなつて申ける公時聞何けんけの者はきうばをははけまぬとやかた〳〵の弓やことあはれそつとくらへたや我々かちやくす衣はおことらか五兩十兩よろひをきたるよりてこはくしやくにもたらぬへろ〳〵うてには及かたしこへびのふんざいにて大しやにはむかいぞんくわいはき五たいそんほうい

たさんむさんさよけかなささきに罷しされいはせ大河はらをたてこへひ大じやはいさしらずくはごんをはくあふれ者まつたくきよ所をさらせし太刀のつかに手をかけしを八々こはらうせきとをしとむるきんときみてれつさをはゝかりよくわいをゆるせはをのれと火に入夏のむしくひふみをつてすてんととんでかゝるをわたなべ押留人か物にくるへはとて共にくるふ事や有いかに方々さすか弓やの家の生れたちのつかをにきらんする者か女わらんへか水かけくるひすることくなかじやくはいかましき事や有まつこといこんはれすはかさねてさんくわいせしめくひをねするかねちらるゝか命かきりのうてすまひきやうしは此渡邊いたさんいかにわか君かゝるふれいのさしきにながいはせんなしはや御きたく候へ一さのめん〳〵まつひらゆるさせたまへと君の東西相しゆこしやかたをさしてかへりける坂田渡邊かふるまいあつはれ弓やの手本やとかんせぬものこそなかりけれ

二たんめ

其後うちもりはもにすむ虫の我からとおほいなるをくれを取家のこ郎等ちか付きのふよりのぶかそんくわい家のこ共かりよくはいのたん是を其まゝさし置ては二かいたうの弓やのなをりたるへしをしよせきやつらにつめはらきらせそんねんのはれんはやよういい仕れといかりをなすいはせすゝみ出御でう尤にて候きやつはらをふみつぶさんは鳥の水に入より猶やすく候よのはゝかりを存せすはやせん一々にくび引ぬきてすて申さんされ共かれらをうつならはみかとより御とかめ君にかゝらん事を存相ひかへ候たゝ何とそはかりことを以後のなんきなきやうなるてたてこそあらまはしく候扨大河は何と思はれ候そよつくに打うなつきげにいはせの申さるゝことくにくしと思てきをほろほしたりとてもみにむくはんなるきなしたゝけいらくにしかしされはよりのふかいへの子にひけたの五藤次宗時と申者の候かれか親ひけたのはんくはん宗みちと我はないえんに付へつしてしたしくかの宗みちをうらみとんせいのしふんも宗時を一筋に頼むとかき置いたし候間我を親のことく大せつ

に仕候くたんの宗時しゆくんよりのふが手を少もちかへすにせ候かれをつくし九か國のめくらし文をかかせ則宗時を使としてまつちくこの國のちう人あさせ兵部かつくにたちへ一はんにつかはさんされはかつ國は君とむ二のこんせつなれは一みする事は思ひもよらすけつくつかひの者をとめ置こなたへちうしんせんはひつ定しからはよりのふか惡きやくの者となり九州そうどういたすへし時に君よりのふついたうのためと御ふれ候はゝのこらす一み申へし其たせいをもつてやす〳〵と打つふし其後そうもんなされ候はゝ御みの上になんきなくけつくちうせつとなるべしさいはいかのこ藤次御家を望み候かれとかたらはんにしさい候ましとやかてつかいを立にける宗時何事やらんと來る大河たいめんし内々たのみし事を君へ申上たり御禮申上よとともなひ御前にかしこまる是は内々申上候源氏の家の子ひきたの後藤次と申者にて候うちもりうなつき大川か取つきにて御ふんかしんてい聞しうちやくせしめたり何時なり共參られよ是やくたくのさかつきなりとかはらけ取上さしにけり宗時こは有かたき御でうとつつしんてをしいたゝき悦事はかきりなし大川しふんと思ひくたんのあらましかたりける宗時おとろきとやせんかくやあらんとしばししあんに及ひけるうちもりみてかく一大じを打とけて賴上はいへん有へき事ならす此事しおふせなははりまのさよこほりに相そへつくしにて一萬町あてをこなふへしとじひつにくたし文をかき二人のこうけんにもそへはんさせひたすらに賴みける宗時此上は一命を奉ると則よりのふの手をにせくわいふんをそかきにけるうちもりゑつきあさからすとてもの事におことよりのふか使とて此くはいふんをちくこの國あさせの庄司かたへ持て參られよ畏候とちくこをさしてそ急けるあさせかたちになれはあんないこふて立入くたんのめくらし文をさし出すかつ國請取ひらいてよむ其表にいはくつら〳〵うきよの有樣けいはくをのれが光のうすきをはかへりみつあきらかなる月のかけをすかすまつそのことく二かいたう氏もり源氏のゐせいをそねみつゝないかしろにせんとほつすさま〳〵の惡ごんいこんさらにはれかたしをしよせ本念をさんせんとほつすれ共折ふしせいひにしてしんていにまかせす家のちしよくを

すて九州の諸侍へ勢をこいうくる者なり日比のよしみなしといへ共ふしたる者の手をさけ申いるゝ所をかんゑつ有御勢合力にあつかりほんまうたつする物ならは生々せゝのほうしん此事に候ちくこの國あさせの兵部公へかはちの守源のよりのふとかきて有あんのことくかつ國大きにおとろき是はうちもりへのいこんに事よせ九國をかたふけ天下へ弓をひかするくはたてと覺たりとやかて使を取ておさへ二かいたうへと急きけるやかたになれは大事のしゆつらいいたせりとくたんのおらましかたれはうちもりおとろきたるていにもてなしあのよりのふか使をふかくをしこめよとひつたてさせ是はひとへによりのふ我に事よせ天下へのきやくしんなりしこくうつさすせんしとかうし九州の勢をそろへ打とらんと國々へ一々したいにふれにけりきん國の諸侍あはてふためきはせ來るうちもり悦よりのふによりきのせいなきさきにはやくうつたてとたさいふさして取かけ時のこゑをそ上にける時のこゑもしつまれは渡邊のつなたかき所にはしり上り何者なれはたんたいのみちをもはばからす時を上るくせ者其なをなのれ〳〵とよはゝりける其時よせての大將こま一ちんにのり出しなんちか主のよりのふきやくしんのくはたて諸國にろけんかくれなくさつそくにけいはつせしめ國土ゆたかにおさめよとのちよくせんのかうふり二かいとうのきやうぶとよはらのうちもりはつかうせりとのゝしりける渡邊聞て何よりのふかきやく〳〵しんとはさらさら以心へすけに〳〵過しくはいかふの時すこふるをくれを取無念には思へ共一ふんのかいりきには及すよりのふをけきしんに取なしつくしせいをかたらひはちをきよめん爲な此城には坂田渡邊とて人くふ鬼かひかへたりむようの所にはつかうし生をもかへずちごくのせめをうけんよりすみやかに引てのけとよはゝりけるうちもり聞につくきくはしやめか惡ごん鬼にても人にてもたゝ今一々に首切ならへみせん是へ〳〵としきつてさいをふりたつれはうきたはねかいもせの一たうせんちんにかけみたす御所にはとんた一のゑもんまの一門てきをまはしうつて出おふつまくつつこゝをせんととたゝかひけるよせてはたせいやかたはふせいといへ共其比しやばにてごづめづとさたする坂田渡邊ひかへぬれはよせてはおゝく

そんすれ共御所にはさらにたじろかすうちもりみてとかく此いくさつなきん時二人のやつはらをたにうつならは一しにせうりうたかひなしとぐんせいの其中にこゝそと思ふゆうしを四人すくり出すまつ一ばんにはみつのの大八國久長刀のめいしんなり同せうごんねんのあらいなは幷に大たてこん藤次こん藤みかれらは五き七道に其なをあらはす大力のくせ者ゑ物〳〵をひつさけ罷出我々はゆいしよなけれはなのるべきけみやうじつみやうもなしたゝ人の首を取事をゑたり日比あら人神のことくさたいたす坂田渡邊殿とやらんにそつとけんさん仕り今生の思ひてにいたさんとこゑ〳〵によはゝりける坂田渡邊是を聞何めん〳〵は人の首取事をゑたるかうのむしやとや扱なのなき者とはきつねたぬきのはけ物か人にあらさるちくるい共とのさんくわいほんいにあらね共せひに及はぬうきよの物中わたなへのつな坂田のきんとき是に有望み次第にかけ出よとさも大やうにひかへけるみつのの大八聞よりもくわんたいなるざうごんいで物みせんと長刀水車にまわしうつてかゝるきん時みて扱もまはる長刀かなむさんやさこそ心をつくしならひたるらんといひもわへすこむ長刀をおどりこへうてはほね首ほねゝつかみ是わたなへとてなけれはせうこんねんのあらいなは一丈あまりのつげのほうをふり上たゝ一打と打をゆんてへひらきむすとたきぼうばい取又渡邊とてなけわたすこん藤次こん藤三こはしなしたりとはがみをしてかけよるをかれらは爰にてしまふそとほうふり上おとりあがつて打けれは二人共にらつくはとちりにけり爰にとよ原の家の子いはせの太田左工門時もと大川庄司より國は二ぢんにそなへいたりしかしつ〳〵と立出いさきよしきん時うたれしものゝけものゝけうやうにたむけの太刀たゝ一打今生のいとまこいそ念佛申せ坂田とはばりかゝつてはつしとうてはきん時ほうにて受とめひつはつしうては太刀にてうとうけつからんすこをせんとせりあいけるうしろにひかへし大川此由をみて見事なりいはせすきをあらせすうち立よいで我渡邊か首とらんと二人か切むすふ上をひらりととひこへ切てかゝれは源五心へたりとうけなかしたゝきたてまくりたて火花をちらしてたゝかふいはせ本よりかうの者きんときかほうを二つ三つに切おりけ

るこはむ念とゑしやくもなくつかまん〳〵とかけめくるやゝ共すれはきん時あやうく見へにけるつゐにはよはこしむずと取もはやきんときか物なりとひつかけねちたをし上にてうと打のり見たまへやわたなへ殿爰えは此ていなりちか比ふれいに候いはせ殿としはらくいきをつきにけり源五みてこはきんときにをくれたりやあこへん一人はめいとのたひのせんなからんつれの有時いそかれよなむ阿みた佛とゆんてのたかもゝうちはらひのつけにかへるをおし付いさいとまとらせんきんとき十方しやうとこしふをんとこゑをそろへ首打おとししなしたりと打わらひひつかへす坂田渡邊かふるまひきせん上下をしなへかんせぬ者こそなかりけれ

三たんめ

其後ちうやのたゝかひによせてはおほくうたるれ共城はちつ共くつろかすいつれもあくみはてにけりここにひごの國のちう人國山兵へたゝひろひせんの國の赤ほし庄司國としは西のてのせめ口にやく所をならへいたりしかある時一所にくわいかうし國山こゝゑになつて何とか思はるゝ赤ほし殿せんしと有により人なみに是迄はよせたれ共よりのふのきやく心とはたしかなるしようこもなし是はいつそやあんらくしにてはこ崎のつゝみのいこんりんけんなりとかうしわたくしのしゆくいをはれんためと覺へたりせんなき惡いにくみし後のなんにあはんよりいさや引てかへらん國とし聞我もさやうに存るとて其よのねのこくに兩人共にちんをはらひ國もとさしてそ三重かへりける是を聞我さきに〳〵と皆本國にそ引かへすうちもり大きにおとろき今ははやせめ口にもたまりかね本城にかへり家の郎等近付きけはちくこの住人松崎兵こゆきひて大はんやくあき此ほとていとよりかへりたるとなりけれはなにおふかうの者よりのふと一みしては事なんきたるへし是をはへつして賴まんと寺島與一國むろ小二郎にいさいこまかに相しめしまきぬ百疋もたせちくこの國へそ三重つかはしけるはや松崎になりしかはあん内こいて内に入ゆきひて出あい是へ〳〵とせうじける時に兩し畏二かいたううちもりよりの使にて候まつ以なか〳〵の御ば

んつゝかなく御きこくちんてうのぎに候したかつては源のよりのふきやく心のくはたて候ゆへ九か國のせいをもよふしたいぢせしめんとほつし候所にそんしの外て合のいくさしそんし候それに付きこうの弓やの道内々聞つたへたり此たひ國の勢をもよふしたさいふへのせんちん賴入候是は御きこく悦にしん上いたし候とくたんのまきゝぬつみにけるゆきひてもくねんとしてやあけんけのきやく心とは心へかたく候きんりよりのりんげんにて候かをそれなから其御りんしをおかみ申さんつかひ聞事もおろかや大事の御りんし我らこときのほんげの者いかて持めくり候はん望ならは只今參りおかまれよいかに〳〵とつめかくるゆきひてりんけんならはせひもなし私なるたんたいのけち此ゆきひてはいさしらす此引て物は何事そ持てかへり此むね申せとさしきをずんと立を兩しゆんてめてに取付あつはれ御へんはくわんたい者ゆかすとつれで有べきかとひつたてんとすれ共ゆきひてちつ共はたらかすこさかしきくはしやはらかなと二人共にまつさか様に打たをし寺島をは首ねち切國むろをはたかてこてにいましめいかにかた〳〵我ほのきゝたる事有是はうちもりかよこしまならん我我か家はげんじの御せんそ六そん王の御をんふかくかうふり一めいをぼつす共いかてみつかて有へき馬物のぐ萬御ふじゆたるへしのこらすしん上仕らんと藏をひらき相もたせ家のこ侍引くしたさいふさしてそ三重急きける城にもなれはゆきひてまつさきにすすみ是は此國の住人松崎兵こゆきひて御かせいに參て候とたからかによはゝりける折ふし賴宣やくらに上りとをみじおはしますか此由を聞召それ〳〵こなたへ承候と門をひらき城の内へ入にけり御前に畏我はきよねんよりざいばんにて二三日いぜんに罷歸候所に二かいたう方より國の勢をもようし此城のさきかけいたせとげちくはへ候間君の御むほんにては有まし是はうちもりかわたくしならんたとひ何にても候へ御せんそよりの御よしみいかてかよそに見奉らんをそれなから御一所にあんひをきはめ申さんはんたん御ふしゆたるへしとぶぐの品々しん上仕り候とつゝしんてのへらるゝ賴宣聞召申さるゝとをりうちもりかよこしまなりしさいはしつかにかたるへしまことの時の心さしとかうごんごにのへらるすさらは

しん上のふくを一けんせしめん承候と 三重一々次第
につれそなへける花やかなりけるしたいなりそれ弓
取の六しのしなその家々の色のほろ二はんにゑひら
三はんにこんたい(本ノマヽ)兩ふのゆかけなり五しきいろとる
こしはたや五はんにあふき六はんに尺のむち天ちく
よりもはしまるけにやまことにもろこしのせつせた
いしいにしへは一つのむちのとくによりこくうをか
けるはやわさのきめうをゑさせたまひける比しも冬
の事なれはこのはみたれて風さむく木々のこすへも
しろたへにははにふりつむ雪はたゝ白はたやらんと
うたかはるすてにしこくになりしかは御大将よりの
ふ青地のにしきのひたゝれに花折むすふ小くそくめ
しさしきに御出有けれは坂田渡邊其外家のこわか侍
ぎゝどう〳〵たる有様つゐに天下のふ将はげんしの
家にそなはらんと行すへかけてたのもしきヲキ時に
御大将いかに行ひて此所のようかいのていは何と候
そシテ松崎承り此きりかたにの城と申は九州にたくひ
まれなるめい城まつ東南はむばしつみかぬまとてこ
んりんさいまてそこはかりかたきなかぬま國土のせ
いかあつまりふし山を切こみ〳〵候共やはかうめほ
し申へしヲキよりのふ近比しうちやくせしめたり扨
にしはシテさん候御らん候ことく大山かゝとそびへ
みねはやいばを立たることくにてしうのほく王か
はつ疋の天ばにてもおとしゑかたきけんなんにて
候ヲキよりのふ御ゑつきあさからす北の方はろくち
にてへい〳〵たるかいかにシテされは北は一二町か
程へいちにて候へ共すへは一き打のほそ道さるこか
しかたけとてめいよのなん所をかゝへ候いてを二
三十きさしむけたまはゝ百萬よきにてもやふりか
たき悪所なりヲキ大将聞召四方共にきれかはつたる
なん所もとより兵らう馬物のく御ふんのかいりきに
てふそくなしさらは心さしのをくり物を一見せん
それ〳〵わたなへ承り候と一々したいに相しるすそ
れものゝぐの品々春はまつさく小櫻や糸火おとし大
あらめよはなまづおのほしかふと君か情にひかされ
つゝうつろいやすきむらさきの糸はさま〳〵おとし
けの四方しろの甲をそへ黒糸黒かは赤かはどうか
はらぬいろはいくちよと松にからまるふぢなはめす
くなる御よのかゝみにはにこれる悪をあらいかは白
糸おとしすし甲ほし白くはかたきん甲卯月さ月のす

へかけてさくうの花のよろひの色いつしか秋とならのはもみちにまかふにしきかは火おとしをもたかもへぎとうくちはからかはこかねさねのはらまきせんたんくさりあやおとし竹に虎のさうのこてしゝにほたんのはいたてひやくたんみかきのすねあて九寸五分のよろいとをし兵こくさりたち刀黒さやしやくとうこがね作りのうち刀しらえの長刀しらきの弓ぬりこめとかりやそめはのそやゑびらやなくひしゝとらくまのあをりも有扨又あさぎくれなゐむらさきや色様々のたつなの品しろふくりん金ふくりんなし地まきゑかなかひすへたる家のくら色々のあふみをそへ花のことくにかさりける弓やのいきほひ此太刀かげの光にてきを千りに切なひけ天下太平國土あんをんめてたき共中〳〵申斗はなかゝり

四たんめ

其後うちもりはきうしうのせいはくはゝらすあまつさへ松崎はけんしに一みしたさいふの城へ入ぬと聞此上は何と思ふとかなふまししよせんろしに關をすへよりのふをふせきとめ其内にていとへ上り思ひのまゝに申しつめんとせ川兄弟に三百よき相そへ此國をばたのかうはくつきやうのようかいすいふんふせきとゝめよ承り候としたくにこそ立にけり時にひろさはや二郎ひさまつきたとひ千きに千きにて相かため候共坂田わたなへしたかひ候へに打やふらんはひつ定よりのふつくしくたりの宿ぶせんの國かさきの里しらきの藤太はとんよくふたうの者にて候へはたからにあかせたのまんにいなとは申候ましうちもり悦是にこしたる事あらしはやとく〳〵といへの子郎等相そへ其身は都をさしてそ三重急きけるされはにや頼宣は城のようがいけんこによせてをそしとまもらせたまふ所へふせんの國やすたの三郎はせ來りいまた聞召れすや二かいたうさへきつてはやきらくいたされ候以の外の御ゆたんと色をちかへて相のふる頼宣聞召扨はくはらくに上りいるかきやつにさへきられてはかなふまし乍去此城をてきのかたへとられてはなかき弓やのきすならんいかに行ひて我は都へ上るなり御ふんは城にとゝまり相まもつてたまはれはんたんたのむいかに坂田渡邊いそいてよういせ

れよ渡邊承り大せいはろしのなんきしのひて被出候へと坂田渡邊斗御供にて城を出させたまいける御大將渡邊も一めかさにてかほかくしよにひそかに出たまへきんときあらいかはの物のく四尺八寸の太刀よこたへ白はたを打かたけゆらり〳〵と立出る渡邊みてこはいかにきんときしのぶ道なるに其はたは何事そけしからぬ有樣也きんとき聞待かくそくをき太刀をはきたるかいてけしからん大將の都入に御家のはたなくてかなはんや渡邊あらもとかしふんさうおうの出立有よろひぬきはたをもおさめたまへ公時けにあやまつて候しからは此はた城におさめやかて追付申さんとかへりけりかくて渡邊は大將の御供申いそけはきんときもあとより來りかくて程なくをはたのかうにそ付にける待うけたりし者共すはや是こそよりのふよと時のこゑをそ 三重上にける渡邊は少もさはかすろしをすくる者をみて時のこゑは心へすゑの倉十郎聞よりもろしをすくるも人によるさいふは渡邊のつなあれなるは源の賴宣にてましまさすや渡邊我等は諸國をまはるあき人なりと申所へ公時はたをしたて來りけるくん兵共あき人の物のくちやくしはたをもつ物かなと一とにどつとわらひける公時みて是そあき人の正しんけんしの郎等坂田の公時と云あき人なりいてをのれらにわらはせんとさきにすゝむゑの倉をかいつかみとうとなけつゝくやつはら一とにとつと 三重きりくすし渡邊はかけなるこまをはい取君をのせ奉りいそきける程なくかさきの里にそ付にける 藤太はかねてよりうちもりに賴まれ內々心かけし事なれはする〳〵と立出こはおとろき入たる有樣まつこなたへと申せは渡邊聞しさい有てしのひて御上りなりこよひはこゝに御あかし候へと藤太か內へそ入たまふていしゆよろこひかん所に入ひろさはに近付よりのふ坂田渡邊共に只今つかれて候いつれも大しゆにて候へはふし候はん所を打たまへあきしけ聞誠に此けひりやくにてしそんせはかれらとつくとやとりたる時分天上よりほこをおろしさしころし申さん是そんのまうたいれうかそこくのなんこくを打しよりはしまりしなりいかてかあまし申さんすいふん酒をしいたまへ心へ候とてうしかはらけゆうくん共に取もたせりよしゆくの御とせん御はらし候へと色々にもてなすされはにや賴宣公酒にあいし

うふかきといひ又はひしよかしくといひつゝめと色はくれないのそゝろにうきたつ斗なりことに坂田は大しゆなりさしうけ引うけすてにしゆえんに及ひけるされ共渡邊ちう共くつろかずをそれながら大じをかゝへさせたまふ御みにて御しゆゑんは心へかたしやあ公時酒にみたるゝも時によりゆたん大てきのもとひいかに藤太しさい有て御ようしんのみきりなりいそいて酒を入られよていしゆ聞御ようしんも所による御けらい同前の某に何とて御心をゝかせたまふ御みも一つきこしめせと打わらいて申せはゆうちよ共心へこは御情なし柳はみとり花はくれない色をもかをもしる人そしるせめては一つとゆんてめてよりすかりつく渡邊大のまなこにかどをたてやあ藤太か様のしふんはのまんといふをとゝめんこそしんしつならめそゝろにしいるは心へかたしいか様内にかいしん有と覺へたり女はらは何事そひろうなりと一とにどうとつきのくるあるしあんにさういしきもをひやしてにけさりける公時きゝかれらことをやつめに何ほとの事か有へきげう〳〵しの事共やと君御やすみ有けれは公時も枕引よせせんこもしらすにやどりける渡邊よりのふの御すかた公時かていをみてあつはれ人の飲ましき物は酒なりされはもろこしのをんせいきうかことはに酒過ぬれはしのうはしよくをおこたりかくしやはかくにすゝますふしは弓やをわするほんなうのなかたちゐのけし水といましめぬるもことはりなりさしもめい將の頼宣公日本のはんくわいといはるゝ公時もてきみたれ入はやみ〳〵とうたれなん渡邊か生れ付たるすいさう左のうてそゝろにかゆく覺ゆるはいか様しさい有へしとそはに有たる弓やおつ取やとりたるていにもてなし事をすましてゐたりあんのことく天上に物をとしきりなり渡邊すはやときつと見あくれはやいはの光しきりにて頼宣の御うへへ大のほこさかりける渡邊こはいかにと矢とつて打つかひやいはの光をめあてにそら様にはなちけれはてこたへはたとして大のおのこほこ持なからをちにけるをやかて二刀さしこをす是におとろき頼宣御めをさましたまへは公時もをきにける渡邊かやう〳〵のしたいなりたゝ今てきみたれいらんす間ゆたんしたまふな心へたゝと待かける渡邊大をんあけ思ゐのまゝにしおふせたり首取たまへとよ

はゝれはていしゆもひろ澤もこはめてたしと太刀引そはめかけよるを公時二人共にむすとたき何かめてたきそをのれはらしおふせたるとは天上よりほこをおろせしおのこをしとめたりなんちは何樣しさい有へしと中にひつさけ都をさして上りける公時かゆう力渡邊かちりやくきせん上下をしなへ皆かんせぬ者はなかりけり

五たんめ

其後うちもりはよを日についていそけは程なくらくやうになりしかはすくにあにうちひてやかたに立入うちひてみてつくしの事おほつかなく少もいそけとたせいをくたしつるか御ふんかちゝを上りしゆへ道にてちかいて有つらんさるにてもやうすはいかにと有けれはくたんのあらましのこらすかたりけるうちひておとろきこは一大じ道にちかひし事なからのりかゝりたる事なれはひきのほうりやくめくらしいひしつめん常々（本ノマヽ）かけ大臣になれしたしみしはか樣の時のためさいほうおしますけいしやううんかくあひなひけせうりまつたくほんまうをたつすへし二かいたうのいへの大事此たひなり佛神のかいりきをたのまんしよししよさんへいのりの使を立へきしあんとつくとめくらせと有けれはさ川の庄司はもくねんとしていたりしかひさ立なをしあゝかなしきかなやかへつて御ばつは有共何のり生か候へき次にせかきのめくらし文あくしはあらはるゝ物にて候へはけつく思召外なるきあつて御なんきに及ひたまはん事けつせん又くけ大臣の御したしみを頼ませ給ふ事も是はと天下こつか大事のさたさう〳〵其せん候ましこゝを以てあんすれはけんしはんしやう御家のめつはうと申けるうちひて大きに立腹しつら〳〵此せんきといつはうちもりをたてんためうちもりをすては何のないだんか入べき身をすてゝも忠をなすはしんかのならひおくひやう神にひかされあらさる事をはき出すはらうまうしたると覺へたりきやうこうしゆつしむやくそこ罷立といかりけるもりのりめんほくうしないねたる所を罷立よの中今は是まてみをすてゝも忠をいたすはしんかの道とは尤なりつたへ聞もろこしのごししよはしゆくんこわうふさの惡をいさめか

ねみつからけんにふして一めいをとゝむいこくほんてう所こそかはる共いさめにめいをとゝむもりのり
か忠の道ふひんと思召れはうちもり公御生がい有二
かい道の御家を御たて候へほくしうの千年ふゆうの
いつときも同したのしみ一人の惡きやくにてはんみ
んをなやまし給ふあさましさよといひもあへすたち
をぬきわれと首をかきおとしゆふへの露ときへにけ
りのりもりかさいこのていかんせぬ者こそなかりけ
れうちひてみてにつくきやつめかしはさらうまうし
たるにうたかひなしとかくへんしもきうにけいしや
ううんかくとしめし合よろしき樣にそうもんせんま
つうちもりが上りしたんけんしかたへつゝめと其身
は九條殿へと急きけるさる程につくしのらんけきら
くやうにかくれなく折ふしまん中は御びやうきたる
によりらいくはうの御前ほうしやうさたみつすへ竹
を召れきうしうにてうちもりよりのふくはくしつい
てきうちもりにつくし侍一みしよりのふうたれぬる
とさたするか坂田渡邊を相そへくたしぬれはよもさ
はあらしと思へ共はんくわいとてもうんめいつくれ
はせひもなしすてに二かいたうかたより二百き三百
きつゝぬけかけはや一二千もつくしへ下りぬるとな
りこなたよりせいをつかはししかるへし其よういい
たされよほうしやうさたみつすへ竹めとめをきつと
見合御ちやうのことく坂田渡邊御供申候へはよりの
ふ公にをいては何の御つゝかも候ましたせいをさし
つかはされんな後の御あやまりになり候はんたゝ我
我三人罷下り候はゝをそれなから二かいたうか二千
三千のせいも我々三人もあまり事かはりたる事は御
さ候まし源氏の御弓やに少もきすはつけ候ましとた
た一筋に申上るらいくはう聞召けに〳〵此き然へし
いそいてうつたてとのたまふ所へよりのふ御やかた
に入せたまへは皆是は〳〵と斗りなりらいくはう御
らんしおことはうたれぬると聞ぬるかつゝかなきこ
そめてたけれ扨やうすはいかにと仰けるよりのふさ
ん候すてになんきに及ひ候ひしと坂田渡邊かはたら
きにてのかれ來り候とちんせいにての次第いとこ
まやかに御物語有けれはらいくはう聞召二人のとも
からかちうせついつもの事といひなから此度はへつ
してしうちやくせりとかくきうにゑいふんにたつし
ちよくさいをあふくへしとのたまふ所へ五條の中將

ちよくしとして扨も大内のせんしには二かいたうきやうぶ善次うらもりよりのふきやく心の由そうもんせしむ然共一方のうつたへ斗にてとかにおとさせたまはんなけんさいの法にあらすよつてさう方召合られりひめいさつにるいふんあらんとのりんけんなりと仰渡さるゝらいくはう承りをそれなから明日早々さんたい仕るへき由然るへき様にそうもん頼み奉ると謹しんてのへたまへはちよくしは御いとまこい有たいりをさしてあからるゝ其後らいくはう人々を近付扨ははやうちもりそうもんをとけぬるなさきほとよりのふか申如くならはあやうき事はなけれ共かれさへきつて上るほとの所そんなれはいかやうなるたくみやせん申まてはなけれ共よつくしんいを定め申ひらけ公時承りこは御てう共存せすこなたにあやまりなくして何の申ひらきかあらん千に一つも天めいつきつみにしつまは二かいたう兄弟をしやはにのこしをき申さんやむたいにくひをもきおとしるんまか前のみあけとしてうきよのくかいをはなれんなたゝ一ねふりの夢ならんとよにあんかんとそひかへけるらいくはう聞召いさきよし公時天にわたくしましまさねはおとろくへきにはあらね共二かいたうは君の御覺へめてたくけ大臣になれしたしめはひいきのさたにて思はさるひやりも有やせんよし〳〵其たんに及んてけんし一たうめつはうと相きはめ此らいくはうとかた〳〵五人一所に思ひ定めはよの中におもしろきけんふつの出こんとにつこと笑ひさしきをたたせ給へは四天王ひとりむしや御うしろをつく〳〵みをくり扨も〳〵頼へきしゆくんかなたゝ今の御一こんを承りもし此もんたうにまくるならはみかともたいりもいはせはこそくけ大臣北面けくわんにいたるまてかたはしよりせうきたをしのはらひ切玉をみかくぎよくでんをたちまちうしほのうみとなし惡きやくふたうの二かいたうの一門其外一みのやつはら一々に首引ぬき立ならんてはら切てに手を取くみして三つの大かをさんさめかいて渡らんに何のしさい有へきといさみすゝむ四天王ひとりむしやかしんていいさきよしとも中々申はかりはなかりけり

六たんめ

さる程に大内にはかねてよりの事なれは御さいたんの其ため時のくはんはくすかはらのさねより公ちよくをかふむりきろく所に御出有けれはくきやう大臣れつをやつてさしたまふひろひさしの左のさには二かいたうしなの丶守うちひて右のかたまん中のさにはひやうきにてさんたいなき故ちやくしらいくはうなをり給ふ其外國々の諸侍るほしを列ね相ならふよりのふうちもりは本人たるにより両方に相むかふ御しらすにはさう方の家のこ郎等いへ〳〵の一大事と我も〳〵と相つむる扨いなはの守山べのもり國しゆりのしんたむろの家ひろちよくをかうふりらうせきあらはしつめんとうてをさすつて両かのあいにひかへけるまことにしたいのきしきさしきのていき丶とう〳〵たる有様ふるなしこうのへんのかつてもたやすく一ごんも出難くはれかましさは限りなし時にうちもり一つのそせうをさし上るうせうべん有なり是をよむ其ふんに曰くけんぼんのともし火ちよくさいをあふき奉るの趣扨も此度源のよりのふまう惡を相たくみうちもりを打ほろほさんときうしうの諸侍にぐわいふんのまはし候間是わたくしのいこん斗には候まし事をうちもりによせ九州をなひけきらんのくはたて時をうつすへき所にあらすと存ちよくせんなりとかうしつくしせいをもよふし相かこみ候へはさんろより忍ひ出くはらくにけ上り候つら〳〵此しゆくいのをこりといつは諸侍くわいかふのさしきにてうちもりよりのふにむかつてそれもろこしよりわかてうへ取かけし事わうこより度々なり今以有ましきにもあらすちんせいのたんたいかうふりしこそさいはひ箱崎のつよりすちかいに石のつ丶みをつかせなはたとひなん百萬にてよせ來る共中々あけたてましくつきやうのようかいと内たんいたし候へはよりのふもつての外にきしよくをそんしそんくはいなる惡こん家のこまてらうせきに及ひさしきをけたて罷かへりあらさることをたくみ候是ひとへにてうてきのしんいをふくむのいたりよく〳〵しつふ御せいたんこいねかふものなり二かいたう兵部の善次うちもりとつ丶しんて申とたからかにそよみあけけるくはんはく聞召いかによりのふうちもりか申ことくはこ崎につ丶みをつくならはしせんいてうよりよせ來るにくつきやうのようかいたるへきに何とてないた

んをはけつせさるそまつ此たんまつとそうもん仕れよりのふさん候つゝみの事もよろしき道とは存せしか共しやれうじれうを召上其ざいさんを以つゝみをつかんと申候間それ日本は神國しん道をやふらん事もつたいなしことに以ふつほうと王法はいつはんにしてわてうの守りなかに是をやふらんは大なるせき惡佛神のめくみきれ國にわさはひおこらんとぞんし扨そせいしとゝめ候とけんきよくのたまへはうちもり一くにつめられとやせんかくやあらんとあんしけるあにうちひてもたへかねこはあたらしき事共かないかによりのふ佛法なきとてわさはいおこらんやそれもろこしにはこかんのなんていのきように佛法はしまり日本には人王卅二代やうめい天皇の御宇に佛法わたるいこくほんてう共に佛法なきさきのてい王はわさはひおこり皆國をうしなはんや此りきつとあきらめよらいくはう聞たまひちか比に候うちひてそうして物にはじりの二つそなはれりそれ上代にはもんじなくかつらをむすふことをあきらむ然るにいにしへはもんしなくても事たりし間もんじはいらすとてやめなはおほひなることかきまつ其ことく昔は佛法なかりし間今もいらすとてやふらはわさはひをまねくなかたちそも佛法のむねとする所はせきあくをやめせんをおこすをもとゝすはんみん一せんをおこなへは一けいをやむる一けい家にやむるときんははんけい國中にやむるいなから太平を致すとはそうのかせうしかふんくはうていにこたふることはなりここを以みるときんは佛法と王法は鳥のさうよく車の兩りんなれは何佛法をすてゝこくとゆたかなるへきうちひて聞てそうしてみちといつはたうかにもじゆたうにも惡をやめんをおこなへといさむるはめつらしからぬ事然共しゆはさしあたるいかんにちようとうせんのりを以道ひく佛法はめにみへぬらいせをこんほんとするゆへきよせつを以てたみのさいさんをついやすゆうみんたり國のかいとはなる共ゑきあらしいかに〳〵とさをうつてそ申けるらいくはううちうなつきをろかなり〳〵それ上代はしのうこうしやう家々のかげうをつとめなから道をゝしゆ末代の今は人の心かたましきゆへしのうこゝしやうの外へつにしゆしやとたつて道をゝしゆ是もいふくをおらす作らすしてはんをしよくす則ゆうみんといはんや

然共そうもしゆしやもなくてかなはぬ物なればはんみんあけてたつとふに御ふんあたらしく佛法をはらひすてんとは天まはじゆんのすゝめならんされは佛法をやふりてたらまちそんかいせられしもの天ちくにてはたいば大たうにてはくしやそんしやわかてうにてもりや是せんたいのしようこなり御へんもむようのことをあくこんし五たいたち所にそんばうしむ本ノマヽけんのせめおろしとことはをはなつてのたまへはうちひてたうりにせめられかさねてつかはんことはなき所にくはんはく聞召さう方共にせんなき佛法のろんはむやくやあうちもりよのふかつくしの諸侍にくわいふんまはせししようこばし有か中々しようこ御さ候よりのふか家のこひけたの五藤次宗時と申者にくわいふんもたせ是なるあさせの庄司かたちへつけしを有國おとろき則其使の者召取くわいふん共に某かたへちさんいたし候よりのふ聞給いや〳〵其五藤次はしさい有ておひ出す扨其惡人をかたらひ某か使に事よせ九州の諸侍をかたふけて有けるなうちもり聞されはつくしまて召つれたる五藤次をにはかにかんとうしたるとはいはゝたつへきそらことばかいかに命かをしきとてあさましさよと大こゑ上てのゝしりけるよりのふちつ共さはかす御前にてのたかこゑひろうなりうちもり天なまことのかゝみにて少もかんきよく有ましきしよせん其五藤次めにすいくわのせめをあて誠いつはりをあらはさんに出されようちもり聞五藤次を召こめ置といへ共なんちかきやく心のいくさに取まきれいつく共なくちくてんすせんする所おことかしひつのめくらし文有上は是に過たるしようこはあらしとさし出す頼宣こなたに覺へはなき物をとさしひらきたまへはけにも九國へのめくらし文まかふ所もなきじ筆なれは是はいか成事やらんとせきめんしてこそおはしけれうちもりみて何と候よりのふ殿さほとの事をいたしなからよくもあらそひたりそれかふしの本いかとつめかけ〳〵申せは兄うちひてから〳〵と打わらひゝかにらいくはう二かいたうかぶつはちあたりたるか源氏のともからか天はつあたりたるか扨もみことの有様やさたのしさいはきはまつたりあれひつたてよとげちをなすしかる所になみいたる侍の中よりるほしひたゝれちやくしたるおのこ立出某はいにしへ源氏の家に有しひけ

たの兵衞宗道と申者にて候かしさい候てとんせいのみと罷成候か今日兩けのろんに付少申上たき義候ゆへかりに男とへんしまきれ入候とゑほしひたゝれかなくりすてけれはくろみかへつたるほつしなりされは諸國をめくると申せ共ふる里なつかしく都へかへり候所に子にて候五藤次よにゆゝしけなるていにて行あい候間しさいを尋候へはさん候四國にて頼宣のかんたうかうふり候所にふりよに二かいたううちもりへ召出され頼宣のしゆせきをにせもちて參るほうびことの外にあつかりかくのていなり猶事をしつまれははりまのさよの庄をたまはるやくたくなりと申某人にはめてたしと申扨ちう代のしゆくんをつみにおとしをのれゑいくわにほこらんといたすこと子なからもちくるいと存罷出うつたへ候五藤次は二條通に候とて公時と打つれ御前を罷立じこくうつさす御しらすにひつすへ父の入道なふしやつか首にうちもりのくたし文かけたり公時心へたりとばい取御前にさし上れはうせうへん請取よみたまふ其趣にいはく一大事相頼所にまつたふ忠節たるによりさしつかはす下し文の事はりまの國さよの庄並に九州にて一萬町あておこなふへきものなり是はかへり忠のをんによつてくたんのことし二かいたう兵部の善次うちもり同かしん岩せの太田左衞門ときもと大河庄司兵衞より國ひけた五藤次宗時殿へとたつからかによみ上たまふうちもりあんの外なれは色をちかへてさしうつふくくはんはく御らんし扨もそれなるほつし一人のこをすてまことの忠をつくす是日本のけんしんとやいはん五藤次をは八つさきにもすへけれ共入道か忠のほうひにくたし賜はると仰けるらいくはう御らんしやあうちひてふつはちたちまちあたりたりいかに〳〵とのたまへはうちひて今はのかれぬ所と兄弟めくはせし太刀をすはとぬく二人のおさへこはらうせきととゝめんとするをゆんてめてへ切てすてらいくわうへうつてかゝるをやさしやと二人共にかいつかみちつ共さらにはたらかせすくわんはく御らんしさたのしたいといひ御前のらうせきといひ兄弟共にせつふく申付よ承り候と御前をひつたつる二かいたうか家のこ郎等一とにとつとくつるゝを公時すかさす一々に切ふせ其後　しれいゑいふんにたつし源氏の弓や矛さかへけるすへはんしやうめてたさよ

共中〳〵申斗はなかりけり

作者　岡五郎兵衛
日比谷横町　又右衛門

源平武將論

第一

わたなべ命ごひ

それたいへいには文をもちい、らんせいにはぶをもつてす、さればふんふはすいはのごとし、爰にんわう六十八せ、ご一でうのゐんのぎやうにあたつて、源のらいくわうのかうけんに、するがの國のぢう人とを〳〵みのかみうすいのさだみつとて、弓とり一人おはします、しかるにさだみつ一とせ、大ゐ山のしゆ天とうしをたいらけ、其なを天下にあらはし、ぶんふりやうだうよにこゑ、かたをならぶるものもなし、しかのみならず御子二人有、あねをばかつらのまへとて十五歳に成たまふ、すいたいかうもん（本ノマヽ）代にすぐれ、わざいかんざいにちやうじ、さればおもひをわかのうらなみによせ、心をしきしまのみちにがうせり、つきはおとづるとて十三、さて又家のかうけんに、いばらの五藤太たゝかげとて、おもてにくぞう顯はれ、まなこの内人にすぐれてすさまじく、大ちからのかうのもの、かれを家のしんかとして、めてたくさかへおはします、うらやまさるは三重なかりけり、是は扨をき其頃みかとには、けつけいうんかくめしよせられ、扨もこんどらいくわうあひはて、天下のぶしやうどうなし源平をゝくめしあつめ、きりやうをゑらみふ將をさだむへし、それ〳〵みなみなめしよせよとのせんじなり、かしこまり候とて一々次第にふれにける、扨其後にざい京の源平みなみなさんだい申さるゝ、ひがしのかたには源家みなもとよりのぶをさきとしてげんじのぶるいしかふあり、にしには平のたゞつねをはしめ、平家の一ぞくなみいたり、上だんにはくぎやうでん上人、そでをつらねておはします、はれかましさはかぎりなし、かくて平家の大將たゞつね、すゝみ出そうもん有、扨もこんど源の頼光しきよの後、ふ將すでにたいてんすそも〳〵我等のせんぞと申は、にんわう五十代くわんむ天王代（本ノマヽ）五なん、一ほんしきぶきやうかつらはらのしんわうのそん、たかもちのしゆくんをしやうぐんににんぜられ、はしめてへいしをたまはり、天下のふ將にさだめられしより此かた、せ上ゆたか

にして四海の外もくもりなし、され共平のむねもより此かた、平家にふ將たいてんす、そのせんぞ平家のちやく〳〵にて候へは、なにかはくるしかるべきこいねかはくは此たびのふ將、それがしがかうむつてせんぞ代々のふ將をつき、君をしゆこし奉らんとはいかる所もなくそうもんす、其時源氏の方より源のよりのぶすゝみ出申さるゝは、尤御へんのせんぞ代々のふ將、たれとしてしらさらんものや有、我等のせんぞ六そんわうつねもとより此かた、父たゝのまんぢう公にて候、頼光まで三代のふ將なりわれ有し上は、御へんふ將の望はいかゝ有らんと申さるゝ、たゝつね聞たまひ尤共御ふんのたまふ所も、しごくせり去ながら天下のしゆごたるべきものゝ、年じやくはいにてはかろ〳〵しく、それがしゝゝての後思ひのまゝに望たまへとあざけるやうにぞ申さるゝ、よりのぶ聞召何それがし、じやく年にて天下のしゆごは成ましきとや、扨天下のせいとうをもすべきものか、御ぶんがやうにおごりをさきだて、ゑいくわをほんとするものゝわざ成べきや、それふしやうたるべき物は、いかにも心をすぐにしてじんぎれいちしん、一つもかけてはあやまる所をほかるべし、それ天はたかきをしりへいちをふんで下とし、爰を以てくんしんのれいをわきまゆる、きみかみにあつてしやうをたゝし、しやしよくをまもりたみをなで、しんかにしては君をうやまいちうをなし、じんぎをただしうしてこそは國かをまもるみち成へけれ、御ぶんとんよくしんよく此二つをはなれずして、天下をおさめたまはん事思ひもよらぬしだいなり、いかにたゝつねそれがしじやく年には候へ共、御へんかごとくすいぎうなぞの年をかさねしよりは、ばつくんまさり申べしいかに〳〵と仰ける、もとよりもんもふのたゝつねにて、へんとうにもおよばず大いきついてせきめんす、へいけの一ぞく是をみて扨もむねんのしたいかな、よりのふいま一ごんにもおよびなば、きん中とはいはせまじとつておさへさしころさんと、こふしをにぎりきばをかみすでにかけいでんとしたりしを、わたなべをさきとして四天王のもの共、かけいで大のまなこにかどを立、つばもと二三寸くつろけはつたとにらみ付、ゑゝやさなおのこがしなせぶり、禁ちうの御まへ共はゝからず、

くはんたいすぎたるやつばらかな、此四天王が有をしらさるかむやうのうでだてびろうなり、今一ごんのへんたうにもおよびなば、御せんとはいはせましたゝつねかかうべみぢんに打くだき、源氏一とうの御代になすべきと、ふんじかつてたつたりしはふしことの大事とみへにける、くぎやう大じんあはてゝ中へ立たまふ、内よりのせんじにはたゝつねが申所一つとしてりなし、ふ將の望かのふましよりのふいまた、ちやく年なれ共さすが源氏の大將なり、けふこう天下のしゆごたるべしと、忝もとうざにせいゐ將軍ににんせられ、御りんしくだるぞ有がたけけれあさましやたゝつね、今はぶしやうの望たへめんほくなくも打しほれてぞ歸られける、源氏方の人々はやがて御前をまかり立、さながらかたをいからしよろこひいさみ歸られける、かのよりのぶ公の御いせい、かみ一じんより下萬みんにいたるまで、あつはれめでたき次第やと、皆かんせぬものこそなかりけれ

第二

たゝつねむほん並さたみつたゝつねを打事

そのゝち平のあつそんたゝつねは、こんどだいりにて大いなるちじよくをかき、人のひはんもめんぼくほん國に歸り、あへてもつて家のしんか、うんの九郎（本ノマヽ）なりとしをちか付いかになりとし、こんどのちよくぢやうあまりむげなく思ふなり、何とぞしてたうくんをかたむけて、第二のわうじを御くらいに付奉り、おごる源氏をほろほし平家一とうのよとなさんと、きんりきん國に有し平家方のもの共、はや〳〵ふれよとあれば、承候とて 三重ひそかにふれをぞまはしける、つゝむとすれど此事花の都へもれ聞へ、よりのふめせとのちよくぢやうなり、よりのぶかしこまつてさんたい有、内よりのせんじにはたゝつねがきやくしんを、はせむかつてたいさんせよとのちよくちやうなり、よりのぶかしこまつて御せんをまかり立、すでに日けんきはまり都を打立たまへば、するがの國にはたう〳〵みのかみさたみつ、百きばかりで御まへにはせさんし、御ともして 三重よを日につゐでぞ下られける、かつさの國に聞へたる六ぢぞうに御ぢんをとらせたまひけり、たゝつね大きにおど

ろき此城にてはかのふまし、ほうしやうへおち行あはの助をたのまんと、うらの山ちにかけ上りあしにまかせてをちてけり、扨又よりのぶかれがじやうへおしよせ　三重時のこゑをそ上にける、人をと更になかりけり我も〳〵とみだれ入る、大將御らんじてなにさま是はうら山へおちゆきぬへし、さらずはかいしやうおほつかなし、なんぢらてわけをしてたづねよ、もし打取物ならば、ちやうなんのしろへまいれと仰あつて、よりのふ公　三重長なんに入たまふ其中に取ても、たう〳〵みのかみさたみつはてぜい百きばかりにて、うら山よりほうしやうを心かけ爰かしことたづぬるに、馬のあしをとおほかりけり、さだみつみていかにくんひやうてきのせい、此山をはなれぬそ心ゆるすな人々と、いふよりはやくをつついて　三重時のこゑをそ上にける、時のこゑもしづまればさだみつ一ぢんにうまかけ出し、かく申は源家のかしん四天王の内、たう〳〵みのかみさたみつなりあますましきといふまゝに、大ぜいにわつて入　三重いくさは花をぞ　ちらしける、去程にてきみかた打じにして、たゝつねしう〳〵二きにてしげみをくゞりおちゆく所を、さだみつはやくかけ付そこもとへおち行は、大將とみるがひがめかあますましきとをつかくるたゝつねかなはしとや思ひけん、取てかへし切むすぶらうとうんの九郎しうをへたてむずとくむ、うんの九郎も一ごのあんひ爰なりと、本ノマヽおこゑを出しくみけれ共ばつくんかはるさたみつみつにて、やす〳〵と取てふせやれがきめ、おのれ此さだみつをうたん事物によく〳〵たとうれば、わしとすゝめかすねをしするにことならす、みらひをたのめなむあみた佛とゑかうして、くひふつつとかきてけり其ひまにたゝつね、一さんかけてにけゆくをすかさすおつかけ、馬より下へまつさかさまに引おとし、ほそくびをみつもたまらす打おとし、太刀のさきにつらぬきいきをいかゝつてひへたりける、かのさたみつか有さまひとへにせうき大しんの、あれたるけしきもかくやらんと、皆かんせぬものこそなかりけれ

第三

さたみつだうしん幷みたいみちゆき

そのゝちとを〳〵みのかみさだみつは、大將を打し

本ノマヽ、すましししるしを持せそれよりも、山したさしてぞ下らるゝ是は扨置、爰に又せいしうのちう人に權之助みちはるといゝしもの、此由を聞よりも何とぞしてうばい取我かうみやうにせんと思ひさだみつに近付、のふ御へんは大將を打取たまふ事、弓や取みのほんいなりけふの合戰に、さぞつかれさせたまふらんこよひは心しづかにやとられよ、たといばてきのぐんひやう打のこされしもの共、をしよせたりといふ共我〳〵ふせぎ申べしと、げにたのもしくぞ申さる扨さゝへのさけを取出し、打とけかほにてしいけれは誠にたけきさだみつも、うんつきぬれはさしうけ引うけのむ程に、かずかさなれはうつゝなく天しやうも大ゆかも、ひらりくるりとまへければばんしをたのみ申とて、其まゝかしこにかつはとふしせんこもしらずやとりけり、道はる此よしみるよりもしすましたりとよろこんてやかてくひをぬすみ取いそきよりのふのはたもとさしてぞ三重いそきけるすくに大將の御まへにかしこまり、たゝつね打て參りたりと、くびをしつけんに入ければよりのふ公御らんして、しんひやうなりとていせの國一か國をたまはり、扨よりのぶ公は長元四年八月三日に、たゝつねをたいじしてよろこびいさみ御かいちんとぞ聞へける、是は扨置さたみつは其よもすてに明ければ、かつはとをきあたりをみるに人もなしなむ三はうみちはるにたばかられけるむねんさよいそぎはせまいり大將の御まへにて、かれとたいけつせんと思ひはやとひ出けるか、まてしばし我心かへつてそこつに成ならば、まつ代までのちじよくなりと思ひ、らうとうのたゝかけを御まへにめされ、はしめおはりをかたり我よりのぶの御まへにて、たいけつにおよびなばかれに二ごんとはいはせしなれ共、たゝつねがくびぬすみとられし其ちよく、いかにとしてかはきよむべしきうばの道も是までなり、しよせんうきよをすてのちのよをねかふへし、なんぢは國に下り兄弟の子共を、よきに取立ゑさすべしはやとく〳〵とのたまへば、五藤太承こは口をしき御ちやうかな、誠にふたはのむかしよりくんしつなしみふかうして、へんしもはなれ申さんみがいま此年になり、はなれ申べきやねかふ所の御とんせいなを二せまでの御ともと、申きつてぞいたりけりさたみつ聞し召れ、お

ろかなりとよ五藤太何れもちうは同事、おこと國に歸らすはたれかまへりてかたるべし、ひらに〳〵とのたまへばあかぬは君の御でうとて、御かたみをたまはりさらは〳〵との泪のわかれぞあはれなる、去程に五藤太うれしからさる御かたみの色にそめかへて、ゆめぢをたとることくに本國さしてぞ三重歸りける、國にもなればわか君の御まへにかしこまり、泪のしたよりはしめおはりを申ける、わか君聞召何ちゝ上の御とんせいと申か、扨は其道はるはおやのかたきよなよしなにはるにても候へ我〳〵かくて有ならは、いかでか其まゝをくへきそはゝ上やあねこに、御いとまといふならばいなやとゝめたまふへし、たゝ〳〵しのひてのほらんとてしう〳〵ひやでうしたまひて、文こま〳〵とかきしたゝめ御かたみの物に取そへをき、しのひて都へ三重のほらるゝ心の内こそたのもしけれ、いたはしやなきたのかた是をはしろしめされすしていかにかつらのまへこいしき父この御方より、たよりの有と聞つるにこなたへとのたまひて、かつらのまへをいざない有し所に出立、御らんあれはふしきやとのゝめされたる、御たてゑほしかりきぬに、文を取そへおかれけるいそき立より、御文を取上みたまひ、はつとをとろきみたまへは、かつらのまへ父ごは御とんせいおとづるは都へのぼるとかいて有、こはそもゆめかうつゝかとなけきしつませたまひけり、やゝ有て北の方くとき事こそあはれなり、ともにうたれたまはんな思ひもうけし事共なり、いきてわかるゝ思ひのすへやるかたもなきおぐるまの、めぐりあふせもなきさこくあまのおぶねのよな〳〵に、こがれてぬるゝ我かそてもほすひまもなくあさましや、あとにのこり何と成なんわが身ぞと、御かたみの物に取ついてこゑをたてゝぞなくばかり、しばらく有てはゝうへやあいかにかつらのまへ、おとづる丸を都へのぼせたれをたのみて此所に有べきぞ、あとをしたふてのぼらんとてかつらのまへをともなひて、たびのしやうぞく三重なされけるすけのこがさでかほかくしたづぬる人ゆくすへも、いつとさだめあらしのをと、よをさむけ成うすごろもたもともすそもしほれきぬ、泪のつゆはおかへのしゆくふしいとゝたにつらきみの、なをも思ひをしまだのさと父にはいつかおゝひがはあみとふしなか

る、水のあはれげに、われてもすへにと聞からにねかいはかなやのしゆくとかや、さよの山風はげしくてかさに いろこのはが ばらんばらんはら〳〵〳〵と、たに、をしかのつまこいかねてなくころに、しのぶや我なみだかさにふりつむこのはの雨、打はらい打拂一しゆはかうぞ聞へける▲ ふしおもひきや、さよの山ぢをふみわけてこのはのおとにとわるへしとはと、かやうにゑいじたまひつ、につさかはやくすぎのかどに、いか成かぜかふくろいと いろきくは我子をみつけのがう、あすをもしらぬ我みとおもへとも、けふまではつゆの命をいげだのしゆく、なみのつゝみやかぜのさゝらさゝんざとふく、はまのまつばら ふし打こへて行ば是ぞ此、うきめみかはの八はしを いろとゞろ〳〵と打わたり、いつか我みのおはり成あつたのみやだち ふしふしおがみ、きせいをふかくかけまくもしはしは爰にいせし成、思ひすゝかのふもと成しづかふせやにやどかり、しばしやすらひ三重たまひける、心の内こそあはれなりよもすからの御なげき、けにやまことによの中の人のおやのならひにて、子をおもふみちほどにあはれ成事よもあらじ、子ゆへにきぬる いろはるふしたびごろも、はるはるまよふ我みの思ひをいつかはれん、あさましやとしばし泪にむせばるゝ おつるなみだのひまよりもいかにかつらのまへ御身のちゝのただみつは大かうの人なれは、平家方の大將たゞつねがくびを取、よろこび歸られしに權之介とやらんにうばはれし事、むねんとばかり思ひ切さいごのゆくすゑもかへりみず、よをすてたまふによりおとづる丸もせひかたきをうたんと心ざしゆくすへしらずにまよひいで、かかるうきめにあはする事子にてはなくてかたきなり、うらめしさよとてかたりすてゝぞなきたまふ、かつらのまへはきゝたまひ御なげきは御事 本ノマヽはりなり、さりなから爰はかたきのりやうちと聞、あくじ千里をはしりかべにみゝ有よの中に、もしもかたきにとらはれて、うきがうへにとりかさねまたうきめにあひたまふな、なふをとたかしはゝうへとなみだと共にのたまへば、はゝ聞召扨はかたきのれうないか、さらばこよひおち行べし此みちを行ならば、もしもをつてのかゝらんにいざや山じをしのばんとて、かつらのまへのてを引たまふ ふしつきゆりおちこ

ちのたつきもしらぬ山中に本ノマヽおほつなくもよぶことりの、こゑもろともにわれもまたなみだのあめにそでしをれ月ひとりのみともなひて、そよとふきくる風をだにもしもをつてのこゑやらんと、跡をのみみかへりてあふさきるさを打ながめ、泪と共にはるかのみねへぞ上ら三重るゝあらいたはしや、はゝ上はなげきといひたひといひ、つかれはてさせたまひてなふいかにかつらのまへ、しばらくやすらひたまへとて其まゝそこにどふとふし、たゞ〳〵にこそみへにけるひめ君あまりのかなしさに、御くじをひさに上なふいかに母上さま、御心は何と候さやうになやませたまひつゝ、行へもしらぬ道のべのくさばのつゆと共にきへ給はゞ、何となりなん悲しやなのふ御心つよかれと、泪と共にのたまへば母上いきの下よりも、我は今ぞかぎり成おことは女しやうのみなり共、何とぞしておとづる丸にめくりあひ、ごせをとふてゑさせよおや子のちぎり今ばかり、せめて此よのわかれの水御みが手よりうけたきはとのたまへば、ひめ君聞もあへずそれよりはるかのたにへぞ三重下りつゝ、泪のみづをくみ上立歸りみたまへば、もはやこときれたまひけりひめ君ゆめ共わきまへず、しがいにかはといだき付是は〳〵とばかりにて、我もきへ入かとなげかるゝおつる泪のひまよりもひめ君あまりのかなしさにかみにて水を打しめし、なふいかに母上此程こいわひたまひつる、あかでわかれし父うへのたむけの水、よきにうけ取おはしませ又此水は、都へ上りしおとづるが參らする今まいらする此水は、御さいごまでつきそひ參らせたる、あねのかつらかたむけの水人ざとまれ成此山にすてゝはゆかせたまふぞとせんなきしがいに取ついて、よべとさけべとかいぞなき何と成なんかなしやと、しばしきへ入たまひけるやう〳〵泪のひまよりもくとき事こそあはれなり父うへおと〳〵に行衞しらずわかれつつ跡を尋て上りしも、母うへたよりいてうきをわすれしかひもなくすてゝは行かせたまふぞやゆかてかなはぬみちならば、みつからをもつれ行たまへとむなしきしかいに打かゝり、こゑもをしますなきたまふ折ふしをく山に、かねのね念佛のこゑかすかに聞ゆ、ひめ君聞召かゝる物うきゑんさんにも、御そうやおわすらん參りて頼奉り、母のしがいをかくさんと

て泪と共に立より、あんしつの内をみたまふにさもたつとき御そうの、しやうこをならし念佛となへておはします、しばしたゝずみ聞たまふかうみやうへんじやう、十方せかい念佛しゆじやうせつしゆふしや、なむあみた〳〵〳〵なむあみ佛とゑかふ有、ひめ君うれしくも有かたさよとてふしおかみ、たまへども、たがいにそれともみへわかず、しはのあみとをほと〳〵とをとつれ是はたひの者成か、此山中にて只今母におくれて候、御けちゑんにしがいをかくしたまはれと、泪と共にのたまへば御そう聞召、よくも來られたる物かな、さやうの人をとむらふこそしゆけのやくにて候と、打つれたちそれよりもはるかのりくみねへそ上らるゝ、程なく御そばになりぬれは扨も〳〵御いたはしき有さまやと、やかてとちうにつきしるしをたてそてより、御きやうを取出ししばらくどくじゆまし〳〵、とんしやうほたいとゑかう有ひめ君あまりのうれしさに、まもり本そんを取出しいかに御そう、是はみつからが二せまてたのみ奉る、御ほとけにて候へ共はゝのため御ふせにまいらする、御ゑかうあつてたまはれと泪と共に、わたさるゝ御そうほんそんをうけとり、つく〳〵とみたまひてはつとあきれいかにによしやう、このほんぞんをはいしたてまつるふしきや、御身のちゝはいか成人そとのたまへは、ひめ君なみたの下よりもなのるましとはおもへ共、御そうを頼み申あくるうへたにはしらしたまふなよ、そも〳〵みつからかちゝはけんじの大將、みな本のよりのぶ公のしんかにとうとうみのかみさだみつと申人の、つまや子とのたまふこゑのしたよりも、さたみつこそわれなりおことはひめ成かと、たがいにそでに取付すがり付て、よろこひ泪をながさるゝやゝ有てさだみつ、くどき事こそあはれなれ、さて〳〵いまのもふじやをはわがつまともしらずして、とむらひけるこそはかなけれ、げにまこと人げんはこのよのいきのきるゝより、ぶつたいをゑるときくなれは、もふじやはわれをさだみつとしるへけれとも、もふしうのくもにへだてられ、ものいひかはす事もなく、さそやこひしくおもふらんわがつまとしるならば一ごんのことはをかけて、さいごのなこりをおしむへきものをと、ころものそでをかほにあて、きへいるやうにぞなげらるゝや

やありてにうどう、このうへはちからなしまつ〳〵、こなたへまいれとてひめをいさなひいほりにかへりうきこと、ものあらましをかたりたしては、わつとなきおもひだしては、さめ〳〵とそなかれける此おや子の心の内、あはれともなか〳〵申はかりはなかりけれ

第四

みちのぶかも參けい並おとづるに打る、事

さだみつにうだうはひめにむかつて、扨〳〵かゝるをく山にまよひきて母にはおくれ、やるかたもなきくるしみを思ひやられてふびんなり、去ながら我めぐりあふ事いまだぶつ神三ぼうも、すてざるゆへなり此上は都へ上り、さかたのみんふきんときの北の方は、おことがためにはおばにて有頼申さは、いかでそりやくに有へきやいそぎひめをともなひ、それよりも都をさしてぞ 三重のほられける、都になれはよはにまきれきん時のやかたにゆき、あんなひかうて内に入きんときにたいめんし、扨〳〵ひさしう候きん時とのかやうのすがたと成うへは、二たび又方方におもてをむくべきとは、ゆめ〳〵おもはざりつれ共子ゆへのやみにまよふとは、かゝる事をや申らんあのひめにめぐりあひ、ことには又母にはなれみなし子となり候へば、やるかたもなきあまを舟、なみぢにまよふ此子なりほうゆうのなしみといひ、又は御みのないほうひめがためにはよそならず、是まてめしつれまいりたりあはれみたまへと、はしめおはりの事共を泪と共にのたまへば、きん時よこてをちやうと打扨はさやうにてましますかたゝよの中のふうぶんは御みぎやくしんのたゝつねと、心を合たまふやうに申たりされ共四天王の人〳〵こそ、さんくわいの折からは御へんの事のみ申なり、まづまづこなたへとをくのていにしやうじ、扨北の方にかたればゆめともさらにわきまへず、する〳〵とはしり出扨も〳〵おことが事のみ、思ひしに是まで來るかうれしやとかつらのまへにいたきつきさきたつ物は泪なり、きん時もさだみつも共に泪にむせばる、やゝあつて北の方さだみつどのにちか付て、扨て御みはあまりに心のたけきゆへ、しそんのすへもわきまへずよをすてたまへば、子共はかやうにるら

うしてあまつさへ此子が母も、山中にてはかなくなりしとき心の内のせつ成をおもひやられてかなしやと、又さめ〳〵となげかるゝさだみつとかうのへんじなく、たゞもくねんと打うなづき泪にくれておはします、きんとき申されけるは今はなげきてかいもなし、よりのぶ公へごん上申一たびよにたてまいらせんこなたへ御入候へとかくて月日を三重おくらるる、是は扨置其頃權之介みちはるは、大ばんのやくにてざへきやうして有けるが、有時ちやくしごん太郎道のふをちか付、我りうぐはんのしさい有今日かもの明神へさんろうせんとおもへ共なにとやらんこよひのゆめみ、心にかゝり候へばそれかしかみやう代にさんろう仕れかしこまつて候ととても人あまためしぐし三重てほり川を出、かものやしろへ參りけり是は扨置、たゞかけは三でうのへんにいたりしが是もかもへ參りけるが何とか思ひけん、たゞかけはあとよりゆきけるざうしきに、たゞいまの大みやうはいか成人ぞとたづねけるざうしき何心もなく有のまゝにぞ申ける、たゞかげかたきと聞からにきもそゝろにうれしくて、いそぎおつかけ道のふをかいつかみ、みぢんになしうつふんをさんせんとこぶしをにぎり力あしをどう〳〵とふんではやをつかけんとしたりしか、まてしばし我心それがし一人むねんのらし申さんより、わか君にしらせ奉り跡をしとふてかもへ行、ちぼうをもつてうたんとてはしり歸り、わか君にしらせまいらせ候二人もろ共、爰かしこをかけまはりしかのかはをもとめ出し、かものやしろへ三重いそぎける、明神になればしう〳〵二人かのかはを身たまい（本ノマヽ）、はいでんに上りおしかのふしたるふせいにて、たゞほうぜんとふしたまふかゝる所に道のぶしんぜんにとうといて、しよぐわんぢやうじゆといのりける、たゝかげじぶんはよきぞとかつはとをき、はしりかゝつて取てふせはやあそばせとぞ申ける、わか君ゑんのいたをどう〳〵とふみならし、我をたれとかおもふらんさだみつか一子、おとづる丸なりなんぢかちゝみちはるを、せひ一太刀とねらへ共をりをゑざれば力なし、なんぢはみちはるがちやくしと聞く、おのれなり共うつてむねんのはらさんとほそくびちうに打をとすたゝかけ是にありやとて、こしのつがいを切はなしとゞめをさし立のかん

としたまへば、らうどう共が是をみてあますましきと、大せいおり取まはしひみづになれとかゝりける、たゞかげ是をみてもとより大かうのものなればかたきを四方へおつちらしわか君をかたにかけ、つなのやかたへ三重かけ入ける、さる程にたゞかげつなの御所にまいり、かやう〳〵のしだいなりひとへにたのみたてまつるとそ申ける、つな此由を聞よりも心やすかれ人々とて、をくにしやうじよきにいたはりたまひける、かゝる所におつての物共もんぐわいに來つて、大をん上てよばはりける、たゞ今是へかけ入たるらうぜきもの、こなたへわたしたまへわたされぬにおいてはやかたの内へふみ入てらうぜきせんとぞ申ける、つな此よしを聞よりもんにたてたるつくほうを、おつとつて門外にはしり出なにおのればらは、たがやかたとそんしかゝるあくごん申ぞや、われをたれとかおもひかくすいさんのはき出すぞ、ただししらすにきたれるか、さだめて此わたなべがてなみの程をかねてより、しらざる事はよもあらじいらざるかうげんはじかんより、おし本のおかき内にやあめんだいばら、はやもどれとぞ申けるかたきの中より、しげみの十郎といつしものなにつなゝればとて、きじんにてはよもあらじと、たちまつかうにさしかざし一もんじにうつてかゝる、わたなべみてしやおのれはやさしきおのこかな、此わたなべにむかふてかゝる、ゑゝおのれは命はすへたかやれ念佛申せ、申たかといふよりはやくかうべみぢんに打くだき、あしたのつゆときへにけりのこりしやつばら、四方へばつとおつちらしじやうちうさしてひいたりける、かのわたなべかふるまひあつはれおにかみにもまさりし有樣やと、かんせぬ者こそなかりけれ

第五

おとづるみちはるたいけつ幷みちはる最期

そのゝちうちもらされしらうどう共、我やに歸り此よしかくと申ける、みちはる大きにふくりうしいかになんぢら、此うへはつながたちへかけいつてうちはたさんとおもへ共、かへつてそこつに成ならば、むねんをばはらさすしていぬじにせんも口をしかるべし、よりのぶ公へごん上し二人の物をうけ取、かうべをはぬる物ならば、つなもあんをんにあるましきと

おもひさだめて、とる物も取あへず御所をさしてそ三重あがりける、おまへになれはつゝしんてかしこまり、はじめおはりをごん上す、よりのぶきこしめしなんぢが申ちやう、ことはりにてはありけれども、一はうをきいてげぢはならすつなか二人のものをいださんも、いかさましさいあるべしそうともにめしいだし、てんかのふしのがんぜんにてりひのじつふをたゞし、ゑさすべし、此むねをあいふれよとの御ちやうなり、かしこまつて候とて三重一々したいにふれにける、さてざいきやうのしよさふらひ、めしにまかせてしこうあるわたなへの源五、二人の者をうちつれてしゆしあれば、すへたけきんときほうしやうも同御まへにしこうある、かくて權之介みちはるすゝみいてゝ申けるは、いかにわたなべどのそれがしがちやくし權太郎をうつたる、ろうぜきものをいだしたまわぬのみならず、おつてのものまてうちたまふことなをもつて心へず、しさいをきかんと申けるわたなべにつこと打わらひ、さては御ふんはふしのほうをぞんじられ候や、よのつねのものだにも、たのむといひてきたるものをかたきへわたすほうやある、其うへこの物どもはとを〳〵みのかみさだみつがちやくし、おとづる丸らうとうのたゝかげなり、さだみつとはつね〳〵ほうゆうのなじみといひ、さるによつてかくたのまれてありけるは、そのうへ御身おやのかたきとてこのものども、すねん心をくだきねらひしに御へんうんつよくしていであはず、むねんをはらにすへかねみちはるをうつたるは、ひが事成かしかるに御へんからうどうとも、それかしかもんくわいにきたつてあくごんのはきちらし、せひいださすはろうぜきせんと申により、もんにたてをくてつぼうをおとしにそつといたゞかせて候と、あざわらつてぞ申けるみちはるきいて、さてはそのろうせきものはさだみつか子成とや、そのさたみつがしそんふかくみつきたまはゞ、御身のうへの大じ成べしことのつのらぬそのさきに、とう〳〵わたされよとぞ申ける、すへ竹ほうしやう一どうにさだみつしそん、ひいきの物そのみ大しとのたまふ事、よにもふしぎにぞんずるなり、ゆへをきかんと申けるみちはるきいて、おふまことにおの〳〵はらいくわうのみよより、四天わうとよばれいちみだうしんの人々なり、さだ

みつのぎやくしんよくぞんせらるべし、一々御まへ
るゞごん上あれといさぎよくぞ申ける、人々おもひよ
らざるぎやくしんの、一みなるといひかけられへん
たうにもおよばすいかにおとつる丸ち丶がふた心な
きをもむき、よく〳〵ごん上申へし一せ一ごの大じ
は爰成とぞ申されけり、おとづるつ丶しんで申やう
たたみつきやくしんと申事、みないつはりにて候そ
れをいかにと申に、一年たいらのた丶つねたいじの
ため、御げかうのみぎりち丶さだみつた丶つねがく
ひとつてりよしゆくにやとり候所に、あのみちはる
にたはかられ、くびをうば丶れそれをむねんにぞん
じ、ゆくするゞしらずになりし事、みちはるかゆへなれ
ばかたきにては候はすや、かた〳〵いかにと申ける
みちはるきいて、よくこそいひたれおとづるまるな
んぢか申ことくたい〻つねたいじのきざみおことがち
ちのさだみつ、たい〻つねと一みしてうらのやまぢを
しのび、ほうしうのかたへおつるところをそれがし
ぼつかけをつちらし大将をくんでうち、そのひまに
なんぢち丶はかげをもみせず、をちゆきしはそのし
やうこには、それたい〻つねがしるしをきみの御まへ
（本ノマヽ）

にぢさんせり、かやうのしやうこある人に、へつにし
さいはあるましきは、いかにおとづるまるなんぢか
父、たい〻つねがくび　りたるしやうこばしあるかい
かに〳〵とた丶みかけてぞ申ける、おとづるはしや
うこになるべきものもなく、あきれはてたるはかり
なり、かゝる所にさかたのみんぶきんときまかりい
で申さる丶は、ことのしさいはしらね共さだみつか
なれのはて、したくにまかりあり候めしよせられ、御
たつねしかるべきよしを申ける、きみきこしめし是
こそのそむ所なれ、はやこなたへとの御ぢやう成か
しこまつて、にうだうかたへつかひたつさだみつこ
のよし聞よりも、いてましきとはおもへとも、おとづ
るたいけつにうちまけたるときくからに、ころもの
そでをひきむすんてかたにかけ、太刀ほつかうでせ
ひたいけつにうちまけなば、みちはるめをたい〻一う
ちにとおもひさだめて、いそぎ御まへにかしこまる
さればいこくのはくいしゆくせいは、しゆやうざん
（本ノマヽ）

にとぢこもり、二たびくんかんをはいせじとうかへ
てしゝたる事共も、あとにおもひのなきゆへなり、か
やうにふるもふらんわれもまた、みちはるほどのあ

く人にたゞつねが、しるしをぬすみとられしそのちしよく、いかにとしてかくんかんをはいしたてまつらんと、山中にてとにもいかにもなるべきに、ひめがありさまふびんさにきんときのやにまいり、年月をおくりしにまたおとづる御まへにてたいけつにかけまけ、ぎやくしんのものとなりぬるよしをきくからに、申ひらかんそのために二たびまた、めん〳〵の御めにかゝる事どもは、おんあひの子どもにひきいだされしゆへなりと、めんほくなけにさしうつむいてなみだをはら〳〵とながしける、ことはりせめてみな〳〵なみだをながさるゝ、よりのぶこうの御ぢやうにはいかにさだみつ、なんぢか申所はめんぼくなき一つうなり、たゞつねがくひなんぢがとつたるか、また一身としておちゆくをみちはるをつかけうつたるか、はや〳〵申せとの御ぢやうなり、そのときさだみつおしなをつて申あぐる、三代そうをんのしゆくんに、なにとて二心候べきやたゞつねをば、それがしが打取たると申上る、みちはるすゝみ出たゞつねをうつたるせうこの候か、さだみつ聞てせうこそ候へと、やがてくわいちうよりたゞつねがはたさし物を取出し、是〳〵御らん候へ人〳〵うつたるせうこなりとて、さし上るみちはる是をみて、そのさしものはつくりてや申上ん、まことのせうこになりかたし、なにかしがごとくたゞつねかくびを御まへに、ひろうあれいかに〳〵と申ける、其時入道申けるはいつそやみの〻國、ふじはらのたかひだいきやくしつめんため、君御しまわたりのきざみ、源平のこらずうつて出候に、たゞつねがさし物に月にほしを打たるを、御まへへめされし事のみさだめて、御まへに候べし引合て御らん候へと申上る、尤とぎよいあつてそれそれ引合よとの御ぢやうなりかしこまつてやかて引合て御らん有に、ちつ共ちがふ所なしみちはる、色をうしないせきめんす其時さだみつ、大をん上なにとへんたうはましまさぬか、御みあらんたくみをし御かんじやうにかけたまへ共、道にもあらぬたのしみゆへ天ばつついにのがれずして、さやうのていになりたまふ御ぶんかやうなるさよらいを、かうめうぬす人と申なり、なにとへんとうはましまさぬかと、いきをいかゝつて申ける道はるは、たゞしほ〳〵としてひれふしける、ざちうに有し人々道はるを取て、ひ

つたつるよりのぶの御ぢやうには、此上は本國ににふぶして、もとのごとくにあるべしみちはるをとらするなり、心のまゝにふるまへとの御上なり、かたしけなしとて御まへを罷立、みちはるがかうべをはね本國さしてぞ歸りける、扨いにしへのやかたにやかたを立ならべ、二たびるいぐわにさかへける、千しうばんせいめでたきともなか〳〵、申はかりはなかりけれ

寛文二壬寅年十月吉日

山本九兵衛板

敵討のいこん

第一

源平敵討遺恨并頼光北國

本ノマヽ、まうひそかに、おもんみるに、天下たいへいに、おさまる御代とは、申せども、天さいくだり、じんくわを、やふりまさにこくどの、らんとなる、こゝに多田、まんぢうの、御ちやくしせつつのかみ、源の頼光は、さんぬる貞永三年に、かいしなのゝ大しやう、高井のくらんと、ありのりを、ことゆへなく、うちほろぼし、らくやうに、かひぢん有、みかどをしゆごし、たてまつる、ゆみやの、いとくこそゆゝしけれ、扨御家のしつけんには、ふぢはらの、なかみつ、幷ひに、めつらしからぬ、わたなべのつな、さかたのきんとき、うすいのさだみつ、うらべのすへたけ、其ほか、ふだいのしよ侍、ちうぎをまもり、あひつむる、かもんのはんじやう、日にまして、あかしくらさせたまひしを、うら山ざるこそなかりけれ、是はさてをき、其頃また、大江の大しん、きよ村とて、其身くきやうの、いるながら、心かうにましますゆへ、てうぼきうせんに、身をやつし、ふゆうをせん一に、このまるゝによつて、すどのてうてきを、ばつし、ついにくげを出て、ぶけになり、とうし天下には、きよ村か頼光かと、くるまの両わのことく、萬みんおもんし奉る、したかふ所のらうどうには、やぐろ八力がんせい、やにぎの平太清丸石田の左衛門むねひろ、田川の源内、ひでつぐとて、かれら四人のもの共は、力打物ゆみやを取ては、頼光の四天わうと、いづれかかうをつ有べきと、さたするほどの、ゆうしなり、爰に又、清村の家の子に、はつざき源太兵衛、うぢつぐと申もの、ばつざよりつつと出、なひ〳〵申あげ候、それがしがあににて、候ものかたき、川しまひやうご介、つねきよ、源のよりみつへ、いささかのきうよう候て、やせん罷のぼり、今日しゆつけ、仕り候年〳〵すじつの、もうねんはれたく、ぞんし奉り候間、せひ御いとま、下され候へと、申上る清村聞たまひ、それこそさいわひの、事にてあれ、かまひて〳〵しそんずるな、ずいふん心をはたらかし、くび取てしさんせよ、はやとく〳〵とありければ、うぢ清なゝめに、よろこびて御まへを罷立、ちこくうつり

てかなはじと、御前を罷立三重すでにようういと聞へける、人あまたにて、かなふましと、しやていやきりの、小太郎をめしぐし、其外の手のもの共は、爰かしこにかくしをき、小太郎とたゝ二人、いまや〳〵と待いたり、さるほとにかくてつねきよは、此由を聞つたへ、是日本一のことにて有、いかにもして、かへり打にうち取べしとてわざと人おもつれずたゝ一人、くさりかたびら、二かさねかさねてきるまゝに、しづしづと行所を、二人のものはみるよりも、すか〳〵とたちむかひ、やあめづらしやつね清、はつさき源太きやうだいなり、心へたるかといふまゝに、ゆんでめてよりはさけみる、さあしつたりと、いふよりはやくぬき打にゆんてのかたさきより、くひちうに打をとし、めてよりかゝるはつさきが、もろひざずんと、なぎすへて、のりかゝつてくびを取、扨も〳〵せうし成ありさまかな、此うへはゆだんすべき、ことならず、もし大せいにて取まかれては、かなふましと、すぐにそれより、頼光の三重やかたをさしてぞ、いそぎける、御所にもなれは、頼光の御前にかしこまり、右の次第を、つぶさにあひのべひとへにたのみ奉る、とつつしんで申あぐる、頼光聞召、扨も〳〵いさきよきはたらき、しんびやうのいたりかな、もつ共わざはひを、まねくなかだちなれ共、たのむといふて、かけこむを、いかでかもつて見はなさん、いそぎこなたへ〳〵と、御座をたゝせたまひけれは、時に四天王申けるは、心やすかれつね清殿、此うへは、天地かさかさまに打かへり、しゆらたいしやくのあつき共か、千萬きにて來る共ゆめ〳〵もつてわたすまし、あはれ扨ことがなふえをふくべしと、おもふ折からなりけると、いひもはてぬにきよ村からうとう共、われも〳〵とはせ來る、まつ石田の左衞門と、やつきの清丸、たゝ二人内に、入さだみつすへたけにたいめんし、扨もたた今、川島ひやうご、つねきよと申もの大ぞの清村の家の子、はつざき源太、同しやてい小太郎、二人のものをうつて、此御やかたへかけこみ候間、すみやかに御わたし候へと、ほうじやくぶしんにそ申ける、すへたけ聞て、扨もぎやう〳〵しき有さまかな、我等はさやうものの、はんはいたさぬか、近頃そこつ成人々やと、さあぬていにぞ（本ノマヽ）、こたへける時に清丸つつと出、いや〳〵そこつとはいわせまし、まさしく此御内へ

かけ入たるをみとゝけて、是までまいりたるうへは、何とちんしたまふと、かなふまし、ことのたゝつのらぬそのさきに、と〳〵〳〵御出し候へ、せひ又出されぬにをゐては、ゆみやをもつて申うけんと、くはうけんはなつてのゝしりける、時にさたみつこらへかね、やあこぶんはいまたじやく年とみへしか、ゆみやをこのむはおとなしゝ、乍去わしのすみかを、すゞめのぞむにさもにたり、わとのばらが、ぶんざひにて、われ〳〵にむかつて、ゆみやたては、むようなり、ことのつのらぬ其さきに、いそひでかへられ候へと、大きにあざけて申さるゝ、清丸聞て、はらをたて、いやさあわしやすゝめは、いさしらず、ふゆうはほかにあらばこそと、とびかゝらんとする所を、むねひろ取ておさへけれは、さだみつは、すへたけかせいしつつ、両方ぶじにてかへりける三重あやうかりける次第なり、やかたになれば、君の御前にまいり、よしをかくと申あくる、清村大きにりつふく、此うへはとかふ申におよぶまし、いそぎをしかけふみつふさんと、うへを下へとひしめく所へ、渡邊坂田か、はせ來り、あんなひかうて内に入、大將きよむらにたいめんし、是はせつつのかみ、頼光かかしん、渡邊のつな、さかたのきんときと、申ものにてござ候、さき程は御つかひに、あつかり候へ共、其せつはたぎやういたされ、たゝ今まかり歸られ事のしさいを承はりとゞけられ、取あへずわれ〳〵を、さしこされて候、扨もかの川しまとやらんか、頼光やかたへ、かけ入たるとの、たしか成せうこ有て仰らるゝとそんせられ候へは、其たんきつと承はりとゝけて、まいれとの御事にて、ござ候と、さも大ようにぞ申ける、時にやくろの八力、かんせい聞もあへずつつと出、誠以方〳〵は、渡邊殿さかたとのにて、おわすよな、まつもつてよき折から、御近付をもとめて、しうちやく仕候、さりなから川しまか事はかんさきからうとう共、たしかにみとめて、かへりしうへは、何とちんほう有ても、かひあらじ、たゝすみやかに御わたし候へかく申かけしうへは、せひ請取申さては、かんにんいたさぬきにて候へは、とう〳〵御出し候へ、いかに〳〵と申ける、きん時聞もあへず、はてなきといふに、せひあると、申さるゝうへは、とかふ申におよはれず、此うへはずいぶんてから次第に、はひ取たまへ、とらすはゆみや

の、ちじよく成へし、さりながらごへんたちか、ぶんざひにては、何とやらんおぼつかなし、よく〳〵せいを出して、取たまへと、おさわらてぞ申ける、四人のもの共はらをたて、あふかあはさるか今に、おもひしらせんと、一とうにはらりと立を、渡邊きつとみてあしはらく〳〵かた〳〵よ、しつかひそれは、はむしやなどの、しやうきやうたり、まつしづめて物を、聞たまへかのくせものは、しんばつ此方に、かくしをかぬか、ひつちやうなれ共、せひにおゐて、たゞさんとあるうへは、兩家のゆみやを、はげむべき、じこくとうらい力およばす、さりながら、今日は日もくれて候へは、さすかに清村、らいくはうとて、はんみんさたする人々か、切取がうだう、などのやうに、やちうのいくさは、まつたいまでの、かきんとてもの事に、につつちうによせられ候へ、花〳〵しきさんくわい、仕り候はんと、べんぜつさはやかにのべけれは、きよ村聞て、誠もつて、四天王のすい一、渡邊程ありけるものかな、それかしかまへにて、是程までいさぎよく、物申さんものは、あめが下にはおぼへず、あつはれかう成ゆうしかな、さあらは明日の、たつの一天に取かけん、さ候はゝかへりて、此よし申されよとて、れんちうさしてぞ、入たまふいづれもつゞひて、はらりと立、時にきんとき、らうどう共か、袖をひかへのふ、かならずやくそくたがへたまふな、明てう御出候へ、べちにちそうは申まし、此きんときかひそうせし四尺八寸の、おにきりまるの、そみ次第にいたゞかせ申べし、いとま申ぞかた〳〵、とおもふまゝにあつかうし、もんくわいさして出けるか、又立かへつて、二人のもの、大をんあげていふやうは、天ぢくしんだんは、いさしらず、ほんてうにおゐてをや、我君をてきになし、われ〳〵といくさをせんもの、まづしやうるいには、おぼへなし、しにこうきたるやつはらを、たてわりだう切、くるまぎり、ひじゆつとつくし切てあそばんもつ共とて、いさみにいさんで、立かへるきん時かふるまひ、又渡邊がゆうさひぶんふ兩わの侍あつはれげんしの、まれものやと、扱ほめぬ物こそなかりけれ、

第二

よしのりさいご並なかみつ川島うちじに

此事なをもかくれなく、みかどゑいぶんまし〳〵て、

大きにおとろかせたまひつゝ、よの内に兩方へちよくしを、立させたまふゆへ、天あけゆけは、兩人共にさんたいある、内よりのせんしには、此度のらうせきはひとへに天まの、わさ成べしかた〴〵は、じりやう兩わの、ゆうしなり、たゝかはゞともに、じやうかひにおよぶへししからば、兩かうのかばねをはむ、一つのきつねあらはれんは、ひつぢやうなり、時にてうかをたれあつて、しゆごすへし、其をもんばかりなきは、ちうこううすきゆへなり、たとへかの川しま、らいくはうをかくしをく共、なきとちんほうするうへは、さへぎつてのいこんは、ほうにすぎたり、又頼光しんじつなきにきはまりなは、いくたひも〴〵、をんびんにさたすべき所に、かへつてふれいのふるまひは、兩方共にあやまりたり、猶上にも川しまか、頼光内にあるときく共、清村わたくしをもつて、ふるまふこと有べからず、いづれもひやうちやうのうへにて、其さたすべきものなり、かまいて〴〵今より後、二人か中にいこんをのこす、事なかれと、添も御かはらけを、下されば、こは有がたき次第とて、さいすもどしつ兩三度の、さかづきにて、わぼくあるこそめでたけれ、かくてさかづき、おさまれば、みな〴〵おいとまたまはりて、御前の立て、それよりも三重わがや〴〵に歸らるゝ、さる程に、清村したくにかへり、家の子、らうとうめしあつめ、やあかやう〴〵の、りんげんにて、力およばす、わぼくいたしてかへれどもさらにむねんは、はれやらず、せひにをゐて、明日のくれ程に、むこ二むこ三に取かくべし、よういせよと下ぢすれは、承はり候と、馬物のぐとひしめきて、うへを下へとかへしける、此ことなをも、かくれなく四天王は聞付て、君の御前にかしこまり、かくのだん〴〵承はりとゞけて候、きやつにせんをこされつゝごもんくわいに、こまのひつめを、かけさせては、御家のかきんたり、とかく此方より、さかよせにをしよせてざんしにふみつぶし申さんと皆一同に申上る、頼光聞召尤方々か申所は一りありといへ共添もりんげんにて御かわらけまで下されて一たんわほくしたる身か、いかにきやつめかすゝめはとてりんげんそむくのみならす、ていとをさはがせ申さん事ひとへにぐにんのなすわさなりとかく川島を、こよひの内にひそかにつの國たゝのさとへさし下しきよ村がをしよせなば、

のぞみのごとく家内をさかさせ申べし是まつたく、ゆみやのちじよくにあらず何れもそのむねほつせよとて、御いとこに多田の藏人よしのりこう御家のかうけん藤原のなかみつ、其外くつきやうのつわ物二百よきろしのけいごと、あひさだめ三重くるゝをおそしと待たまふさるほとに、かうじもんの出ず、あくじ千りをはしるとかや、清村はやくも聞付てらうとう共を、まねきよせ是こそねかふ所なれ、道に相待打とらん、はや打たてやもの共と、しのび〳〵に都を出つがふ其せひ三千餘騎、せつつの國と、やましろの、さかひ成、きつね川に、ちんの取、三千よきを、二手にわけ三重今や〳〵と、待いたり、さるほどげんし方には、此ことおもひよらずして、川島を、女のこしに打のせていづれも、下にはものゝぐかため、子のこくはかりに、ていとを立、やう〳〵ゆけは、程もなく、東寺四つづかあきの山、あけんとつぐるゑんしの、かねも聞へける、もはや都は、とをさかる、いそげや〳〵と打程に、きつね川にぞ、付たまふ、夜はほの〳〵とぞあけにける、待かけたりし、かたきのせい、すはやこれぞといふまゝに、東西より、あらわれ出て、時をとつ（本ノマヽ）

とぞ、あげにける、時のこゑも、しつまれは、大將清村、こたかき所に、こまかけすへて、是にすゝみひかへしは、大ゑの大じん、きよ村なり、おのれはら、いつくへとてかおとすへき、こしの内成川島を、すみやかに相わたらせ、それさもなきに、おゑては一人ものこさず、打とらんいかに〳〵と、のゝしれは、なかみつきゝもあへず、つつと出、いかに清村、きはせんきんよりもおもく、命はかうもうよりかろし、川島を、わたせといふは、ゆみやの道は、かつてしらず、をゝことわりなり、なまくげばら、ぶしのきんげん、いかでしるべき、いで〳〵てなみを、みせんとて、かけ出る所を、川島しばしと引とゞめ、つら〳〵此らんしやうを、あんするに、皆是それかしゆへにて有きよつねしやうがい仕るうへは、別にいこんは候まし、とかく川島、はらきらんと、太刀ひんぬくを、取ておさへ、あゝふかくなり、きよつね、たゝ今ごへんに、しやうかひいたさせては、われ〳〵ゆみやのちしよくなり、とかくごぶんは、百きか一きに成までも、ずいぶん命をまつとうし、此たびのなんを、のかれたまへやと、ふかくせいしてなかみつは、二百きを一

手にして、むらかりいたるまん中へ、一もんしにわつて入　三重ひはなをちらして、たゝかひけるされ共よせては、大せひにて、すきをあらせず、もみたれは、みかたのぐんびやう、のこりすくなく成にけり、よしのり御らんじて、いで一いくさはげまんと、馬ひきよせ、うちのつて、たづなかひくりしづ〳〵と、出たまふ所に、河内の國のぢうにんに、せきのやの兵衛、まさみち、此よしをみるよりもあつはれ、よきかたきぞと、おもひつゝ、是もたづなかひくり、しづ〳〵、とかけよせて、まいりそうといふまゝに、二打三打うちあひしが、さらにしやうぶのみへされば、よれくまん、もつ共とてむまのうへにて、むんずとくみ、りやうばかあひに、とうとをち、うへをしたへとかへしける、せきのやぶさうの、ゆうしといへとも、よしのりさらにこと共せず、とつておさへ、くびをかゝんとしたまふ所へわらはのくまわう、をくればせに、來りつゝ、よしのりのくさずりをたゝみあけ、つかもこぶしもとをれ〳〵と、三かたなさゝれながら、よしのりは、くまわうを、とつてひきよせ、二人共にくびかききつて、ひつさげ、たちあからんとしたまふ、かなにかたゝ中を、三かたなまで、さゝれけれは、さのみはいかでことふべき、たぢ〳〵よは〳〵として、かしこへかつはと、ふしたまふ、是はまんちうの、あねうへの御子なり、こゝろきひて、大ちからとはいへ共、うんめいつくれは、いたつらに、卅八を一せとして、やけのゝつゆと、きへたまふ、むさんなりける、次第なり、なかみつはるかに、是をみて、一もんしにはしりより、なむ三ぼう、しなしたり、さても〳〵あさましや、はやくもかはりたまふ物かなと、なみだをはらはらとぞながしつゝ、今ははやちからおよはず、しでの山にて、御待候へ、やがてをつつき、申べしいでいで、御とぶらいに、いまひといくさはげまんと、大をんあげていふやうは、ふちはらのなかみつ同川しま、是にあり、われとおもはんもの共は、かけあはせて、しやうぶをせよ、まいりそうといふまゝに、む二む三にわつて入、くもでわちがひ十もんじに三重ひじゆつとつくしてきりまわる、おもてをあはするものはなし、しかれ共二人のもの、いたでうすでにきらひなくすかしよの、きずをかうむれは、いまは五たいも、じゆうならねば、ざう人はらの手にかゝらんより、いざ

や爰にて、じがひせん、さても〳〵、しれぬは人の身のゆくゑ、かくやみ〳〵と、この所にて、あひはつべきとは、おもはざりしに、ゑゝ口をしや、むねんやな、さぞやらいくわう、いひかひなくや、おぼすらん、よし〳〵是もまよひなり、いさめいどまでちぎらんと、なかみつは五十三川嶋は四十八、さしちがへて、おなじまくらに、ふしにけり、あつはれおしき、さふらひやと、上中下にいたるまで、みなをしまぬものこそなかりけれ

第三

頼光四天王北國下向并道行の事

大ゑの大じん清村は、心にかゝりし、川島や、ならびに、よしのりなかみつをも、おもひのまゝに打すまし、きへつのまゆを、ぞひらきける、され共清村らうとう共を、ちか付て、いかにかた〳〵われりんげんのそむき、がいにまかせて、ふるまふうへは、さためて君の、ちよつかんをかうむるべし、さればむかしより、てうてきとなりしもの、一人として、ほんいをとげたるものはなし、よく〳〵物をあんするにあたるかたきは頼光なり、いざ先此たびは、いつちべも立しのび、じせつをうかゝひ、頼光を打取へし、然らは人あまたにては、かなうましとて、らうどう共には、いとまをゑさせ、れいの四人のもの斗、以上しう〳〵五人、打つれゆきかた、しらずしのびしは 三重すさましかりける次第なり、さるほとに、都には、きつね川に、いくさあるときこへければ、四天王をはしめ、其外のしよ侍われも〳〵とはせ來りとうざい南北を、はしりめぐり、かなたこなたと、たづぬれと、かたきもみかたも一人もあらずして、たゝ打うたれる、しがひ共は、さんのみだせるごとくなり、こはふしきのしだいやと、ざい所の、もの共を、近付て、ことのやうすをたづねける、さん候いくさのはしまりは、こんてううこく、おわる所は、むまのこく、二時あまりのたゝかひに、げんし方の人々御大將をはしめ奉り、その外の人々、なかみつ殿とやらんも、いさぎよくもはたらきて、皆皆打しになされて候、扨かせんおわるとひとしく、かたきの大將、清村殿とやらんは、しよぐんせひに、いとまをたまわり、皆ちり〳〵に、まかり成候、清村とのは、わづかしう〳〵五人にて、ゆきがたなくなりた

まひ候とはしめをはりをことねん頃にぞ、かたりつつおいとま申てさと人は、をのかすみかにかへりける、四天王是を聞、扨はよしのり、なかみつ、かなわて打じに、ありけるかや、せめてわれ〳〵、一人なり共つききたらば、かほどまでは有ましきにゑゝ口をしきこと共かな、一せのふかく是なりと、四人めとめを見合て、はら〳〵なひてぞいたりける、中にもきん時、なみだをおさへ、此うべはとかふ申におよぶまし、たとへいつくの、うらはへおち行たり共、南はくまの、なちのをき、北はゑちこの、あらうみ東はつかる、そとのはま、西はちんぜい、はかたのつまでも、をつかけおつつめ、たつねあひ、此ほんもうをとぐへきに、打立たまへ人〳〵と、はやかけ出るを、渡邊取ておさへ、のふけつきにはやるも、ことによるぞ、かやう成時に、いらちぬれは必ふかくを取物なり、おもふにかたき、跡をおそれ、こまをはやめておち行べし、然るをわれ〳〵、いか程てひとくをひ行共、さら〳〵もつてかなふまじ、日本ひろしといへ共、わつか六十餘州いつまでかくれとぐべきぞや、我〳〵かくてあるならば、いかでほん望とげざらん、只何事もそれかしに、まかせられ候へ、それしを一時にけつするは、ちかふしてなりやすくなからへくろうをつくすこと、とをふしてなりかたき、道なれは、何れも皆、すかたをやつし、國々をめくりつゝ、清村か有所を、聞出しいそぎ、都へつげられ候へ、一せの忠せつ是ならんと、泪と共に申さるゝ、諸侍共承はり、渡邊か一言を、ほとんどむねに、つうだつし、いさい畏て候、ずいぶん尋出し、ちうしん申候はんと、すぐにそれより人々は、おもひ〳〵にわかれ、心の内こそゆゝしけれ、扨四天王の人〳〵は、草村にすてたりし、よしのりなかみつが、くびを尋出し、むねんながら力なく三重ていとをさしてそ、歸りける、都になれば、頼光の御前に罷出一々次第を申上る、頼光大きに、おとろかせたまひ、何よしのり、なかみつは、打じにして有けるか、こふんをせめて一人なり共、さしそへ下ししものならは、かくやみ〳〵とはせさせし物を、ゑゝ口をしの次第やと、かうくはいあれとかいぞなき、扨其後に、二つのくびを御らんして、扨も〳〵よしのり仲光か、忠義の道をたがへずして、いさぎよき打死は、さすかけんしのもんようたり、おもへはをしきもの共を、やみ

やみと打せては有よな、いつか敵を打取て、此者共か、きやうようには、ほうずべき、思へは〳〵むねんやと、忝も御大將、さうがんに御涙を、うかめさせたまひければ、四天王をはしめとし、其さに有し諸侍、みな〳〵泪をながさるゝ、其後頼光、御泪をおさせたまひ、いまはなげきてせんもなし、よしのりなかみつか、あとゝふらひてゑさせよと、御しやていゑんかく坊に仰付られ、ほうしになして、御跡を、とふらひたまふぞ有がたき、其後の御ちやうにはいかにめんめん扨も、清村かゆくすゑを尋に、つかひしもの共か、さうを待かみちなれ共、こつずひにしみわたり、まつもまたれぬ、しんていなれは、それかしも一命かけて尋出べし、此うへは清村を、打ゑすは、二度ていとへ歸るまし、何れも、よつくかくごいたされ候へと、仰けれは、四人の人々承り、おろか成御ちやう候、天地をくゝり、天のかけらは、力およばず、此しやばせかひにだに、有ならば、なとかあまし申べき、はや〳〵御よういい候へと、皆一同に申上る頼光御ゑつきましまして、扨いずくよりか、尋んと仰けれは、渡邊承はりそれ人はねにぶすと申候へは、まづ北國の方を、御尋あれかしと申上る、頼光けにもと思召三重やがてしやうそく、なされける、ふるびたるかたびら、打はをり、ごんずわらんぢ、しめはひて、すけの、おかさでかほかくし、ぢよのものはつれたまはず、しう〳〵五人すこ〳〵と三重御所を出させたまひける、頃しも時はかみな月、中の五日のこと成に、ほくろくだうへと心ざし、いつかかたき、清村に、あはた口こそめでたけれ、はやくも爰に大つのうら、打でのはまよりおぶねにめされ三重かひろはるかに、こがれゆき〳〵うらうらやま〳〵打ながめ、なみにゆられてたゝよへり、頼光のたまひけるやうは、いかにかた〳〵、せんちうのつれ〳〵に、かじんのつらねをきたりし、此水うみのうら山の、めい所をかたりさかすべし、まつめでにみゆるは、せたのはし、なみまになかれてほの〳〵と、ろはんかくも井のかけはし共、かゝるけいきやいひつらん、つゝくながめは、石山寺、かのいにしへの、藤しきぶ、此寺にこもりつゝ、大ひのかけをたのみてこそ、こすいにうつる月をみて、すまあかしの、まきをかきはしめ、ほとのふけんの、六十帖中にも、わかむらさきのまきそのかんなれはとて、むらさきしきぶ

とめされしと、聞しをこゝにうつしみてげにも〳〵ゑならぬうみつらに、山田やばせのわたしぶね、たびのならひのおもはずも、くもゐのよそにみし人も、おなしふねになれころもたちわかれしも、そでぬれて、いそうつなみのたへまより、三井のふる寺ほのみへてしもよのかねや、ひゞくらん、なにをたよりにからさきの、ひとつ松さへ、冬木せで、ちとせの色やむすぶらん、そなたはしがのうら、ちとりはねをは、水にとぢられて、しばしはあさるかれあしのよしやおもへは何事も、神にいのりをかけをひの、忝も此ごんげんはな、たつの三てん、よこの一てんよこの三てん、たつの一てんと、ちかひたまふによつて、御なを山王こんげんと、いわ井、王城のきもんを守りおはします、やれあれをみよ方〳〵、ひらやよ川のよあらしに、おき行舟のほをかけて、こゑ打あぐるかたかたのおはれと聞ゆる斗なり、みかみいぬかみかゝみ山、高枕して、とこの山、いわこすなみ打おろし、神といふも、白ひげの、やとうのひかりしん〳〵として、いとしゆせうさまさりけり、をき中に〳〵、くろみて物のみへけるは、竹にむまるゝちくぶしま、辨才天女とふしをがみ、にをの入うみほのかにて、しづかたけよりふくあらし、みねの白雪さそひきて、なみのまにまにちりくるは、花かとのみぞうたがはる、はや今づ、おきも程ちかし、をせやかん取ほにこへかけよ、承りて舟子共、聲をそろへて、とんどろたんこ（本ノマヽ）〳〵と、ろひやうしのをともかすそひて程なくかいづに付せたまふ、各舟より上らせたまひ、と有所にお宿をめし、舟ぢのつかれをはさらるゝかの頼光の御しんてい、四天王か所存の程、何れをどれとたくらへん、君々たれはしんもしんたりと、上下萬みんをしなへ、扨かんせぬものこそなかりけれ

第四

清村きのめの城に籠井たき山源家へよ力

かくてそのゝちよはほの〳〵とあけければ、かりのやどりを出たまふ、頃はしも月はしめつかた大ゆきふりてさむかりしかげにもつきせぬ、しきしまのみなれぬさとの、なつかしやとそなたの方をみたまへば、まつの一村あるもとにくびきりならべ、たかふだそへてかけてあり、立よつて御らんあれは、何〳〵源

の頼光からうどう共、國〳〵をめぐりつぢ切がうだうするによつてかくのごとくおこのふものなり大ゐの大じん清村とかひて有、いづれもよこでをはつたと打、扨は國〳〵へさしつかひし待共、かたきにゆきあひうたれぬるかと、よく〳〵立より、みたまふに是はいりゐの藤次、そなたにはあしやの太郎、何れもつよくはたらきたると、打みへておもてにきず、二か所三か所、かうむらざるは、なかりけり、頼光御泪をはら〳〵となかさせたまひ、しばし物をものたまはねは、渡邊もせきくるなみだをおしとゞめ、今ははや、きよ村一かたならぬ、御かたき、こつすひに、とをりてぞんずるなり、たとへはふりつむ、ゆきにうつもれてのばらのつゆときゆる共、こよひは此へんをはなれす、心をつくしうかゝひたまへ渡邊かくせとして右のうてさひかゆけれは、ひつぢやう事にあひ申候、そのずひさうしきなみに候と、申上る、よりみつ聞召それかしも、何とやらん、心に物のかゝるなり、いさゝらはこなたへと、みきはの方へ立よりたまふか、中にも公時は、みへさりけり、こはいかにと人々はせんき有し所へ東の方よりゆきふみちらし、ゆらりゆらりと、あゆみ來る、やあなんぢはいづくへゆきて有けるそ、さん候此べう〳〵たるのばら、山中にていか成くせものに、あはんもぞんせず、然るにかんきにとぢられつかれてはいかに、心かたけく共何のやくにもたつましとぞんし、そのようのためにさとに出、是をもとめてまいり候、君も聞召され候へと、あはいひをしたゝかに、さゝばにつゝみ、御前にさしいだせは、頼光なゝめにおほしめし、やかて取あげ、きこしめしだい〳〵にすゝめたまふ、やう〳〵ゆきもはれけれは、きん時申けるは、是でこそなれ、此うへは、しゆらたいしやくの、あつき共か、何程きたつてしやうげをなす共、とうはつよるゆきははるゝいかでかあまし申さんやと、うでをさすつて申ける、おゝいしくも仕りたりとて、御きげんはなはだ、かぎりなく、とある山かけに、大き成いわあなのありけれはをのをの立入たまひける、日もはややう〳〵くれけれ共、ともしひとても、あらばこそ、たゝまう〳〵しん〳〵としてこらうやかんの、なくころもをのかさま〳〵心ねありてや、さけふらん、いとゝさひしさまさりける、やゝありてきん時申けるやうは、まことにかゝ

る、なんぎやうくぎやう、なさるゝも、是みなかたきのゆへなれは、いつか扨きよ村にめぐりあひ、むねのけふりを、はらし申さん、けちるんあれや、日天月天、南無八まん大ぼさつと、手をすつて身をもたへ、きばかみならし、はがみをなしおもひ入たるきせひのてひ、誠にしゆしやうにみへにけり、さだみつ是をみて扨々きん時のをくそこもなき、きねんのていなどか佛しん三ぼうものうしゆうなくて有べきや、そうじてかゝる山中にて、きんのはなしをいたすれはかならずへんげのあらわるゝと、むかしよりも申、ならはし候へはいさ〳〵其物かたりをはじめてまるんのものを、引出しかんやのつれ〳〵はらし申さん、めんめんいかにといへは、頼光聞召、是日本一の事を、申出して有、いで〳〵頼光、かたつてまはさん、何れもちかふよりて聞たまへ扨もそれがし、十一歳の頃かとよ、我きうばの家に、しやうをうけ、源家のちやくしたれは、いくせのこともあはん身かおろそかにては、かなふまじ、心ねをためさんと、おもひ、ある時よふけ、人しづまりて後、しのびて、一人やかたを出、とりべのにわけ入てかなたこなたと、はひくわひするに、つくれるつみのきへやらず、がうくわにもゆるつかも有、かす〳〵のそとばごりんをかきわけ〳〵とをれ共、是ぞとおもふふしきもなし、あまりのことのもだしさに、とある所をみてあれは、大き成つかあなあり、やかてかの、あなへとび入て、みてあれば、死人を其まゝ打入るあなとみへて、かみをみだせる女のしがいもあり、又二つ三つに、切入たるからだも有、頃はかみな月中じゆんのこと成に、むらさめ、一村さつと通り、いなづま天をかゝやく所に、物のあしをと、きびしくきこゆる、何ものやらんと、心をすまし待うけしに、何とはしらず、どうとなげこむ、はつとおもひ、さぐりてみれは、死人のたうより上なりはるかにあつて、又どうより下をなげこむ、それがしやすからずおもひ、やかてをつ取、なげかへせは、又はなげこみ、かへせはなげ入、三四五ども、せりあひしが、うへよりいらつて、とびこみし所をおしならべてひつくみ、そのよのうしのこくより、うへになりしたになり、爰をせんともみあひしか、つひにせうぶも、つかずよあけてみれは人にて有、是はといふてたがひにけみやうじつみやうをなのりそこにて、其まゝしう〳〵の、

けいやくし打つれて立かへりぬ、それをたれそといふに、是成渡邊にてあり、其時それがしは、十一歳、つなは十歳、にてありしか、きのふけふとは、おもへ共、はや卅年におよびて有、今迄つゝみて、すぎぬれ共、こよひのとせんに、かたりしそと、こしかたゆくすゑを、さんげあれは、人々よこ手を、はつたと打、扨もたゞしすくなき、御ふるまひ、とかふ申におよばず、きくにぞきもをひやしける、わたなべ、つく〳〵うけたまわり、誠におほせのごとく、何事も〳〵、はやむかしがたりと、まかり成候さあらばそれがしも、身のさんげを仕らんと、いひもはてぬに、何ものとはしらず、いほりのまへをたいまつふりたて、ゆきふみちらして、とをりしを、火かげにすかしよくみれば、六尺ゆたか成、大のおのこ、太刀をよこたへ、さもすさましき、けしきなり、四天王きつとみて、さあくせものよ、のがさしと、われも〳〵と、をつかけて、取あし取、くびをおさへ、たかてこてにぞ、いましめける、扨よくみれは、ほうしなり、渡邊つく〳〵打ながめ、あらふしざや、此入道は、何とやらん、みたるやうにおぼゆるか、人々いかにととへは、きん時聞て、されば

われも、さやうにそんするとて、みあげみをろし、打まもり、やれみたやうなこそだうりなれ、清村からうどう、やくろの八力、かんせい成は、いかにごぼう、ひさしうこそ候へ、われ〳〵は、つなきん時、さだみつ、すへたけにて候か、ごへん共しらで、なわをかけ、近頃そさう成事をいたしせうしにこそ候へと、かんらかんらとぞ笑ひける、頼光聞召、何清村か、らうどうとや、してなんぢがしうの、きよ村は、いづくにあるぞと、のたまへは、かんせい聞て、君は君、しんはしん、きやうげべつでん、ふりうもんしと、こたふ、渡邊聞てやあもつたいなくも、其ごは、三がいのどくそん、しやかきんげんわとのか、心へとは、ばつくんにちがふべし、よしなきことをいわんより、しうの有所を、まつすぐに申せ、さもあるにおゐて、なんぢか命は、たすけてゑさせん、いかに〳〵と申けるきん時聞て、こはなまぬるき、いひ事や、きやつかつらつきにては、何とさひなみたまふ共、とてもゆくゑは申まし、心づくしに、そこのきたまへと、取ておさへ、くびねぢ切て、すてにけり、渡邊是をみて、あゝそこつなり、きん時、何とぞして、とひをとさんと、おもひし

に、あまりみしかき、しわざかな、乍去こよひの大ゆきにべちに、とをるものはよもあらじ、しよせんきやつか、あしあとを、したひ、たづね申さんと、あれは、君をはしめて、人々は此ぎもつ共然るべしと、ありし所を出たまひ、ゆきのうへなる、あとしるべに、尋行、かなたこなたと、みわたせは、ゆんでのいわかけに、一つのいほりぞ、ありにける、あやしさよとて、やかて立よりさしのぞき、みたまへは、清村しう〳〵五人、いほりの内に、ならび入る、日頃のねがひ今なりと、皆かけいらんとするを、頼光取ておさへいや〳〵こゝにて、うつてはせんもなし、ほつするむねの、ありけると、たちより、あみどをほと〳〵と、をとづれたまふ、内より、すへつくかといへは、いや源の、頼光なり、清村殿は是に、ましますかと、のたまへは、大きにさはき、どうてんし、たちかたなよと、ひしめけは、いやさやうにおどろきたまふな、まつしづめて、物を聞たまへ、扨もこのたびの、らんしやうとかくのせんぎにおよひ、両らうせきに、罷成、それがしも、ちよつかんをかうむり候、さればてうてきとなり、くちはてんは、むねんに存、とかくきはうに、みぐりあひ、君の御前にて、せひの次第を、申上たかひに、こめんかうむらんため、かやうに國々を、しゆきやうせしに、ふしぎに是にて、かうがん申たり、いさ〳〵都へ同道せしめ、うむのしやうれつ、きはめ申さん、日頃の御所ぞんとは、ちがひみれんにおぼへ候と、あれは、きよ村聞て、ことのだんいさひ、あひ心へ候、まづそれに、しばらく御待候へ、心得申と、先いほりのへんをのきたまふ、時に清村、らうどう共を近村、かれらか爰を、しるべき事にあらず、扨は八りきは、きやつらに、ゆきあひ、此へんにて、うたれたるは、ひつぢやうなり、たゝ今頼光、申せしな〳〵、皆いつはりと、おもへ共、かくぢう所を、しらるゝうへは、かれかいふにまかせて、ともなひ出道にて、ゆだんのみすまし、うつべきに、何のしさひか、あるへきや、人々いかにと、ありけれは、もつ共此き、しかるひやう候、はやとくとくと、せんききはまり、扨あみどをひらき、まつこなたへ御入候へと、内にしやうし奉り、両将れいぎたゞしく、たいめん有、清村申さるゝは、誠わづかのぎに付て、たがひにしんいの、けふりを立候こと、是ゐんくわとや申さんと、ありければ、頼光聞召、仰のごと

く、ふりよの仕合に付、ごゑつとへだて候事、心にまかせぬ、うきよの中、たゝなにゝ付ても、へんしもはやく、打立申さん、いさい心へ候と、兩方しう〳〵五人にて、たがひに打つれのぼらるゝ三重心づかひぞ、すさましや、清村方には何とぞして、ゆだんのみすまし、うたんとて心をつくしねらへ共、めいたひぶそうの、四天王くつろくていにて、ゆだんなければ、清村もかねてのしあんとさういして、いそく心もなけれ共、めぐり〳〵て程もなく、木のめうけに付たまふ、げにしん〳〵たる、山かけやと、かなたこなたと、なながめたまひし、其ひまに、清村しう〳〵五人のもの三重みきはの、そわへ（本ノマヽ）ぞにげにける、人々大きにおどろきて、あとをもとめをつかけて、みたまへは、いわをうがちへいとなし、大もんきひしくをしたてたり、なむ三ぼう、かやうにないがまへを、してをきたりしを、しらずして、ゆだんたいてきと、なしたる事の口をしやと、はがみをなしてもたゆれと、城のかまへきひしければ、おにをあざむく人々もあきれはてゝぞ、おはしけるかゝりける所へゑちぜんの國のぢう人、たき山大ぜん、みちのぶは、一もん家の子、八十五き、もみにもふてそはせ來る、頼光御らんじて、やあめづらしや、たき山、して〳〵是は、いづくへの心がけそや、さん候大ゑの大臣、清村と、なひ〳〵申合候ゆへ、きのめの城へ參り候と申、公時聞もあへず、やあ汝は、てきと一身とや、いでいくさ神をいわゝんと、とんでかゝるを、頼光しばしと、しづめたまひ、あつはれかう成たき山かな、清村と一身なり共、わかまへにては、さなしと、ちんぼうあるへきを、一すぢに申さるゝ事、日頃聞及たるより、きへんふかきゆうしかな、御へんかやう成弓取をあくぎやくぶたうの、清村と、一身させんは、こかねをていどへなくるがごとし、それくさも木も、皆大君の國なれば、いづくかてきの、すみかならん此りいかにとのたまへは、道のぶ聞て、きはせんきんよりおもく、侍のことばは、りんげんにひとし、されは日本が、一所に成ても、かなふましき、人々へ、ましてそれがしなどか、てむかひいたさんこと、とうろうが、しやてつにむかふに候へ共、かくまいりあふこそ、ふうんなれ、かばねはやぐわいに、さらす共、一ごんのやくたくを、いかでかひるがへし候はんと、申きつていたりける、頼光かさね

て、仰けるは、のふぎはせんきんより、おもしとは尤なり、扨二天の君の御をんは、かろきやおもきや、それ四をんの、中にすぐれて、ことにたつときは、天子のをんとしるされたり、よく〳〵くふういたされよ、いかに〳〵と仰ける、道のふ、此一句に、たちまちしんいに、つうたつしけに〳〵、あやまり申て候、物のかろきとをもきとを、只今こそはつめい仕て候、とかふとをぬいで、草村にへいふくすれは、頼光御ゑつきまし〳〵て、あたつてくだくる、たき山かな、せんぎか一きに成までもへんずましきしんてい、たのもしきゆうしやな、こよひはよすから、ないだんせしめ、けいりやくをめくらしてざんしに、かたきを打べきなり、いさ〳〵まづ〳〵こなたへと、有し所へしのばるゝ、頼光の御しんてい、ちしんゆうの三どくに、そなわりたまふめい将やと、四天王のともからも、いよいよいさみをなしける、ゑい〳〵さゝなみや〳〵、はまのまさごは、つくる共、源家のみよはよもつきし、扨あつはれきたいの、大将ぐんやとみなかんせぬものこそなかりけれ

第五

頼光ちぼう並清村しう〳〵五人うたるゝ事

かくて頼光、たき山をちかくめされ、して清村か、此所にこもりたる、所存はいかにとのたまへは、さん候清村、さんぬる頃、ゑちぜんの、つるかに、下ちやく仕り、とうごくほりゑ、本じやうのともからを、かたらい此いわやの城を、やうがひといたし、のとかゝしなの、並にいにしへの、らうどう共を、ひんきをもつて、まねきよせ、しのび〳〵に、此城にこめをき、其身はしう〳〵六人、有かをいづく共しらせず、十日廿日に一と二と、罷帰り、ぐんぜひ共に、たいめん仕り候、なにしおふたるゆうしにて候へは、さだめてふかき、心入のあるらんと、存斗にて、御座候と申上る、頼光につこと打わらひ、たゝかつてんたり〳〵、のふ其心はの、清村しう〳〵六人、取のきしは、山中にかくれいて、ゆきゝのものをなやまし、ほくろくだうに、へんけすむと、ふうぶんせば大ゑ山のれいにまかせ、頼光をこせいにて、下さんためのけいりやくなり、尤はかり事は、かなひたれ共、をのか心の、ゆううすきゆへ、本ノマヽけつくわか身のかいとなり、はらひかねて、にげいつ

たり、いかに四人のともからてきをあな取しゆへ、よしのりなかみつを、うたせて有、又此たひも、ての内ににぎりしを、はなちて有此うへは、とつくとくふうを、めぐらさんと、さま〴〵御しあん有所へ、きんこくのしよ侍、われも〳〵もはせ、あつまり御かせいのため、さん上仕候と、申上る、頼光しよぐんに、たいめん有、さつそくの参入、よろこひ入てこそ候へしかしながら、それかし、そんずるむねあれは、何れもぢんやをかまへ、まつ〳〵餘所に、ひかへてたへ、かしこまつて候とて、をの〳〵ちん所をしつらひて、まづかたはらにぞひかへける、其後きり山(本ノマヽ)をめされ、かくのだんに、けいさくをめぐらす間、ごぶんはゆふさり、よに入て、かやう〳〵にかきしたゝめ、清村方へ、やふみをおくりたまへとあれは、畏て候と、仰のことくに、かきしたゝめ、すてに其よも、くれけれは、御前を罷立三重うへの山へぞあがりける、さるほどに、かくて清村は、諸ぐんせいをめしあつめ、いくさのないだん、はしまる所へ、きり山ゆみをつ取、さしかため、よつひきひやうど、はなちける、清村かゆんてなる、かしの木に、とをなりしてはつしとあたる、やつきの平田きよ丸、御前を罷立、何やらんと、さしよつてをつ取みれは、やぶみなりやかて君の、御前にさし上る、清村ひらいてひけん有、其狀にいわく、ない〳〵のけいやくを、たかへず城内へはせまいらんと、ぞんし罷こし候所に、頼光への、かせいのともから、はう〳〵よりうんかのごとく、はせあつまり、四方を取まき候へは、城中へ入もいられず、ひくもひかれず候ゆへ、熊頼光の、みかたにしよくして候、其しさいは、いくさ中ばにうら切して、城中へ、はせ入申さんしよぞんにて、かうさんいたし候へ共、中〳〵頼光、一せんはけむしあんにあらす、たゝいつまでも、年數をおくり、ひやうらうつめと、かくこいたされ諸ぐんに、四方を取まかせ爰かしこの、やく所〳〵には、らんぶゆふきやう、みち〳〵て、ちとせまんねんも、ふりぬべきていと、みへしうへはついにめつぼう、有へきなり、何とぞ御しあんまし〳〵て、一たんわぼく然るべきものなり、よつてやぶみくだんのごとし、大ゑの大じん清村公へ、たき山大せん、みちのぶはんと、よみあげける、さしもたけき、清村もいさむ心もたゆみはて、いかゝはあらんかた〳〵と、せんきひやうぢやう

とり〳〵なり、かゝりける所に、つなきん時二人のもの、たきやまに、城のあんなひ聞すまし、大手のもんにさしかゝり、大をんあげ、わたなべのつなさかたのきん時、わだんのつかひに、まいりたりと、たからかにぞよばゝりける、かくて城中の人々は、たき山かやぶみにて、つよき心もよはりはて、さそふ水あらばと、おもふ折ふしなれば、それこなたへと門のひらけは、二人は城の内に入、やゝしばらくしきだいし、扨參だん、べちぎにあらす、くはんばくとみをかきやうより兩將へ、御くだし文の御座候、是御らん候へと、さしいだす、清村うけ取、をしいたゝき、つつしんてはひす其ごにいわく、天いをうけて、下す狀のおもむき、日月そらに、あきらかならんとすれ共、ていしやにやとりて、かけくもる、つら〳〵いにしへをあんするに、かのしうやうさんに、わらびをおりし、世をすて人も、せんしのそむき、かたきりをはしる、なんそや年頃、ちよくをんのもつて、人と成しともから、わたくしのじやきをはさみ、わうじを、さまたくるのでう、げきりんはなはた、かぎりなし、はやくその身の、ひをあらため兩けわばくせしめ、上らくあるにおゐては、右のあやまりを、ちよくめんなり、二度てうのふくしんたるべきものなり、ていれいはりんげん、くだんのごとし、大るの大しん清村、源の頼光へと、たからかにそよみあけける、時に渡邊ひざ、をしなをし、さいせんも頼光、しゆ〳〵に申され候とをりしきよくさら〳〵候はす、然るにしやすいのなみ、しきなみに、御たてあり、よしなきごるつの、あらそひゆへ、ばんみんのくるしみ、たかなすわさと、おほしめす、それこうのうたがひを、おもくしつみのうたかはしきを、かろくせよとの、ほんふん有よく〳〵くふうまし〳〵て、いそき打つれ、上らくあるにをゐては、しよみんるの御じひ、是にますこと候はんやと、ことばをつくしあひのぶる、渡邊かべんせつ、ふるなしくはうも、かくやらんと、うたがひさつてぞかんしける、一すぢに、おもひつめたる、清村も、たちまちむねにやつうしけん、誠わういをさみするとかちう〳〵たり、此うへはせんひをひるがへし、にうわのしんのおこすべし、然らばこなたより、ししやをもつて、今までのあくき、ほとんどぐにん、しやうろにしたかひ、奉るのたん、じやうぶんにたつし、とてもの事にりん

しをちやうだいせしめ、しやうらくよろしくそんするなり、此おもむき、頼光へ申され候へ、わたなべしすましたりとよろこび御ぢやうのたん、御尤なり、さらば其だんを申さんとて、御前を罷立、やく所をさしてそ、かへりける、何とかなひだん、したりけん、さだみつすへたけを、めしつれ來り、たゝ今のとをりを、申きかせ候へは頼光も、きこうの御しんていと、とういにて候ゆへ、則都へのつかひのため、此二人のものを、つかはされ候と、申けれは、清村聞て、さあらば此方よりも、つかひをそへ申さんと、やつきのきよ丸、石田の左門を、兩使とさだめ、以上四人打つれて、ていとをさして、そ、のぼりける、其後渡邊、御前にひざまづき、何事も、じせつとうらい、まづめでとうこそ候へ、されは物には、すんぜんしやくまとて、かならすさまたげあるならひ、此たひの御くはぼくを、くんせいの其中に、そねむ物もや候はん、いよ〳〵諸人にも、いつちさせんためにて候へは、つかひのもの共、ていとへかへるまでは、我〳〵二人は是にまかり有候はんと、そこひなきやうに、申ければ清村聞て、あつはれごぶんは、日本のたからたるべきゆうしなり、かくぎしんふかきめん〳〵を、うたがひたりしそれがしか、ぐちのほどこそ、おさましけれと、しんていをのこさず、うちくつろぎ、てうしかわらけすへならべ、かす〳〵めぐるさかづきの、ひたすらゑひをもよふせりかくてよものゝはなしになりしかは、いろ〳〵のぶゆふ、むしや物がたりに、よもしんこうにふけゆけと、清村ならびに二人のかうけん、つなきん時五人は、めをすましてぞかたりけるもとよりきん時、けつきにいさむ、おのこにて、ひさたてなをし、とかくいくさといつは、てつめのせうぶにしくはなし、ひろうながら、しかたをいたして御めにかけん、是のふいか成大かうの、ゆうしも、かやうにいたけは、はたらく事かなはずと、きやうけんにもてなし、二人のらうどうを、むんずといだき、はたらかせす、わたなへ心へ、とひかゝり清村を、まつさかさまにけたをし、ちうにひつさけ、本ぢんさしてかへりしは、心ちよくこそみへにけれ、其内に公時は、二人のものになわをかけ、御前にひきすゆる、大將御きけんかぎりなし、しかる所へ、都へのぼり、二人のらうとうもかねて、ちりやくの事なれは、さだみつすへたけ、みちにてめしと

り、御前にひつすゆるらいくわう、御らんじて、いまこそ、のそみはかなひたりと、やかてみやこに、ひきのはせみかどに、そうもんなされ、はくちうに、五人ながらかうべをはね、てんか一とうに、おさめたまふ、けんしのいるの御はんじやうせんしうばんせい、めでたしとも、なか〳〵申はかりはなかりけれ

寛文八戊申菊月吉日　　八文字屋八左衛門板

四天王筑紫責

第一

さてもそのゝちひそかにおもんみるにういのさかいせんあくのだうり二つあり其比天下のしやうぐんをばたゝのまんぢうの御子頼光の御しやていかはちのかみみなもとのよりのぶとぞ（おろ）かうしけるしかるによりのぶふたうをのみたしなみふんをまなびたまはねばしゆ〳〵のちんぼうをあひし日々におこりをきはめたまふこゝに又はりまのかみほうしやうむさしのかみわたなべのつなみかわのかみさかたのきんときたうとうみのかみうすいのさだみつするかのかみうらべのすへたけ是ら五人の人々はらいくわう御たかいののちも都にあひつめ申さるゝ中にもわたなべのつなはちやくしみたのくはんじやをめしぐしてさいきやうせられたり（こと）扨（は）御まへにはあくにんともあひつめ御きけんよろしきことのみ申あげ五人の人々はあるにかいなきふせいにてすぎにしかたのおもはれてしゆつしも今はうと〳〵しくひとま所に一しよにならびいられたり（ば）かゝる所へ三川の國あすけの兵衛かたちよりもめいばなりとてくろうむまの三ずんほと成をたてまつるけふも其けしきよのつねの馬にかはりほねあかりすぢあつくひとへにりやうのごとくにてひの内に七八十りづゝやす〳〵とぞはせにける頼信きよかんかぎりなくいかにかた〳〵むかしかううがすいとてす千里をかける馬有とは聞ぬれ共それはもろこしの事あきつしまが其内に天まのあらはれたることつたへきいたるためしなし此きつきやうはいかゞ有べきと御尋ね有ければたくまのせんしまさよりとて御まへさらぬおこり物罷出て申様さればかやうのりうばのあらはるゝ事は御まつりことせいめいたるゆへなりそれをいかにと申にたいせいじんかうしのよにはきりんあらはれしゆうのぼく王の時は八ひきのりやめいで其とくにより中天ぢくに至りしやくそんの御せつほうをちやうもんしてはつくのげをうけらるゝほつけのなかのしんひの文是なり其後じどうと申どうじに右の内ふもんぼんをしめしたまふどうし二つのげのとくにより八百年ま

でたもちかうそとなをかへぎのふていにつたへそれほんしやうへ渡り今にをいてたへせずてうやのきくすい是なりかゝるめいよの經文三國に渡ることひとへにりうめのとくにはず（本ノマヽ）や御よはんじやうの基ひなにか是に過べからずたとへば五か國三か國にかへても御てうあい候はんな此むねにて候へしとさもいさぎよくのべければ君（ちふ）をはしめ一さの人々あつはれぶんふ二道のめいじんやとふしふかくかんしていられたり（ことは）然る所に五人の人〳〵はまゆをひそめてきゝいられしか中にもわたなべあまりきゝかねばつざよりつつといでいかにまさより只今の物語は近比承りごとそうに候なり去なからかみよはしらずしんむよりも此かたりうめの日本へいでたるためしいまだ聞及ず候へばぜんあくいかゞ申がたしつく〳〵ぐあんのめぐらし候に是きちしには候まじ尤とうせいの御まつりことにては今にもよのみだれんことうたがいなし時に大將馬にて日に七八十りをはせたまふ共たれかはもつてつゞくせい一人も候まじ然らば君御一人ばかりにて色（とは）なにのえきか候ましさうしてよにめつらしき物をはくんしのたからにすべからずとせい人もいましめをかれたりまたしゆうのほくわうの世にあくせいあらはれ八ひきのむまと成ほくわうふかくもてならしほうばつき（本ノマヽ）よのほかいたかすといふところなかりしかば七ひやうのまつりとしにおつてすたれついに國みたれけるひそかにこれをおもんみるにきちしにはなくしてきみのこゝろをさまたげんがために天のあくまむまとあらはれ候とさつし申候いそぎたゝやさうにすてられ天下一とうにしたがひみちとう〳〵たるしんぎのほうをおこなはせたまへ地かなしきかなやたうせいのありさまひやうりねいじんさゆふにはひこりざんじやの申むねにまかせたまひさいなきものをむたひのつみにおこなはるゝ事申てもあまりありかようにに申あぐるといろきよいにちがいてたとへばやつざきになさるゝともふだいさうでんのわたなべかきみのあくしをいかでかよそにきゝてあるべきなにやうになりとも御はからいましませと（本ノマヽ）なきふしなみだをながし申ける（ことは）よりのぶきこし召らうにやくくちににがくきんげんみゝにあたるとかや大きにきしよくかはりたまひおことが申事は一つもさらにわきまへず御ざをたゝせたまひ

をくをさしてぞ入りたまふときにまさよりまかりいでいかにわたなべひやうりねいじんきみのさゆうにあるとはたが事を申ぞわたなべ聞て是やぬす人といへば手をいだすとはかやうの事をや申さんひやうりねいじんとはおのれが事よせんしをきゝもあへずなにそれがしをひやうりのものとは何事ぞ其しさいをきかんとざを打てぞ申ける おふしらずは申てきかせうそれねいじんとはよのなかのさうどうたみ百しやようのなげきもしらずきみの御きげんいかにもしてきやうに身をへつらうをいふなり又ひやうりとはほうばいのかげごとをきみに申上ばんしうらをもてあるをいふ是にわとの一つもちがひたる事やあるゑゑらいくわうの御時ならばおのれをあんおんにおくべきかくびねぢきつてすてんものをとちまなこになつて申ければせんしいよ〳〵はらをたてせひのしだいはともかくもまつたくきよしよをたゝせしと一もんしにとんでかゝるわたなべにつことわらひおのれがうたん太刀それがしにはよもたゝしむようのことなはたらきそと ふしたゝそらうそふいてぞいたりけるはまさよりなをもすへかねてたつとたゝずとうけてみよとうち物をするりとぬくわたなべも今はたまりかねみぢんになさんととんでかゝるを人々さうへおしわけてさりとてはおとなげなしまつしづまりたまへつなどのとまさよりをおくに入れあいのしやうじをはつたとたつるわたなべきつとみてやれたとへ八めん大わうがてつへきをつみかさねてこもるとももの丶かずとも思ふべきやおのれかやう成おくびやうものそれがしか手にかけてはゝへつて我身のちじよくといひまたでんちうなればゆるしをくぞといかりをやむれば時に四人の人々一とにはらりとたつてのふごぶんはずいぶんものをこらへぬ人なればさだめてくびひきちぎつてすてられんとおもひしにあんにさういの事かなまづあんしてもみたまへいつれもしよ侍れき〳〵のまへといひ天下に五人のまれものどもがかんぜんにて太刀をぬくことまんちうらいくはうのみよゝり此かたでんちうにてかゝるらうぜきためしなしたうきみの御心こそたらずともかつうはらいくわうのくさのかげにておほしめされん所も有かさねてじよのものゝをきてのためにとかく引出してずた〳〵につかみさかんとすゝみ出るわたな

べ取ておさへしばらく〳〵かた〳〵の申ぶん一々だうりにつまりたりさりながらたう君の御しゆつとうならひなきまさよりなればわれ〳〵かへんしうして扨こそよろしあるやらんとふうぶんせられてはかひあらじせひかんにんせられよとかへつてせいすればちからなく人〳〵はふしし丶のいかりをやめにけりことときに又みたのくはんじやつつと出て申けるはち丶の仰もつともには候へともそれかしにをいてはふつ丶とかんにんいたすまし其しさいはち丶をはしめ何れもらうたいの御身なればせけんのあさけりをおほし召わけらるゝ事はりなり此たけつなはいまださかんのわかものなれはうきよのとがめになにならん三國に聞へたりわたなべにりやくわいをなせしくせものをむなしくすてゝかへりては此わたなべか家のきずなりとかく人〳〵は御かへり候へそれがしはまさよりめが出るまでは何れも是にあひまちなされよくびねぢきつて歸り申さんとおもひきつたるていたらく ふしにか〳〵しくぞみへにけるわたなべきつとみてやれなにを申そ竹つなよきやつを人間と思へばはらもたつとはいむしとおもふべしそれはいといふむしはいか成かうけきにんのかふりをほしのうへにもやどりとまり色〳〵のりよぐわいをすれともともとよりはいと色こおもへははらもたゝずまつ其ごとくあのまさよりめもはいむしとおもふてかんにんせよといとやはらかにかんげんありければ地さしもにいさむ竹つなもち丶のことばに心もほつきとをれしほ〳〵としてかへりける ふしれいぎの程こそしゆしやうなれかくてそれより人〳〵はしよ侍にれいぎをのべわかや〳〵に歸らるゝとにもかくにもこの人々のていたらくふんふんたうのゆうし是成はと扨かんせぬものこそなかりけれ

第二

扨そのゝちかくて五人の人〳〵は一つ所にあつまりてわたなべ申されけるやうはうきよをつら〳〵あんずるに源家のめつぼうとをかるましきと存るなりあさましき頼信の御ふるまひやと ふしなみだをながし申ける人〳〵聞て誠にらいくわう御しきよのきさみとんせいするかはらきらばかゝるむねんはきかし物

をとなきふしふかくの涙はせきあへずおつるなみだのひまよりもことばとかく此うへはしゆつししてもゑきもなしいざや一所に取こもりうきよの有さまなかむべし此ぎもつともしかるべきとさかの丶をくに引こもり五人一所にろうきよして 三重日數をおくらせ上たまひける是は扨置爰に又平家のちやくりうにたざいのやすむらとてちくごちくせんひごひせん四か國の大しやうたりしかみやこのていをつたへきゝ家の子らうどうをめしあつめ誠に此きん年まではげんへいりやうわにしてみかどをしゆごし申せし所にらいくわうたんばの國大ゑやまのしゆ天どうじをたいぢの後天下の將ぐんにふせられ平家はあるかなきかのふぜいにてむねんといふもあまりありしかるに今程みやこのありさまをきくに我かてうへついにいでたるためしなきりうめいづる是天よりくだるわざわい成をしらすしてよりのぶがふかくたつとむによりつなきんときさだみつすへ竹はうせうさま〳〵にいさめけれどもよりのぶさらにきゝ入ず五人のものともうらみをなしさかのをくにひきこもるとふうふんす是ねかふ所のさいわいなり此たびよりのぶをうち取それかし天下のしゆごと成へしとふれ狀まはしせいそろへ 三重うへをしたへとかへしける此こと都にかくれなくよりのぶ大きにしうしやう有侍を近付此事いかゝあらんとせんぎまち〳〵なり時にまさよりすゝみ出かゝるせうしのいつきそうとうは何程の事か候へきそれかしわかきみさまを御とも申てそくしにたいぢ申さんと ふし手に取やうにぞ申けるよりのぶ聞召もつ共此ぎ然るへしと五きないのせいを付られ侍大將にはふぢはらの中みつが子にかはちの判官ひでみつたくまのせんしまさよりりやう人におほせ付られ 三重つくしをさしてぞ上いそかれける此こと都つくしにかくれなくやすむらはやく聞付てはことさてむねとのらうどうめしあつめみちまでではりをしてふせぐべきか又じやうへ引うけてたゝかふべきかとせんぎ取〳〵成所へ都よりのうつてよを日についではせ下りて四方のざいけにひをかけて 三重時のこゑをそ上上にける時のこゑもしづまれば大將ひでみつこましつ〳〵とのり出しそも〳〵是へよせられたる大將ぐんはせい丶將ぐんよりのぶこうの御ちやくしいよのかみみなもとのよりよし公にて候そかく申はふぢ

原のなかみつか子にかはちのはんぐはんひでみつなりなんぢは御かうをんのわすれぎやくしんのくわたてこつかをなやます其天ばついかでかもつてのがるべきいらさる事をせんよりもつるをはづしかぶとをぬぎかうさんせよとぞのゝしりけるやすむら聞てあつはれ身にあまりたるぞうごんかなおのれがしうのよりのぶこそきみへふかうをふるまふゆへいそぎせいばつしみかどをしゆごし申さんため扨こそはたを上しなりくわうげんはくくわんたいものあれけちらせとげちすればはやりをのわかものとも我おとらじと打ていで 三重ひばなをちらして上たゝかひけるさる程にいくさなかばのこと成に大將よりよしせうねんは十六歳むらさきいとの御させなかにくだんのりうめにかなかいすつたるくらをかせ御身かろげにめされしか一もんしにかけ出し 三重かたきのぢんへそ上かけ入けるす萬のぐんぜい是は〳〵ともだゆれとも其かいさらになかりけるはるかに有てくだんの馬本ぢんへぞかへりけりひでみつ是をみてやあをのれはちくるいといひながら御をんのわすれ我かきみをてきのとりことなす事はごんごにものべられずとすでにうたんとすれば此馬にはかにけしやうとなりことこくうをさしてぞあがりける ふしきなりける次第かなわたなべがことばのすへかんぜぬものこそなかりけれ時にたくまのせんしすゝみいで申やう是はひとへにげんじのほろぶべきすいさうとみへたりふだいのしうをすてゝかうさんするも侍のならひなり我にしたがへめん〳〵と 三重城の内へぞ 上入にける大將かうさんするうへはいかでかもつてこたへんと我をとらしとかうさんす其中にもかわちのはんくわん是をみていかにまさより御へんはとしころの御をんのわすれかたきと一身する事いぬちくしやうにをとりたりのがすまじきとおつかくるらうどうともしうをうたせしとぜんごさうにうつてかゝれははんぐわんきつとみてゑゝすいさんなりさう人ばらとひつくみゆんでめてへなげたをしなをもすゝまんとする所にせかはの源太くろをつたひてうしろへぬけよつひきひやうどはなちけるむざんやなひでみつのめてのかたさきへのぶかにいさせたちまちまなこくらみしが扨もかたきはなにものぞとあたりをみる所へせがはすきをあらせすかけ來りくびをうたんとするを

取てひきよせくびねぢきらんとする所へふじへの五郎かけあはせくさずりをたゝみあげつゞけさまにさしとをしかしこへけたをし心はなをもたかさごのおのへのまつとはやれともあまたのふかてなれば心はしだいにみだれつゝ今ははや是までとふしべをむんずとふまへせがはをめてへひつさげなむみだふつもろともに立ずくみしてしにゝけるつもるとしは廿七ひでみつがさいごのていあつはれかうの侍やとかんせぬものこそなかりけれ

第三

さるほとにかくてやすむらはたくまのせんしまさよりを近付てまことに人かずならぬそれがしをたのみたまふだんゑつきほとんとあさからずとふれいぎあつくたいめんして扨よりよしをばごくやにおしこめてなをもてきに物をもはせよとあまたのばんを申付三重きびしくしゆごし奉る是は扨をき都におはしますよりのぶは此こと夢にもしろしめされず御つれをなぐさまんとみだい所をともないてはなぞのに立出よものけしきをなかめたまふかゝる所へみやいのとうしはせ來りさいこくにていくさの次第一々に申上ふうふの人〳〵はきこしめしなによりよしはいけとられたるとやこは誠かあさましやとなきふしたをれふしてぞなげかるゝやゝあつてよりのぶ扨は天のあくせい馬となりけるをしらてあいせしはかなさよわたなべがことばのすへ今こそおもひしられたりふびんやなよりよしてきの取こと成事さこそ口おしかるべきとなきふしふかくのなみだはせきあへず地あらいたはしやみだい所はおつるなみたのひまよりもくどき事こそあはれなれ扨もむさんやなよりよしがおもひよらざるうきすまひなにかに付ても都のそらさこそこひしくおもふべしこんとつくしへむかふとてさもはなやかに出立てわらはがまへに來つゝ我しやく年なりといへ共ちゝうへの御名代として大將軍をかうむる事世に有がたき次第なりさりながらゑしやでうりらうせうふでふなりことにせんぢやうにてゆみ取の命をすつる事めつらしからぬ次第なりもしも此たびさいこくにてうちじに仕ると聞召候共かまひて〳〵なげかせたまふなよ是はそれがしとし比あ

が め奉りしまもりほんぞんなりめでたくかいぢん申さんまではあづけをき奉るとて此十一めんくわんをんのこしをきしはかく有べきとてかねことか ふしうらめしやさるにてもやがてがいぢん仕らんとさもおとなしやかに立いでしそのおもかげを扨 なきふし いつのよにかはわするべし いろなふ御ほんぞんさまよりよしはいけとられ候そやさればわくざうわうなんくりんげうよくじう〳〵ねびくわんをんりきたうじんたん〳〵ゑわくしうきんかさしゆそくひちうかいねびくはんをんりきしゆくねんとくげたつとちかはせたまふきやうもんをいつわらせたまふかやなふよりよしかへさせたまへみほとけと なきふし りうていこがれなげかるゝくり上 ふし しよじのあはれと ふしみへにける ことはときにふしきや御ほんぞんな ゆるぎ出三ぼうもいまだすてさせたまはぬぞや此うへはなけくに及まじさあらばかさねてのうつてにたれをかさしくださんとあんしわづらひたまひけるみだい所は聞召今此きはにはちもちじよくも入べきみちならねばとかくさかに有五人のものをたのませたまへと をしなげきくとかせたまひける大將今はちからなくじひつに御しよをあそばされいさはひやうへを御まへにめされあらましを仰付らるゝ承り候と申て 三重さがのをくへと上いそぎける是は扨をきあらむさんやな五人の人〳〵はさがのをくにひきこもり 地よをうきくものよそになし ふし月日をおくらせたまひけるいざやしゆゑんのはしめつゝせめてはうきをはらさんとつなはさけをたんぶとうけ三どかたむけほうせうにさし是〳〵一つきこしめせ御さかな申さんとあふぎをおつ取立あがりてむかしがたりをいまやうにこそはうたひけれ ふしよの中 ふしうきに付ても今さらに 下ふし思ひぞいづる ふしゆりおほへ山しゆ天どうしたいぢの時とうし人の色をさとり 地それ〳〵さき成は頼光と上をてつぢやうふつていかりしときはふしいか成天まやくじんもおもてをむくべきやうのあらざるに頼光山ぶしのなんぎやうをあなたこなたとかたらせたまひおもひのまゝにたばかりたまひしは人間のわざとはおもはれす ふしかゝる みつめいよの御大將じやうこにもあるべからずはなれ申我々かごうの程こそ口をしけれ くるふしかのもろこしのはんれいがかうめい本ノマヽなとけてのちはたうしゆこうとなをかへてかんでん

にのりをたれし事共は今さらになつかしやとあふきをかしこへなげすて（なきふしさめ〳〵）とぞなきにける地人〳〵もわたなべがむかしがたりにふしいよ〳〵あはれをもよほして下ふかくふしなみだをながさるゝは（こと）かゝる所へいざはの兵衛はせ來り是はきみよりの御しよにて候とさしいだすほうしやううけ取おしいたゞきよみたまふ其御しよにいはくひそかにおもんみるに大將のもちゆべき物はせんぞのらうどう此たびさいこくのいくさによりよしかたきにいけとられたくまのせんじをはしめみなてきにしたがひおはんぬ家のめつぼう此時なり（せめち）ねかはくはめん〳〵みぎの恨みをひるがへしぎやくとちうばつにをいてはきるつ是にすぐべからずよつてくだす狀くだんのごとしみやうゐい三年九月十八日みなもとの頼信とまひぶしよみにけるわたなべ聞ていかにみちきよかへりて申上られうはありかたき御しよのおもむき尤上いにしたがいたくは候へ共きりんもおいぬればどばにおとるとやらんにて我々もむかしとかはりらうたいと罷成ものゝやくに立申さずとかく只今ひいでられ候しわか手のしうへ仰付られ候へとごんじやうあるべしはやとく〳〵と申せばみちきよちからおよはず御しよをさしてぞかへりけるはるかにありてたじまのじゆけいはせきたりさきほとの御へんしをきこしめされそれかしをまた御つかい候まことにおの〳〵御うらみのだんもつともにて候へともかのやすむらがていをつたへきくにじよのものはなんまんぎむかひてもかなふへきに候はず御家のめつほう此ときたりことによりよしこうのいけ取とならせたまふことせうしと申もあまりあり一つはばんみんのくるしみをたすけたまふといひじんぎの二つこゝにありひらに〳〵と（なきふしなみだをながしくときけるは（こと）五人の人〳〵つく〳〵とうちきゝ扨もいはれたりこほうまことに頼義こう御じやくねんたりといへども御おちらいくわうにおとらせたまふまじき大將たるべしかるにむげにみすて奉らんこそ御いたはしし此うへは參らんとおく（り）御所をふじさしてぞあがらるゝ頼のぶ御きげんあさからずみぎのうらみをすてゝ參らるゝだんよろこびいつて候天下のらつきよひとへにかた〳〵をたのむなりとてはや五萬よきのちやくたうをわたさるゝ五人の人〳〵承り是まで參るうへは

かたきたいぢのだんいさひかしこまつて候よりよしこうを御ともしてめでたくかいぢん仕らんとぢこくうつしてかなふまじとおうけを申ごせんのたち 三重みな〳〵したくを上せられたり まひふしまづ一ばんにはけんしのしらはたまつさきにおしたつる二ばんにはきん〳〵のびやううつたるさしたいこ三ばんには五つのならひのそとばに五人のみやうしをあきらかにかきあらはしてぞ ふしさゝせける ふしさてほうしやうはひおとしのよろひをちやくしきんのひやうたんをもち大ほうし三人にしらえのなぎなたもたせしつしつとぞいでらるゝ ふしわたなべはこざくらおどしのはらまきにときんすゝかけして天ぐうちはをひつさけ下人三人を山ふしにいで立せこんかうづえのやう成くろかねのぼうをこそもたせけれ ふしきん時はくろかはおとしのよろひにむらさきのふきぬきをもちあく太郎あく次郎あくとうしといふ下人三人にまさかりをかづかせつゝひてこそはいでらるゝさだみつはあらいかわの物のぐにくれないのばれんをもち下人三人にきんのかさをきせ七人ばりの大ゆみをもたせまぢかくこそはつれにけれ まひふしうらべのすへ竹はしらいとおとしのよろひにきんのぐんばいうちはを持下人三人ははんかうにそらせくろがねの大のかまをぞもたせけるみたのくはんじやはきいとのよろいにあふぎ車のさいをもち九尺ばかりのほこを下人にもたせ ふししつ〳〵とのりいだす此人々のていたらく ふししらがましりの大がつそう又はそうがうにひげをいてすさまじかりける次第なり人々一しよに馬をならべまづ一ばんにははりまのかみほうせう卅三にてたんばの國きじんたいぢのときみかどよりそへられすなはち頼光のかうけんとなり今ははや六十三そのつきはむさしのかみわたなべのつな十五歳よりらいくわうのしんかとなりこん年六十四歳三ばんにはみかわのかみさかたのきん時われは人間の子にてなければうむまるゝとしはおほへずはこね山にてらいくわうのしんかとなりとしつもつて四十二年とおほへたり 引四ばんはたうとうみのかみうすいのさだみつ十八歳より頼光のしんかと成つもるとしは六十歳五ばんはするがのかみうらべのすへ竹十七歳よりしう〳〵のゑんのかねあたるとしは六十二扨六ばんはわたなべかちやくしみたのくはんじやたけつ

なしやう年廿二さいなにしあふたる我々か出立をみよやみよやとよばゝりてつくしをさしていそかるゝかの人々のいきをひふしたるものゝ手ほんはこれにすぎたることあらしとみなかんせぬものこそなかりけれ

第四

さるほどに人〳〵つくしに付しかは五人一所によりあふていくさ取〳〵ひやうぢやうなり時にほうしやう申されけるやうはとかくまづなにとぞちりやくをめぐらしよりよしをうばい取申さんわたなべ聞てわれ〳〵もさやうに存るなりさりながらそれかし存しいだしたるちりやくあり御心やすくおほしめせまづそなたへ御入候へとふしありし所へ立かへりこと(は)ちやくしみたのくはんじやを近付やあなんぢはしろにはせむかづてかたきのつわもの二三人いけ取て参れちといひおくるべきしさい有はやとく〳〵とありければ竹つなかしこまり候とちゝのおまへをまかり立て扨もくわうだい成ちゝこの仰かなきつねたぬきなとを取やうにいけとれとは何事ぞしかしながらなに程の事かあるべきとかたきのぢんへぞいそぎけるほどなくしろにもなれは大をん上てたゝ今是へはせむかふつわものは渡邊のつながちやくしみたのくはんじや竹つな只一きぬけがけしたるぞ我と思ふものあらばかゝれ〳〵とよばはりたりいるま兄弟是をきゝあますまじきと木戸おしひらき一もんしにきつてかかるをゑゝすいさんなりおのれらと二人ともにさうのわきにひつさげとかふに及すふし本ぢんさして歸りけるやく所になればちゝにかくと申ければわたなべ立出やあ其ものあらくなしそ是へ〳〵とありけれはかしこまつて竹つな二人のものをぞゆるしけるわたなへみていかにもかんしよくとけたるふせいにてかた〳〵をいけ取申事まつたくくひをはねんためならずそれかしはしろと一身せんとおもへともたのみていふべきたよりなしさるによつてかた〳〵をいけとつたり兩人ともにしろへかへつて申されうはそれかしは頼信のせいたうさたのかぎりにまし〳〵候間世をうらみひつこみ候所によりのぶさま〳〵にたのませたまふゆへせひなくはつかういたして候へとも

いさゝか本いんにはぞんぜず候此うへは城中へかうさんいたし申さんそれに付すぎつるいくさの時かうさんいたし候たくまのぜんしまさよりはそれがしとふわのものにて候へばまさよりをたまはるにおいてはおやこともにかうさんいたしちうをはげみ申べし是はいつわりなきしるしなりと一しのきしやうもんをかいてわたしけるいるま兄弟わにの口をのがれたる心ちにていさいかしこまり候とじこくうつしてかなふまじとほんぢんさしてぞいそきける 三重やがてしろにぞ上かへりける大將のおまへに參りよしをかくと申あぐるやすむらゑつきかぎりなく是こそ天のあたふるさいはいなりじこくうつしてあしかりなんとやがてまさよりをよびいだしあへなくくびをうちおとしじやうをかきしたゝめはやとく〳〵と申せばいるまくひを取持おくりかたきのふしちんへぞいそきけるやく所になればはことくびとしよさつをわたしけるわたなべ大きによろこびいさい承り候さあらばみやう日せめ口よりしろへはせ入申べしとつかいをかへし扨人々のやく所にゆきくだんの次第をかたれば何れもよこでをてうど打あんのほかなるちりやくかなあくしをなせしまさよりめかなれのはてこそおかしやと一どにとつとわらいける扨人々申されけるやうはごぶんを城へいるゝ事もしもたばかつてうたんとてきもちりやくをめぐらす事もあらん心もとなくおもふなりわたなべ聞ていや〳〵かたきそれ程にちゑふかきものにてなしもしもせんに一つのことあらばうでと太刀こそかぎりなれ命をすてゝきつてまはらばしろの內のやつばらいくまんぎにてふせぐともたゞ大ふうにこのはのちるにことならず心やすくおもはれよさりながらかたき心をひきみんためごぶんたちと我をいで合んはひつぢやうなりたがいにひきよくをつくしりやうほうけがなきやうにいたされよ人〳〵聞て其だんは心やすくおもはれよなにしにあやまちいたさんまことに天下に五人のまれものとなにしあふたるはかり事といひながらかたき身かたとならんこととこそよしなけれもしも五人の中に一人もかたきにうたれんこともいさしらず是やかぎり成べきかとおにのやうなる人々もなきなみだをなかしそれよりもいとま申て人々いとま申てわたなべ殿と三重わかれ〳〵に上成にけるさる程に兩はうのせい

せめぐちにいでければわたなべおやこじぶんすはなりとひまをうかゝい城中さしてぞ入にけるしろの内になりしかばやすむらよろこびたいめんし此ことしあふする物ならばなに事も御ぶんの望たるべし今よりしては此はたをさしたまへとあかはたをおやこともにわたしつゝふしをくをさしてぞ入にけるは竹つな是をみていかにちりやくなればとて年比のしらはたをすてゝあかはたをさゝんことはむねんなり此うへはやすむらがくびねぢきつて望とげ申さんとかけいづるを取ておさへやあしはらくあゝそこつなり竹つなたとへはたの色あかくとも心の内をそめばこそあすのいくさにわかきみをうばい取やすむらめをねぢくびにせんは只今の内なりゑゝ物をこらへぬわかものかなまづしづまれ〳〵といとやはらかにぞ申ける扨竹つなをあひぐして一とま所に入にける三重心の内こそ上ゆゝしけれ是は扨をき地あらいたはしや頼義はいつしかかたきにいけとられ物うきごくやの御すまいに都のことをのみおほし召いだされてほんふしさきだつものはなみだなりさこそちゝはゝの御なげきましまさんことなによりもつて御いたわしやさるにてもげんけと申はかたじけなくもせいわ天わうの御へうゑいとしてそふたゝのまんぢうより父頼信まで三代は天下の將ぐんにふせられけんへいとうきつはんの其内にたうけにむかつてかたをならぶるものなきに今それがしかくなりはてせんぞのなをくださんこと思へは〳〵くちをしや地あゝ扨よにはかみや佛はおはせぬかとよをかこち身をうらみなみだにくれておはしますかゝるあはれの折ふしわたなへのつなはよりよしの御さ所をたしかにきゝさだめふみ一つかきしるしてろうのうはてよりなげ入ける頼義なにやらんとをつ取いそぎひらいてみたまへばきみこうせんのいにしへをわすれたまふな時にはんれい有べしとかいて有はつとおどろきうはてのかたをみたまへば地わたなべはおもひ入たるふせいにてなみだくれて立て有わかきみは都の事をたづねたく又わたなべはかくとしらせ申さんととびたつほどに思へどもよそのみるめもしげければかくと申さんたよりなくなきふしふかくのなみだせきあへず時うつればわたなべはよそのみるめもあるものをとちからおよばずしほ〳〵と下ふしなみだながらも立かへる地わか

ぎみはるかに御らんしてあらたのもしのしんていやてきをたばかつて我をうばいとらんがためかうさんしてぞあるらんとすへたのもしく思召つらき中にもなぐさみて 三重あかしくら上させたまひける扨其後にやすむら家のこらうどうを近付思ふしさい有間一といくさすへしと下ぢすれば承り候と我も〳〵とかけ出ほりばたにちんとれればかくてほうしやうゆみひつさけてかけいで我じやく年のいにしへはこゆみにこやをつがいかさかけいでなぐさみたる事有をいて二たびちごに成といへばいにしへを思ひいださん一とやうけて手なみのほどをみよやと五人ばりに十五そくきり〳〵と引しほりひやうどはなつ馬むしや二ひきいておとしうしろにひかへたるかちむしやのみつけんにこそ立にける三きともにゆんてめてへおちにけり時にすへ竹かけ出扨もあそはしたりほうしやうどのさらばそれがしも一や仕らんにそこのきたまへとまるきのゆみやにうちつがいきり〳〵と引つめかなぐりはなしにはなしけるかちむしや三ぎいておとしいはをのせうじが馬のふとばらにすんとこそは立にけれといの十郎が是をみて持だてをつきたてやあごぶんはいか成せいびようなりとも此たてはよもとをさしとくはうげんがましくひかへけるすへ竹是をみてにつくきやめつがことばやとまへよりつよく引つめひやうどいるたてのいたをいとをしうしろにひかへたるならをたてにい付られたてをかづいてふしにけりさだみつ此よしみてあゝいられたり〳〵それかしもいで〳〵一せんいたさんと扨てつのつふてを其かずあまた取よせうんかのごとくひかへたる其中へおつ取ひつ取うちにけりたゝりんぼうのみちをおすにことならずゆんてめてへたをれける時にきん時つつとよりそこのき候へさだみつどのいでしんかりを仕らんとほこひつさげてたせいが中へかけいつてはらり〳〵となぎたをすいまだじこくもうつらぬにむねとのつわもの百きばかりうちふせゑゝ手にたつものはなかりけりととある所にさつとひきふししばらくいきをぞつぎにけるやすむら此よしをみてかれらはなんぜんきはせよつてもかなふましさらばわたなべいでられ候へとよばゝりけるつな聞てもとよりごしたることなりと太刀ひつさけかけ出るをきん時きつとみてかねてあいづのことなればすは參りさ

うと渡りあひ火はなをちらしてたゝかいけり渡邊じぶんと思ひ打太刀をひかへきつとめくばせしければきん時心へてわざとほこを打をとされきゝめかしてぞにげにける渡邊是をみてゐゝ大事のかたきを打もらせし口おしややあきん時日比のよしみにひつかへししやうぶをせよいかに〳〵とのゝしれば四人の人人是をきゝ少にてもてきにさとられては大事なりいざ四人一所にかゝりて渡邊をぼつこむべし尤といひもあへずきつさきをならべ打てかゝれば渡邊かなはぬていにもてなし一もんしに城の内へぞにげにける時に四人大おん上いかにわたなべじやく年のむかしより此かたてきにうしろをみせたる事なきと日比くわうげん申せしがふだいのしうをみすてゝうてきになれば今ははや命をおしみをくびやうがみにひかされてにげたるていのみくるしやたとへはひの中みつのそこをくゝりてもいかでかのかしやるべきやかへせもとせとのゝしつて誠しやかに引かへす此人々の有さまかんかはしらず本てうにも又ともあるべき人ならずあつはれゆうしのあつまりやと扨かんぜぬものこそなかりけれ

第五

さる間すでに其日もくれければ兩ぢんあひびきにひいてしばらくぢんをぞ取にけるこゝに四人の人々は一つやく所にあつまりてきん時申けるやうは明日のかつせんには城をのりとらんことひつぢやうなりわたなべおやこ城に有うへはわか君の御こといさゝかしさい候まじ去ながら此四人は頼光の御代より四天王とよばれてい國までも其名をへたる我々かもはや是ぞいくさのしをさめたるべし然るにたゞよのつねのいくさをしては口をしき次第なりいかにもしてかたきやす村をいけ取て都づとにせんと思ふが扨かた〳〵はなにと思はるゝぞ人々きゝもあへずおふいはれたりきん時たれ〳〵も左様に存るなりさらば明日かけあひには此四人一所に心を合てきかけいではそらにげをするべし時にかたきかつにのつておつかけんはぢでうなり其時ひつかへし中におつ取こめいけとらんに何のしさいか有べききん時聞て是も尤の御手たてにては候へ共去ながらてきもさすがなをへ

たるゆうしなればもし我々が色をさ取てはかへりてなんぎたるべしとかく此度はそれかし存出したるちりや有まづ〳〵そなたへ御入候へといたる所をずんと立てかたはらさしてぞ入にけるやぶみを一つうかきしたゝめてきのぢんへいたりけり折ふしやす村は渡邊をはしめ家のこ郎等を近付て軍ひやうでうの所へ此やおちとまる渡邊おつ取ひらいてみるに其ふんにいはく扨〳〵五人の其中にもごぶんとそれがしはべつしてよしみふかきところに晝のかけあひにたかいにやいばをけづりきばをかみしこと時にしたかふとはいひながら思へばあさましき次第か程に存らくるいそでをひたす所にほうしやうさだみつすへ竹是をみて扨は御へんのごとく我も二心有ものなりとこゑつとへだてられ候此うへはやちうにそつときどをひらかれたまはれ候へかしそれかしも御へんと一所にあんびをさだめたく存候此むねやす村公へよくよく申てたまはれ候へひとへに頼入候三川のかみさかたのきん時むさしのかみ渡邊のつな殿へとかいたりけり渡邊大きに悦ぶていにもてなし是〳〵御らん候へ天のあたふるさいわいとかくお家の御はんじやうすべきずいさうたり定て聞召及せたまふらんかのきん時と申物は元來人間のしそんにてなし十六歳の比まではしん山ゆうこくをすみかとせしが頼光はこね山にしのはせたまふ時はゝのき女あらはれて頼光のしんかとなせしより此かた命をきはのたゝかいにあふこと七十五とされ共終にふかくをとらず四天王の其中にもすぐれたるけなげ物なればそれかしと兄弟のむつびをなし候かれか一人身方にくわはる物ならば殘る三人の物共はよも一せんにも及ず落うせ候へしいそぎじきの御へんじつかはされ候へとげに有有しくたばかればやす村大きに悦びやがてじひつに返狀かいて其まゝいかへさせけるきん時すは返狀よとおつ取ひらきみれば渡邊方へのやぶみのおもむきつぶつさにひけんきゑつほとんどあさからずいそぎかうさんいたさるべしさるにおいてはくんこうによるべしいさゝかうたがひ有へからずよつて返狀くだんのごとしたざいのだいに平のあそんやす村とかいたりきん時しすましたりと悦び扨人々の役所に行たいめんし是〳〵みたまへもはや此うへにてきじんにはせ參べしかまいて〳〵かつてかぶとのおゝしめよ

とひやうでうのおくぎにもしるしたりゆだんしたまふなかた〳〵と城中さしてぞいそぎけるきん時がちりやくの程こそあさからねすでにあいづのこくげんにもなりしかば城中より木戸をひらきければなんなくしろに入わたなべにたいめんしふし是は〳〵とばかりにてたがいにちりやくのほどおしはかられて人々はふしよろいのそでをぞしほりけるやゝあつてやす村立出たいめんしれいぎをのべて云やうは誠にかんしいつたるしんていかな此うへはいくさの次第ばんしに付て兩人を頼なりとまつ〳〵きうそく有べしとふしおくをさしてぞ入にけるかくてきん時明日のいくさにかやう〳〵にいたすべしと所存のとをりをかたれはわたなべ聞て我もさやうに存なりおふしんびやう〳〵とたかいににつこと打わらひまづかたはらにぞ入にける去程によもやう〳〵あけ行ばよせての軍兵おしよせて時をとつとぞ上にける時のこゑもしづまればすへ竹こまかけいだし大おん上やあきん時はいづくに有ぞさしもふだいのしゆ君をみすて年比よしみふかゝりしはうばいをふりすてうらかへる事いぬちくしやうにもおとれりとのゝしつて城をにらんでひかへけるかくて城中にはわたなべきん時はすはよきじぶんと思ひわたなべやす村にむかつてかねて思ひしにさういして三人の物共中〳〵思ひ切たるていとあひ候へ候此うへは頼義をやぐらにひつはりざうごんにかくる物ならは三人のもの共すゝみて我も〳〵ともんだういたすべし然らは其時たやすくいけ取申さんと手に取やうにぞ申けるやす村うんめいつきはてゝ此ぎ尤然べしそれ〳〵と有ければきん時は頼義をひつたてやぐらのうへにかけ上りいかにほうしやうさだみつすへ竹ことの心をたしかにきけ我々は源家ふたいの侍なれ共けんしうんめいつきたるをみすかしかうさんをいたしたり頼義のさいごのていをとし比のよしみに一めみばやといふよりはやくわか君をこはきにかいこみ一もんしにとんでをるれば渡邊やす村をひつつかんでよせてのぢんへぞくわゝりける殘るぐんせい是をみてのがすましきとをつかくるを竹つなゑたりやおふと四かく八方へおつちらしなんなく本ぢんに歸りけるあつはれ渡邊きん時かゆう力やとふし一どにどつとぞがんじける其後竹つな大をん上いかに城中のやつはら大將いけど

らるうへは命をすてゝなにかせんかぶとをぬいでかうさんせよとよばゝればしよぐんぜい是をきゝげにげに是はもつ共なり命をすてゝゑきあらじいさやかうさん仕らんとかぶとをぬきゆづるをはづし皆〳〵かうさんにこそはいでにけるもはや此うへは心にかかる事なしとわか君の御ともして悦びの時を上三重みやこをさしてぞのぼりけるていとになればわかぎみ二でうの御所にうつらせたまへば頼信ふうふは御らんして是は〳〵とばかりにてよりよしにいだきついてうれしなきにぞなきたまふさて五人の人〳〵をめされ今にはじめぬことながら此たびのはたらきとかふことばにのべられず殊にやすむらをいけどりしやうらくありしことこゝんまれなるはたらきなりすなはちやすむらがことをさうもんして大ちをわたしそのゝちはくちうにしばりくびにぞなされける扨また五人の人〳〵にはほんれうにあひそへ五千ちやうつゝくだされすなはちよりよしのしつけんに仰付られいそきめい〳〵にしよち入しおの〳〵きうそくあるへしとはや御いとまをくださるゝ四天わうのはたらき源氏の御よの御はんじやうせんしうばんぜいめでたかり共中〳〵申斗はなかりけれ

延寶五丁巳年正月吉日

八文字屋八左衛門板

末武印問答

第一

さてもその〳〵ちそも〳〵よのせいとうといつはしづかなるときんばぶんをもつておさめみだるゝときはふをもつて四かいのらんをしつむるによつてぶんぶ兩とうはすいはのことし其比けんしのふしやうをはたゝのまん中のしなんやまとのかみ源のよりのふ公とそ申けるされは御しやきやうらいくわうの御しきよの後天下のけんへい取をこなひはんみんのりらんをかんかみたまふゑいやう日をおつてめてたく御いせい四かいにあまねくしたかはさるは三重なかりけりされは天ちのさうとうはわたくしよりをこつてやむ事なし其比しなの〳國には平のこんのさへもんきようちといふもの有是はくはんむ天わう八代のはつそん平家一けのとうれうたりくはんらい其心ねふとうにして人のさかゆるをふかくそねむはりたましいのをのこなり有時の事成に家のこらうどうめしあつめしゆゑんしてあそひしかしゆきやうのあまりにあらさる事をそたくみけるいかにかた〳〵此ちかき比までは源平あひならんて天下のふ將かうむり車の兩わのことく有つるにそれがしか父清ひろ源の頼光におしすへられ次第にいせいうすくなりつひに天下のふ將召上られ今それかしか代に至つてはわつかかいしなの二か國のしゆことしていきてかひなき身のしき此まゝはてんこそむねんなれ此をこりをあんずるに是皆頼光かなすわさけんしは我等かかたきなりされはとうし天下のふ將源のよりのふ兄頼光にはばつくんおとりたると聞是そ平家よを取へきすいそうなりいさやきへいを上けていとへ上りうむのあんひをきはめんいかに〳〵とこ共なげにそ申けるされはるいをもつてあつまりにたるを共とするとかやいつれもしうにおとらぬむちあんへいのちうとう共跡さきのかんかへなく誠に御てうのことく平家も王そんけんしも王そんいつれかをとりまさりも有ましきに近年かやうにあひおとりていとの内をおひ出されほくろく道のかたすみに月日をおくらせたまふ事我等ていに至るまてむねんのほむらむねをやきしんいのけ

ふりひそう天に通しさらにはるゝ事なしけんしの方にも頼光あいはつるうへはへちに心にくき物はなしひた〳〵と思召立たまへと皆一とうに申上る其中にほりの九郎さたすみは勿のせんあくをかんかみたいちしんいのあんじやなりはつさよりすゝみ出人々は只今君の仰を御家のはんせうと悦ひたまふな此定すみかぐあんには御家のめつほとそんし候其りいかにと申に先頼光あいはてられ候うへはけんし方にへちに心にくき物なきとはもつての外のひか外なりつなきん時さたみつすへ竹ほう正いつれもこかくの大名にてしせんの事もいできなはかりめのほうこうによりのふへちうせつをつくさんといつれもふりきをはけんてひかへたりされは頼光大え山のしゆ天とうしをたいらけ其外さま〳〵のまえんへんけをほろほしほまれ一天につもりなかりしもかの五人の物か有しゆへなり今かれらとこかくのいくさせん物いこくの事はいさしらす日本には有まし其上わつかかいしなの二か國はかり御せいにて天下の大將よりのふをせめしたがへさせたまわん事とうろう車をさへきりせいえいうみをうまんとするににたるへしたゝいくたびも御しあん有ひらに思召とゝまりたまへやと涙をなかしとゝめける清うち聞てはらを立何を申そさたすみふせいを以ても大將の心一つにてたせいをも打やふるいくさのほうをはしらさるか又其五人の物共かあらんかきりはいくさはかなうましきとやしやつはらもにんけん又我にしたかふ物共も同じかはらぬ人間さのみ何のこうけかあるへきやをのれか心をくるゝゆへをくべうかみにひかされ人まてせいし大事のいくさのかど出のさきをからすふかくじん一人をくべうものあればばん人それにひかれて皆をくべうに成有てかひなきぐにんめにこんじやうのいとまとらせんとはしりかゝつてくひ中に打をとし太刀のきつさきにつらぬき九萬八千のいくさがみのちまつりめてたしはや打立物共と馬物のぐとよういしてうへを下へと三重かへしける此こと都にかくれなくよりのぶ聞召れ御なひたんのためにさい京したる諸大名を召れける折ふし頼光より五人のゆつりものむさしの守渡邊のつなとう國のおさへとしてむさしの國にきよぢうすさだみつきん時ほう正是三人は九州のいつきをしづめんためつくしに下るするがの守うら

べのすへ竹はかり都にあひつめいたりしがめしにおふしてさんにうす其外の諸大名いつれも御せんにあがらるゝよりのぶ御らんじ只今めすてうへちぎなしかいしなのゝしゆこ平の清氏ぎやくしんをくはたてていとへうつて上らんとよういす九しうのらんいまたしづまらさる所に又此らんおこる事ゆゝしき天下の大事たり其上かれはちよの國侍とはかはりさすか平家の大將なればよりのぶ馬を出すべし一つは我天下のしゆことなりはしめてのくんちんなれは諸人のさみせぬやうにめん〳〵もすいふんくんかうつくされよはんしはたのむと上いなりいつれも御でう承り我も〳〵とせんぢんの望有けれ共とゞのかうめうかくれなきするかの守うらへのすへ竹もくねんとして有けれはよもぢよの物には仰付られしと一こんもいたすものなしあんのことく大將此たひのせんちんをはすへ竹然へしとそ仰ける時に大將の御まへさらぬとうしふそうのしゆつとう人八やの兵衞ともたかすゝみ出御てうにては候へ共國のあんないしらぬ人々のせんぢんはかなひ候ましそれかしこそしなの國に久しくぢうしかの國のへいちなんしよ山かわのあんないまてくはしくそんし候此たびのせんぢんをは此ともたかに仰付られとはゝかりなく申上るすへ竹聞てあつはれおこのやつめかなことはをつかはんと思ひしかいや御せんなる物をしはらくとむねをさすつてひかへけるとも高なをもとゝまらずかへすかへすもくんぢんの一大事あんなひしらぬ人々はおほつかなしひらに〳〵それがしに仰付られ候へとかさね〳〵申上るすへ竹今はたまりかねいかにともたか御へんしなのにちうしあんなひしるは何よりもつてちやうほうさりながらあんないしつたるはかりにても心をくれてはかうみやうはならず此すへ竹は國のあんないはしらず共城をそくぢにふみつふしてきの大將のくひ取へきあんないをはくはしくしつたりこともおろかやぞれがしなどに仰付らるゝせんぢんをわとのはらかふんとしておほつかなしとはくはんたい過たることばやとひさをなをして申けるともたかきひてやあすへ竹ふし道のたしなみ御へんに我さのみなにをかをとらん御ふんいつするか兩國の大將なれはそれかしもびぜんはりまの大將たりわとの城へ左よりのりいらは我はみきよりのりこまん

少も御へんにをとりなはすは八まんも御ぢけんあれ
二たひていとへかへらじとさをうつてそ申けるすへ
竹むねんに思へ共いや〳〵かれていのやつめにそれ
かしかうみやうふかくをろんするはかへつてわかみ
のちじよくなり其上御せんなる物をと我と心をしつ
めさあらぬていにていたりけるもとよりよりのぶと
もたかか事をは西をもひかしと聞めすことなれはか
れかせんちんをかなへすは時のめんほくうしなはん
と思召大てのせんぢんをはすへ竹からめてのせんぢ
んをはともたかつかまつれと御さをたゝせたまひけ
るありあふ人々是を聞こは心へぬ上いやとめん〳〵
にさゝやきけるすへ竹大将のうしろすかたをつくつ
くとみおくりあつはれ頼光のよならはかやうにはあ
らし物同じ御兄弟にてもはつくんかはりしものかな
それかしは代々家のしんかなるにとうざのてきしゆ
とうとおほし召かへともたかめか御ひいきあり大て
からめてのせんぢんをとういに仰付らるゝ御しよそ
んこそはむねんなりかくあるへきとしるならは頼光
あひはてたまふ時はらかき切てめいとの御とも仕ら
ん物命なかきものははちをゝしとはいまこそおもひ
しられたりとなみだをはらはらとそなかしけるしか
る所にともたかをくよう立出いかにすへ竹御へんた
た今はことのほか成かうけんかな君より二人に大手
からめてのせんちんをたまはるうへはてきの大将の
くひをわとのか取かたかひにかうみやうふかくあら
そふへしさりなから御へんはらうたいの身なれはむ
かしのつるき今のなかたな成へしかうけんはむやく
とあさわらつてそ申けるすへ竹きひてをのれらごと
きのものととういにせんちんをかうむるさへむねん
なるに我をむかしのつるぎとやかみをはゝかりすい
さんをゆるせはかつにのるあふれものいて物みせん
ととんでかゝる所を人〳〵取ておさへ天下の大事
をもくせんにかゝへさりとてはおとなけなしすへ竹
きひて大事もせうしも時によるあれていのあふれも
のをたすけをきては天下のあたと成ものをこゝをは
なせ〳〵とかけ出〳〵しけれ共大せい取付ひらにひ
らにと申せはちからおよはすしゝのいかりをひるか
へしこぶしをにぎりきばをかみやかたをさしてかへ
りけるかのすへたけかこゝろのうちむねんともなか
なか申はかりはなかりけれ

第二

さても其後八やのひやうへともたかはよしなきかうろんゆへ大きなるちしよくをうけむねんたくひはなかりけりつく〳〵ものをあんするに此たびすへ竹ととういに大手からめてのせんぢんはかうむれ共とてもかれかはたらき程はかなふましよせんひやうりをもつてきやつかいせいを取よりほかはなしされは此たひむほんの大将平のこんのさへもんかさし物は代々あかきはれんにきんのひやうたんをさすときくしせんのときのはかり事のためも有とにはかにあかきはれんにきんのひやうたんのさし物をこしらへひつに入てそもたせけるさて神〳〵へきせいかけねかはくはこんとのかつせんにすへ竹よりぬきんてかうみやうあらはほまれをせ上にふれてたまはれなむきめうてうらいといろ〳〵のりうくはんかけさま〳〵のようこそは 三重かまへける是はさてをきこんのさへもんきようちかきやくしんよもにろけんしやまとの守よりのふたせいをそつしうつてに下ると聞よりもらうとう共をめしあつめいまたみかたにせいもつかさるそのさきにうつてむかふ事こそなんきなれこせいをもつてたせいとひらはのいくさはかなふましやうかひをかまへやととてをつかせ柵をふりつまり〳〵にほりほらせくんせいくばりうへを下へと三重かへしけるあひもすかさすよりのぶかう五百よきをいんそつしもんむ二年二月五日に都を御立有同十五日にたつの一天にしなの丶國に付たまひくんせいの手はけ有さへもんか城くはくをなんほくよりひきまはし時のこゑをぞ 三重あけにける時のこゑもしつまればはちやの兵衛とも高すへ竹をたしぬいて

せんとてせい五百よきを引ぐしきとくちへつめかけるされ共きとのまへにはからほりをふかくほりとをしなかなかこへんやうもなくあきれはてたる所にすへ竹いそきはせ來りゑたる所のかるはさほりをひらりととひこへける城のもの共是をみてすはおとにきこへたるうらへのすへ竹なるそゆたんしてもんをやぶらるゝなときとをひしとかためけるすへ竹かたきの方へはめもかけすいかにともたか御へんはすへ竹か行所へはいつくへなり共つゝかんと申

せしか何とてしんしやくしたまふぞむかしのつるぎか今のつるぎか爰にてこそよつくしるれたゝみのうへにてくちきゝたるとはつくんにちかふへし是へ是へとあふきをあけてまねきけそともたか一こんのへんしにもおよはすむねをたゝきかしらをかきめんほくなげにひつかへすみくるしかりし有様なりすへ竹是をみてくちにはにぬをくひやうもの尤かうこそ有へきともんのとひらに手をかけゑいや〳〵といふまにまになんなくとひらを引はつしかたきを二のきとまてほつこみくたんのとひらをほりのうへにうちわたしすはやはしをはわたしたりかゝれや〳〵とよはゝれは城の内のもの共二のきとをやぶられしとほりのはたにうつて出てきみかたか入みたれをつつまくつつひはなをちらして三重たゝかひけるすてに其日入あひの比になりしかは両方より物みの大将さいふりあけいくさは明日とたかひにやくたくしあひ引にひいてのきぢん所〳〵へかへりける其中にすへ竹はしつはらひを心かけたゝ一人跡よりもしつ〳〵とひつかへす然る所かいの國のちう人おときりの小八郎ためむね此由をみてみかたのせいはるかにへたゝり候にいとしつかに引たまふはゆへある人とおほへたりいてげんざんいたさんとをしなへらてむすとくむさしもきこゆる大力とは申せ共すへ竹ものゝかす共せす取ておさへはたらかせすしたよりつかんとすれ共あまりにつよくおさへられゆひかゝまつてたちのつかもにきられずされ共ちりやくのめいじんにてかふてきのくびを取といふは我もなのり人にもなのらせてこそかうみやうにもならめすへ竹きいてやさしき物のことはかな我こそは天下に五人のまれ物とはん人におちらるるするがの守うらへのすへ竹なりなんちはいか成ものそ小八きひて扱はをとに承はりおよひたるすへ竹殿にてましますなそれがしはかいの國のちう人をとぎりの小八郎ためむねと申ものにて候おなししする命御みのやうなる人手にかゝらんこそしゝても弓やのめうかなりさりなから我等ていの物を打たまひてもさのみかうみやうにはなるましき御ちひにたすけたまへしからは今よりのちは心をひるかへし御てにしよくし申へしすへ竹きひてさやうなるひやうりをぢよのものに申せ此すへ竹はもちゐずと又つよくおさへける小八聞てまさなくもかう人の

くひ取ほうやあるひらに〳〵と申けるすへ竹いよいよいかりをなしてきにおさへられ命をしさにかうさんするをかう人とやいふへきとかぶとちきつてよくよくみれは其年十七八とうちみへすきつるとしみなと川のいくさにうたれしわか子のすへよりかおもかけによつくにたりすへ竹たけきゆうしなれ共わか子の事を思ひ出しあなむざんやかれか爰にてうたれなは國にのこる父母さこそなけくへしわれが思ひも人の思ひももつてはひとしわかこのきやうやうにたすけばやと思ひなんしそんずるむねあつてたすくるそと取てひつたてそば成くろにこしをかけしばらくやすみいたりける小八いきつきなさけあつて我をはたすけぬれ共よきかたきなれはいかにもしてうたんとあんをめくらす所へむしや二人うへの方より來りけるすへ竹みてすはかたきよとたゝんとするをひきとめあれはそれかしか一ぞく共にて候さはがせたまふなと申ながらかれらがちかつくものならばしやくまんよもをちあはぬ事はあらしとまちいたりすへ竹はしめはりやうはうのかたきをひとめつゝみたりしかしたいにちかつくかたきをはつたとまもる其ひまに小八ちからあしをふんてたちあかりすへ竹かむなひたをとひかゝつてのつけにつきたをしすかさすのつかゝりくひをかゝんとする所をねながらかひつかみふかたへかつはとなげこみをちあふ二人のかたきをくひ一々にねぢきりふかたにとんていり小八をとろの内よりひきをこしをのれめにじひをたれてたすけぬれはをんをしらぬぐにんやとくひちうにひきぬきみつのくひをたちのきつさきにさしつらぬきけふのしつはらひはめつらしからぬするがのかみうらべのすゑ竹としつもつて五十八とかうしやうにのゝしりほんぢんさしてそひつかへすかのすへ竹か手からのほときせん上下をしなめみなかんぜぬものこそなかりけれ

第三

扨も其後ともたかは手あはせのいくさにふかくを取人のひはんもめんほくなく此たひは命かきりにはたらきしよ人にみせんと人をもませす手せひはかりにて又きとぐちにつめかけける城にはかねてようのの

事なれはうへの山よりさし取引つめいたりけるともたかせい共さん〳〵にいたてられさきへはさらにすすみゑすしとろになつたる所へきとをひらきくつきやうの兵八百よき打て出れはともたかゝせいそくしにをひくつされあとをもみすしてにけにけり城の大将悦びすはやよせては色めきたりそつといきつき又うつてかゝれはいかに〳〵と下ちすれはかちにほこつたる城のせいかしこまつて候此てひにてはよせてをていとまでをひのほさん事あんの内にて候御心やすかれといさみすゝんで又かゝらんとする所へすへ竹くつきやうの兵六十三き引くし上の山にいたりしか此よしをみてよしなきともたかをくひやういくさゆへみかたはいほくにおよびたり爰をちらさすは大将の御ちんもくゝるへしとやあなんしらするかの守うらべのすへ竹か是に有をはしらさるかいて物みせんとまんなかへわつて入たせいを四方へをつちらしくひあまた打取かち時をとつとあけみかたちんへぞ三重ひきにけるちん所になれは大将の御前に出うち取所のくひ八十六きみのしつけんに入にける時にともたかすゝみ出いかにすへ竹それかしかたきをひろみへたはかり出しまん中に取こめうたんといたせしを御へんよこあひよりかゝりかたきをおひくつしぬる事是いくさのほうきにあらすいかに〳〵とのゝしりける爰にいくさふきやうなゝをの源内むねきよはとも高かゑんじやなれはひいきかほにすゝみ出誠にともたか手だてをめぐらしたはかり出せしをすへ竹よこあひより切て取たまふ人にほねをゝらせちうにてはひとつたるかうみやう是くんほうをそむきたまふおゝい成あやまちさそとも高ほひなく思ひたまふへしらうたいの事なれは一わうはくるしからすいごをたしなみたまへとあらゝかに申けるすへ竹につことわらひ是は事めつらしきいくさのほうを承はる物かなむかしか今に至るまで爰はたれかうけ取是はなにかしかうけ取の所なりとてみかたの打まくるをけんぶつするいくさのほうや候ともたかのせいきくら坂をうちこへすでに大将の御ちんまでにけかゝりてきはいさみすゝみうつて出る間事の大事とそんし一めいをかへりみすてきじんへわつて入りつか六十三きにてかたきのたせい城の内まてほつこみ城の内にても是そと思ふ兵共を八十六きうつたるは時にとつ

てのはたらきとこそそんせしにあんの外成事かな仰のことくそれかし　よりをいにほれてくんほうをもわきまへずかさねても又かやうのそこつはいくたびも候へしまひと御めんにあづかり申さんとことはすゞしく申けるたうりしこくたるによりかさねて一ごんもことはをつかふ物もなくくびのしつけんことおはり御前をまかり立けるをほめぬものこそなかりけれしかれ共大將はともたかをひいきにおぼしめさるゝによりなにとかおもふかた〳〵すへ竹かへんせつあきらかに申てもけふのしあはせはともたかゝはたらきをそねんてしたるいくさなりさらにかうみやうとはおもはれすきやつはらか頼光よりつたはつたるほまれの物そとおもひよりのぶかまへをもはゝからすひろう成ていたらく誠にをひほれたるとおほへたりと御ふくりうはかきりなく御さをたゝせたまひける大將の御しんていこそはかなけれさる程に城中のつはものをすへ竹にくははんうたれわづかにのこるもの共みな引いろにみへにける大將きようぢ今ははや此城にてはかなふましいつくへおち重てきへいをあけんこのき尤しかるべしと城にひをかけけふりにまぎれおちゆきけるよりのぶあはや城はをちたりあれあますなとさいふりあけたまへはわれも〳〵とをひかくるされはにやすへ竹はたひ〳〵かうみやうひるいなけれ共ともたかざんけんゆへ大將のおまへもよろしからすいくさしてもせんなしかゝる大將につかへんより此たひかへりなはいつくにも引こもるへしさりなからそれかし身一たいのはたらきなれはいかにもしてかたき大將のくひ取てかうけんがほ成ともたかめにおもひしらせんとこゝ引よせうちのりたゝ一き人にすくれてをつかけゝるあんのことくまへた山のふもとを甘きばかりにてとをるたそとみれは城の大將なりすへ竹よろこひそれへおちたまふはこんの左衛門とみるはひがめかかくてきにうしろをみするみれんさよかくいふはするがのかみすへ竹なりかへせ〳〵とよはゝれはせんごにしたかふらうどう共すへ竹と聞からに四方へばつとにけにけるすかさす馬のもろあしなきすへおつる所をくひうちをとし我一代のかふみやうに是程うれしき事はなし口聞たる友高めかつらへ此くびをなげ付君に思ひのままにふそくをいひ本國に引こみかのせん惡をよそに

聞て有へきと悦ひいさむ所へ左衛門からうとう二人しうを打せいつくかをちゆかんと取てかへし一とにゆんてめてよりくみにけるすへ竹さしつたりとうへを下へとくみおふ所へ友高すへ竹かかたきの大将のくひ取たるをうらめしげにうへの山に打なかめていたりしか此由をみて山のうへよりかけ下り左衛門がくひおつ取天のあたへと悦ほんちんさしてそ歸りけるすへ竹ゆめにもしらす二人のかたきを取てふせくひ一々に打をとし立歸りみれはくひはなしこはなむ三ほうさき程友高かみへたるか定てきやつかぬすみたるらん扨も〳〵口をしや是天めいのつきはなりいかゝせんともたへあこかれ大いきつひて立たりけるかくてあとよりをつかけ右のあらまし申共君友高を御ひいきましませはそれかしか申事は皆いつわりと成へしきやつめを切てすつるならはかうみやうをしまけせんかたなきに切たりといよ〳〵ひはんたるへししよせんいつくへも立しのひてしつかにくふうをめくらし此本もふをたつすへしかさねてせうこのために取てかたきのむくろにさしねるをねち切てくる〳〵とひんまきむねの間にしめ付とかく此ぢつふをたゝさぬ内は男を立てせんなしやいつまてと五十八と申にはほんなふのたふさをふつつと切かふとゝそへて西へなけゆくへしらず出にけるすへ竹か心中むねん共中〳〵申はかりはなかりけれ

第四

其後友高はなんなくくひをぬすみ取ちん所に歸り都よりしたゝめて持けるにせさし物にをつ取そへ御せんに畏城の大将おち行候をほつつめ打取候とせうこたゝしく申けるよりのふるつきかきりなくくはしくせんき有にうたかひもなき大将のくひなり平の家のさし物をわがてへ取しは是すこふる悦たりとふかくおさめたまひ友高には此度のをんしやうにとていかの國を下されける友高めんほく身にあまりつつしんて畏扨もうらへのすへ竹こそ某大将のくひ取しをそねむしんいや候ひけんあとよりそれかしをめにかけやをはなち候間ごへんは心かはりとみへたり御せん

にてあらそふべからすとことばをかはし參候よつく御せんき尤にそんし候と誠しやかにうつたへけるよりのぶ聞召すへ竹かしんていはこんどのいくさせんきにて大かたみへたりなんしをそねんたるはひつてうとかくは都にてせんきをあひきはむへしまつかいちん有へしとくんせいを引くしらくやうさして三重上らるゝすへ竹のらうとう共はあなたこなたとたつぬれとしうのゆくへはなかりけるしさいいかにとしらされは何とさたすへきやうもなく國本さしてそかへりけるさる程によりのふていとへちん有とも高を召れすへ竹をたつねさせたまへはしなのゝ國より今にをひて罷歸り申さすいか樣それかしにやをいかけしを事の大事とそんしいづくへかおちゆきたりと覺候もし本國へひつこみ候はゝなんきにおよび申べしいそき國へ打てをつかはされかれがさいし共を御つひばつましまして國へはこくしをすへさせたまひて然るへしとぞこん上すよりのぶ聞召げにゆたんしてはあしかりなんとうち山兵こみちさたにかいたう大せんの太夫くにさたとに右のあらまし仰付らるゝいづれもぢやうい承ぐんせいを引ぐしするがの國へと三重下らるゝいそがせたまへは程もなくまりこのしゆくにやどを取とかく事あらくては物のやぶれになりやすししよせん事の次第を申つかいすへ竹の一子小次郎すへはるを是へよびよせん尤然るへしととかはの源太に事の次第をいひふくめふちうへつかひを立たまふ城になればあんないかうて家のかうけんきつ川のせんしよし時にたいめんし扨も御へんのしゆくんすへ竹公とかのしさいは存せね共君の御かんきかふむりたまふにより國にまします小次郎殿にもちと尋申しさい有内山兵ごにかいとう大せんの太夫でうしとしてまりこのしゆくまで下ちやく仕るといんきんにのへにけるきつ川はつとおとろきそれに御待候へとわか君によしをかくと申上るすへわか聞召こはそもいかにとさきたつものはなみたなりせんし是をみて今はなけかせたまひてせんなしつく〳〵あんをめぐらすに兩しまりこまて下るは君のとかきはまつてわか君をもめし取てちうせんためと覺たりたとひ大とのこそつみにしづませたまふ共わか君かくて御さあれは城をはそうなくわたすまし打とけいるなほうはひ立まつつかいのものがくびうつ

ていくさ神にまつらんととんて出るをわか君しはしと引とめおことが申だんちうきあつてたのもしさはいひながら事のじつふをきゝさためさやうにあらきふるまひはちゝうへのとかかるくともいよ〳〵をもくなりぬへしつく〳〵ものをあんずるにたゝ人のさんけんにて有へしさあらば天うんくもりなくきよきかゝみと成たまはんしからん時はいよ〳〵そこつのいたりなりたゝ〳〵まりこへうちこへ兩しにたいめんし事の次第を聞へしたとひとかきはまつてちうせらるゝ共おやのためにきられんは子たる物のみちにて有なけくなとなみだをながしのたまへば吉川うけたまはり扨も〳〵みちにあたる仰かなけにやきしはもゝとせなれ共とうねん生れたるたかにとらるゝ事は今こそ思ひしられたり君はいまた御じやく年なれ共りひめいさつにあきらかなりそれかしとさかりにみちぬれ共あとさきのわきまへなくそこつを申上候君は是十さいのおきな我百さいのわらんへにて御さ候此うへはともかくも御いしだいにて候あはれたゝ今の御一ごんちゝうへきこしめすならばいかばかり御よろこびましまさん心にまかせぬうきよやとなみだをはら〳〵とそなかしけるすへはる聞召あらしたのもしゝ〳〵この事をはゝうへにかまひてしらせたてまつるなきこしめすならばさだめてとゝめたまふへしさは有ながら立出かへらん事もさだめなしよそながら御いとまこい申さんとをくをさしてぞ入たまふおまへになれは母うへをつく〳〵と御らんし御すがたをおがみ申さんも是やかきり成へしとつゝむにあまる其なみだよそのたもともぬれぬへしわれ立出るそのあとにてあらましを聞召さこそはなげかせたまはんと思へは〳〵かなしくてしのびなみたはせきあへずやゝありてなみだをおしとゝめこんと都よりとう八か國のこくしまりこのしゆくに下ちやく有國々のしをきの事をたつねたまふによりきん國のしよ大名のこらずまいられ候それかしもちゝのみやうだいとしてたゝ今まかり出候とのたまへははゝうへきこしめし扨はさやうにありけるか都人ははづかしくそこつに物を申つゝいなかふしとてわらはるゝなこくしのまへに出るならひさにてをつきてつゝしんてれいをなしことばをうやうに申べしかまひて事あやまつてちゝのなはしくたすなとつみにしづ

ませたまふわか子のすへをはつゆをもしろしめされすいとこまやかにをしへたまふはゝの心そあはれなりわか君はゝうへの仰をつく〳〵と聞召いよ〳〵おもひますかゝみふかくのなみだをなかしあらはれてはかなはしと何となくもてなしやがてかへり申さんと心つよくはたち給ふかあまりになこりやをしかりけん物のひまよりさしのぞきこんじやうのなごり今ばかりとひとりくどひてなくはかりあゝ何事も〳〵うつれはかはるゆめのよになげくは人のまよひぞとなく〳〵いてさせたまひけるかの若君の心の内物のあはれは是なり〳〵と皆かんせぬものこそなかりけれ

第五

其後わか君はらうとうのきつかはのせんし御共にて夫と打つれまりこのしゆくへといそかるゝしゆくにもなれは由をかくと申せは兩し悦ひこなたへとをくにせうし扨もすへ竹のとがしさいはそんせね共君の御かんきかうむり其によつて御身をも都へめしぐし申せとの上いにて候城をもすみやかに御わたし候へといんぎんにのへらるゝわか君聞召上いのたんいさいかしこまつて候しかしながらおやにて候すへ竹はしさいにおこなはれ候か又るざいにふせられ候か兩し聞召いや其だんは何共うけたまはらず候すへはる涙をなかさせたまひ扨はふかきとかにてしざいにおこなはれたまふらんかねてより思ひまうけし事なれは今さらをとろくべきにあらずさは有ながらとかのしさい有ながらとかのしさいをわきまへすはてん事こそ口をしけれよしそれとても力なしと太刀かたなをわたさるゝ兩しも涙にむせひたまひ其だんも都へ上らせたまはゝ慥にしれ申へしまつこなたへとをくに共ないたまひける扨つきのまに有ける吉川か刀をとらんと侍共一どにかけよりしを四方へはつとつきたをしやあ侍のたち取にはほうぎか有そつこつによつてけがするなとはやたとこそはにらみける時にさいせんのつかいをくより立出わか君も事のやうを聞召わけられ太刀を御わたしなされたりふせうながら刀をわたしたまへせんし聞て扨はさやうに候な是成もの共は其たんをは申さすりふじんによらんといた

し候我々てむかひせんと思はゝ城を何しに出へき此事をかねてよりすいりやういたし候へ共わか君をんびんにしめしたまふにより罷出たりおそらくはかたかたか五十や百にて此吉川かたちをとらん事はなかなか思ひよらぬ事なれ共かみにしたかふ下なればわか君たちをわたし有うへは我いぎにおよぶべきにあらずとたちをわたしければ人々やがてをくにめしこめける口をしかりける 三重次第なり其程に御共申せし侍共なく〳〵城にかへり此よしかくと申上れは母うへゆめ共わきまへすこは誠か物うやときへ入やうにそなけかるゝおつる涙のひまよりもかくて時うつしてはあしかりなんへんしもはやくまりこのしゆくへいそかんとなく〳〵出させたまひける心の内こそあはれなれ兩しのやとにもなりしかは女はうたち事のていを申さるゝばんの侍かみへかくと申上れば兩し聞召こなたへとせうしわか君にあはせたまふ母うへ御らんじおもはすしらずいたき付いかにすへはるをことかやうになりけるは定てつまのゆへ成へし其とかのしさひは何とかきゝて有けるそわか君聞召仰のことく父うへのとか我も心もとなくぞんしすいふん尋候へ共てうしの人々さらにあかしたまはすたゝ都へ上れと斗なりことのていをあんし候に父うへはおもきとかにてあひはてたまふと覺候とたをれふしてそなげかるゝかゝる所へ友高都より下り兩しにたいめんしすへ竹か一子すへはるならひにらうとうの吉川をはそれかしにわたしめん〳〵はふちうの城に打入都よりこくし下るまて國をしゆこいたされよとの上いなり二人の人々聞たまひ上いにまかせめしうとをは友高にわたしふちうをさしていそかるゝ友高みてそれ〳〵とてしう〳〵二人をおさへてなをそ三重かけにけるみかとよりちうせよとの上いにてはなけれ共かたきの子をへんしもたすくるはあやまり是にてすて君のおまへをはいかやうにも申なさんとやがてしきかはにそなをしけるせんしきひて何わか君をかたきの子と申か扨はしゆくんすへ竹をはなんぢがさんけんしたるなとつくかくとしるならはをのれかくひねち切てしうのけうにほうぜんもの神ならぬ身のかなしさはかくとしらすやみ〳〵ときられんこそむねんなれ是もわか君をんひんの御さたゆへしうのかたきをあんをんにをく事思へは〳〵口をしや

とおとりあがつてくるへ共ちすしのなわをかけれはは
はたらくけしきはなかりけりかゝる所へわたなべの
つなむさしの國より都へ上りたまひしか事のていや
う有と馬よりとひをりみたまへはすへわかなりこは
いかにと立より次第をくはしくたつぬれは友高右の
あらましのへにけるわたなへはつとをとろききほう
をうたがふにはあらね共さすがすへ竹か子なとをし
はりくひをうつことはあまり成しはさふせうながら
それかしあづかりていとに上り事のてい承とゝけせ
ひしさいにきはまらはせつふく申候べし友高聞てこ
はいかに上いにて切とか人をあつからんこともか比
そこつの至りかつうはかみをかろしめたまふたんゆ
め〳〵かなひ候ましわたなへ聞もあへす何かなふま
しきとや事のたうりを慥に聞頼光のみよよりもつな
きん時さだみつすへ竹ほう正とて五八五つのゆびの
ことくにあひならひしんし兄弟よりもちきりふか
しとはおことなともかねて聞て有つらん然るはすへ
竹をなき物となしのこる四人うきよにながらへ有べ
きやそうしてわたなべかくせとして申かゝりたる事
をかなはてやむる事なしぜひむたひに申うけん事こ
ははらぬさきにすみやかにあつけたまへやあこなた
へまいれわか物共承り候とたち取をつきのけめしう
とをくる〳〵と取まきける友高大きにいかつてやあ
天がしたにすまんものが上いをやぶる事や有ろうせ
きなりかた〳〵とたちのつかに手をかくるわたなべ
につことわらひひろうなり友高それがしが手にいつ
たるめしうとをうばひかへさんなんとゝはおにのも
つたるゑぢきをかきかねらうににたるへし上いをは
ばかるも時によりちかふよつてけがするなととうざ
いへけちらし人々をひつ立らくやうさしてそのぼり
けるわたなへかふるまひたのもしきともなか〳〵申
はかりはなかりけれ

第六

去程にむさしの守渡邊のつなはすへはるを思ひのま
まにはい取極月廿八日に都に付まつ母上をはをくに
せうじ扨ないきひやうてう取〳〵なり爰に又さだみ
つきん時ほう正是三人は九州のらんげき事ゆへなく
しつめ三日いせんに上らく有りしか此あらましを聞

たまひをの〳〵取物も取あへずつなのやかたにあつまりせんきまち〳〵有けれとすへ竹うきよにながらへ有やらん又はむなしく成やらん右の有ましれさは明日御所に上ても何と打たへんといつれもあんしわづらひよはすてにふり行とせんぎさらにきはまらすおきれはてゝぞおはしけるかゝる所に何とはしらず門をたゝくたそととへばすへ竹とこたへたまふ人々なのめによろこび是は〳〵と斗なり時にすへ竹我かやう〳〵の次第にて友高めにかたきの大將のくひをぬすまれし事諸人のひはんもちろんかつうはめん〳〵におもてを合ん事のめんほくなくうきよをのかれしづかにあんをめくらしほんかいをたつせすはめん〳〵に二度おもてを合しと一すちに思ひ切かやうの身とはなりぬれ共わたなべ殿すへはるをはい取たまふと承身のちじよくをふりすて是まで參候とせん年のいくさの次第つぶさにかたり我ごんの左衛門を打たるせうこには平の家の馬印是に有とくれないのはれんにきんのへうたんのさし物をみせたまふ人人是を聞か程のたうりを持ながらいかてうろんに有べきさはいびながら友高はとう君の御前さらぬきりのもの一てう御ひいき有べししからん時は五人ひしとかたまり御せんをふみやぶつて立へしされは日本がうごく共我々はたやすくは打れまし年をかさね日をおつて國のさはぎと成ならは定てわだんいらんはひつでう其時我々友高めをもくぜんにはり付にかけたまわすはまつたくわだん申ましと心のまゝに申をこなひ本望をたつせん事なんのしさい有べきと一づにせんぎきはまつてすでにしのゝめあけ行はこせんをさしてぞあがらるゝ是は扨置友高はめしうとを渡邊にはいとられいそぎ都に上り御前に上りはしめをはりを打たへける頼信聞召こは心へぬ渡邊がふるまひかなきつと申付へしときろく所に出させたまへは在京の諸侍是ぞ渡邊家のめつほうなりととうもかうけもをしなへ殘らす御前に上らるゝ跡より四人の人人しそんする物ならはしやいつまてと打うなつきでん中にしこう有人々是をみてげにも天下の五人のまれ物とて代々家につたはる事はりかなきれうこつからよにすくれあつはれゆゝしき有樣かなとて物事にすへ竹うきよにながらへ五人あひならんて有ならはいよ〳〵はなやか成べきにかけたる事のおしさよ其

せんきも定て今日有へし渡邊の家のめつほう友高がめつほうせんあく二つ爰なりとかたづをのんてひしめきける時に賴信みすさつと上させいかにむさしの守すへはるは我に弓引ものの子たるゆへちうばつするに上いをもはゞからずはい取つたる事ろうせき甚かぎりなし其たんごん上仕れ渡邊承さん候せんくん賴光の御時よりもつなきん時定みつすへ竹ほう正とてこかくにあひならんでしんし兄弟よりむつましく候事をゝそれながら上にもしろしめさるへし申だんくはこんには候へ共我々五人かふかうちうせつ諸人かたをならふる物もなし殊に以てたんばの國大ゑ山のしゆ天とうしたいぢの時などのはたらきはをそらくはぼんぶの及ぶべきにあらず其によつて賴光よりたい國あまたたまはりて四天王と名付弓やの道にをひては万みんあつくをもんす其さいしをはくちうにしはりくびをいたす事君の上いにては有ましき何樣友高がわたくしのしはさそと存ばい取て上り候是あやまりにて候はゞいかやうにも仰付られ候へとはばかる所はなかりけり君聞召たとひ友高わたくしにてもあらはあれ上いと申をもちいぬはおゝいなるあやまりことにすへ竹は我に弓引んとせし物なり其子をしはり首打んかひか事かいそきこなたへ渡すへしかうへをはね王ちにさらさんとがんしよくかはり仰けるされ共四人は少もきゝ（本ノマヽ）するけしきなく渡邊ひざをなほし扨はすへ竹君へ御敵と罷成候な御腹立尤に候しかしながら末武を召御尋候へ末武はいつくに有ぞ某がたちに候急參れ畏て末武を召出す君御らんしいかに友高先年の次第くはしく申上よ承先年の次第といつは敵の大將こんのさへもん落行候を某ばつつめ首取て候を末武そねみうしろより某に矢をいがけ候間御へんは心替かとことばを懸られめんぼくなきにそれよりすくにいつく共なく罷出たるたんれきせんたりとべんせつあきらかに申上るすへ竹聞てあよくも作りたるそらことかな其こんの左衞門をは我打取かへる所に郎等二人取てかへし我とくむしやつを打ひまにわとのはせ來り末武が取たる首をぬすみをのれか取たるとひろう仕る事いこく本てうにためしなし跡よりほつかけんと思ひしか共汝くひを持たる上はろんして我ひにをつへし所せん弓やのめうかつきはてうきよを思ひ切かやうになりぬれ共さいし

けんぞくまてひざのつみにしつむ事むねんに思ひ二度御前に出たり左衛門と我くんたるせうこには平の家のさし物是なりと差出す友高聞て左衛門かさし物はくびと共に某取御前へ上たりそれと申せはくたんのさし物持て御前に出にける二本共に同色のさし物なれはそれこそにせ物是こそにせ物よと両方たかいにあらそいける頼信御らんし先年の軍の時かうさんせし左衛門か郎等さきぬま源太を召尋よ承候と御前に召出しみせけれは是もとかうわけかねあくんで有しがげに其へうたんをわりて御らんせよ中にけめうじつめうしるして候へし是に過たるせうこなしと両方へ打ん（本ノマヽ）打わりてみてあれは友高か取たるさし物のへうたんにはもんしなく末武が取たるさし物のへうたんにはくはんむ天王八代のかういんごんの左衛門平の清氏とかきて有友高すはあらわれぬると思ひ物をもいわずとうてんしぞいたりける（て脱(?)）其時大将事のじつふきはまつたり友高をはめん〳〵心のまゝにおこなへと仰渡され御さを立せたまひけるいつれも悦び友高を五き七たうを引わたしあはた口にはり付にかけにける扱すへ竹みだいわか君引くし本國に入ぶ有二度さかへたまひけり上こも今もまつ代もためしすくなき次第すへはんせうめでたや〳〵とて皆かんせぬものこそなかりけれ

山本九兵衛開板

ささきあらそひ

初段

扨も其後つら〳〵天地しんの三さいをくわんずるに天は地にくわして萬物しやうじ人はふうふ御（本ノマヽ）あいのみちをまもつてしそんながくたへすされはやくもあさか山の事わざもみな是いもせの中だち也然れ共その道につよくおぼるゝときんば家をうしないその身をほろぼす事たんぜん也こゝに本朝六十五代のみかどをばくわさんのいんと申奉るその比十二のつぼねのうちふぢつぼの女御かうきでんの女御この二人御てうあひあさからず藤つぼと申はため平しん王のひめ君也かうきでんは藤はらの爲光卿のそく女也中にもかうきでんの女御なんかたち世にすぐれたるによつてみかど御てうあいあさからずつねにかうきでんに御ゆき有て月にたはふれ色にめで千代をかねたる御ちぎりあさからずされば〳〵かうきでんを中ぐうに立られ一のきさきにそなへはやとはおぼしめせ共世のはゞかりを思召いまだ女御にておはします扨又ときのせつしやうにはさきのくわんばく太政大臣たゞより公つぎに左大臣源の正のぶ右大臣藤はらの兼いゑ兩三人ばんぎのまつりごとをし給ふ又天下のぶ將には源平兩かの侍也先げんしの大將には定ずみしん王四代のまごせつすの守源のらいくわうしやてい大和の守よりちか是はかうきでんの御うしろみ也同かはちの守よりのぶ兄弟三人郎等にはわたなへの源次つなうすいの定光うらべのすゑ竹坂田のきん時ほうせう共に以上五人は天下にならびなき兵也又平けの大將にはかつらはらのしん王に七代のべうゑいむさしの守平の正のりがちやくしくないのせう正平一そくによこ將ぐんこれもちになん城のさぐわん重持是はふぢつぼの御うしろみ也郎等にはいきみの源藏さだちかしめの藤太もりずみ高せの刑部あり國べつぶの五郎としかげとて源平の諸侍君をしゆごし樂じいはつくうに至る迄おさまる御代とぞ聞へけりかかるめてたき折ふし思はぬちんしいできつゝらくちうしばらくそうどうしてみかどていゐをさり給ふゆらいをくわしく尋るに有時ふぢつぼの女御はしらい

とのないしとて御身ちかき女くわんをちかつけいかにしらいと聞給へきのふ迄もけふ迄も二世とかねつるむつ事のいつしかあのかうきてんに思ひかへられ今ははや山田のそうづのあきはてゝとふ人もなき身と成ぬあまつさへかうきでんは中宮にも立一のきさきにそなはるべきとのふうぶん也若さもあらばかれが下手にあらん事いきては何のかいあらん思へば思へば口をしやと聲を上てぞなき給ふ白いと承り共にねたむ人心げに道理也水からがよそに見るさへよに口をしくさふらへは御うらみの數々は思ひやられてはんべる也水からが存には君の御うしろみじやうのさぐわん重持を頼候へて何とぞかうきでんをうしない給ふてたてを廻らし給ふべしと申ける藤つぼ聞召しげもちを召よせてぢきにいわんははゞかり有されはとて人つては大事也いかゞせんと有ければしらいと承さいわい水からこそ重持によしみ候へはひそかにたのみ申さんと何のしさいのさむらふへしと事もなげにぞ申ける藤つぼなのめならす悦はやとく〳〵との給へは畏て候と御前を罷立ひそかに重持にたいめんし初めおはりをかたり源のよりちかかうきでんのうしろみたるゆへにげんしの人々かうきでんをそんきやういたし候へは若此人一のきさきに立給はゝいよ〳〵源氏のいせひかさなつて平けはなきがごとくにはんへるべし何とぞかうきでんをうしなへ給へと頼ける本より重持しらいとにかよひなれ色におぼる者なれはいさひ心へ候と白いとをかへし郎等にはやみの七郎とてしのびのめいしんをちかつけかやうかやうの次第也かうきでんに忍ひ入女御をがいしてゐさすべし若しあふせて有ならはほうびは望たるべきそばんしたのむと云けれははやみ承こは一大事の仰とはぞんすれ共しうめいなれは力なくせんあくは時のうん某が一めいをは君に奉り候いさひ心へ候と我やにかへりやういして其夜のうしみつ斗に忍び入こそあやうけれされはその比かうきでんの御うしろみ大和守よりちかは物事ゆだんなき人なれはかうきでんの御てうあいを見まいらせいか様人のそねみおゝかるへし若しせんの事も有ならは我あやまりと存つゝつね〳〵侍共に申つけかうきでんを守らせ給ふが折ふし其よ三田の源太ひろつな承ほそ戸の口にしのいしていたりしがあんのごとくはやみの七郎源

太が有共しらずしてほそとのくちへしのびいらんとせし所に源太すかさぬおのこにてらうせき者あますましととんでかゝれはあらはれぬるかと取てかへし逃る所をいづく迄かにがさんとついじの内をかなたこなたへとおいまはしゝいでんの下口にてやがておつゝめたふさを取てうしろへどうとたをしおき上らんとする所を取ておさへくびかき切てちうにさし上らうせき者をしとめたりとよばゝればほくめんの侍共われも〳〵と立出たいまつふりたてみてあれは平けの侍はやみの七郎かげ光也人々おどろき關白殿へごん上すよりたゞ公聞召いか様しさいをたゝすへし源平兩かをめしよせよとの給ひけり畏て候とてすでにそのよもあけゝれば兩家へかくと使たつ源平の人々取物も取あへずなんてんの大ゆかに伺公有くわんぱく殿御出有てこよいかうきでんの御方へまぎれ者の入けるを三田の源太が打とめたりみれば平家の侍はやみの七郎と云者也とふうぶんすせんぎせよと仰けるその時平の重持はつと思ひさてはしそんしたりと思ひしがさあらぬていにて罷出そのはやみの七郎は某が郎等にて候が源太はいづくに有ぞ尋べきしさい有と申さるゝひろ綱是に候と御前ちかふさん上す重持見て源太いかにやせんはやみの七郎をはふぢつぼの御方へけいこに付置て有けるを何たるいしゆ有てきん中にてらうせきをは仕るいかに〳〵と申さるゝ源太聞て忝もよりちかが申付にてかうきてんに御ばんつとめて罷有所にたれとはしらずほそとの内へしのび入候程にみちんになさんと存とびかゝり候へ共めのとはやき男にて逃候をしゝいてんの下口にておつつめ打て候なりはやみの七郎とは人々の申されしにてこそ存たれそれいしゆ打にとりなしたまん事思ひもよらぬ御事なり若いしゆ有てうつならはきん中にてうたす共あのはやみていの者をば五人十人有共此ひろ綱がてにはためす候とはゝかりなく申ける重持聞てはやみが何故かうきてんへは行へきぞせうこもなき事申共入をあやめしそのつみはいかてか以のかるべきとう〳〵ひろつなが首斬わたさるべしいかに〳〵と申さるゝ其時よりちかすゝみ出いかに重持らうせき者を打とめて高名したる源太なれは御ほうびこそたまはるへきに御ぶんがわざにはかなふましと申さるゝ其時平けの大將正のり申さ

るゝはしよせんはやみはうたれつしにんにもふせう本ノマヽこなし是はひとへに時のけんくわと覺へたり法にまかせて仰付らるべしと申さるゝ其時らい光のたまふはいかに正のりぜひをいわせずむたいにけんくわとがなし給ふ共天うんなあきらかなりさすか大内にてらうぜき者を打取て高名したるひろ綱なれば御へんたちのはからいにて源太がくびはちつと切にくう候べしとあざわらつてのたまへはその時正平罷出扨はけんくわ兩せいばいのしきもくはほんぐなりとはすいさんなりときしよくかはつてみへけれはかはちの守よりのぶ生年は十七年ちつ共こらへぬおのこにてする〳〵と罷出そうして平けのやつはらおのれかうでのかなはぬゆへ大ぎをかすめてあいてをとらんと思ふかやすいりやうするに是はいか樣藤つぼの女御かうきでんをねたみたまいて平けを頼たまふと覺へたり何と成共今一言申て見よてんちうとはいわすましみぢんになしてみせんぞとたちに手をかけすゝみたまへは定光すへ竹つな金時はうせうともにすは共いわばかたはしよりかいつかみぢんになさんとうてくびをにぎつてつめかけたり平けにも一ごのふちん今なるとたちのつかに手をかくるくわんばく殿御らんしてそれしづめたまへより光とのたまへはらいくわうかしこまつてやあ何をさはぐぞわが者共たとへ平けがさゝめく共きん中にてらうせきはせさすまじ先しつまれとのたまへはさすがの大將の一ごんにてけんしの人々いかりをおさへしづまれは平けもすゝむに及はすそのときくわんばく殿いかに兩け後日のさたに及べしまつ〳〵たいさんせよと仰けるおの〳〵畏てたゝんとする所によりのぶ取てかへし後日のさたとはなまぬるし只今らち明てみせ申さんととび出たまへは平けも取てかへすをほくめんの大せいおしへたて引たつるよりのふこみ出〳〵したまふを人〳〵ひらに〳〵と取つゝみ宿所をさしてかへらるゝかのよりのふのいせいの程あつはれ天まやくしんも是にはいかてまさらんときせん上下おしなへてかんせぬものこそなかりけり

二たんめ

其後じやうの左ぐわん重持は宿所をさしてかへりつ

つつく〳〵物をあんずるに此度くわんばく殿の仰には後日のさたと有上は重てたいけつにおよばん時我何とちんし申共藤つぼ殿にたのまれてかうきてんをうしない申さんとてはやみをしのび入し事終にはかくれよもあらしさあらん時はふしつぼの御身のうへはともかくもわがつみいかてのかるべきしよせん一もんをかたらい源平のかつせんにせばやと思ひ頓て平けの大将正のりやかたをさして行にけるかしこになれは一門をよびあつめ重持申ける様は扨も今度きん中にて源氏の者共に平けをあつかうせらるゝ事むねんとはおほしめされずやそれかしが身になつては郎等うたるゝのみならす一家にちじよくをあたへられなか〳〵いきたるかいもなしこのうへはそれかし一人にてもおしよせてよゝ光よりちかよりのぶ兄弟のうちを打取てほんもふをとけんと思ひ定候也人人いかにと申ける正のり聞たまひ重持が藤つぼにたのまれてしいだしたるは夢にもしりたまはすされはとよ御ぶんがちじよくは一もんのちじくなりげにもげんしの者共がことばのすへ平けを見こなす所なりそのうへゆいかいなく郎等を打せあいてをもとらすしてかたてうち成しをき思へは〳〵むねんなりせんする所此うへはげんしと打はたし兩けのうんをためすへし打かつて有ならはさい國へくたりてうてきと成てなをまつだい迄に殘すべしかた〳〵いかにととのたまへは一ざの人々此き尤然るへしはや〳〵と思召立たまへと平けの一もんらうじうつがふ一千よきほり川さしてそよせらるゝこの事かくれあらされば源氏の一もん我も〳〵とはせあつまるよせくる敵を待かけたりあんのことく平けの人々二條ほり川におしよせてときのこへをぞ上にけるげんしの方には同時をぞ合ける時の聲もしづまれは平けのかたより城のさぐわん重持一ぢんにこまかけ出し大おん上てなのりける只今こゝもとへ罷出る兵のをいか成者と思ふらんよこ將ぐん是もちが二なんじやうのさぐわん重持なり某が郎等をうつのみならずきん中にての惡言のにくきゆへよせたるなり命がおしくは甲をぬいてやあかうさんせよとよばはつたり又けんじのぢんよりも源のよりちかこましつ〳〵とあゆませ出何しげもちと申か汝はふぢつぼのうしろみ我はかうきでんのうしろみなり此比かうきてんへのてうあひゆへ

に某をねたみはやみをほそどの口へしのばせて女御をがいし奉らんとせし所に思ひの外にしそんしみたの源太にうたれし故後日のせんぎを大事と思ひ當ざのけんくわに取なさん其ため一もんをかたらいおしよせたると覺へたりいかにみかたのぐん兵共あれ打とれとのたまへは畏て候と源平たがいに入みだれここをせんとたゝかいけるかゝる所に平けかたよりむしや一きすゝみ出某ははやみの七郎か弟にはやみの九郎かけ介と云者なり三田の源太は我が兄の敵なり是へ立出せうぶをせよいせん藤つぼ殿へしのび入あにかけ光がねいりし所をうかゞいてくびかいたるとはちがふへしいかに〳〵と申けるひろつな聞て打わらいちん中よりも立出おのれはまつさか樣を云物かなあにの七郎こそ女御をあやめ申さんとてかうきでんにしのび入某にうたれたり兄弟のよしみなれはおのれもひろつながてにかゝつてあにの跡をしたへ行やと云まゝにとひかゝらんとしたまふをやがはの與一おしくゝりあれていのかせ侍それかしに仰付られ候へとはしりかゝつてはつしと打はやみさらりとうけながし與一がもろひざなぎすへことばにはにざりけりとまつかう二つに切わつたりひろ綱はかみをなしつゝとよつてむつとくみかさにかゝりておしけれ共かれもきこゆる大力藤のまとふるごとくよりそふて打たをさんとしたりけり源太見てほゝきやつめはちつとつよかりけるよな去ながらわが力を出す程ならはなに事かあらんとくさずり二三まいどうの板に引つめてきのよはこしゆりあけ〳〵上おびをつかんでともに四五へんふりめぐりかしこへかつはとつきたをししばらくいきをついたりける九郎大きにいかつて大たちまつかうにさしかざしおかみうちにてうど打ひろ綱はつと云てしづみけれは九郎あまつてかつはとふしおきあがらんとする所を取ておさへ七郎をはしゝいてんにてうち取たり弟の九郎かげ介をはこゝにて只今打取とくびかき切てたちのさきにつらぬき立かへらんとする所大せい一度にどつとかへしのがすましと打てかゝるを源太此由見るよりもゑゝものゝ〳〵しのやつはらやとたてさまよこさま十文字にかけとをる西からひんかし北から南くもでかくなは十文字やつはながたと云物にあたるをさいわひにはらり〳〵となぎおとすすきもあらせず百き斗ての

したにはらり〳〵となきふせたりげにも敵かこらへばこそ風に木のはのちるごとく村々ばつとおつちらし其身はちつ共てをおはす身かたのぢんへしんづしんづと引たりける此ひろ綱がその有様おに神よりなをまされりとてみなほめぬものこそなかりけり

三たんめ

其後時のくわんばくよりたゝ公は源平のたゝかいを聞召大きにおどろかせたまひつく〳〵と此らんじやうを御しあん有にしよせん是は藤つぼの女御かうきでんをねたみたまひて平けをかたらいたまふにうたがいなしされはとて此じつふをたゝさんにはたゞめ平しん王を初ふぢつほの身のうへ殊には源平のさうだうひとへに天下の大事と思召たゝその事となく両けのそうどうをしつめばやと御しあん有ていそき源へい両かをめされける両かの人々おの〳〵さんだいなされけるくわんばくたいめんなされつゝいかにかた〳〵わたくしのしゆくいをもつてらく中をさはかす事以の外のらうせきなり上にまぎれなき上は下のいかりをおさへて両方おんびんたるべきなり是ちうしんの道なりといさひになだめさせたまへはげんしは本よりいくさには打かちたればべつきなし平けは事を是にまぎらかさんためなれはしすましたりと思ひいさひにおうけを申両方共にたいさん有くわんばく殿の御しあんにて都のそうたうしづまれは御悦びはあさからす是は扨置藤つぼの女御は此由を聞召白いとをちかづけてさてもむねんのしだいかなほんもふとげぬのみならず都のさはぎかつうは又平けにちじよくをあたへし事みな是水からがしよいなれはついには此事かくれなく君聞召はぢでうなりさあらん時は水からが身のうへあんのんには有ましきとてものれがぬ身と成てしばしが内もながらへむねをこがさんよりかうきでんにかけ入てさしちがへむなしく成君に思ひしらせ奉らんと跡をたのむぞしらいと〳〵守り刀おつ取てかけ出たまへはしらいとあはてゝすがり付こはしたなき御有様先こなたへと引とゝむ女御せきかねこゝをはなせしらいとゝふりはなさんとしたまへは女ほうたち大せい立より引とゝめ奉る此事かくれあらざれはみかと大きにげきりん有

てだいりのうちにはかなふましいそきさとへおくれとのりんげんなり畏て候とほくめんの侍共頓てこしをさしよせいたはしや藤つぼを取て打のせさとへおくり出せしはむねんたくいはなかりけりやかたになれはかやう〳〵と引わたしほくめんのもの共はだいりをさしてぞかへりけるため平ふうふの人々は大きにおどろきたまへ共りんげんなれは力なし本より女御はむねのほむらはいやましにいまはひたすらきやうらんの身となりてかけ出〳〵したまへは藤つぼはせんかたなくひとまのごくやしつらいてをきふしわかぬ御有様はづすへにむすぶつゆのまもわすられはこそ腹立やあらくちおしやむねんやとかうしに取付もたへさけびたまひしは身より出せるつみなれ共哀と思はぬ人はなし是は扨置かうきでんの女御は藤つぼの御身のうへを聞召あらおそろしや何事もみな是水からがゆへなれば人のうらみをうけし身の行すへなにとなら坂や此てかしはの二道かへる君ゆへに我も又いかなるうきめにあいもやせん、もへ出るもかるゝもおなしのへのくさいつれかあきにあはてはつへき身にもあらざれはけふは人の身のうへあすはわが身の上と思召うき世のむじやうをくわんじつつそなたのそらを打ながめ心をすましておはしますかゝる所にふしぎやないとなまめいたるあを女ほうそのさまけしからぬふせいにてつまどのわきにたゝずみたまふはいかなる人にてましますそやその時こたへてこはおろか成云事かな人の恨をうけながらなのらすとても今ははやそのをにうへしくれないのもれてもいろには出ぬへしかうきてんむね打さはきはつとおぼし召れしが心をしづめおだやかにげに〳〵なのらせたまはす共大かたすいりやう申てさふらふ去ながら人のうらみをうけし身なからとは扨みづからにはなにたるうらみの有らん身には覚へはなきものをのふおぼへなしとはおろかなりありしむかしのくもの上ともにながめし月かけのうつれはかはるあすか川はなむらさきの藤つぼをおい出さるゝはたれゆへそやあゝあさましやよもきにひとりこがるゝうき身の程思ひしらせんそのために藤つぼのおんれう是迄あらはれ來たりかうきでん聞召あゝあさましやしつとのねたみは人にこそよれたがいにおしもおされもせぬ御身にてふぢつぼの女御にはさりともにあ

い申さぬなり殊更御身も水からもちうぐうきさきの宮にもあらばこそ女御の數はおゝけれはわきてたれとは夕まくれおゝそれながらわが君をつまやおつと思ひたまふはおろかなりあらあさましのおん心ねやはや〳〵かへらせたまふへし藤つぼいよ〳〵腹を立やあいかにかうきでん御身の命たすけ置君にちぎりをむすばせてゐいくわの花をさかせつゝわらはむくらの宿に只一人よはる蟲のねもう共になきあかさせんと思ふかやたのしみつきかなしみ來るはたた今ぞやいかに〳〵とのたまへはかうきてん聞召仰迄もさむらはす世はみな夢の内なれはあすをはたれもたのまぬものおろかの人のいゝ事やふしつぼ重てによむけんほうと思へ共夢の内にもくらく有おことがほんぶの身を持て口と心はかはりつゝくやみたまふとかなふましかうきてんおしかへししんははんにてんする共本らい一もつなき時は何をかとめてくやむへし藤つほいよ〳〵腹を立それ人の一ねんは有物かなきものか思ひしらせん去とては今はうたてはかなはしとする〳〵とはしりよりさん〳〵に打ちらし立のかせたまひしが中にて忽すかたをへんし思へは〳〵腹立や人のねたみのふかきとてうきねになかせたまふ共中〳〵思ひはとまるましわが身はごくやにおしこめられはすへのつゆときへもやせん御身は君といやましにおきふしさよのねさめにもわらはかかみのうへそしりつゝとや有かくや成はつるとむかしかたりなるならはなをも思ひはますかゞみそのおもかげのつらにくやと又する〳〵とはしりより何と云共いのちをとらでかなはし二打三打てう〳〵と打てしんいのほむらは身をこがす思ひしらすや思ひしれうらめしの浮世やあらうらめしのうき世や思ひしらせん待たまへといふ聲斗有明の月にまぎれてうせにけりふぢつほのおんれうおそろしき共中〳〵申斗はなかりけれ

四たんめ

▲其後いたはしやかうきでんの女御、藤つぼのおんれうにておもきやまふを引請てばんしのゆかにふしたまふてんやく藥をつくせ共いれうのじゆつも付はて諸神諸佛にいのれ共其かい更にあらすして次第次

第によはらせたまひ今をかきりとみへたまへはみかど大きにおとろかせたまひいそきかうきでんにみゆき有女御の御てをとらせたまい心はなにと有けるぞやたとへかぎりの命なり共丸がひころのむつ事をわすれはせまし去とては心を取なをせいかに〳〵とりんげんなり今をかきりのかうきでんちよくこん成と思召、おもき枕をやう〳〵とあけあら有かたの仰かなたとへ此身はきゆるともかねてかはせしむつ事天にあらばひよくの鳥ちにあらはれんりのゑだとちぎりしをいかでかわすれさむらふへきしやうじや必めつゑしやじやうりは佛もまぬかれたまはねはかならすなけかせたまふまし本より此世はかりの宿なかきすみかのれんだいにおゝそれながらはんざをあけて待申さんとてもかなはぬものゆへに大内にてむなしくならんはけがれにて侍べりいまだこんぜうにいきのかよふその内にさとへおくらせたまふへしわが君様とのたまへは主上御泪もろ共にかほどによはる身ながらも跡のけがれを思ふかやおことにわかれなにしにだいりに有へきぞや丸も思ひ定たりさぞやさいこに父母見たふ思ふらんそれ〳〵とせんし有畏て候とやかてちよくしたつ大なごんふうふ取ものも取あへすいそきかうきでんに上らるゝくわんばくてんさま〳〵かんげん仕るしゆ上をくわんかうなしたまふ扨ため光ふうふは女御の跡や枕にたちよりてくとき事こそあはれなり心はなにとましますぞやきのふ迄もけふ迄も御身を持てあれはこそくけぶけ共にうやまはれさしもゆゝしく有し身のむなしくならせたまいなばおいたる父母は何と成行申べきあらうらめしの女御やといだき付てぞなき給ふいたはしやかうきでん父母の御なげきを見たまひていとゞ心はきへきへと日にさしむかふ朝がほの花よりもなをたへかたき聲をあげ君のめぐみは身にあまり父母にはなげきをかけむなしくならんこゝらが後の世たすけてたびたまへ水からむなしく成ならばかならず〳〵けふりとばしなしたまふなよなきからた成共うき世にとゞめたくさふらへは花山寺のかたはらにどさうにつきしるしを立置たまはるへし千代よろつ代を重ても思ひはつきじ何事も世はみな夢とおぼしめせいとま申父母様御命めでたふまし〳〵て君へつかへたまふへしさらは〳〵と是をさいこのことばにて御年十七歳

と申にあしたのつゆときへたまふためみつふうふは扨置きん中にあらゆるなん女一どにわつとさけびしは是や此しやくそんねはんにいらせたまひし時十だいみてし五十二るいにいたる迄なげきかなしむ有様もかくやと思ひしられつゝよそのたもともぬれぬへし扨有へきにあらされは人々立より父母をおしへたて御しがいをうばひ取御ゆいこんにまかせ花山寺の山かけにどさうにつきこめおきしはあはれととはぬ人はなし是は扨置こゝに又ふぢつぼのうしろみなりしせうのさぐわん重持はいつぞやかうきでんへはやみをしのび入そんじ一もんをかたらい軍にも打まけそのうへふぢつぼはだいりを出されたまへはかたかたもつてめんぼくなくさかのあたりにひつそくしていたりしが此度かうきでんむなしく成たまふよし聞よりも大きに悦取物も取あへすためひらやかたへいそきけるやかたになれは藤つぼのめのと白いとを招きよせか様〳〵と申ける白いと聞てげにま事わが君藤つぼのか様にならせたまふ事かうきでんのゆへなれは是に過たる悦なし此事女御へしらせ奉りよろこばせ申べし是にまたせたまへととてしげ持をはかたはらに置急きふじつぼのおはしますかうしのそばへ立よりなふやかう〳〵の次第にてかうきでんの女御むなしく成て花山寺にどそうにつきこめ候なり今は御心をはらさせたまへと申ける藤つぼ此よし聞召それは誠かうれしやな其ぎにて有ならばその重持にとてもの事に花山寺へしのび行其つかを引くつしかうきでんがくびを切て持きたりわらはに一めみせよとゆ本ノマヽへにくかりしおもかけを今一め見るならはいかゞはうれしかるべきにはやとく〳〵と仰けるしらいと承り畏て候とやがて立出重持に近付かくのたんこそ申けるしげ持聞てそれこそいとやすき御事なれ某に御まかせ候へととてしゆく所に立かへりその日のくるゝをいまや〳〵と待にける爰に又源のよりちかは三田の源太をちかつけいかにひろつなわれひさしくかうきでんの御うしろみとして女御の御おんをかうむりたれは御べうしよへさんけいして念佛の一へん成共ゑかうし奉らんと思へ共ひまなき身なれは力なしけふ三日にあいあたる汝御はかへまいりはなをたむけ奉れひろつな承候とて花山寺さしてぞまいりけるすでにその日もたそかれときに成しかはじやうのさぐ

わん重持はしふんなよしと思ひ下人にすきくわもたせ花山寺にうちこゑ御べう所へ立よりほりかへさんとしたりけるびろつなきたり此由を見るよりもやあそれなるはなにものなれは御べう所のつちをかへすふしんなれいかに〳〵ととがめけるしげもちはつと思ひしがさらぬていにて是はきん中よりのちよくしとしてやう有てきたりたりさゆふはなにものぞ源太聞て何ちよくしとやさ有とてつか引くづすは心へす我は源のよりちか公の郎等みたの源太ひろ綱と云者ぞとあたりまぢかへ立よれは重持源太と聞よりもかなはしとや思ひけんすきくは打すて下人もろ共にげちりけるひろつなこはあまさしと云まゝに跡をしたふておいくるくらさはくらし道もさたかにみへざれはと有田のもと七八町おいまはされ重持今はかなはしと思ひ取てかへし大おんあげ平のさぐわん重持かうきでんのかばねをぬすみに來てあらはれたりまいりそうと入ちかへて爰をせんとゝたゝかいけりひろつな心へたりと引くんでかしこへどうとなげつけるゑゝあつはれおのれはしうしんふかきおのこかなしたる人にねんをかけば今生にてはかなふまししゆらのちまたは爰なりとくびふつつとねぢ切てかけくるやつばらおつちらしるゝあつはれよりちか公へのよきみやけものやとから〳〵と打わらつてやかたをさしてそかへりけるかの源太がふるまいきせん上下おしなへみなほめぬものこそなかりけり

五たんめ

▲其後いたはしやしゆ上はかうきてんの御わかれしばしもわすれ給はねはひるはひめもすよもすからひたんのなみだにふししつみかはくまもなき御ふせいいまはやきん中はあんやにまよへる如くなり比はゑいくわん二年六月廿二日のやはんはかりの事なるに中なごんよしかぬさ中へんこれなりを召れ我れんほあいしうのきつなにむすばをれくらいに有てもゑきなし是をほたいのたねとして世をのがれんと思ふなりさらは〳〵と御ざをたゝせたまへは兩人きよいの袂をひかへなみだをなかしさ様に思召候はゝいつく迄も御とも仕らんとくんしんもろ共三人御年十九と申には十ぜんてい位をふりすてゝよはにまぎれて出

たまふ是はさて置その比天もんのはかせにあべのせいめいと申てしんへんきいのぞう人なるがしゆくくわんの事有てひよしのやしろに百日こもりいたりしが六月廿二日はけちぐわんにてほうでんに立出こすいはるかにみはたして心をすまず所にあらふしぎや水中よりまん月一りんあらはれ中より二つになりくもいはるかに上りけるせいめい是を見るよりもはつと思ひそれ日月は天よりこそ出へきに水中より出て天ゑ上るはさか様なりきつきやういかゞとしはらくかんがへ是はいか様ていわう、くらいをさりたまふてんべんなりとかんがへ大きにおどろき取ものも取あへず都をさしてそ上りける都になれはさんだいし事のようをうかゞうにくげ大臣に至る迄みかどのしのび出させたまひしを夢にもしらずしゝいてんにくわいかうしてぞおはしけるその時せいめいくわんばくてんの御まへにまいりいさひにこん上申たりけれはよりたゞ公ふしぎに思召此ほとは女御の御なげきやますしてよるのおとゝを出させたまはず去ながらなんぢか申所おほつかなしさらばたつね申さんと左右の大しんもろともにかなたこなたと見たまへ共いつしか君はましまさす八〳〵大きにおどろきあきれはてたるはかりなりせいめい申やういか様女御の御わかれをかなしみ花山寺へ御さ有よと存なりかしこへ御わたり候へとせいめいもろ共我も〳〵としたいけりあはれなるかなしゆじやうは十せんていゐをふりすてゝめしもならはぬそうあいに御あしをいたましめよしかぬ是なり御ともにて戀ちにまよふうたかたのかくらん水のあはとのみきへにし人のおもかげは夢にだにもみへはこそなれし昔のたまくらにかたりつくせしむつ事のみにとゞまりなつかしやわすれもやらぬこいくさのつゆも思ひもみだれつゝわが身は本の身なれ共こひしき人のなきゆへに月やあらぬとかこちしもげにことはりと思召御心ほき折(そ脱(?))からにやもめからすのうかれ聲われを思ふかと思はれてあはれをもよほす道のべによすからとぼすほたる火のしれぬ思ひのあればこそ蟲さへむねをこがすらんげに有はらのなりひらがきちうのながめにとぶほたるくものうへまていぬへくはあきかせふくとなけきしもなみだくらべてあはれなりいとゝさへ〳〵身をしる雨のはるゝまもなき中ぞらにおたのかはづのなき

そいて道もさだかにみへばこそなみだぞ道のしるべなるやう〳〵行はよこくもわたるしのゝめの今はちり行花のお山御寺につかせたまひけり兩人さきたち御べう所にまいり是こそなき人の御へう所と申せばしゆ上は御なみだながらに立よらせたまひいかにやいかにやかうきでん丸はこがれて來るぞかしせめては聲なりともせずやあら戀しのむかしやとりうていこがれ給ひけりかゝる所に三大臣せいめいもろ共に御跡をしたい花山寺にてぎよくたいをはいし奉りよろこぶ事はかぎりなしくわんばくでん世はまつせにおよへとも日月いまだ地におちす是はいかなる御事とさま〳〵かんけん有けれ共ちよくこんにもおよはすかへつてげきりんのていに見へけれはあべのせいめいする〳〵と罷出おゝそれおゝき申でうに御ざ候へ共かやうのていにならせたまはすんはいかてかぎよくたいにはちかつき奉らんしよせん御とんせいのみなもとは此御わかれゆへなればそれかしがじんへんにてかうきでん二たびよみかへらせたまはゝ御しゆぎやうを思召とゝまらせたまはんやとはゝかりのふぞ申けるしゆ上をはしめくげ大しん申にやおよばんはや〳〵やうい仕れ畏て候と頓てだんをぞかざりける百八のとうみやうを立ぬれはたゝまんとうゑのことくなり五ちのによらいをかた取て五色のへいを五ほん立ならべ本よりせいめい三國にかへれなきじんへんきいのはかせなりだん上にさしむかつていらたかじゆずをさらり〳〵とおしもんで先神おろしをぞしたりけりきん上さいはい〳〵うやまつて申奉る上はほん天たいしやく下は四大てんわうゑんまほう王五だうのみやうくわん下界のちにはいせはしんめい天しやう皇太神ぐうあめのみやかせのみや月よみ日よみあまの岩戸は大にちによらいあさまかだけにはふくいちまんこくうそう王じやうのちんじゆにはいなりぎおんにかもかすがきふねは五しやの大みやうじんくらまさんにはたもんでんたかきお山はあたごさん大こんげんおとこ山は正八まん大ほさつ松のを平のをむめのみやふしみに一ごん五かうのみや大和にかつらききんぶせん吉野はさわうごんけんなりたうのみねには大しよくわんたつたは此はなさくやひめくまのは三つの御山なりしんぐうほんぐうなちはせんじゆくわんおんなりつのくにゝいたつて

は天わうしにしやうとく太子すみよし四しやの大明じん四國のちにはさぬきにこんひらおなしく四どちのくわんせおんつくしにひこさんいづものくにゝは大やしろきつぎの明しんはうきに大せんたんごになりあいきれとのもんじゆあふみの國に聞へたる日よしは山王の一しやおたがしらひけひらの八かうこすいはあらはれたまひしは竹生島のへんざいてんなりみのゝ國にはなんぐ高山ゑちせんにといはらやいせんしかゝに白山つるぎのこんげんゑつ中にくりからふどう明王なりゑちごの國にはくがみよね山やひこのごんげんきのとは日ほんぶそうなり出羽にはくろゆどのはこんたい兩ぶの大日大りやうこんげん道のくにいたりては松島おしまほがま六しよの大明神しなのゝ國には上のすいしものすいせんくわうじは三國一のみたによらいかうづけにいたつてはめうぎ八方あかき山、下つけに日光山ひたちの國にはかしまかん取うきすのみやうしんむさしにみつみねさがみは大山大しやうふどう明わうなりいづに三島はこねは二しよの大こんげんとを〳〵みの國にはあきはこまかたはまなのみやうじんみ川に入てはほうらい寺みねのやくしは十二神おはりの國にはいちのみや二のみ第三にあたつてはやつるぎあつたの大明じんそうして日本六十餘州は三千七百餘しやなり天に有ては日月せいしん廿八しゆく大地のそこにおはしますけんらうぢじんにいたる迄三千大せんせかいの六まんがうかの諸佛神こと〳〵くくわんじやうおろし奉るたとへじやうがうかぎりのいのちなりとも今一度よみかへらせてたびたまへとせめつけ〳〵「いのりける佛神のふしゆしたまひけん天ちにはかにしんとうして御べうふたつにさつとわれ女御たちまちよみかへり君はいづくにましますぞ君は〳〵と有けれはみかど夢ともわきまへす丸は是にとのたまへはこはま事かとおもはすしらすいだきつきこれはこれはとばかりなり三大しんせいめいかゆんてめてに取つきおゝ仕たり〳〵と、御よろこびはかぎりなしせいめいめんぼくほどこして御前をこそたちにけりかんかほんてうにかゝるぞうにん有がたしときせん上下おしなべてみなかんせぬものこそなかりけり

六たんめ

さる程にしゆ上三大じんをめされ我一たびていゐをさりしよりちやうその望さらになしゑんにうゐんの一のみやをくらいにつけ國土をおさめ申せとて御身はゐんにならせたまひくわさんのいんとぞ申奉る三大しんりんげんにまかせゑんにういんの一のみやを御くらいにつけ奉り一條のゐんと申て國土をおさめ申けるさるほどにしゆじやうは御かざりをおろさせたまひ花山のほう王とならせたまひ有夕ぐれの事なるにかうきでんもろ共にみなみおもてのひろゑんに出させたまひ庭のおもをゑいらんあるに小鳥二つとびきたりおもしろくさへつりしにいつくともなくいたち來てくだんの小鳥をくいころしたちまち左右につばさおい出こくうをさしてとびてんけりほうわうおとろかせたまひせいめいめせかしこまつて候と御前に出る君ゑいらん有いたちにつばさのおいたるためしをきかずきつきやういかにといんせん有せいめい畏てひとつのようもん取出ししばらくかんかへよこでをてうどうつて是はゆゝしき御大事明日のくれ程にふちつぼのねんあつきとなつて御所へ來り君もろ共にこうきてんを取たてまつり申へしげんしの内にてふゆうにすぐれし大將に仰つけられそのたいぢ仕らんとそうしけるしからばらいくわうに申付よりのふめせ畏てせんしをたまはりほり川さしてそまいられけるらいくわうにたいめん有せんしのおもむきのべたまへは畏てよりのふに三百よきをぞそへられけるよりのぶ御所へ行御もん〳〵をさしかためやうじんしてこそいたりけれゐんのことくふぢつぼかうきでんよみかへらせたまふと聞あらくちをしやわが一ねんあつきとなつて君もろともにかうきでんつかみさかんとつつたちあがつてゑいやつとおどりたまへはごくや一度にばらりとくづれたちまち一ねんのあつきとなつてくもいはるかにとびてんけり御所のうちには御もんをかため待ところにふぢつぼま一もんしにきたりたまへはかなはすしてむら〳〵ばつとぞにけにけりよりのぶ御らんしたちひんぬきはしりかゝつてちやうどうては上をずんどこしたりけるせいめい御へいをおつ取てもうりやうきじんはいまいましゝ出よ〳〵とおつたてられとつてかへす所をよりのふ有やと引くんでなむ八まんとねんしゑいやつ

とはねたをしついにくびをかき切きつさきにつらぬきもうれうきじんのしたがへたりとよばはりけるそれより國土ゆたかにおさまりけるせんしうばんせいの御よろこび申斗はなかりけり

右此本者太夫直傳之正本を以寫之令板行者也

貞享四年卯ノ五月吉辰

大傳馬三丁目　うろこかたや新板

天狗羽打

初段

それかんしんくわかんの、はらをしのんて、終に親王の院をにきり、かううはちをしのばすして、おうこうのしをいたす、此ふたりは誠に武將のたづぬべき道ならんか、爰に源の右大將いよのかみ頼吉、代々天下の武將として、御果報いみしくをはします、殊にちやく男に八まん太郎、次男かもの二郎三男しんら三郎、何れもきりやうのきんたちなり、したがふ所のらうとうにめつらしからぬ竹つな、金吉末重、其外三浦のわた左衛門たけちのやすかた、ちゝふの十郎重明、鎌倉のごん五郎景正むしや所の末行、晝夜の出仕隙もなく君をしゆし奉る、頃しも彌生半成に山の櫻の徒に遠風にもまれて、主なき花のしからめとやならん、ちらぬ先にと行幸あられ、扨人々を御供し櫻の庭にぞ出られける、げにものどけき春の日に、ことのはしけき八重櫻、にをいをこせやまかきのむめ、扨こそ花のなさけならめ、くるゝぞおしき夕日かげ、ゑんしのばんしやうこゑすごく、しづ心なきやうの會、猶々めぐるさかづきの、たび重ば今ははやよもの咄になつて、大將仰らるゝは、いかに面々此程は、打絶て世間のさたをも聞ざるか、何と世中に、めつらしき事や有と、仰出されたりければ、其時六郎申樣、されば爰にふしき成事を承り及候、すきつるきさらきの、廿八日にいまくまの大しん殿こそ、くらまへ參詣あれ、おくのゐんのきさはしにて、長さ二丈ばかりのあつきにあい、かへりて三日めに、あいはてられて候よし申上る、君を初人〳〵、何れもふしきしあへり、中に金吾きかぬがほにていたりしが、つと出て申樣、いかに末重只今御ふんの物語は、ひつでうな、なか〳〵いかにもひつてう候よ、金吉聞て、先よくあんぢても見たまへ、ほとんと鞍馬のびしやもんは、天の四天とかうし、多門ぢごく僧正、廣目とて東西南北を守たまふ、中にもた門は我等體のほん下を守、あくま外道をはらはるゝとこそ承れ、目前にいかてまゐんが住べき、それは世間のいゝなしさあ、六郎聞て、金吉のかたいちめつらしくも候はず、其上せわにも、よみち川

だちかた諫咄の、さきをりせぬ事なり、常々の我まゝ、御前にてはやめ候へとよ、金吉大きに腹を立、何にそれかしか御前にて、我まゝを申とな、尤さこそ有もせめ、去なからおやのゆつりのすみずきんどうもこうもなり申さぬぞ、おたんなも御しやめん有は、御ふんこそ御前共なく跡先しらずのうそ咄、ひらにからりと打おかれよ、末重大きに赤面し、何にそれがし御前にて、ひようりを申とな、幼少よりのちなみを思ふて度〳〵のかうぎを許置(ゆるしおけ)ば、はうりやうもなきあぶれ者、指ちがゑんととびかゝる、竹つな三浦取付、是は御前をもはゞからぬ、すいきやうかな、それ酒はいさみと名付、老人はわかくなり、わかきは猶もおいもせず、かゝるてうたる延命すいも、すぐれば、とくと成ときは、いらい此なかさの酒、きんはいせんと、ざきやうに取成、しづめし竹つなを各かんじ申さるる、金吉聞て、末重に大口たゝかせ、指ちかゑんもせんなし、いかに末重御へんに對し、諱いしゆはなけれ共、御分それ共色かほをむすんで、思ひ切上は是非もなし、代々年頃の契りし、はうゆうのなじみを、もとすと思へはりはすむと、いふ物よ、去ながら其まゑんが、住かひつでうならは、かつうは君のためなれば、一先それかし行むかつて、有無のしやうれつを、見て參らん、ふれふ天の下、そつとの内何くか、鬼のすみか成べし、鬼神はまゑんの物なれば、せうたいむめうにして、眼にもさへきらす、力及ず、目にたに見ゆる程ならば、けしの中にやとる共、又は十丈の惡鬼といふ共、金吉か手なみには、いかでもらし候へき、去なから印をたまはれ、それがし今晩、見て參らんとそ申ける、大將聞召御へんか申ごとく、かつうはわがため、天下のぶせうにそなへられ、四かいにあまねくあく逆ともに何にてもよの安平をこそあふがめ、是を立置かへれとて、持せたまへる御扇に、天下太平國土安おん、賢き君の勅と書て下さるゝ、又立歸りいふ樣は、人の心をみちのくのあたちか原に、あらね共はびこる鬼を、したがへずは二度金吉歸らしと、高言いふてそれより三重我家をさしてぞ歸りける、宿所になれば、物のく取てかたにかけ、重代の太刀をはき、たけ成馬に白あわはませ北山さしてぞ、いそきける程なくくらまに、付しかば本どうをわきにみて、おくのゑんへうつてとをる、頃は彌生なり月くまなくさへ行

共こずへしげりてさはりとなれば、花有といへ共、詠はくらまの山の内、みちもしどろにおほつかなくて、をちくるしやうふう花にあたつて、雪とふり雨と成哀猿雲にさけんでは、腹わたをたつとかや、心すごき氣色となつて、馬も心のあればこそいなゝくころは山林ぐわいとにもころつへし、うて共〳〵あをれ共行ず、身ふるひしてぞ立たりける、それより馬をのりはなち、印の扇を神前にかけ置、拜殿の板とう〳〵とふみならし、抑〳〵此山は、大署多門の地をしめて、あくまを退王城を守りたまふ北山なり、殊に我々其四天のすをけみやうし、君をうやまい國土を守るのけん武たり、故ぞや土も本も我おゝ君の國成に、聞ば此頃鬼神か住て、萬民をなやますとや、辱も類吉公、ちよくをかうむり、うちほろほせとの上いに住、坂田の金吉是迄向たり、それがしが眼前に、そのしやうたいをあらはせと、八方をにらみ二王立にぞ立たりける三重其時山はらいでんしきりにし、めいどうしてぞ山は天にもゆり上けつへし、木の枝をひきさき、たけかけれ共、金吉更にどうてんせず、そらうそふいてぞいたりける、然所に金吉かまの前にたけ二丈餘成、くまのことくのものはらばいしてぞいたりける、金吉是見てや、あこけばつたるばけ物かなとてふまへて向へこへにけり、時にいつく共なくどうじ來りていふ樣は、抑〳〵此山は、姿ごときのぼん下來る山にあらず、早そこ立て山下せよ、金吉聞て、扨はおのれめは此山に住まにて有な、おのれなとかせうたいにて此金吉をおつ立んなどゝは、鴨とすゝめがすねおしせしには劣りたり、をのれ立され〳〵とから〳〵とぞ笑ける、其時とうじ腹を立、いて物見せんと一丈餘の大天狗となり、いかれる兩眼は日月のことくたた一つかみととびかゝる、金吉さしつたりと引はづし、はたときるぐひんかたはを打おとされ、ひるんでこくうにとびさりぬ、金吉口惜や、討もらしぬるときつたる片羽を取持、我家をさしてぞ歸りける、金吉が振舞日本一のつわ者やと、かんせぬ者はなかりけれ

二段

去程に金吉、きつたる羽を取持、君の御目にかけければ人〳〵立寄是を見るに、天ぐの羽にうたがいなし、

竹つな申様、金吉のふる舞偏にとらのおゝふみ、さいろうの口をのがるゝことくなり、君聞召竹つな申さるゝごとく、ぼんぶの身として天ぐを斬事末代にためしなし、其討たる太刀をみせよ、金吉長て候とて、大刀を捧それ〳〵とあれば、竹つな彼、大刀をぬき見れば、ふしぎや、せつはぎはに赤き物みへたるを、取上みればあたこの山のひのふだなり、君御らんじいかに金吉、思ひ合事はなきか、金吉承り、我年月あたごをしんじ候、頼吉聞召扨はあたごの神力にて有けるよな、去なからか様の物を討が必三日か内にふしきの有物なり、先年も頼光の御代に、竹つなが父渡邊、らせう門にて鬼のかいなを斬、三日めに終に手を取かへさるためし有、随分たじなく三日が内は、事をつゝしみ物いみすべし、是は當座のいんぶつとて、よろいかぶとに太刀をそへ、金吉に下さるゝ、忝候とて御前を罷出三重我家をさしてぞ歸らるゝ、我やになれば、門屋内の口〳〵をとちふだをおし、しめをかさりさま〳〵のきとうをし、件の羽を石びつに入、神道のひみつの文に曰く、地結四方結虚空毛と、書てからうとのなかへふうじこめ、其上に金吉、六ぐをかためひつそとしてぞひかへたる、去程に二日はやすき三日めのくれ方にいづく共なくかた羽のとびとんて來り、門より内に入、立まふとおもへはたちまちとうしとなり、金吉がひかへたるしやうしをへたて申様、いかに姿あたごのなふしゆ有、かた羽を姿に打おとされ、つうりきもうすく成、むねんといふかきりなし、姿ゆふ力にまかせ、しんつうをやふる事、たらまち罰をみすへき、いそぎ其羽をかへすべしと、あたりをにらまへ立たりしは、物すさましくみへにける、金吉聞て何にしんづうやふるといふは何のへんじやうか來て言、姿しらずやくらまの山の大天ぐ、片羽かへせといかるこゑは、家もくつるゝ斗なり、金吉ことゝもせずから〳〵と打笑、それかみといふはしやうしきにして少もわだかまらず、かゝみにかけのうつるが如し、かるか故にかみの前にかゝみをかくる事、姿らがやう成大まをなし邪成者をいましめんためなり、それ神うやまふによつていをまし人は、みの徳によつて、うんのさうかみのりせうは有共なき共いふ難し、たゞ人の心に有其上、しんつうのうたにじひ佛すくはかみまがり、人ひとりをは三つにわけけり成

と有、なんそしやうじきにしてしんするをつかみ、なやまする神とはいわれし、あふことにおよはす、天ぐとは文字にも天のいぬとかけば、たゞちくせうにてこそあれ、姿がぶんにてそれかしてに入たる物をとらんなとゝは、ひきんかいしをふくんで海を、うめんとするに事ならず、あしくうずまひふかくをとるな、たゞしは又殘るかたはもたまはらんや、其方の分づつしだいとあらゝかにぞ申ける、どうし大きに腹立、是非羽をかへさぬ物ならば、いて物みせんとあいのせうじをけやぶり、金吉にとんでかゝる太刀ひんぬいて、きりはらへばかなはずたちまち天ぐのすがたをあらはし、南の方へとびさりぬ今においてきいの國なちの山にかた羽の天ぐと申事此時よりもはじまりけり、金吉しすましたりと、悦三日三夜も過行ば、石のからうとをいぬいのすみにゆわいこめ、是を偏にあたごときわめ、ごんげんの神力彌しん〳〵をこたらす、是は扨置おふしうの住人、三たちの權太郎清平がらうどうに小井出の藤太はや馬にてたいりをさして上りける、だいりになればけんびいしけんばのかみを以て申上る、是はおふしうの住人みたの權太郎、清平か下人小井出の藤太と申者にて候、扨もあべのさたとうむねとう、逆心存立近國をきり取都へうつて、上るよし事きうに候へば、いそぎ討手をつかわされて、然るべう候とをそれ入てぞ申ける、くげ大じん驚たまひて一〳〵にそうもん有、みかど驚かせたまひ賴吉めせとのせんじなり、頓てさんだいせられける内よりのせんぢには、あべのさだとうむねとうが、むほんをしつめよとのちよくでう成、とかふに及はす御うけを申罷立我家にかへり、四天王其外むねとの兵をめされて、かやう〳〵のせんぢ成いそき馬を出すべし、よういせよとぞ仰ける、竹つな承り尤かふこそ候べけれ去ながら、何れもれき〳〵の兵共罷有事なれば、仰付られ八まん君を御大將軍にて、一先むかはれて然るべし、君の御馬むかはんは餘にかろかろしく候と、さいさん情誠申けり、賴吉ともかくもはからへとそ仰ける、しからば八まん君を大將軍にて、末重金吉竹ち三浦かけ正に、北國を勢あいそへられて然るべしとぞ申ける、君けにもとおほしめしいかにかた〳〵八まんようちに有間、萬事宜持なすべしまた竹つな一人は、京都のおさへに殘しおくい

さい頼との御でうにて、何れも御暇たまはり三重いそぎしたくをしたりけり、扨せんちんは鎌倉の權五郎景正と聞へけり、せいしつのくらにおもだかのかなかい、うつてくまのかわのあをりに、いなづまの、あぶみをかけ、うの花をとしの、よろいをき、もよぎのほろをさつとかけ、大の手ぼこに十文じの、手だうぐ持せ、たつなかいくりまつさきに、乗出る、二番に竹ちの源太やすかたかげ成は、こまにきんぶくりんの、くらにひようのかわのあおり、まきるのあぶみに、よもきのはらまき、赤きほろをかけ、大みの鑓の手だうぐ持せ同つゞいて出にけり、三番に三浦のわた左衛門つきけのこまにすなごのくらをき、らつこのあをりにあをがいすつたるあふみをかづかせ、つれて同出にけり、四番にうらべの末重白き馬にしゆためのくらをき、とうのあほりにむめはちすつたるあぶみふみ、吉慶のものゝぐきて、白きほろを、かる〳〵とさし、大長刀を持せ、是もつゞいて出にけり、大將の其日の御しやうぞくから錦のひたゝれに、重代のひげきりの御はかせ、白きほろをめされ、くろの駒に金ふくりんのくらをかせ、大の男に左右の口をとらせ、げんしの白はた先におしたて、御馬まはりにはしゝそん〳〵の若侍弓矢をたばさみたん〳〵むらくも、君を中に取まき、前後をしゆこし、かしら〳〵のおさへの者しつはらいは、坂田のあく平太金吉、れいのぐそくに、白きほろ九尺の餘、兩はのほこ馬より跡に持せたり、たけやす七ふん雲玉と言、うすくろの馬にしゆのくらあふみかけさせ、とねり二人左右に引付、ちとりがけにあゆませ、いかにとねりめらかんかつよくて、てがくゆるか、ま事に、此馬餘にひそうして、やゝ久くとをのりをもせず、かんばりになりければ、此度の間せめ入てくせをなをさんそこはなせと、たつなくりしめわり口にして、所〳〵てかくをくれそれ雲玉をのれ、此程扨もほてたり〳〵はい〳〵ぶんばく〳〵ぶんとんはく〳〵せめて、馬に白あわはませつゝ、馬の貳しやう引まはいて三べんのりさあ口こそなをれとねり共此谷川にてあせをなかし、すそひやせとて馬よりおり、うがいてうずし馬にいきをつかせつゝ、扇をつかいめでたう、君にあふ坂いわしみつのなかれに心をはらし、おふしうさしてぞ、下りける、彼金吉がせうぞく、日本無双の馬の上手、せいす

いゆうみやうきたいの侍やと、みなかんせぬ者こそなかりけれ

三段

去程に爰に、四國の大將あわの大夫道ふさが子にせう〳〵みち友とて有けるが、父みちふさは先年四國をかたらひ、むほんを企、四天王に討れぬ、子孫は面きよかうむり、爰かしこにへつらい、さつまの國にかくれて、徒に月日おくる此頃はきいの國、ねころを頼いたりしか共、なふ人にはねころの大膳どうせん、さいせん、なんせん、ぼく膳とて、ねころこ川にてかれらに、上こす者もなくおとにふれたる惡僧なり、中にも大膳申けるは、聞は關東にあべのさたとうむねとう、むほんをおこし其おさへに四天王が向、竹つな一人殘と聞日頃の望爰ぞかしいざ此ひまにおしよせ口口よりしのひ入城に、火をかけ四方よりおつ取まいて、討ならばたとへばいこくのはんくわい長良か、わたつてこもるといふ共、竹つな一人にてはかなうまじはや〳〵おほし召立たまへとそ申ける、道友聞て何れもの心付のたんうれしくは存すれ共、それがしか父道ふさがむほんの時も竹つなかちりやくにて討れしなり、ましてやわづかねころこ川の勢斗にて頼吉を討たん事、思ひもよらずと申ける其時どう膳すゝみ出て、君の御心の內察申たり去乍ら、ぐわんらい我々しのびをゑし事なれば、大將より吉が首をばこ此五人の者に仰付られ、候べしこよひの內に御目にかけ申べし道友聞て、其儀ならばはんじたのむぞかたかたその時とうせん人々に暇乞しねころをたつて、都成頼吉の城中へしのふ事こそ、おそろしけれ、ねころにのこる者共は、どう膳いかゞしつらんと心もとなく思ふ所へどうせん大いきついて、きたりけり人々いかにととへば、どうせん聞てされば頼吉三日以前より大內に上り、未歸らずせんほうつきて、是を印に取てかへり候とめぬきかた〳〵取いたす人々立よりこれをみれは、代々げんじにつたはるいんすのぞうのめぬきなり、道友よこてをちやうと打扨も自由じざいの事共かな、此上は人々なにとぞ本望をとげさせてたまはれとよ尤とてねころこ川のしのびの者、つがう其勢一萬よき三重都をさしてぞよせにけ

る、此事都にかくれなく頼吉公竹つなを召れ、聞は道友ねごろこ川の勢を頼、こときうに責上ると聞、竹つな承りされば、敵すでにはやせつの國迄討手出ると承る、何によせたればとていかめかしい事はよもせましきと存れ共去なから、小敵あさむくへからずと、有時はゆだんすべきにあらず、其上ねころの者共はしのひの上手て有間、今もやしのんて城中に犬を入てぞ置つらん、それかし存るしさいあれはとて物かしらを近付、寔敵明日たつの一天におしよすべしみかたはとりのこくにぢやく帳を付其かしら〳〵のちやう帳のいたをかたみにして、むしやを一面にたて、そなへをしやぎの馬のことくたん〳〵かくかくにたてならべ、いざいざい立ざいかけ引のざいの手くみを合れ、もしざいにもつかざる無禮の者是あらば、おさへてなわをかけおくへしと、しのひ〳〵に申付御勢すぐつて三千よき三重其の夜のあくるを待かけたりよせては程なくやまざきにぢんを取、馬のあしをぞやすめける、中に大膳すゝみ出て、こんやは人馬共にいきをついて、明日のたつの一天によせ、かくべしいさ、こんや城中へ犬を入て、てきの目前に、うかゝはせ思ひもよらぬ所より、火をかける物ならば大て、さわいではいほくせん所を、ふみこみ〳〵責取へしまつさらば、其てだて、いそがんとしのびの者五人近付爰をしそんする物ならばねころこ川のなをりなりずい分、其むねほつすべし承とて敵の方へはきりのいんをむすびかけ、我〳〵はこたかのいんをむすんでき、行かとみへしがかいくれ、すがたは無人のことくなり、よもあけ方に成しかば、竹つなぐそくはだには、から綾の白きぬりひおどしのよろいをき、金のざいを持くろき馬にのつて、みかたのめんしよくをみんため、ちやく帳の板をかゞみにあらはし、件のいさいをしつとり〳〵と打をさめたまへば、本よりあいづの事なれば、皆一同にしきだいし、面々大將の下知を背かじと、かをゝもち上てざいの色をそうかゞいける、竹つな本よりくろかねの、まな板をもみとをす程のものなれば、三千よきが中よりもたのもの五人み出し、それ〳〵からめとれとて頓てなわをかける、竹つなおのれは何者なれば、かけごなしにまつすくに申せ、ころしもせまじいけもおくまし、久うもない一せうにちにくをはいて、苦みうけてしなん

よりは、有のまゝにはくでうしくつうをたすかり、しははしねとぞ申ける、五人の者共日頃は、さいのめにきざまるゝ共、はくでうなどはかたき事といふなから、竹つなのせいこんに、ほろりとしごくしなにをかつゝみ申べき、ねころの法齋こ川鐵玉、しゝが谷の蛆きりばう、とろ川のりうせんとつ川のうんばとて、代代のしのびの名をえし、者なれ共日本一のめくちかわきの竹つなに、かゝるこそふうんなれと、しんていのこさずはくじやうす、竹つな聞てさすがねごろの者程有、かくけなげ成者共を、たすけてみたき者なれ共、末代のみせしめにたゝきれとて、首きつて、東寺口にぞかけさせける、かくてよせての者共山さきを立て東寺口にさしかゝる、件の首をみるよりも竹つながあらん内は、しのひはかなうべからずたゝすみやかに大手より、無二無三に責入と大手からめてもみ合、時のこえをぞ上にける、城中にもかねてごしたる事なれば、同時をぞ合けるよせての方より、五人の惡僧しつ〳〵と馬をのりかけ、ぐわんらいねつたいうらみふかき敵なれば、道友いきどおりのやむ事なし、ちやうやうふりやうのよの中にうつら〳〵と住はてんとはぶしたる者ほうぎにあらず、せひ一せんをあいとげんとよせてみかたが入みだれ、ひ花を散して戰いけり、よせては大勢、みかたはぶせいの事なれば、みかたまばらになりぬ竹つなみて、君の御前に參すでに軍は、まけ色にまかり成軍のならい、かちまけは時のうん爰ぞ軍ほうのだい一なり、先落城あられ敵に一たんりをゑさせ、重てちりやくを以て、ほんくわいをたつすべし先みたいきんたちをおとし申べし、ともかくも宜樣にはからうべし畏て、扨きんたちをば侍二三人付てゑい山におとし奉る、扨又御せんは御父關白殿へおちたまふ、君もめてめく竹つな御供仕二度御げんざんなさせ奉らんと、泪をながし申ける、みだい聞召あら心うやそれは君の仰にては有まじき竹つなのはからいにてぞあるらん、みつからたゞならぬ身といふ君は十五わらは十三の頃より、あいなれ參らせ片時のわかれをたにうしとかなしみ今はのきはに及、おやの本に歸らんはよの人よしとははべらしあまたのきんたちのためにもあしかりなん、たとへみつから女なり共、君もろ共に火共水共成行共、おやのかたへは歸るまし、情なき竹つなの

はからいやと、りうていこかれたまひける、竹つな申けるやうは尤御でうにて候へ共、是は一たんのけいりやくにかく仕上は頓て敵をほろぼし、父子ふうふの御たい面悦のきらくはちかかるべし、じこくうつらばあしかりなん、それ〳〵と御手を取御こしにのせ申、供人あまた相添からめてよりおとしけり、かゝる所にねごろのせんせんからめてかためいたりしが、それおちうとあまさじと供人をきりちらし、みたい所を生捕頓てろうしやとなしにける、是をばしらで城中には頼吉竹つなを召れ今は心安し腹をきらんと、のたまへは竹つな承こはかいなきてういかな、それかし存るむねの候、爰にむらいとものの介君の御おんあつくかうむりたる者なれは、此者を君のかわりにたてばやと思ひいかにともつ介。此度君の替に立たまへむらい承仰迄もなしたとへ仰なく共かね〳〵心得の上なれば、御意をいかて背べしはや〳〵しつふを何とさしたまへ竹つな、承りあふしんひようなり〳〵とやかて君のよろいをきせ御大将にはふるきよろいを参らせ、ふたいの侍七十五き君を中に取まきからめてより打て出る、よせてのもの共あまさしと、我も〳〵と打てかゝる両方互、入みだれ爰をせんとそたゝかいける、むさんやな城中の兵卅きまくらをならべ討れける、其ひまに頼吉程なくおち延たまふ、跡より悪せん兄弟と名乗何迄御供申さんと、一面にきつてかゝる竹つな あい付おし合見へける、大将も今ははやいたでおいたまふ前後もしらず見へたまふ、竹つな悪せんぢ兄弟手下に斬ふせ殘やつはらを四方へはつと、おつちらし君をかたにひつかけ、行かたしらずなりにけり、城に殘しともの介今ははや君もはるかにおちたまふ、ともの介悦大手をさしてきつて出大おん上ていかに敵の者共、源の頼吉うん命極やみ〳〵としなんも口惜、我とおもはん者あらば討取末代の手からにせよと、大勢の中へわつて入爰をさいことたゝかいける、くつきやうの兵卅七きりふせ、太刀を口にくはへつらぬかれ死にけり、皆々城へのり入彼とも介さいごあつはれぶしの、手本やとかんせぬ者はなかりけれ

四段

去程に竹つな本より、くつきやうのはや道にて、頼吉をかたにかけ其よにわかさの國、おばまの浦に付しかば、よはほの〳〵とぞあけにける、竹つな心に思ふ樣いや〳〵爰は北國みちすしなれは、てきあとよりしとふ事もや有べしと、しん山ふかくぞ入たまふ、いたはしや御大將御手はいたむ、つかれにはおよばるる御心もきへ〳〵と、いきもはやたへ〳〵にこそみへにけれ、竹つなかへ〳〵しくもかなたこなたとたづねみれは、きこりのむすひすてたりしいぶせきいほりの有をたよりにて、しはのあみとをおしひらき、君をうつし奉りよきにかんひやう申ける、頼吉仰けるやうは竹つなが心ざし、今にはじめぬ事なから此度のちうせつは、こうせん迄もわすれかたし、かやうに手をおい命有らん事かたかるべしかゝる苦惱をせんよりは、はらをきらんとのたまひて、御はかせに御手をかけさせたまへは、竹つなおしとゝめあはいふかいなの君の御所存かな、御命たに有ならは、御本くわいをとけさせ申さて、有へきか道友かおごり今幾程か有べき、何事もそれがしにまかせられ、時のいたるを待たまへ其内おふしう勢もかいじんすへしと、云所へ八しゆんに及老人しばをこりてかへりしが、人々を見まいしせかた〳〵は此へんにてはみなれ申さぬ人なりいづくの人ぞと申ける、竹つな申樣我々は越後の國の者成が、都へ上るみちにて山だちにあい、是成人さん〳〵手をおい萬事かきりに罷成此へんの人ならはあはれみたまへと申ける、老人承りかた〳〵のけしき更に左樣の事にてあらす、てきおしのぎこれ迄のかれたまふと見る、かくしんりんはなれし、山中なればうへにつかれたまふらんさゝんにつゝめる、あわいゝを人〳〵にあたへける、竹つな悦心有老人かないか成人そと申ける、らう人承り我此山里に住おきな成か、日夜木をこりらうめいをおくるなり、と語又々明日參らんと、いふかとおもへはけすかやうにぞうせにけり、人〳〵此由御らんじ扨八まんのげんじたまぶぞありかたさよと、こくうをらいしたまひける、かくて頼吉山中に日數をこそおくりたまふ是は扨置、物の哀をとゝめしは牢にましますみたい所にてとゝめたり、殊に其身たいならす、御身の上はのたまはでつまの頼吉たけつな討れたまふと聞召こはそもいか成むくいそと、りうていこがれ

たまひける、身づから城を出しとき同みちへと申せしを、竹つなにいさめられきぬ〳〵に別わかれ、ところ〳〵の死をして、あからさま成たいこのていたれかかはねをかくすべしよしそれとても力なし、ひつしのあゆみひまもなく、月日かさなりていと哀成御くわいにん、よその見るめもいとゞしく、過にしかたのよなりせば、めのとの女房あまた寄かいしやく有へきに、かゝる物うきろうの内、御さんたいらか成けれ共、たれあつてかつかう申者もなく、うきもつらきもとゝめたり、され共みつから取上みたまへはわか君にておわします、御はだへをぬがせておしつゝまいたまふ、いたはしやみだい所はくどき事のあわれさよ、皆舎兄八まんかも次郎しんら三郎、元服の悦迄もつゝがなく雨か下の諸侍にいにうせられ候に、扨も果報なき此子や、かく三悪道に性をうゝる、前後左右にごづめつあほうらせつの、番の者たま〳〵いねんとする時は、めしうとしゆごのせつかいのおと、人のかしやくも我身の上ときもをけし、まのあたり成じごくの有様いつさいこにて有やらん、未うぶやも過さるに、きうせんにかゝりめつせん事、ながくあびにだざいせん此世こそはかくはつるとも、來世にてはつまの頼吉もろ共に、同はちすに向させたまへやと、たな心を合てなむあみぜぶつ〳〵と、ひとへにみたのらいかうをねんしたまふぞ哀成、かゝる所にろうもりに木村かんへい此由をみるよりも、いそぎ道友かまへに行、頼吉かさい女ろうにて子をうみ候と申せば、道友聞て何其の女産したると申か、尤母はめらうの事なれば下べにさげて召つかふべし、又生れし其子男ならば、殊に上らうの子は二ばよりもかうばしゝ、それをたすけおかん事はんらうの子を取、たかいぬにそたてさせ後ぼんにんをくわるゝ事、眼前のことはりなりまさに我父道ふさを頼吉に討せ、我ふたばにてはなれしおやの敵を討事は今眼前のしやうこなり、いそき引出してちうすべしはやとく〳〵と申ける、承り候といたはしや上らうを牢よりも引出しいかに上らう最期なり御念佛と勧むれば、みだい少も騒きたまはすよし〳〵かねてより思ひもふけし事なればかいしやく頼申なり去ながら片時の暇をたまはれおや子は一世の契りと聞は、今生後世の名殘には責て此子に今一度ちをのませさせてたまはれ

と、きへ入やうになきたまふ、しやけん成もの丶ふ共もけに斷と皆袖をぞぬらしける、され共みだい少心を取なおしあ丶扨此子が責て物いふ程ならば、親のせんぞを語たやせんせのかいぎやうつたなきゆへ、おもはずもはやきうせんにかへる事のかなしやと、もたへこがれたまへける、少心を取なおしあらむさんや、此わかは夕邊に生れてあしたにしす、ふようの身にことならずいまだ三日もたゝずして、めつする事のふびんさよたゝ今ゑさする此ちは、是そさいごのまつこの水、よきにのみ置しやうぶつせよ、むねにあてかほにあてこへもおしまずなきたまふ、じこくうつれば道友大きにいかつてなにとてきらぬぞ、哀をふくむは二心有とみへたり、はやくとく〳〵と有ければ、高春是非なく若君をうばい取、みだい夢共わきまへずあ丶なさけなのものゝふよ、今かわかれて有ならば今一めみせてたまはれと、きへ入やうになきたまふ頓て、若君をさげ斬にそ、したりける、扨又みだいにむかつていかに、女たすかりたくばたすけ申さんといふければ、みたい聞召つまにわかれ子をさきだてゝ、何のめんぼくによになからへん、いかに道友、さすか天下のつかさたる、つまや子かくなさけも、しらぬせつかいす、是非一念のあくしやとなつて、生々世々においては、おのれを取ころさん、はや首討とさしのへて、うたせらるゝ、さすが天下のぶせうの女なり、さいごの死にいさぎよし、ふしきやむくろ、たちまちおき上り、太刀が刀をうばい取、首討おとし、當座に敵を返事、げんじのいきおい女迄も、よに替りたるたましいかなとて、皆かんせぬ者こそなかりけり

五段

去程に、猶も此事かくれなく、ひろい山惠慶さす聞召、かもの次郎しんら三郎、其外ちこはうしを、かんしよにれつし、兄弟の人〳〵に、父母の御事かたらせたまへは、さなから夢のこゝちにて、わつとさけばせたまひけり、泪の下よりも、くどき事こそ哀なれ、かく有へしと知ならば、幼少の我等にて、うでに、力はあらね共、弓馬の家に生れきて、しぬべき所をのかれ申は、いきかい更になかりけり、弟の吉定仰けるやう

は、いかに面〳〵聞しめせ、堺を出る其時に、父母の仰にはそれぶしは、文武両道とて、物をしらではゝむしやといふ、ぶせうの子なれば、かく文よくせよと仰られしぞかし、かやうの事としるならはなにしに城を出べきぞ、やみ〳〵と生捕れ、あさましきしにをせんより、いざさしちがゑしなんとて、おしはたぬきたまへは、皆〳〵取付尤至極にて候、去なから父母こそはましまさす共、八まん殿おふしうを切ほろぼし、頓てめでたく御かいぢん近かるべし、御父頼吉のたまはせたまふ上は、一命をかけ申べし、たんきかへりてあたと成、よは皆ふじやうのきやうがいなれば、うんに任て身をのがれ、時のいたるを待たまへと、さいさんきやうくん有ければ、泪にばうしおわします、扨八まん殿ほうしよを認、おふしうさしてぞ三重下らるゝ是は扨置、いほりにまします頼吉は、程なくへいゆうなされ、竹つなを召れいかゝせんと仰ける、さん候かい道は、敵みち〳〵て候へはおぼつかなし、山のねをつたい、何とぞゑい山の方へしのひ行、恵慶を御頼まつて、御本意をとげられ候べしと申上る、頼吉けにもとおぼし召、竹つなに手をひかれ、此程のうきかんなんの庵にも、すめば名殘のこゝち有と、袖をしほりたまひけり、行も山中とまるもしげり、木かげにやとりたまはんとすれば、せう〳〵のよるの雨、さそうあらしにこのはの音、きつねのともしびかすかにて、心細き折から、いわもる水の思ひにむせんて枕にすたくきり〳〵す、おのかわさとてはたおりの、こゑのあやをきりはたり、てう語るうき身をとひがほに、虫さへむねをこがすらん、たゞまつ虫のねにたて、聞は扨我も共にこしかたに、預けおくつまや子共のわかれしを、思ひ出ればなつかしや、かれらか行へのおもはれて、まづさしくるは泪なり、そこ共しらぬ山中に、けふ三日か其間、しよくとて更にきこしめさず、心もくれ〳〵と、はこぶそなたも遠山や、かすみがちにそみへにけれ、かゝりける所に山賊共五六人わうらへの者をはき取、つゝらかはご小袖其外、じきろふたるなと取そばめ、さかもりしてこそいたりけり、竹つな是をみて是こそ日本一の仕合かな、偏天のめくみと思ひ、いかにかたゞ〳〵爰は何といふ所にそ、我〳〵はゑい山の北谷へ行者成が、道にまよひ候なりおしへてたべといふ、山賊共是を聞あつはれよき者共かな、

先一人ははたにみながらあや、金作の太刀刀殊更つかれに及と見る、二人共に酒をのませゐいふせゐらん所を、おさへてとらんに何の子細の有へきと、いかに旅人爰はくつきの松原とて、ゐい山へは程近したびは心よは情、かた〳〵はうへに望ませたまふとみへたり、ばくはん一へいを持合たり是を少御用有、心静にいそかれよ、竹つな聞心有人々かな、こなたより望べきに情あつてかくは仰候ぞやと、君もろ共に賞翫し酒にゐへとろり〳〵とねむる所を、はた〳〵と取付竹つな心得たりといふ儘に、取てはなけ〳〵する隙に、頼吉をくみふせ太刀を取所をかへつかみ、二人共に首ねち切て、はうばい見せんとて、ふじにつなへて木枝にかけ置、君をかたに引かけ山ぢはるかにしのぎけり、かゝし所にとうじ一人牛に荷を付、我も特と有ばんせきに打もたれおのが尉へこま笛を、草のあおばのふし〳〵に、よねんなふこそふきいたり竹つな立より、あらおもしろの笛のねや、いかにどうし世を渡る事何れにしくはなけれ共、年もゆかざるどうし、身にもあふせぬよくとこそみれ、おことのもてる荷をも、牛に付もせて何にとて、自身持けるぞどうじ答へていふやうは、御ふしんは尤なり牛もおもにをあふ心無物うくや、思ふらん佛も本はすてしよの、なかばはくもにうへみぬわしのお山とかや、それよに有人は人に善をなし情の道を本とす、我等體の草かりどうじは身に、相應のじひをなさんかために、しんらうくぎやをして、牛かくつうをたすけ候、竹つな聞て扨は草かりにてあらず、偏だいしのあらはれたまふと存なり、仰を聞ば有がたや我々は君につかへて、身をも命をもおしまぬゆうしよくの者成が、ゐい山にしるべ有て参なり、人目をしのぶゆへおちこちのたつきもしらぬ山里に、まよひいわねまつかね苦ぢをしのぎ、おさゝにおける白つゆを、なめていのちをながらへぬ、よの中にふしの身程ざいかうふかき者あらしと、しう〳〵語さめ〳〵となきたまへば、どうしもともにらくるい有、誠に人の心程世に哀成事はなし、幸我はゐい山へ行者なり、道しるべして参らせん、竹つな聞てあな有がたや扨御身はいか成寺におわします、さん候上の坊のしやみなり、しにづかへて晝はひねもすに柴をとり、よるはよもすから、しくわんのまとの前には、眼をさらせは十悪の、雲れい

しゆうにきへ、三つの月しんとうにあきらかなり、近頃たつとく候竹つなこたへていわく、ゑい山を都のふちと申はいかん、どうじ申ける様はされば、ふぢは八ようのみねゑい山は四めい山とて、北南中東西中日本の中有、ふもとに花の都有就中名すい山をきよめしんよの月ほからかにして心にも、ことはにも、及ばれずとて都のふちにはたとへたり、迚の事に山のゆらいを語たまへと申ける、さらは語申さんあら信心のかたがたや、さあらはきう牛が一毛程申すべし、それゑい山は人王五十代くわんむ天王の御時、ゑいりやく元年に始て、傳敎大師とうとの天だい山をうつしひらかれたり、谷は十六にて三千坊の寺有、二度参ともからは十惡五逆のつみをほろぼし、正に傳敎大師のお歌に、あのくたら、三みやく三ぼだいの佛達、我たつ柚にめうがあらせたまへと、ゑいしおかれし山なりと語たまふと思へは程なくゑい山の坊に付たまふ、どうしは其まゝけすやうにぞうせたまふ、有かたじ共いふ斗なし、惠慶ざすの寺に入たまへば、惠慶初奉り兄弟の人〳〵是は〳〵と斗にて、先立物は泪なり扨兄弟の人〳〵は、母上の御さいこのてい、有のまゝに語たまふ頼吉ひとかたならぬ御なけき、よその袖もぬれぬへしとりわけたけつな、りんゑにかへりたけき心をしほらかし、扨も我等いさめ申しは若君たちを此寺へおとし、御みだいは大じん殿へと申し時、君の仰にてはあるましき竹つなかはからい成べしと、おくへかけ入らんとしたまふを、それかし大きにいかつていさめしか、扨は御さいごにてましますなあらいたはしの御心ねやとたをれふしてそ、なきいたりしうしう互のうき事を、思ひたしてはわつとなき語出してはさめ〳〵とそなきたまふ、さす至極の泪のひまによりもたゞ何事もぜんせの事と、おほしめせ然共御身父子つゝかなくおはします事何より以めでたし、さらは東山三井寺の法師むしやをいん率し参らせん御本ぐはいをとげられよ、くわいぶん状をかゝるゝ所へ末重金吉三浦竹ち大いきついてはせ來、君も竹つなも討死の由承り候所に、かく御ちやうきうにまします事、扨なめてたく候と、悦事はかきりなし竹つな申ける様は、いかにかた〳〵近頃面白なきしたへ有、御みたいをかくなすと、語けれは人〳〵驚是は夢かやうつゝかと、皆泪をそなか

しける金吉申ける様はよしそれとても力なし、是もぜんせの定事、竹つな心にやたけに思へばとて、三方あら神にては有まし手も二つ足も二本両眼二つあればとて、まつ方へはかなはぬ物なり、また竹つなければこそ、君を堅固にせられたり、何に其道友め、せんも萬もいらぬ首引ぬいて腹をいんと、まつくろに成てかけ出す、竹つなおしとゞめ御へんが、せきふん尤かくこそあらじと、さはあれ共大事の敵て有間、五人共に打つれて四方よりもみだれ入、おもひのまゝに討へきなり、面々したく有べしとおし玄づめて、しぎをはからず竹つなか信ていうれしき共中々申斗はなかりけり

六段

去程に頼吉ゑい山三井寺の法師むしやをかたらい、らくやうの口〳〵より責よせ時のこゑをぞ上にけり、城の中よりねころ大膳大手のやくらに上り只今よせ來るは大將の名をば何といふそ、其時末重一ぢんにすゝみ出姿しらずや、源頼吉なるがしらぬようふ州の討手に向故、一たんかく成事むねんさよ、とてもおのれら、かくては置まし一〳〵立ならんで腹を切、なまじいにしばり首をかゝれんよりも、侍の本意任清くしねとそ申ける、大膳聞もあへす何頼吉とはしにそこなつて、何とぎへいを上けたり共、たゞ心念に望てはくひようをふむがごとくなり、無用のかうけんいわんより其ぢん引とぞ申ける、末重聞もあへず何にはくひよう共にいわせましとて、一面にきつてかゝるねころ五人いきおもつかせす、火花を散してたゝかいけりさしもに、かう成よせてなれ共しんで退斗なり、大將いかつて金吉はなきかあれふせけ畏て鐵のほうを引さげ、む二む三にうちたてうちたておつめけるねころもかけては引ひきてはかけ、二三度斗はみへけれ共金吉につよくうち立られ、城中へ引こもる金吉猶も城中へ切て入、はや三の木戸打破つめの城に、おしよせいきおもつかせすたゝかいけり、道友やくらより見物あつはれかう成兵かな、たれか有きやつに酒をのませ板はし藤九郎承り候申、道友申されける様は姿申へきは、御へんのはたらき目を驚斗なり、此いくさ打かたばらうとうに頼

べし先程のはたらきにてさぞのとかはき候らはめ酒をのんでいさまれよと、申てかへれ畏候とながへのちやうしに、酒を入金吉が前に行右のだんを申渡す、金吉聞て扨も唐のかんやうきうより、まだ大心成やつめかな、扨こそ一度はとりたれと舌ぶりして、甲をぬきたんぶとうけさらりとほす、あら過分や心いさみ立て候さらばおしやくへさし申さん、あつまかゝりの甲酒くめば酒をもしころもち、じほのみきわへよりし敵のよをるのらうしやうとなりつれ共、しほらしきに恥られて跡もみせずのみけり御へんかへりて道友に申さるへきは、御情しうちやく申て候昔より情をはこのはにつゝむとこそ申せ、それかしは餘大せつさのまゝ甲にこめていのふにつゝみ、いきおいまさり珍重に存るなり、若又討かつたらんにはらうどうにと仰らるゝ、外聞と申満足に存さあるが中に奉公の忠には、道友が首切てゑさせたらば、何時成共望に任せんと、早〳〵かへりて申されよと、はたとにらんて申ける、使かへりてかくと申道友大きに腹を立、きやつをやにいころせ、高島七郎四人ばりにかゝりとつかい、ひようどいた金吉が左のあしに、のぶかにたつ、物〳〵しやと引かなぐりすてければ、足更にふみたてられす、たち〳〵とする所に城中より北膳かけよせ金吉をむすといたく、金吉物のかす共せす取ておさへ首ねぢ切てすてにけり、北膳からうとう主を討せて有へきかと、左右よりかけより所をゆんでめてにあいつけ、一人はかいつかみゑいといふてなくれば、つかい〳〵をなけさかれ五りんくだけうせにけり、今一人はおのれ命をたすくるそ、命がおしくはそれかしをおへとてむたいにおはれて、本ぢんさしてぞかへりけり、又坊中よりなん膳坊と名乗て一文しに馬をのりいだす、六郎馬をかけ合あぶみをふみのべけをとし、おき上らんとする所を首うちをとす所に、さいぜん大長刀ひつさけのかさしとおつかくる、竹ち、かけへたゝり、わたり合さいせんなきなた取のべ討所を、やすかた引はつしてむすととる、さいぜんもものになれたる者なれば、長刀すてむずとくむ、ゑいや〳〵といへ共暫らくせうぶは付ざりけり、さいぜん力やまさりけん竹ちを取て押ふせ、首討所へ三浦はりきたつて、うしろよりかいつかみあふのきに引たをし、是首うてといへばとうぜんか

け付、三浦がよはごしむずとだく、三浦事ともせず二人共にくび打おとし、本陣に引かへす大膳今そさいごなり、かけよ〳〵とよばわる竹つなよき敵ぞと心得、おしならべむずとくみねころぐわんらい大力、竹つなをとつてふせる、竹ち是をみて大膳が右の手をしかと取、大膳竹ちをも引よせひざの下にひつしく、末重來てむずとだく是も引よせ三人と一人ゑいやとこへを上てぞねぢ合共、三人の方あやうくみゆる所へ二人のあら者來て大膳をひつしばり城中へみたれ入、道友を生捕なわをかけ、法師か首にかせをゆい、道友を肩くるまにのせ、いやがる所を四方よりさいなみ、ひつはり立せんなき者のかとうとし、いきながら首かせにかゝり、ざい人の責をうくるを見たまへと、はやしものして來りたり、君の御目にかけたちまちにほろびにけり、げんじの御代すへはんせう、かんせぬ者こそなかりけれ

萬治三庚子三月上旬

四天王むしや執行

初だん

扨も其後それいにしへ今に至までつら〳〵ちらんをかんかふるにかみけんくんせいしゆの世也といへ共しもじやよくひだうのものゝあれはかならす國をさはがしよをみだすしゆんのよにしけふのもの有がことし其ねをたつね其みなもとをうかがふにみなとんよくよりおこりけりこゝにご一條のみかどの御時せいゐ大將軍みなもとのよりのぶ武將を給はりましませはよもしづか成といへ共とういさいかいにやゝもすれば事おこつてそうどうたひ〳〵におよべりさるにより五人のもの共もせん年正つぐ入道がどく酒しゆにて三人はあいはてのころきんときわたなべ許君をうやまいたみをなでこくどをしゆごし申けりかゝりける所にくだん五人の若もの共大將の御前に參り御そしやう申上けるはわれ〳〵がおや共まん中公より此方すたびかうめう仕りを名を萬天にあげあまつさへへんげたいぢに至までなか〳〵かそへつくされず然るに其子共として我々はいかめしきわざもなくいゝがいなくとしざかりまで罷有この身のほどなんぼう口おしくこそ御ざ候へあはれおいとま下されいつくのうらへも罷出ふしぎなる事にもあいわれ〳〵五人がしよぞんの程はうばいなからもあいたかひにためし見申たく候也御いとま給はるへしとそ申けるよりのぶ聞召なんしらがぶどうのぎんみ尤きびしきおもむきかな我はいとまとらせん事何よりもつてやすけれ共又こととなき子共らをいづくとさだめす出しつゝさそおや共かしんていおぼつかなく思はんととまれかしとそ仰けるわたなべきん時もかねて此よししらざれは大きにおどろき申やうなんじらが心中あつはれ四天王の子共かなおゝかい〳〵しきこそうれしけれ又君にうちむかい御てうのおもむき有がたく存候得共それてんぢくのしゝは子をうまるゝと一まんぢやうのがけより子をおとすに其子しゝのきりやうあれはかろくちうにてはねかへりしする事を仕らすもししゝの子かいなくしてみぢんになつてしするをは少しもかなしかり申さぬよし弓取たらんす

しよそんは尤かくこそ候はん一つは天下の御ため又はかれらが身のためしあはれおいとま給はれかしと二人ながらともに御そせう申けりよりのぶせひなく思召おもひ立ぬるしゆ行のみちいかでむげにとむべき是は此たびのはなむけ也とて五人の子共によろい五りやう太刀をそへそれ〳〵に給はりつゝがなくめでたくきこくいたせとて御いとま給はりぎよれんに入らせ給へば五人の子共ちゝともにいとまをこい立出んとする所をつなきん時おしとゞめそれたびにおもむきてはまづよるをやすくふすべからず人にしたしみちなむに是ゆだんの第一也もとよりきんじゆの身なれは何分もつてまんぞくせりしよ國しゆ行ことおはらばとくかへりてかほばせをちゝ共に見せよかしめでたくきこくまつそとて心つよくはいゝけれどさすがおんあいのわかれのはしつゝむにもるゝそでのつゆけにことはりとそ聞へける扨それよりもわかもの共たびのしやうぞくしたりけり是がおや子のわかれとはのちこそ思ひしられたりあづまぢにさしかかりさすがいそがぬたびなれは此處やかしこに日をくらしやうたどりゆくほどに廿日あまりと申にはしなのゝ國に聞へたるあさまのたけにそ付にけり山ふかくわけいれはとしおいたる山人二人たきゞをこりてくたりけり五人のもの共是をみていかにらう人此所は何とか申候そ山人こたへていふやうは此所はおとにきこへししなのゝ國のあさまのだけにて候也あれにみへたる山こそおにのすみかといゝならわし人を取候ゆへ人のかよいはさらになし道ふみまよふ人ならは此川のきしにつきなかれにそふて出給へはや日もくれ候得ばとく〳〵とかたりすて山下に下りけり五人のもの共聞よりも何おにのすみかと申かさいわいかないざゆきてたづねつゝおにとちからをくらべてみん尤然るへしとどうしんしてをくづたいそはをこへなを山ふかくわけ入てかなたこなたとたづぬれどさらにけしたる物もなしなをふかくたつぬれはこゝに大きなるいわあな有しこつはつこついわのはな木のゑだにかけならべなまぐさき風ふきげにすさまじきふせい也きん平是をみていか樣にも此あなこそおにのすみかとおぼゆるそふしきなる物もや有われ立入てさがしてみんもしぬけあなの有もやせんとこゝかしことたづねみればあんのごとく又一つ

に口あり御へんらは其くちにてまちかけよさがしてこんそといふまゝにいわあなにつつと入すへはるさだかげもろ共につゝいていれば源二郎とひとりむしやぬけあなのくちにまつあんのことくかのおに三人にかりたてられおこゑ（本ノマヽ）をあけてとんて出るひとりむしや源次郎ゑたりやあふとむすとくみ上を下へとする所を三人のもの共とんで出おさへてくびをかきおとしづだ〳〵に切おとしあふふしやうなるおにかなふりよなるものに出あいひごうのしにをしけるよなせうしさよとうちわらいなを〳〵山をさかしけり此もの共のありさまおに神にもまされりとみなほめぬ者こそなかりけれ

二だん目

其後五人のもの共はおにをたやすくたいらげ又もふしぎにあはばやとにんばのかよひとうらざるつゝらおりなる山みちをいわのはなをたづさへ木のねをたよりと取付なをおく口口口け入けるさるほどに其山にすむ天ぐたち一ッ所にあつまらせ給ひつゝないだん申されたりその口よりのぶがらうどう共いまだとしもじやくはいなるがぶだうの心ふかくしてわれとわか身を口しつゝ修ぎやうすると聞て有いざ心をそとひきみてけにかい〳〵しき物ならば心さしもふひんひやうほうのじゆつをさづけん尤とてかのもの共のとをるを今や〳〵とまち給ふさる間五人のものやう〳〵上りゆく所にはかにしんどうらんでんしてはたゝがみなりわたり天よりはつるぎふりちよりくわゑんもへ出たへしのぶべきやうはなしされ共五人のもの共は少もさはぐけしきなく切はらい〳〵ちをばとびこへ〳〵こともなげにぞゆき過ける天ぐたち是をみてそこをとをるは何ものぞそれよりはやくかへるべしさらずはつかみさきすてんと天もひゞくこはねにてこゑ〳〵によばはりこくふをかけりそらをとびひぎやうじざいをまなびつゝいよ〳〵らいでんやまざりけり五人は是を聞よりもおもしろし〳〵ひきさかれんはのそみ也こくうをかけりまはりつゝてもとちかくよりそはではなか〳〵に引さかれしかうげんきくほどならばてもとへよつて引さきみよのそみなりとよははりつゝ一どにどつとそわらいけりそ

れよりさかをゆき過れは何かはしらずむかふよりこなたの山へはし一つかゝれりめつらしきはしかなと心に思ふ所にほどちかくなりしかばはしにてはあらずふとき大ぼくのごとくにてたけ廿丈あまりなる大しや也まなこは日月のごとくたうにはゑしつのふりたて口よりはくわへんのやうなるしたをはきいかれるまなこを見出し五人のもの〻近付をみちをさへぎりよこたへてさつとにらんでふしたるは身のけもよだつ許なり五人は是を見るよりも扨もけしたるものかないざすだ〳〵にきらんといふわたなべおさへてゑきなき事を申さるゝなくだんのき神をうちけるもかの木こりのもの共か人を取とかたるゆへたいぢしては有そかし大じやのさたのなき事は人のわざわいあらぬゆへかたらてこそはとをりけめむさと命をとらん事ゑきなしととゞめけるさらばのりこへゆかんとて四人のもの共どうをんに御めんあれ大じやとてせぼねをふんてそとをりけるあとがとをりしがつの引あげきつとみておゝしをらしきくちもとやとあざわらつてそとをりける然はそらもはれわたりよもゝしづかに也にけりかゝる所へとしおいたる山ぶし一人こつせんとあとよりおいかけ來りいかにかた〳〵御へんらにとうべきしさひ有とゞまれとまねきける又々何事やらんと立かへれば山ぶしの給ふは我は此山のあるじなるが御身たちがしゆ行をかんじ心を引みんためあるいは大じやにかたちをなしさま〳〵けしやうとへんすれともさらにおそるゝけしきなしさりとては〳〵ぼんぶにおいて又まれ成たましいをもちけるよなかほどにゆふ有もの共にひやうほうのじゆつの大事をつとふべしちかくよつてたしかにきけそれひやうほうといつは第一は心也心ざす所はせんべんばんくわとかわれ共てきを見て太刀きつとさしかざしする〳〵とゆく所は二つもなく三つもなしたゝ一心にとゝまれりその一しんをたづぬるにおくひやうにてはかなはすされはほとけの御きやうにも一しんの外にべつにのりなしと心のおくをとき給ふ御へんらが心中是にあたれりたとへ又せんまんのしゆくんたりといへ共大將一人おくれてはしそつのかうみやう成かたしされはすゝむ大口口を口もふしやうゆふしと是をいゝゆうしやのいたす所也扨又一きにてのはたらきよりばんそつをつかふにいたるまで

けいりやくなくては成がたしてきの心の取やうぎよりんかゝりくわくよくのひらきいんようのにんずだてぐんきをかんがへしる事ちゑなくては有へからずまづ〳〵人をしたかへしそつをなづけ國をあわれむぐんほうはしんなくてはかなわし此三つをかねたるをちじんゆふの三とくとてよにたつとむ所也大將しそつにいたるまてなくてかなはぬものそかしくはしき事は此まきにつぶさにしめしおきて有長りやうがいにしへせきくわふよりつたはりしもいかで是にはおよばんやとうじんだん〳〵ゑりんぎやうよくじゆうらうのまき是也五人らへんしもはなたす身をおふるまでもちいなば天下こつかをかけはしりすまんのてきにあふとてもそのなんをのがるべしかならすうたかふ事なかれとかのまきをわたしつゝたちまち天ぐにかたちをかへこくうにあがらせ給ひけり五人のもの共是をみて有かたし〳〵と三とらいし奉りおの〳〵まきをおしいたゝきなをも國をめぐらんとあふしうさしてそ下りけり五人のものゝ心中あつはれきたいのもの共とてみなかんせぬものこそなかりけれ

三だん目

其後きん年こくどしづかなる所に其ころ又いよとさ兩ごくのあるじはびたつ天王の御すへたちはなの左大じんもろへこうのかういんあらじまはんぐわんたいかけちかとて其心ぶとうなる大みやう有おりふしざい京していたりしがらうどう共を近付いかになんじらたしかにきけ我は是今のよにあたつてたれかは上らすものあらんいざみことにそうもんしせんぞの國にて有あいだいよとさをさし上ふんごふせんの給はり扨又九こくのこくしを名付られ候へとのぞまばやと思ふ也めん〳〵いかにと申けりあれまのぎやうぶしげ國あしやの次郎大夫もとみつてるまの藤太とも平此よしを承りおなし心に申やう御てう尤にてこそ候へと申中にもあれますゝみ出内々われ〳〵そんじ候も源平とうきつあいならんで天下のけんを取事是たがいにたび〳〵也然に君きんねんの御いせいにてよりのぶにおさへられかやうにわたらせ給ふ事くちおしくこそ候へ君ちさにそうもん候はゞよりの

ぶへんしゆの心出あしきさまに申べし一つはれいぎのためも有一たんよりのぶを御たのみ仰上るべきにて候もしよりのぶせういん仕らずおろそかにさたいたさば國へかへらせ給ひつゝ九こくのせいをあいしたかへはたを上させ給ふべし承候へはれいの五人のわかもの共こくゑんいたし候由のこりし二人のおや共は有にかいなきらうたいのむかしのわさにはかはり候大てくちによせきたらばわれ〳〵がゆんぜいにてたゝ一やにたゝなかをいとをしくれ候はんに何のしさいか候べきと手に取やうにぞ申ける二人のもの共うちうなつきかけちか大きによろこびけに〳〵是はさもあるべしまづよりのぶをかたらはすはさだめてさまたげたるべしむねんなりとは思へ共かれがたちへうちこゑたのまんとそ申けるてるまの藤太ともひらあゝかいなき仰かなよりのぶがいまぶしやうだてことおかしくこそ候へくんせいにもてたてにも何をかおとり申へき四天王のしにのこりつなきん時とやらんは今にとしふるねすみのせもはげわたるふせいにてくちきく所は人なれどてきにむかつて太刀うちは中〳〵おもひもよらす候われ〳〵はそんじ候はよりのぶを是へめされつゝおさへてしよもふ有べしせひにいはい申さはよりのぶをうつてすて武將にもてい王にものそみにならせ給へやとこともなげにそ申けるさればよの中はにたるをもつてともとすあいしたがふほうばい共是□□かしといひければかけちかもどうしんしてやかて使を立にけり使はよりのぶのみたちに參りかやう〳〵申けるよりのぶは何事やらんときん時を御供にてかけちかたちへ御出有かけちか出あひたいめんしゆ〳〵のさかなをとゝのへしゆをさま〳〵にそもてなしけるやゝあつて申やう是へ申入る事べつぎにても候はすそれかしがりやうちいよとさをさしかへられぶんごぶぜんを給はりついては九こくのしゆごなければ九こくのしをきわれ〳〵に仰付られ給はるべしとそ申けるよりのぶおどろき給ひのそみはさこそ候らめいま國〳〵ふさかつてあき所一所も候はねはなりかたき御事也ましてぶんごぶせんの兩ごくはたざいのせうにすへかた大とものさへもんたゝみち給はつてこれもつて成がたし九こくのしをきの御事は君かさねて御せんぎ有きりやうによつて仰付りんしをは下さるべししばらく

それまでは御待あれとしとやかにの給ふをもとよりかげちかけつきのものかねてたくむ事なればひざたてなをしいかりをなしいかによりのぶ御へんをひとへにたのむは成難き事をこそたのむとはいふべけれことさらそうもん申さすしてかけちかなとかたのむぎをちうにてへんじする事はすいさん也とそ申けるよりのぶにつこととうちわらひとう御よにたれか有此よりのぶか成べき事は御へんにかきらすたが事もいそきそうもん申也ならざる事を取もたんはおろかのいたす所そかしかけちかとそ仰けるみうちとさまのものともすはや事のいできたりわれくまん人うたんとつばもと二三寸くつろげいまや〳〵とひしめきけりみかわのかみきん時はるかへだてゝいたりしがひしめくおとを聞付てすでに出んとする所をわかさぶらひ立より御前なりとおしとゞむきん時いよ〳〵すいりやうし大せゝをつきたをしはねたをし御前へつつと出大のまなこをいらゝげあたりをはたとにらみしかばもとゆいふつときれおち大わらはになつてざしき中へどうと出たゝ今までわか君のましますゆへしゆう〳〵のれいぎをおそれ罷出す候へはこなたのうちのさほうにやみうちとざまの人々まで太刀おつ取〳〵しゆくん二人を取まきてあはてふためく有様はちそうにてばし候か家にいつてはいへにしたがへがうにいつてはがうにしたがへと申つたへ候條此きん時も少さわぎ申べしもし此うちのわかとのばらのうでぼねつよき人あらば此きん時とそつとさわぎくらべし給へかしあたりをにらんでたつたるはにがにがしくこそ聞へけるかげちかをはじめとしてよりのぶをうちこみすでにうたんと思ひしがきん時かつらたましい其まゝやしやのことくにて身のけもよだつて見へければうたん事は扨置かけちかふるい申やうたま〳〵よりのぶの御こしなされ候に何のきやうも候はでめんぼくなくこそ候へきんときへ御酒一つ奉れ此さかつきをまいらせんとたぶ〳〵とひかへしをきん時見てそれがしはげこにてふだん給はらずおさかなのしよもふならばつるぎのまいを仕り御めにかくべく候やいかに〳〵と申ける其時よりのぶちやうざにて候へば罷立候とてざしきをずんと立給へばいとま申てかけちかもいそぎおくへぞにけ入ける其時きんとき大おんあげつるぎのまへか見たくはめづら

しきはたらきしてひばなをちらし見せんすにしよもふして見給へかしとうちはらい〳〵君の御供申つゝやかたをさしてかへりけるきん時がふるまいあつはれ今のはんくわいやとみなおじぬものこそなかりけり

四だん目

そのゝちはんくわんだいかげちかはきん時にいからればよりのぶのかへるさをうれしき事に思へ共さすがわが身のちじよくのはてなましいなる事いひ出し口おしく思ふにやかんにんなるべき事もなくらうとう共をちか付いかに我なんじら思ひ立ける事空しくなすのみならすあまつさへはちの上のなんぎたりよりのぶさんだい申つゝわが身の上のあらましをよくいひなす事もあらしなんじらがかねてはよりのぶにおいてはわれくまんつなきん時をはたれうたんかれら一かうとしおいて何のやうにもたゝぬなどゝいふかうけんにはかわりてよりのぶをはおめ〳〵と何とてかへして有けるぞおくびやうしごくのいたりかなと大きにいかり申けりあれまのぎやぶ承りもとよりそれがしよりのぶをせひにうたんとぞんぜしにあのてるまの藤太かねてよりよりのぶをは人でにはかけましきわれにうたせよとのそみ申候ゆへ藤太がてをまもりいてむなしくかへし候事口おしくこそ候へと申藤太聞ていかりをなしいかにあれま何とて御前にてすじなき事をは申そ御ふん我よりとしもましことさらいへのこうけんにていゝしことばも有なればさへきつたる事すへきにははゞかり有とそんきやうし御へんがしよぞんをまつ所にてのひにしてかへしつつ我をあざけりそしる事きつくわい也とそ申けるあれまもいろをひきかへてなにと申そともひらなんじこそ君をいさめ奉りよりのぶをうたんといふかうげんいひしはいつはりか藤太いかにといふまゝにたがひにあらそひいかりをなしすでにあやうく見へけるを次郎太夫もとみつ二人をおさへていふやうはよりのぶかへりて其あとにとかくのさたはむやく也おなじいへのもの共どしいくさしてしになばじよのあざけりあさましとてもよりのぶ此まゝにて有ましきもし大ぐんにてよせられなばひらばのいくさかな

ふまし一たんまづ都をひらかせまし〳〵て國へ下らせ給ひ御はたをあけられ候はゞ四國九こくの御一そくなどかはよそに御らんせんこよいよにまぎれとく〳〵下らせ給へや人〳〵のあとをせんぎせんなしとそ申けるかげちかはきくよりもげに〳〵是はことはり也都のすまいなりがたしいざや下らんもの共とてよにまぎれ大せいを引ぐしとさの國へそ下りける此事都にかくれなくだいりにはおどろかせ給ふ所へよりのぶやがてさんだい有事のよしをそうもん有みかどいよ〳〵事のなんぎに思召かれは一もんひろきものなればぢきによりのぶはつかう仕れとのせんじ也承候とて御前を罷立わがやにかへりわたなべきん時御供にて五まんよきのせいそろへとさの國へと下らるゝとさの國に成ぬればかげちかゝじやうを二ゐ三ゐに取まきときをどつとそ上にける時のこゑもしづまれば城中にはかねてよふいの事なれば大將大てのやぐらにかけあがりくつきやうのいてをそろへやざまおしあけさせさしつめ引つめいるほどにさしもにたけきもの共せんぢんはいちらされ引いろになつて見へければ城のつわもの共よはみのいろを見るよりも我さきにとうつて出ひ花をちらしてたゝかいけるよせてもさすがにせめけれ共城中ていたくふせげばせんぢんあまたうたせつゝむら〳〵ばつとそ引たりけるつなきん時是をみてあゝふびんの者共のいくさだてやとてきん時はてつのぼう一ぢやう餘りなるをひつさげわたなべは大長刀をてこりにふりゆるき出たる有様は山の動くにことならすよせては是をみるよりもすはやたゝ今出るこそつなきん時ござんなれたとへおにゝも神にもせよ大ぐんにてうつ太刀などあたらぬ事の有べきかゝれや〳〵と一どうに四五百ききつさきをならべてうつてかゝるつなきん時にかすましといふまゝにあたるをさいわいにはら り〳〵とうちにけりさるほどにてもとにすゝむつわもの一二百きうちふせられたまるべきやうあらすして風にこのはのちることくむら〳〵はつとそにけ入けるつなきん時一のきとまておつかけよせあらきたなきふるまひやけふははや日もくれぬ明ちやうしろをはふみつぶさんぞゝなんじらが命もこよひ斗につづまりけるぞ明日せうぶをけつせんと大おんあげてよばはりつゝ本ぢんぞひつかゑすかのもの共のてが

らのほどいつもめいよのはたらきとてきせん上下おしなべてみなかんせぬものこそなかりけれ

五だん目

その〳〵ちしろの大将かげちかはらうどう共をちかづけいかになんじらいぜんよりたれ〳〵がいくさといへ共四天王のやつばらにやぶられ城をはおとされけるときくしかれ共た〳〵今は三人し〳〵てのこる二人の子なれはいかにもしてかれらをうつべきたくみこそあらまほしき事なれかた〳〵いかにと申ける次郎太夫承り心へ申候明日のいくさにもやじりちかくはいおとさんと心かけ候へばはや日もくれ其ひまにひつかへし申ゆへぜひなくうち過候ひぬさだめて又今日もしろちかくよせまいらんさも候はゝまつたゝ中を一やにいとおしくれ申さんとあたりをきつと見てあれはてるまの藤太是を聞よくいふたりもとみつわれもぜひにねろうそかしいざうつたてあしやとてゆみはきこふるせいびやうなり此もの共や來るとていまや〳〵とまちにけり是をはしらで二人のものいか様にも今日はせひぢやうをふみやぶらんひかすをふるこそわれ〳〵が身の上のちじよくなれといつもこのむ事なれは人ませもせすたゝ二人一のきどにつめかけ大おんじやうにてなのりしはた〳〵今こゝもとへただ二人よせ來るつわものこそおとにもきゝめにもみんよりのぶのこうけんにむさしのかみわたなべのつなみかはのかみさかたのきん時二人なり城の大將はんぐわんにげんざんせん我と思ふ人あらは出あいてしやうぶせよやとよばわりけりされ共じやうないにはつなきん時と聞なれはきどをひしとかためつゝおともなくしていたりけりつなきん時是を見てかたきのよせてのゝしるにかしませぬ有様はこなたをおづるかあなどるかいでもの見せんといふまゝに二人ちからを出しつゝもんのはしらをゑいや〳〵とおすほどにそくぢに門をおしやぶりにわうだちにたつたるはたいしやくてんのいくさにあしゆらわうがいかれるも是にはいかでまさるべき次郎太夫もとみつもとよりねがふ事なれば五人はりに十五そくしばしたもつてちやうどいるむざんなる哉きん時がむないたにあたりつゝちけふりがばつとたつわたなべはつと思

ひ立よる所をてるまつゞいてはたといるわたなべかわきつほよりよこはらかけてすばといる二人のむしやめくれ心はきゆれ共やくつとかなぐりすてそらじにせんそきん時とて二人の人々よろいのそでをかたむけうつぶしにけるてるまあしや是を見てあれを見よ人々ひごろはおに神よりもおぢられしつなきん時をはわれ〳〵がてにかけ一やにていころしけるそやくびとつて大将のげんざんにまいらんと二人ともにやぐらをゆらりととんでおり太刀ひんぬきさしかざしこおどりしてかゝりけるきん時わたなべちか〳〵とよせすましうしおきにかつはとおき既にうたんとしければとつとかへし逃るを二人ながらて取にしおつふせおゝなんじらはかい〳〵しきやつ哉日本ふそうのわれ〳〵をよくはしたゝかいたるよなめいどのせうこになんじらたていざ大将の御めにかけんとひつたて本陣さして引かへる大将は御らんしてやれ物うや御へんたちはてをおいてありけるかそうして御身たちがくせには一き二きにて出るゆへかゝる事の有そかし物うさよとそ仰ける二人のもの承り御諚有かたく候へ共それものゝふのならいにてついにかくこそはてん事もとより/\したる御事なり思へばうんのつよくしてたゝ今までながらへ御ほうこういたせし事身の上のよろこび是に過す候され共心にかゝり候はしろを今日せひふみおとし申さんと思ひさだめ候にいまだらくじやう仕らすはかなく罷ならん事なんほうくちをしくこそ御ざ候へ是に候やつばらはわれらをい申候もの共なり一つはめいどのせうこにといひ又はわが君の御らんまほしくや候はんと捕へまいり候へば是にまします人々にあつけ置候おつつけせがれ共罷上り申べしちゝ共をいしものとてみなみなに見せられかれらが心のはからいにまかせられたまはれとて二人のものをかいつかんでさふらいたちにそあづけける扱いなをりながるゝちをおしのごひ君も聞しめさるべしほうばいたちも聞たまへまん中らい光より此かたおゝくのかつせんにすたびちうせつ仕りてきをほろぼす事かずしらずこととさら大江山のきぢんにいたるまでたび〳〵けしやうをたいらけなをせ上にふれたりしつなきん時ほどのさぶらいがかほどのほそや一すじにてやみ〳〵としにける事よとかならず思召るましせひ今日は城をせめや

ぶらん日かずをふるはわれ〳〵がちじよくぞと心へかる〳〵とはらまきをたゝ一りやう打かけこともなげに立出一のきどをおしやぶりうちへいらんとする所をかゝるとをやにあたる事ごうの來るきはめそかし五人のもの共かへりなば此由すたへてたまはれいまだわかきもの共にて心そこつに候へはつね〳〵申候にもおや子のちぎりはかぎり有いつまでかそうべきかまいてわれ〳〵なきあとにて君おろそかに申なほうばいたちににくまれ申なとつねには申候へ共じやくはいものにて候へばみな五人のもの共たらぬ事のみ候はんわれ〳〵がとし久しくあいなれ申せしよしみにかならず御めんなされつゝなさけをかけてたまはれよあゝ御なごりおしのわが君やたび御かんき候へ共くちせぬちぎりは御ようにたち打じに仕り候こそなんほうよろこびにて御ざ候へいとま申ほうばいたちと是をさいごのことばにてきん時としはしらね共わたなべは六十六二人なから一どうについにむなしくなりにけり君をはじめ奉り御前なりし人人こはいかなる事そとてこゑをあけてそなきたまふ是や此三ごくのいくさにしよかつこうめいがびやうしてわうびのなげきに今よりのぶあいかはらすあんやにともしびきへはてよのゆくすへもいかならんとなげきたまふ御有様あはれ共中〳〵申斗はなかりけり

六だん目

四天王五人の子共らはきけば四こくなるかけちかはにわかにむほんをくはたてとさの國へ引こもりはたを上るによりわが君かげちかちうばつあらんとて四國へはつかうときくいざやとさの國へむかいつゝかけちかをたいじせん此ぎ尤しかるべしとて夜を日についでいそぎけりほどなくとさに付ぬれはよりのぶのぢんやのほとりにてかくとあんない申せは人々見ておとろき君に此由申上る大將御出まし〳〵てめつらしのもの共やかるゝいくさに取むすび日かずをふれ共おちざればつな金時せきかねてたゝ二人かけ入きのふうちじにしけるゆへけさそうれいを取おこなふおや子のちぎりくちせすはなどきのふにも來らぬそくわほうせざる其内に一めみせん物をとて御ら

くるいはかぎりなし五人のもの共はつといひすへはるさだかけひとりむしや扨はさやうに候かわれ〳〵おや共しゝてのち二人のましますをば月共日共あをぎつゝたのもしくぞんぜしにかくもならせたまふかと御前をもはゞからすこゑを上てそなきにける源次郎金平すゝみ出どうをんに申やうさてはおやどもは昨日うちじに仕候かきうばの家にうまるゝ身は君のせんどに立まいらせうちじに仕候こそ本いにて御さ候へまつたくなげくべきみちなしたゝかたきを取へきてだてこそあらまほしく候へと二人はなげくけしきもなしよりのぶ聞召二人のものゝかたきをはきん時わたなべかい〳〵しくいけ取て來りしをいましめ置て有そかしおやのかたきで有間いかやうにもおこなふべし二人かしゝて有よしはみかたはちからをうしないてきはつのる事なれはすいぶんひそかにかく本ノマヽすなりと仰けるいわう承り扨はかたき二人をはいけ取まいられ候かそれかしさいわいのてだて一つ候かのめしうとのなわをゆるめつなきん時こそ打じにいたし候でうみかたちからをうしなひみなおち行候ゆへ大將もこよい都へかゑらせたまふよし何となくいひかたりうへを下へとさゝやかばゆるまるなわをときつゝにけのがれまいり此由を物かたりしさかよせによせぬべし其時われら五人は長もちに入られさぶらいたちに取もたせひしめきにぐるものならばたから物ぞと心へうばいとらんはじじやうなりしろのうちへもちまいらはとつてかへし人々しろをせめさせたまうべし其時われ〳〵長もちをけやぶり出大將をうつてすてしろへひをかけあとより切て出なばてき百まんぎ候ともいかであまし申べきたとへまたつるぎのなかにねころびうつてとをる共われら五人のもの共はうたるゝ事は候はじわが君樣とぞ申ける其時さだかげすゝみ出何ちゝのあたにはともにてんのしたにあらすとらいきにきするおしへなりいかにちりやくにあればとて正しきちゝのかたきをばはなちやるほうや有おぼつかなしとそ申けるきんひら聞てなにおやのかたきといふへきはかけちかゝ事そかしきやつばらにおいては時にとつてのしそつなりさまでうらみはあらぬそかし其上われら五人かじやうないへ入ならはひとりもいけてのこさばこそみなころしにするからはおやのかたきをまのまへにたすくる

とはよもいわれじ人々とぞ申けるよりのふげにもとおほしめし此たびのぐんほうはわたなべにたまはるはからへとの御でうなり承り候とて御前を罷立人々めしうとひきよせきりなはをかけなをしこよひ月も出なば都へかゑるさにせめてはきつてなぐさまんととくるやうにそかけをきける扨よもふくるにしたがつて落ゆくさたのみひしめきけり二人のめしうと是をみてかゝるさわきのおりふしににげて見ばやと心づきなわをときて見てあればやす〳〵とそとけにけるいざやにげんといふまゝにしろのうちへにげかへりかやう〳〵の次第にてはやおちゆき候なりと申さてはさやうに有けるかいざうつたてもの共とてみな一どうにそおつかける あんの如くおいゆくせいの其うちになかもちもたせ行もの有のかさしとおつかけられみちのほとりにうちすてあとをも見すしてにけにけりしやうのもの共是をみていかさまなる物ならんとしろのうちへそもちかへるよせてのもの共是をみてぢぶんはよきぞとおしよせ時をどつとぞ上にけるじやうのもの共是をみてあますまじとうつて出る五人のもの共心へてなかもちをけやぶりいで大しやうのほそくび水もたまらすうちおとししろへひをかけ五人しておめきさけんできりければあるひはうたれはらをきりいきのこるはなかりけりそれよりもよりのふこうかけちかをたいじあり都へかゑらせたまへば五人のわかものあいかはらすつきぬのちうせつ仕りこくとをゆたかにおさめけるせんしうばんぜいの御よろこび申斗はなかりけり

右此武者執行は太夫直之正本をうつして令開板者也

萬治貳年亥七月吉日

通油町

綱金時最後

第一

源氏五だいのでんき

さてもそのゝちそれおもんみれば、しうし（本ノマヽ）のくわはかならずりんしのしるしをなす、げんじのみよあひつゞきて、さかふるはるこそめでたけれ、其頃みなもとのよりのふ公は、わか君よりよし公へ、みよをゆつられ則御名を、さいしゆん入道と申て、御所のわきに御いんきよを立られて、にぎあうことはかぎりなし、あひつたはるらうど共には、わたなべのつな、さかたのきん時、同五人の子供是七人は、せつのかみ頼光よりゆづられたい〳〵さうでんのからうなり、爰に又むまのせう、いせの七郎、大すみ源五、びごの平八、さつまのたゞあき、かれら五人はいしくのはんくわい、長良もおもてを合せぬゆうしなり、是はよりのぶ公より給りたるらうどうなり、扨國々の諸大名ひゞにしゆつしはひまもなく、よりよしの御いせいゆゝしかりける三重しだいなり、是は扨をきこゝにださいのひやうぶやす村の子に、同兵ぶの正やすもとは、ちくごの國にいたりしか、有日のこと成にらうどう、を山の十郎なるかみを近付、扨もこんどつくしとかまくらにて、おやおうちを打せ我ながらふへきにはあらね共おやおうちのかたきをうたん其ために日かげの物と成有にかいなきしんたい此まゝくちはてん事こそむねんなれ其上けんとうさいせのかたきの子なればせひに打て下るへしいかゞはせんとひやうでうすなるかみ承り仰のごとく君此國にござのこともはや天下にかくれなく此頃の取さたにはちかき内に打てむかふとふうぶんせり一まづ東國の方（本ノマヽ）へ御しのひ有てかたきのていたらくをうかゞいならふならされゆうしやの心をす、引しても御らんせましいつがいつまでさるがくのまひ、すさびたるあふぎのてあそこの山がこゝの里でんぶやじんのきを取てさしたる刀のよしなくもいつまでさびをおとさんと又有時ははくらくの市にまぎれて馬にのりぶしのたしなむしこのやもれうしのもてる竹の弓さゝのそぎやをこしにさしやせたる馬にこしはりくらはいやしいどうていをして口をしいとはおほさぬかそれしゆつけ

になす子はようせうよりもきりやうにまじわりふつたうのあんじんをさとり諸國しゆきやうしちしやのほんいをたつすとやぶけの子にはぶげいをおしへぶだうをみかゝせ一たびゆうしのほんいをたつすなをしくもうづもれさせ給はんよりはじがい有てかばねをいぬにも打くれさせたまはんこそまさらめと誠にゆふせいあらわれてひたいにくろきあせをなかし泪本ノマヽと共にぞせいしけるやすもととつくと聞とつけあふよくこそいひたれ我も此ぎおもわぬでもない思ふに付てしさい有先するがの國迄近付よりしのびやかにかけをかくしいつはし人(本ノマヽ)をなひけてみん尤なり三年おそき御ゆだんかなはや〳〵心へたりとて 三重たひのしやうぞくしたりけり是は扨置よりよし公有日のうちうのつれ〳〵にらうどうらうにやくしゆつとう人こと〳〵く御まへに召れすでに御しゆゑんはしめられわたなべせいたうのあらましを少申せばよりよしあざやかにこたへたまふつなはつとかんじけるかさねてよりよしいかにわたなべきん時われかくあんへいによをおさむることみな是かた〳〵もつてちうこうのせいとくなりぶだうにもかだうにもかた〳〵をしせうとせはくんじよのしだいあんもんならんたとへはいか成ぎやくとおこる共さんそくついばつのりはばつくんにふかゝるべし今ははやよの中に心にかゝる事ぞなきかゝるめでたきおりなればさかなとの御でんなりわたなべはうらゝに付てほつくに、たち花はよもきかしまのにほひかな、きんときわきに、はつねもたかき山ほとゝぎす、其時よりよし先も先もしたり扨もわたなべはげんじさうでんの侍ぶだうのたつしや一とせよりのぶ公さくらかりの御しゆゑんのみぎりいつれもらんふさま〳〵なりしに取わきわたなべ一きよくかなてのこと今もみにそひておもしろやたゝ一さしとの御しよもふなりわたなべつつしんてうけたまわり誠に其時はさだみつすへ竹はうせうきん時かく申つな五人ひつそろふてしゆんのまひをいたせしはゆめのうきよにのこりゐて物思へとのかねことかあらよしなや物のふはながいきせましき物そと人をきにいさめし我なれと今此君にみよをつかせ奉り五人の子共を五かくにすへ置ともならばや今までもながらへぬもはや此上は思ひのこす事もなしけふはけふあすはあすいき引とれる其時はみ

つばのそやをいることくあすの命もさためなしとにかくに仰こそおもけれいかに人々はやしてたべさのみくすんたり共へうたんよりこまをはとてもよも出さしうたへやうたへうたかたのあわれむかしのこひしさに今もゆうしのらくあそびすへのまつ山なみこゆる共君かよはかはらじないくちよをかさねてこうはふる共まんざいらく君大ゑつかぎりなく二人の物に天下のしつけんたまはり我じやく年なれは兩人よろしく取おこなふへしと御ざを立たせたまへはわたなへきん時こは有かたき御でうかないまだ御年もゆかざるにかく御せいたうこまやか成はとかくけんりよの君ぞかしとて物ごとにさだみつすへ竹はうせう五人一同にかうむらは今の思ひはあらまし物を是に付てもそれかしかたひ〳〵せいぶん申せしを頼信御もちないきゆへに思ひもよらぬ京のぼりみのゝ國にてはてし事おもへば〳〵口をしやといとゝ泪はせきあへずあつはれ御父頼信公とはばつくんまさりし御大將やとすへたのもしく思ふへしかまへてなんぢら此君はずいぶんちうかうをなすべしと今ひとしほのらくるいによそのたもともぬれすへしきん時申さるゝはいかにわたなへまつ子共を國々へおさへのためにつかわすへし尤とて五人の物を近付なんぢらは國々のせいたう取おこなふべしまつすへ竹の一子すへしげはするかの國とをたうみさだみつ一子しげさだはしなのゝ國はうせう一子きどゝ丸はひたちしもをさあく太郎源二郎は都に上りさい國のおさへを仕れはや打立承るとてみな國々へぞ下りける扨あく太郎源次郎は都をしてぞ上りける是は扨おきやすもとはよを日についで行程にとうかいだうのうきなん所はこね八里を打しのぎおたはらのしゆくにかくれしかげにかいだうのしゆくのならひとてなさけかましくみへければねかふ所のさいはいとへんせつはたらふつていしゆかすけることのはにたけにあふらをぬることくとつくり〳〵とはなす程にていしゆ一はいくわされてあら心よきたび人かなとてことの外かにもてなししばらくきうそく仕る此やのていしゆはおかはの彌太夫とてしゆく一ばんの長ぢやなりめいばあまた持つねに馬をすきけるがけふははゝのりすへきとてまつくろ成馬を南をかしらに引出すやすもとみてかねてのぞみうけしことなれはあつはれ御馬

候おつさまむかふよこはたはりをくちさうどうつまねのくさりよめのふしまてつくり付たるごとくなりとことばをつくしてほめらるゝ彌太夫一々打聞て扨は御ぶんは馬すきとみへたりせひ共是にとうりうあれそれかしひさうの馬をおわりへつかひ候かちかき内にかへり申べし御めにかけんと申やすもとこのむ所なればさも候はゝとて物ごとにむまのけいこをのそむ人是あらばおしえんと申ていしゆいよ〳〵よろこびきん國の侍の子共六人しやをたつて申入則でしにぞさだめけるまづ一ばんにうへ村とのもまつだの甚平ほりの牛助かなざはたうたえばらのさないかたぎり竹松其外の人々迄もぴゝにけいこぞつのりける有時やすもと六人のでし彌太夫いげにむかつてそれかし一はゝのりて見せんそれにてよく〳〵けんぶつあれはたつな打ひらりとのりあふみふみしめまへ三寸のりすかしたつなくりしめ馬のかしらを上させみたる所は兩のみゝくほんのとりいとくはんねん心をしつめむまの心と一同し一きめしむれはしりこみをよち〳〵とする所をわかうのたつなをゆるめてたつくり〳〵〳〵とさくりこのめとのばら一ばんにかみのまへのくわんたいのりふつはうくりきのらいはいのりあくまの物をはらいのりわくの四つたちくきやうのり七よう八よう九ようのほしをへうしてこばんのりはしごの上のとらの子わたしみな是ぐんはうひきよくの大事をかた取てかくのひやしにあほりのおとがほんはく〳〵〳〵とのりかへしまはりばすへよりもものりしづめこまにしらあはかませつゝしと〳〵とのりもとり諸人のまへにてわのりをくるりくるりと三べんめぐりたつなひらくびにかけゆらりとをりしよ侍にしきだいしたるは日本めいよの馬の上手あつはれつよきやとみなかんせぬ者こそなかりけれ

第二

わたなべゆいごんの事

去程にやすもときよくのりをも白くのりけれは人々何れもめをおどろかしなをもしたかひもかしづきけりすでに其よはよもすからのしゆゑんにてさけもなかばの事成にやすもとじぶんをかんがへこゝろに成ていふやうはいかにめん〳〵一じゆのかげにやどり

一がのなかれをくむ事もたしやうのゑんと云中にしでしは三せのきゑんと聞ば一かたならぬちぎりぞや扨御ぶん立頼たきしさい有頼れたまはゞ申べし人々承り其中にかなさは兵へすゝみ出こはいまめかしき仰かなそれ侍のならひあるいは人をあやまりあるひはきにんかう人の時の仰をそむきてらう人するを取かくしめいわくに及も侍のきりましてしてしの中なれは一命にかけて承らんめん〳〵はいかゝおもはるるそ其時五人の人々も口をそろへて誠にすゝしくも申されたる御へんとうかなとかふはむやくたとへは六人同枕にしかいを埋めはとてたれかいはいに及べきたとへいゝ成けうし成共はや〳〵らちを承らんとまふせははなはたいさみけりやすもとゑみをふくんてあふしんべう〳〵それ迄もなしさあらはそれかしかせんぞをかたり申べし我をたれとかおばすらんすぎつるつくしの一らんに打じにせしださいのやす村か子に兵部正やすもとなりきよ年おうぢ入道やすしけをかまくらにて打せし事みな是わたなべかひやうはうゆへぞかしとかくかたきはわたなべなりおやおうぢすこふるあくてきあたかもしやうにしうりんしてさいのめにきさむといふ共あきたらす何とそめんめんちりやくをめぐらし我に一太刀打せて今のしんいをはらさせてたまはれと身をもたへつらにくはゑんのすしを立のろひいなゝきのゝしつたるは誠にあらかみやくじんのあれたるけしきもかくやらんと身のけもよだつばかりなり人々はつときもをけし引に引かれぬ侍の一ごんはきんせきよりもなほきよし一ごんにも及ずおの〳〵一み同心のはやれんばんをぞしたりけるやすもときゑつかぎりなくこはたのもしきしんていかな我この本くはいをとげんためふしぎに命をながらへてろう人と罷成扨かまくらのさたはとゝふた兵へ承りさん候わたなべきん時二人は天下のしつけん取をこないゑいくわにさかへ候と申やすもと聞てさあらばかまくらにしのひ入ひまをうかゝひよ打にせんかた〳〵以て力をそへてたまはれ時にうへ村とのものせうすゝみ出しはらく聞ばわたなべみのにてあたへしどくのさけついにほんふく仕らせもはや五三日中に相うすべき由承り候へはまづじせつをまたれて然へしとそ申けるやすもと聞てあゝおとたかし〳〵わたなへさへしゝたれば天下は此やす

もとかむねの間におさめ置と扨なるかみを近付なんちはいそぎ國々の諸らう人共をしのひ〳〵にかゝゆへしとてぐんはうへうてう取々なりわたなべがさいごのことを今やおそしと待いたるはをそろしかりけるしだいなりあんにもたかはす扨もわたなへのつなはせんねんみのゝ國大はかにてのどくのさけかつついにはぜつめいのもとゝなりびやうきしきりになりしかば國々よりも子共をよひよせかいしやくせさせいたりしかけふをかきりとやおもひけん源二郎をまくら本に近付なんぢはいそぎ御所へ參りわか君に申すべきやうはわたなべこそけふをかきりに罷成候今一たひさいこに申上たき事候へはおそれなから御成をあふぎ奉ると申上候御とも申て參べし源二郎あつとこたへ泪と共に罷立馬一さんにのり出し御所をさしてそいそきける御所になれはつゝしんで申上る頼吉驚かせられやれ馬引出せじこくうつるときん時一人召くしつなかやかたへいそかるゝむさん成かなわたなへは大病におかされしやうきおとろへいきもはやたゆる斗のわたなへも君の御成と聞からになにしあふたるゆうせいを今もむかしにたがへしと弱りふしたるまくらもさのみよはげなくすこ〳〵とおきなをりやれ源二郎わらはにてうずいもてこよといへらうたいと云びやうきの中は物のかおとかする物なりと香をたかせかをとめうがひてうすで身をきよめ誠に以てめうがしなき仕合かなわたなべがさいごにわか君を申うけいにしへのらいくはうをおがみ申心ちいたし心もわかやぎりんじうをとぐること一つはおいのくははう又はわたなべつねにせんもんの道をかんかへいしんてんしんのむねをあきらかにさとりうきよに思ひのこす事つゆもござなく候去なから少心にかゝるぎはかろ〳〵しくもゑんろの御成おほそれ入て候へ共かつうは御ためを以て一ごんの申をきを仕りしのうと存是迄しやうし奉る扨ゆいごんといつはべちのしさい候はずせん年つくしいさゝにたいぢせしだざいのやす村か子にやすもといきのこるよし承るかれかゆき方おぼつかなしあくてきのすへなれはねつたいうらみをふくむゞしそれがしむなしく成ならはぎへいをおこす一でうなりきやつかしそんのこんぜうほねはいきほとけいきかみをもあざむきうしおにのめをもくらまかすこときのやつばら

なればいか成事をかたくむべし是のみならず心にかかり候人はいんよくにまよひあればおもわぬむほんをおこす物なり然ばよゐのぶ公よりおゆつりの五人の御しゆつとう人衆へそと申わたすへき事の候それそれとやがてつかひを立らるゝ何れも間ちかへよびよせいかにめん〳〵たい〳〵つたはりしわたなべもしやばのゑんつきぬれば今をかぎりとはやなりぬ付ては五人の物共しよじのぎをしめし合よろしきやうに君をたつとみたみをあはれみたまふへしそなたもわかき人々なり我等か子共もわかき物共むかしか今にいたるまてしゆつとう人とからうの子共の中よきこと候はずことに家久き物かはてぬれは跡にいせいをあらそひてひばうのしをする物なり八十に及ふわたなへかゝた〳〵にきよごんは申さぬそ今いきとらぬ其内に君をもそさうにいたすましはうばいしゆ共中よくいたすべきとのせいごんでうをかゝせたく候が何と申かねたれ共かれらばかりてはめいとのさはりもいかゝなりわたなべをぢごくへおとさう共ごくらくへ參らせう共かた〳〵のふんべつしだいと泪と共にぞたましける五人の人々口をそろへてこわわたなべ殿の仰共おぼへぬ物かならう人のしめさるゝぎをたれかはそむき申べき我々とても御まへさらぬ物共なれば君の御ため思はぬ物は一人も候まし何とて心おかるゝぞ但我々か心みへしのかねこと候かと皆一どうにそ申さるゝわたなべむく〳〵とおきあがりけるけ成とよわかとのばらそれ程みことに有べきとは思はざつたり扨はさやうにたのもしきしんていやとほていの子をなつくるやうになつかしさふにしぎだいしたゝ今の一ごんはくはうせん迄も忘るましかまへて其むねたかへらるゝ事勿れおいて二たびちこに成とは此わたなべがさいごぞと人々のてに手を取くませゆびをきらせかみを切たかひにかたみを取かはし其ちをしほりわかみや八まんのこわうを以て五人の子共同五人のしゆつとう人一々きせうをかきにけるこの此わたなべかさいこのかたみにゆひかみ切し其ことを今のよまてもたみのぬひ子共のせわにのこすこと一かたならぬわたなべとかんせぬ物こそなかりけれ

第三

わたなべさいごの事

去間つなはわかみやのへつとうをにはかにしやうして四めんにたんをかさらせごまをたかせ一つはわたなべかきたう共又はせうこの其ために其もんごんをそよみ立けるそもゝ〳〵うやまつてきせうもんのいしゆは扨も我々か君の御せんそ六そん王よりけんしの家はしまり御子まん中のちやくしせつのかみ頼光の御しやてい頼信公しそく頼吉公へ御よをゆつられ候きたい〳〵のらうぢうわたなべのつなこゝんにまれ成ゆうし四天王とな付られほまれをばん天にひゝかせけれ共らうせうふでうのよの習ひはのかれす既にさいごに及んで跡のおきてをしめさるゝ故に五人の子共同五人のしゆつとう人からうわたなべのつなゆいこんを背きて此君に二心在ならは上にほん天たいしやく下はし大天王ゑんまはう王ごたうのめうくはん下かいのちにはいせに神明げぐうないくう百廿まつしやくまのにみつのお山たきもとに千じゆくはんをんかんのたうにはさ王ごんげんよしのゝお山にざう王ごんげんこもりかつての大明神ならは七たう大からん天王寺にしやうとく太子いづみの國には大とり い五しやの大明神つの國にひるこの天神王せうのちんしゆかものみたらきぶねの大明神きをん三しやの五ず天王ひゑい山にでんきやう大しふもとに三王廿一しやふきおろしにしらひけの大明神みのゝ國にはなかへの天王おわりにつしまあつたの明神するかの國にはふし千けんべつしてはいづはこねおうしうにしほかまの大明神かゝにしら山ゑつちうにたて山のとの國にはゆるぎの大明神しなのにあさまあふみにいふきちくぶしまのべんさい天女ようしうやたかきお山にちざうごんげんきよきなかれのいわしみづやはたに正八まん大ぼさつ惣して神のそうまん所いづもの國の大やしろ日本六十六國の大小のしんき是迄くわんしやう申奉るばつはくびすをめくらさしおのれとくるい出せつたうのつみにふすべきとのきせうもんくたんのこととよふたりけり十人の物共か一々ちばんすへたるは身のけもよたつ斗なり扨わたなべにわたすつなおしいたゝきあふよくしたりけなけ物共有か上にも君にそりやくをせらるゝなかみはきねかならはかし君はしんかまもりなしとてしん

ははうかのりついとを持て引かことし爰をもつて君しんは水ゆくふねのことくにせよとみへたり君もゆたかにたみもさかふるはみな是れしんかの心一つて有ぞとよめん〳〵せいしのへんはうにさいごの一くを申をきよくつゝしみたまへいかにへつたう二せまでのせうこ人そしゆせきは人のなき跡のおもひのたねとは申せ共我はめいどのかたみと思へは千ぞうくやう萬ぶのきやうにもまさりなんとふかくのなみだをこぼせしを君をはしめ御すへの人々そでをしほらぬ物そなきわたなへ源二郎を近付それ〳〵とよろひかぶとを取出し君の御まへにとうと置つないかに君是はまんちうよりたまはりたるはらまきにてみをはなさず今四代迄ちやくせしか一どもふかくはとらずなんはうめてたき物のぐなれおそれながらわか君に奉るいかにわか共わたなべうきよに有やうに心つかひをいたされよもしもあくてきかゝる時此物のぐをみかたのぐん門に立置いくさのてつかひせらるへしそれにくたいはやけばはいうづめはつちこんはめいどにおもむく共はくは此よにとゝまつてたましひは其まゝ本のわたなべなればかたちにかげのそうごとくしんいのいかりをなすならはてつへきをもふみやふりたちまちてきをけちらかしまもり神と成べきぞやたゝはたもとのみたりがはしくなきやうにむたうの法のともからを一々のとくびをきつとしめされよとかく頼ぞきん時殿おいとま申て我君ばんし頼ぞ若侍名殘おしき兄弟のわか共と是をさいごのことはとし年八十三にてひざをさうにくみひぢをさうへはりわけがつせうしてまなこを八分にはらまへいかに人々わたなべかせかいをみひらきてしするこことまつだいげんけをまもらんためなりと大わうじやうをとげたるはひとへにだるまのごとくなり君をはしめ奉り五人の子いづれも〳〵一とにわつとなげかるゝ中にも御大將御泪のひまよりもやれ源二郎此やう成めいよの侍は物のみ入か有と聞其まゝもくよくすべしとびやうぶ引立ばんを付よ承るとて兵共しがいのまはりをまもりける扨のべ迄馬を引せつじかためをなすことはあくまはらはんためなりわたなべかさいごしゆせうにこそはみへにけれ君々たりもとよりぶつせうどう一たいの人間三せきろんに引れ二せあんらくのかたみをうる君のめくみぞ有がたき

よのめも更に御しんならずさうれいのぎをしめされき日〳〵の御とむらひをなし給ふげに〳〵思ひあいたるくんしんの中あつはれたのもしき共中々申はかりはなかりけれ

第四

おにたけさいごの事

扨もそのゝちむざん成かなきん時か今はの時のことばのすへこそあはれなれ我々わかき時よりも五人の中はたれにてもしにのそむ其時はしがいを人でにかけさせず取かくそふぞとたかひにいひかはせしは何事ぞ今は我一人に成なれはあすをもしらずたれをか頼申べきたゝ一時成共さき立てしする人こそ佛なれのこりて物を思ふことといんくはの引入おくるまのめくりあふせになかいきせしははかなかりけるかねことゝないつくといつやれわたなべふねが出るか我をもつれてゆかれよなふわたなべ〳〵とふかくの泪せきあへずわか君まへをかきたまへば跡は竹つなかきにけりきん時わが君のそへごしをかきければ四人の子共ははた天かいをさしかけきん時かうせうにいかにかた〳〵わか侍日本ぶさうのわたなべかさうれいに弓や取みはよりて手をかけあやかりたまへぶつはういんだうのせんのつなぶしもはうしも一すちに道を立れはささそひ引二世のちきりやはうばいのかいなきめどいの道すから三世のきぞんに君のなさけぞ有かたきまよひをもてらさせたまふ六道のくらきやみちにあきらかにとはすがたりのよそほひはげにためしなきせいせいさなからしゆせうにそみへしついにのべにそ付れけるどしよにもなれば君を初め五人の子共しゆつたう人しだい〳〵にしやうかうを取こそ哀れなれおしやういんたうおくりせんたんたきを取くべむじやうの煙となし申けふりたゆれはこつを取君御所に入たまへば各々わがや〳〵に歸らるゝ七日〳〵のとむらひ五人の子共きん時してせんちしきをくやうする三十五日に當る日は忝も御所に吊ひ給はんと千ぶせんばうせかきをなし御吊ひぞ有がたきよりよし一しほ御歎き有わたなべそれかしにゑさせしよろひかぶと今一たびわたなへをみると思ひせめて心をなぐさまんそれ〳〵と常の所にかさらるゝさながらわたなべに二たひあふたる心ちして御しう

せうのおりふしふしきやかぶとのはちよりもむし一つ出る其色山吹色にはね四まい有口にはけんを含めり人々さはぎ申さるゝ頼吉御らん有てこはふしきのしたいとてしばしかんしておはせしかやゝ久しうしてげに思ひ合たりかれかさいこにかはねはとちうに埋む共たましひはもとのわたなべにてあんなれはと云置しは此むしにてや有らんさあらばかぶとのはちよりしゆつせうしたるむしなれは其なをはちとな付ばんみん高もいやしきも恐るゝはちのゆらひは此時よりもはしまれりいそき神にいわへとていぬいのすみにやしろを立はちのかみと名付らる有かたかりけるためしなり此ことなをもかくれなくやすもと聞付六人のとの原なるかみを近付聞はわたなべのつなは三四十日さきにしゝたるとやもはや天下は取た物ぞかた〳〵には何さま大國を參らすべしじこくうつさす打立物共承るとてなるかみをいくさ大將とさためよりによつたるあら侍一千よき其みはむねとの六人一所に弓をのるなれはやすもとか七き打と名付てかまくらの城にをしよせ時のこゑをぞ上にける御所の内にはおもひよらさるゆへうへを下へとかへしけ

る中にもきん時大てのやぐらに上り大をん上てやれおのれらは何物しにぞこないそ其しやうだいをはきおせいか程やたけにおこる共いまた此せかうのはげたるきん時かこもるうへは何とたゝ一のことにのんだやうに思ふ共かきのめに水みへずとてはませるおぶくもたちまちにくはゐんとなりて其みをやくほむらのたねゝ成べきぞむやうのきべいをおこさんよりたうせいはやるつれねんぶつなむあみた佛とうきよをたつて命をつげうさいがき（本ノマヽ）とそいかりけるよせての中よりなるかみ一ぢんにすゝみ出是はだざいのやす村の子にやすもとなりつくしかまくらにておやおうぢを打せ其むねんをさんぜんためのぎへいのおこしことよやれいそいで心へさるは大き成ゆだんぞやことのたとへにじやの道をへびかしるぞとよおやにはにたる其事をはきつねの子をはつらじろとせけんに云はよく云たうたふうたれしは心の覺か有ぞとよむかしおにの子ともせよあまりに四天王かせはふかせそ今ははわうとなりくだり御へん一人がうつたりまふたりしける共ひとりづゝみはよもならし是へよせたる兵には七き打と名付て七ようのほしをへうし

われ共には四三八つのそへほしにていつもこなたにはけんをかしらにいたゝきくんはうひしゆつのともからなれはそちとこちとのはりあいはおぼねかたつまいたゝすみやかに誠(本ノマヽ)をわたしさんやに馬をつなぎをきこうさんせよとそ申けるきん時聞もあへずやれおのればらねつせうふかきあく人かな手取にせよとげちをなす所へいぬいのすみよりもくだんのはちひかりをはなつてとひ來りかたきのやつばらくつきやうの兵六十あまりさしころしじやうちうに入ぬ其ひまに物のぐさしかためよせてみかた入みだれいくさは花をぞ　三重ちらしける城の内にはいまたせいもつかさるによせての方よりきば七き打かけ合のりかけのりかけきる程に何かは以てたまるべきみなことこくうたれけりきん時こらへかねたち引ぬき近付かたきをはらり〳〵と切にけりのこるぐん兵四方へばつとおつちらし立かへりみてあればいたでうすでにきらひなく廿四か所てをあふたりさしもにつよきん時もたゝよろ〳〵と引所によせての方より十八九成わかむしや大をん上にていかにきん時まさなくもひかるゝな我をたれとか覺すらんゑちせんにかくれなきがんぜきくづしのおにたけと云物なり引かへし力をためしめいとにて人々に物語いたされよと云もあへず打てかゝるきん時心へたりとてうけなかすされ共おにたけ心きいたる物なればたゝみかけて打程にきん時むずとくみわかき時なるはおのれに二太刀とはあけさせまじ物を口おしやいたでおいぬれはらうたいゆへつかれには及ぶまつたくかなふへき共思はれすあゝさて年はよるましき物哉とはがみをなして上を下へとかへし既にあやうくぞみへし其時五人の子共わたなべやにいたりしか其間七八丁斗なれば時のこゑやさけびのおとはてに取やうにぞ聞へけるすは御所にことこそおこりたれと大わらはに成てかけ付て候此由をみてかたきの中へわつて入あく太郎は横あいより走り行父か上成おにたけを取て引ふせくび打をとしきん時をいだきおこし扨々あぶなき御事やと父をかたに引かけ城中さしてぞ入にける殘の人々も一々くひをつらぬいていきほいかゝつて引たるはあつはれ小四天王おやまさりやとみなかんせぬものこそなかりけれ

第五

きんときさいこの事

去間五人の人々きん時をかいしやくし君の御まへに参此由かくとぞ申上る頼吉御らん在てやれきん時では何と有ぞもしも其てか大じに及ぶことならば我は何と成べきぞと暫し涙をながさるゝきん時承こは忝御でうかなかくいたでなれば力なしたゝ是に付ても四人の人々ながらへて有ならばかくやみ〳〵とはうせましき物を五人のあのさててきしゆつとう人かまばらにかけこみ引しをぬくれは心かせかれて亂れ入てきをふせきとめしによつて此いたでをいぬるも君のためとにかく五人の子共かくる共引共一所に心を合君にちうを仕れ御いとま申てわか君名殘おしきわか共とかうせうにねんふつ申ついにはかなくなりぬ君をはしめ人々是は〳〵と斗なりされ共かなはぬ事なればしがいをねんごろに取かくし此上は一時もて（本ノマヽ）きをほろぼしけうやうせんとないきひやうでうでう取々なり其内あく太郎すゝみ出いやさせんぎもよしさたゝやすもとめいしゆくんのてきおやのてき此あく太郎においては千ぎ萬ぎが中なり共思かたきは只一人やすもとめがまつかうしやつらかけて切わりはら切てしなんに何のしさいか有べきとかけ出れは源二郎おさへてしばらくあはてゝ事をしそんしたまふなたれとてもみをすてゝ打たんはやすけれ共それは君を思ふにあらずおや共も君をよくまもれとこそ云（本ノマヽ）おきければあれていのかたきをふせきかねみをもか（本ノマヽ）つて命すてんは云かひなしされはかたきのやつばら人にすくれてうてふし三つ四つ五つ六つ共もつにこそかたきもて二つわれ〳〵もて二つわたし合する程ならは五人の者入ちがへもみちがへうちはを以てはいをはろふがごとく成べし余にさのみせかるゝな一まつかたきにもいきをくれこなたのくん兵共にもとつくりときをのませかたきのやうだいをみすまし其時くだんのいくさのはうを以てふくろの口をしむるごとくひつくゝてひしがふぞやしつまりたまへとおしとゝむる時に頼吉五人の子共は大てをかためよ又五人のしゆつとう人はからめてをかためしはらく時をうつすへしと御ざを立せたまへは何れもかしこまつたりとてきどさしかためよするかたきを待いたり是は扨置やすもとは六人の殿原らうどうのなるか

みを近付こんどめん〳〵のはたらきしよ人めをおとろかし殊更よりよしかゆんでめてと頼しわたなべのつなはほろひぬきん時はうちしにす今はゝや心やすし此上は大將子共を打ころし天下のしゆごとあふがれんいそきよせよといかりけり時になるかみすゝみ出こゝによりよしを打べきけいりやくこそ候へと申やすもと聞て扨其ひけいはいかにさん候てだてといつはよりのぶよりゆづりし五人のできしゆつとうとんよくふたうにしてつねに五人の子共をそねんで中よからずかれらに大こくをあたへ頼せたまはゝそくしに頼吉かかうべをはねみかたに來らんたとへは五人の子共か切て出れはとて只いけすのこいを八方へおいめぐり四つてのあみにてざこやいはしを取こととくひまなくくびをしめるならは四天王の子は扨置ぬ五たうりんゑのあなた成あしゆら王と申共あゝたた〳〵〳〵たな心の内なりとてに取やうにそたくみけるやすもとさもうれしけにきうに其むねさんせんとでうをしたゝめ其よにからめて城中へふうつう一やしかけさせゝい兵にこそいさせけれぐんしや取上うまのかみにつかはすやがてひけんつうぶんにはは

くこんとやすもとぎへいをおこし大ての大將きん時を打取上はいそぎ頼吉かかうべをはねさうぞくちうしんせらるゝにおいてはまふこく二か國つゝはうせいにあておこなふべき物なりよつてでうくだんのごとしきやうくはうとんしゆ五月五日五人のしゆつとう人へだざいの兵ぶやすもとゝよみ上る馬のせうかいはく聞たまふかめん〳〵つね〳〵のぞみは此時也むやくしきはうばいにおもてをむけあけくれに心をかぬるもよしなやあすをもしらずせんなきうきよに一時のゑいくは千ねんの命をのぶるとなればましてや二か國のぬしと成ならばよはあんせんにおくるべしいかにかた〳〵天のあたへを望ぬはかへつて天のめいをやぶるなかんづく兩ぢんのけいりやくをみるによせてはいさんでけいきをます身かたは此程うれいにしつんてむしやのいせいもいんやうまさにらんしきなりあし本のあかき内にいさふんべつをきはめん何れも〳〵尤とどうしてしからば城にひをかけよりよしを打たゝんといふいせの七郎やにはに打へきはかりことこそあれひをかけうよりはさあ五人の子共の内すへ竹か一子すへしげとそれかしゑん

しやになりたれはかれをよびよせかたり聞せいざやひけいをめくらさせんもしそむく物ならはいくさかみにいわふべしめん〳〵尤しかるべしとやがてつかいを立にけりすへしけ何ことやらんとつかひとつれて其さに來る則六人はくるまざしきにいなかれ是へ是へとしだいにしきたいす七郎念頃ぶりして物云がほにうじめきしを六郎みてやあよう有げ成有様やとちつ共心ゆるさゝりしか七郎こゝろに成てさゝやく六郎わざとけんによもないかほばせして打うなづきしひやうしに七郎とたんやあころりとなげたへんしは只今太刀さきにてみしらせうよつてみよとてそは成ごはんすご六ばんてにあたるをさいわいにさんこみじんに打ちらしすいさん成とよあをとり共四天王の中まの物に云事といわぬことゝが有一人もあますましきか一時もはやく君にしらせ申さんと御所をさしてそかへりける扨人々は六郎かいにどうてんしちから及ず打つれてかたきのぢんへぞうらかへる扨人々にたいめんして城のあんない五人の子共かぐんはうこと〳〵く我々かたな心を合てそくしにせめおとしあんきをなさせ申さんとみな一どうにぞ申けるやすもと聞ておふたのも〳〵さあらはめん〳〵此上はくんばうの手だてにまかせてずいぶんちりやくをめぐらせ一むしんにいくさをせられよ時の一きむほんなと云ことは手のひにしてわらんべの水いさかいたゝ一つにせいりきをはけふしひらせめにせめて城をのり取しほあいは天か一の折からなりとぐんばいはなはたかきりなしうらべの六郎すへしけは大いきついて君の御まへに參りからめての大將てきしゆつとう五人の物共心がはりを仕よしを申上る頼吉おどろかせられよしそれとても心かはらはかはれよしなきぐにんばら千人萬人うらかへる共むちさし一人かけたる程にも思はぬそたとへかたきもうせいにてむめくさをこむとてもけつき斗のうきむしやなれはひとへにさすらをる五月もなるの水げんくは程迄はよもせましれいの手ばこを持ておつちらせ逃る所を國こほりの百せうらにすきくわまでつるのはしよきまさかりを以て一人もあまさずひしきころせと仰けり五人の物共あつはれ君の仰こそおもしろけれ扨も〳〵おふち頼光によくもにさせたまふ物哉千ぎに一きの大將なりとぞ申ける源二郎かしらをたゝ

き扨もきどくに云たり殿ばらくんせいはみな大將のいに付物なり若の御ゆうりきこそ頼あれとてかんしける扨みかたのせいは何程有ぞくつきやうの兵五百よき斗有げに候時に頼吉さらばぐんはう取おこなはん先大手へはやすもとかせいゐんにつらなりへいをのらんと望べし源二郎きとう丸三百よきにてかたむべし扨からめてへは五人のしゆつとうが大將にてむかはんつらん是へはゐく太郎小六郎荒二郎二百よきにてふせくべし承るとて大てからめて五百よきよするかたきを待いたりよせての方には其せい二千五百よきとそ聞へし大將やすもと大もんのひたたれにていまだよろいはきざりけりぐんばいうちわを持らうとうになるかみを召ぐし大やうにひかへたり扨六人の殿原は一きはすくれみへにけり皆一やうにあい色のよろひにぎんのかな物打たるは只道しばにゆきをめくらすたもと哉其中にもできじゆつとう皆ひをどしのはらまきにくれないのほろをさつとかけ大將にむかつて我々そとわき道よりしのんで城のかまへむしや立をみて參らんと人四五十人にてかねてかよひしわきのもんをしのびよる時に源二郎とあく太郎はもしよ打にやよするかと二人よまはりに出てつのぼうをからめかしゐしかるしうよくばんを召れう打とけいねてこけはへな御ようじんようじんせよと云所にわきのうつみ門のへんにゐやしきおとこそ聞へけれへいのさまよりみてあれは人四五十程かち立にてきば五きみへたりたぶんあれは五人のやつばらがゐんないけんみの其ためにおづ〳〵是迄のめるとみへたり何とそきやつはらを一人もあまさずなぐりふせんばんの物共めさはぐな只あく太郎と竹ゝな次第にまかせおきて物をみよともんのくゞりをそつとあけさせ是やりやしのよごひくつまこふしかをよはい打ゐしもとから鳥とこそいへかきめ一人もどつこへ〳〵はゝいゝ〳〵〳〵と打よつす五人は馬にのりたれはごせう大しとにけて行おつかけゝれ共よき馬なれはつゐにゝけのひたすかりぬかち立五十人一人ものこさす打とゞめもんの内へぞ入にける二人の物かてがらのほどせんだいみもんのためしやと上下ばんみんをしなへてかんせぬものこそなかりけれ

第六

子し天王ゆうりき付やすもとさいこの事

去程に源二郎あく太郎は君の御まへにくひ五十持て參かやう〳〵のしだいなりされ共五人のやつはらはよきむまにのるなればさんりんにけさつて打もらしぬることなんはうほいなく存なり去ながらきやつばらをいけて置候もいく程か候へき頼吉大ゑつ限りなくおゝよくしたりとてよする敵をまちゐたり是は扨置爰に又つくし大みやう一つ所によりきしてあきのはんくはん申さるゝは既にかまくらゝんけきに及ふやゝ共すればげきしんにまよはされて思ひのひをむねにたくこと是作り病なりいざ頼吉をみつかんとむねとの兵二萬よきさい國を打立てかまくらさしてそ急きけるあしから山にぢんまく打てこまの足をぞやすめける先是よりつかひを以て打たへんとやしまのこふんしをしゝやにぞ立にけり御所の大てのもん外に立よりほと〳〵とたゝきあんないこふた御所のうちにはしげさだ聞ふしきや入あい斗になりたそかれの人のおもてもおぼろけ成に門を叮くはくせ物哉あまさしとつくばうをつ取出んとすきどう丸をしとめまたれよ左様にあらくてはおちてさうなくより付まし我たばかりみ申さんとしげさだをとめ門をひらきたそとゝふさん候つくし方よりのつかいの物なり其由をくへ申されよと云きとういよ〳〵かたきぞと思心へ申たりとかんしとかいつかみ供の侍是はらうせき哉とて太刀に手をかけひしめくきどうはたとにらんでらうぜきであらふとまゝよとがなくはのちかやさふとゆんてにつかみめてにて門をはたと立君の御まへに參りけり頼吉はるかに御らんして何物そとあれはさん候是はあきの國にあくぢのはんぐはん國共か侍やしまのこふんしと申物にて候かまくらんげきのよし承りさい國大名こと〳〵く御みかたに參るべしはやゆるぎのはらにぢんを取明日御城中へさんにう仕べきとのつかいに參たるそれかしを是成おのこかあらけなくいためしことふしたる物のちしよくなり二たびかへりて人にわらわれんよりは只今はら切てしなんとてこしの刀に手をかくる源二郎おさへて先待たまへそれはかたきのやつばらかけんみのためにたばかるそと心へてとかめあやしめ申たんよくあんしてもみたまへかた〳〵もつてはる〳〵

是迄らいりんの所も君のためあやしめ申も君のためりぐはいは心のほかなれはかまへて心にかけたまふな其上かゝる大じのつかいに來れるみかすこしあやまりあればとてはらを切らんせを切らんとは近頃御ぶんのあやまりなりことしつまりてあらはちうせつのはうをんにおこのうべしと五人さま〳〵なためられさらは御めみへあれとて君の御まへに出しけり君御たいめんなされ諸大名ゑんらいの所さうそくかけ付らるゝなさけのだんしんべうなりいそぎにうじやうせられよと忝も御じひつを以て御はうしよ下る御ぶんしめんぼくほどこしおのかぢんやにかへりけり扨人〳〵に御しよをおがませ各はいけんせしめかかる御しよにあつかること弓や取てのめんぼくなりたれあつて此なかに二心在べきとは思はね共つよきか上にもゆうちをくだきかはねをせんぢやうのちりになし東國にとゞめほまれをせ上にひゞかせはまつだいさい國ふしのゆいせき共成べしさらはうつ立人人と家々のはた共をしたて〳〵かまくらさしてそ參るゝ五人の物共たいめんし則君へひろうす君も御出ましませばしよ侍くびをさげひし〳〵としこうす四天王の子五人の物共せんごにほこつるきてつはういらかを並べ置たるはひとへにゑんまくせう神ごつめつあはうらせつのなみいたるやと身のけもよだつ斗なり其時小四天王の者共しやく取なほし何れも諸大名はる〳〵是迄かせいせらるゝたんかうをんにゑさせらるゝとの上いて有そいよ〳〵ちうかうをいたされよとしきれいす上にさかつきすはりけれは何れも御しゆたまはりよろこぶことはかきりなし扨五人の人々きつけうのしらいとおどしのよろいをちやくし思い〳〵の道具を持せ御大將頼吉公まつ白成馬に召大の男二人さうのたつなにあいぐして御きつけうの馬しるしをおし立させゆるき出させたまいしをあつはれきりやうの御大將やと人々はつとそかんしける其時頼吉いかにめん〳〵かたきよするかと思へはよせもせす扨はゆふへのかたひしきにきを取れしらんてさうなくよせさるとみへたり何れもぢんのならいしふかみはりのていとしてねこやに陣を取とてみな百せうのあはらやにけつき斗のうかれ物ひやうらうもつゞかすしておち行こと有へししからはこ日のわつらいたるべし二萬よきをせんごさうのひつし

と取まかせはたもとよりむら〳〵とおしよせ一人も殘すかたきのねをたてめん〳〵と二萬よき四方へめくればひとへにくろかねのあみをはつたるごとくなりすてに五人の小四天王かたきのせんこをおつ取まきあいつのたいこかいふき合時のこゑをそ上にけるかたきもこらうのふる兵なりよのまに人をつかはしつちべいをかき上山をからくりやうかいかまへらんくいさかもきをうへ竹たはきびしくかまへたり源二郎みて扨もふてき物はぢんこやにきどをしさかもぎを引はおこかましやかく云はわたなべか一子みたの源二郎竹つなすくねのあく太郎きとう丸うらべの六郎さだみつ一子うすいのあら二郎なりこんとの大將殿はもちろんいやでもおふでもげんざん申さう先五人のしゆつたう同六人衆日頃のよしみに御參成しや扨も父わたなべかさいごにかく有ことをあんにさとつてきせうかゝせ申せしことみなかた〳〵のみのためにあらずやそれをそむいてひきやう物哉いまた一日も過ざるに君に弓を引るゝ天ばつくひすをめぐらさし刀よごしにさのみ切たくもなけれ共まつだいはうばいの見せしめにこんきをはねてためらはん是へ出よとよはゝりける爰に五人のしゆつとうみかたの物にめをおどろかせんと一もんしに打てかゝるさだみつ一子しげさだ十文字おつ取きよくみへたりできしゆつとう此しげさだかくび取てなをかうたいに上たまへとほこさきをきつと上てみせたいせの七郎何しげさだなればとて何程のことか有べきと一もんしたかくかゝるひつはつしわきつほをすはとつらぬきたかくさし上是みたまへ人〳〵日頃はしゆつとうとてじまんさういきられたるかいもなくもくれんの母ごになられたるはととつとわらふて引かへすうまのせうこと〳〵しきくはうげん哉とおもてもふらずかかりけりすへたけ一子に六郎大でをひろげてよる所を心へたりとちやうどうつどつこへさはつとさかいくゞりかんしとつかみ七八けんぐわらりとなげたころ〳〵ともんとりうつてせゝなきの中へうちこまれ水におほれてしにゝけり小六郎みて此ころのできしゆつたうはつちほとけの水あそひとは是なりと是もわらふて引たひらいのかくどうきとう丸となのつてかゝる大すみ源五らうどう二人ちか付なんちらはかれとくむへしそれかしはうしろより打べしと二

人をさきに立て切てかゝるきどう丸長刀取なをしもつてひらいてこれから是からゆんでめてへなぎたをすおふすみかにくる所をいしづきにてこしほねをどんどつくのつけにかへす所をきり〳〵ほねから下さまにさつとのすれはゆんでめてへさんばけたたゝあき平八これをみてほうばいをうたせやすからず思ひ二人ならひ打にきつてかゝるあく太郎てつのばをもつてかゝる二人なのつてみくりのさへもん山のゝきんこいやさおかさ聞たくもなしたがいに命をろんじこのいそかしきしゆらのはげみをあらそひてうつらうつらと聞へきものゝ有物か四天王の習ひはすきまをあらせすはつとさまいたくびをひしくをこんほんとす御大きにみくりのさへもんとなのられたれ共うちぐり殿になられたりとわらふて入ぬ源二郎大將やすもとをうたんと切てかゝる所へらうどうのなるかみをさへてむずとくむやあおのれは何物そやすもとからうとうに山の十郎なるかみとなのる源二郎聞てなるかみとはこと〳〵しや扨はなんぢはこくうをなりひゝかしばんみん共にきひわるかるなるかみのおとしこかいでさらならせてみんと大ちへ三尺打こんたれはぢがみなりにぞ成にけるやすもとかなはじとにぐる所を五人の物がてくるまにのせ君の御めにかけ六人の物を一〳〵にくびを切やすもとかかうべをはねするぞはんしやうとさかへたまふめてたしとも中〳〵かんせぬものこそなかりけれ

寛文元年辛丑閏八月吉日

頼光蜘蛛切

第一

頼光くもきり

さてもそのゝち、それぜんあくの二道をおもんみるに、せいとうのたゞしきけんしやは、日月のめぐみ日にをつてさかんなり、ひどうにしてわがまゝをふるまふねいしやは、家をほろぼしめいをうしのふこともくぜんたり、たゞまもるべきはじんぎの二つにきわまれり、こゝにせいわ天わうより四代のこうゐん、たゞのまん中のちやくなん、せつつのかみ源のらいくわうとて上をろしこゝんまれ成めいしやう有、然るにらいくわうぶんのもつては國どをおさめ、ぶを以は四かい、たな心にしずめことにはたんしう、大ゐ山のしゆてんどうじを平け、しかのみならずすどにいたつて、ちやうてきをついばつし、ぶかうは一天にひろまり、せいゐ將ぐんのぶしやうにそなわり、都にしきの御所にきよぢう有、ぶけのせいばつ取をこない給へば、おそれぬおくり物こそなかりけれ、御子一人おはします、御名をはせいわう丸と申奉り、御さいちにまし〳〵きりやうゆゝしきわか君なり、頃はちやうわ五年正月廿日の事成に、御吉例にまかせ、御ぐそくの御しうぎとて、御家のしつけん藤原の中みつ扱四天王の人〳〵、其外とさまの諸侍何れもしゆつし仕り御いわいのぎしき事終りて後、らいくわうの御でうにはいかにわたなべ、せい王丸今年十五歳になれば、げんぶくさせんと思ふなり、殊によきついでなり方々か子共、五人のわか物をもけんふくさせ、せいわうかかしんにせんやういせよとの御でうなり、つな承り扱々みやうがなき御でう哉、忝も君の御ゐぼし子になされ、あまつさへわか君のかしんに仰付られん事、せう〳〵せゝの御をん此事に候と、泪をながしいたりけり、大將御きげんあさからず、かみ一人のぎによつて下ばんみんに至迄、誠にゆゝしきめいくんやと、うら山ざるは三重なかりけり扱其後、四天王の人々はわか物共を、さも花やかに引つくろいつれて御前へさんにうす、藤原の中みつ君に、ゐぼしきせ奉りしきだいして畏まる、時に大將御しゆつましまして、上だんになをらせたまい、扱せい王丸をさまの

かみ、よりなか公と付たまひ、げんけのぢうほうらんでんくさりの御きせなが、八まんぐうよりたまはつたるたつがしらのほしかぶと、頼仲にゆづられ我物のぐをちやくし、とゝのてうてきをたいらげ、ぶゆふ四かいにはなはだし、なんじも劣らずみやうがあれと、御さかづきを下されける頼仲つゝしんでちやうだい有よろこびたまふ御きしよくげにらい光の御子やとをの〳〵かんしていたりけり、頼光なのめに思召、扨はうしやうの一子けん王丸を、ぎどうくわんしやほうめい、つながちやくし竹王丸を、三田の源次郎竹つな、きんとき一子あく太郎を、さかたのきん吉さだみつかちやくし、あら市をばうすいのあら次郎さだかげ、すへたけが子ほうらべの六郎すへしげと、めされきやうよりしてはより仲が、しんかのこうを許すなり、ち、共に劣らずちうかうをつくすべしと、はなやかにおどしたる御よろひに、かぶとをそへ次第次第に御さかづきを下されける、渡邊御しやくに罷立、りうはくりんがながれのすへ、くむさかづきもきよく水の、めぐれやめぐれ小車のうたいぶしつわ物のましはり、たのみ有中のしゆしんぞをもしろや、上から下に至までをの〳〵きやうにじやうしける、君の恵みはちよばんせい、國も豊にとみさかへさかふるみよこそ三重めでたけれ、既に春すき夏來りみな月（本ノマヽ）なかばの事成に、らい光ぎやへいをわづらひたまひ、てんやくいりやうをつくせ共、をちざりけりすでに卅よ日に及たり、四天王の物共ちうやかんびやう仕る、少げんにみへさせたまひしかば、四天王をめされ思ふしさいの有、先方〳〵もこよひはしゆく所にかへり、きうそくせよとのたまへば、いづれもかしこまつて御心にさはりあしかりなんと、御つぎへたつてをの〳〵きうそくしたりけり、かくて頼光只一人すこ〳〵としておはします、すでに其よもやはん斗の事成に、ともしびのかげよりも其たけ七尺あまりの大のほうし、する〳〵とあゆみよりいかにらいくわう、心はなにと候ぞといふよりはやく、ちすしのなはをかけたりけり、頼光御らんじさあしつたりと、まくらに有しひざ丸をするりとぬき、とびちがへちやうど切た、ひるむ所をひつくみつゝけさまにさし通し、ゑたりやをふとのゝしるこゑに、かたちはきへてうせてんけり、四天王聞付はつと驚き、はせ來りこは

何事やらんと申上れば、頼光聞召かやう〳〵とのたまへば、誠にあたりにちながれたりいづく迄かやるべきぞと、四天王の物共たいまつにひを付、ちすじをしたひて三重おふてゆく、程なくほつつき（本ノマヽ）みてあれば、くらま山のふもとに大き成つか有、つかの内へち流れければ渡邊みて、ゑゝ何物ぞと思ひしに、此内にすむ程のやつなれば、何程の事の有べきぞつかみひしげといふまゝに、四天王の物共たちかゝり、大りきにまかせつかを崩し、岩を引のけみてあれば、つかの内よりけし（本ノマヽ）たる姿あらわれて、ちすじのなわをなげかくれば、四天王みてやあすいさんなり、さやうのてわざはつねの物にまなふでみせよ、きじんをもしたがへし四天王はくわぬぞと、まん中に取こめさんさんに切たりけり、さしもたけきへんげの物四天王に切立られ、ひるむ所をつふせ〳〵ないたりけり、ついにへんげを打したがへ、たいまつにひをたてよく〳〵みれば、其たけ七尺のつちぐもの、かしらにつのあつて、りやうがんは日月の如くかゝやき、さもすさましきけしやうなり渡邊みて、ゑゝをのれ此ころ君をなやましたる、天ばつはやくもあたつて有物かなと、てつぼうつらぬき、御所をさしてかへりける四天王かはたらき、あつはれ天まやくじんやと、みなかんせぬものこそなかりけれ

第二

頼光ちよくせんをうけいづの國へ下り給ふ

四天王の人〳〵はへんげをてやすく打取、いそぎ御所に立歸り、一々次第を申上る頼光御らんて、やすからさる事共かな、か程の物におそわれけるこそむねんなれ、方々さつそくかけつけ、したがへるこそしんびやうなれ、いそぎ大ぢにさらすべしとく〳〵との御でう也、かしこまり候とてつぼうにつらぬき、侍共に申付六條川原へ三重さらしける、是は扨置かくて大りには、九月九日きくすいの御ゆふらん有べしとて、わかきくげてんじやう人、色よき花をたをり、既に御ゆふぞはしまりける、かゝりける所にいづの國のもくだい、北條の平四郎ときたゝ、はや馬にてはせ上りつゝしんで申上る、いづの國大嶋にきじんすんで、ゑんしうをかぎりにたう國の人みんを、つかみ行事をびたゝしく、みな人なげきかなしむ事、國どのさ

わぎ此事に候と、大いきついてそうもんす、みかどをどろかせたまひ、きん中ひつそとしたりけり、時に中なごんすゝみ出、ばつざのせんぎそこつの至に候へ共、きられいにまかせられ、頼光に仰付られ候へかしと、そうもん有君ゑいふんあつて、さあらばめせとやかておくりちよくしを立らるゝ、らいくわうちよくにまかせ、さんだい有内よりのせんじには、いづの大しまにきじんがすみ、とう國のなやみと成、いそぎはせ下りたいしせよとのせんしなり、頼光ちよくめいかうむり、誠にたんばの國大ゑ山の、しゆ天どうしたいじ仕て後、爰かしこにへんけ出來仕り候事、是一ゑに大ゑ山のきじんのしよいにて候べし、いづくかわうぢならねば、いかでかあまし申べきと、いそき御前を罷立やかたをさしてそ三重かへられける、やかたになれば御子頼仲公、御しやてい頼のぶ公をはしめ、家の子らうとう召れ、今とそれかしきじん大じのせんじをかうむり、いつの國へ下る也かゝるしせつに、必てうてきのげきしんおこる物なり、かまいてしよしにゆだんなく君をしゆごいたされよ、扨きられいなれば、四天王斗めしつれんと思ふが去ながら、かのしまはふうははげしきかいろなれば、つわ物せう〳〵めしづれんそれ〳〵中みつ、すくれとの御てう也かしこまり候とて、しゆのながいたに八〳〵のめうじをこそはしるしけれ、先一ばんに四天王はうしやうをはしめ、ひたの平わう山田もりもと、あらきおかざきみこし中もりいりへの冠じや、ぬまのけんしかんはら藤太、しば田の十郎いきの八郎ちかなを、ゑびなのひやうへ介ざね、をきつのぎやうぶたゝよし、此八人をさきとしてくつきやうのつわ物、五十よきぞしるしける、時に五八の子四天王がすゝみ出、なにと我々はめしぐなきか中みつきいて、さればかやうの時けきしんおこる物なり、方〳〵やそれがしはあとにのこつて、きんりをよくしゆごいたすべしとぞ申ける、其時金吉すゝみ出こは中みつどのゝ、おゝせ共おほへぬ物かな、わか君のぶゆふちゝ共がゆうりき、天下にしらぬ物のあらざれば、てうてきとならぬ物、今此みよにはよもあらじ、しかればいつかちくさき事にあい、ぶゆふを人にしられんや、我〳〵ちやく年の身として、君のしつけんのかうむりむなしく月日をおくりなは、しよ人かろく思ひなし、四天王が子共

とはいわれまし、かやうの事出來するこそさいわいなれ、君こそなにとのたまふ共御へんは家のしつけんなれば御前よく申なし御とも仕べきやうに御取なしこそ道成べきに、君たにとかうのでういもなきに、御へんちうにての御はからい、いらざる中みつの仰やと、きばかみふんじかつてぞいたりけり、中みつ聞て尤金吉の申ぶん、しんびやうなり去ながらせん年、しゆてんどうじたいじの御時は、御家ひろしと申せ共四天王の人〳〵、い上六人にてたいししたまふ、此たひは君おほしめすしさいあつて、かやうによかたのつわ物をもせう〳〵めしくしたまふなり、然ばそれがしも身ふしやうながら、しんかのかうをゆるされ候へば、せひ御とも仕べき身にて候へ共、せん年もさるしさいの候へば、あとにとゞまり申なり此中みつが、ひとう成事は申まいしとかく方々は、とゝまつて君をしゆごいたされよと、さもやわらかにぞ申ける、時にほうめいさだかけすへ春申けるは、なにと中みつとのせん年も、さるしさい有しゆへ此度も、御ともなきとのたまふはしてせん年、いか成事あつて御へんも御ともなく、又我〳〵迄とめたまふは何事にて候ぞ、我〳〵つね〳〵そんせしは、あはれことのいてよかし御馬のさきにかけ出、ちゝ共かゑさせし太刀のかねをも心み、むしやぶりをも御めにかけ申さんとをもひし所に、さへぎつてとゞめたまふ、とかくせんれいのやうす承其ほうの仰のとをりにしたがい申べし、又れいなき事にむたいに、とめたまはゞ我〳〵しやく年とはいゝながら、あし二本にても二つりやうがんひらき、みゝを持候へば、此大ぢの下をくゞり、くもをかけつてもせひ御とも仕らんと、口をそろへ申ける中みつ聞て、つゝとよりさればといわんとする所に竹つなすゝみ出あゝしばらく〳〵、中みつとの御まへにて有は、いかにわか物共中みつのせんれいと、のたまふ事こそ尤なれせん年、まん中かうほんまの入道ついはつのため、さがみの國へげかうなされしきざみ、ゆらのらいしんぎやくしんのくわたて、君をなやめ奉りたると、ない〳〵承り及たり御供申も、とまるもみな是君のためなれば、とかく中みつとのにまかせ方〳〵は、とゝまつて帝都をしゆごいたすべきが、かんやう也としづめける、金吉聞てをゝ竹つなのふんへつ、日本一御とも申せは思ひよらぬ

なんぎにうけてもいらざる物、とゝまればべちにくろうもせす、君の御きしよくには入中(本ノマヽ)みつどのにも、たんのふさせ跡先のとくあつて、なんぼうましかなあつはれさいかく人かなと、あさわらふていたりけり、ちゝの金時こらへかねつゝとよつて金吉をはつたとにらみ、やあをのれさいせんよりも、是にて承れば御まへ共はゞからず、今のことばは何事そ、いまたきのふけふのせかれめが、年よりたる中みつにことばをすごし、又竹つなの申されてう、一つとしてかけたる事なきに、をのれがいらぬちへ有がほに、人の(本ノマヽ)事ばをあざむく事こそすいさんなれ、罷たてとぞいかりける、金吉はつとこたへてつべきをもくだくべき、しゝのはがみをひるがへし、ちゝのことばにめんしつゝしほ〳〵としていたりける、れいぎの程こそやさしけれ、君をはしめ奉り一ざの人々さしもあらき金吉が、れいぎの程こそしゆせうやと、みな〳〵かんしたまひけるらいくはうなのめに思召、わか物共がしんてい一しほもつてしうちやくせり、ちゝ共におとるましき物共かな、げんしのはんじやうなにうたかひの有べき、いかになんぢら行もとまるももつては同ちうせつ也、たゝめん〳〵はていとをしゆごいたすべしとのたまへば、はつとこたへつゝしんでいたりけり、其時らいくわう御さかづきを取上たまへば、中みつおしやくに罷立次第〳〵にもりながす、いつれも引うけ〳〵のふたりけり、せんしうらくはたみをなで地まんざいらくには命をのぶ、あいをいの松風さつ〳〵のこゑぞたのしむと、御かといでをいわいつゝ、扨人〳〵を引ぐしいづの國へといそかれける、かのらいくはうの御有様あつはれ天下ぶそうのめい将やと、みなかんせぬ物こそなかりけれ

第三

きよつなむほん附子四天王ゆうりき

かくて其後源のらいくわうは、四天王をはしめ一きとうせんのつわ物、五十よきさも花やかに出たつて、いづの國しもたのうらより、大せん三ぞう(本ノマヽ)からくみ、大しまさしてぞわたらるゝ、ことになみ風しづかにて、君をはじめ奉り一せんちうの人々、よろこひいさむ所にはかにあくふうふき來り、なみをびたゝしくあらたつて、舟共のもやいのつな一どにばつとき

れ、みぢんのごとくくだけたり、され共らい光の御舟は佛神しゆごやまし〳〵けん、なみ風にもまれたゞよいける、しきりに大風ふき來り三重行へもしらずふきながす、みの行衞こそあはれなれ、是は扨置爰に又くわんむ天王に、五代のかうゐんはりまのかみ、平のきよひろがしやてい、さこんのだいじやうきよつなとて、じんぎをもわきまへぬぼうじやくぶじんのゑせ物有、びぜんはりま兩國の大將として、ばんしうむろ山にざい京す、したがふ所のらうどうには、ひらほしの一てき坊ほしのらん正坊、くろぼしのたんかいくまぼし、こつせきをにほしのでんかい坊、あらこぼしのせきざん坊みつぼしのうん三とて、大力の法師むしやさるによつて、七ようのほしをかた取きよつなが七ようむしやとは是也、時にきよつなかれらを近付、聞ば源の頼光はきじんたいじのせんしをうけ、四天王もろ共にいづの國へ下ると聞、是ひとへにへいけのうんをひらかんずいそう也、かれはだいだい家のかたき然共、頼光は天下のぶ將我はわづか兩國の大將なれば、ぶせいたるによつてせひなくいかりをおさへ、今までもすぎぬ此たびのるす、天のあたへ成べしらいくわう四天王なきうへは、手にたつ物はよもあらじいそき都へせめ上り、げんし方のやつばら一々にけちらし、みかどをいけ取奉り諸國へくわいぶんまはしなば、我も〳〵としたがはんしからば頼光、とう國よりうつてのほらんひつぢやう也、其時うぢせたを切ておとし、あはた口をあふてとし、すまんのぐんひやうさしつかはし、ふせきたゝかふ物ならば、なにといさむ四天王也共、いかでかもつてたまるべきやす〳〵と打取、天下のあるしとならん事なにうたがいの有べきぞ、方〳〵いかにと申ける其時七ようむしや、すゝみいで扨もいさぎよき御でうかな、けんじ方のやつばらが、はんくわいがゆふりきをはけましこくうむりやうにはたらく共、何程の事は候べききんくわのあさ日にたりいきをもたてさせまじいそぎ打立給へや、はやとく〳〵とぞすゝめける、きよつな大きによろこびさあらば打立て方々と、ちう國にふれをなしつがふ其せい二萬よき三重都をさしてぞ上りける、此事かくれあらされば、都にしきの御所には中みつをはしめ、子四天王其外侍立をめされ、ないげひやうでう取々也、中みつ申けるやう

いかに金吉、かやうの事もし出來いたすべきかと、さへきつて方〳〵をとめ候か何と申みつがぐあんもちつとやうに立候と申せば、金吉につことわらい誠に中みつ殿は、物になれたる人かな今更思ひあたつて候、いそいでいくさのやういしたまへと、いさみすゝんで申ける竹つな申やうなにとかたきを是へ近付ては、京中のさわぎと成べき間、道まではせむかつて然へきと申せば、中みつ聞て尤よきはからいとかく道迄出むかい、すゝしく軍いたすべしとていとの御るすには、頼のぶ公とさだめよりなか公の御ともし、つかふ其せい一萬よき 三重もみにもふでぞいそぎける、こまをはやめてうつ程に、つの國せがはのしゆくにて兩ぢんはたと行あふたり、たかいにそれとみるよりも三重ときのこゑをそ上にける、時のこゑもしづまれば、かたきの大將はぢんにこまかけ出し、只今是へ出たる大將はくわんむ天王五代のかうゑん、さこんの大じやうきよつな也、らいくわうの一子頼仲に、げんざんやつとぞよばわつたり、中みつ聞てなにきよつなにて候か、御へんいらさるあくしんをおこし、かまいてめいと迄けんけをうらみたまふな、あれわか物共一人もあますな、うてやかゝれとげぢをなす、我も〳〵ときつさきをならべかけ合て 三重いくさは花をぞちらしける今ははや兩はう共にさつとひいて、しばらくいきをぞつぎにける、かたきの方よりくだんの七ようむしや、一ようにいで立大をん上さだめてをとにも聞たまはんきよつなかうけん、七ようむしやとは我〳〵也、をとに聞へし子四天王はおわせぬか、我〳〵かたちさきをうけてみよとよばわつた、時に五人の物共かけ出、七ようむしやのことはみみにかゝつておもしろし、のそみにまかせいでゝ候、たかいに一きつゝのゑらみ打かまいてびろうをふるまひたまふなと、さかたの金吉つゝといで、一てきとむずとくみさうのうでくびをとつて、子四天王がゆふりき心みたまへと、ちうにさし上はるかのたにへなげける、らんせうすかさずむずとくむ、金吉につことわらいやさしの御ほうのふるまいかな、ほうばいのよしみにしでの山ぢをともない行と、大こしにかけはたとなげのつかゝり、くびふゝつとねじ切、みかたのぢんへぞ引にける、さだかけそばに有ける大せきをつ取、さあらぬていにてひかへたり、時にうん三

はしりかゝつてちやうとうつ、さだかげすさつてやつといふて、打ればらつくはとなつてうせにけり、でんがい是をみて一ぢやうばかりの、てつのぼうをひつさげ、かけいつるすへしげ心へたりとわたりあふ、でんかいぼうをおつ取のべ、おがみうちにちようとうつ、ひつはづしてぼうのはしをむづと取、あつはれきりやうのほうしかな、御ほうににやわぬてつぼう、それかしあつかり申さんと、ゑいやつとひき取すかさずちようとうちければ、かうべみぢんにくだけける、せきざんはしりよりける所を、ほうめいすかさずむずとくむ、せきざん大ぢからと申せ共、ほうめいよろひのうはをびかいつかみ、だいぢへどうと打付るだんかいてつせきこらへかね、大こゑ上て切てかゝる竹つなみて、きやつはそれかしうけ取たりと、二人の物にわたりあいうけつかへしつたゝかいしが、さしもにかう成竹つな大力に切立られ、ひたいにあせながしける、され共かうなれば二人のかたき一方へ切たて、ふんごうてすそをなぐたんかいもろひさ打をとされたぢ〳〵とする所をはらい切に、ゆんでのそわへ切ふせてつせきとひつくみ、やあをのれいそぎめいとにおもむき、八まんぢごくのあるじとなれと、取ておさへくひふつつとねぢ切、あらしやうしの御ばうたちのなれのはてやとにつことわらふてたつたりけり、きよつなかなはじとにげゆくを、五八のものともばつつめ、たかてこてにいましめて、らくやうさしてかいぢんある、子四天わうがはたらき、をやにおとらぬまれ物やと、みなかんせぬ物こそなかりけれ

第四

頼仲中山さんけい附じゆんれい物語

そのゝちみなもとのより仲公、てうてきとならんきよつなをいけ取、都へ歸らせ給ひよりのぶの御めにかけたまへば、よりのぶなのめに思召いそぎ（おくたり）いりへあがらるゝ、大りになれば一〳〵次第そうもん有、みかどゑいらんあつて頼仲をはしめ、子四天王の物共いまだじやく年也といへ共、しんびやうに仕つたる物かな、扨きよつなをいそぎつみにふせ、しんきんのやすめ奉れとのせんじ也、かしこまつて御前を罷立、扨きよつながかうべをはね、六條川原に三重

さらしける是は扨置、いたはしや頼光は、おもはぬあく風にふきはなされ、わつかにのこる物とてはしうしう六人、風にまかせて行程に有しぎにも付給ふ、人人よろこび舟より上りみ給ふに、いわをがゝとそびへさも物すごきはまばたに、色くろきやせおの子つりをたれていたりけり、らいくわうかれらに近付、こゝはいづくの國ぞととひたまへはしま人聞ていづのしほひがしまと申所にて候、方〳〵はかせにはなされ來とみへたり、そうじて此しまはごゝくなけれは、た國より來る物命にもたんやうはなし、舟あらばじきもつきぬ其内にいそぎ本國へかへりたまへと申ける、らいくわう聞召さればこそとよ、舟をそんじしよくもつつきはて、本國へかへるべきたよりなし、たゝ方〳〵のはごくみをうけ、天のじゆんくわんをまつべし、ばんしはたのむと仰ける、しま人承りげにいたはしき御事かな、方〳〵ばかりとおぼすなよ、むかしもためし有田村將ぐんとしひとゝやらんも、風にはなされ此しまへなかれ來、かなしみのあまりにせんじゆくわんをんをみづから作り一しんふらんに、きこくの事をいのりたまふ、誠に大ひの御ちかいに程なく國へかへりたまふさればとしひとよろこびのあまりに、弓とやをくわんをんのしんもつにこめられたり、それよりして御しまのうしのしんとあふき申とかたりける、らいくわう聞召扨は此しまのうち神はとしひとのこんりうかや、いざやさんけい仕き國の事をいのらんと、四天王もろともにおくしん前さしてぞ參らるゝ、おまへになれば心しづかにきせい有、其よはおまへにこもらるゝ、頃はきさらぎ十五日月はくもひにすみ上り、あきのそらよりさやか也、らいくわうかいしやうはるかに御らんすれば、なみびやう〳〵としてきわもなく、心ほそさはかぎりなし、かゝるをりふしきがんのこゑかすかにこそはをとつれける、らいくわう聞たまひあれきいたるか四天王くもひをかへるかりだにも、をのがしやうじよを心ざし、さもうれしげにこゑたてゝ、かへる心のうら山しやわれはいつしかふるさとにかへりうきをかたりてなぐさまん、かゝるうき身のありさまを、ふるさとにありしつまや子は、ゆめにもしらずあるべきが、あらたゝさためなき我かみやと、心ぼそさはかきりなし、あはれ神のりしやうにて、今一と頼仲に

あふとだに思ひなば、かゝる思ひは、よもあらじあらうらめしのうき身やと、しばしなみだをながさるゝ、あまりのことの物うさに一れんのしをつらねたまひける、こよひゆふぶたりはしやうの月一せいのりやうれき、ちやうでんにもどるとくちずさみたまひ、われぢやくねんのむかしより、君をうやまひたみをなで、あやまるとがはあらざるに、かゝるなんぎのみとなりて下ゝろとりだにかよわぬはなれしまに、いつをかぎりとさだめなく、むなしく月日をおくらんこと、こはそもなにのむくひぞと、しばしなみだにむせばるゝ、おにをあざむくものとも、みな〳〵なみだをなかしける、されどもかなはぬ事なれば、さていとなみのたよりなければ、いにしへの花のたもとをひきかへ、御身をかいへんのおにとなし、しう〳〵六人つりをたれ、ぎよるいをとつてしよくぢとして、つゆの命をおくらるゝ、しよじのあはれと三重きこへける、是はさてをき都にましますらいくわうの、みだいところ此事ゆめにもしろしめされず、いかによりなかきゝたまへ、さてもつまのらいくわうは、いつの國へ下らせたまひ、ひかずもはるかに重なれとも、風のたよりもあらされば、心ぐるしきあまりにやふつじんにきせいをかけ申せし也、ことに中山のくわんをんな、つまの御うち寺なれば、いさやさんけい申つつ、御行すへをいのらんと、おもふはいかにとのたまへば、より仲聞召仰の如くけんせごしやうのためなれば、いそぎさんけいなさるべし、おりふし今はやまやまのはなもさかりに候へば、御心もはらしおはしませ、それがしも御とも仕らんと、はゝうへをともない子四天王を御ともにて、中山さしてぞ三重參らる、おまへになればわにぐちやうと打ならし、おもふことのはねんじゆして、さてしゆくぼうに入たまへは、じうじはなのめによろこび、めつらしの御さんげいやと、やがてをくにせうし申さんかいのちんぶつに、こくどのくはしをとゝのへ、げにはるの一日はせんきんにもかへしとは、こじんもつたへをかれたりあらおもしろのながめやと、はなにこゝろをよせたまひ、きやうにせうじしばしながめておはしますかゝる所に金吉さだかげ、とあるこかげによもをながめていたりしが、こゝにとう國がたのじゆんれいとうちみへて、二人つれだちものがたりして通り

しが一人か申けるはあれに、まくうたせ御ゆふらん
あるは、らいくわうのみだいきんだちにてあるとや、
いたわしくもらいくわうはいづの國、大しまにてふ
うゝにあいむなしくならせたまひしが、誠にそのな
もたかき大將の、くちはてたまふいたはしや、なむあ
みだふつと、とふらいてこそとをりける、金吉さだか
げはつとをとろき、ちかふよつてなにとらいくわう
は、ふねをなにとあそはしたぞ、さん候いづの國しも
だのうらより、御舟にめされしか、にはかにあくふう
ふききたりみなこと〳〵くくつかへしむなしくなら
せたまひ候、二人の物ともきもをけし、はつとをとろ
きよくもしらせたる物かなと、いそぎ御せんにまか
りいでいかにみだい、わかぎみさまわがきみや、ちゝ
ともはかやう〳〵のしだいにて、むなしくならせた
まふよし、たゞいまうけたまわつて候と、さしうつむ
いてなみだを、はら〳〵とながしける人々ゆめのこ
こちにて、これは〳〵とばかりにてしばしなみだを
ながさるゝ、おつるなみだのひまよりも、くどきごと
こそあはれなれ、こはそも夢かあさましや、風のそよ
とふくをだにも、はや歸らせたまふかと心をつくし
思ひしに、しのみちこそはおゝかりし、こきやうを
さつてあづまぢの、さもすさましきかいていに、御み
をしづめたまふ事、是はなにたるむくいぞと、たをれ
ふしてぞなきたまふ、あゝさてあさましやさぞや御
さいごの御時は、より仲やみつからをさこそこひし
くおほすらん、御かといでのその日より君あんをん
のそのために、まいにちくわんをんきやうをどく
じゆせしが、御さいごをしらずして、けさまでいのり
申せしが、かみならぬみのはかなき事よ、さぞや大ひ
くわんせをんおかしくおぼし候はん、のふわがつま
かへさせたまへや、みほとけとりうていこがれなき
たまふ、げに御ことはりとぞきこへける、ときにぢう
じはたち出さても〳〵、おぼしめしよりなき事いで
き、御なげきのみちげに御どをり也、ことはりやとつ
れてなみだをながしける、おつるなみだをおさへ、
もはやかなはぬ御事なれば、おほし召きりたまへ、そ
うしていきとせいけるもの（本ノマヽ）、たれかめつせぬ物の候
べき、さんごくのきやうしゆりやうせんのしやかだ
にも、三みやうの月のひかりを、しやくりんのくもに
かたし、たいしやく十ぜんの花のかたちも、くわんぎ

そのふの霜ときへをわんぬ、いわんや人間にをいてをや、しがういそかるゝ、のかるべきあるいはやもふのくるしみうけ、又はかいくにをばれてしするも、みな是せんせのしくがうなれば、御なげきをやめられ、御きやうやうをねんごろに御とぶらい候へと、さまさまにけうけありければ頼仲聞召、誠にありがたきけうけかな、去ながらまづあんしてもみたまへや、御いでなされしより此方は、へんしも忘るゝにまもなくせめて御とも　なみのあわと成ならば、かゝる思ひはよもあらじ、あらうらめしの我身やと、きへ入やうになきたまふさすがにたけきわか物共、しゆくんのわかれに、ちゝが事をおもひやり、あまるなみだの色ふかく、づゝむけしきもあらわれて、聲をたてそなくばかり、されども竹つなはすこしもなげくけしきもなく、あららか成こゑをあげ、ゑゝふかくなるかた〳〵がふせいかな、心を鎮めてあんじてみよさすが天下の大しやうの、かいしやうにて御たかいあらんに、そのかくれあるべきや、ことにとうごくはのこらずきみの御下人なれば、ごんじやうせぬ事よもあらじ、それこじんのいわく一人きよをつたふは、十人じつをつとふといへり、なんぞじゆんれいしきのゆふことを、しやうにいたしとりみだしたるみくるしや、さやうなるこゝろざしにては、かたじけなくも、めいくんのしんかとはいわれまし、とかく都へかへりうむのじつをきゝとゞけ、そのゝちあんひをさだむべし、はやとく〳〵といさめ申、みな〳〵御とも仕り都をさしてぞ上りける、かのたけつながしんてい、いこくはしらずほんちやうに、たぐいまれなるゆうしやと、みなかんせぬものこそなかりけれ

第五

頼光きじんをうち都へ上らくの事

いたわしやらいくわうは、物うきしまの御住ひ、あはれおくなりける次第也、あまりの事のかなしさに、百本のそとばを作り、思ひの色をかきつけて、あはれしんりよの御ちかいに、いつさがみのらうとうの、てにわたしてたべやなむ八まんときせいあり、かいしやうはるかにながさるゝ、こゝろのうちこそ　三重あわれなれ、まことにぶつじんさんばうも、あはれとやおぼしけんさがみの國、大いそのうらへうちよせた

り、かゝりける所にみうらの平太夫ためかた、をりふしかいへんのとをりしが、かのそとばを見付やあわか物とも、いそばたにそとばのあるこそふしぎなれ、それこなたへとゝらせみれば、一しゆのうたをぞかきてあり、たれかしるはるかのをきになかれきて、しほひかしまてつきをみる、（本ノマヽ）ゑいじみなもとのらいくわうとかゝれたり、みうら大きにおとろきさてはらいくわう、あくふうにはなされしほひがしまにましますか、御有所をしらせんため、そとばをながさせたまふかや、さて〳〵御いたわしき事ともかな、いそぎ御むかいにまいらんと、こまにしらあわかませつゝ、いづのくにへぞ 三重いそぎけるいそぐにほどなくつきしかば、しもだのうらよりふねにめし、しほひがしまのあんないしやをめしぐして、かのしまへいそかれけるしまにもなれば、やがてふねよりあがり、このへんにみなもとのらいくわうはましまさぬか、みうらの平太夫御むかいにまいりたりと、大をんじやうにてよばわれば、人々ゆめのこゝちにてするするとはしりより、是は〳〵とばかりにてよろこびなみだはせきあへず、是を物にたとふれば、わうじつがやまよりいで七せのまごにあいたるも、これにはいかでまさるべき、らいくわうなみだのひまよりも、われこのしまにあることを、なにとしてぞんじたるとのたまへば、ためかたうけたまはりさん候、すこしようの事ありて、大いそのかいへんのとをり候へば、そとばのなみにうかみしを、とりあげみたてまつれば、まさしくきみの御しゆせきとみ申、をどろき入御むかいにまいり候と申あぐれは、らいくわうきこしめされ扨は、是よりながせしそとば御へんがてにわたりけるよな、これひとへにぶつじんのりしやうなり、このうへはへんしもはやく大しまへわたらん、いそぎしんぜんにまいり御いとまごひ申さんとて、人人を御ともにて御ほうぜんにまいり、まことにふしぎのたよりをうけ、二たひきこくいたす事ひとへに大ひの御じひたりありかたやと、こゝろしづかにらいはいしさてしま人をめされいにしへ、たむらとしひとのこめられし、ゆみやを申おろしゑさせよくわんをんの御くうでんに、いつのこうをたてまつると、やがて御はんをくたされける、しま人よろこびとしひとのこめられし、しげどうの大ゆみをらいくわう

にたてまつる、らいくわうなのめならずにおほしめし、しんぜんにむかいちやうだいあり、まことにふしきのゑんにより、かゝるきたいのでうほうのいまらいくわうがてにわたる事、是くわんをんの御をんたりそもこの弓と申せしは、とし八せんじをかうむりたまひ、せいしうすゞか山のたてゑぼしといふ、八めんきじんをいとめたまひしゆみぞかし、きつきやうめでたきゆみなれば、きじんたいじせん事は、なにうたかひのあるべきと、しま八にいとまこひ八々をともない、よろこびいさんでおふねにめし、大しまさしてぞ 三重わたらるゝしまにもなれば、ふねよりもあがらせたまひ、めん〳〵ものゝぐせられける、まづらいくわたのしやうぞくには、あかじのにしきのひたたれにひをどしのよろひに、おなじけの五まひかふとにくわがたうたせ、いくびにめしこがねづくりの御はかせ、さてくわんをんのほうでんより申おろしたまひける、しげどうの大弓にとがりや一てたばさんで、さきにすゝんでいでたまふのこる五八の八々も、思ひ〳〵のしやうそくして、いさみいさんでいてられける、ときにらいくわうためかたをめされ、きつきやうなれば六八してうつべきなり、御へんはふねにとゞまるべしとの御でうなり、みうらかしこまりてぜひ御ともとぞんずれども、御きつきやうと候へば、おうけを申みうらはふねにのこりける、さて六八の八々しまあがりかなたこなたとみたまふに、いぬいにあたつてまつ山あり、わけ入つてみる所に、さもすさまじきいわあな有、あたりにすてしはつこつは、すこぶる山の如くなり八々こゝぞとうちうなづき、大をんあげいかにきじんたしかにきけ、なんじおうぢにすみながらにんみんなやますてんばつ、いかでのがるべしわれ〳〵たいじにきたりたり、ほんしやうをあらわせと、こゑ〳〵にのゝしつたり時に内よりも、大せきこぼくをなけいだすとみへしが、そらかきくもり大あめふり、いなづましきりにひかりわたつて、はた〳〵がみなり 三重なりわたり、やまもくづるゝばかりなり、されとも八〳〵ちつともさわがず、てにてをとりくみ、四方にまなこをくばつていたる所に、いわやのうちより四めんくわつきがけんぞく共、てつぼうふつてかけいづる 三重こゝをさいごとたゝかいける、五八のものどもわたり合、ひばなを

ちらしてたゝかいける、すゝみ出しあつき共、みなこと〳〵くうつたりけり、時にこくうしきりにらいでんして四めいわくつきはこくうんにうちのり、くわゑんをふく事すさまじかりける　三重したいなり、本ノマヽ、源此よし御らんじて、なむ八まんとくわんわんしよつひきひやうといたまへば、てこたへしてはつしとたつひかりわたつて、いぬいにどうどをつる所を、四天王すかさずさしかゝつてさん〳〵にきつたりけり、きじんくびうちをとせば、こくうんはれてのとけきそらと也にけり、かゝる所にためかたぐんひやう共を引ぐし、御むかいに参りたり頼光なのめに思召、きじんのくびを取持せ、都をさしてぞ　三重上られける、都になればすぐに大りへさんだい有、きじんのくびをさゝげ、大しまのてい其上しほひが島の事迄も、みなこと〳〵くそうもん有、みかどゑいぶんあつてさやう成なんきをうけ、さぞや物うく思ふらん今には本ノマヽ、しめん事ながら、此度のはたらき一ゑにぎよかんかぎりなし、其ちうかうに本領にあいそへ、みのあふみ両ごくをゑさすると、あんどの御りんし下されはうせうを、はりまのかみになされ、わたなべのつなはむさしのかみ、きん時は三川のかみさだみつはとう〳〵みのかみ、すへ竹はするかのかみになされ、かずの御所領下されける、扨みうらの平太夫をくわん八しうのむしや所に仰付られ、おの〳〵御前の罷立、頼光御所へ入らせたまひ、人々にたいめん有御よろこびはかぎりなし、せんしうばんせいめでたき共中々、申はかりはなかりけれ

寛文二年壬寅正月吉日

山本九兵衛板

子四天王北國合戰

第一

それかんのかうそは、きほわがしよくろうをつたへて、はくじやのれいをきり、てんのなをいだすことをゑたり、しんのしくわうは、けいがゝひじゆつとへ、ゑんしのめいをたつて、せいめいのうんの、いだす事をまつとうす、是みなくにをおさむる、ひじゆつくらいをたもつもといなり、もつともしやうくわんせらるへきは、とうけんのたぐいたり、其頃天下のぶしやうは、せいわてんわう代六のわうじ、さだずみしんわうの御子、六そんわうつねもとの其ちやくし、たゞのまん中のちやくなん、みなもとのらいくわうとぞ」上ふ申ける、然るにらいくわう、御ちゝまん中公を、はじめてげんじのうぢをたまはりしより、天下をしゆごしたまひける、扨御しやていかわちのかみよりのぶ公は、ほつこくのおさへとして、ゑちごの國にきよじう有、しかるにらいくわう、すどのげきしん、ついばつし、じんぎをまもり、四かいをたな心におさめ、其身の御いせいさうもくをも、なびきかたをおくならぶる物もなし、有時大將御子、賴仲公扨四天王の人人、其外侍をめされ、我まん中公の跡をつぎ、天下のぶ將かうむり、かみをうやまい、にんみんのあはれむといへ共、ともすれば、けきしんに、さゝへられ、あやうきなんに及事、すかとなり殊に、さんぬる長わの頃、いづのおきにふきはなされ、又もやていとにかへらんことは、中々ふじゆうなりしか共、誠にふしきのたよりをうけ、二たびきこくいたす事、是ひとへに佛神のりしやうたり、なかんづくすどのきじんしたがへしこと、ひとへにとうけんのいせいたり、かゝるきたいのぢうほう、其まゝ置あしかりなん、吉日をゑらみ八まんをくわんじやうし、しんりよをすゝしめ奉り、たからをきよめおさむべし、いそきかんぬしときやすをめせとの御でうなり、畏まつてやがて時やすをめされ、いかに時やす、たからを八まんのほうでんにおさむべし、それ〳〵との御でうなり、かしこまり候とて、一々次第に三重かさられける、はなやか成ける有さまなり、其後かんぬし時やす、上だんをあら

ため、しめをはりしんりよをうつし奉る、扨四天王の（本ノマヽ）
人々こりをかき、よくあかぼんのふの、ふきつほはらひ、みをきよめ御たからをもち出るまづ一ばんにげんじ御きちれいの御はた、扨ひげ切ひざまるとて、二ふりのつるぎ、らんでんぐさりの御きせなが、八まんぐうよりたまはつたる、たつかしらのほしかふと、はこね山にてやうゆうか、むすめのあま下つて、あたへし、つの〳〵つき弓、じんづうの、かぶらや、扨くわんをんのほうでんより、申おろしたまひける、しげどうの大弓、わしのはのとかりや、其外ぢうほう共、一めんにかざりける、かくて大將上だんにむかいはいしたまへば、時やす、ごへいおつ取、のつとをこそ上にけれ、きん上さいはい、うやまつて申、それあきつしまはしんりよわうごのれいちたり、忝もくにとこたちの御事より、いざなぎ、いざなみのみことまで、つ上天じん、七代にて、わたらせまたひ、扨又あまてる御がみより、ひこなぎ、さたけ、うがやふきあはせずのみこと迄、い上ぢじん五代にて、をゝくのせいさうをおくりたまふ、然るにしんむ天わうと申奉る、ふき合ずの御ことにて、一天のあるし百わうにもはしめとして天下をおさめたまひしより、此方國ぐをかたむけ、ばんみんのおそる〳〵、はかり事、ぶんぶ二たうに、しくはなし、かうふんのやからをてうあいせられずんば、たれかばんきのまつり事を、たすけん、又はようがんのともからを、ちうしやうせられずんば、いかでか四かいのみたれを、しづめん、かるがゆへにたうの大そうぶん王は、きずをすいて、せんじをしうし、かんのかうそは三尺のけんをたいして、しよかうをせいしたまひき、然間とうじほんてうに、源平兩かとさだまり、ぶりやくを振まひてうかをしゆごし奉るなかんづく、正八まん大ほさつは、けんじわうしやうのしゆごしんたり、太刀かたなの、ひかりをもつて、たほくのりにはらいのけ、國どあんをんにおさまり、とうけのはんじやう何にうたがいの有べきや、なむきみやう長らい、大ぼさつとたからにこそ、よみ上けれ、大將御きげん淺からず、かさねてらいはいしたまひ、扨時やすをめされ、則大ぼさつの御くうでんとして、つの國ながらのしやうを參らすると、やがてみぎやうしよたまはりける、扨かんぬしにもかずのゐんぶつ下され、しゆ〳〵のほうらいからくみて、すでに

しゆゑんぞ、はしまりける君をはじめ奉り、をの〳〵きやうにじやうじ、思ひ〳〵のつらねうた、誠にめでたき有さまやと、一ざの人々とうをんに、君か代はちよにや、ちよを、さゞれいし、のいわをとなりてこけのむす迄、かはらぬみよこそめでたけれと、うたひおさめ、みな〳〵おいとまたまはつて、しゆく所〳〵へ三重歸られ ける 是は扨置、爰に又でわの國、はぐろ山に、ほんまの大ぜん、てつしゆんとて、おごり大一のあくそう有、かれがせんぞをたつぬるに、さんぬるしやうりやくの頃、むほんのおこせし、ほんまの入道たたむねが次男たり、ちゝほんまの入道うたれし頃は、わづか十一さいにて在りしが、はぐろのべつとうを、たのみいたりしが、がくもんに心を、入ずあわれ、天下をくつかへし、ちゝほんまのはしをも、きよめ、此ざんねんのはらさんと、つね〳〵あいとものふ物までも、かくもんを打すて、きうせんに心をうつす、あくそうより外はたじなし、さればるいをもつてあつまるならひ、かれにをとらぬあくそうには、まづ一ばんに、はくさんのうんりやうぼう、たて山のがんせき、はやかはのくわいりん、にわう山のゆふけい、つち風のよくてん、とてもふはふそうのあら物なり、かれらを一きとうぜんのらうどうとなづけ、なさけをかけていたわりしが、其外のあくそう共をまねきよせ、いかにかた〳〵扨もみなもとのらいくわうは、四天わうがゆふりきをはげみ、四かい我まゝ成とふるまふとや、ちちをうたせ、日頃ざんねんにおもふなり、此たびうつてのほり、日頃のむねんのはらすへしたとわば、じんづうをへて、かうもうがいかりをなす四天わうなればとて、方〳〵かゆふりきにはよもまさらじ、又それがしも身ふしやうながら、頼光にはをとるまし、然上は、かくひかげ物となり、くちはてんむねんなり、方〳〵の心を合、一せんはげみたまはゝ、きへいを上、一もんのついぜんに、たむけうしんひらく、物ならば方〳〵には、かわふんのをんしやうを、あておこのふべきが、此ぎいかにと仰ける、其時くたんのあくそう共、このむ所と悦、誠に仰のごとく、かくひかげ物となり、あたらうてのゆふりきを、人にしられず、しゝけた物を、おつつかみ、さき、なにのやうには、たち申さん、あのめんざいのごとく成、こくはじやばらを、四天わうなぞとはいわ

せ、ぬるこそむねんなれかく我々がごとくに、あはれ事のいでよかしと、存せし物よにおゝくはびこり申べし、去ながらときのけんにおそれ、四天王風に、ふき付られ、其まゝ有物をゝかるべし、はやうつたちたまへことに、とう國には、こにうとうの御をんゑたる物あまた候べし、然る間はたを上、たまはゞ我も〳〵としたかわん、其せいをぬんそつし、いそぎ都へせめ上、じつふをたゞしたまふべし、我等も年頃の御をんに、一めいをなげうつて、をとに聞へし、四天わうと、ひつくみ、げんざんに參らん、はやと〳〵とそゝすすめける、すてにひやうでうきはまりける、爰にてつしゆんが、めのとかなざはの、ぎうぶみちふさは、しんぎたゞしき物成か、一まをへだて此よしを聞よりも、あいのしやうしをさらりとあけ、てつしゆんのまへに、かしこまりなみだをはら〳〵とながし、扨も扨もあさましき、思召立かな、まつあんじてもみたまへ、らいくわうと申は、忝も六そんわうのしそんとして、天下のふ將にそなはり、其身ぶんふにましますゆへつどのげきしんついばつし、あまつさへ國どのわずらひとなりしきじんをも打したがへ、みかとの御きしよくあつうましまし、殊に四天王の物共は、ほん人にてはなく、其外の侍に、一きとうぜんならぬはなし然るを今わずかのせいにて、天下をくつかへさんとは、なか〳〵おもひもよらず、たゞこのぎにおいては、おほしめとゝまりたまへと、りをつくして申ける、其時たて山かんぜき申けるは、こはみちふさの申でう共おほへぬものかな、其頼光四天王なればとて、人げんにかはりは候まし、又われ〳〵もにんげんなり、たとはゝてんまやくじんなればとて、何程の事の候べし、われ〳〵に御まかせ候へばはやうつたちたまへと、手に取やうにぞ申ける、みちふさ聞て、おゝゆゝしき今のことばかな、尤はたを上たまはゝ、こにうとうの御をんゑたる物、御みかたに參へし、たとへば千ぎまんぎ、來ればとて、なにのやうにたち申べし、此みちふさがひとう成事は、申まじいかにわか君さま、誠にすねんがくもんなされ、御心も柔らぎ、ちちははの御きやうやうなさるべきと、思ひ悦ひ入候所に、かくあく心のおもひたちたまふ、是もつてのほかのひが事なり、たゞあくしんのふりすて、しゆつけ、どうしんまし〳〵て、御一もんの御とふらいこ

そ、みち成へけれ、このぎにをいておぼし召とゞまりたまへと、なみだを流し申ける、てつしゆん、大きにいかつて、やあをいにほれたか、みちふさ、おのれさやうのをくびやう物と、しらずして、付そいたりしくちをしや、なにとちりやくをめぐらし、ゆふりきをもつて、たゝかはんに、など天下をくつかへさでをくべきか、うんは天にあり、ちからはむねに、有ぞかし、さきもしれざる、ごしやうさた、をくびやうものゝくせとして、をのれが心にあはせ、人までせうするはらたちや、だいじのいくさの、かどんでに、さきをからす、ぐにんめをみれば、なか〳〵むねんなりと、とびかゝりくびふつつ、とねぢきり、をゝいくさのかどんでに、九萬八千のいくさかみのちまつりにかどんでよしとよろこび、いそぎ打たて物共とて、一々ふれをなし、しよろう人を、かたらいつがふ其せい二萬よき、まづ是よりも、ゑちごの國へをしよせ、よりのぶを打とり、そのゝち都へのぼらんとて、しあんくわんねん、三月五日でわの國を、うつたつて、ゑちごの國へむかはれける、かのてつしゆんが有さま、すさまじかり共、中〳〵申斗はなかりけれ

第二

ほんま大せんむほんの事

なをもこの事かくれなく、ゑちごの國に聞へしかは、よりのぶの御まへには、ふじはらのなかみつ、同ちやくしなかひでを、はしめ、家の子らうどう、めされ、ほんまの大せん、ぎやくしんくわたて、きんへんの侍共、大かたかれに、したがふとや、しかれはみかたこせいにて、いくさにおよんでは、中〳〵かのふべきにはあらね共、大將たるべき身が一せんもおよばず、をちゆかんも中々いきたるかいあるまし、しよせんかたきをまちうけ、はな〳〵しくいくさして、うちしにせんより外は、また二つ共、あるまじきは、方々いかにと仰ける、何れもはつと答へ、つゝしんで、いたりけり、其時中みつ申けるは、去ながら此内に、都へちうしんいたさるべき、人はなきかと申せば、しよさふらいきくよりもこは、なかみつの申されでう共おぼへぬものかな、いくさもいまだはじまらず、とこうの、やうすもしれざるに、何をせうこに、都へはのぼるべき、まつかたきをまちうけ、一せんも、二せんも

はげみそのうへにて、せんぎしだいに、都へのさたはしかるべしと、みな一どうに申ける、なかみつにつこと、うちわらい、おふたのもしき、しよぞんかな、かく申せしも、方〳〵の心をひきみんためぞかし、しんびよう〳〵とぞ申ける、なかひで申けるは、さあらばかたきよせぬ、其内にみだいわかきみをいつかたへも、御あづけなされ、心安くいくさなさるべしと、申上るよりのぶげにもと、おぼしめし、いかになかみつ、それ〳〵はからへとの御でうなり、かしこまり候と、さたけの五郎國しげを、ちか付御へんは、みだいわかぎみを御ともし、しなの〻國へんみの介とのまてをち行たまへ、くにしげきいて、いやそれかしはあとにのこり、御せんどをみとゞけ申べし、いつれのかたへも仰付られかしとそ申けるなかみつ重ねて申やう、いかにくにしげとかふいたすも、みなこれきみのためぞかし、かくいふうちにもてきにとりこめられてはせんなし、へんしもはやくとく〳〵とさいさんしいていさむれは、ちからおよばず、きみに御いとま申あげ、人々にいとまをこひ、みたいわかきみの御とも申おくしなの〻國へそ、おちゆきける、よりのふ本ノマヽ、なゝめに、おぼしめしいかにめん〳〵、てきの大せいにみかたをくらぶればきう〳〵が一もう、大かいの一てき、かのふべきには、あらねども、さふらいは、命よりなこそをしけれふかくを取なかた〳〵、せいめいあきらかに、かうだいにとゞめよと、御ざをたゝせたまひける、なかみつ承り、御まへをまかり立いかにかた〳〵みかたはたといふせいなり共のかれぬところをよくしり心ざしを一つにし、一きとうせんのゆふしなり、いさめや〳〵かたかた、かくいふとても、あまりにはやり、きとをそこつにはなれ、たせいにまかれいぬじにすなどつとをめいてきつとかけ、もみたて〳〵、すきをあらせつきつてすてよときこそうつれこなたへと、大門小もんさしかため、ゑびらやなぐいおつとりそろへ三重よせくるかたきをまちいたり、あいもすかさずかたきのせい、とうざいよりも、取まき三重ときのこゑをそ、あげにける、時のこゑもしづまれば、なかみつやぐらにはしりあがり、たゝいまこれへよせられし大しやうの、けみやうはなにと申ぞや、うけたまわらん、そのときかたきの方より、まつくろに、よろうたる、むしや、一きこまかけ出し、

こともおろかや、さがみの國のちうにん、ほんまのにうどうの、二なん、ほんまの大ぜん、てつしゆんにてわたらせたまふ、おや一もんのついぜんのために、きへいを上られ候、いそぎはらをきるべしと、ゆんつへすかつて、ひかへたり、なかみつ、から〳〵とうちわらい、さてはてつしゆんにてありけるか、御へんはぐろさんにかくれ入るとは、きみもない〳〵しろしめされて、有けれ共、おとこ、やめ、しゆつけになりしうへは、いのちをつがせ、おや一もん、あとをもとはせんと、しらす顔にて、ましませしに、ありかたきとは、おもわすし、あくそうをたて、國どをなやますおごり物、あれ一人もあますな、うつていでよとげぢすれば、われも〳〵と、きつて出 三重いくさは花をぞちらしける、いくさなかばの事成に、かたきのかたより、其たけ七尺あまりの、大のほうし、くろいとのよろひをき、てつほうをつえにつき、我におとらぬあくそう、二人あいぐし、たゝ今すゝみいてたる、ほんま大ぜん、てつしゆんの、こうけんつぢ風の、よくてんとは、それかしなり、しやうの内にも、われとおもわん、人あらばかけよ、てなみをみせんと、はうじやくぶじんに、申けり、ときにじやうのうちよりも、花やかによろふたる、むしや三きかけいで、ものゝかずには、あらねとも、かく申はふじわらの、なかみつかちやくし、ふじわらのながひで、のこり二人は、五とう源五、ひらの〳〵九郎とて、何れもよりのぶの、らうどういざまいり候と、ごとう源五、ひらの〳〵九郎、きつさきをならべうつてかゝる、かたきの方にも、二人のあくそう、わたりあい、さん〳〵に切結ぶ、源五、ひざぐち、わられ、たち〳〵と、する所をよく天、てうど打、らつくわとなつて、うせてんけり、さきにすゝみしあくそう、ゆんてのうでくび打をとされよろ〳〵と、する所を、中ひで、おがみ打にてうと切、ひらの〳〵九郎も、打じにす、くだんのほうし引所をなかひではしりかゝつてゑしやくもなく、打程に、こしのつがいを、切放す、よくてんこらへかねてつぼうひつさげ、てうど打、さくりと、はづしぼうのはしを、おつ取、ゑいやゑいやと、ねぢあいし、さしものかなぼう中より、ふつつとねちきつたり、我も人もうんのきはめはこれ迄と、押ならべむんずとくんだ、くんだかおのこ、くんだかほうし、めに物みせて、くれんとて、大わたしに

取てなげ、のつかゝりくびふつつと、ねぢ切、此年頃おにかみのやうに聞へしつち風の、よく天を藤原の中みつか、ちやくしなかひでなり、年つもつて廿一、軍はかうこそする物よ、かゝれやかゝれと、よばわつて、本ぢんさして引かへす、けふの軍の花成はと、みなかんぜぬものこそなかりけり

第三

頼のぶかゝの國へ落給ふ并みだい道行

かくて兩ぢん、たかいに入亂れふせぎたゝかふといへ共、かたき大ぜいみかたは、ふせいの事なれば、皆こと〳〵く打たれ、かのふべきやうなかりけれ、大將よりのぶ公、諸ぐんせいをめされい、かにかた〳〵、かくては此じやうたもちかたし、一ほうをうちやぶりて、かゝるちぜんのかたへきりぬけ、ほくろくとうのせいを、もやうしかさねておしよせ、ほんいをたつすへし、されば大てきをやふるには、ようちにしくはなし、ちぶんのはからい、おしよせよ、中みつ承り、あつはれよろしき、御でうかな、たれもかくこそ存れ、さいわいこよひは、あめ風しきりにして、くつきやうのをりからなり、扨よはなん時ぞ、ねこくばかり、時こそよけれ、はや打立物共と、てんでにどうのひよういして、山といわば川とこたへよと、やくたくしのひ〳〵に、しろをいて、一ぢんにをしよせ、てわの國のちう人あきたのきやうぶが、やくしよにひをかけどつとおめいて、かけいてひ花をちらして三重たゝかいける、すゝみ出しやつばら、みなこと〳〵くきりふせ、あるいはくび二つ三つ、太刀につらぬきかけ出る、物も有、又はてをい、し人かずしれず、のこりしやつはら四方へばつとおつちらしじやうの内へさつと引、みかたのせいをみたまへば、わづか五十きばかりのこりけるうちじにせし物、かんがへみたまふに、ふぢわらの中みつを、はしめ、廿七きうたれける大將御らんじ扨も〳〵中みつはうちじにして有けるかや是よりのふがうんのきとおぼへたり一きとうせんとたのみかけしにやんみ〳〵とうたれけるかやあさましやかくいゝかいなくもうなるべき物にはあらざるかうんめいつきはてうたれけるかやはかなやとしばしなみたをながさるゝ爰に中みつかちやくしなかひてはちゝがさいごにとはうにくれていたりしかしや

く取なをし申けるはそれかしはかたきのぢんばへ參りおやにて候中みつかしがいをもたづねおやのきやうやうにうちしにいたし申べしと〳〵は三世のきるゐんと承らいせにてかならず御めにかゝるべしこんじやうの御なごり是までとかけいつる人〳〵とつておさへまつしつまりたまへとせいしけるかゝりける所にきたのかたのとてよりもとひをりしつ〳〵ときたるをみれば中みつなりきみをはじめ人々是は是はとばかりにてよろこびなみだをながさるゝ大將御なみだのひまよりも誠に中みつはなき物とおもひしに二たびあいけるうれしさよ扨たゞいま迄なにとてあとにのこりて有けるそ中みつ承りさん候こよひおしよせ其まゝおちゆかん事あまりさんねんにぞんじいかにもしてかたきてつしゆんめをうちとらんと心がけあとにのこりさま〴〵ちりやくをめぐらし候へ共かたきのやうじんきびしくなか〳〵心にほつせずたゝかへらんも口をしく存爰かしこことみまわりし所に一ぢんの大將あきたのぎやうふかなたこなたとせし所をくび打をとし其外のやつばらあたるをさいわいこと〳〵くきりちらし是まで參候なりかたきのやつばらこよひのよ打にどうてんし爰かしこといたすへし此ひまにすこしなり共おちのびさせたまふべしみをまつとうしてきをほろぼすをこそめい大將とすはやとく〳〵とすゝめ申せば頼のぶげにもと思召御ざをたゝせたまへばなかみつはしりまいり門々をかためうらのもんより君を出し奉り打のこされしぐんびやう共い上卅七き御馬まはりにひつそうてよはにまきれて城をいてかゞの國へと 三重おちらるゝすでに其よもあけ行ばかたきの大せいおしよせ時をとつとぞ上にけるされ共じやうにはおともせず其時てつしゆん申けるはやせんおち行てもや有らんたとへしろにこもる共何程の事か有べきぞたゞ一もみに打つぶせとさいをあげげぢすれば我も〳〵とみだれ入され共をち行たることなれば一人もなかりけり扨はおち行て有けるよなまづいくさのかどんでにきつきやうめでたき次第やとくがみのじやうをのつとつてよろこぶことは 三重かぎりなし是は扨置爰にあはれをとゝめしはよりのぶのみだい所やわか君にてしよじのあはれをとゞめたりやう〳〵やかたを立出て人めしのびのたびなればいやしきしづのめにさまを

かへわかきみをめのとにいだかせたまひつゝ（ふします）げのおかさでかをかくし國しげにしゆごせられ（いろふし）なにのみ聞ししなのぢはそなたのそらぞと思ふ心をたよりにてたどろ〳〵とたまぼこのしらぬ山ぢにまよひつゝつまのゆくへをみもわかずいまだふみもならわぬくろつちをわけてのぼるこそ物うけれあまりのことの物うさに跡立かへり打なかめあゝ扨物うや我かつまはなにとかならせたまはんと心ぼそくも打なかめ涙ぞ道のしるべにてまよひたまふぞあはれなれたま〳〵こととふ物とてはそらにさ口たるさるのこゑみねよりなかれておつる水のをとしかのこゑかすかにて又あきならぬ道のべにほたるかすかにとびつれてまよう心のやさしやなむかふをみればしづのさとはらにしほやのけふり立ひやう〳〵としてきはもなく心ぼそさはかぎりなしいとゝ物うきをりからにみやまからすのこゑ立てなくにつらさやまさるらんやう〳〵行ば今ははやゑちごしなのゝさかい成くまさか山に付たまふいたはしやみだい所此頃のうき思ひたびのつかれにや御心もよからすしたゝぼう〳〵となりたまひあゝくるしやいかにめのと水はなきかとのたまひてと有こかげにひれふしたへ〳〵にみへたまふめのとをとろきそれ〳〵とあれはくにしげ心へたりとはるかの谷にさがりかなたこなたとたつねけるあらいたはしやみだい所次第に心もよはりはてやあめのとはいづくに有ぞこなたへ來れとのたまへば御まくら本に立よりいかにや御心はなにとましますそいかに〳〵と申けるいたわしやみだいかすか成御こゑにて此ていなればわらはゝむなしく成べきは其おさあひものをこなたへ參らせよとやうやうおきなをりくるしけなるいきをつぎやあたわかよわかよ母はめいどの旅におもむくなりおことせいじんいたしなばあと思ふてゑさすべしか程うすきゑん成とはかぬておもわざりし物あゝなごりをしの此わかやあゝらこいしの我かつまやいかにめのと此わかをばんしはたのみ申なりよくもりそだてゑさすへしせい人するをみとゝけずかく成ことのよしなやとすがり付てぞなきたまふ是がさいごのことばにてついにむなしく成たまふめのとおどろき御しがいに取つきて是は〳〵とばかりにてしばしきへ入やうになきいたりおつる涙のひまよりもこはそもゆめかあさま

しやのふいかにみだいさまわか君やわらはをばふりすていづくへゆかせたまふぞやわらはもつれてゆきたまへとよべとさけべとかいぞなきなにとなりなんかなしやとしばし泪をながしけるいたわしやわか君いまだ三さいにもなりたまはねばなにのよしみもしらすして母の御かほゝをしなでさせたまひわつとさけばせたまふにぞいとゝ心はみたれつゝせんごもしらすなきいたりかゝる所に國しげやう〳〵みつを取もとめ歸りけるがなげきのこゑを聞よりもはつとおとろき立よりみてあればはやこときれさせたまひこはなむ三ばうかなしやとたをれふしてぞなくはかりやう〳〵泪をおさへ御そうかうをみてあればやんことなき御かほばせさなからねむれる花のことくなりなにが此頃ならはせたまはんたびのそうさぞやくるしくおぼすらん扨〳〵御いたはしき有さまかないかにめのともはやかなわぬことなればせめてまつこの水をたむけられよめのと此よし聞よりもなく〳〵わか君をいたきみつを持今まではさり共聞召ざらんとのたまいし此水はやまつこの水になりたよなのふいかにみだいさまたゞ今の此水は國本におわしますち母のたむけの水にておはしますよきにうけ取たまふべし又此みづは御つまのよりのぶ公扨又今上る此水はたまわか君のたむけの水よきにうけとらせたまふべしおゝそれなから此みづはわらは國しげ參らせ候なれあゝ扨御いとふしき有さまかなとこゑを上てぞなくばかかり國しげ泪のひまよりも今はなけきかなわぬ事なれば御しかいをかくし申べしそれかしはさとへゆき御さうをたのみ參るべしとひなやをさしてぞ三重いそきけるかゝるおりふしいづく共なく御そう一人來られ扨もふびん成事共かないづくいか成國の人やらんめのと承りさん候こきやうは都方の物成がさるしさいの候て是まて參りかゝるほんぎに及候あはれ御しびにかけをかくしてたびたまへとなみたをながし申ける御そう聞召扨もいたわしき事共かな去ながらいまだじやうこう來らねばそれかしたすけゑさせんとくわいちうよりも御くすりをとり出し口に入させたまへば其まゝ御めをひらかせたまひやれめのと玉わかはなきかとのたまへばめのとよろこび是〳〵御らん候へと御力を付けれはゆめのさめたるごとくなり人〳〵よろこひ御そうにむかひ手

を合らいはいしておわします其時御そうわれをたれとか思ふらん我なか山のくわんせをんなりとひかりをはなつてうせたまふ八ノ〳〵よろこひ御あとをらいし扨も〳〵かたしけなやと泪をなかさるゝかゝりける所に此へんにすまひする物共成がよとう山だちしてとせいをおくる三人打つれ此有さまをみるよりも扨も〳〵よきさかて是に有むばいとらん物をやと我も〳〵と立よりなさけなくもはぎ取けるみだい此よし御らんじてこはなさけなの次第哉やう〳〵心を取なをし有けるをじやけん成人々やとこゑを立てぞなきたまふ中にもあら五郎是をみてやあおのれはたかこゑたつる女めとはしりかゝつてたぶさを取すでにくびをかゝんとしたりし所へ國しげ大いきついて歸りしが此よしをみるよりもなむさんぼうはしりかゝつてこかいなをむすと取やあをのれは何物なればかくろうせきふるまふぞやといふよりも早く取てふせくびふつつとねぢきり立あからんとせし所を二人物かけよる所を國しげ心へたりとゆんでめてよりひつつかみおのれぐにんなつのむしとんでひに入とはおのればらが事成へしいそきめいどにおもむけと二人共に取てふせくびふつつ〳〵とねぢ切みだい所をさきへたてよろこひいさんでしなのゝ國へといそぎけるかの國しげが有さまはんくわいもかくやらんと皆かんせぬ物こそなかりけれ

第四

頼光よりかせい井子四天王馬そろへの事

かわちのかみよりのぶ公人々にしゆごせられいそかせ給へば程もなくかゝの國はやしのひやうへがおくりたちにぞ付たまふひやうへ立出めづらしの御下かうやとう國よりげきしんおこり君をなやめ申とほのかに承りなにとかなされ候そと心もとなく存せしによくこそ來らせたまふ物かなとをくにしやうじよきにいたわり奉る頼のぶなのめに思召八ノ〳〵をめされ我此所に有事を都へしらせ然るべきかとのたまへば中みつ承りぎよいまても候まじはやとく〳〵と申上るさあらはとのたまひてみづから御しよをあそばしもり山に下されけるかしこまり候とはたせ馬にうちのりて都をさしてぞ三重のほりける都になればすぐに御所へあかりひらいのほうしやうをもつて御しよ

を上る頼光御らん有に其じやうにいわく今どほんまの大せんぎやくしんをくわたてとう國のしよ侍かれにしたがひ大くんにておしよせすでにいくさに及候みかたのつわ物ぶりやくをめぐらし候といへ共たせいにかこまれわつか卅七きに打なされかのふべきやうなく候ゆへむねんなからもしやうをひらきかゝの國はやしのひやうへかた迄おちのび候あはれねかはくは御かせいにあづかり今一どかたきついとうせしめほんいをたつしたく候はおはんぬぢあん元年三月下じゆんかはちのかみよりのふしん上源の頼光公へとひけんあつて頼光大きにおどろきいかに方〳〵是をみよ其てつしゆんとやらんめはぐろ山に有とはない〳〵聞つれ共おとこをやめしゆつけすると聞からに打すて置たりしがゆだんたいてきとはかやうの事にて在けるぞ此上はへんしもはやくはせむかいよりのぶにかせいすべしようせいせよとの御でうなり何れも畏まつて候と申所へびつちうの人ひろせの源太はや馬にてはせのぼりぶせんの國のちう人うきすのはんぐわんときうしきやくしんをくわたてちんせいの物共一かうかれにしたがいさいかいどうを切したがへさんぬる十六日に四國へわたりいよの國にたなふのしやうをせめおとしちう國へせめわたり候よし聞へ候いそぎ打てを下され候へと大いきついでごん上す君をはしめ奉り一さの人〳〵おどろきとう國ほつ國そむく所に又さい國にげきしんおこる事こはいか成事やらんとないげひやうでう取〳〵なり其時ひとりむしやすゝみいでかやうに國〳〵そうとう仕る事ゆゝしき天下の御大じいそぎぐんせい御てわけ然るべしと申上る時によりな公すゝみ出此度ほつ國の打てにはそれがしに仰付られ候べしわか物共を引くしとう國のけうどうを一〳〵ついとう仕へしとつゝしんで申されける頼光聞召いしくも申て有物かなさあらはぐんせいのてわけせんまつほつ國の打てにはよりなかを大将にて子四天王むかふべし去ながらかの大せんはぶんぶ二たうの物ときいて有わか物ばかりは心もとなしわたなべをあいそへんみのあふみ兩國のせい二萬よきにてはつかうせよ扨さい國のうつてには公時さだみつすへ竹兩三人大将にて津の國いづみかわちのせい二萬よきにてむかふべしひとりそれかしはていとをしゆごいたすべしとの御て

うにてすでにひやうでうきはまりをの〳〵御せんをまかり立いそきやういをせられけるかさねて大將わたなべを召れわか物共かむしやぶりをけんぶつせんそれ〳〵との御でうなりかしこまり候と御前の罷立はやしやうぞくをぞ三重せられけるすてにこくげんきはまれば御大將たかき所にまく打せ御けんふつをこ成けるまつ一ばんにげんじの白はたまつさきにをし立る大將の御馬まんねんぐろといふめいばにはるちよよろつよのかげたかきいろこのしたかげのおちばまて下いろかけどもつきせぬ七つゆりこほれまつきんぎんにてほり付たるくらをかせ色〳〵のいとをもつて打まぜたるあつふさむらさきのたづむすんでさげ行衞めでたき君がよをいわいそへたるふぜいにてとねりあまたあいそへひめ小松にしらはとすへたる御馬しるしいさむ心ははるこまのいろふしあしもしどろに引出す二ばんにわたなべの竹つながさゝなみといふめいばにかゝみくらおかせくれないのあつふさかけいそへのなみもどう〳〵とうてば心もつきゆりいさきよく是も一所にかさりたてこへいにくび三つ付たる馬じるしあたりをはらつて引出す三ばんにひらいのほうめい四つじろといふまきをのこまに三ぼんがほたかながいにすつたるくらをかせこがねのゑりがいかけさせ白はた五本の馬じるしかけおとらしと引出す四はんにうすいのさだかげがなんりやうにけん打たる馬じるし是も一所に引せける五ばんにうらべの六郎すへしげかげとりといふめいばたち花をきんぎんにてほり付たるくらをかせきいとのしりがいかけかのつのに三つぼし打たる馬じるしきんかくもほり上くりひをかけよと引出す扨しつはらいはさかたのきんよしがおにあしげにこきくれないの大ぶさかけきんぶくりんのくらをかせしらあははませて出來はなはた天へも上りぬべし三本ぞとばにあかはたの馬じるしさもゆゝしげに引出す大將御ざを立てみたまふにりやうのみゝは竹をそぎたるごとくにておがみふつさとすしふとくしゝ八ぶんにあまつて前より共に至までたぐいなきじゆんそくなりばくわうはつ引のてんはかううがぼうこんすいと立共是にはいかでまさらんいづれをどれといゝがたしあつはれ馬やけんふつやとどつとほめさせたまひける扨大將よりなか公あかしのにしきのひたゝれにらんでんぐさりの御きせなが

けんし十代のひげ切といふおんはかせたつかしらのほしかぶとわらはに持せざいをつ取出たまふはあつはれげんじの大将やとをの〳〵かんしたまひけるわたなべのつなはゑぼしにほひのはらまき三尺五寸のしやくどう作りの大太刀はきいろ君をしゆごし奉り扨五人のわか物共一やうにくかはおどしのよろいをき一めんになみいたるはげにゆゝしくぞみへにける時に頼光わたなべをめされ何れも若物なればけつきいくさいたすべし其むねよく〳〵せいすべし是にてぐんほう仕れと金のざいを下されけるかしこまつて候とざいおつ取立上り扨ぐんはうとぞ聞へけるそれかつせんのかうを取べからずせうぶはうんによりさだまらずわづかのせいをもつて大ぐんにかつ事はよのつねにしてかのふましせつにあたりぎによつてかけ引を大じとせよ一ぢんやぶれば二ぢんかはりせんぢんのたゝかいにくたびれたるをごぢんへ廻しごぢんのせいをさきへかけ五人一所に心びやうしをしつ取〳〵と合べしくりかへしまきかへしくるまかゝりといふ物にいきをつがするなさりなからかへるばかりがてがらにあらずもし引時の大じ有むらくものさかまくやうにあと成物がさきへのりつきがのりかけのりまはしざいをふつてそなへをこのてに立させたいこを打て跡ぞなへにきを付よ五人の物が馬の鼻を引揃へ心ひやうしをしつとゝ合ひだりのたづなをうけ心にみぎのたづなの手の内をじつくり〳〵としめつけ〳〵弓はり月のかたむく頃にこつぶりかたむけのりかけ〳〵せめよかまひて〳〵いろ〳〵ふしまばらがけして ゆり打たりなみだれいくさに及んでてきしげくは首取なかたて切すてにしやうは其みのちうに有まつたおのれがつみに有五人の内にひきやうをさばきこしをぬかす物あらば打てすてよみな是きみのためなれば四天王が家のなをばしくだすなわか物共のがれん所をよくしつて一じんをほぞの下に落し付時のてうしにのりたらばそこてのりこみ切ていでよかまいてけつきのいくさすべからずあい色をみすましせんぢんごぢん一つになりとつておめいてかけ合たゝ一時の其内にやかてかち時つくり立そくしにじやうへのりこむ共ふせぜいよこやりある物ぞ其むねよくよく心へよ大じの天下のたゝかいにふかくを取な方方とちへふかうしてむねつよきりひあきらか成ぐん

ほうはい國のぢんべい長郎も是にはいかでまさるべきと一ざもあつとかんしける頼光きよかんあさからずいさぎよし〳〵かゝるゆゝしき渡邊にげしをさせ若者共にはげませもみ立〳〵せめたゝかふ物ならばいか成天まやくじんもをもてをむくべきやうあらじそくしにかたきついとうしめでたくかいぢんいたすべしとはや御いとまを下されける八々御前を罷立て頼仲の御ともし門ぐわいよりうま引よせひた〳〵と打のりほつ國さしてむかはれける此人〳〵の有様あつはれゆゝしき次第やとみなかんぜぬ物こそなかりけれ

第五

兩大將てつしゆんをいけ取かいぢんの事

源の頼仲公しよぐんせいを引ぐしいそがせたまへば程もなくかゝの國のはやしのひやうへがたちに付たまひ八〳〵にたいめん有御悦はかぎりなし中みつわたなべに打むかい我君のしつけんをかうむりたるかいもなくおめ〳〵とかたきにじやうをのつとられ口をしく候へ共みかたふせいになり候へば力なく何とぞして君の御命をすくわんと存ちりやくをめぐらしやう〳〵是までをちのび候扨〳〵いゝかいなき物とおほしめさん近頃めんぼくのふ候とはがみをなして申ける渡邊聞いてこは中みつの仰共おほへぬ物かないくさは時のうんたり心ははやる共みかたぶせいに打なされては思ふやうにはなりかたし御ぶんなればこそ大せいのかこみを切ぬけ君あんをんにしゆごし是迄は來られたりそうじていくさに及かなはぬ時はてきをたばかりみをまつとうしてをち行事是長郎がぐんほうのおくぎたりおゝしんびやう〳〵とぞ申けるかゝりける所にゑつちう人宮ざきの藤太はや馬にてはせ來りかうづけ下つけむさしさがみのくん兵おゝかた敵にしたがい候かやうにひつはく仕内にてきはいよ〳〵大ぐんになり申べしかたきかつにのらん其内にいそぎいくさの御やういましませと大いきついで打たへける頼仲聞召げに〳〵かたきにせいを付あしかりなんいそぎおしよせ打とらんようせよとの御でうなり渡邊承り尤よろしき御でうかなさあらば打立たまへやと兩大將の御ともしかゝゑちせんのせいをあいそへつがふ其せい五萬八千よかゝ

の國を打立てゐちごの國へぞむかはれける猶も此事かくれなくゐちごの國にはほんさの大せんてつしゆん諸ぐんせいを近付聞はよりのぶ都よりのかせいをうけ子四天王とやらんを引くしむかふとやきやつばらがぶんにてなん十萬ぎでよする其何程の事か候はん去なから是へ近付ては國のさはぎと成べし道までは せむかい一〳〵にけちらしほんいをたつせんと諸國のせいをゐんぞつしつがふ七萬六千よきゐちごの國を打立てかゝの國となみ山にぢん取てよせくる敵を三重まちいたり去程に大將かゝの國となみ山に付たまふすでに其日もくれければ同ぢんをぞ取にける渡邊進み出申けるはかたき大ぐんとみへたりかけ合のいくさに及てはじつをうつし申べしまつそれかしは上の山へあがりかたきのやうだいをうかゝい申さんといふよりはやくしのびて山にあがり敵のていをみてあれば爰かしこにかゞりをたきすてこてすねあてをまくらとしせんごもしらすやどりけり渡邊なのめに悦いそぎぢん所へはしりかへつて時こそよけれ打立たまへ此山のてい四方がんせきにて候へばうへの山よりせめかけきやつはら一人ものこさずうしろの谷へをいをとさんまつ中みつおやこは二萬よきあいぐし東のみつれへまはりたまへはうめいさだかげすへしげは一萬八千よきにて西の山を取まきたまへ竹つな金よしそれがし兩大將の御ともし大てにまはり申さんとぢぶんのかたくやくだくし三方にせいをかけ思ひ〳〵におしよせの時のこゑをぞ 三重上にけるかくてかたきの物共爰かしこにふしまろびいたりしが時のこゑにをどろきとうてんしうしろのたにへとかけ出るよせてのくんびやう是をみて三方よりもみ合ばつつめ〳〵せめたりけりてつしゆん此由みるより今はゝやかなはしとや思ひけんのこりしくん兵引ぐしゐちごの國へと引にけるかくて兩大將なのめならずに思召すはやかたきはおち行たりいそぎぼつかけ打とらんと 三重あとをしとふておふて行ゐちこの國に付しかばくがみの城を二ゐ三ゐにをつ取まはし時のこゑをそ 三重上にける城の物共門をかためしづまりかへつていたりけりよせての方よりさかたの金吉かけ出ゐゝなまぬるき有さまかなゐいやゐいやとをしければなにかはもつてたまるべきそうのとひらをおしやぶり我も〳〵と押入けるていしゆ

ん此由みるよりも今は何をかごすべきそかけ出〳〵いさぎよく打じにせよとざいをふりけしをなすくだんのあくそう四人一所にかけ出大ぜいのぐん兵をむら〳〵はつとをつちらしと有所へさつと引しばらくいきをぞつきにける中にもうんりやうすゝみいでやあをとに聞へし四天王とやらんはいつくに有ぞ我々かゆうりきを心みたまへ方〳〵やつとよはわつたり渡邊かけ出やゝ若物共かうけんはくくにんめらを一一にねぢくびにせよ竹つなはいつくに有そおくびやうがみがひかゆるかこしがぬけても有けるかそれかしくまんとかけ出る竹つなはしり出あゝらうたいのみとしいらざる所へさし出でこふしの一つもあてられこうくわいする共かのふまじそこのきたまへとかけ出るうんりやうきつとみてあつはれきりやうの若むしやけみやうをなのれくまんといふ竹つなにつこと笑いおゝやさしのごほうのとい事や何にけみやうを聞てめいどのみやげにするか御へんがくびのつけきはなを付ゑさせんこれへよれやといふまゝにおしならべむんずとくんたうんりやうしたてにまはりはねかへさんとせし所を竹つなそくをふんでうちからみひつかけまつさかさまに取てなげくびふつつとねち切かうげんはきたるくにんめはかくこそふるもふ物そとよをとにも聞らんめにもみよわたなへのつながちやくしみたの源次郎竹つなとはわか事なりとみかたのちんへしんづ〳〵とひいたりけりたて山かんせきこらへかね大こゑ上けて打てかゝる金吉つつといで御へんもくびがうずくかとをしならべむんずとくみそくびを取てひさの下にひつしいてなにとごぼうよいきみかちとはらきたまへとめてにてひげををしなで空うそふいてぞいたりけりがんせき下より太刀をぬかんとしたりしが大りきにしめ付られゆびかがまりてかなわすしもはやいとまをたまはれかたいきついでいたりけり金吉につこと打わらいおゝさもあらんいで〳〵いとまとらせんと力にまかせふみければかうべみちんにくだけたりくわいりんゆふけい是をみてはしりかゝつて金吉がこかいなひつたてしやう中へ入らんとす金吉心へたりとゆんでのあしにてむないたをはつたとけたのつけにかへす其ひまにくわいりんとむんずとくんでゑいや〳〵とおめくこゑ山のくずるゝばかりなりかゝりける所へさだか

げすへしけはしり來つて二人共にひつくみゆんてめてへどう〳〵と取てふせくびをかゝんとせし所をきんよしみてやあしばらくまたれ候へてきは二人みかたは三人むげにをとなげなき次第なり君の御まへゑつれ行とうふんにわけてとらんと二人共にからめ取みかたのぢんへさつとひいたてつしゆん今はこへらかね大太刀をさしかざし大せいか中へわつて入はらり〳〵と三重なぎにけるさしもたけきてつしゆんか今をかぎりのたゝかひにおもてを合物はなし殘りし物共四方へばつとをつちらしふんじかつてたつたりしはひとへにきじんのごとくなるよせてのかたよりあふみの國のぢう人にきむらの平太となのりかけいてげんざんに入らんとかけよるをまつかう二つにきりわられあしたのつゆときへにける二ばんにみのゝ國のぢう人おやまの九郎となのつておもてもふらず切てかゝるを車切といふ物にずんど切てをとしける三ばんにかゝの國とかしの六郎はせよるをから竹わりといふ物に三つにさつときりたりけるなかひで是をみてはしりかゝつてむんづとくんたてつしゆん事共せす取ておさへくびをかゝんとする所へほうめいはしりかゝつてこがいなをむんづと取てつしゆん事共せずやさしのこくわしやがしなぶりなんじも共にゆけやとて二人の物を取てふせすでにくびかゝんとせし所子四天王共かけ付たかてこてにいましめ兩大將の御めにかくるなゝめならずに思召それ〳〵都へひけやとて悦の時を上都をさしてかいぢん有せんしうばんせいめてたきともなか〳〵申斗はなかりけり

寛文二年壬寅三月吉日　　正本

四天王最後

第一

藤井寺おち四天王さいご

さてもそのゝちそれひちやうつきてりうきうかくるこうとつきてしゆんがくにらるゝかうなりなとげてみしりそくは誠に天のみちなり其頃天下のふ將をばせいわ天王より五代のそんせつつのかみ源のらいくはうの御しやていかわちのかみよりのぶ公とぞ申ける然るに御子よりよしとのとて申ふはめいちにして御年十八さいに成たまふ若君一人おわしますあひともなふらうにはつなきん時さだみつすへたけほうしやうとて天ちひらけしより此かた國どにるいなきあら物なり是はらいくはうよりあひつたわりざい〳〵の兵共其なのほまれはよにたかしさんぬる比だざい兵ぶのかみやすしげが子に平のごんのかみやす村むほんをおこしよりよしをいけ取にしすでに御命もあやうかりしを五人の物共さがへんにしばらくろうきよにおもむきしをよりのぶこいうけたまひしゆへ力なくろうしやうをあらためてそくしにうばいかへし其上かたきやす村一もんのぎやくしん事ゆへなくついさんしよりよしをいよのかみににんせられかまくらに御所を立ゑいぐわをきはめたまひけるいせいの程こそゆゝしけれ是は扨をきこゝにだざいのやす村かちゝ兵部のかみやすしげはさんぬる比我子のやす村をはけんけのこひやうに打せ我身迄も天下のすまい成かたくむねんといふもあまり有とてわづかのらうどう共をめしあつめいかになんぢら聞かとよ此度我ちりやくをめぐらしてむほんを企て天下をのぞみやす村かきやうやうにほうせんと思ふはかた〳〵もつて力をそへてたまはれとしんてい殘らずかたられける時にらうどうのかげすみ御まへに出尤君の仰のことく御しんていをさつし申又いやしき我々迄ものいぬのさとふしとやらんとてひかげいとうていとすむねんたび〳〵かさなりて一どは此ほんいをたつせん物をとかすならぬ身にも思ひ入のなき物はのみのいきが天につうずとかや申候思ひこみては望にことはり有いつとても身をすてゝ飛こみたらばかたきのかばねにちをあやさてはおき候べきか去なが

ら是はたいていのかたきうちにあらず天下を望たまふなればまつじせつをまたれて然るべし其上五人のからう共が罷有ける内は天下の御望はかなひ候まし年をかさね日をおくり何れもかれらはらうたいなればおのれとじめつするも世のならいひとりひとりもかけたらばそこでくだんのひやらりを以てしせつに御身をまかされよ先思召とまり候へとせいしけりやすしげ聞ておろか成とよかげすへせいをそろへて打にこそじせつひやりもまつべけれたゝちりやくをもつていかにもいしうとつくりとしあふする山のあなたなからくりをまくらをわらしてたくんだり天下を望やすしげなんぢらがちゑはかるましき此やすしげにまかすべしと我かやをさしてぞ三重かへりける扨其後によりのぶは有日うちうのつれ〳〵に五人の物ども御まへにめされせけんのやうたい御はなし有しかは何れも〳〵うけこたへ取〳〵なれや人心引つたへたるあづさ弓やたけ心のひとつ成つわ物のとのこもりげに頼み有けふのくれ君もなのめのあまりにやたゝ打とけて人々御しゆをたまはれよをいをだにやしなはゞ一すりとなをはきくのさけと御ゑいかをぞたまわりけるほうせうやがて取あへず大星のながれのすへの我等迄ゆたかにくめるきくすいのさけさだみつすへ竹わかき時のゑ物とて大くはんとうのかさいふしを打つれてうたふた山もどうせすかいへんもなみしづかにしてたにこと成あんだそうだばいが本ノマヽ
たきん時もあしびきの山より出る清水をなか〳〵しくもくむもうれしきつなはもとよりまいはゑんねんの上ずにて一ちやうしはり上てたう〳〵たらとなるはたきの水たへせしおもしろやとりわけ源家の御よは萬ざい〳〵萬ざいらくとおしかへし〳〵うたいおさめていかにかた〳〵かゝるめでたき折からなればよのせいとうのぎを申上ん扨もせんねんついたういたせしださいのやす村かおややすしげはいまだうきよになからへ有よし承る今迄御さたなきことおぼつかなく存なりもし御しつねんもや候かかた時もいそき御さたあられて然るへしと申けるよりのぶ聞召かれかぎはまづかさねてさたすべきと御ざをたゝせたまひけるつな君のうしろすがたをつく〳〵とみてあかくあさましき君の御しんていかなけんご成道を申せばあんにさういの御きしよくかなあつはれらい

くはうの御時ならば我〳〵かやうに申さず共てうてきと有からはねほりはほりたやさるべきにとかく我我か申ことばは一ゑん御せういんなければせんもなしとにかくかた〳〵もつて此君に御ちうせつをつくす事まつたくもつて思ひとゝまりたまふべし先年もいさめを申て一度さかへひきこもりしにあの御心成申へぐにん共にまどはされよのせいとうまばら成ゆへぎやくとおこりすでになんぎに及れしを我々かかけ付てこそかくあん平にはなせしなれけふ此比の御なんぎにもこりたまはず又ぐ人にまとはされ御せいとうふんみやうならず又重ねていか成あくかたき起る共もはや我々年はよつつ力はうすく成心のまゝに振舞はれずはかゆい所かかゝれすしてやみ〳〵と打たれん事こそ口をしけれたとへぶにくびを打るゝ共よりのぶせいくんにましまさばかきにほねをしわぶらるゝ共おしかるましき身なれ共にんじんをしり給はぬしうのためにあつたら命を捨ん事八まんおもへばしに成しよせん我々都へのぼりかた山かに年こもりねんぶついつさんまいでくらすべしと既にたゝんとせし時にきん時まづしばらくなにのこたへもなく立のかばおふとうと人さみすべしいつはしおくかたの法印衆をよひ出し我々がことのとをりを申聞せとのこそしんにみちなく共御ふだいの人々にくんしんのれいをなし御いとま申上心のまゝに立のくべし尤とばんの侍を近付て折ふし時のそうしや宗印法印宗舟道喜いしやにほうげんほつきやう其きざみはか宮のそうじやうふぢさはの上人も御所御みまいのじせつとのはらのふくりうのたんちやうきをもつてなだめんと御廣間に出らるゝ何もしきだいあり車座にこそなをらるゝ五人の人々扨代々のはたらき一々にかたらるゝつなは十一さいよりまんぢう公へこういうけられ誠にはやさま〳〵のことわりをいひ聞れらいくわうへゆつられらいくわうしきよのみぎりそんめいふしやうにみへしかは我々五人か申せしはまん中と申らいくはうと申かゝるゆふちせいめい成大将ぐんいか成よにも有ましければ我々此若のよにしにそこなわはかしらをかくはひつちやうよびほうのしをする物ぞと五人のものがれんばんしみのちをしほりのみ頼光より一両日もさきにはらをもやぶらんと思ひきはむる所に頼光聞付御枕元によび付られ我いくら

の人をもころしまゐんけしやうの物までかずおほくころせししうねんのらいりんも有物なれ人にこそよれなんぢらはつぢがためけいごの物にも心を付よろづけがのなきやうになんぢらが手にかけてしかばねをもはつこつとなさうとはおもはずしてたいていの物のいふ如くをいばらを切らんなんどゝはさりとては年頃のちぎりの物にはにあはぬ物共かなよりのぶをもり立て代々のはちをからせよと大き成御しうたんの御うらみを承り何も涙をとめかねせんごふかくに罷成る所へくわんとうにぎやくしんおこりぬ四人は京都にめしおかれそれがしにちうばつ仕れと有しかはよりのぶ公はしめの御ぢんたちにことゆへなくかづさの大たちはんぐわんといふあぶれ物今四天王と名付てごづめづあほうらせつよりてごはかつしを子共にあてゝ打取らせかいぢんいたしくび共を御めにかけし其時にやれわたなべかと仰られさもうれしげにたゞねむれることくに御たかい有その時の御一ごん思へはおしき御大將やとわたなへがなけき人々の思ひ〳〵のしうたんにざ中なみだをながさるゝ扨五人の物共口をそろへてよりのぶのふそくたら〳〵申て御いとまのぎを申されける人々何れもみゝ聞なれば尤〳〵たうりにしごくしたん〳〵のきさみをくだいてとめ其の中にきん時は少用にたち聞をもしらずつぎのしやうしにつまあなをあけて人〳〵をそしりけりしらがつぶりをまはしそれ程の心中ならば頼光しきよの時なとをいばらをきらさるぞと口きたなくぞ申けるきん時聞もあへずくるりとまはりみてあれはしゆつとう人の子共成を七八人ぐわいとつかみ引さけ出これとのゝてきに成べきやつばら我等か中間をおいばら切らすのちぐやみとかけ申いせしを取らへたりくちをためされわたなべとざちうへはらりとなげ出すにげんとするをわたなへ又かいつかみ取て引すへおゝいづれもよくつくつたるわかへ物かなさぞをいばら切らぬをあさましいとや思ふらんおいばら切てために成しやうこばし有かたゞしおのれかまへでよりのぶのしきよの時あだ口にはたゝく共誠の時はよも切らし人にこそよれわれ〳〵がみのうへをまたすをはなれぬすゝめのあくちもきれぬぶんざいにてにやわぬひはんのへんほうにほうかまちをひきさきすてんはやすけれとそれにましますそう衆へ

めんしてたすくるぞとざちうへはらりとなげちらしおの〳〵御めん候へとれいぎをのへてそれよりも我やをさしてぞかへらるゝ人〳〵のふくりう尤〳〵ことはりやとみなかんせぬものこそなかりけれ

第二

やすしげかうさんの事

さる程にだざいのひやうぶやすしけはかまくらにしのびゆきこゝによりのぶをたてうとふしやうと我まま成たうけの一しゆつとう人をばあんざいの左衛門ともやすとてやすしげかいもとむこなりかれをたのんでとにもいかにも取いらばやとおもひかさをかたむけともやすがやかたをさしてぞ入にけるばんの侍取付ともやすふさいにたいめん有ふさいの人の聞付て御身はこんどのたゝかいにきやくとの一みたるべきに何としてかは命たすかり是迄來りたまふはそもふしき成とぞ申さるゝやすしげ聞てされば候それかし是迄參るだんべちぎにあらず我子のやす村めがぎやくしんをくわたてついにはほろほされあまつさへ我等までかやうのていたらくになしはてぬそれ人がいのしゆくわうとてぬすみをする子をもてはおやのくびになわをつくるおに子をうめるおやとてもふびんに思ふもならひなりとりわけふしはもちろん時のこうろんにもまけよといふおやはなくことさらせんぢやうのはたらきはいさきよく打じにせよとこそいへくちおしややす村はよしなきむほんを起しつゝとしよりたるおやに思ひをかくるやす村は子にてはなくてかたきぞやとしはよつつらう人といひたゝずみはつべきすみかもなしあはれ日比のよしみに今一度君をおがみ奉りをいゆくすゑのはてをはせめて心やす〳〵おうじやうせさせてたびたまへこんじやうのほうをんに此望かみへ申上てたまはれとないくどいつ申けるともやす聞て誠にもつてきでんのしんていかんじいつて候あらなにともなや是は近頃申にくきそしやうかなろふ成ましぎはしらね共ふしのならひたしやうたもんの中だにもたのみをかけられ命をすつるも侍のぎりことにきでんのいもとはそれかしか女と成ばかりそめなから五百しやうのゑんにひかれて有しよしとうざいにをよぶ共いつはしごんじやう申さんと御所をさしてぞあがりける御まへになれ

ばつゝしんでかしこまりみぎのおもむきごんじやうすよりのぶ聞召されそれこなたへめせともやすはつとこたへ罷立やすしげをつれて御まへに上りけるおまへになればはるかの下ざにしほ〳〵としたるふぜいにてつゝしんでかしこまる君御らん有ていかにやすしげこんとやす村ぎやくしんとなりとりのぶに弓をひくことなんじもうとうしらざるとのおもむき尤さは有べけれ共去ながらもとよりわりなきおやの中ことにゑんじやのしうこなればじよの物のさみなさるやうにきしうをかいてはやとくみせよとの御ぢやうなりかしこまつたりとてわか宮八まんのごおうを申おろし日本國中の大小のじんきをかきしるしまつたくこれいつはりかきにあらずすこしもひやうりこれあらば此もんのばつとかうむり三日かうちにろけんせしめちくびとなつてごくもんにかけられふたたびはぢをさらすべしとのきしやうもんくだんのごとしとかきせしめるよりのぶ聞召あふしんべう〳〵おやかしよそんにひきかへてやすむらは天めいつきはてよしなききやくしんゆへついに打れぬ我うらむる事勿れやすしけもとよりへんせついつわりのしやうずなればかうべをちに付涙をはら〳〵となが いて誠にもつて有かたき君の御でうかなぎやくしんの物のおやなれはかゝる御ちやうはくだるましきと思ひしに君せいくんにましませばかやうの御ちやうにあつかり申事めうがなき仕合かなかへす〳〵もやす村めは何たるいんぐわのめぐりきて君に弓を引ことおもへは〳〵もつたいなきくにんかな我お子のゑんにむすほふれ諸人におもてをまぼらるゝかうの程こそ口おしけれとかほをあかめてなきいたりよりのぶ聞召申だんふびんのいたり去ながらつみなきとてきやくしんのおやなればたとへ命はたすくるともさどかしまゑぞ八ちやうへもつかはすへきが子もなき物のことにともやすか女はなんぢが一ふくのいもとゝ聞さらはともやすにあつくるそいかにやすしげずいぶんそれかしにちうせつを仕れとて御こそでをくださるやかてちやうだいいたし御つきのまへ罷出かみをこそ〳〵とそりこぼしすがたをかへて御まへに出此たびの御おんの程身にあまりて有かたく候しざいの所を御しやめん成され今しやうこしやうの御たすけにあづかりぬ此うへはおとこをたてなばよくす

てられず人のそしりのなきまへにきみのなさけをふつくわのゑんになし奉るかしらをそり御いとまたまはり都にのぼりねんぶついつさんまいにてうきよをくらしのちのよをたのみに仕らんと申上るよりのぶいよ〳〵申所しんべうなり心ざしあまりふびんに有間いづみかわちをちりやうとなしふちいてらをほんぢとさだめ有べしと御はんを下されかたしけなしと御まへを罷立らうどうのかげたかを近付もはや天下はそれかしが胸の内におさめたりと都をさしてそ三重上りける是は扨置四天王五人の人〳〵はひとつ所にあつまりてわたなへ申されけるはいかにかたかた我〳〵よりもさきに子供をのぼすべきかわかき物はこぶあゆみもはやかるべしそのうへしよちのぎを申付させん又我〳〵かくうき世をうらむる京のほりなればたちのきしよりあつまのかたへまたこすへき共おもはねは今一日もさきにひかすをおくりつゝみちすからのめい所きうせきをもみめくり心しづかにのぼるべしをの〳〵もつ共とて扨わか共をちか付いかになんぢら我々は明日都へたつへきなりなんぢらはあとよりばんしのしまいを取おさめずいぶんしたしたまでもをんびんに申付五人いつしよにしめし合てのぼるべし扨又ろしのあいでもゑしやくをせよ少もぎりをやふるなと事こまかにいひきかせすてにやういをしたりけりとにもかくにも此人〳〵の心の内はかなし共中〳〵申斗はなかりけれ

第三

ほうせうすへ竹さだみつさいごの事

さるほとにやすしけ入道都に付て五人の物のほるよし天のあたへとよろこびらうとうを近付聞ば五人の物共はよりのふをうらみすでにかまくらを立のき都へのぼると聞て有あはれいかにもしてかれら五人をたにもうたは天下は我まゝなれ共まゝにならさるはゆうりきふりやくのたつしやなり何とそよきちりやくかなとあふきをひたいにあてしばらくかんしていふやうはいかにかけずみそれぶしたる物のうつたへのそまざるもいひかいなし爰に日本一の事を思ひ付て有はいつもかれらがおり上りのやとはみのゝ國おおはかの長か所なりかれをたのむにいかでそりやくにのがすべきかげすみ聞て扨もゆゝしきはかり事か

なはやたちたまへわか君とぐんびやう共をもよをしてみのをさしてぞ 三重いそきける程もなくみのにもなりぬれはおゝはかの長かもとにゆき長をひそかにちか付いかに長それがしきたるだんへちのきにあらすかやう〳〵の事をくはたてごぶんをたのみにして是まで參候と金百兩取出し是はとうさのいんぶつとて長にたふ誠はいやしき物なればとうの山のやうにおもひ三どちやうだい仕何事もそれかしに御任せ候へとてたな心を合て申せしはひとへにわしくまたかのことくなり入道なのめによろこひ萬事は御へんをたのむぞと三百よきのこしをきおはりをさしてそいそぎける是は扨置四天王五人の人〳〵はらうどう四五人めしぐしてふだいのなしみあさからぬくんしんの中もたへ〳〵のかんなきみとはおもへ共なごりぞをしきいにしへをおもひいつればなつかしやうまれし所はおかまがたさだみつはしなのゝうすいのうまれすへたけはとを〳〵みほうせうはひたちのむまれきんときはいつの國松川の生れつなはむさしの三田のうまれいか成きこしづのおがたぐひまでもちぶさわすれぬならい成に一やにかはるあすか川かすむそなたやかまくら山雲井の月をみやのそらふる里をさつていつの國二とせとかねししゆくんの中をへたてはこね山足からしもにさしかゝりこゝはいにしへらいくはうの御らうにんのみきかしの木のおゝかみあしからのきたのこしまのかへかほらとて大きなるいわやありしをたゝみてようをんのためにこしらへおきてきよせばうちころせとてぞんぶんはなはたかぎりなかりしかいざらいくわうをはいし奉るとおもひたちよりむかしをかたらんとはやまつかへがほらになればつなきんとききさだみつすへ竹いかにほうせうよくみたまへこはらいくはうの御ざのまなり四ほうにいしをたゝみあげしかいわきにこけほこりしよほくもおい木の間をきさみてよりいはびこりみどりをあらわし中にも此まつはらいくわうびやうきの御時此處にて御ほんふくありちからためしのねぢまつはとは是なりなにが大ちからにてきめられたればさのみせいちやうもいたさずまつはもとよりときわにて變らぬものはまつの宮かわりし我はわれ〳〵かとしのよわいきみはかはらせたまふぞやあらむかしこひしやとこほるゝなみだのひまよりもほうせう申さ

るゝはさてもたんばの國大ゑやまにてしゆてんどうじにあいしとき君らいくはうの御はたらきすでにどうじさかづきもちきたりてそれかしにむんずとさつ其時らいくわう御まなこのつけところとうさのゑしやくみのとりまはしよじともせはひつくまんかく共せばさしとをさんとことばにはなをさかせこゝろにくじをもちたまふかゝるめいよの大將のまつだいにいたつてあるべきかとなみだをながしかたらるゝきんときはきみ是なるいわを取あげそれがしにたまはりしをそつととりあげ御そばにおきたればさもうれしげにゑみたまふそのいしは是なるかいまさらおもひいだされてあらむかしこいしやすへ竹はうらべの六郎といふときす百人の中より君をうばいとりたてまつり此ところにきたりやまに入このみをひろいてきんときにはたきゞをこらせ君をいたわりしうきをかたるつなはみやこの大いくさにうちじにせんとおもひしかともらいくはうをみたてんとつるきのやまをふみやぶり君をたづねまわるところにさだみつをうすいのあらどうといふときふりよにゆきあいしゆくんのゑんのむすばせはや二むかしのすぐるはゆめのうちなれやあらこしかたこひしや、とにつき、かくにつきても、おもひいだせは頻りにこゝろがみたるぞやあゝさてよしなやなせんなきわれ〳〵ながいきしてあたわぬおもひをすることよむかしをわすれぬ物がたり百日百やかたるともよむ共かく共よもつきしいざゝらいそきのほらんとみしまのみやにつや申はやよこくものひきまよりはらにしほやのけふりたつしづやかねけんよし原をゆいにけらしなにこりえのむねはふしそではきよみかせきなれやふるきなかめのあとまでもさながらしゆせうにおもわれてけ本ノマヽ出て心をくばるまりこ川うつの山べのつたのほそ道をわけてのぼるぞ物うけれおかべのつゆにすそぬれてそでになみちる大井川くもはにふねをみつけのこうと天りう川のわたりしてなみのさかまくはまつや人にも心おかざきのはなもちりうになるみがたみのゝ國に付しかばおほはかのちやうじやかしゆくの所に入たまふ長なのめによろこびこくどのくはしをとゝのへしゆをさま〳〵にぞすゝめけるさてそのゝちにかねてたくみしことなればどくのさけをてうしに入此さけと申はかた〳〵われらかやうなるらうた

いのもちいて心のわかやくくすりのさけにて候とさも有そうにぞ申けるそのときさだみつかはらけ取あげのみたまふのこる四人の人々もさいつさゝれつのむほどに長よろこびしすましたりとれん中さしてぞ入にけるもとよりどくのさけなればにはかによいぞきたりけるその中にもすへ竹は大いきついでいふやうは何とやらん此さけはまさしくどくとおぼへたり其時人〳〵われ〳〵もさやうに存なり扨はやすしげ入道めがぎやくしんとおほへたりといふよりはやくかくし置たるぐん兵共うんかのことくみたれ入さだみつ是をみて大手をひろげて五六人かいつかみおのれなりとも此よのさいごにとて首を引ぬきすて年つもり七十三を一ごとしてついにむなしくなりたまふのこる人〳〵是をみてちかつくてきをてに〳〵ひつさげ誠に天下に五人のあら物かおのれらがてにかかりしせんすことのむねんさよとをの〳〵くびをねぢ切ひきさきすて扨すへ竹はかた〳〵御いそぎ候へやしでの山にて待申さんとかうしやうにねんぶつ申つもるとしは七十五あしたのつゆときへにけりほうせうもはやかなはしと思ひ又たぢ〳〵としたまへはきん時みておしとゝめまつしはらくといへ共引ちぎつてかけ出れば金時もつゞいてかけ出るほうせうむしやひつさけ出おのれらにさいごの力をみせんとさかさまにひきさきすてたまふ扨わたなへに打むかいもし命ながらへましまさばきだう丸を萬事はたのみ奉るあゝ名殘おしのわたなべとのやなこりをしの金時やと七十八を一ごとしついにむなしくなりたまふ金時もむしや五人つかまへゆんでめてのひざに置き此太刀は一とせ頼光の大江山にてきじんたいしの御時たまわりし太刀なれはたちのいとまも是迄と思ふまゝにぞ切たりけるまなこも暗み大いきついていたりしがわたなべ是をみてれん中につつと入やとの長引つかみどうとおきやれ金時まだわたなべか是に有は心をはつたともて金時にわたし又かけいりて七八人ひきつかみおのれらがぶんざいにてわたなべをはうたんとやて打にせんもあやしとて百びろ斗のいどの中へさかさまに打こみ其後むま引出し長を引くくわあふ付にしててごろなほうをおつ取何と長せにかねをわしつかみしたがよいか是かよいかたゞ今爰ではきだせいそげや〳〵金時とかまくらさして下り

ける此人〳〵のふるまいみなかんせぬ物こそなかりけれ

第四

やすしげ宿をかたらい子四天王打たんとすかくて其後つな金時はかまくらに付五人のこ共をちか付めんほくなけれとわか共よしゆみをしよくする我々が此がいに及ふ事はよく天めいに付たるらんと涙をながしかたりける人々よこでを打合しはしなみだを流しけるこぼるゝ泪のひまよりも五人の物共長かそばへ立かゝりやれおのれめはぐにんかなとかくかたきやすしげか金きんをあたへいかにたのめばとてことによれわつかのよくに引まよひ天下のかゝみにそなへられ誠にゆうりきはたうと天ぢく我てう三國に有ましきとてしゆみの四しうをかためとり四天王となつけらるゝ天下のまもりをいだしぬくはひとへにいしをいだいてふちに入がごとくなりゐゝ我々ももろ共に打つれてのぼるならば今のむねんはよもあらじさしも我等がおやとしてかゝる長などがたばかれはとてつゆも思ひよらされはあとよりのほれと有つるはいとまことばとなりたよなさなきだにおやと子は此よばかりのちぎりと聞はこいしき哉や我々はようせうちくばの比よりもせんじやうにつれられての山にぢん取時も有同きのねにまくらをならべぢんやをいづれはつれて出かへれは共にいきをつきかやうにあとに殘らんとはなか〳〵思はざりつるに是が限りのわかれかとこゑをもおしますなく時はわたなべ金時しうたんす時にすへ竹が一子すへしげは長をはたとにらんであゝにくや己れにようたたくみそと太刀ひんぬいてうたんとすほうせうか一子きとう丸いや待たまへ我うたんさだみつの一子しげさだは我にうたせてたまはれとわれさきにと打かゝるわたなべおさへまてしばらくいかに金時あれみ給へやたかの子かゑをうばいあふことくなりいかにかたかた是はおの〳〵三人のかたきにあらず我〳〵二人の物共はしやく年の時よりも此としまでしんし兄弟よりむつましと五人は五つのゆびのことくにてもし一人なり共大事出きなは殘四人の共はそれをさいこと相さだめ候へはなんぼうむねんに存かれめをなまでに打さて二人さしちがへしなんとは存しか共かた

かたかへか末を思ひしゆへまつ長めはてきといへはいふさしてもなき物なれば心ゆかしにきりたまへ一ばんのたちはうすいのあら二郎しげさだはゆんでのかいなをきりたまへ二ばんはうらべの小六郎すへしげはめてのかいな三ばんにきどう丸ゆんでのたかもも扨四ばんにはすねのあく太郎めてのたかもゝ切たまへ扨又五ばんはみだの源二郎竹綱なんぢか心まかせにさばくべし竹つなかしこまつたりとてめてのうでにてむないたをおさへゆんでにてくびふつつひきぬきはるかの下にすてにけりわたなへみてあふ〳〵きん時あれみたまへ六十斗のくははう物か六つにわられ候ととつとわらふて扨わたなへ五人のものに向ておの〳〵はいそぎ都へのぼりかのやすしげを打たまへいまだふぢい寺にい申べくそさて我々はしはし是にのこりどくをもはきようじやうしあとよりのぼるべしと互ひにいとまをこいこはれらうどう四五人めしぐしよを日についで急ける是は扨置やすしげ入道思ひの儘に長をたのみかけたるをちか付此所の長文太夫はかの五人の子共のやどなれはかれを頼んて打べきなりかれはわがき物共なれはおや共にはよもにまし人四五十きのこすべしまづぶん太夫をよひよせよととてやかてつかひをたてにけりふん太夫承何事やらんときたりけるいかにふん太夫かやうかやうのしさい有ひとへに頼むとあれはもとよりぶん太夫わしのしやうにておだんなとしてじやうやとをいたすうへはかしこまつたりとぞ申けるやすしげきいててていしゆそうかあふたのもし〳〵いかに誰か有すゝり〳〵と有しかばすゝりようしをもち來たるさら〳〵とかきておはりの國を取らするとたゝ天下をわが物がほにていしゆうに國をぞとらせけるぶん太夫よろこび何事もとかくそれかしに御まかせ候へとやす〳〵とうけあへはらどう共をのこしをき都をさしてぞのほりける是はさてをき五人の人〳〵はいそぐに程なくおはりの國につきしかは六郎すへしげはいかにかたかたまずけふは此所にとうりうしひそかにのほらんみな〳〵もつともとくだんのじやうやどぶん太夫がもとへ下人をよせおの〳〵うちへ入たまふぶん太夫よろこふてしゆをさま〳〵にもてなしけるそのときすういのあら二郎ぶん太夫を近付このころ此へんにてなに事もきかざるかぶん太夫承

りされはなにこともいさゝかのぎはぞんせずと申やひさしくあつてぶん太夫ちやうだいへつつと入たくみし毒の酒をちやうじに入人々のまへにかしこまりかた〳〵もつて御しやうらくのよし五三日もまへ承はり候はゝよう〳〵仕り候はん物をふせいもなくて御恥かしひとつはきこしめされよとしきりにこそはすゝめける時にあら二郎おろか成とよていしゆなんぢもよくしづつらんうと〳〵しいふりなせそわれわれかちゝうへはさけにてむなしくなりたまふさけはきんしゆあらいや〳〵のたゞとれ〳〵とそもうされけるていしゆ一ほん仕りあゝあやまり候さらばよもすから御はなし仕らんかさりながら此てはふねにて候とおとけてさけを引にける五人のとのばらよいとうけかなといちどにどつとぞわらはるゝまことにわらふ心へてあまたのゆふぢよ五人十二ひとへをかざらせてやかてさしきにだしにけるにうほう申けるやうはいかにとのばら立はやよもふけてはんべりしは御とこ取らんと申六郎きいて大のまなこにかどを立はつたとにらんでやあわれ〳〵は父におくれていまだ七日もこさずしやうしけつさいのところへ女を（本ノママ、）いたしざしきをけがすほうや有罷立としかりければあきれてこそはたちにけりさて五人の人〳〵もまことによふけつらんとひとつところにふすまをひきせんごもしらずふしたまふやはんばかりに竹つな人々をゆりおこしのふいかにかた〳〵はおやのかたきをもちなからかくゆたかにふすものかなにとやらんにはかにむなさわぎのしけるがかた〳〵はさわがざるやきどう丸きいてさればわれ〳〵もしきりにむねかさわき候たけつなきいていさねやをかへんとてひとまわきにそいたりける六郎かいふやうわれ〳〵かちゝ上わかやうの事もあるべきにはかなくもうしなわれけるよないさ此五人のふすまをもとの所にねすがたにしてをき事をためらわんとふすまをもつてひとがたちにとりつくろひいねたるやうにつくりをきつきのまへに入ひつそとなりをしつめたる所にあんのことく入道がかくしせいぶん太夫をさきにたてねやへ入てみてあれは五人をなしまくらにゆづくり〳〵とふすとみてぶん太夫こゝろに是へ〳〵とをとなせそとまねきよせくだんのふすまにわれも〳〵と打つくる五人一どにとんで出此やつばらを一人も

なく打とらんとさてぶん太夫をひきぐし小六郎かいふやうはをのれがふんべつにてわれ〳〵をうたんとことははすの絲にてふしの山をてんにつりあげんとするに事ならす源次郎がいふやうはそれよりちかき事ぞあるうら〳〵のかり人をたのんであみをせかいにをろしてみよかかろう物かあつばれをのれかをふぢうばくわんすをはしさいてんへもつりあげてせんしちやはかりてすます事をあまりにをのれかどうよくしんゆへあがりなまずのみづのむごとく口へもいらざるみつをのみ百日よごとに入るゝ共あきたらねともすゑいそぎのたびなればとてさかさまにひきさきすてたまふあく太郎いふやう是程のたくみをするうへわいまだをくにわなに事をかしてをきつらんとてをの〳〵うちへ入所にらうかのいた二三まいをちまとしてたちかたなをうへならへをきにけるこれをはしらであく太郎いきをいかゝつてあゆみしがかのいたなかよりはつしとをれめき〳〵〳〵はら〳〵はらとつこいとんだされともあしにけんをふみたてゝことゝもせすなむ三ぼうとぬいてすてかた〳〵是みたまへとぞ申けるたけつなみてをゝさすが御へんはをにのまごほどありけるよなすこし此ていをきんときにみせ申たやとをの〳〵とびこへ〳〵れんちうに入にけりとも人一にんもあらさればあらきやう〳〵しのきやつばらかたくみかなとそれよりもをもてをさしていでみやこをさしいそかるゝこの人〳〵のゆうりきみなかんせぬものこそなかりけれ

第五

やすしげかまくらの城をのつ取付よりのふをちたまふ

さるほとに人〳〵は程なくみのゝ國に付しかは人のなさけにて三人の人〳〵のはか所にぞくみやうをあらわしあたらしきそとは有人〳〵みて其まゝそこにたをれふししばらくなみだをながさるゝこぼるゝなみだのひまよりもをもひ〳〵にはなをさしひさげの水をたむけてはいま參らする此みつはうらべの六郎すへしけか參する是はうすいのあら二郎しげさだか參する是はひらいのきどう丸が參するとよきにうけ取じやうぶつなされとんせうぼだいとゑかう有すへいそきのたひならずはせんじしきをもくやうすへき

に心ばかりのゑかうぐさせんくわ萬くわとうちわひ
ゆるてかなはぬみちなればなごりのなみだほしあは
す都をさしてぞ上りける是はさておきだざいの入道
やすしげはかしうになればらうどうをちか付てもは
や天下はとつた物ぞこのうへはよりのぶをほろぼさ
んまつさい國へふれ狀まはせ承り候とて一〳〵くわ
いぶんまはしけるさて國〳〵のしよ大みやう一々ひ
けん仕したかふ所の大みやうまづ一ばんにかつらの
ぎやうぶすきかげしうたの八郎ありしげあすけのひ
やうへはせ川とうまつらうとうきつかわふなごした
ぢをのくわんじやすだの源藏むろやまはんぐはん三
とのかんせきいまゝの太郎よし田とんたひうがのせ
んじつくしむしや大せんせうけんあかざはしろさき
れんばん以上三萬三千よきにはた一ながれさつとた
てかまくらさしてぞ 三重よせにける是は扨をきわた
なべのつなきん時にむかつてなにとわか物共をさき
へのぼせわれ〳〵かやう成物たにもくちのよき長め
にたばかられかやうのていになり申すましてわかき
物は何のしやべつもわきまへずやみ〳〵と成ならば
なみだの上のなみだなりいそぎをつつきちからをそ
へんきんときとはやしやうぞくをぞ 三重したりける
是はさてをき五人の人々よを日についてゆくほどに
河州ふぢい寺に付て六郎すへしけ大こゑ上る源二郎
をさへてひそか〳〵かたきかをちる事そあるべし大
事のかたき入道たにもうつならばのこりはうぬがざ
んまいさもつとも〳〵さあをしこめめんぞうろうか
のすみ〳〵までもこにくだいてたつぬるに一人もな
かりけるこゝにあく太郎かこほうし一人ひつさけい
て入道はととふたかまくらのかたへといふやれかま
くらにくたらんとみちをはやめて 三重おどりゆくほとに
あふみの國につきしかばゑち川にてつなきん時にはは
たとあふたして〳〵かのありそうはかよやう〳〵い
ざかまくらに御けかうあつてかの物めをうち申さん
あふ心得たりまつみのまでくだつてかまくらのさた
をうかゝいうつべきてだてをさうだんせんとてみの
の國へぞいそがるゝ是はさてをきやすしげ入道かま
くらにをしよせときのこゑをそ上にける御しよのう
ちよりさたうへいまのせうくにとき大てのやぐらに
あがりなにものなればらうせきやなのれきかんとよ
はゝるそのときかげすみこまかけ出したゝ今是へよ

せたるはだざいのひやうふやすしげからうどうにいつみの國のちう人ほりのやへいだかげすみと申物なりいぜんつくしのいくさにうたせししんしきやうだいのかたきといひしゆくんのはぢをきよめんとかくのごとくにふるまふなりいそいでしろをわたされよとたからかにのゝしつた國とききいてなにかくいふはかげずみとやをそらくは此くにときかあらんかぎりは天下ののそみかなふましとやぐらをひらりととんてをりいくさははなをちらしけるこゝによせてのぢんよりも六尺あまりの大のをのこまつくろに出立八尺ばかりのてつのほうをふつてかゝる所へみかたのぢんよりむしや一きまへに出下をさの國のぢう人さるしませい五ともやすとなのつてもつてひらいてうつたちををのこもとよりめいぢんなれはほうにてさらりとうけながしかへしてむねをはつしとつくともやすひらいているをのことびすさりよれくまんとをしならべむずとくむりやうほうをとらぬ大力ひきよくをつくしもみ合され共をのこちからまさりともやすをとつてふせくびちうに打をとしはせよる物をきどくちまでをつこみ物ぐさいいくさかなとほんぢんへひきかへす國時君のをまへに參りみかたせうせいよせては大せいあらてを入かいせめこみ候君は一まつをちさせたまへそれがし一人のこりいてふせぎやを仕らんと申けれはちからをよばずびしうへをつべしなかせんどうををつべしとよりよし殿を伴なひをわりをさしてぞをちらるゝ扨その後にくにときはさうひやうのくびのつらのかはをはきたか〳〵とさしあげいかにかたきのなんぢはら君をやこたゝ今御はらめされたり此くびほしくば我命をたすけよとくだんの首かしこになげよりのふをや子によくにたる首二つかたきのかたへぢさんしやがてその身はあとをしたいて落にけりそれよりかたきじやう中へみたれ入くびのせんきを仕りこゝにをもてのかわをはきたるくび有是ぞ誠のくびなるとわれとらん人とらんとくびをばいあふ有さまを物によく〳〵たとふれは是や此たみのいやしきわらんべがぢげ人のふるまいにをりだいの物をひらかせてばいとりかちをするごとくをしあはせつかみ合かしらをはられうでををりどしいくさをしいたしさしもひろきじやうちうにしにんの山をつきにけるされ共やすしげうんをひらい

たりさしもいみしきかまくらのしろをのつとつてよろこひ事をぞなしにけるきせん上下をしなへにくまぬものこそなかりけれ

第六

よりのぶ御うんひらきたまふ付やすしけさいご

さるほとによりのふをやこほどなくをわりのあつたのみやにつきてかんぬしはたいめんありかやう〳〵とかたらせたまへばをどろきてをくへしやうじ奉り此頃の取さたにわたなへのつなきんとき五人の子共にみの丶國にあらるゝよしをうけたまはるいそぎ御出をたまはり一たび御うんをひらかれよと御しよをしたゝめ下人に持せみの丶國へぞいそぎけるみのにもなれはわたなべに御書をわたすわたなべ取上いかに金時是御書たまはつたるとてはいけんすしよにいわくせん年かた〳〵のかいりきを以てついたうせらるゝだざいのやす村かしんふ入道やすしげむほんをくわたてすでにかまくららんぎやくに及ふせぐといへ共其かいなしよりのぶおや子ろめいすてがたくおはりのあつた逃ちやくしおはんなんぞ是とうしゆゑんさくらのくわいのしゆゑんのきさみかたくもつてくでん有しを大しゆのあまりもちいさる事今もつてみやうけんをはづかしむみな是おんしゆのとかたりほとんどさけはゑんめいすいといへ共いさゝか是大てきやくたり大しゆせさずんばいさめをやぶらずかやうにはぢをもさらけし物をとかうくわいす方〳〵もつてせんくんのはぢなりさつそくさんこうせしめられざいちうのかたきをたいさんし二たびくわいけいのはぢをすゝがしめたまはゞそうぞくのほうをんなりきやうくはうとんしゆ是みたまへ金時御ぶんていの程こそいたはしけれ金時聞てたとへ御所にあつからす共いそぎくたつてたいじせんと思ひしはや打たゝんと尤と五人の子共いへの子らうどう引ぐしあつたの宮へぞいそぎけるよりのふおやこたいめんすいかにかた〳〵めつらしや扨さたみつすへ竹ほうせう事もひとへに我なすしよいとさしあたり今更身にもむくう事よめん〳〵ぼくかぎりのなきよりのぶなり去なら今一度よりよしを取たてゝたまはらばくさのかげ成らいくはうもよろこびたまふべしと御なみ

だのていつな金時も君の仰のおもくしてかんるいきもにめいししがなみだをとゝめかの入道めがなにとあめかしたをうごかす共此わたなへかあらんかぎりはとしこそよつたれしらがこそはへたれ共心ばせゆう力たましいあつはりとのわたなべ成はたゞ何事も御心やすかるべしとさてよりよし公を大将ぐんに取たてけりよりよしの御しやうぞくにはむらさきすそこの御きせながこがねづくりの御はかせいわ切といふ太刀をはきらいくはうよりたまはつたるほしかぶとをわらはに持せ御馬しるしはひめこまつにしらはとうつたるを是も下人に持せ出たまふあつはれけんしの御大将やとおの〳〵はつとそかんしける扨あいつゝくしるしには一ばんにしやうにけんをうつたるはさだみつの一子うすいのあら次郎しげさだ二ばんにしかのつのにみつゞしはすへ竹の一子うらへの六郎すへしけ三ばんにしらはた五本たてたるはほうてうの一子きどう丸四ばんにあかはた二本そとは三本たてたるは金時の一子すくねのあく太郎むねとさ五ばんに御へいにくびみつさしたるはわたなべの一子みたの源次郎竹つな扨よろいは五人一しよにしろいとおとしに金のかな物うつたればひとへにすいしやうの玉をみがけるごとくなり金時はうの花おとしのなはもよきのはらまきにきつきやうよけれはゑ物〳〵のこどうぐを下人に持せつなきん時わか物共にうちむかいねこや（本ノマヽ）にぢんを取時はたいこをうつてせいをそろへよのぢんにおよびて山中にぢんを取ときはかいをふきてせいをあつめよ扨も〳〵ちゝ共によくも〳〵にたるむしやたてかなかゝるきりようのわか物にはな〳〵しきいくさをせめてみんとおもへは是そおいの思ひ出成るべしはや打立わか物とかまくらさしてぞおしよするぐはんらい人〳〵しろのあんないはしつたりやもたてもたまらせてこそつめのじやうへよせかけ時のこゑをぞ上にけるしろの内よりもりまさやくらに上りいか成物ぞなのれといふ其時わたなべこまかけよせやあうぬは何物のなり上りぞなのれることばのみぐるしさよなをなのれとよばはりけるもりまさ聞て我はたれとか思ふらんとさの國の住人しほたのせうじもりまさといふ物そと一もんじに打て出るを金時一子あく太郎となのつててつのぼうを持すな〳〵とかゝるよとみへしかさん〳〵

に打くだかれてしに丶けりあく太郎から〳〵と打わらいてやれ〳〵こと〳〵しくなのられたるかいもなくしほたははらを打くだかれぼうをよごされ候ほんぢんに引にけり又むしや二きかけ出一人はあきの國ちか清となのる一人はむろ山の判官清ひでとなのるつなはみてやれ若物共かたきのまねせそ一人〳〵出打て取其時六郎太刀ひつさけてかゝる二人はせんごより打てかゝるをすへしけひらいてちやうど切ほうさき切れのつけにかへすくびちうに打をとす所を正のぶおがみ打にする所をつかふで四五間はらりとなぐる城よりしうたの八郎切て出るあら二郎か大三のやりにてつきさすかゝりける所へぎとう丸かけ入よきむしや二人ひつかつきてかへりけるわたなへみて今にはしめぬはやわさのしんろうと申所へくたんの大男物をもいはず打てかゝる竹つなみてめづらしいけだものととひかゝつてくんだやあきやつめはよつほど力が有とみへた何とておのれは物をははしかぬなんぢうしの子か其時口をしや諸侍をちくしやうにたとへるなすみ山くま太郎となのる源次郎聞て扨は山かのすみやき成かむさいやつかなぢまんでものをいはぬな今生ごしやう打たへにせよわたなべか子源二郎竹つなといふもあへずふり上いはに打付られみぢんに成てうせにけり是をいくさのしとめにして城中へみたれ入やす重かくびになわを付五人の物かひつはりよりのぶの御めにかけどう切に仕る二度御代を取立すへはんじやうめてたし共中〳〵申斗りはなかりけれ

丑九月吉日

公平誕生記

初段

てん長く地ひさしくさかへめでたき折ふしきみやうのゆうししゆつしやうしてこくかのぢらんをなしける其らんしやうをたづぬるにゑんゆうゐんのございせてんくわん二年八月十五日にたゞのまんぢうしつけしてまんけいとかいみやう有ゆうへいいんきよの身と也給へばちやくしみなもとのらいくわうちんじゆぶのしやうぐんににんぜられせつゝのかみになされ大うちしゆごのとうりやうたりさればしたがふらうどうにはわたなべの源五つなうらへのすへたけうすいのさだみつさかたの平太きんときい上四人のもの共は四天王とかうしてよにいをふるふつわもの也其中にも金時はやまうばの子成しが一とせらいくわう山中にてきぢよにもらいたまひつゝくんしんのよしみをなしにちやにちうを勵ましるいたひぶさうのゆうし也さればしゆみに立給ふたもんぢごくぞうちやうくわうもくでんをひやうしてわうじやうしゆごのゑぶなればたつみにはすへたけひつじさるにはさだみついぬいはさかたのきん時うしとらはきもんとて其中にも渡邊四天王のずい一なれはうしとらにぞきよぢうする然れはていともおだやかにいとたけかぶのもてあそびげに七年のよるのあめしらぬばかりのたのしみにてぎやうのけいべんくちはてしゆんのつゝみもねをたへてすたれたるよをおこさるゝよりみつの御いせいをうらやまざるはなかりけれ是は扨置其比又さかたの平太きん時はしゆくはんのこと有てくらまの寺へもうでけるくらまになればわに口てうと打ならし思ふ事のはこまやかにまもらせ給へとふしおがみ是よりきぶねへ參らんと山ごしにそれよりもきぶねをさしてぞまふでけるそう正かたにのほとりにて年の比十六七と打みへて眉けだかきよそおひのあたりもほとりもかゝやきてひかる斗の女房さもしほ〳〵と打しほれなみだにくれてぞをりける金時是をあやしみてこはしん山に只ひとりかゝる女性はふしき也いかさまけしたる物ならめよし何にてもあらばあれとがめんと立よりなふ上らう御身

はいか成人なれはかくもさかしき山中をひとりはとをり給ふぞかし女ぼうは聞よりもはつかしげなるふせいにてやさしくもとはせ給ふ物かなみづからは少しさいの候て是までまよひ出て有みればさすかのゆうしたりたのみたき御事有あはれたのまれ給はんやとうちきのそでの花ぞめをかほにあてゝぞなきにける金時いとゞあやしくていか成ことのましますぞ一じゆのかげに立しのぶもたゞならぬちぎりと聞人こそおほきに此きん時がとをりあいしさいを聞もゑんぞかしたとへこの身はうしなふ共のぞみはかなへてまゐらせんかたり給へと申ける女房はうれしげにあたのもしの仰やなさあらはかたり申すべしはづかしながらみづからはさるくぎやうの御方にみやづかいさふらひしをあゝなさけなやすさまじきねじけ人の口ゆへにあるじの人とわらはこそひそかにちなみまゐらするとあた成なんを立られて北の方へもれ聞へ有もあられずさふらへばよしやたゞよの中のなき身とならんと心ざしはからずやかたをしのび出是までまよいまいらするあはれたゞねがはくば御てにかけさせ給ひつゝみし物とおぼしなはなきあととふて給はれとなげきしづみてたのみけるみるにたへ成其有さまなか〳〵ことばにおよばれずさすがにたけきき時も心そらにうきくもの立まよひつゝうかれたちあらいたはしの御事や聞も中〳〵あはれ也此うへは我たちへともなはんたゞ何事もゑんそといふ女房につこと打わらひまいりたうはさふらへ共わらはながらへ有ならばさだめてうきめにあいまいらせんさもあれば御ためもいかゞ也又つく〳〵みまいらするにあゝおそろしのかほはせやゆるさせ給へと申ける坂田聞よりせきかねて何おそらくは日本に此金時などがいざなはん女ぼうをくげとの原がぶんとしてたとへたづねてあればとて何事か候べき心やすくおほしめせ去ながら何とやらんそれかしをうとませ給ふことばのすへつらいぶせきはうまれ付心はほとけで候ぞやせひともなはんと申ける此上はともかくもかりそめながらたゝならぬふかきちぎりでましますらめいざさらばとうちわらひ屋かたをさしてぞかへりけるたちにもなればきん時はさよのまくらをかはしまの水のもるべきやうもなくあけぬくれぬとすきにける月日かさなり今ははやなんによの中のわりなさ

は女ばうすでにくわいにんしたゝならぬ身と聞へける然れ共ふしきやなあたる月にもたんじやうせずやう〳〵としをふる程に三とせまでこそすぎにけれ有時きん時女ばうに近付あやしやなおん身はたゞならぬ身と聞よりもはや三とせに及べ共いまださんする事もなく年をふるこそあやしけれ何さま子にては有まじき屋まひならめと申ける女ばうきいていふやうはかほとにとし月かさぬる事はつかしくさふらへ共去ながらもろこしのしうのらうしはたいないに八十年の月日をへて生れ給ふためしも有我てうをたつぬるにしやうとく太子は廿三か月にてたんしやう成忝も八まんは御はゝしんぐうくはうぐうの御はらにやどりて三かんをほろぼし三年三月のしもをへて生れ給ふも佛也かゝるふしきの物なればいか成子にてさふらべきしばしまたせたまへとてきん時をなくさめやう〳〵すぐるにしたがつて五とせまでこそたちにけれ其年のあきの比さんのひほをぞときにける取上みればおにこにて有あたりにありし女ばう共あつといふてぞにげにけるきん時聞ておどろき何と申ぞ女ばうと立よつてみてあれば十斗成おにこのおとりはねてぞいたりけるきん時はいよ〳〵きもをけしはしりかゝつて取てふせさしころさんとたちをぬく女ばういそぎすかり付あゝなさけなやきん時殿けしたるすかたなればとて怪しませ給ふましいにしへふつきていわうはおにのかたちにつのはへてすさましきと申共天地のきをかんがへて六十四けいのゑきをなし其後のしんわうもりようのかしらと申せ共人のやまひをあはれみて草木をあぢはへひに七十三のどくにあひ本さうをあらはしてじゆみやうをすくひ給ひけるもし此わかゝせいじんしいか成ものにや也ぬべきたすけてすへをみ給へとさま〳〵なぐさめなけきけるきん時げにもと心へ屋あ女ばう是をみよきやつがやさしのたましいやかいつかむわがうでにつかみ付くらい付おどりはねけるおかしさよ何さましかれいき物也たすけおかんとはなちける後よりよし八まん殿のみよまでに三國ぶさうのつわ物さかたの兵ごのかみきん平とは此わかゝこと也きん時つく〳〵なかむるにかしらはあかくかみそらさまにはいしげりまなこにくちにさけのぼりくろめがちにひかりあつて口みゝのねまできれはなれしがみ付たるつらたま

しいあつはれ我子やいさぎよしと悪太郎と名を付てよきにやういくしたりけるかのきん時が心の内ふしき也其中〳〵申ばかりはなかりけれ

二たんめ

扨も其後それくわうゐんはやのことくながるゝ水にことならねばちうやをとめぬ月日にてあく太郎せいじんしてはや七歳にぞ也にけるある時の事成に女ばうなみだにくれながらきん時に近付なふいかにきん時殿それうらめしき世のならひ今はちぎりもつきはてぬそれをいかにと申にはづかしやみつからはそもばんだいがいけにすむ大じやにてさふらふがきちくの身をへて三千年うかみもやらで候ゆへ人げんとちぎりをなしたすからばやとねがへ共ぶつじんゆるさせ給はねはちからなく打過ぬされ共爰にきん時は人げんとはいひながらきぢょのたねにておはしますゆへしたしむべきしさい有御ゆるしをかうむりむつましきふうふと也さいわいわすれがたみに此子をもうけはんべる也三ごくぶさうの大力一天に名をあらわすがうの物にて候へはよきにみそだて給るべし其うへ御身をたのみたきしさい有さだめて御身も聞及ひ給ふらんむかし江州みかみ山にむかで有しがよなよなりうぐうかいに來りつゝ我等がしんるいけんぞくをみな取くらいわらは一人のこりしが其後りう女たわら藤太をたのみかのむかでをたいらげ給ひけれ共其時のもうねんなをやまざりしかばりう宮のすまひもならずばんたいに經下りしか此むかで今程しゆつしやうして山すみのはん官べつたう時かけと生れいでかうづけしもづけのくわんれいと也佛法しやうげのあくまにて代をみださんことちかゝるべしねがはくばみづから一もんのかたきなれば悪太郎に打せてたへあらなごりをしやとの給ひて泪なからにくときけりきん時はけうさめてあきれはてたる斗也扨女ばうは悪太郎に近付扨も〳〵はかなきおやこの契りやなしゝてせひなくわかるゝだになげきはつきぬ物成にいかなれば扨わらははいとをしきをん身をすててゆかんこと我身ながらもつれなさよかゝるわかれをかねてよりおもふがゆへにこそ人めをつゝみあけくれに泪のとこにそだつれすへもとをらぬきちくの身

にあひなれ給ふきん時のさぞ口をしくやおぼすらめそれはゆるさせ給ふべしいとま申てさらはとて泪にくれてみへけるがかきけすやうにうせにける公時あつとおどろきあゝなさけなや女ばうよせめて此子が十歳までみそだてゝはゆかざるぞと只ほうせんとしてゆめかとばかりあきれけるなけきながらも今ははや月日のかづも立そひて悪太郎とう年は十二さいにぞ也にけるさらばくらまへ上せてかくもんをもさせばやとらうどうをさしそへてくらまの寺へとのぼせける御寺になれはそう正にたいめんしみでしのけいやく仕それよりもそう正はとんしやうばうとて御弟子の有けるを悪太郎殿に付置給ひよきにもてなし給ひけるされば心さとくして一字を聞ては十字をさとりさいちはならぶ物もなしある時のこと成にとんしやうばうもんじのかたちをなをすとて爰かしこといひければ心にやあたりけんやかましのほうしめや中〳〵にかくもんはきむつかしき物也とてそば成つくへおつ取てとんしやうをはたとうつとんしやうばうきもをけしたつてにげんとする所をひた打に打ければむざんやなとんしやうこしのほねを打をられなきさけびてそにけ入けるそう正大きにおどろきこは何事ぞとかけ出給へはそう正をみるよりもつくへをかしこへからとすてあとをもみずしてにげ出けるやれそれおつかけとらへよ大じの人の一子ぞかし承り候とてとうじゆくわかとう弟子其外二三十人打つれてきぼうをてんでにもち山下をさしてぞおつかけけるさるほとに悪太郎心のまゝにかけ出いばらからたちまつのえだおひしげるにもいとわずなん所せつ所をはねこへこだかき所にとび上りあゝ此比はきづまりやとくはん〳〵としてやすみけりかゝる所へおつての弟子共悪太郎をみるよりもわれさきにとびかゝる悪太郎是をみてやあおのれらはすいさんやと大手をひろげてとびかゝればわつといふてぞにげにける其中にてはかんばうたんゑつ坊あしよはくて悪太郎にとらへられさりとてはゆるし給へおちござまつひら御めんと申共悪太郎きゝも入れずつね〳〵おのれらがおにちご〳〵とわらひけるゆへ今誠のおにに成たるぞやたゝひと口にくはんといへば二人のほつしのふ〳〵ほつしはくわぬ物にて候ゆるさせたまへとなきさけべは悪太郎打わらひおのれらがいつもい

つもいまはいたづらいたされ候けふは手ならひ仕らぬほつしやちごをたゝきしなどゝささへことをそう正へ申たる時とはにぬよなちつと爰にて申てみよ只今おもひしらせんと取てふり立たにぞこへかつはとなぐれはらつくわみぢんに成にけりかゝりける所へからはしのさいしやうはとも人あまた召つれくらまをさしてまいられしが悪太郎にあい給へは太郎きつとみて是もおつてと心へのがすまじととびかゝる下人共是をみてやれおにこそ出たれとてわつとさけんでにげんとすされ共さいしやう太刀ひんぬいてとびかゝる悪太郎是をみてつゝとよつてかいつかみ二つにさつと引さき木のえだにかけ置扨も見事のながめやなはるはまづさくむめさくらなつはうの花あきはもみぢ是らはつねのながめぞかし人の二つにさきたるはめつらしやおもしろやと打わらひそれよりも山中さしてぞ入にけるかの悪太郎がふるまひせん代みもんのくせ物やと皆ほめぬ物こそなかりけり

三たんめ

かくて其後さかたの平太公時は此こととしらでいたりしにくらまよりしそうたちくだんのよしをのべければ公時大きにおとろきこはもつたいなきらうせきや其儀にて候はゞそれかしむかひに参べしとしそうをかへしそれよりもくらまの寺へといそぎける是は扨置悪太郎山中をかけめぐりこらうやかんをゑじきとなしいわかんせきをすみかとしてさもゆう〳〵とぞすまひけるかゝる折ふし公時は山中をかりまはし爰やかしとと尋ける山ぢはるかに入みればいわがんせきをうがち石をかさねてついちとなしたいぼくこぼくをねぢ切てさうにたかくつみならべおくのくらき所にはともしびにまつのえださもおそろしき所有是はいかさまおにすむ所成らんいかなれば我子はすむましきと思ひながらふしきさに立よつてみてあれはあかくちゞみししやぐまのやう成かみ打かゝるすきまより只日月のかゝやきてくもまを出るごとく成大のまなこをみひらきさもすさまじきこはねにて何物成ぞとあやしめける公時あつとあさましくみ聞に我子の悪太郎也やれすさまじきやつがふせいや打てすてんと思ひしがさすかおんあひのことなればすか

してつれてかへらんと只今是へ來るは父公時にて有けるぞ此比おことにあはされはなつかしくおもひつつ是までむかひに來りて有いそぎさとへかへれと有惡太郎聞よりもちゝ公時とは何物そあしくうろたへけがするなそこ立のけとぞいかりける公時は聞たまひはる〳〵來かいもなくあゝあひそうなきことばやなおやは子をおもへ共子はおやを思はすとは誠になんぢが事成べしと石打たゝきうらみけり惡太郎打うなづき父ならば聞給へうき世にすめはやかましやおん身も爰にすみ給へ是へ〳〵こてまねきしてなふゑじきは山中にみち〳〵たりたま〳〵いつればみる人の我をおにとてにくるこそ世におもしろきたのしみなれつのゝはへぬ斗こそ殘りおほけれ公時とてからからとそわらひける公時今はあきれはてやれさてなんぢはいかなればさやうの口を聞けるぞ我身四十に及てたま〳〵子をひとりもては中〳〵みにくきすがたをもいつくしくなかめなしせいじんするにしたかつて世にたのもしく思ひしになんじがやう成あく人にてちゝがめいにもしたがはずよくせんぞをあらわしてはぢをはあたふる物かなあゝあさましの我身やとたけき心もわすれはてさめ〳〵ないてそ立にけるなけきのこゑに惡太郎おんあひのやさしさはあらき心もしほ〳〵としほれはてたる有さまにてかほさし出しいふやうはふけうゆるさせ給ひなはさとへかへり申べし去なから歸りても物ならへのかくもんいたせとの給はゞふつとかへり申すまし其時公時打わらひ扨も〳〵我子かな我わらんべの心入とつゆもたかわぬうまれ付此うへはともかくもさらはかへらん今とていわかんせきをけちらししゆく所をさしてそかへりける是は扨置くらま山にてほう〳〵命たすかりにげてかへりし在所（本ノマヽ）の下人共すぐにみかとへさんだいし惡太郎からうせきのだんつぶさに打たへ申ければみかとけきりんあさからすやかてにしきのかうじへちよくしたつ頼光何事やらんとゑもんつくろひちよくしと打つれさんたいす時にまてのかうじの大なごん仰出されけるはいかに頼光なんぢがらうどう公時か一子生れなからおにたるよしほうけつ近き九ゑにすませ置だにいふせきにくらま山にてらうせきなし其上今度そう正の方へ御きねんの事有御ちよくしにからはしのさいしやうをさしつかわさるゝ所に

かの山にてさいしやうを引さきし事第一京都の騒ぎといひ君げきりんなゝめならすいそき惡太郎をひたちの國へ流し置其上諸人にかはりたる物なれはきつとろうしやいたさすへしとの御事也則かさまの左衞門ともはるにあつけらるゝとのちよくぢやう也賴光せんじかうむり畏たりとてやかて御所にそかへられけるやかたになれば公時おや子を召れかやう〳〵の次第也ふびんにはおもへ共ちよくめいなれば力なし惡太郎をひたちの國へる人いたさせよとのちよくめい也やがて申なをしきらゝのしやめんをさしくださんと忝も大將も泪ながら御れんに入らせ給ひける公時御ちやうのだん承り惡太郎に近付なんぢがあくたう天子へまで聞へのがるゝ所更になしいそぎひたちに下るべしと泪くみて申所へかさまの左衞門ともはるあはたゝしくはせ來りはやおそしとてあいさうなげに申ける公時聞てゑゝ口をしや賴光の御ため思はすはたとへ王いは背く共いかてひたちへ下べきいなと申程ならば恐らくはすは八まん日本國がうごく共公時おや子はちつ共動き申ましとはぎりして申ければ惡太郎ちゝに近付なかされ參といふことは何の事にて候ぞ公時聞てふびんやなんぢはげにこのしさいもしるまじきとがの有物をはとをき國へおくる也必ながされ行とても左衞門殿の御心にばしそむくなよとにもかくにも仰にしたがい申ゝし惡太郎聞よりも何ながされ行と申事我等はかつてん參らねは御めん候へ參ましきと申ける公時聞ていやさやうのことならすいなといわば賴光の御ためもいかゝ也王いをそむくにあらずや惡太郎聞て其王いをそむくとはかつてがてん參らずばいや〳〵いづくへもふつと參るまし參らばくらまへ參へしと下らんきしよくはなかりけりされ共公時色々にすかしつゝやがてむかいをつかはすべきとやう〳〵なだめ下しけるいそぐに程なくひたちにも付しかば惡太郎君よりのせんしにはろうしやと仰出され共御身のちゝ公時殿天下ふさうのゆうし成其うへ御身もようちなれはわか心へにてろうしやをゆるし申也しばらくこのやにおはしませとさもねんころにぞ仰けるあく太郎つく〳〵きゝいつにしほれぬまなこより泪をはら〳〵とながし扨も有かたき御なさけやゆうしの道をおほしめしかずにもあらぬそれかしをかくまでの御ほうしいつのよにか

はわすれ申べき我等是まで下りしも頼光の御ため父のめいおもきゆへ下りては候へ共さりとては今までももしもろうしやをいたしなばてつせきにてつきかためくろかねをわかしてつくり立たるろうなり共たたひとふみにふみやぶりとかなき御身を八つさきにと心かけいまゝで〳〵おもひしにいまのなさけのことばのすへきもにめいしてよろこびたりこのうへはあびたいじやうのことくなるくるしきろうにもいれたまへいとわじものをとさしうつむき泪くみていたりけれは皆御まへの物共おにのめにも泪かなとよきにいたはり奉るかの悪太郎が心の内あはれ共中々申斗はなかりけれ

第四

公平たんじやうき

さるほどにそれ三がいのいんぐははのかれがたき物なれば一たび國のみだれけるゆへをいかにとたつぬるに爰にかうづけしもつけのしゆご山すみのへつとうはん官時かけとて三國にならびなきぶゆうめいよの弓取有げにあく太郎が女ばうのかたりおきしごとくみかみやまのむかでのけじんたりもとより佛法しやうげの物なれは此國をみださんためむまれ出たるきどくには力は申は申に及はすはやき事いだ天のごとくべんせつはふるなにこへたけ弐尺にあまつてほうひげさうへくわつとはへまなこのそこにひかりあつて一にらみにらむには人たましいをうしないいか成かうせいりきしも立すくみいすくんで身をはたらかす事あらすわつとさけぶ一こゑにはいわかんせきもわれ砕けて山家もくずる〳〵斗也（本ノマヽ河ノ衍也）あひまもるらうとうにはいわもとにうだうだんさいし〳〵風平次ゆきむね山木のへん藏としはる是三人の物共はいか成いんぐわのきしつにやあくを聞てはよろこびぜんをみてはそしりをなすましやうへんさのあくきやく物君をうやまひ奉る有時の事成にかれらをひそかにまねきよせいかになんぢら物を聞かの源の頼光は何のかうみやうあつてかかく我まゝにふるもふぞや其うへ用にもたゝざるひえの山のほうしばら三井寺の入道らかうやさんのびく共にくはぶんの所領をあたへてきとう所などゝうやもふこそくぢのゆへとはいひながらかたはらいたくおほゆるなりいざ頼光をけちらか

し天下一とうにきりしたがへあさひしやうぐんとあをがれんはいかに〳〵と申けるいわもと承り御ぢやうもつともにて候へ共わづかなるせいにてていとへ打てのほらんはちつとあやうく候へばまづしやうくわくをかまへつゝきんへんにふれをなしたせいをもつておしのぼらせ給ふべし我君様とぞ申けるはん官聞て此ぎ尤しかるべしとていち〳〵したいにふれにける此こと都にかくれなくきんりには大きにげきりんあつてにしきのかうじにつかひ立又頼光も此よしを聞付きんりをさしてぞあがらるゝろしにてちよくしにたいめんすぐにさんだいなされける内よりのせんじにはいかに頼光なんぢもさだめて聞つらんとう國の時かげむほんをくはたて京都へうつてのぼるよしいそぎかうつげに立こゑほんぎやくのともからを一〳〵にうついばつせよとのせんじ也頼光せんし承りいさ畏いて候かの時かげと申物人りんにかはりまわうのほうをおこないつうりきじざいと承る此たびはそれがしぢしん罷立天めいにきする時かげをざんしの内にふみやぶりおつ付しやうらく申さんと御まへを罷立しゆく所をさしてぞかへらるゝやかたになれば四天王を近付此たびはぢきに馬を出すべし又きんりの御しゆごにはしやていやまとのかみよりちかに渡部のつなうらべのすへたけ此両人をさしそへてのこさるゝ扨又御ともの人〳〵にはさかたの平太公時うすいのさたみつ其外都合三萬八千よき御家の白はたさきにをしたててていくはん十五のれき二月十日に京都をたつてかうづけさしてぞ下らるゝ此こと天下にかくれなく時かけはやくも聞付らうどう共を近付ていとより源の頼光打てむかふとふうぶんす國中ちかく取かけさせてはかなふましと家のしんかにいわもと入道しゝ風平次ゆきむね其外侍大將には山木のべん藏としはるほうしむしやにはぼう州しどみのせいがんかつさのたくま坊此もの共を大將としてつかう五萬七千よきいつの國はこねたうげにぢんをはり都せいを引うけ一さゝへふせぐべしさだめてかみがたせい二萬か三まんにはよもすぎし一まくりにおつふせすぐにていとへせめのほるべし今十日とたゝざる内に天下の將ぐんとあをかれんはたゝいまのこと成へしはやとく〳〵としきつていさみ仰けれは承り候とて大せいを引ぐしはこねとうげへいそ

ぎける是は扨をきみなもとの頼光はいそがせ給ふほどもなく是もいづの國はこね山にそ付たまふそれより兩ぢんよせかけてたかいに時をつくりかけひ花をちらしてたゝかいけるいくさ中ばのこと成にきん時とさだみつは此たびのいくさに御身のあんひそといひあはせし事なればたがひにおくれをとらじととられじとぬけばたまちる大やきばたちかせくもやさそふらんと五尺八寸まつかうにさしかざし大をんあげたゝいますゝみいでたるつわものをいかなるものとおもふらん忝も天下のしやうぐんみなもとのらいくわうの御内にさかたのきんときうらべのさだみつこのたびのいくさ大將たまわつたりちかづきよつて手なみをみてらいせのうつたいにせよやつとよばはりけり四天王ときくからに五百よきいんにとぢてうつてかゝるをたてさまよこさま十文じまつかうこびたいさうのこてほろ付どう中ひざ口たかもゝをしなへてはらり〳〵と打ふするへんしの内にしにんのやまたかふしてかけ引のみちもたへたきに（本ノマヽ）事なるちしほにゑいせんぢんごちんしどろになつて一どにはつとぞにげにけるかゝる所へばう州しどみの清がんかづさの山なしたくまばう是二人は時かげがほうしむしや大力のゆうしやのとうりやうとさだめらるゝめいたいぶさうのかうの物ない〳〵ぶげいをかうまんするげにも公時さだみつがおにかみとてもかやうのはたらきにつかれぬ事よもあらじくみとめんとゆるぎ出はん官の御内にほうしむしやの大力有とは聞もおよび給ふらんとててつぼうをふつてかゝる兩人きつとみておふみごと成むしやぶりかなまいりさうといふこそあれ公時さだみつつか〳〵と立よれはぼうふりあげてはたと打ひらいてぼうをおつ取らんとしたりけり法師共もとられしと玉のあせをながしゑいや〳〵とねぢあひしをたもつてひやうどはなつおばへずまあおけにどうとたおれしを付入てふみかへしからめて二人共にひつたてげに〳〵こぼうたちは力しや也ねちあいにはがをおらして候と云ほうしばらふりかへり聞しにはにやわぬひやうりかなゆめをみたるやうにたばかられ口をしやと物にくるひておめきけりごほうしにくるいはどうり〳〵本ぢんへは今少さはがてあゆめ〳〵と引立けれは二人のほうしは大ちにどうとすわり中〳〵いきながらはぢはさ

らさし爰にてともならんとなきさけぶ兩人みてゐゝめんどう成ほうしめとかいつかみひつかづきほんぢんへぞかへりけるかのきん時さたみつかてからのほどほめぬものこそなかりけれ

五たんめ

さればにやはこね山のかつせんは公時さたみつかはたらきゆへてうてきの物共皆おつちらされはこねのせきを打やぶられやう〳〵おだ原さかはのまへにぢんを取折ふし其夜大雨しきりにふりければさかはの水かさまさつてわたりもそらにならさればていとのくん兵心はたけくいさめ共むなしく日かすをおくらるゝ爰にあはれをとゝめしはさかたのすくね惡太郎十二歳よりる人と也はや十五にぞ成にけるさればけしたるうまれなれはかんこつ日々にかさなつてたくせんたる事日にましひとへにりきしの如く也其比東國さうどうしぎやくしんいをふるふくせ物とほのかに聞て惡太郎あつはれむねんの次第かなすわやかけ出かしこへゆきてうてき時かげとやらんとひつくんでくびねぢ切其をんしやうにしうの御かんきをもゆるさればやと太刀おつ取出けるがいやまてしばし我心なさけ有ともはるにさたなくゆかば年月のおんのわするゝ所也しらせばやとおもひつゝともはるまへ（本ノマヽ）に畏承れは此比かうつけしもつけのしゆご山木の判官時かげこそぎやくしんをくはたてはたを上け國どをなやまし候よし承候へばそれかし御いとま申請かれか國へ打こしざうひやうとましわり時かけとひつくんでさしちがへ候はゞいたづらものゝ名もきよめちうの物とよばれん事しゝても我か身のほまれ也あはれ御いとまを給はんやたゝしいなやとうかゞひけるともはる聞て打うなつきけなげ成心さしは誠にこうしのことばにも三くんのすいはうばふ共ひつふ心さしはうばはれしとの給ふ如くに御身のかゝるいぶせき大てきにたゞひとり打こへ時かげをうたんとはとうらうがおのなれ共わかき人のおもひたつ其しんていのおとなしければそれかし身ふせうなれ共らうどう共をかせいにつかはし申さんと有ければ惡太郎承りこは忝仰かなまつ此たびはぞんずるしさい候へはたゞ一人はせこへまいりたきよし有ければ此うへ

は力なしかの時かけと云物はじんつうふしきの物なればよく〳〵しりよをめぐらし本望をたつしつゝめでたくきこくおはしませはやとく〳〵と有ればあく太郎よろこびいとまごいしてそれよりもしのびやかに出立かうつけさしてぞいそぎける國にもなれば爰やかしことさまよひまづ城中をみわたせば三方は山高くせきがんがゞとそひへてはたにふかうしてながれ有一へんのくも跡をうづみ鳥ならではかけりかたし扨一方は一き打のほそ道に所々にからほりほらせへいをかけやぐらかいだてかきならへさかもきしげくひきければ是も又いかゞしてしのび入べきやうもなくあきれはてたる斗にて時をうつしてしのびけり是は扨置時かげははこね山の合戦もさだめて大せいつかはしぬれはていとへ打てそのほりつらんと心にかけることもなくつねに國中の物共をめしあつめしゆゑんゆうけうまた有時はよきゆうくんをめしあつめうたをうたはししゆ〳〵さま〳〵におごりける又今日は大かげ山へたかのに出べしそれ〳〵ようい仕れと數百きをめしぐして大かげ山へぞいそぎけるさる程にあく太郎此よしを聞よりもくつきやうの仕合かなかれがかへりを待かけてみちんになさんとはがみをなし扨道聞さだめそれよりも山かげに立よりすゝきのしげみに身をかくし今や〳〵と待にけるあんのごとく時かげ大せいを引ぐしろしすがらのなぐさみにこ鳥をとらせて來りしがすゝきのへんにてきつとこまを引とゞめあゝらふしぎや今爰にてけしからぬむなさはぎ肝にこたへておほへしは何さま此時かけをねらふもの有べし人間にはおぼへなししかくまかどくじやかそれ〳〵さがしてみよ承り候とて大せいの物共爰やかしことたづねけるあく太郎是を聞すはやてきにさとられたりとらへられて近付ひつくまんとおもひておのれとあらはれ出にけるやれふしぎの物有とて大せいやがて取付なわをかけんとひしめきけり大將御らじんてしばらくしばらくさなせそれらしきのこわつはが國土の力を身にたもちゝうの如く手あしが八つ九つ有とても何程の事の有べきとちかよせておのれいか成物成ぞなのれきかんと云まゝに日月の如く成大のまなこをみひらきけれ共悪太郎こと共せすあざわらつて立けれは時かげけうさめ是はいかに我一めにらむにはいか成かう

せいりきしもたましいをうしないそらをかけるつばさまでちにひれふしけるに此わつはから〳〵とあざわらふつらたましい何さまぼんぶのわざならず名をなのれとぞ申ける惡太郎すかしてうたんと心さしいやさやうの物ならずとさらぬていにもてなせば時かげ聞てなんぢはたゞ物にてはよもあらし去ながら此わつはうつてに來るものにもせよ又はへんげの物にもせよ大かうにみへければ我かけらい共成なばめしつかはんとぞ仰ける惡太郎聞よりも有がたき御ぢやう哉ともかくもと申上る時かげ聞ていしくも申たる物哉なんぢには日本國を半分をしわけくれても惜からじそくさんぶそうのらうどうかな去なからなんちがつらたましい我につかゆる物にてなしさはいひながらおもふ所存是あればいそぎ此太刀かづくべしとてさし出す惡太郎うけ取て心の内におもふやう此太刀にて切てすてゞべし去ながら若木太刀にてもやあらんとおもひ御めんなれとずいとぬいてみてあればたまちる斗のつるぎ也一ふりきつとふりまはしあつはれ御太刀候やあはれ此太刀ほしさよと本のさやにぞおさめける時かげみて打わらひ扨もしれたるわつはかなおのれに其太刀とうするぞ心にくき物あらばそれにてうてとの給ひてさきたつてぞかへりける惡太郎よきわいとおもひければかの太刀をずわとぬきとんでゝかれば時かげやがてとんでをり取てふせおのれはおんをしらぬやつめかな此ふるまひは何事ぞときつと取てしめられいきもはづみ手も足もしびれまなこも暗む斗也され共惡太郎につこと笑ひちやくとひやうりけるは扨は我しゆくんにはさり共にあいたる人かな我此ごとくにして此二三か年の内に切たる主君卅人に及べり心をみ付て奉公いたしもういをふるひ天下に名を上げ申たき所存にて扨かくのことくに候いよ〳〵主君にあをぎ奉らんといつわりければ四そうをさとる時かげもやす〳〵とたばかられてから〳〵と打わらひ扨はさやうに有けるか此上はいよ〳〵ちうをはげむべしと我やをさしてぞかへりける扨あく太郎は御とも申ひそか成所に立よりあきれはて泪をながしあゝ口をしやむねんやな心にまかせぬはらたちや三日か五日のぶる共おもふ本望たつすべしとこぶしをにきりはがみをなししのびかねたるありさまもつとも也ともなか〳〵申はかりはなか

りけれ

六たんめ

さるほとにふびん成かなあく太郎時かげを打そんじむねんたぐひはなかりけりいかゝしてかはうつべきとほうせんとしていたりしがつく〳〵物をあんずるにいや〳〵かれに近付より手づめのしやうぶかなふましなにとぞけいりやくにて打べしとあんじわづらいいたりしがあまりねむさにありし所をまくらにしせんごもしらずふしにけり爰にばんだいかいけにすみ給ふ母うへあく太郎がまくらがみに立給ひいかにあく太郎なんぢ時かげをねらふことしやう〳〵せゝよろこびたりかの時かけはじんづうの物其うへ大力といひてづめのしやうぶはかなふまし此城の西の山に八まん大ぼさつのくうでん有此みやのほうでんにむかしもろこしのましゆら王此くにへせめ上りし時すみよし大明神やわた八まん大ほさつあつたの大明神是三じやの御がみ立むかひすまんぞうの舟共をあくふうをもつて打わり大将ましゆら王をいけ取うみにしつめ給ふ此ましゆら王がゆみたけ六尺五寸くろがねにてつくりたり同かぶら矢二筋有此弓はやをさしはさみひく時はちからも入ずむかいにめあてをいたし心にくはんねんしてはなつ時はおもふかたきをあやまたすじんへんきどく有弓なれば我てうへわたりつゝ今西の山の八まん宮にこめて有いそぎ此ゆみにてかりばのかへりあしをねらひたらばおもふ本望たつすべしはやとく〳〵との給ひてかきけすやうにうせ給ふ悪太郎ゆめさめかつはとおき扨はたゞいまつげしらせ給ひし我等か母にてましますかやあらこいしのはゝうへや今一たびまみへましませとしのびなみだをながさるゝいとゝむかしがこいしくてちゝきん時の事がおもひ出されかくかたきをねらひしことゆめにも主君頼光さまにも我かちゝにもやかて御めにかゝらん物をと心中に思ひ入はゝのをしへにまかせつゝ八まん宮へぞいそぎける山にもなればかなたこなたをたつぬれはもりの内に物さびしたる鳥ありて有立よりみれば八まん宮とがく有扨は此宮にてあるらんとかんぬしにことわるまでもなしとて我と宮へ立あがりとびらをひらきかのゆみとやを給はりおし

いたゝき此ゆみやにてかたきをおもふまゝにほろほしなは宮でんらうかく玉をかゝげ一々にこんりうし奉らんと心中にきねんしてまづ弓をしはりすびきしてあつはれ御ゆみ候やいにしへくらま山にて鳥けだ物をいころせし時けいこせしことなればやす〳〵いころさんとゑみをふくみそれよりも我やをさしてぞかへりける扨時かげはおごりのあまりにかうつけ下つけのさかいに高なし山とて大山の有けるがけふはかりばに出んとて家のこらうとう引つれ高なし山へぞいそぎける山にもなればたにみねにせこを入たぬきいのしゝうさぎさるおほかめきつねをかり出しあるひは二かしら三かしら思ひ〳〵にさしとめける悪太郎は本よりしかおうかめにはめをかけず時かげをと心ざし時をうかゞひいたりしがよきわい（本ノマヽ）を待うけよつひいてひやどはなつあやまたず時かげがむないたをくつゝいぬきうしろのかしの木にたつたりけりやがて立より時かげかくび打をとしむかふ物のまつかうこびたいあたるをさいわいにさん〳〵に切にけりのこりし物共是をみて人間にてはよもあらじと皆々かうさんしたりけり時に悪太郎其ぎにて有ならばいそきさかわへむかふべし承り候とて城中にのこりとゞまつたる家のこらうどう二千よきを引つれさかはをさしてぞのぼりける是は扨置さかはにてさへし兵共ふせぎたゝかふといへ共四天王に切立られおい〳〵ににげ帰る中にもいわ本入道だんざいしかせ平次打もらされ大いきついでかへりけるあく太郎是をみてむかいよりしきりに馬にむちうつて來物はいか成ものぞと尋けるらうとう共是をみてあれはまさしく時かげのしんかいわもと入道しゝ風平次にて候と申あく太郎是を聞ねがふ所のさいわいかせいのていにもてなしいけ取にせんとて人よりさきに立て何とて方〳〵は御かへり有ぞと仰けれはあまりあはてふためきさん候かたき後より大せいおつかけ候ゆへふるさとへ帰り出家の望にかへるなり御身たちはそれにてふせぎたゝかひ候へとふるひ〳〵かけとをるをいづくへにかし申さんと馬より下へ引おろし二人共にたかてこてにいましめ都をさしてぞのぼりけるかゝる所へ都せいさかはのぢんを打やぶりいくさ大将山木のへん藏としはるを打取けれ共いわ本ししかせを打もらし後をしとふてせめ下る道にては

たと行あひたり頼光御らんじさだめてかうづけよりかせいのせいにて有らんあれけちらかせと有けれは悪太郎つゝ立上つててきみかたはしらね共只今大将時かげに下るらうどう共がくび取て立上る兵は一天下の将軍源頼光の御内成さかたのすくね金時か一子悪太郎としつもつて十五歳てきならばよつてくめみかたならば名をなのれいかに〳〵とよはわつたり大将御らんじて扨はひたちへなかし置たる悪太郎にて有けるか我こそなんぢが主君大将頼光也と名のり給へは悪太郎馬よりとんでをりかうべをちに付はしめおわりを申上げて畏る父公時是をみて是はゆめかやうつゝかやなんぢか母がうみおとせし時天下るいたひのゆうしと申せしが更にちがはず此たびのはたらきかんじ入たり今よりはかんだうゆるすぞとて御まへ共はゞからずあふぎをもつてあをきたてかの公時のよろこひもつとも也とぞみへにける大将御ゑつきかぎりなく悪太郎を御そばちかくめされ此たびのふるまひせんだいみもんのかうみやう今よりは悪太郎を引かへ坂田の兵ごのかみ公平とげんぶく成こそめでたけれ扨それよりも都をさしてぞのほらるゝいとになれは一〳〵しだいにさうもんすみかとゑいらんまし〳〵て此たびの手がらのだん申にいとまあらずいよ〳〵天下を相まもるべしとかさねてせいい将軍源のあそん頼光に被成ける時のめんぼくよの聞へ悦びいさみ我やをさしてかへらるゝちゝ満慶にたいめんし時かげがくび御めかけ扨いけ取たるらうどう二人ほうし二人をはくちうにかうべをはね天下一とうの御代をおさめ給ふすへはんじやうめでたき共中〳〵申斗はなかりけれ

鶴屋　喜右衛門板

漉根惡太郎

第一

金時都いり　すくねの惡太郎

それつら〳〵、くんしんのれいをおもんみるに、きみきみたらずといへども、しんもつて、しんたらずんば、有べからず、とんでれいをこのまさるときは、わざわひ、其身におよぶといへり、爰にせつつのかみ、源のらいくわう、天下の、ふしやうたりしとき、御家のしつけん、さかたのみんぶきんときとて、るいたひぶさうの、ゆうしあり、しゆつしやうをたつぬるに、一とせらいくわう、きよはらのう大將のざんげんにて、ちよつかんをかふむり、あしから山にしのばせたまふ、折ふしいづくよりとも、しらまゆみ、やたけ心のたぐひなき、なにしあひたるあしびきの、山ぢをめぐる山うばか、らいくわうに、奉りし其子也、其時よりもきみにつかへ、四天わうとがうし、すどのかうみやうひるひなく、其けんじやうに、するがの國をたまはり、ふちうの城にきよぢう有、ゑいくはにくらしたまひける、家のはんじやう日にをつて、御子一人扨たまふ、其名をすくねの惡太郎と申、十五さいになりぶゆう人にすくれせいじんの後は、四かいに其名をあらはしばんみんおそれをなせし、坂田の公平是なり、扨又家のかりけんには、せいぼくぜんしさへもんさだきよ、なんほくべつたう太郎はるちかとて、じんぎをまもるゆうしたり、其外諸侍、日々にしゆつしはひまもなし、有時公時すくねを召れ、我なか〳〵さいこくせしめ、都の事心もとなし、近日上らくせん、るすの内よく〳〵國をまもり候へ、おつ付き國いたさんと、人〳〵にいとまをこい、ぜんじ左衞門御供にて、ろしのけいゑいはなやかに、都をさしてぞ　三重上られける、是は扨置、其頃三條の中なごんみつあきらのきやう、ちよくめいをかうむり、くわんとうのこくしとして、いづの國みしまのしゆくに下ちやく有、たみのせいすい、國のいらんをたゞし給ふ、さるによつて、東八か國の諸大名、こくしの心をなぐさめんと、しゆ〳〵のちん〴〵はをとゝのへ、我も〳〵としこう有、日夜しゆつしひまもなし、されはすくねの惡太郎も、父のだいくわんとしてつめられける、爰に又東國

のぢう人、ほんまむさしのくんじ、藤原のひでみつかちやくし、けんもつうこんのしやげんみつなが、しやていすけのしんひで時、かれ兄弟は、い國のちんへい長良か、ひじゆつ、ごしんそんしが、ひせし道を心がけ、力はやわざ、およそぼん人のわさならす、と皆人おそれをなしにける、兄弟共に御前にあひつむる、こくし立出給ひ、一座へしきたいあつて、さかづきすこんかさなり、よもやまの物語事おはつて、さしきもひつそとなりし時、さがみの國の住人とよたの左門きよさねすゝみ出申上るは、爰によき御なぐさみになさるゝ人〻さいわい御まへに相つめられて候、あはれ御所望なさるべきかと申けるこくし聞召れそれはいか成ことやらんさん候是に候みつなか兄弟は兵法のめいよをつかはれ八か國にては何れもしやうくわん仕候一きよく御らん候へかしと申上るそれ何よりもつて時のなくさみしいかはてうていのもてあそびぶしたる身のたしなみ是にすぎたることよもあらしいそいび所望致れよきよざね畏てやかて兄弟に打むかい御へん達のたしなみ上によくしろし召れて御所望有いそひて仕られ候へ兄弟本よりけつきさかんにして我等二人にうへこす物あめが下には有ましきとつね〳〵かうまんふかければゝかるけしきもなく御所望ならば一手つかひ申さん何れもよつく御らん候へともつたいを付しつとりと立出る其きよすねおつきよりしなへ取よせいざ一きよくとすゝめける時に兄弟しなへおつ取いざござれ參ると（本ノマヽ）兩方聲をそろへさつと切むすぶだうけつかへしつあふつまくつつうけながし太刀色をみてつか〳〵と切こふでまいつた〳〵〳〵とつこへ〳〵〳〵はらりとほぐれてそれまいつたとひきよくを盡してもみあひしは時に取てのけんぶつやと一どにあつとぞ感しけるこくし御らんし扱もはけしくつかひわけたる太刀打のたつしやさよがんの付やう身のひしき誠にみ所有けるおもしろやとこうしやうにほめ給ふしやうけんかつにのつてかやうの事はべちにかはりしことも御ざなく候爰に長良がひごくのでんにてきの太刀をひりきをもつて打取と申ことの候其りはてき大力にまかせあるひは大太刀大長刀ゑ物〳〵をひつかまへゑしやくもなく打てかゝるをこなたはわずか九寸五分のよろひどをしなんどにて敵の大太刀打落しりをうる事の

候一手御前にかけ申さんしかしながら我〳〵兄弟仕候はゝ本よりあいづの事なりとあざける方も候べし何れにてもゆうりきの有人〳〵いかやうの大太刀なり共大長刀ゑ物〳〵を持て御出候へそれかしあふきをもつて打おとし御めにかけ申さんとはゞかりなくこそ申けるすくねもくねんとしていたりしが扨も人もなけ成いひぶん哉おのれならでは兵法を存したる物もなきやうにぞんぐわい成事をはき出すとがめばやととんで出しかいや〳〵それかしとなざしを致に本ノマヽこそ其上こくしの御前なりと聞かぬかほにてこいねぶりしてそいたりける其時介のしんすゝみ出何とすくね殿はつね〳〵大力成とこうげん有と承るそとおあひてにならればぬかと只一こなしにこそ申けるすくね今はたまりかね何とそれがしはおあひてにはとつとぶてうほうに候はん去ながら御なぐさみのためなれば御へん達のおてきゝとそれがしかふてうほうのおかしきそとあてゝ人〳〵のわらひぐさに致んとにつことわらふて立出るしやうげんこれをみてきやつはない〳〵につくし〳〵と思ひしに是をついでに打本ノマヽひしがんとゑみをふくみおくよひを心がけやいさそとつたへ申さんと力こぶを出しなへおつ取立あがるすくね心へたりとそば成とこのだいのはしらひしはづしかる〳〵とふりまはし参り候と打てかゝれは人〳〵中へわつて入是は〳〵いつきやう千萬何とやらんいしゆ有げなる有さまかなひらにむ用とおしわくるすくね聞ていや〳〵いしゆいこんの身にてはなしたがいに侍のたしなむぶだんのけいこ成になにさはなしたまへととんで出る人〳〵さへぎつてとめたまふ其時しやうけんいかにもせかぬふりにていやいやすくねさやうにむほうむたいにそゝらず共てまへをみせんとおもはれなばてにあふたる物を持しとやかに出たまへ何と成共其方の望次第に仕らんとさも大やうに申けるすくね聞てさればこそそれがしかこぶしには此はしらがよつくにあひ申たりごへんさいせんのかうげんには敵の大太刀をあふぎにて打とむるといふ長良がひじゆつのでんをもつて打取たまへと又打てかゝれば是は〳〵と人〳〵さま〳〵せいしける其時介のしんすゝみ出いかにすくねかやう成ざしきにて其ごとくみをすてゝあひ色もなきはむどうしんと申て兵法の道にはあらず只ぢんじやうに手

まへをきよくしあひたまへすくねから〳〵と打わらひのふせんぢやうに望んではでんぶもきやしやもいらばこそ力にまかせかたはしより打やぶつたるこそゆうしとは云べけれごぶんがうでのたゝぬゆへきやしやだてをこのまるゝは尤なれ共ぐんぢんにては必くびをうしなふ物ぞかしかさねてはたゞ此ぶてうほう成すくねをよつくみをいて手本にせよやとあさわらふてこそいたりけれひでときことばをつがんとすこくし御らんししばらく兩方共一りづゝ是有しやうげん兄弟かはやわざさんぜんけんぶつ致にあやまる所なし又すくねいまだじやく年なりといへ共ゆうりきの有事是第一のてうほうなりかんのかうそのしんかに長良ははやわざはんくはいはゆうりき是一とうしてこそ名をばん天に上たり然ば方〳〵も心を合一とうせばすへ〳〵に至つては我てうのはんくわい長良とよばれん程のきりやうなりかまひてあらそふことなかれとことめいはくにけんだん有然共しやうげんちつ共心打とけずひざをしなをしいかにすくね只今の御でうに付てもゆうりきはつたる斗にてもぶだうの道しらざればゆうしとはいひがたしたとへ一たんりをうる共かへつてけつきのゆうしやとてぐんしよにはきらひし也それかうそ七十よどのたゝかひにかうそわずか十萬ぎをもつてかううか百萬ぎに打かち天下一とうにおさめしも皆是長良がぶりやくたり其上兵法の道といつは忝も長良つねにくはんをんしんかうし一心にりしやうをあをぐくわんをん則くはうせきかうとげんし給ひ四かいたいへいにおさまるほうを三りやくのしよとあらわしさずけたまふさるによつて此ほうをつたへてこそ國とあんをんにはおさまれりそれのみにかきらずまるんけしやう取付時ぐん法のひじのもんじゆをんじつたいさんがうまけんたんじやうととなへつるぎをぬいてたいしすそうじて兵法のいとく上げてかぞへがたしごへんかごとくけつき斗に身をまかせまつにふしのからむやうにすぢつつもぢつつねぢあふてきずい成有さまさすがわかけの至なりよく〳〵ふんべつ致れよとにかにかしくこそ申けるすくね聞て誠に思召よられたる御いけん近頃しうちやくいたしたり去ながら御へんこそせかいに人もなげに申つれ其上ゆうりきはつたる斗にては何のやうにもたゝぬし申は是聞へざるい

ひぶんかな尤長良かぶりやくにて八か年後やう〳〵かんにおさまりたると傳へたり御へん思ふべきか我等ごときのふてうほう物は七年八年なか〳〵くらさんよりけつきにもせよあらぎにも致れよ敵と聞かば只一すぢに打取か又はこなたが打るゝか二つ一つにせうぶを付うきよの内をさらりつとあけたる事こそましならめ扨まゑんけしやうのおそるゝ兵法のしゆもんそれはおくびやう成其方達の取さたぞ亦くはごんなれ共それがしがあらん所へまゑんけしやうとのはちつとしんしやくせられ申さうあしくうろたへまなこにさへぎる物ならばたとへたい六天のまわうなり共力にまかせ取て引さきすてんには何のひみつか入べきやとこともなげにぞ申けるしやうげんごんくにつまりせき色になつて扨もいさぎよきひぶんかなしてまわう成共御へんは手取にせんと申か何しにいつわり申さうか然らばこへんもよつくしつらん當國北だにごんげんのほやしにまゑんすんでひるだに人のかよひなしあまり口ひろきひぶんなれはこよひかの所へゆきせうこを取て來られかしすくねにつこと打笑ひ扨ごへんはまゑんのものはよつくおそろしき物とおもはるゝよな尤〳〵おくひやう心にはたうり〳〵こへんしるしを出されよすわ八まんもしやうらんあれさつそくゆきて歸るべしとざを打て申けるこくしをはしめ一ざの人々是はいらざるせんぎひらに〳〵ととめたまふすくねこらへぬわか物いやいやさにてなしかつうは諸人のため其上ぶしたる物のかやうの事聞すてに致はまつ代までの人々のあさけりいかにしやうげん何とせうこは出さぬかしやうげんごしたることなればおゝいさぎよし〳〵それそれ北たにおくのいわやにごんげんのちうもつにしらほしのかぶと有取て歸る物ならば御へんが望に一めいなり共わたさんとせいしをかいて渡しけるすくねやがてくわい中し思ひよらざる時のきやうかの所へ行むかひうろたへたるけしやうなとの候はゝ二つも三つもいけ取て歸らんとづんと立てそれよりもいわやをさしてぞ三重いそぎける去ほとにうこんのしやうげん心（本ノマヽ）におもひけるはきやつをあんをんに置ならばいか成ふきかいたさんとかくいわやにかくれいて何心もなく來る所をやみ打に打ひしぎまゑんけしやうのしはざのごとく二つ三つに引さきこほくのえだに

かけをきなは人のうたがひ有ましきとあんすましてハかく成かしの木のぼうをひつさげすくねよりもさきに行ぬけくだんのいわやにかくれおくり今や〳〵とまちいたりかくとはしらず惡太郎何樣せうれつあらわさんと思ふ心を一筋にからくれないのきぬをむすんで肩にかけはかまのもゝたちたかく取しらあやたたんではちまきにむんずとしめひとをもつれず只一人いわやをさしていそぎける頃はきさらきすへつかた風すさまじく雨ふりてそこ共しらぬ山中にわけて入こそゆゝしけれくだんのいわやにはしり付ないじんをみてあればとうみやうほそ〳〵ともし物さひたる其けしきけにすさまじくぞみへにけるやかてないじんに入くだんのかぶとをおつ取南無北だに大ごんげん此かぶとすこしの間かり申明日へんしん申さんとしんぜんをふしおかみ歸らんとせし所に岩やの內よりされたるかうべをなけ出すすくね心へたりといふよりはやくとんて入むんずとくんでうへをしたへとかへしけるしやうげんたくみし事なれはいかにもしてたにぞこへはねかへさんとかうまの力を出しおしつかへしつねぢあひしがすくねもとより大力かんがうりきを出しゑいやつと取てふせ腰のかたなひんぬいてすでにさゝんとすしやうげんかなはずのふのふしばらくまたれよすくね殿何さはつ此けしやうはそれがしかなをよくしつたりなげに誠につねの人げんとはばつくんちかはんさんかをめくる山うばに三代のかういんさかたのすくねの惡太郎成かなにとこたへたるいやけしやうにて候はずうこんのしやうげんみつながにて候すくね聞もあへず扨はけしやうもとき〳〵はひやりをつかふなしやうげんかなにしに是へ來るべしむようのものにばけんよりしやうたいをあらはせとにか〳〵しくぞおしかくる何か大りきにしかれしやうげん力もつきはてなにしにいつわり申さん御身の心をひきみんためなり御ゆるし候へと手をあはせてこそ申けるすくねにつこと打わらふていや〳〵しやうげんどのか此惡太郎になとくみしかれたまふ人にてなしゆるしたまへとよわげをはくほうけものにてはおりないかさよつくしやうげんにばけすましたるばけ物やと上おひといてたかてこてにひつしはりくだんのかぶととくびにひつかけさせさきにおしたてこくしのやかにかへりける誠に天下

に名をあらわし今にさかたのきん平とよばれし事こそもつ共なれあつはれきたいのでけ物かなと皆かんせぬものこそなかりけれ

第二

しやうげんむほん幷に悪太郎に生捕るゝ事

こくしのやかたにはおの〳〵よりあひたまひせんぎさま〳〵なる所へすくねの悪太郎しやうげんをちうもんのまつの木にからめをき一人おくにとをる人々御らんじやあ歸られたるかすくねして〳〵へちのしさひはなきかすくね聞てされば〻き程あせ水になつてあらそひしもしぜんかはりたることもあるべきかとそんしはる〳〵まいりて候へ共それがしかまなこにはかつてみへ申さすすこ〳〵と罷かへり候となにとなげにぞ申ける其時すけのしんむか〳〵とたち出いかにすくねごへんまいられたるかひつちやうな中〳〵いかにもひつちやう候しからばしるしなきことはよもあらじにせうこなきとはあふやがて心へたりさすかのいわやはましやうけわしきげんさんなればひるだに人のかよひなしましてやいんの事なれば御へんもたくみのうへのこうげんとはばつくんちがい心はやたけにあるべきかゆくことさらにかなはず道よりかへられたるきしよくあらはれたりいかにいかにと申けるすくねきいてあふげにまことかにはかうにこにせてあなをほるとせけんにいふはよくいふたおのれが心にひきあてたるいひぶんかなさほどうろんにおもひなばたしかせうこをあらわさんとしやうげんを引たてもしかやうの物もせうこに成べきかとひきすゆるこくしをはしめ人〳〵は是は〳〵とあきれはて〵おはします時すくねおしなをつていかにすけのしんやあ何とせうこをみしつたるかやあ何とてものをばしかぬ則此かぶとはごんげんのぢうもつよなまつたきやつめはすでにねぢころさんとおもひしか共しやうげんみつなかなりひらに〳〵とかうさんをいたせしゆへふびんにおもひとかくからめて來りたり扨何れもへ申けしやうめがしやうげんかよつくけんぶつなさるべしやれすけのしんなんぢも共にまかり出まなこたまをみいだいてよつくみわけようろたへ物とたゝかけてぞ申けるこくし御らんしたがいのろんな是までなりまづそれ〳〵とのたまへば人

ひとうけたまはりすでになはをとかんとすすくねおさへてあゝしばらく〳〵さためて是はそこつになはをときつかまれたまふな〳〵あゝすくねざやう（本ノマヽ）も大かた成がよき物ぞまつこなたへ來られよすくね聞て何れもの御しんぢうにはさきやうであらすとおほしめさうが八まん〳〵それではないすてにそれがしいわやにてすこしなり共うろたへなばやみ〳〵といぬじにつかまつらんなひつちやうなりしからばざきやうとは申されず此うへはかれが一めいを取べけれさりながらいらひにくちをきかせまじきためのせうこなりとしやうげんかさしたるくもはらひといふたちをおつ取扱いましめのなはをとくしやうげんむねんにおもへ共一ごんつかわんことばなければきやうだい共にまつかたはらにそしのひけるそのゝちこくしすくねをめされじや！年なりといへ共一しんをきはめうむのせうれつたゝすゝゝことこそしんびやうなりと御さかづきを下さるゝかたじけなしとちやうだいし大かはらけに三ごんほしいまはおいとま申べしいかに人々しやくはいものにて候へばふれいは御めん候へと人々にれいきをのへ本國さしてそかへりけるかくてそのゝちうこんのしやうけんみちなが兄弟打つれ父ひてみつのまへに出こんどこくしの御まへにてすくねの惡太郎とかよう〳〵のあらそひ仕りて候すなはち其座にてさしちがへんと存しか共よしなきあらそひにしまけせんかたなくはてたるなとゝいはれんははしのうへのはぢかさねてちりやくをもつてほんもうをたつせんとぞんしむねをさすつてかへり候いかさまにも御しあんあつてたまはれとはがみをならして申けるひでみつきいて扱もむねんの次第かな此ことそのまゝさしおかんは家のちしよく是にすぎずかれかたちへふんごんで打はたさんよりべちのぎはよもあらじいそぎやういをつかまつれこしらへよなんぢらと身もたへしてぞくるひける時に家のかうけん大しゑ傳太左衞門おも〳〵しくすゝみ出とのゝはらだち尤にて候へ共さすがかれは天下のまれものといわるゝ物の子にて候へはかれをはたしたまふとおほし召れ候共一つは天下にたいしてはゞかりおほく候へばまつ此たびは御しあんあつてごにちの御さたか然べしととめけるひでみつきいてなんぢらが申もりがきこへぬではないきこへたれ共まつあんじ

てもみよ一つは家のきずではないか家にちをあへしてうきよにすむことは一時ても此ひでみつはかんにんまかりならぬよしは天下にたいしてむほん人といはれんなそれこそぶけのしゆつせなりことにわれ藤原のひろもりに三代のかうゐんあふぢを出てとをからず然共時のうんによつていたつらにはなゝきさとのむもれ木とくちはてんとおもひしに是ぞじこくとうらいたるへしかれをはそくぢに打ひしぎことついでにぎへいをあげ國〳〵へくわいぶん状をつかはさんしからば東八か國にとうけをうらむるさふらひおほしそのせいをゐんそつし一命をなげうつて天うんのはからんようせよとぞおほせけるそのときあいばら大ぜんのすけまかりいで尤ぎよいしごくいたして候さほどにおほしめすうへはたれかいぎにおよふべきさりながら物はやぶるにちかしすくふにとをしさすかのしろもめいしやうなればすちつをこめてたたかはんはゆめ〳〵かない候ましまつこんどはいかにひそかにようちかけにおしよせあしもとからとりのたつことくにはた〳〵〳〵とつめよせじやうにひをかけ一どにどつとのりとらんかのしろ一かしよほつらくせば八か國はもはやてしたにつき申さんとさもいさぎよくぞ申けるひでみつくわん〳〵と打うなつきなんぢか申だんほとんどわかしんていにつうじたり時をうつさすうつたてとふれしやうかいでばんどうかいだうにさしつかはしさてまたその身は手ぜいすくつて三百八十きひそかに國をうつたつて三重さかみをさしてぞおしよするやはんすぐるじぶんにふぢさはじやうへおしよせ時をとつとそあけにけるしやうにはおもひよらさればうへをしたへとかへしけるされ共家のしつけんへつとう太郎やくらにあがらなにものなればやちうのろうせきそのしやうたいをはき出せ其時しやうけん一陣にこまかけ出しなになのるまでもあるへきかいしゆあればこそよせてあれとう〳〵はらをきるへしと大おんあけてよはゝつたはるちかから〳〵と打わらひあふいしゆあつてよせたらばそれにしはらくまてやとてやぐらをゆらりとんでをりそれがしふせがんその内にめん〳〵ものくつかまつれとたせいか中へわつて入とうさいへおひなびけなんぼくへまくりたて本ノマヽおもてもふらすいきをもつかせすしうわうむさんにたゝかひけりその

ひまにみかたのせいわれも〳〵ときつて出　三重ひはなをちらしてたゝかひける頃はちやうとくくわん年十二月十三や月はくまなくさへければたゞ日中のごとくにてたかひにそれとなのりかけうつゝうたれつはげみをなす爰にしやうげんみつながいかにもしてすくねにめぐりあひ太刀うちのせうぶをけつせんと大たちひつさげむ二む三にきつてまわるされ共めぐりあはされば大おんあけいかにすくねの惡太郎およそこゝにてもきゝしらぬあいてにふそくはあるまじきいて〳〵せうぶをけつせよと天もひゞけとのゝしつたり時にじやうの內よりなんぼくのべつとう太郎ちつとひけんいたさんと一もんしに打てかゝる心へたりときりむすびたがひにひじゆつとつくしけるべつとうさそくをふんで太刀をしやにひつかまへおとりかゝつて打たちをしやうげんしつとゝ合せすさつてすそをはらへばむざんやはるちかゆんでのひざ口わられたぢ〳〵とする所をくびちうに打をとしいかにすくねきたなくもいであはぬはひころのこうげんにはにあはぬおくひやう物やとしろをにらんでたつたりけりかゝる所にわかむしや一きすきまもなくかいくゞりよはごしをむんずとだくしやうげんさあしつたりと取てふせせんぎまんぎのかたきよりおのれをこそまちうけたれとかぶとちぎつてみてあれはすくねにてはなかりけりしやうげんはつとをどろき扨おのれは何物ぞわきさか兵ごか一子かもんのせうのりもとなんぢかためにはよきかたきはやくびとれと本ノマヽぞ申けるしやうげんきいて扨はせん年こそさしばらの合戰に打しにせしあきのりかせかれよなにくやにくやおのれをうたんとのいくさにあらずしうのすくねきたれと申せいくさ中ばのじやまげだうおもへばにくき小くはじやめとみぎのかいなを打をとしあひそうなくつきはなすのりもとむねんにおもへ共ごたいさらにかなはずはをくしひばつてひく所へすくねのあく太郎からめてをふせぎいたりしかたちかへつて此よしをみてやあそれにひかへられしはせんしついわやにて御げんざん申たまゑんどのにて候なすくねあく太郎是に有さこそのそみにおはすらんさりなから身がとうがくびをうつにはちつとうでかふるをうぞだうをすへてしつかとうたれよみつながはらにすへかね太刀を八方にかまへすな〳〵と打てかゝる

すくねみておほ見事しや〳〵それたゝそれてこそは打れた物なれまいるといふててつほうとりなをしすきまをみてはづみをちやうとうつたまいつた〳〵しやうげんすかさずむんずとくむすくねにつこうちわらいねんふつ申せみつなかとゑいやつととつてふせくびをかゝんとせし所にさいぜんのかもんのぜううれしげにてはせ來りかやう〳〵とかたりけるすくね聞て扨はさやうかやれしやうけんめいんぐははたちまちむくふたるよな只今ねぢくびにせんはやすけれ共一時成共うきめをみせおのれに思ひしらせんとたかてこてにひつくゝり取てひつ立はなをそいでまつこんどは心あつてたすくるぞと敵の方へぼつこみ扨もせうげん殿のよしなきいくさをし出しはながもなきていたらく長良がくん法所（本ノマヽ）にもすぐれてはやきにげぶりやあのあし本のはやさよととつとわろうて引かへすつもる年は十五歳おにかみより猶まされとて皆かんぜぬ者こそなかりけれ

第三

すくね母ろうしや並惡太郎うはい取都に上る

兩方たかひにはげみをなし防きたゝかふといへ共よせては大せいあらてを入かへせめけれは城中の物共皆こと〳〵打れあとにのこる物とては年よりたるをく侍あるひは女わらんべ爰かしこによりあひていくさせんぎとり〳〵なり所へすくねか母くれなひの五つぎぬにくろかはおどしのはらまきおなしくこぐそくさしかため長刀をよこたへいかにすくねいくさの次第心もとなしとのたまへばすくね承りさん候よせて大ぐんにて候へばみかたこと〳〵く打しにつかまつて候去ながらそれがしを千ぎ萬ぎ共おほしめされ御心やすく御座有べしとさもいさぎよく申されたりすくねたとへかたきはなん十まんぎあればとて一しんをおとしつけおや子たがひにきつて出たゝかはんにそもなにことのあるべきかみづから女なり共心はおつとにちかふましうしろつめしてゐさせん心やすくおもふべしといさめられしは誠にすくねが母程有とほめぬ物こそなかりけり所にかたき大せいよせかけ時をとつとそあげにけるすくね心へたりときつて出るはゝもつゞひて出たまひみづからさきをかけんあとをこなせと一もんしにかけ出むらがるてきに

わたりあひはらり〳〵と三重ないだりけりいまだ時もうつさぬまに三十六きなきふせ殘りしやつばら東西におつちらしおや子手にてを取くんで城中さして引たりしはめをおどろかすばかりなりかたきひでみつ諸ぐんせいに下ぢしていはくかれらおやこ切て出るはもはや城中に人はなきとみへたり今一どどつとかゝりなは又切て出ん其時よは〳〵と引ならばかつにのつてほつかけんそのひまにからめてより廻り城にひをかけ中に取こめ打とめよ尤此ぎ然べしとてすけんのしんひで時ぐんせいすこしく引つれからめてにまはりけり扨じぶんをはかつてしよぐんせい又きど口におしかけ時をどつとぞあけにけるすくね太刀おつ取かけ出るを母取ておさへやれすくね此たびはながをひむやうなりしばらくとまれとのたまへばみみにもさらに聞入ずしやうもこりもなきやつばらかなとてつほうをおつ取打てかゝるもとよりあひずの事なれはむら〳〵ばつとにけさつたりいづくまでもとおつかけたり其ひまにからめてより城中にみたれ入びやうぶしやうじにひをかけ天下かすみとやきはらふ母はつとかけ出よせての中へとんで入むかふかたきをさいわいにねち首つゝぬき八つぶてめをおとらかする三重ばかりなりされ共大せいおりかさなり母をいけ取まづかたはらにひいたりたりすくねひのてに驚き取てかへしみてあれば城にはくろけぶりもへあがりくんせい八方にはい〳〵んすなむ三ぼう母はなにとなられしとたけき心もよはりはて泪にくれていたりけるやう〳〵泪をおさへもゑたつ中をとびめぐりかたなこなとたつぬれと其ゆきかたのしれざれば扨は打じになされしかもしかたきにいけとられたまふかやなにとなりゆきたまふぞとおにをあざむく惡太郎もたゝよは〳〵となりはてのふ母上さまはいづくにましますぞとかきわけ引わけよべとさけへとかいぞなしなにとなりなん我か身やとしばしきへ入なく斗扨も〳〵あさましやかくなりはてんためにこそひらにながをひむやくそととゝめたまふを聞入ずかたきばかりにめをかけてもつたいなくも母うへをかくなす事の口をしやさそやぶつしん三ぼうも我をにくしとおぼすらんなむやしよてんせんじんも是を愍み今一と母うへにめぐりあはせたひたまへあなこいしの母上やと我みをだいてぞなきいたりしよじ

のあはれとみへにけるあゝおくれたり我心しやうしやひつめつゑしやちやうりたとへ此いくさおこらず共いつまでそひはて申べきふつつと是をおもひきりしよせんてきぢんにかけこみかたはしよりこくひやくみぢんに打ひしき母のきやうやうにほうせんとかけ出んとしたりしがまてしばし我心（本ノマヽ）もしもかたきにいけとられたまひなば御命すくふべき物よもあらじゑゝ八まん〳〵はやりすぎたり〳〵たとへ打しにさるゝ共又いけとられたまふ共此惡太郎があらんかぎりはかたきをあんをんに置べきかまつ此度ははゝのししやうを聞（本ノマヽ）とつけそのゝちあんひをきはめんと思ひながらもむねふさがりなみだをそでにをしまきてかたはらにしのひける心の内こそ三重むねんなれ是は扨置かたきむさしのぐんじひでみつふぢさはの城をせめおとしよろこぶことはかぎりなしされ共すくねがゆくすへをいかにもしてさがし出しちうせよとせんぎさま〳〵成所へはゝをいけ取御前にひきすゆるひでみつはつたとにらみやれわ女はすくねが母成よなふてき成せがれゆへさやうのなんにあひさぞ口をしくおもふべしすくねをいつくへおとしたるぞ有のまゝに申べし少もいつわる物ならばかうもんせんとぞ仰ける母につこと打わらひやれうろたへ物こへんなさ程うろんにてかやうの大事をよく思ひたたれたり扨もぶしのおれくずかな女なればとて侍のつまとあらふず物ががうもんにおよぶがせつなきとてはくしやうをいたすべきや誠にてん共ち共たのみをかけし我子の行へかたきにしらするうろたへたる物のあるべきか打も〳〵いぬねこにおとりたるとひことやとあざわらふてこそおはしまするひでみつはらにすへかね扨もかうじやう成女めかなしやつめをさいのめにきざみおもひしらせよそれ〳〵とあれは畏てひつたつるそのゝち大しま傳太左衞門すゝみ出御てうにて候へ共かれは女のことにて候へはとかくおんびんの御さた然るべし其うへすくねをうたんはかりことにはくつきやう一のことにて候其りといつは母をばろうをつくつておしこめ道のほとりにせきをすへたかふたを立られ候はゝさすがおんあひのちぎりすてがたく母が命をすくわんとおのれとあらわれきたるべしとてに取やうにぞ申ける尤此ぎ然べしいそひで其だんしつらへ畏てやかてよういをしたりけ

るかくてひでみつおたわらにぢん取てくわいぶんのまはしぐんせいをもよふすに此とし月けんいにおそるゝ諸侍あるひはふるきよしみをしたい我も〳〵とはせ來るまつするがの國にはきつかはしきぶの太夫ありしげしそくさませうしげさだ手せいすくつて三百よき三つわちかひのしらはたさゝせはせ來るかいの國にはたけだの太郎かつのり二百五十きいんそつしすそくろにもつかう付たるはたさゝせつゝひてこそはせ來れむさしの國にはうへすぎはんぐわんよしうぢちやくしぎやうぶのせううぢまさ三がいまつのはたさゝせ是もつゝひてはせ來るそれのみならずひたちしもをさあはかすさいづさがみの人〳〵さうじてばんどうの八へいじむさしの七たうさきとして三つほしくやう二つ引三本たけふしのまるひだりどもへみぎどもへまいづるとびづるつれちどり二つかしら三つかしらつなぎ馬にはなれこまくさづくしさんびきさるばしやうばしゆろうはかしわのはうちわのもんにあふぎのもん家〳〵のはたさゝせ我も〳〵と來りけるむねとの大みやう三百よ人つがふ其せい十一萬三千よききらほしのことくぐんをなしてしこうする大將きゑつのまゆをひらきまづかまくらにいぢうして東國より打て出ぐんひやう二てにわかつてほくろくだうをきりしたがへ中國は扨をき四國西國さんようだうなんかいだうに至までこと〳〵く打取日本をしたかへんはたな心の內なりとしよぐんせいを引ぐしてかまくら入とぞ 三重きこへける是は扨置いたはしやはゝうへはつめろうにおしこめたかふだをたてすくねおそしと待いたり母つく〳〵とみてあな物しやか程の手すさみ引やぶらんはやすけれ共我は女のみなりすくねか命にかわらんことねがふ所とよろこびあはれあく太郎あんをんにて君の御ように立ならば今のおもひはよもあらじと泪にくれておはしますはあはれおくなりける次第なりかくてさかたの惡太郎いくさやふれて其後はかた山さとにかくれいてせけんのやうをきゝいたりきん國た國殘りなく皆かたきに一みしてかけをかくさん所なし一たび都へのぼりかせいをうけて今のむねんのさんせんとおもふ心を一すぢに都をさしてぞのぼりけるまりこのしゆくをみわたせばせきやとおほへてたかやぐらみへければ扨はかたきそれがしをとゞめんためのせきや

なりとおぼへたり何さたんたひとひしぎに打やふらん物をとはかみをならしてゆく所にむかふよりひやくしやう一人みのかさひつかうではせ來るすぐねかれに近付やあしばらく物とわんあれにみへたるしんせきは何のためぞどみんこたへてされバそとよさがみの國のふちさはのしろらくじやうに付すくねのあく太郎をちゆきしが其母をいけ取あれにみへたるろうにおしこめゆきゝの物におもてをさらしたかふだをたてふだのおもてにきんじつちうすべき物なりもしあく太郎あらわれ來る物ならば母か命をたすけんすくねかゆくゑたずねんためのせきなりとかたりけるすくねはつとおもひ扨は母上いまだうきよにましますことこそうれしけれやあどみん我こそすくねの惡太郎也我一人とをらんなたとへくろかねのもんなり共打やぶらんなやすけれ共はゝうへの命をすくはんためなりむしんながら其みのかさをそれがしにゑさせましきかと仰けるどみんはつとおもひ扨もすさましきものに出あふたる物かないぎにおよばゝねぢころされんはぢてうなり扨も承り及たる惡太郎さまにてましますか只今のあくごんはまつひら御ゆるし候へさやうにおちぶれさせたまへばこそ我等ごときのいやしき身におことばを下され候へたとへきんぎんにてのべたるみのかさ成共何しにじたい申さんとふるひふるひぬぎすてゝ逃んとするを引ゝめ扨もなんぢは心やさしき物なり是はこれ此ほうひとてはだにさしたる石丸といふ太刀をゑさすどみん心に此人はあらものなりとうけたまはるがあまりやさかたに申は此太刀にて只一打にあふことかと取てもおぼへずおす〳〵取ておしいたゝぎあまりのことにとうてんし御れいを申さんとて扨もあぶない事にて候とあとをもみずしてにげにけるすくねおかしく思ひしが是只事にあらず此みのかさをゑる事一ゑに八まんのりしやうにて有へしとこくうを三どらいはいしかのみのかさをちやくしつゝせきやをさしてそ三重いそぎけるかゝる所にあとより馬のり一きはせ來るすくねふしきに思ひ下人に近付いか成人にて候ぞ下人聞て是はみやさきの左門殿と申人成がまりこのめしうとを東國へ下べしとのでういをかうむり只今めしうと請取に參らるゝはといそがはしげにとをりけるすくね是ぞくつきやうの事とおもひ山のそわをはしり

ぬけはん物に近付我は此あなた成中野と申ざいがうの物にて候が坂田とやらんの侍共かてういなりとたはかりめしうとをうばわんと跡より大せい參なりかまいてゆだんしたまうなとあはたゝしくぞたばかりけるばんの物おどろきよくこそしらせて有物かなはや日もくれかゝればたいまつかゝりとよういする所へ左門何なく來る所をはんの物心へたりといなやに及ず大將を馬より下へ切ておとす侍共こはらうぜきなりと太刀ひんぬいて打てかゝるをさん〳〵に切ちらす其ひまにすくねろうのかうしに取付みじんにはいに打くだき母をばい取かたにかけとぶかことくにそれよりも上きんかはりみやこの方へといそきけるあつはれ公平一代のぐんほう是なりと皆かんせぬものこそなかりけれ

第四

よりのぶ出ちん幷金時打手をたまはる事

坂田すくねのあく太郎母をばい取かたにかけもみにもふて行程にするかの國に聞へたるしまだの宿にぞ付にけると有所にはゝうへをおろし置たがひにてにてを取合悦び泪はせき敢ず母上泪のひまよりも扨もおことはあまたのてきにへたてられ打しにしたると思ひしにかい〳〵しくもながらへ二度あふこそうれしけれさて此上はゆんでもめてもかたきなれはへんしもいそき都へ上りかさねてほんいをとげたまへいざこなたへとのたまひてと有こかげに立しのびたびのしやうぞく三重せられけるすげのおがさでかほかくし人めしのびの事なれば其身しゆんれいにさまをかへゆだんおいづるかたにかけならはぬたびをするが成ふしいろひのやしのけふりのゆくゑなき心をくものきへ〳〵としづみし身をもうきしまがはらぞと聞ばたのもしやいさゝらばさらにたへせぬ我かむねを思ひくらべてみをがさきかくしづみてものちのよをおもひこめたる竹のつえ物うき事をふしいろなか〳〵にながらへうきをみするよとたがひに手に手を取くんでみねにあかれはきのねに取付たにゝさかりて水をあげいろふしのんどをうるはしふしとろもどろと行程に月のひかりもきよみがたかすみにかゝるくもさきやしつはた山にさしかゝり泪にくれてゆふはらの草ばのつゆに身もぬれてかたちもやつれあさましく

つたのみしげるうつの山うつゝにゆけとなか〳〵に夢路を辿る心ちして（つきゆりふしわけてのぼるこそ物うけれすへをたれにかとう〳〵みはまなの橋の道しほにさゝねどのぼるあまをぶねこかれきぬれはからころもきつゝなれにし八はしの花むらさきや（ゆりふしかきつばた我身はいいかおわりの國何と成みのしほひがたふしさしこゑゆけは程もなく（二ひやうふしあつたのみやだちふしおがみ行は程なく今ははやこいしき人にあふみぢや（きんがはり）うつろうかげのかゝみ山しがのうらはのはる風にさゝなみよするせたのはしとんどろ〳〵と打わたり大つのうらを打過てかゝる思ひにあふさかのせきとめがたき ふしなみだかな水にうきねのかも川や打こへ（くりあげんかはり）行ば程もなくはやこゝのへにそ 三重付たまふ是は扨置かくてにしきの御所には東國の亂げきはやさきたつてちうしん有四天王をはしめおの〳〵御前に召れ御ひやうでう有所へむさしの國のぢう人みやいのとうじはや馬にてはせ來りいづの國のぢう人本間むさしのぐんじきやくしんをくわたてさがみの國ふぢさはの城をせめおとし候其上東八か國大かたかれがてじたに付かまくらに座をすへきん日ていとへ打て上る由に聞へ候いそぎ打てを下さるべしと大いきついてごん上す時に渡邊すゝみ出いかにとうじしてふぢさはの城はほつらく仕たるかひつぢやうさん候すぎつる十三日のよらく城うたがひなしと申ける渡邊聞てしやうたりすくねいまだしやく年成ゆへいくさの手だてうろんにてあへなく打じにしたると覺へたり扨も〳〵あつたらわかき者をやみ〳〵と打せし事の口をしやとこぶしをにぎりきはをかみとうざいくれてなきいたり皆々泪をながさるゝ中にもきん時あまりのことの物うきに泪をおさへくどき事こそあわれなり誠に人のおやのならひにてわか子のあしきと思ふ物はなし殊にかれらはきりやうも人にすくれたりと何れもひやうでうなされし（本ノマヽ）事なればおやのみながらつれしくて我か身においのつもるこゝとは打わすれあはれすくねがはたちにも及なば坂田の家をゆつり人〳〵にうら山しくもおもはれんと是のみよろこび天下に子をもつたる物は我一人のやうに頼みをかけて思ひしことの皆いつわりとなりたるよと御まへ共はゞからずおにのやう成金時もふかくの泪をながしける君をはしめ奉り一座の

人々皆〳〵そでをしぼらるゝ金時泪をおさへあまりの事にむねふさがり御いとまをもこはずしてざしきを立渡邊そでにすがり是は金時いづくへか御へんのけしきたゞならずまづ上いをかうふり出たまへ金時聞てていやさべつにいつかたへ行べきか爰をはなしたまへやいや〳〵それがしのさつする所ちがふまし有のまゝにかたりたまへ金時聞てされは渡邊とのまづあんしてもみたまへや一人持たる子を打せ一國の城は打やぶられ何にめんぼくあつてうきよにながらへ有べきか敵は百萬ぎもあらばあれ此一ねんをたつし申さで置べきかでういをかうむるも時によるごめんなされとかけ出るを引とゞめ尤それは御みが心も此渡邊かしんも同前たり去ながらことあらぎにしてかなふましまつしばらくとせんぎなかばへ金時のしつけんぜんし左衞門御前にまいりすくね殿の御上りにて候と申上る君をはしめ人々何と申はや〳〵是へめせ畏てやかて御前にさん入す金時渡邊是は〳〵と悦事はかぎりなし君御らんじいかにすくね此たびのなんさぞ心くるしく思ふらんいしゆをくわしく申上げよとの御ぢやうなりすくね畏てさん候めんぼくなく候へ共ぢやういにまかせ申上け候こんどこくしの御前にてしやうげんみつなかとふりよに侍のいぢづくをはげみたちまち打てすてんと存候へ共一つはこくしの御前をはゞかり一めいの其かはりを此太刀をひつ取思ふまゝちしよくをあたへ候其いしゆをもつてかくのごとくろうせきに及候あはれ御かせいを申うけ本望をたつしたく候と泪をうかめて申ける君ゑつぼにいらせたまひそれ〳〵とのたまひてくだんの太刀をめしよせられさやをはづし御らん有にしのぎのかたにたいらのだんじやう藤原のもりひろに四代のかうゐんけんもつうこんのしやうげんみつながとうるしをもつてかいて有扨もなんぢはふゆうたつせしわか物哉さすがにかれは東國にてはならびなきかうの物と聞及しに年にもたらずあらそひにしかつといひ其上かやうに太刀まではい取心ざしのたつしやさよさすが金時か一子たる物かなさしも御ひさうのこたか丸といふ御太刀に取そへられ則すくねに下されまづきうそく致べしとの御ぢやうなり忝と御前を立かさねての御ぢやうにはいかにめん〳〵此ことゑんゐんしてはゆゝしきそうどうたるべし時をう

つさず敵ついとうのせんぎ有べしと仰ける其時金時申上るはかやうの事いでき候も一つはわたくしのしゆくいよりおこつたる事にて候あはれ御ほうしんに此度の打てをそれがしあつかりたく候と思ひかうてぞ申けるらいくわう聞召れ尤さありといへ共是わたくしのしゆくひにあらず天下をみだすげきしんたりよりみつ馬を出すべし何れもよういいされ本ノマヽよ金時かさねてぢやういをいはひ申に候へ共かほどのことに御馬を出され候ことあまりもつたいなく候せひ此たんは思召わけられ下さるべしとさへぎつてごん上す君げにもとおほし召れ其ぎならばよりのぶ大将にて五き内のせいをそつしむかふべし去ながらすくねはていとにとまるべし畏て御前を罷立おの〳〵よういを三重したりけり是は扨置爰に又渡邊のつながちやくしみたの源次郎ちゝと一所にざい京していたりしが此ことを聞よりひとしく供人すこしく引ぐし金時のやかたをおくりさしていそぎけるあんないかうてすくねにたいめんし扨もめづらしのすくねまつもつて此たびはなんぎにあはれしか共けんこにて上られ我一人の悦ひ是にすぎす候それに付此度は君よりとゝめたまふゆへていとにとゝまりたまふと有かひつぢやう成かすくね聞てされば此度は父と一所に罷むかはんと色〳〵ごん上いたし候へ共御ゆるしなく其うへ御せんよろしかるましきとおや共さへきつて申ゆへかれ是もつてのかれがたくせんほうつきはていとにとゝまり候何と殘おほきことにあらずやと物ぐるはしげにこそかたりける源次郎聞て其ことそれがしも此たび御へんのはしめていくさにあはれたるがあまりうらやましくせひをんとも仕りいくさとやらんをけんぶついたさんと此由をおやにかたりつれはちゝ渡邊申せしはかりそめながら此度のかたきてたてをめくらすよしなれはていとの内心もとなしかさねてせんぎ次第に跡よりかせい致へしとさらにしやういんいたさず然共此度はあとのことをもおもわれずあまり御供いたしたく心をくだいてあんずるに爰によきてだての候とかく人なみにはこへんも我もかなふまじぐんひやう共に打まぎれ跡よりぬけて下らんと思ふはいかにとかたりけるすくね大きに打うなづき扨もたくまれたり源二郎御へん程成あんじやは日本は扨置とうと天ぢくにもよもあらじ其ぐん

兵にましはることか程ちかきてだてを此すくねがふんべつにちつ共さし出ずさらばよういを仕らんごにちに御せんさく候はゝ御へんと我一所に御かんきかうむらは思ひのこすことはなししや何事かあらん時もうつるにはや〳〵心へたりとてまつしやうぞくをぞ 三重したりけるすでにこくけんきはまれば御大将よりのふ公はしめての御ぢんだちの事なれば國〳〵の諸侍さも花やかに出立家〳〵のはたさゝせつかふ三萬七千よきにちやくとう付長とくくわん年卯月六日にていとをうつ立たまひける爰にみたの源二郎すくねの悪太郎人におもてをみしられしとちぎれしくそくかたにかけやせたる馬に打のつてわざと跡にぞさがりける既にごうしうあはづか原にてせんぢんごぢんのそなへをたてしよぐんぜいの手わけをなし東國さしてそ 三重下らるゝ此ことなをもかくれなくむさしのくんしひでみつかまくらに座をすへしよ國のぐんぜいもよふをすになびかぬくさ木もなかりけりよをひにつひて打程に三川の國おかざきにぢんを取都せいおはりのなるみまて罷むかふと聞ゆさらば爰にてあひまてと何れもやく所をかまへける大将ひでみつ家のしつけんに傳太左衛門を近付けなんぢは敵のぢん所へ行つかいのやうに申なし人じゆ何程有ぞくはしくみてまいれ畏てそれよりもよせてのぢん所へいそぎけるぢん所になればあんないかうた内より（本ノマヽ）何事やらんとこゝうひでみつ方よりつかひのよしを申金時それこなたへとをくへしやうじ扨何のためのおんつかひぞたかもちつゝしんでさん候ひでみつ申候は方々をもふけのためまかりむかつておかざきの宿にぢん取て候只今それへ取かけ申さんやたゝし明日さう天に取かけ申べきか御かへりこと承はらんと殊めいわくにのべにけり金時もくねんと打うなづきあつはれきりやうの侍かな御へんはいか成物ぞさん候ひでみつのかうけん大しま傳太左衛門と申物にて候扨も聞及しよりふてきかなつかいにことよせぐんぜいのけんみにきたるはまがひなしよつくみをひてかへるべしへんしはそれがしまいりじきに申さんとじこくうつさす立出るともの侍御とも申さんよしよしそれがし一人まいるむやう〳〵とつかひと打つれてきぢんさしてぞ 三重急ぎける陣所になればたかもちさきだつてひでみつにかくといふそれこなたへ

と申所へきん時つつととをりいかにひでみつ久しう候ごへん此たびぎへいを上けられかくの如くぐんぜいをもよふさるゝはちか頃おてがら〳〵まづ只今は此ほうよりつかひをもつて申べき所にさうそくじせつにあづかるだんごへんのしそくしやうげんみつながそれかし一子あく太郎と少いぢづくをはげみ其いしゆをもつてかやうにこくどをさはかせらるゝは侍のほんい尤かうこそ有べけれ則此太刀はすくねか取てかへりし太刀なりいかにもしやうげんこへんもとのぬしなればひきて物にゑさするなり有がたくおもひてうほうせよいかに是成お侍しうきのふまでもけふまでもらいくわうの御をんをかうむりさいしをふちしめ身をたてし人〳〵のよくこそぎやくしんに一身せられて候明日さうてんにかならず〳〵けれい申さんとずんとたつて出にける大將をはしめなみいたるしよぐんせいさても人もなげ成ふるまいかないぎにおよばず打とめよとをりかさなつてひしめいたり金時みてあらせくまひ〳〵方〳〵をこくびやくみぢんに打とめんな何よりもつていとやすしきん年はこくどおさまりゆみはふくろに入つるぎははこをひらかねはたがひにいくさめづらしゝ明日はな〳〵しくつかまつらんそれまではかた〳〵かくびをみやう日まであつくるぞこよひはかりのちぎりなれば何れものくび共によつくなごりを惜まれよ扨此長刀はききもおよはれんしゆてんどうじをたいじの時らいくわうよりたまはつたるはんしやくなり共あつるに切れずといふことなしさるによつていわきりとなづけたりまして方〳〵かなまくび五まんや十萬きることはりやうがはいをのむよりいとやすしさらばちつとあて申さんとおつ取なをしふつてかゝれはすまんのぐんひやううしろへじや〳〵〳〵とにげさつたりあゝひきやう〳〵是はおとしのためなりしんじつは明日〳〵何もよさとうこされさらは〳〵〳〵とかうげんはいて立歸るかの金時がいきをひまことにやまうばのいきしやうじんやとみなかんぜぬものこそなかりけれ

第五

金時ゆうりき幷ひて時みつなかさいこの事

すでに兩方よりよするせいちりうの宿にてたがいに

むらかつて時をとつとそ合ける金時まつさきにかけ出扨も方〳〵はやくたくをたかへずさう〳〵の御出近頃悦び入て候昨日申せしごとく長刀のやいばをそつとひけんに入申さん今ぞしんじつなりくはんねんせよと大せいの中へわつて入はらり〳〵と三重ないだりけりときもうつさすくつきやうのつわものを八十三きおなしまくらにきりふせのこりしやつはらをつちらしあたりをにらんでたつたりしはげに人げんとはみへざりけりすまんのぐんひやう此いきをひにきもをけしそゝろになつてひかへける所へかたきのぢんよりも大しま傳太左衞門高もち大せんのすけともあき二人もろ共にてつぼうをひつさげかけ出さてもいひかいなきありさまやいで〳〵一いくさしてたた今打れしもの共のきやうやうにほうせんと二人一所にあひならんでまくりたてゝそ三重ないたりけりさしもいさゝし都せい此もの共にきり立られむらむらはつとぞくすれける二人いかつてゑゝきたなしとよかた〳〵にぐるはかりかのふ成かかへせもどせとよはゝれ共おもてをあはする物はなし所に源二郎と惡太郎ゆんでのそわにぞ打ごみのいくさけんぶつしていたりしかみかたはいばくするをみていかにすくねいまそくつきやうのおりからいざきやつばら打取君のおまへのみやけにせんもつともゝいざごされとくろをくゝつてつツといてさても〳〵方〳〵のありさまさき程よりけんふつ致すにみ事成はたらきとてものつひでに我〳〵をも打取たまへといかりけるたかもちあざわらつて扨もやさしきわつは共かなおのれごときのこくわしやばら千人まん人ころせはとて物のかすにて有べきかうろたへまわつてふみころされんよりはやそこ立されとぞいかりけるすくねこらへすやれうろん物わつはもわつはによるそかしまつくんてあぢをみよとはしりかゝつてたかもちとむんずとくむ源二郎とびかゝりともあきひつくんでやこゑをあげてねぢあひける雨ほうきこゆる大ぢからさらにせうぶはみへざりけりたかもちもともあきもさいぜんあなどりたるとははつくんちがひさてもおのれらはなりにもにせぬふてきものかな人げんにてはよもあらじとひたひにあせをなかし爰を大事とはげみける何とかしたりけんすくねたかもちにおつふせられた源二郎みていかにすくねはねかへせや

れはねかへせとそゝろにちからをそへにけるすくね下に有ながら高もちかみぎのうでをしつかりとはめいや〳〵せくまひ〳〵源次郎きやつはそれかしとつたごへんかていろをあいまつぞそれ〳〵ゆんでをはつておしかけこゑをかけてとつたる源次郎心へたりとさそくをふみこゑをかけてとつたすくねみておほ見事〳〵したり〳〵源次郎いでそれがしもしあけをおめにかけんといふよりはやくしやとつてふせくびかゝんとする所へよこやましん五同しん六一もんじにはせきたりわかものどもかしこころをつかんで引ろけんとす所をめてにてこがいなをおつとりほぐれてまへにゑいやつと引ふせ下成かたき一どにこゑをそろへてはねかへす又ゑいとけかへすされ共かたきはさゆうより取つけは源二郎もあく太郎も今はあやうくみへにける所へ金時はしりかゝつて上成二人のかいつかみ大ぢへゑいとうちつくるそのひまに下成かたき一〳〵くひを打おとし二人共にかしこまり君の御前はよろしきやうにおんとりなしなされ下さるべしとかぶとをぬくをよくみれば源次郎とすくねなり金時大きにおとろき扨も〳〵なんぢらはか程心かうにしてゆうりきさかん成べきとはしんりよにかけておもはさりしにいしくもしたりやさすが渡邊が一子又はそれがしか子程有御前のはゝかるも事による心やすくこなたへとゆんでめてにあいぐしいかにかたきのやつはらおのればら一きとうせんと頼みおかけし大しま傳太左衛門大せんのすけともあき其外横山兄弟を打とめたるわかむしやをいか成物と思ふらん一人は天下ぶさうのまれ物渡邊のつなかちやくしみたの源次郎生年十四歳今一人は坂田みんふ金時か一子すくねの惡太郎生年十五歳よつく手なみをみをけやと二人の物をさきに立扨もみ事のむしやふりやとあほき立〳〵あをき立てぞ歸りける敵のぐんせい是をみてかれら三人にたてつがん事共はとうらう車をおさへきるにたり只はちをすてゝ命をつげと一度にどつとくつれ皆〳〵かう人したりけりひでみつ大きにはらをたてゑゝあさましきぐにんはらあしてまどいに何かせん我〳〵三人切て出る物ならばがんせんにし人は山をつかと大おん上けいづの國のちう人平のだんぜう藤原のひろもりに三代のかういん本間むさしのぐんじひでみつ同ちやくしみつ長二なん介

のしんひで時けふをさいこと思ひさたむる此上は心あらん人〳〵はかけよつてくひ打てと三人もろ共打てかゝれはくもの子をちらすがごとく八方へにげさつたり所へ金時しつ〳〵とかけ出いかにひてみつ日頃のよしみそれかしかいしやくしてゐさせんとうとうはらを切たまへひでみつねがふ所と悦ひおゝよくこそ出られたり金時御へんの首を一めみてはら切るべしとはしりかゝつて打太刀をとびちがへむずとだくひでみつもなにしあふたるかうの物さそくをふんでねぢあいける金時みて敵に力をつくさせはづみをみすまし取てふせくびをかゝんとする所へみつなかひて時兄弟共にはせ來り公時かさゆふのてを取引ふせんとすされ共聞ゆる大力下成敵をひさにてつよくふまへさうの手をさしのへ兄弟かくさりをひつくゝり扨大將の御めにかけ都をさしてかいぢん有せんしうはんせいめてたし共中〳〵申斗はなかりけれ

寛文四甲辰年正月吉日

公平花だんやぶり

第一

そも〳〵君として下をなでしんとしてかみをおかさざればかならすこくかおだやかなりこゝにげんけ四代のそんいよのかみみなもとのよりよしこうすどのげきしんことゆへなくほろぼし四かいみなしづかにてたみのかまどもにぎわひけりされば御家のはんじやう日をかさね御きんたちまつちやくなん八まん太郎よし家かもの次郎よしかねしんら三郎よしざね何れもようがんびれいにしてしいかくわんげんにくらからずきうばのみちかきやうきわかきの春のはなざかり御ゆくすへはさぞ有らんとしよ人かつがうふかかりき御家のしんかにはわたなべげんじ左衛門たけつなさかたひやうごきんひらうすいのせんじさだはる竹ちのげん太やすもとわだ左衛門ためむね同ひらいのくらんどきようぢぐわいどまるかげまさとていこくにも本てうにもたぐいまれ成かうの者ぎゝとうとうとしゆごいたせはいか成天まやくじんもおもてをそばむるばかり也すでに春すぎなつもきてやよいなかばの事成に大将の御でうには北山のはなざかりさこそとおもひしられたりいさや打こへしゆるんしてた年のうさをはらさましいかゞ有らんと仰ければ竹つな然るべう候とろしのけいるいはなやかに北山さしてぞいそかれける御てんになればよものけしきをみたまへばはるかにさきしむめのはなにほひほのかにのこりつゝみな人ごとにきくの花あたにはせじとなでしこのはゝきゞのしげみよりかすかにみゆるをもしろやげにうた人も心そへ此花をのみかきつばた扨せきちくの花まもりつゆのやとりとかるかやにこてうむれ〳〵とびあそびいとゞ心のいさめしくひも入あひのかね共につく〳〵とながめあひはやよひ月のほの〳〵と出させ給ふぞかた〳〵ときやうにでうじてさかづきのめくれや〳〵おぐるまのいまやうろうるいこるゞ〳〵にながめをつくさせ給ひけりかゝりける所に竹ちの源太やすもとさかづきを竹つなに思ひざしくわだんのきくをおりきたり一しゆはかふぞ聞へけるいにしへの人のなをのみきくすいのなが

れたへせぬすへぞひさしきとゑいじければ竹つな聞てよろこびいかに人〳〵いざ我〳〵もつらね申さんとうざのめん〳〵尤と申中に金ひらきかぬかほにてつんど立はるかばつざにさかりつゝ若待にしやくとらせ人はともあれかくもあれ我は二ばの昔よりかだうもせどうをもしらばこそ酒にすぎたるあそびなしとひきうけ〳〵ほしたりけり竹つなみて又金ひらのれいの我まゝの出候そふざしきのきやうもさめ候是へ來り給へと申けり金平聞て尤あやまり候也ふれいはつねの事大事のうたのくわいの其中へ此ぎこつ者の參りてはさぎの中へからすの有に異らず御めんあれと申ける君此由を聞召げにやきんひらはきんときににたり我かの道よかるべしちかうめせと打わらひて仰ければ承りてたけち三うらそ立にけり金平どうてんして下べをさしてにげゆくを兩人御でうぞじやういぞさかたどのととゞめけり金平せひに及ずしてやう〳〵御前に罷出ひたいにあせをながしせきめんするこそおかしけれ大將御らんじいかにさかたすまんのてきよりもうたの心はたけきものにて有やいなや金平つゝしんでさん候おやよりそれかしに至迄かたき所を打やぶりとをきてきをてに取やうこそ心がけ候かだうはつゆも存せず候也金平こそうた一しゆにつまり候とひはん仕らんはほいなき事に御座候それかし一人の恥は四天王のちじよく君迄のかきんにて御ざ候今日のうたのぎは御めん候へとしほしほと申けり大將御ゑつき淺からずげにやたけき物のふもうたには心やわらぐとやけふのゆふゑんは金平にてとゞめたりといざ歸らんと仰有ざしきを立せ給へばおの〳〵御供仕る其なかに金平御供は仕らずして花壇のあたりへつゝとよりあら口をしや今迄はおに神とこそいわれしに一ざのちじよく取事はてきはよそにあらばこそこじんのつたへし如くはをかりてねをたやしさきの本望はらさんとさん〳〵にけちらかしにわう立にたつたりけり其中に竹つなは金平がみへざれば立歸り是を見ていかに金平盛りの花をいたづらに散し給ふは何事ぞさかた聞てけふのちじよくのむねんさにてきと思ひて打散し候也竹つな聞てそれは御ぶんのあやまり也花にとがはなきものを御ぶんにとがの有ぞかしいかにといふにせいけんのよにはぶんをもつておさめ亂るゝ時ぶにてしめす

さればぶんぶはくるまの両わのごとし号やうち物取てはおにゝもかみにもまさりたりと天下の者におそれられなさけの道をふつゝとしりたまわすやゝもすれば我は一せうふぼんのおのこ也との給ふこそおろかなれされば御しんふきんときも御へんのもちてなをのこす我等が父もあひをなしそれ侍のせんちやうにのそみ身をちんかいとなをおしまぬはしそんのはんでう思ふゆへ御ぶんはつゆもわきまへなしあゝ扨年比たじなく思ふかひもなしかまへて〳〵少は心をやわらけていか成人にもみへ給へなさけの心つかば必うたの道も有としみ〳〵とかんけんす金平大きにゑとくしてはうばいおゝき其中に竹つならでたれかはかくは申べき今迄のあくぎをばはらりとすてゝなさけの道をねかふべし去ながらくげばらのやうにほうづへつきて天のまもり物あんしいたす事金平はよもならじくげはうたぶけはきうばのやくそかし何のぐんしよにもうたにてきをほろほしたるためし（本ノマヽ）を聞かす一寸さきはやみぞかしまよひしきつまりことあひそふなげに申せは竹つなもせんかたなくもてあつかふたるあふれ者やと打わらひ我やをさしてかへりける竹つながかんげん金平が申ぶんよこかみやふりのくせ者やとみな上下ばんみんおしなべかんせぬものこそなかりけれ

第二

扨も其後がいをはけんて一たんりをうるといへ共ついには天ばつをまぬかれすこゝにきよはらの右大將のばつやうに清原のしやうせうあきひろとてゑつちうの國さかいがわにきよぢう有ゆうりきといひちぼうといひるいたいめいよのゆうし也つきしたがふ所のらうどうにはとなみの入道がつしんとておもてはさながらやしやのごとく力の程は人しらずかれが子共となみの太郎もりかつ同もりひさ三郎もりなをとていわがんせきのはせうになれいか成おに神をもあざむく程のつわ物也其外付したがふ者共一人とうせんならぬはなし然れ共あきひろおほち右大將あくきより此かたくらい次第へさがりてくげ共ぶけ共さだめなくさなからる人にことならず有時入道に近付いかにかつしん我うもれ木の花さかす身のなりはて

をいかにせん其上とう國近國のやつばら迄出入もせんのみならずよになしる人なんどとてまゆをひそめうしろゆびをさすとかやあはれ時もいたれかしせんぞのはたをさし上てとし月のうらみ一じにはらしはびこるげんじに思ひしらせなんたゝ何事も身ふでうなれば口おしやとはがみをなして申けりかつしん承り尤御しんていかんしいつて候ほんもうをたつせん事おもふしてことかろしてをくだかずしておもんばかりをめぐらしかたきをほろぼすぶりやくはやすふしてなりかたしそも〳〵むかしより今迄のげきしんのあらましをかんがうるにせんなれはともなしふんあればぶりやくなしゆうりきあればあく人也ぶんぶ二どうなればうんよはじうんのよわきと申も道をそむくによりて也さればげんじぶしやうをとつて三代さればとうけの頼吉君の御ゐくはうを身にうけてあんらくにくらすこと天ゐをかすむるにいたりなれ共ちふかして人をなつくる事をのみふうんのつのるこ
とはり也先大（本ノマヽ）一大將のかうなればとてしそつなくては一人のはたらき有べからずよく〳〵くふうをめぐらすに君御とんせいにてましませばあともたへ候也こくちうのかた〴〵立らせ給ひてじやうをもうけ取けんめいのちをもさたし給へとひたすらに申なば日比は何と存共ふびんのくわへ候てとぶらい來り申べしさあらん時何となくそれかしきしやうもんを持出みかどよりのせんぢにて頼吉ついとうのれんばん也かうはちうによるべしとさしいたし申さんときげんじに心ざし有物はさうなくもかいつかみ一〳〵にくびきつていへんあらんもの共はたれもかくと申ばおめ〳〵と仕らんひし〳〵とれんばんさせつまや子共あるひはらうぼを人じちに取て此國はらくらくとわうれうし所〳〵にせきをすへちりやくをめくらし爰やかしこをうばい取子共國のぶしをさしそへおいのあそびにさいをとつてほくろくどうは心もつくさす手の内ににぎりゆう〳〵わん〳〵と君をあをき申事たな心をかへすべからずとたゝ手に取やうにぞ申けるあきひろ打わらひ扨もたくまれたりかつしん日本の其内に御へんにましたるゆうしなしさらばぢせつをのばさずよういせよとこゝのもんかしこのついじのつまりにせいをふせてあんさいのみへにあきひろとんせいにて候あともたへて候也こひねが

はくは城をもわたしたからをもさし上たく候へば御出を待奉り候となみの入道かつしんとかきしたゝめ國中へこそまわしけれ國弓取日比はうとみとはざりしがふびんのくわへさしあつまりとなみの城へぞ入にける去程にかつしんわか侍にちんふつと持せひろびさしへしやうし其身は四尺八寸の太刀よこさまにさすまゝに九尺五寸のかなさいぼうをつゑにつきざしきになればめてのかたにむずとをき何れもさつそくの御出しうちやく申て候也是へ申入候事よのぎにあらず扨源氏のとうりやう頼吉しんめいをもたつとまずぶめいをおそれずやゝもすれはせんきよりのくげぶけもしたがはざるをざんしあるいはゑんとうにうつし又有時はりふじんにせんしをこいうけちんしやうをもようしこくかのなげきもかへりみずばうじやくのふるまい也さるによつて我等のしゆくんもとよりくげの御なかれことに御したしみふかきにより君の御なげきしつめこくどのうれいをしつめんためきんじつ御はたを上させ給へは御いちみ頼み申たきゆへしやうし申て候也いへん有ましきしやうれんばんあそばし候はゝ忝存候はめとべんぜつきよくのべにけり國の人〳〵本ノマヽさいして一ごんにも及ずたがいにめとめをみ合せきめんしてこそいたりけれかねてあいずの事なれはかつしんが子共其外いけのらうどう物のぐを差固めくる〳〵と取まき何とかたがたはみかどをすて奉りぶとうのげんじにかしづき給ふやさもあれ御へん立御しやうをそむく物ならば一人もあまさしと前ごをかこみ取かくるかつしん此由みるよりも大きにいかつてやあくわじやばらめことのしさいをかへりみずすいさんのふるまいかな是へ御出有上は何のいはいの有べきぞ其上家のじつけんとしかつしん是に有上はおのらにかくべきやらうせきはきつくわい也ひきしりぞけとに王立に立にけりひとへにきじんのことく也國の人〳〵きやうさめて是へさんにう申うへはともかくもぎよいにしたかい申さんと申せばかつしんよろこびて子共を近付あらうれしやおもふまゝにしほせたり此上は人じちを取へき也そも〳〵此城といつはおそらく日本にはならびなし西は山たかうして一へんのくものごとし北は六たうしかこわたしひんかしはするどにて鳥のかよひもかすか也なんぼうはかたさがつてさゆふにたに

をかゝへたりさつするに都より城へたとへばよする共南へならで來るましせいびやうをすぐつてさんさんにもみ付〳〵せめふせよそれがしがざいをうけかけひけをうかふべし手にあまる物あらば我等おや子打て出ばおよそてにたつ物あらしてつくわみぢんになすべしときしよくかうたる其有さまはんくわいがいきをい長れうがゆうしよくあんろくさんかあれたるもたゝかくやらんと上下ばんみんおしなへてみなほめぬものこそなかりけれ

第三

さてもそのゝちはやしのきやうぶ國ひては我やにかへりらうぼの御まへにかしこまりかやう〳〵のしだいにてみな〳〵しやうせうにあひしたがいれんばんを仕りこと〳〵く人じちをあひわたし候はんとやくそくいたし候へばさだめて明日は人をつかはし候べしいかゞ仕らんと申上ればゝ上聞召何あきひろのとんせいのやうにきゝつれば日比はともあれいたましさよとわびつるにさわなくしてげんじへ弓をひかんとやわらはにきくにおもふましおことがしりよに有べき也去ながらよく〳〵くふういたされよ其れんばんの一ざにつらなるはせひもなしげんじ重代の侍と誰しらざる物やあらんくわごんのはきしやつばらを一々に切てすてなどしがいせでは有けるぞはやはたちにもあまる身のじやくはいとやいわんふかくともちじよく共さたのかぎり何のめんぼくあつていかに女也共わらはに物語なに事ぞそれ侍はしすべき所にてしなぬはいきがひはなきぞ弓取のこはかふにてもかふなれとねかふ事はことわり也ふびんやななんじがちゝをくれたる子をもちてあつたらしきけみやうをよごさん事ぞかなしやとなみだをはら〳〵とぞながされけるきやうぶ承りとかふはあやまり候也いかで二心候べき明日參るつかいをばいけてはかへし申まじはゝは此由聞召あゝ扨おそきしあん哉かまひて〳〵國ひでよふかく成ふるまいにてなばしくだし給ふなよ年おいたる女也共わらはもよろひ打かけて一方はふせぐべし何共あれ名有侍のわらはがむかいにきたれかしいち〳〵にくびきつて大手ぐちにかけならべかさねてよするやつばらをさん〳〵にかけあ

ひてあつはれげんじぢうだいの侍たらん物とものてほんにせんとよろこふでいまや〳〵とまちいたりあんのごとくおかやま十郎おなじく七郎かげともとて大かうのつわもの五十人ひきつれこれはあきひろの御つかいなり御らうはの御むかいにまいり候と申入たりければやかてぎやうぶまちうけたいめんしこれへ〳〵としやうじ申ければやゝあつてはゝうへやかていでさせたまひま事にそれさぶらいのならひ程よにかなしき事そなしきのふまでもけふまでもげんじへかしづき申てもいまはまたひきかへてはやしやうせうさまへうちなびきみづからかやうなるとしたけたるをんなまでかとふどつかまつらん事ともはいとふしぎなるゑんにてありしかしながらまつあきひろのやうなるぼうじやくふじんなるぢんをばしうとたのみ申さんずる事はなか〳〵おもひのほかなりといふよりはやく十郎をかいつかみひろにわへどうとなげやがて十郎をおつふせくびねぢきつてすてければくにひで十郎をおこしもたてすくびをうちさてのこりしやつばらをおつちらして二人がくひをばしろの前にさらさせてちまつりよしとよろこびいさんでよせくるかたきをいまや〳〵とまちたるはかい〳〵しくぞみへにけるさてまたうちもらされしさふらいどもほう〳〵にたちかへりあらましを申ければあきひろかつしんいかりをなし手をのばさすおしよせふみつぶさんとてそのせい五百よきをひきくしてうちだのしやうにおしよせときのこゑをぞあげにけるされどもじやうのうちにはい上六十き大将がよかりつればつきしたがふものともは一きとうせんならぬはなし大てのもんをおしひらきかけかへしつくんずくまれすうつつうたれつひばなをちらしてたゝかいけりされどもよせては大せいなりみかたぶせいの事なればあるひはうたれいたでをひはや一のきどをばやぶられたりはやしのきやうぶもへぎおとしのよろひきて三まひかぶとのおゝしめ四尺八寸の大だちをめてのかたにかいかふで大をん上ていかこよせてのもの共事のどうりをたしかにきけそも〳〵げんじはたれかはしらんまんぢうより此かたふしやう四たいあひつゝき天下のせいひつ成になんぞやなまくげばらのぶんとしてしゐらんのまねきこくちうをさはかする事天のせめてもみにうけて今にかうべをわ

られうきなを四かいにながさん事こそむざんなれわれとおもわん物あらはかねのきたいとためしみよいかに〳〵とよばわつこりいわうのかけもと立出したのやはらか成まゝになまくげばらとはすいさん也と大まさかりを打ふつてたゞ一打とてう〳〵と打ひつはづしすそをなぐゆんでのあしを打はなされ引かへしにぐるをたぶさを取て引ふせくびかゝんとする所へいわ村兄弟かけ來りいけどらんとする所へにかうてつほうをもち來りさん〳〵に打程にみちんになつてうせにけりよせての者共馬のはなを引かへすおつかけねぢくびつらぬき人つぶてめをおどろかす斗也みなこと〳〵く打立られ後をもみすしてにげにけりきやうぶおや子はてもおわずみかたのちんへひつかへすをあつはれきたいのはたらきやとみなほめぬものこそなかりけれ

第四

さても其後くわらくには八まん太郎御しうげん御さたに付おの〳〵御所へ上らるゝ大將御らんしいかにかた〳〵よりよしすどのいくさにおくれをとらずおもひのまゝにふみしつむる事しかし我ぶゆうとはおもわぬ也かた〴〵がはたらきゆへひとつは君の御ゐくわうたり此たび大なごんもろずみのそく女とゐんへんのさだむされればよりよし天下をよし家にゆづり心やすくもあらばやなとゝおもふはいかにと御でう有をの〳〵ゐばしをかたふけて誠にめでたき御事とかみから下迄よろこびけりかゝりける所にうちだのぎやうぶが方よりひきやくとうらいしいくさのしだひこまやかにごんでうす又ぶしうゆらのじやうあさ山ほうきのかみしげもとむほんのおこし候と申來るさるによつて御いわいもわきに也とや有らんかくやせましとひやうでうす金平參り出人はさだめてらんげきめいわくにおぼすらん金平はあさゆふごとに何事もあれかしとこひねがひ候へは何によりしうちやく仕人〳〵は御しうげんを取おこなひ給ふべしいくさはそれがしに仰付られ候へさ程のこてき一二人かたはしよりふみつぶし申さんと事もなけにぞ申ける竹つなこごゐになつてそでをひき人もなげ成いひぶんかな近比そこつなりと申せば金平いやしやうぢき

なりとさしうつむく大將御らんしてとかくは一時もはやく打たゝんとぶしうへはやすもとためむねうすひのさたはる三八吉家にしよくすべしとつの國かわちのせい二萬よきをさしそへらるゝ竹つなきん平きようぢをさきとしてい上一萬六千よききうじ四年きさらぎなかばに花の都を打立ほくろくたうへといそきけり是は扨置となみの入道がつしんあきひろの御前にかしこまり承はれば都せいきんしつはせむかひ候よしもとより大ぐんにて候べしひらはのいくさおぼつかなしたゝほんじやうにかいちんなされ然へし所はめいよのなんじよ也たとへばいくまんきにてせむる共此入道めがてだてにてざんじにほろぼし候へしはや〳〵とすゝむれは大將聞召尤其りおもしろしさあらばさかい川へ引とらんとほんしよをさして引にけりぎやうぶおや子はぐんびやうゆうしも打じにしてひやうろうたへてかつ〳〵也五三日もたもちがたき所にかたき城をほこしひき取ゆへふしきの命たすかりはゝ上ぎやうぶを近付かたき引しりぞきぬればらくじやうにはあらずへんしもはやくていとへ上りきうに御下かふをこひ奉れとりくぎあきらかにの給へばぎやうぶかしこまつて候とて打のこされし侍おや子共に八きにて心しつかに出にけりかゝりける所にむかふよりまつしくらうなつて其せいすまんぎにておしよするぎやぶみてすわやてきのはかり事にのせられて城をそつじにはなれてきにかこまれ候ぞや中〳〵いぬじにせんよりじがい仕らんと申けりにかう聞給ひいかに國ひでかたき取まきたるはめつらしからずちすしのやさきにむかいても其かうならねば身にたゝずとてもしなんすいのちならはてきぢんへわつて入きり死にしねやとてさきにすゝんて出給ふよく〳〵みれば竹つな公平也是はとゆふてしきだいす扨君の御まへに罷出はしめおわりを申上れば大將御ゑつき淺からずいかにぎやうぶてきいか程かあらんさん候一萬ぎにはよもすぎしと申上る大將聞召げにもかたきはござせい也おしかけふみつぶさんとの御でう也公平すゝみ出御でうのことくおゝくのかうてきにてもさはなきにまして一萬ばかりのむしや人でにはよもかけしそれかし一人仰付られ候へれいのてつぼうにてかたはしよりなくりたてゝしやうぎたをしにせめ付はよもつらだしは候はし公平があ

らこなしを御めにかけんとずんとたつ竹つなおさへしばらく〳〵たいてきなりとておそれ少せい也とてあなどるべからずさすかにさかい川と申はゝならびなきめいしよ也さるによつてひらばをこのまするうしやうせりけつきにまかせおしよせくわはんみかた打るへしつら〳〵くにづをもつてかんかふるに中〳〵らくじやうすべからすそれをいかにといふににしは山たかふして一へんのくものごとしひんがしにつゝきするとにしてひやうぶをたてたるごとくにてたにふかうしてばんじんせきがんさへぎり北のかたは六だうじかごわたしとてたゝ一きうちのほそ道也さゆうのみねより下りこぶしにいたてられればおに神とてもたまるましなんはうはひらちとみへてほりを深くほりおふてのとさきには一丈あがりからほり有てつづらおり成なん所たり程とをくそなへをたててざしもせずまほらへいてひやうろうつめに仕ればないたの城ををとさんとはる〳〵しくひやうろうをばもとめましひをおつてつかれはてきつて出んはぢてう也かねてよりもみかたにはくわくよくにそなへをたてぎよりんにひらきやりさきをめんどりばにくみひかばつけ入すすまばひらき中をとをししん月にまといせんごそうより取かこ見せめよせ〳〵もむならばいくさは程なくりをうるべしはやつてさきへ押よせばりやうのみねよりがんせきをくずしかけられしそつを打せてきにつよみを付ん事かゝみにうけておほへたりいかさまくふう候はんとしいてかんげんしたりけり公平あさわらつて竹つなのぐんほういつ〳〵よりもふできかとおほへたりさやうにいつをかきりといふ事なくてきの出るをあいまたんや人はいしにに打れ又はやさきにあたりしにうせぬいか成いんぐはにやきんひらはいか程かやさきにむかいてもうらをかゝずいしつぶてにあたりたる事もなしたとへばひに入水におぼれる共さだまる所のがふぞかしいきすぎたりや四十二あく所なん所にきらいなし人にもたれし身にあらじとかくめん〳〵のきまゝにあそばせかうみやうはてん〳〵さばきとかけ出れば人〳〵我も〳〵とつゝきたり其中に公平てせい八百よきなんもんへおしよするされは人はるいをもつてあつまりにたかをともとするとかや公平がらうどうさかわの源太とんだかねみつあいそのしん八などゝいふか

らう共大将よわくはぬけがけにもかうみやうせんとはやりまつたるゆうし也いちの木どにおしよせ時のこゑをそ上にけり時のこゑもしづまれば公平大をん上さかたのみんぶさん時が一子右京大ぶ金平一ばんがけぞやなまくげのなかれにてぶけいのわざはよもしらじ一天四かいにかくれなきゆうしをのぞむならば出あいてげんさんせよとよばわりけり此もんの大将はとなみのもりかつ同もりなを大おん上げに聞およびたる金平とやくわごんのはくはむやく也あれけちらせとざいふれば木どおしひらきかけつかへしつ七とやりを合二とはかまへおきたるがんせんにうたれさかたがよこやりに打れ兩三どはみだれいくさたがいのしやうりはみへわかすおや打たるれ共子かへりみず子うたるればふみこし〳〵たゝかいけりかゝりける所にわかむしや一人いとひをどしのよろいをき三まいかぶとのをゝしめしらへの長刀かいこみくれないのあふぎをひらき大せいにむかいてひらりひらりとまねきけり金平かたにも大将とおぼへたりと我くまん人くまんとあらそふ間にとんたかねみつつつとぬけ打物ぬいてさしかざしたゝ一打にとてうど打をうしろへぬけさうのかいなをひたと取さし上てゆんでのそはへなげければみぢんになつてうせにけりあかまつ兄弟すきまなくはしりかゝつて打物をてうてうと打をうけながししばらくたゝかいしが兄弟共に同まくらにふしにけり公平せきかねかけ出んとするをさかわの源太かけへだたりあゝもつたいなしそれかし打とつてげんざんに入奉らんといふよりはやくかけよせならべてむずとくむ物のかず共おもはばこそおしよせくびねぢきつて立あがらんとするをあいそのしん八つゝとよりしころを取ておつふせんとするをめてのうてを取てまへゝ引ふせつゝぬきしてこそすてゝんけれ公平せきかねあまさしとむ二む三にひつくみ打たをさんとするにおもひの外てごたへしてこんがう力を出しくろけぶりをたてゝねぢあいける公平あぐんでおのれは人間にてはよもあらじれいの天ぐめが此たびしゆつげんしたまふな今ぞせうぶのうむぞかしゑいやつとはねければまつさかさまにどうとふすかふとちぎつてみたれがみをつかみくびをかゝんとするにうたかいもなき女也あゝむだぼねをつたる口おしや扨〳〵かうりきの女かなを

なのれたすけんといへばかつしんがをとひめとこたふ公平聞て我女を打てかうみやうならずさればとてからう共をなんじにうたれたすくるもあつたら物思ひ出したり我がゑほし子のふさいにせん去ながら此まゝにては心もとなしと力にまかせしめ付さきにおつたてあつはれかろふ百人にもかへがたき日本一のよめごをまふけたりとほんぢんゑぞかへりけるきんひらかありさまなにゝたとへぬかたもなし

第五

扨も其後大將の御まへにはしよ侍をめされ今日のかけあひに公平わたくしをおこしぐんほうをやぶりくわはんてせいをそんほうする事有べきはたらきにあらずひとへに我をさみするにこにたりと御きげんかわつて仰けり公平承りこは御でう共おぼへすあるいはめい將又はてごはきかたきとて手ざしをいたさずあんかんとして有らんは侍のおくれにて候ずや其上ぐんほう破り候由めいわくに存し奉り候おほそれながら君の御てわけも承らずことにやく所のきはまりなくめいしよにて候いやなんぢよ也とてたゝかはずしてきにいをのまれまかりあらんはかつうはみかたのよわり一つは君の御ために一めいをかへりみずむ二む三にかけ合てきの心をみ候にかげにてつもりたるとはばつくんかわりてせいを打せ候へばかたきのくびも手に入ておよそ二三百も御ざ候さればそんとくはいさしらずそれかしがもふけにはむすめをひろい候とくだんのむすめをさもあらけなくしめ付御まへに引出せば君も御きしよくなをりいかに公平此たびはともかくもいごはぬけがけ有べからずさらばいそぎ打たてとせんぢんごぢんの手わけ有みなみのもんへおしよする去程に竹つな公平にちりやくをみせがををらせんと心つけ手せい千五百七ようけんだんらんかうにそなへをたて一ぢんにかけ出し大をん上てなのりけりむさしのかみつなの太郎がちやくしわたなべの竹つな今日のせんぢん給りたりとなみとのの一たうにげんざんやつとよばはりけりがつしん聞て子供をまねきてきのはたいろ風にもまれなにさまみかたにしやうり有べしとつとかけてめてのそわに引へしてきなんじよをしらずおいかけんはぢでう

也よこやを入てつきくづせゆんでのたにへおいこみをいこみせめふせよかしこまつてやがてそなへをなをしけり竹つなさとつてげじしていわくさゆふはたにそゆだんすなおいをとさんとのはかり事てきをかりかへひらはをとつてたにへおとせとざいふればいんにとぢてせめかゝる城のせいは千四人こゝをせんとぞもふたりけり竹つながもりかへになやにわにたにへおいこみ人馬共にしする事人ずしなとゝもいつつべしかつしんおゝきにいかりおなしいかにもりかつなんぢがゆうりきいつのようそやかけよ〳〵とげぢすれはかしこまつて候とててつほうをふりかたけひくな竹つなとなみもりかつ也おしつけのみぐるしやぢんじやうにせうぶせんとよばわれば竹つなねがふ所のかたきぞとたちひつそばめけりもりかつゑしやくもなく打てかゝるをひた〳〵とつけこみおしならべてむずとくむたかひにふかくをとらぢとてひきよくをつくしてもふだりけりされ共もりかつ力やおとりけん竹つなにくみしかれなむ三ほうといふ所をおさへこくびをかきおとし太刀のきつさきにつらぬき大をん上てとなみのもりかつをば竹つな打とりたり入道はおわせぬか子をさきたて何をたのみに命をかばい給ふぞやとたからがによばわつてしづ〳〵と引所に公平來りあゝかんし入たるはたらきかなごへんならではたれかはあらん公平はぐんぼうをやぶりしくわたいにやうしろそなへを給はればてをむなしくして人のたからをかぞへるがごとしうら山しや浦山しやと申せば竹綱いこん有げに申様それがしがちりやくも少有げに〳〵こんどはごへんとかうめうてん〳〵さはきにててからくらべを仕らんと申せば公平手を取それかしをきよくり給ふかあらをとなげなやと申竹つなもこらへかねて打わらひみかたのぢんへぞ入にけるさる程にかつしんもりかつを打せむねんいよ〳〵かきりなく兄弟を近付とかく城の内をはなれずして竹つな公平二人のやつばらを門の内へ引入いけとらんと思ふ也其てだてといつはゆうりきはつたるわか物共五十きすぐり門のさうに立かゝりかたきよするとおとするなけふのいくさにのつとつて門破らんと掛るべし一さゝへさゝへてさゆうへひらき中に取こめいけ取らん扨もがんぜんのかたきにことばをかけられひかへしも此てだてを思

ふゆへよはみをてきにみせんためおしからざりしおいの身のながらへて有つるとなみだをながし申ける兄弟承りちくばにむちを打しよりかたちにかけのさうごとく力をそへしあづさ弓やたけ心もよはりはてていかやうにもしてかたきを打たんはかり事をこひねがひ候とはら〳〵とぞなきにけるかつしんなみだをおさへふかく也〳〵おやも子もしする道はかきり有とやくそくをきわめよせくるかたをき今や〳〵とまちいたり是は扨置頼吉の御まへにてくびじつけん事おわりいかにかた〳〵かたきらく城あんへい也され共なんじよなればそくざにふみおとされすさればとてひかずをふるはゆいかいなしいかゝはせんところの者なればぎやうぶはあんないすみやかならんなんじかおもわく申てみよいかに〳〵との御でう有國ひで承りじやくはいながら上いにまかせ申上べしほうばい立も御ゆるし候へとかくいくさはぎごつのはたらきかなふましそれがし存には城の内迄ちのそこをほりぬきたがいにてだてをやくだくしひの手を上てみだれ入一じにてきをほろぼさんにしくはあらじと申けり公平聞てきつねたぬきのやうになをもとめてゆかん事きづまり成ちりやく也もしもてきにさとられなばにわかにぬけあなをさがしつゝあわてふためきしなん事むげにいひがひあらじ此公平はごめんあれとかまわんていにぞみへにけり竹つな聞ていかに公平是は有べきちりやく也竹つなはしのびのだんかうしんたり〳〵公平はらを立かた〳〵のちりやくふりやくに聞にいたりなまぬるし〳〵それかしにおいてはけふをかぎりと思へばむ二む三にかけ入て大将のくびを取公平がくびをわたすかこんくらべ仕らんごぶん立は心ながくあなをほり城の内へ入たまわんとざしきをたつて出んとす兩人取付たんきあらきも時による何れの道にも心を合給ふべし公平いや〳〵それがしはたんきあらぎに候へばひやうでう御むようたゞかうめうはしがち也といひすてふりきつて出にけりでんぶやじんのふるまい也くろかねどうよろい三りやうかさねてはらりとき四尺二寸の太刀はいててつほうをゆんでにかいこふで一のきどへおしよせたゞ今こゝもとへぬけかけにたゞ一人おしよせたるつわ物をいか成物と思ふらんおさなき時はあく太郎今はさかたの公平とて頼吉のらう

どう也我とおもわん物あらば出あへやつとよばわりけりかつしん是を聞ねがふ所のさいわい也へんとうつな者共門のとびらに立さうておしやぶらんと來りなばしばしさとつてさうへひらけ中にとりこめいけ取れとしつまりかへつてをともせず公平大をん上是程の門一つやぶりてみんとてさうの手をかけゑいとおせばやつとたもつゑいや〳〵とおす程になんなく門のおしやぶり大力のくせとしておもわず内へかけ入あひづのつわ物二百斗まんまるに引まといけどらんとするを取てはなけ〳〵しけれ共さすがに今はせんかたなくひつたてられてゆくへに竹つなきようちかけ來りかたきのやつばらおつちらし公平をつれ來りほう〳〵にぞかへりける人のいふ事聞入ず我まゝゆへのほねをりやといへば公平心の内はうれしけれ共にか〳〵しくはらを立それかしか取られ城のおんないみる所に竹つな申やう公平のふりやくあやうく候へばかまいて〳〵御むやうと申は公平打わらいおゝかた〳〵なくはあしき事も有べし人々とせんしうらくと悦かへりけりかの公平か有さまかんせぬ者こそなかりけれ

第六

扨もそののちとなみ入道かつしんは大將の御まへにかしこまりもはやいくさは是迄にて御ざ候さればとて打しにあそばし候はんはふりやくのかひなき所也御はくぶはうきの守も御はた上させ給ふよし六だうじより御おちなされあき山殿とくわゝりいかにもしてしん王を取奉り二たびぎへいを上給はゝ後のよ迄のほまれにて御ざ候わか君さまとぞ申けるあきひろ聞召尤此儀おもしろし明日のかけあひに六だうしよりおちゆかんと其よのあくるを待いたり去程によせてのせんぢんひらいのきようぢ也てきぢんよりやぶみ一つういかけたり清うち是を取て大將の御めにかくる其ぶんにいわくこんどふりよに一子をとられげきしんにかとうど仕り誠に天ばつ斗がたく君にふちうなきだんは明日馬のこくあきひろ六だうしより落んとのしだいしらせ奉らんため也とかきて有大將よろこひ給ひいかに竹つなむかつて打取べしかしこまつて御前を立清うち公平にせんぢん給り大て口へむけらるゝ城の内にはつかれむしや命をおしま

ずたゝかいけり大將かつしんは北の門より落行扨もりひさてつほうを打かたげすまんの中へわつて入はらり〳〵となひたりけり此いきをいにおもてを合する者もなしこゝにさぎぬま五郎と申つわ者これをみてする〳〵とはしりよりたちぬきもちはつしとうつをばもりひさこゝろへさらりとうけなかしすかさずてうどうつうつたちにてむさんやなまつかうふたつにうちわられたちまちたをれてうせにけりきんひらぼうひつさげいてんとすればきようちおさへかたきはそれがしいかにもみこみたり一でうしおほせんといへばきんひらわらつてかたきはたゝ二人あるぞいつれにてもくみふせよあまりたるかたきはわかものなりとも二人ながらうつていりおしならべてむつとくむきようぢはもりひさきんひらはかつしんとくんだきようぢはもりひさをおつふせくびかきおとしたちあかる所をさんひらかつしんゑいこゑをあげてくみあひけりいつれもこゝろはきいたりちからはつよししゝぞうのはげみのごとくねぢあひけりきようちをちあわんとすればきんひらにらみつけやあぢやくはいものむやく〳〵といかればこゝろならずけんぶつすきんひらうちからみてかけつめゑいやつとはねければまつさかさまにはねたをしくびをかゝんとしたりしがまてしばしわがこころむすめのおやにてあるなればげんざいのあいやけなりとからめとりてあらしやうしのしうといりやとひつたてゝそれよりも大將の御まへさしてぞおまへになれば大しやうななめならずにおほしめしすぐにていとへかいぢんあるせんしうばんぜいの御よろこびめでたさよとにもかくにもくんしんの御よろこび申ばかりはなかりけれ

萬治四年辛丑四月吉日

公平化生論

第一

だいりむらさき女郎并公平けしやうろん

それきやうらん月をねたむ、月ついにいからざれ共、かならずせいくわうをはつすること有、爰に源のよりよし公、天下のぶしやうたりしとき、四かいらんげきにおよびしを、竹つながけいりやく、きんひらがゆうりきにて、國〳〵のぎやくと、ことあんへいについばつ有、御よろこびはかきりなし、ことに御子よし家公をはしめ、かもの次郎よしむね、しんら三郎よしさだ、何れも御さいちよにすぐれ、御くわほうゆゝしき御いせひ、おそれぬ者こそなかりけり、比はてんぎくわん年、正月五日、竹つなをはじめ、公平ため宗に、たけち、市丸、そのほかしこうのしよざぶらい、みなみな御まへにあひつむる、大將御ゑつきあさからず、御かわらけを取上させ給ひ、次第〳〵に下されける、皆々こくどあんちんの、御しうぎの御さかつき給はり、しゆゑんにきやうをもやうして、中にも公平かうをんに、とうとうとなるはたきの水、いつもたへせず、おもしろや取上源家の御代を、まんざい〳〵〳〵まんざいらくとそうたいける、君たいゑつき限なく、御聲を上らるれば、大小みやうもだうをんに、君ちとせふる、いわをと也てこけのむすまて、代〳〵をかさねてめてたやと、皆〳〵御いとまをたまはり、せんしうらくをつらね、我や〳〵へ歸られける、かの頼義公のいせいの程、何にたとへんかたもなし、是は扨置、其比みかど御てうあいの御きさきを、むらさきのまへと申奉る、然るに此きさき、しゆつしやうしつせさだまらず、いつくより共しらくもの、かうしよくを事とし、ようがんびれいにましますゆへ、みかどゑいりよあさからずちうぐうに立給ふ、いつその比より、れいならずなやませ給ふ、てんやくいりやうをつくし御くすりをたてまつる、さらにげんきもなかりけり、すじつとおくるにしたがい、御物のげとて、もつての外にみへさせ給ふ、くぎやうせんぎまち〳〵たり、其時三條の大なごん、進み出そうもん有、かやうのきざみ、きそうかうそうに仰付られ、大ほうをじゆせられ、しかるべく候とつゝしんでそうもん有、みか

どげにもと思召、とかくはからへとのせんし也、さねふさのきやうちよくとう申、扨けんびいしのべつとうに仰て、ゑんりやくじのひじり、しゆかくほうゐん、扨よかわのしゆんぎやうほうゐんへ、いそぎちよくしを立られ、やがて大ゆかにだんのつき、五しきのへいはくを立ならべ、きやうしやをおそしとまち給ふ、去程に両そう、めしにまかせてさんだい有、時に大なごん立出給ひ、たがいにしきだいおわつて、扨御のふの次第をのたまへば、両そう畏て、だん上にさしかゝり、扨びやう人に打むかい、たといいか成あくびやう也ともぎやうじやのほう力にてあらはさんと、ふどうのゐんをむすんでかけ、とつこをもつてむねをたゝき、れいしやくじやうをふり立、しきみをおつて、ごまのひに取てかけ、いらたかじゆずをおしもふで、たうほうにごうざんぜ、みやうをうなんほうにぐんだりやしや、さい方に大いとくみやうわう、ほつはうこんがうやしや明王、ちうをう大しやう、ふだう明王、なまくさまんだはさらた。せんたまけつしやな、そはたやうんたらたかまんちやうがせつしやどくだいちゑ、ちかしんしやそく、しんじやうぶつとせめにせめてぞいのりける、其時びやう人まくらを上、いかにぎやうじやむやうのいのりをせんよりも、はやとく歸り給へ歸らずふかくをしたまふなと、おもてのけしきを引かへあたりをにらんで立たりしは、げに人間とはおもはれず、ぎうしやは是に力をへ、ひたひにあせをながし、せめかけ〳〵こんがうどうじ五たいこくぞう、六くわんをん、いちじきんりん五だんのほう、六しかりん八じもんしゆ、ふけんゑんめい明王せめかけ〳〵、ごまの煙は御所にみち、れゑの聲はそらをひゞかし、しゆほうのころに身のけよだつて、いか成物のけ也共、何しやうけをなすべきやと、かさねてじゆずをおしもんで、せめにせめてぞいのられける、時にびやう人かつはとをき、我をたれとか思ふらん、さがの天王のきやうに、しつとふかき女にてきふねのやしろに七日こもり、きじんのすがたをこひうけ、うぢのかはせに三七日ひたり、いきながらきじんと也、人を取事おびたゞしく、有時はかつらき山に年をふる、つちくもとなつて、人をなやまし又或時は、大ゑ山にもすまひをなし、いかにもしてぶつほうわうぼうをかたむけんと、かりにびぢよとへ

んし、ぎよくたいにちかつく所に、ちやうぶくするこそむねんやとてつしやうをつ取打てかゝるを、とびちがへいのりふせ、又とびかゝるをいのりふせ、打あひもみふせいのりふせ、せめにせめてぞいのられける、ついにだん上へとび上り、二人のぎやうじやをだんより下へ取てなげ、ぎよくざちかくとんでかゝる、わういにおそれかなはず、天上をけやぶりこくうをさしてとびさりしは、すさまじかりけるしだい也きん中大きにそうどうし、みかど御のふと也給ふ、くげ大じんおのゝきさはきとかく、ぶしに仰付られ、けいご有べしと、おの〳〵せんぎまち〳〵たり、内よりのせんじには、頼義きんりをしゆごいたすべしと、ちよくしを立よ畏て候とて、中なごんかねまさをちよくしとして、頼義やかたへいそがれける、やかたになれば、せんじのおもむきのべ給ひ、ちよくしは大りへ歸られける、かくて頼義竹つな、公平を召れ、かやうかやうのせんし也、兩人供を仕れとの御ぢやう也、時に公平すゝみ出、扨もこは近比めづらしき事の出來仕り候物かな、此比は國々のぎやくとしづまり、物さびしくそんせしに、よき折からの手なぐさみと、それがし罷むかい、こくうをにらみまわさんに、そも誠のけしやうならばすがたをあらわさんこと候まじ、たんだ一とにらみににらみふせ、むりむさんにつかみさき、ごのふはらさせ申さんと、こ共なげにぞ申ける、さあらばよういつかまつれ、畏候とて、おの〳〵しやうぞくせられける、先頼義公の御しやうぞくには、はだにはらんでんぐさりの御はらまき、うへには水いろのすいかんに、おに切丸の御はかせ、かざをりゑぼしを召れける、扨竹つなは、是もはだにはよろひをきこめにし、くろきしやうぞく、そでをむすんでかたにかけ、しげとうの大弓に、わしのはの大かりまた取そへて、おそばちかく御供す、さてきんひらは、ひおどしの大よろひ、こざくらおどしのはらまき、二りやうかさねてさつくとき、げんじ十代くもきりといつし御はかせ、くだしあづかりさすまゝに、五尺八寸の打かたな、十もんじによこたへ、たいまつもつて出にけり、比はきさらぎ廿日あまりのことなれば、めさすもしらぬやみのよに、しゝいでんの大ゆかにしかう有、竹つなきんひらも御しらすにかしこまり、御のふのこくげんを、いまや〳〵とまちいたり、時にうち

より、う大じんたゝまさのきやういでたまひ、御のふしきりなり、ひきめをもつていてみよとのせんじなり、頼義ちやくたう申、それ〳〵たけつなとの給へば、かしこまつてこくうをきつとみあぐれば、くろくも一むら、御てんのうへにおほへたり、大のかりまたうちつがひ、なむ八まんとくわんねんし、よつひきひやうどはなつ、ふしぎややうめいもんのうしとらゟ、いなづましきりにひかりわたつて、御てんのともしび、一とにきへあめふりらいでんしきりにして、御てんもくずるゝばかり也、そのときんひらつゝたち上り、つちも木も、わがわう君の國成に、何もののしよいなるぞ、其しやうたいをあらはせと、大おんあげてのゝしつたり、時にたけ一丈あまりの大ほつし、御てんにむかつてまねきける、きんひらはしりかゝつてむずとくみ、上をしたへとかへしける、きんひらにつこつうちわらひ、おのれ何物のばけそこなひぞ、此きんひらにむかつて、うでだてはむやくなり、とつておさへたてのしたにあるとおもへば、たちまちけちやうとなつて、こくうにとんでうせてんけり、しきりにくろくもまいさかり、とほうをうしなふ斗也、公平大いきついて、しばし心をしづめ、こしをさぐりみてあれば、くもきり丸はなかりけり、はつと手を打、な無三ほう扨もむねんのしたい哉、てににぎつたるくせ物に、たましひをとられしは、八まん〳〵侍みやうがのつきたるよと、いとゝあらききん平が、おとり上つてくるひしは、身のけもよだつはかり也、其時頼義おにきりをするりとぬき、ぐんほうひしのもんのとなへ、こくうをはらい一しんにかつしやうし、な無八まん大ぼさつ、げんけにみやうがましまさば、一つのきずいをあらはし給へと、かんたんくだき、扨めをひらきみたへば、にわかにくもるそらはれて、月のひかりもさやか也、人〳〵是に力をへ、はつはうにまなこをくばつている所に、まりのやう成ひかり物、ていしやうへどうとおつる、きん平すはやとはしりかゝつて取ておさへ、たいまつふり立みてあれば、女の首にくだんのたち、くちからぬけ、つかぐちまでさしつらぬいたり公平あまりのうれしさに、くび共にさしあげ、是〳〵御らん候へ誠に源家のまもりと、ひぞう有こそ尤かな、我だにこがせしくせ物を、うん中までほつつめしたがへたるは、あつはれつるぎやめいけ

んやと、おどり上つてよろこびける、かの公平か有さま、上一人より下ばんみんに至まで、あつはれ源氏のてうほうやと、皆かんせぬ者こそなかりけれ

第二

ゆきさだむほん并公平ゆうりき

だいりにはけしやうの物、しりぞけば、御なふ其まゝへいゆふ成、みかとりやうがんうるはしく、頼義を御座近く召れ、こよひのくんこうに、二ゐのちうなごんににんせられ、扨竹つなには、くもがくれといふ御太刀、公平にはほそおびといふ御はらまきを下され、何れも御ゆるされをかうむり、まごひさしまで召上られ、御さかづきを下さるゝ、忝とちやうだいしおもひおもひにのみながす、したがつて竹つな、いかに公平いまひとしほ、御しゆをたばれ忝も、一天の君の御さかづきを給はる事、いきてのめんぼくしゝてのなうたへや〳〵うたかたの、あまり仰の有がたさに今もゆうしのらくあそび、すへのまつ山なみはこゆる共、君か代はかわらじなやちよをかさねて、かうはふる共まんざいらく、有がたやとのみながす袂にあふみの國のぢう人、たいらのごんのかみゆきさだとて、其心ねふたうにして、はりたましいのおのこ也、其日の御ばんにあひつめしか、また袂にほうもんのう大しやう、すけかたのきやう、日比頼義とあひさつもよからねば、頼義くはんいに、にんせらるゝをそねみ給ふ折ふしゆきさだすけかたのきやうに打むかい、尤源家のてがらとはいひながらさすが日本ぶさうの公平といわれし身がけしやうにたちをとられしは、何にとやらんにあはぬやうに候と、二人打うなついてぞかたりける、きんひらたまらずつゝと出、やう〳〵めづらしやゆきさだは、此公平がけしやうに刀をうばはれたるがおかしいとや、尤さうこそ有もせめ、去ながらうでにだにあたる物ならば、たとひくろかねのふくろに入てつゝむ共、物のひとへは、さあんだくろかねだとはいはせまじ、つかみやぶつてまいらうすれ共、ちから及ばぬけしやう也、然共君のいせいひとつはつるぎのいかふによつて、うんちうまで、ほつつめけしやうのものをしたがへ、二たび我てに入事、是もつて公平かゆう力も、ちつとてつどうたる所也、またうぬしらが公平がする事を、ひをうたんとおもふ

は、ふしの山とたけくらべするにことならず、いらざるひはんいやさ、きゝたくもない、たゞ〳〵からりつとさつちおいて、爰へでされあのよ此よのさかひをみしやうぞ、ゆきさだと、にらみつけてぞ申ける、ゆきさだ聞てやれきんひらあまりに、くちひろひことな申てなんぢ程のものは、なんぢう人もわかうちにもちければ、かさねてのぞみにまかせんと、あざわらふてぞ申ける、きん平いまはたまりかねひくかひぬかさらばそつと、あてゝ（本ノマヽ）ねんととんでかゝれば、一度にとつとぞにげにける、おほうちつとさうも有まいと、なをおくさしておつかくる、頼義竹つな取ついてこはものにくるふか御せんなればまづしづまれと、さへきつてとゝめ給ふ、其時くぎやうでん上人、おの〳〵出させ給ひ、ちよくちやう成ぞ、公平をつれ、まつ〳〵やかたに歸るべし、頼義ちよくぢやうかうむり、やかて御せんを立給ふ、きん平大のまなこをみ出し、くげ大じんをねめつくれば、おの〳〵身ぶるひしてこそ入給ふ、竹つなさあ公平、君も御立なされたは、いざ歸らう公平聞て、いやそれがしはようが有、其時竹つな公平がてを取やあ爰はづくとおもふぞ、忝も一天の君のましますぎよくざちかき所にて、さやうのふるまひむやく也さあよし〳〵ひらに〳〵いやきかぬ〳〵あゝもはやよしと云に聞ぬ人かな、此公平にほうど、もてあつかうたるはと竹つなはとめんとす、公平はいでんとす、すぢつつもぢつつ舘をさして歸りける、是は扨置ごんのかみゆきさだはやかたに歸り、しやていうこんの大ぶさだ時らうどうに村上源五ながとし、まの丶九郎國みつ、あらむさしの平八たて山六郎、べつふの藤太、いわくぐりの力の介、其外らうどうを近付てこんやだいりにて、公平めにあつこうせられ、むねんたぐいはなきぞとよ、方々やつとぞ申ける、らうどう共承り、御ふくりうは尤かな、我〳〵か内せめて一人御供せば、其公平めをあんをんに置べきかと、せんぎまち〳〵成所へ、はやだいりよりちよくし立、きん中にてのらうぜきゆへ、頼義ははりまのむろへ、ゆきさだはわかさの國へ、はい所いたすべしとのせんじそと、ちよくしはだいりへ歸られけり、其時力の介すゝみ出、まづ君は何となく、ながとし國みつ御供にて、はい所へおもむき給ふべし、それがしと立山平八ともあきは、さた時公の御供

し、山さきへんにまちうち、頼義はい所へおもむく所を、ぜひ一いくさ仕り、にくしと思ふ公平めを、しやりむり打では置ましきぞ、はや御立とぞすゝめける、尤此ぎ然べしと、しやていうこんの大ぶに、八百よきを相そへ、山ざきへんにさしつかはし、其身は國みつながとし召ぐして、わかさの國へ下りける、是は扨置頼義は竹つなを召れ、やぜんの次第、いかゝ有べきとの給ふ所へ、おつつけちよくし立、こんとろうぜきゆへ、則こんのかみをわかさへをんるに仰付られ候、頼義のことは、天下の武將といひ、其うへじぶんのかうろんならねば、さのみすこしたくは思召せ共、せけんのあざけりを思召るゝ間、大ぎながら一とせか内は、はりまのむろにしのばるべきとのちよくちやう也、公平はゞかりなく罷出、是は一天の君の仰れ共、近比ふできかと覺へたり、やせんのはたらきゆへ、ざいくはにおこなはれうば、それかしこそおちどたるべきに、なんぞやとがもなきわが君を、おんるとは心行す、たといちよくでうなればとて、みちもなきことには、此きん平は御めんなれ、しよせんむつかしきに、ゆきさだとさしちがへ、しんきんをやすめ奉らんと、とんでいづるを、竹つな取ておさへ、心をしづめて聞給へ、りんげんなあせのことし、出て二たび歸らぬ事、何あせのごとした、中〳〵の事おほひつつまして、おめにかけういやさにてはなし、たとへ御身がはてたれはとて、君のざいぐわいよ〳〵おもし、かやうにとがなき御事に、君のさいぐわにあひ給ふも、ひとへに御身かなすわさならずや、それをもこりず、おもきかうへの、御さいくわになしまいらせんとは、さりとは〳〵わらんべにおとりたりと、かきくどきかんけんすさしもにあらき公平も、あたるたうりにつめられて、うまれついたるぶてうほう、御めんなれ竹つなと、さしうつむひて、泪をほろり〳〵とこほしける、大將此うへは、みかどへおそれのためなれば、ひそかに都を出べき也、まつ竹ちみうらは、妻や子共をつれ、かはぢよりくたるへし、二人畏て候とて、やがてよういをしたりけり、扨頼義公は、侍五十き御供にて、またよをこめて、花の都を打立てはりまぢさしてぞ下らるゝ、やまざきおもてをゆく所に、まちかけたりし、てきのせい、時をどつとぞ上にけり、竹つなちつともさはがず、めん〳〵物のぐせよやと、まつさき

にかけ出、是は頼義公、さいこくへ御下かうなさるゝ所に、何物なれば、其名をなのれ、其時さだ時我こそごんのかみかおとをとに、うこんの大ぶさだときなり、一人もあまさしと、大おんあけてのゝしつたり、竹つなかんら〳〵と打わらい、あれうちとめよとげぢすれば、てきみかたが入みだれ、むしやうむしんにたゝかいけり、かゝりける所に、てきぢんより、七尺ゆたかな大のおのこ、てつぼうをひつさげかけいで、さだめておとにも聞たまはん、ゆきさだかかうげん、いわつゞりのちからのすけとはわが事也、さきほどより、きんひらをめにかけしに、いまにげんざんいたさず、たゝしそれかしが、是にあるをよくしりて、心をくして出あはぬか、はや〳〵是へいでられよと、にくていすぎてぞ申ける、そのときんひら、ゆる〳〵と出なにとわとのは、ちからのすけだ、さてもかはつたじつみやうかな、さらばまつなんぢかもちたる、そのてつぼうを、こなたへかせいくさがすきたらは、のちにかへそう、ちからのすけ、こらへかねあふわたすかわたさぬか、うけてみよと、はしりかゝつてちやうどうち、ひつはずいておつとり、さあおのれちから一はいひいてみよと、めてにてひげをうちなで、そらうそふいてぞいたりける、ちからのすけ、ほうをとられかなはしと、こんがうりきをいたし、ゑいや〳〵とねぢあひける、きんひらちつともさはかずさてもおのれは、じやうのこはきふてき物や、さいぜんからじんしやうにかせといふをも聞入ず、今又あせ水になつて、其すう〳〵は何事ぞ、またはなさぬかと、ひつ取てうど打た、ちからのすけひらりとくゞり、むずとだく、大ごしにひつかけ、取てなげおのれ、いわくぐりならば、さらばそつとくぐらせんと、そば成大石引よせ、上よりゑいとおし、何と候いわくゞり、ちつとくゞられて候か、も一どくゞりくゞられよ、ゑいやつとをしければ、みぢんになつてぞうせにけり、公平みておゝくゝつたりちからの介、其ていにては、あび大じやうのそこまでも、たゝ一くゞりにせらりやうはと、につこと笑つてひきにけり、又よせ手の方よりも、むしや三きかけいですゝみいでたるわれ〳〵は、ゆきさだがらうどうに、あらむさしの平八、たてやま六郎、べつふの藤太と申物なり、四天王のぶゆう、承はりおよびたり、いざ一きつゝ、ひつくみ〳〵たがいにてなみ

をあらわせん、じんじやうにいであひたまへ、竹つな一まるかけいで、かた〳〵のことはうけたまはりおよびたり、竹つな一丸是にあり、なんとなりともそのはうの、のぞみしたひにいざござれ、ときにたてやま、一丸とむんずとくむ所を、一丸さそくをふんで、ゑいやつとはねたをし、くびをかゝんとする所を、べつふの藤太郎かけつけ、一丸がゆんでのかいなをむずととる、竹つなはしりかゝつて、藤太がみだれかみをかいつかみ、さいぜんの、ことばにあはぬふるまひするかなと、ゑいやつとひく所へ平八たけつなが、うはおびとつて、わとのもいらざるぎんみやと、たかいにみかたをたすけんと、てを取おひとりたぶさとり、どつこい〳〵はなさしと、おしあひひきあひ、ふむあしをとは、ちしんなんどのごとくなる所へ、公ひらはせきたり、いでそれかしもすけ申さうと、平八がべつそく取て、ゑいやつと引ければ、てきもみかたも一どに、よろ〳〵と引ふせ、或は引さきふみくだき、扨もあぶなき仕合かなと、み方のちんへ引いたる、かの公平か有様、誠におにのまごのいきせうじんやと、皆おそれぬ者こそなかりけれ

第三

すみよししんたく井義家れいけんを給はるうこんの大ぶさだ時は、しよぐんぜいに打むかい、いかに方〳〵かたきはこせい也、てきにいきをつがせず、一度にどつと取かけ、ひつつゝんで打とめよと、一所にひつしとかたまりける、竹つなかたきのちんのはりやうをみて、いかに公平さき程のたゝかいに、少もひるむけしきなくて、一所になつてひかへしは、たゞ物とはみへず今少くらいをみとゞけ、ばんげいにかるべし、其上みかたのうしろは山をかゝへ、てきのうしろはかはなれば、日くれ方には、とほうをうしない、とにまよはん所をば、みな〳〵かわへおひくずし、一人ものこらず打取申さん、しばらくいきつき給へ、きん平につこと打わらい、おゝ竹つなのはかりことはさそあらん、さりながらあれていのやつばらに、何さぐんほうの入べきか、其うへ日くれまでとや、こはのび〳〵也、御へんないつまで也共、とつくとくふうを廻らし、よからん時分にあとよりかゝり給へ、まづそれがしはさきへ参らん、ごめん〳〵ととんで出

るを取ておさへ、こはあらりやぢかな、さすがかたきは大せい也、ふか入はむやう也、ひらに〳〵と引とむる、いやさ其ぐんほうは、此きん平はそんせずと、たたそれがしはてきをみては、山があらずと川があらふと、ひつしき一もんじに切て入、かたきのくび取、くんほうをよくをぼへたりと、ふり切て只一人、かたきのぢん所へむかいける、さた時是をみて、それあますなとげぢすれば、我も〳〵と切て出る、きん平心得たりと、てつほうをおつとりのべ、はらり〳〵とないたりけり、さしもかたきは大せいと申せ共、そゝろになつて色めきけり、きん平こらへず、大将さだ時をめにかけ、無二無三に打てかゝる、くもの子をちらすがごとく八方ににげさりたり、たにみねあく所きらいなく、一もんじにおつかくる、さた時めいばにのつたれば、ゆきかたしらずおちのびける、きん平今はせんかたなく、ゑゝむねんの次第かな、大将を打もらしぬることと口をしけれと、はかみをして立たりしが、せめてはあとにのこりしやつはら、一人ものかさしと取てかへし、爰かしこをみけれ共、大将はいぐんするうへは、四かく八方へにげさつて、人一人もあらざれば、あきれはてゝぞ立たりけり、所へ竹つなはせ來り、のふ〳〵かたきは何程打給ふ、あまりひさしくみへぬにより、是まてむかいにまいたり、公平につことを打わらひ、さればこそとよ大将さた時めを、いつくまでおつかけうたんとせしか共、ゆき方みへねはせん方なく、あとのてきをうたんと、立歸つてみれば、人一人もなし、さればよくふかき、おてらこざうが、時ひじはづすとは、今きんひらかこと也、扨もむねんやはら立やと、身もだへしてこそ立にけり、竹つなからからと打わらひ、おゝして〳〵御へんな、それかしをあざけり、かうげんいひかいもなく、一人も打給はぬな、あゝしやうし〳〵是〳〵御らん候へ、御へんのあとにて、市丸とそれがし、かたきをおもふまゝに打たりと、太刀につらぬきみせければ、公平よこでをちやうと打、是〳〵〳〵はつしたり〳〵、さてもおてから〳〵、それかしさき程より、ほねをりたるかいもなく、一人も打とめさるに、いなからの御てがら、あらうらやましや今より後は、ぐんぼうをさうでんなされよ、御でしになり申さんと、どつとわらふて、君の御とも仕、はりまをさしてぞ下られける、是

は扨置竹ちみうらは、みだいきんたちの御供申、つの國渡邊に付しかば、竹つなかしつけん、みたのぎやうぶ立出、やがてをくにしやうじ申、よきにいたはり奉る、かくてあるひのこと成に、みだいわか君は、御つれ〳〵のあまりにや、みうら竹ちを御ともにて、何にわのうらに出給ひ、うみのおもてを打ながめ、うさをはらし給ひける、あしのやの〳〵なだのしほやきいとまなき、しづがしわざぞあはれ成、むかいはひやうごなるをがた、こなたはすみよし天王寺、きしのひめまつ千代をへて、かはらぬ色はうらやましすまやたるみのうらみへてあはぢのせとの夕かぜにしまがくれつゝこぐふねも、ほのほのみゆるあかし方、供よびかはすむらちどり、あはれをもよをすゆふぐれに、なぎさによするつりふねは、こがれて物や思ふらん、我も其身にあいおなし、うみづらはるかにみたまひて、あなうらめしや、あのかいじやうのあなた成、はりまとやらんに、頼義公はおわすらん、同じうき身と成ならば、なと一所にはつれ給はぬ、うらめしのうきみやと、もだへこがれてなき給ふ、かゝりける所に、いづく共なく山いぬ一つはげみをなしはせ來り、はつといふよりはやく、義家をひつかけ、みなみをさしてぞかけにける、みうらのがさじとおつかくる、竹ちもつゝいておつ駈行、みうらきつとみ歸り、もつたいなしとよやす本、みだいきんだち打すて、ふかくのいたり、それかし一人おつかけん、御へんな跡をまもり給へと、いふやいなやあとをしたふておつかけゆく、竹ちげにもと思ひつゝ、有し所に立歸り、はゝはゆめ共わきまへず、やれやすもとよ、義家はいづくへゆきて有けるぞや、頼義公にわかれしも、いきて此よにましませは、なげきながらも扨過ぬ、あなさけなやちくるいにとられつゝ、はゝは跡にながらへて、何と成べき我身やと、きへ入やうになき給ふ、やう〳〵泪をおさへ、げに此比に御心もよからず、打なやませ給ひしが、次第にしやうねみだれつゝ、只ばうぜんと也給ひ、わか君たちを、ゆんでめてに近付、いかにやなんぢらむなしく成、今ははやみづからも、しやばのゑんつきはてたり、汝らはずいぶん心をきよくして、四天王のかんげんの、おろかにおもわず守るべし、あらうらめしやと、はやうぢかみ八まんも、見はなち給ふかなさけなや、あからさまにも義家が、

歸るとだに思ひなば、今の思ひはよもあらじ、こはそも何のむくひぞや、義家と諸共に、我もがいせよ竹ちとて、こゑをあげてなき給ふ、さしもにたけきやす本も、泪にくれていたりけり、いたわしやわか君は、いかにやす本、我々ばかり跡になからへせんもなし、いざやおつかけ申さんと、すでに御座を立せ給へば、やす本御たもとにすがり、御尤なれ共去ながら、母うへさまをすておかれ、いつくへ出させ給ふべき、まつまつやかたへ歸らせ給ふべき、はやとく〳〵と申つつ、みだいわか君ひつ立申、やかたをさしてぞかへりける、是は扨置ため宗は、やまいぬをしたひ、もみにもふでおつかけしが、すみよしのしんぜんにて、やうやうほつゝき、太刀ひんぬいてとんでかゝる、ふしぎや此犬義家をすて、おきなとけんし給ふ、ためむねしん〳〵すくみ、はたらく事もならずして、太刀をすてて畏る、らうじん仰けるやうは、いかに義家それ源家の跡をつぐ事、其きりやうあらされば、かなひがたし今是までつれ來る事、御へんか心を引みんため也、扨此太刀は、天下をしづむるれいけん也、太刀をよこたへ、君の御ように立べき也、いかにため宗、誠にしうをとられじと、是までおつかくる心ざし、かへすゝもしんびやう也、いよ〳〵きめいをおもんし、君にふちうをなすべからず、然らば源氏のすへ〳〵、百代までもあんおん成べし、我をたれとか思ふらん、とうしや第二のしん也、そも第二といつはすみよし四しやと申は、第一は天せうくわう大じん第二は八まん大ぼさつ、第三はすみよし大明神、第四はくはんをん大し也、我八まん大ぼさつ也、なを〳〵行すへをまもるべし、とけすがことくにうせ給ふ、義家もためむねも、こは有かたきこたくせんやと、かんるいきもにめいじつゝ、三どらいはい奉り、しんたくの太刀を打かたげ、わか君をさきに立、よろこびいさみて、渡邊さしてぞかへりける、やかたになれば、みたい所もわか君も、是は〳〵と斗也、よろこび泪はせきあへず、かくてためむね、有し次第を申上れば、母うへわか君もろ共に、こは有かたき御しんたくやと、すみよしの方をふしおがみ、すへたのもしき次第やとて、あつぱれめでたき御吉さうやと、皆かんぜぬ者こそなかりけれ

第四

ゆき定手の者洛中狼藉并公平竹綱いけ取

ごんのかみゆきさだは、ながとし國みつ共ない、わかさの國にいたりしが、都のこと心もとなく、あんじわつらふ折ふし、しやていさた時、大あせになつてはせ來り、人〳〵にたいめんし、いくさの次第をかたり、それがし是まで參だん、此事申上んため、めんぼくなくも罷下り候、今は御いとま申とて、はら十文じにかき切、あしたのつゆときへにける、人々大きにおどろき、是は〳〵とあきれはてたる斗也、ゆきさだ大きにりつふくし、此上はきうにあんぴをさだめん、去ながら是にてせんぎする共かいあらじ、三井寺のゑんしんは、それがしがおぢ也、殊にあんふかき人なれば、一まづ頼何とそちりやくを、めぐらさん、此ぎ尤然べしとて、しのびやかたを立出て、三井寺さしてぞいそぎける、みてらになれば、あんないこうてゑんしんにたいめんし、はじめをはりをつぶさにかたり、ばんじ頼奉、ゑんしんしばらくあんじ、かく成上は今更何共せんかたなし、ずいぶんて立をめぐらし、ざんげんせんより外はなしと、あんしわずらいいたりけり、爰にゑんしんのみでし、かなこぶしのりうせん、六天ぐのけんかくとて、三井寺一のあくそう有、中にもりうぜん、すゝみ出申やうぐそう一つの手立、あんじ出して候、げんかくとそれかし、又はながとし國みつどのを共ない、よな〳〵らく中に立出、道行人をなやまし、らうにやくなんによにかきらず、さんざ〳〵に切ちらし、時〳〵ころを上、頼義のかうげん、四天王の物共也、君をうらむるあくきやく也と、むはうむたいにらうせきせば、みかどもふしんにおぼしめされん、其折ふしにいたつて、ざんげんましま物ならは、いかでかなわで有へきやと、手に取やうにぞ申ける、人〳〵よこでをてうど打、扨もたくまれたりごぼう、あんの外成けいりやくかな、さらば此ぎに相定ん、ばんしは方々を頼也、はやとくとくと有ければ、本よりあくじをこのむ物共なれは、後日のなんもかへりみず、やす〳〵とうけあい、御まへを罷立、はやしやうぞくをぞしたりける、人めをしのぶ事なれば、四人共に八方づきんをひつかづき、よはにまぎれらく中のかうじ〳〵に立しのびゆきさきの物をぞ待いたり、かゝりける所にたれ共し

れず、わかさふらい、十き斗打てとをる、ほのぐらき所よりつゝと出、一〳〵くびを打おとし、扨くび共をあつめ、頼義がらうとう、四天王の物共、君をうらむるあくきやく也と、一〳〵ふたをかきそへつち〳〵に立置、扨それのみにかぎらず、女わらんべにきらひなく、さんのみだして切すてしは、すさまじかりけるしだいなり、去程に京中、よるにもなればもんをとぢ、人の出入なかりけり、くぎやうせんぎあつて、此こといそぎそうもん有、みかどふしんにおぼし召れ、頼義はさやうにあくじはよもあらじ、定てらうどう共がわざ成べし、いそぎはりまにちよくしを立、事のしさいを尋ねよ、かしこまり候とて、三位の中将ちよくしとして、はりまをさしてぞ下られける、是は扨置いたわしや頼義公、おもはざるちよくかんのかふむり、物うきへんどのすまひして、おかしくらさせ給ひける、竹つな申上けるは、あまり物さびしく、御心もつかれさせ給はん、折しもけふはせけんしづかに候へば、ふるさみだれに時をゑて、さなへ取を御らんあつて、づれ〳〵を御はらし候へかしと申上る、頼義公聞召、それ何より以て時のなぐさみ、いざ方〳〵も來られよと、人〳〵をおん共にて、たつらへ出させたまひける、かいなきひなのすまひとて、軒にとしふるつたかづら、風やさるの聲いとさびしくもみゝにふれ、まよいもゆめのうきはしをわたりかねたるつゆの身の、きへもうせなんたまがしは有にかいなき此もとに、せみのから聲いとすごく、おのがわざとてやさしくも、思ひ入るにしつのめが、すげのをがさをかたむけて、さなへ取こそおもしろや、なるれば爰もふるさとに、かはらぬまつのふかみどり、ときはの山に出るひは、ほたるのかげとうたかはれ、よはさだめなきならひとて、うきふししげきおざさはら、なをもちづきのひかりより、清くすめるはちすばの、にごりにそまぬみなれ共、人は何とか夕がほの、花と榮へしいにしへは、なのみのこりてたち花の、むかしにそでやにほふらん、枕ならべてみし月も、よを村くもにへたてられ、かいなきそでをぬらすにぞふるは泪かさみだれに、さはべのまこも水ましてたつらのかはずなくにつけ、いとゝ心をなやませり、水にうつろふ影みれば、つるも思ひにいつとなく、むかしにかへる、我すがた、うきをみするは命ぞと、すつれ

ば近きしでの山、こゑて爰にもほとゝぎす、ながきめいどの道とへば、あやめもしらぬあをひ草、うつろひやすきむらさきの、うきをへだてよかきつばた、げにおしみてもかへらぬは、このはまぢりのはなちりて、はる立なつもすぎのまど、あふぎを上げてまねけ共、日もはや西にかたむけば、かねもかすかに入あいの、ねを聞に付、誠にはかなきしやばのゑん、ゆめかうつゝかまぼろしか、只何事もふりすてゝ、ねがふべきは後の代と、ぎやくゑんながらがつしやうして、な無あみだ佛とゑかふ有、竹つな公平供ないて、むろのみなとに歸らるゝ、かゝりける所に、三位の中將いそぎはりまに下り、賴義へたいめん有、近比竹つな公平、都をさはがす事ゑん中にてかくれなし、きつとしづめられよとのせんじ也、賴義思ひよらざる事なれば、是はふしぎのちよくぢやうかな、竹つな公平がらうぜきとはいかなる事にて候ぞ、中將聞し召れ、今程らく中にて、ひもくるれば爰かしこにて、人をあやめしつぢ〳〵にさらし、竹つな公平がわざなりと、事おひたゝしく有ゆへに、人のかよいもなき間、其だん御しつめられ候へとのちよくじやう也、公平聞もあへず、つゝと出何と竹つなきん平が、らく中をさはがすとの給ふは、ひつちやうな是〳〵よく御らん候へ竹つな公平只今爰に候、たゞし我〳〵をたれと思召候ぞ、心をしつめよくみわけ給ひ、まつそれにましますは、賴義公な是成は竹つな、扨かく申おのこは、さかたの公平と申物にて候、日本にてかくれもなき、おのこ也、いやさよく、まなこをひらきみたまへ、其らく中をさはがす竹つな公平は、よその竹つな公平成べし、賴義のかうけん、竹つな公平は我〳〵ばかりにて候、あらきやうこつの御たくせんやと、あざわらつてぞ至りけれ、ちよくしもそつじ成事なれば、しほしほとしておはします、時に竹綱すゝみ出、是ゆき定めが、君をざんげんの斗事にてうたかいなし、其あぶれ物めを、一々からめ取、我々がとがなきせうこに、てい上にてはくじやういたさせ申べし、まづ〳〵ちよくしは是に御入被成べし、おつゝけ御むかいにさんずべし、おいとま申てわが君と、公平を供ないて、都をさしてぞのぼりける、人めしのびの事なれば、百性にさまをかへ、太刀かたなおつとに入、よを日についで行所に、あくた川のほとりにて、是も百性とおぼし

き物、二人つれにて都へのほると打みへたり、竹つなかれに近付、ことのやうす尋ねばやと、あしばやにおつゝき、のふ〳〵そつじなから物尋んとよくみれば、竹ちみうら也、是は〳〵して〳〵方〳〵、なにのためぞ、されば此比都にて、四天王の物也とて、さま〳〵あくきやくすると承、さだめてゆきさだめが、斗事のために、なせるわざと思ひ、しやつばらめをいけどらん斗事に、かやうのすがたと也、扨方〳〵はいかに竹つな聞て、その事に候我〳〵も、其うはさかくれなきゆへに、こへんたちかむねと同然也、時に公平申けるは、扨も人の心は、九ぶ十ぶんとはよくぞいひつたへし也、此比は方〳〵共はなれ、しらぬいなかに有ければ、たがいにしらする事もなかりしに、か程までそらうたる出立扨も〳〵み事〳〵何をみても、よひお百性衆やと、どつとわらふてそれよりも、都をさしてぞ上りける、かねてたくみしことなれば、よに入て都に入、けにもようじんと打みへて、しつまり歸つておともせず、いかにもしてくせ物に、めぐりあはんと心がけ、かなたこなたとかけまわる、然所にくだんのあくとう共、思ふまゝらく中をさはかし、いきをいかゝつて來りけり、五條あぶらのかうじにて、兩方はたとあふた、りうぜん是をみて、それあますなと、四人を中におつ取まく、竹つなみてきやつばら也とうれしくて、是はいか成御事ぞや、我〳〵はいつみの國しのた村の百性共にて候、我〳〵のおきう人へ、さゝけ物を持參、そこつ成物にてはござなく候、ゆるさせ給へと申ける、りうぜん聞て、何おのればらは百性だ、むぎいがきめを、刀よこしに切ては何のせんなし、命はたすくるそのさゝげ物を、是に置とをるべし、竹つなはをくひしばつて、扨おの〳〵方は誰人にて御座候ぞ、りうせん聞て、どみんのぶんにてなを尋るやさしさよ、我々は賴義のかうけん四天王の物共成は、其時公平こゝろをふるはかし、扨も〳〵其四天王達とやらんは、我等こときのいやしき物は、なのみ聞てみ奉事候はず、中にも渡邊の竹つな、さかたの公平殿とは、あれさまにて候ぞりうぜんげんかく打聞て、おゝさ竹つな公平（本ノマヽ）とは、我々也後〳〵までの物語に、よくみしりをけらうさ、扨はおの〳〵方にて候な、承り及しよりおそろしきおきやく達や、定て力もつよからんと、あざわらふてぞいたりけり、りうぜんけんがくはら

を立、命たすかるを、有がたきとはおもはずし、かへつておくごんのはき出す、うつてすてんととんでかかるを、竹つな公平心へたりと、二人共にひくつんで、力にまかせ取てなぐる、ながとし國みつとびかゝるを、みうら竹ちのがさしと、一々取て引ふせたり、四人共にたかてこてにひつしばり、公平いかつて何におのればらは竹つな公平た、おゝけつかう成おすがたと、つきんを取てみてあれば、二人共にほつし也、公平みて扨も〳〵竹つな公平の、御ほつたいせられ候わと、一度にどつとぞわらひける、公平あまりにこらへかね、四人共に一つなわにひつくゝり、竹ちみうらにひつたてさせ、て比のぼうをおつ取のべ、時時つからにいたゝかせ、大りをさしてひつ立行、此物共かふるまい、あつはれ四天王なかまのできものやと、みなかんぜぬものこそなかりけれ

第五

ゆきさたさいご并頼義歸京の事

おつて四人の物共は、あくたう共をからめ取、いそぎさんだい仕り、三條の大納言さねふさのきやうをもつて、今度らく中をさはかせし惡とう共をかくのことく召取て候と、つゝしんでそうもんす、みかどゑいぶんまし〳〵て、それ〳〵いか成物ぞ、ゆかりを尋よ、とのせんじ也、くげ大じん畏て、扨は此比都の内を、さうどうさせしは、其物共がわざ成か、扨もいしくも仕たる物かな、やあ汝らは、いか成物ぞみればほうしのみとして、にあはぬあくじをなす物共かな、有のままにかたるべしとのせんじ也、はやとく〳〵との給へば、りうぜんまなこをはつたとみ出し、おろか成仰かな、今此きはにいたつて、ことのいひわけ有べきか、只たんぞくかうどうにもして、とう〳〵首取給へと、はつたとにらんで申ける、時に公平やあこなづくにう達の、なまぐちを聞るゝな、やぜんまで竹つな、公平とはげみをせられし、其きしよくは取ておかれて候か、むやうの大ぬす人をはき出し、今更むねにあたり申さん、おのれよのつねの物に、大ぐち聞たるとは、ばつくんちがい申さん、いで〳〵はくじやうさせ申さんと、しらすをきつとみわたせば、み付に手比の大石有、二人のほつしかそくびを取て、いわの下におしこみ、おゝみ事や御ほうの、ちこくおとしにかから

れたるは何とよいきみか、はやはくじやうせよやとをしかくる、其時けんかくいきつきかね、のふ爰をそつとくつろげ給へ有のまゝに申上んと、ふるい〳〵ぞ申ける、さあらはとてひつ立る、げんかくあまりのせつなさに今は何をかつゝむべき我〳〵は三井寺のゑんしんがでし、六天ぐのけんがく、かなこぶしのりうぜんと申物也、是成二人はこんのかみゆきさだからうどうなかとし國みつと申物にて候、然るにゆきさた、ゑん中にてこうろんを仕りろうぜきに及候ゆへ、おんるにふせられ候を、むねんにそんじしやていさた時がぐんりよをめぐらし、すてに山ざきにて、頼義を打んとはげみ候へ共、かなはずあまつさへらうどう共をうたせ、さた時やすき心にあらずはら切てあいはて候、さるによつてゆきさだ、いよ〳〵たへかね三井寺に參ゑんしんにないたんし、頼義をざんげんし、つみにふせんばかり事に、我々をひたすら頼候ゆへ、此比四天王の物也と、洛中にてらうぜき仕候、是と申も是成りうぜんがけいりやくにて候、罪にふせられ候はゞ、先此りうぜんめをつみにふせられ、ねがはくはそれがしが命は、御たすけ候へと、こゑを上てぞなきいたり、くげ大じんをはしめ、四天王の物共、一どにどつとわらいける、時に公平する〳〵と立より、扨も御坊のほへられたり、よし〳〵汝斗は命をたすくるぞ、ゆきさだはいつくに有ぞ、けんかく悦びさん候ゑんしんとないだん致し、じぶんをはかつて三井寺に候、公平聞てひつぢやうな、中〳〵此上はとべふき事も是迄也、扨も御へんは命をしさに、殘らず白狀せられし、御くらうぶんにさらばかうべを參らせんと、一〳〵くびを打をとし、いざ此上は三井寺へ行ゑんしんゆきさためを打とらんと、四人もろ共それよりも、三井寺さしてぞいそぎける、かくとはしらずゑんしん、ゆき定を始め、寺中の惡僧共をまねきよせ、もはや時分もよからん、いそぎて立をめくらさん、まつ頼義方より、君をてうぶく致ん、偏に我を頼と有、にせ狀かいて扨、ほうもんのさいしやう殿は、日比頼義とは相さつよからず、此人を頼さま〴〵ざんげんに何のしさいの有べきと、一づにせんぎきはまつて、しやうゑん坊のしんかいの筆取にて、既ににせ狀書所に、四天王共つか〳〵とはせ來り、座敷にむんすといなをり、竹つな申けるやうは、めづらし

やゆき定、御へんの御からう衆と、是成ゑんしんのおでし衆が、此比らく中をさはかせしゆへ、やせんからめ取、一々かうべをはねて有、さぞ心くるしく思はれんと、につことわらふて申ける、一座の人〳〵どうてんし、とかふ申物もなし、時に公平ゑんしんが、そばに立より何をあそばすぞ、御坊、おゝみこと〳〵、のふひつ何〳〵頼義は、君をうらむるだんてうぶくのこまを、一ゑ頼とかゝれしは、して〳〵是はどなたの御あつらへかと、いふよりはやく取てふせ、くびねぢ切つてすててんけり、ゆき定かなはしと、太刀ひんぬいて打てかゝる、竹つな取て引ふせたり、ゑんしんにげんとせしを、竹ちみうら左右より取つかみ、おもてをさしてひつ立行、寺中の悪僧のかさじと、おつかくる公平取てかへし、にあはぬ御坊のうでだてやと、七八人かいつかみ、ゑんより下へくはらりとなげ、殘りしやつばら東西へおつちらし、とぶかことくにそれよりも、大りをさしてぞいそぎける、御まへになれは一々次第さうもんす、みかとゑいらんまし〳〵ていそぎ頼義召かへせとはりまへちよくし立、頼義やかてさんだい有、扨あく人共を頼義に給はり、一〳〵くびを打をとし御悦びはかぎりなし、せんしうばんせい、めでたき共中〳〵申斗はなかりけれ

寛文四甲辰年正月吉日

山本九兵衛板

公平關やぶり

初段

さても其後ぜんげんのことばにいはくいあつてもみちなきものはかならすほろぶとかやけだしこうしのきよにもいあつてたけからずおごつてやぶさかんならずといへり爰に其比東國のくはんれうをばいよのかみよりよしの御ちやくし八まん太郎よしいゑとてこゝんはつめいのりやうじやうたりかまくらにきよぢう有じたのりらんをかんがみ給ふさればよしいゑこうたみにあいれんいとふかくぶものせきしをあいするにことならずぶいくの御せいたうたつとまざるはなかりけり扨又御しやていしんら三郎よしさだ是はさんぬるみだれの時田むらうこんの大ぶとしのぶがとりこと成うきなんにあひ給へば御なぐさみのためにとて御やうじやうにわたらせ給へ共是もかまくらにけちやく有則御家のしんかには竹つなきん平すゑはる市丸みうらのわださへもんためむねかまくらのごん五郎かけ正何れもちじんゆふの三とくをそなはつたるゆうしおの〳〵心をひとつに合せ君をしゆごし奉る扨かまくらにぢうたくあればけんせいにきふくして東國の諸侍日々にしゆつしをこたらずなびかぬくさ木もなかりけり是は扨をき其比しなの丶國の住人すわのはんぐわんさだ長とて代々しなの丶しゆごとしてちやうをんにほこりける扨あひしたがふらうどうにはいぬまの源五さへもんむねたけをはしめとして其外のらうどう共何れもけつきのゆうしやたり然るに此さだ長は過にし比天下をみだせし田村うこん大ぶとしのふが一るい也有時定長らうどう共を近付てきけばいよのかみよりよしがちやくし八まん太郎よし家おなじくしんら三郎よしさだ兄弟かまくらにぢうし東國のせいばいを取をこなへばさかよりひがしの大名何れもかまくらにあいつめ日々にしゆつしするときく我としのぶがきんるいなれはざいかまくらも然べからずさなくばをしよせきたらん此上はかたきを引うけ城をまくらに打じにせんと思ふはいかにと申さる丶その中にも源五さへもんむね竹す丶み出て御でうのごとくかねてよりかく候は

んとごしたれば今さらおどろくべきにあらね共此上は命をかたきになげうつてしをかろんじはげまばをよそみかた一きてき甘き卅きにはむかひ候べしさも候はゞりをゑぬ事は候まじたとへそのりゑざるとてもこゝにをいて其むね心へられよとことばたゞしく申けるさだ長ゑつきして一だんたのもしきさていへをみかたにたのむべきものなきかむねたけ承り今たれあつて御みかたにたのまるゝもの候ましさりながら爰に田村右近の大ぶとしのぶのらうどう二人のきどうむしやが子共てつきあつきくわつきせつきと申て子共四人候ひしがむまれだちより人にかはりにくげあくまでそなはりあいするものにはつかみつきはいまはる有様はひとへにあらくまのごとく五つ六つの年よりもともなふ子共を引よせはねたをしつきたをしあるひはうてをねぢきりもてあつかふて此ものをさどがしまにながしをくせいじんするにしたがつて力のほどはたけしれず野山をゆさんとして今にをきさどがしまねるよしを承るかれらをたのませ給はんにいなとはいかで申べきはや〳〵たのませ給へといふさだ長尤ととうしたけだの甚平かげふさを近付（本ノマヽ）

事のしさいをいひふくめひたすらたのむよしを申せ承り候とてさどが島へぞわたりけるいそぐに程なくつきしかば四人の者に尋ねあひ是はしなのゝ國の住人すわのはんぐわん定長より各へ使に參りて候そのゆへは田村うこんの大ぶとしのぶ天下をのぞませ給ひ其りをゑずしてうたれ給ふをの〳〵ちゝたちきどうむしやもうたれぬしかる間定長はとしのぶと一るいなればかたきをうたんとのくはだて也此度定長と一みしておやのかたきをうち給へとの使也とぞ申ける四きはよこでをはつたとうつてさてはさやうに候か主君といひおやといひ一かたならぬかたきをばあんをんにおくこそむねんなれたとへばかたき其身てつぺき成共つかみひしぎすつべきとかふのせんきにをよばずと其まゝ使と打つれしなのをさしてぞいそぎけるしなのになれば四人のものを定長の前にぐしていづる定長たいめんしてこさいつぶさにいひきかせ此上はごぶんたちひとへにたのむと申さるゝ四きはよしを打きいていやたのまるゝ迄も候はず、しうとおやのかたきなればいではせむかつて打ひしがんとわきまへもなくいでんとすむね竹をしとゞめそ

れはんくわいがひやうじゆつもまづぐんほうをかんがみててきほろぼすを第一とせり御へんだちかやうにはやりたる斗にてはかたきがむぐうにうたれぬぞまづくん兵をもよほしないげのひやうじやうしめし合せ其後おしよせ出んといふ四き聞て何それていの者共にぐんほうひやうでういるべからずむ二む三にかけ入て音に聞へし四天わうとやらんめをいち〳〵にけちらかし大將のくびねぢきつて參らんはなせはなせといきりをたつるさだ長是をみてかた〳〵が申もことはりなれ共さりながらふかく心へてあさくわたれといふ事あり御へんたちが樣にゆふりきはつたるかた〳〵に大ぐんをくわへおしよせひたせめにせめてうたん事はあんのうちとおぼへたりしかしながらてせいわづかなりきんごくのぶしをたのむべし御ぶんたちがゆきむかつておさへてたのまんにいかでりやうしやうあらざらんはやとくたのむと申さるればさしもはやりしもの共なれど大將のげぢなれば力およばず扨いづ方の何ものか頼まん定長聞てされば かいの國の住人へんみのさへもんのぶまさこそげんけにさるいしゆあつていきとをりをふくむおりから其上大せいのものなればまづのぶまさをたのまんとて文こま〳〵とかきしたゝめあらをの八郎あんないしやにてへんみのたちへぞいそぎけるいそくに程なくつきしかばあんないこうてくだんの文をわたしける折ふしのぶまさ家のこ郎等召あつめしゆゑんしていたりしが何事やらんとおしひらきみればむほんのくわいぶん狀也のぶまさから〳〵と打わらひいかになんぢら物をきけしなのゝ國のさだ長がぎへいをおこしかまくらへおしよせんずる間それがしにもみかたにくははれとやあのさだ長がぶんとして天下をかたぶけんとはふじのみねにたけくらべねこのひたいに有物をねずみがねらうにたるべしあつぱれおのが身をしらぬぐにんかなと一どにどつとわらいまづ其使のものをめし出せ承り候とおもてに出てこなたへといふこらへかねたる事なれば四きはざしきにみだれ入ねめまわる有樣はたゞいかつちのをちかさなるやうにぞおほへける四きの中にもてつきがすゝんでいふやうはおのれがあくこうをあらましあれにてきいてあり何定長がむほんはねずみがねらふといふかいでねずみがねこをとつてみせん定めてざしや

うがのぶまさならんとそくびをとつておし付をのれきやつ共はけひねりつぶしてくれんといふのぶまさおさへられしろめをいだしていふやうはまつたくさやうには申さぬたゞなきことそ申候へゆるさせ給へと申ける其ぎならばしなのにきたり定長にあいへんとうせよさあらばゆるすぞとてひきおこしらうどう共これはといひて立よればてつきはつたとにらんでゐゝすいさん也くはじやばらと立かへればみなどうてんしてにげいりぬ其隙に四きはのぶまさをひつたてしなのをさしてぞかへりけるかの者どもがいきおひすさまじき共なか〳〵申斗はなかりけり

二段目

扨も其後四きはのぶまさを引たてしなのをさしてぞかへりけるいそぐに程なくつきしかば大将のまへにおつすゆる定長たいめんしてめつらしやのぶまさ我此たびぎへいをあげかまくらを打つぶし其後都へうつて上りぜひのあんひをきはめんと思ひ立候也御へんもひとへに頼み候うんひらきなばちうによつてしよりやうはのぞみにきすべしとさもおふやうにぞ申さるゝむざんやのぶまさは四きがけんにをぢをそれつねのぎせいも出ばこそやすき御事にては候へ共せつしや如きのぶやうらが御みかたに加はり申さん御うけを申だんはづかしく候へ共いか様とも御はからい候てにあひ候ひやうらうまいのぶぎやう也とも仰付られ候へとさもあぢきなげにそ申ける定長ゑつきして一たんしんへうに候くわきうにせうぶを決せん間いそぎ手せいいんそつしらいが有べしと申さるゝかしこまつて候とてあやうき命たすかりやかたをさしてそかへりける其後さだ長きん國のぶし共にくわいぶん状をぞまはさるゝ近國のしよ侍かの四きがいきほいにをそれ我も〳〵と家々のはたしるしをさしつらねはせきたるまず一ばんには白きはたに三がいびしきんのざいをさしたるはかい國の住人へんみのさへもんのぶまさあかはたに三つかしはばんげつのさし物はしなのゝ國の住人すわほうりの一とう三百よき白きはたにわぐるまきんひやうたんさいたるはわかさの五郎つねときはたにしやうきのこまさくら花をさいたるはあしなの兵衛みつしげくろきはたに

金銀にてみつおもだかたううちわをさいたるはなはの二郎ときまさ白きはたに三つひきりやうやぐるまのさしものはしほのやぎやうぶつねまさしらばたにくぎぬき大もんじのさし物は山城のせうじゆきなをきばたにもつかうぢあふぎのさし物はくとうさへもんともながあかはたに金銀にて水にかもめそとは一本さいたるはさくらだひやうごの介くもにほうわうのあかはたぎんのざいをさしたるはひぜんの太郎さだよし白きはたにまいづるしやくでうのさし物いわきだんじやう左衞門高久白きはたにたううちわきんのばれんをさしたるはさいか孫八きばたにまつかわちやうちんのさし物はのじりくら見つ此人々をさきとしてつがふ其せい三萬五千よきとぞしるしける大將ゑつきかぎりなくかたぐ〳〵のれいぎしきだいして何れもさうそくはせ參らるゝたんよろこび入て候此上はをの〳〵が命を申うくる也出るよりかまくらを枕と思ひさだめ命をみぢんになげうつてすいぶんはげみ申されよしおふせて有ならば其にんもうのしなによつてのぞみはちうにまかすべしじこくもうつるにはやうつたて人々とくわんとく三年二月下じゆんにしなのをたつてかまくらさしてぞ押よする此事なをもかくれなくかまくらへもれきこへよし家の御前にはいつもかはらぬ四天わうみうらかげまさをめされしなのゝ國の住人すわのはんぐはんさだ長ほんぎやくをくはたてよせきたるときく此事いかゞとひやうでう有をの〳〵承り是はゆゝしき御大じされば みかたのせいわづか千ぎにはよもすぎしたとへ國々のぐんぜいはせ參るとても今の用には立べからず千ぎにたらぬせいをもつてたせいをふせがん事いかゞあらんとひやうでう取々也中にもみうらのわださへもんすゝみ出れき〳〵ましますなかにてはそれがしさへぎつて申でうはゞかりおほく候へ共まづぐいにさしはさめるおもむき申てみるまでにて候おほそれながら君ひとまづあはかづさの方へ御ひらきあつてせいを付られ御かせんこそ候はめかたぐ〳〵いかゞ思はるゝ御いけんあれとぞ申さるゝ時に公平つゝと出やあわださへもん事めづらしき御へんのことばかなされればかたき大せいなればとて一せんにもおよばずかたきよせくるをきゝにげんなどは此きん平はきらい也かたきよせざるさきにいづ方まで也共てきに

あはん所まで出むかい命をかきりにたゝかふべしかた〳〵はそれにましませといさきよくいひちらしかけ出んとする所を大將御らんじてやあきん平しばししばしととゞめさせ給へばさしもいさむ公平も君のことばにおそれつゝしほ〳〵と立かへるよし家仰らるゝはわださへもん公平が申ぶんたがいに一りつゝ有とはいへ共さりながらよするといふかたきをきゝにげにせんもあまりなり又きん平がやうにか程のぶせいにて出むかはんもよろしからずとかくかたきを引うけて命をかぎりにたゝかふべしようせよとぞ仰ける時に竹つなすゝみ出おほそれおほき申事にて候へ共みかたぶせいに候へばひつでうかちいくさ共存じ候ずそれに付しんら三郎よしさたこうさんぬるみだれの時よしのぶに捕はれさせ給ひすでに御命あやうくわたらせ給ひぬるをふしきにたすかりおはします其上御ようせうにわたらせ給へばこといできなん其さきに何方へも御あづけ候て御心やすく御かせんあれかしと申上るよしさだ犬にはらをたてさせ給ひ扨はそれがしを一せんのようにもたつましきものと思ふかゆみやの家にむまるゝ身はらうにやくにはよるべからず此度よし家こうの御みやうだいをもたゝ承り御命にかはらんと思ふそれがしを何方へも落ゆけとはすいさん也竹つなと御きしよくかはつての給へばよし家御らんじて申だんしんべう也さりながら此度はたけつなが申ことく一まつしろをひらきいづの國の住人めらのくらんどゆきしげこそよにたのもしき侍なれかれをたのみしのび出かまくららくじやうときくならばすぐに都へ上りせいをもよほし打て下りかたきをやすくほろぼすへしはやとく〳〵と仰けるよしさだ聞召こはくちおしき仰をかうむるものかなしなばかばねを一所にとこそ思ひしにそのうへ一せんにもをよばす出ん事こそむねんなれされ共仰はそむきえずおいとま申て參る也さらば〳〵との涙のわかれぞあはれなる君もなごりをしませ給へど心よはくてかなはじとなごりの心をたけくすて人あまたにておしかるべしと侍すこしあひそへいづの國ゆきしげがたちに送らせ給ひいかにかた〳〵いそぎいくさのようせよ打とけいるなとげぢし給へば承り候とおの〳〵ようなされけるあはれなるかなよしさだこうおの〳〵ぐし奉りやう〳〵くらんどが

たちにつきゆきしげにたいめんしよしをつぶさにかたりよしさだこうをあづけ奉るゆきしげきいてよくこそおげかうましますこなたへ御入候へとてやがておくにしやうじ申よきにいたはり奉る是は扨置さだ長のぐん兵ども城におしよせ時のこゑをぞ上にける時のこゑもしづまればよせての方よりむしや一きすすみ出大おんじやうにてなのるやうたゞ今よせたる大將をいか成ものと思ふらん是は田村右近の大ぶとしのぶの一ぞくすわのはんぐわんさた長也然るにさだ長としのぶと一けのよしみをもつてとふらひいくさのためにぎへいをあげらるれはまたかう申それがしはさだながのらうどういぬまの源五ざへもんむねたけといふ者也おほそれながら八まん殿御くびを給はつてとしのぶの御ついぜんにたむけんとぼうじやくぶじんにのゝしつた城の內よりさかたの公平もんぐわいにかけ出何さだながめがよせたるとやをのれらがぶんとしてげんけをかたぶけ奉らんとはすいさん也ぞくとめらいて思ひしらせんかゝれや〳〵とげぢすればかたきみかたが入みだれひ花をちらしてたゝかひけるよせてはまうせいあらてをいれかへ四きもろ共にきつて出爰をせんとぞたゝかひける城の內大かたうたれてみえければ四天王みうらかげまさ一どにどつとかけ合四方八めんにいれみだれあたるをさいわいにはらり〳〵ときりふするねらひしかたきのくび共を思ひ〳〵に太刀のさきにつらぬき城の內へひいている此者共が有樣みる人きくものをしなべかんせぬものこそなかりけれ

三段め

扨も其後すわのはんぐはん定長はぐん兵共をちかづけてきは大かたうたれ城中にはわつかのていとみへたりきやつばら何とたけく共その身金てつにてもあらばこそよもこたへて城中にはたまるまじされば此ちん少ひいて落ちばおとしかたせこしごえはこねのせばき道にて待うけ跡さきよりひつつゝみうつべしとすわほうりの一とうにいひつくる承り候とて其せい三百よきにてはこねをさしてぞいそぎける扨城中のぐん兵共命をちんかいにひしぎをきんせきにるいしたゝかふといへ共大ぐんにせめ立られ殘りずく

なにうたれけるせう〳〵殘りしぐん兵共よにまぎれをちゆきけるさしもたけき人々もあきれはてゝぞおはしける時にわださへもんすゝみ出此ていにては何とたけくはけむ共かなふべき共存せずかたきちかづかぬ其さきに君の御供仕り一まつをちさせ給へたとへはてきいく萬ぎこそる共一方を打やぶつてとをらんはいとやすかるべしかまへてむさと命をすて給ふなほんいは後日もとげらるべし何れも其むね心へられよと申君をはじめをの〳〵かねてごする事なればみな一どうに此ぎ尤ととうしける其後君の御でうには扨いつ方へゆかん竹つな罷出するがの國おきつのさへもんともみつの方までをちさせ給ひかのちより都へいくさの次第をつげられかせいを待うけ御かせん有べきと申上るさらばよういせよかしこまつてよういす其中にもきん平一人きかぬかほにてよそめしてこそいたりけれすへはる是をみていかに公平御へんはまたれいのよこしまかいやよこもたつもしらずぢたいそれがしがむまれついたるくせなればてきを引うけをつるといふ事きらい也とそらうそぶいてぞゐたりけるすへはるかさねてやあ御へんのすねも時によるぞじこくうつるにはやとく〳〵と申さるればいや〳〵あまりいそげはけがするものぞかた〳〵はいそがばさきへゆき給へそれがしは是にとゝまりかたきを待うけ今一いくさして跡よりおつつき參らんとをちんきしよくはなかりけりときに竹つなさしよつていかにきん平たんちをしつめてきゝ候へあやうきをみてめいをつゝしみしりぞくべき所をみてしりぞくをゆうしのりやういといへばちつともはじならずとかくせんぎにおよびじこくうつらばてき近付君の御身の上大事たり御へんのゆうりきも時にこそよれとりをたゞしてぞせいしける公平さしあたるりにをれて物をもいはずさしうつぶいていたりしを時に一丸權五郎ゆんでめてよりひつたて我も人も跡に殘り今一せんのせうぶをはげみたき物なれど君の御大事と有上はとかうのせんぎむやく也ひらにこなたへとひつたつれはむねんながらもはがみをしてぞ出にける是は扨をきすわのはんぐわん定長は思ふまゝに八々をおいおとしはやかまくらにざをすへてよろこぶ事かぎりなく今ははや東國に心にかゝる事はなし都よりうつて下りなばふじ川のへんにあいまちかい

しなのゝせいをもつてふじのすそのよりからめてにまはしひつつみたゝかはゞぢでういくさにかつべしからば天下は我もの成べし其時は何れもをんしやうはのぞみにまかすべしといさきよくいひちらし一時のゑいくわにちとせのよはひをのぶるとかやをこれや〳〵かた〳〵と心のまゝにおごりしはきんくわ一じつのゑいぐわとぞきこへけるかゝる折ふしもんぐわいにはおさなき人になわをかけちうしんのよし申ばんのものおくへかくといふ其ものこなたへめせ承り候とてやがてていぜんにめし出すさだ長みてちうしんとは何事ぞさん候それがしはいづの國の住人めらの藏人ゆきしけと申ものにて候まつ八まん太郎（本ノマヽ、）よし家のしやていしんら三郎よしさだにて候きはうせいたらへろうししうの刻此よしさだをむたいにあづけられ候へばせひなくあつかりおきては候へともはんしやうにつきちうしんのためいたはしながらからめとつて參り候昨日まではしゆくんとあふぎ候へ共今からめとつて參るだん人のそしりをもかへりみず又はをの〳〵もにくしとおぼしめされ候はんとよ我々ごときの侍はよろしきになびきわが身のさかへんをねかふならひにて候へば今までしゆくんとあふき奉るとしよ人のあざけりをもわきまへずでうしかほにてはんべりける定ながゑつきして御ぶん此たびのちうしんよろこび入て候をんしやうはかさねてほうぜん是はたうざのいんぶつとて五百丁をぞゑさせける忝しとてずんとたち我やをさしてぞかへりける其後定長らうどう共を近付あのしんら三郎をまづごくやにおしこめよ思ふしさいのある間はやとく〳〵といひつくる承り候とていたはしやよしさだをあらけなき者共が取てひつ立參らせつらきごくやにおしこむるあはれとよそにしら露のきゆる斗の心ちにてあかしくらさせ給ひける心の内こそあはれなれ是は扨をきよし家こう人々にしゆごせられいそがせ給へば程もなくはこね山にぞ付給ふとうげをみれはしかきをゆひ木戸さかもぎをひつかけかたき大せいにてまちかくるとみえたりさしもにたけき人々も今はのがれぬ所ぞととほうにくれておはします時にきん平はしりよつて天もひゞく大おんあげやあそれにひかへたるは何ものぞなをなのれたゞしは此山中にすむなるさんぞくがうたうのやつばらの我〳〵が

もの〳〵ぐほしさにかくふるまふか其きならばのぞみをかなへてゑさせん其木戸やぶつてとをすべしちつ共てきたいにをよばゞ一々にをのれらをつかみひしいでくれんぞとはつたとにらんて申けるせきもり聞てはらをたて何がうたうかとはをろか也是はすわのはんぐわんが一身のものすわのさへもんさだかげといふもの也かた〳〵を打とめんまふけのためのせきにて有とてものがれぬ所也それにてじんじやうに腹をきるか又は跡へもとるかせひのあんひはかた〳〵の心次第とまつしろにの〵しつてとをさんきしよくはなかりけり公平はいかつて何かたき一身のやつばらと申かすいさんなる事をはき出すものかなをのれらごときにさ〵へられ我〳〵がはらきるべきか又はゆくへき所へもゆかずあとへやもとるべきかいでおのれらがほしがるくびをとらせんといひもあへずとんで出れば一九權九郎もつゞいて木戸ぎはへつ〵とかけよりし〵ふんじんの力を出しやぐらかいだてみちんにおしくだきぐん兵共おつちらす大將かんゑきかぎりなくまずこなたへとの給ひてもみにもふてそいそかれける此人々のいきほい誠にてんまやくじんやとみなかんぜぬものこそなかりけれ

第四

公平ゆきしげをからめ取井ゆきしげさいごさてもそののちよし家の御まへには、人〳〵を召れ我此たびあやうきをのかるも、方〳〵かゆうりきたけきゆへ也誠にわにの口をのかれきじんがもんをこゆるとは、爰成べしさるにてもすへはいかゞ有べきぞ、方〳〵いかにと仰ける竹つなす〵み出申やう、御心ぼそくはおほしめさるべからず、されは此山こそ君御きつきやうの所にて御ざ候、其故はむかし御せんぞ頼光御しよらうのみきり、此山中に御ざ有しに公平をや公時、すへはるおやすへ竹兩人參り、はしめて君にかしつきしに又つなさだみつ參あい、四天王の御ゆるしかうむりしも此所、されば一たびおとろへ後には御うんをひらき給ふ、ごきつきやうめでたし〳〵といさめ奉る、吉家御ゑつきあさからずをふきつさうよろし、まづするがへこさんとてたびのしやうぞく被成ける、しう〳〵い上七人は思ひもふけぬたびのそら、しの〵めあくるはこね山ゆくあし

からのあさがすみ、立まよふ身ぞものうけれむかふ方にはするが成、ふじの高ねに立けぶり思ひに胸やこがすらん、比はやよひの事なればのどけきまゝにたわむれて花にこずとふうぐいすのおのがはかせにちる花を、たれに仰てなくならんとつらねしも、げにことはりと今こそおもひしらゆきのきへぬるたにのいわまより、もへいすわらびをにあざみ、よもに色かをあらそひてさかん也ける花々は、さぞ心ある人々はるゞならすこそはおぼすらん、せめてながめ我〳〵も少うきをばさんぜんと、まづ立よりてみね〳〵にさくらの花のかす〳〵を、今きてみるやみぎひだりをりたく思ふゞぼしさくら、かくあさましき山中にいかですみぞめさくら花、うきたびなれは我かむねのきりかやつれしみの程を、めぐませ給へいせさくら行衛何と有べきと、つゆ程我にいるゞさくらすべらぎの御代のふゆ、ふる松がえだにかゝれるふぢの、たそがれのおぼろ月にしふるさとへかへりしかりのこゝろ〳〵は我をとぶかと疑はれ、いとゞ心をいたましめなげきながらもゆく程に、いづの三しまのみやう神にぞ付にけり、心しづかにふしおがみ扨はいでんに立より、おの〳〵やすらいおはしまず時に公平すゝみ出て申上、それかしには御いとま給はれかし、是よりめらのくらんどゆきしげかたちに參り、よしさだ公をぐし奉りすぐにするがへさんぜんと申上る、吉家心に思召すはきやつはつねにがまん第一にて、ことにそこつ物なればいかゞあらんと思召、暫し御しあん有所に竹つなをはしめ、をの〳〵申上らるるは今度の御つかいには、公平をさしつかはさるゝこそくつきやうのぎにて御座候、いかに公平かしこき御へんに物をおしゆるにたれ共、つねに御ぶんはことあらければ萬の事に心をたをやかにして、よしさだ公を御とも申さるべきことこそ、かんやうにて候はやとく〳〵と申さるゝ、公平聞て扨〳〵かたかたはほうゆふのよしみとて、心付のだん近比くわぶんに候去ながら、よしさだ公の御むかいにさんすべきとは申候へ共、いや〳〵それかし參ましといふ竹つな聞て、なにとてさやうに申さるゝぞたゞし今申せしことば、みゝに立て候か公平聞てまつたくさやうには候はず、いつにてもそれがしが心の儘に參べきと申所へは、かならずおの〳〵とめ給ふが此

たびは公平が參だん、くつきやうのこと、申さるゝ、ちつとふしんに存ゆへ、扨參まし竹つな聞てつねに御へんをおしとむるは、あやうきも顧りみずむほうむたいにかけ入によつてこそ、とむれ此たびのつかひはよしさだ公を、御とも申ばかりのことべちのしさいはあらし其うへ御へんはあしはやき人なれば、へんじもきうに打立給へ時刻移りて、しせんの事いできなばせんまんくゆるとかなふまし、かつうは君の御ためなればはやとく〳〵と申さるゝ、公平きいて君のためと有うへはとかふのせんぎにおよばず、おいとま申て我君さまいとま申てはうばいたちと、ずんと立てそれよりめらがたちへぞいそぎける、さる間吉家公するがをさしてぞいそがるゝ、いそがせ給へば程もなく、おきつの右衞門ともみつが本につき給ふともみつ立いでたいめんし君是までの御らいりん、まつもつてめてたく候かまくらの御しやわせ、あしきやうに承り候へ共さりながら、かれら如きのぐちあんどんのゑびす共が、いくまんき候共きやつばらは、一たんのことついてにてにたつ物あらじ、まつ〳〵都へししやを立せいを是にてまちうけさせ給へ、一々に打ひしかんはなによりもつてやすかるべし、是にてきうそくし給へ都のせいをまち給へ、尤のしだいとて都へししやをぞ立給ふ、是は扨置きんひらはもみにもふで行ほどに、ゆきしげのたちにつくあんないともいわず、やがてうらにつゝと入ゆきしげは、よしさだ公をそにんして五百町をはいりようし、よろこびのいわひとて一もんのこらずよびあつめ、しゆゑんしていたりしがもとよりきんゑしやくすくなきにより、かほどにてなにのゑんりよもなく、ゆきしげがかみざにどうといていかにゆきしげどの、よしさだ公をなが〳〵是に預けをき、さぞたいくつにおぼすらんたゝいまそれかし御むかいに參りたりはや〳〵くし奉らんといふ、ゆきしけ大きにどうてんし色をうしないとうわくして、しばしへんとうをもこたへゑず、やゝ有ていや〳〵よしさた公此所へはわたらせ給はずと、ふるい〳〵ぞ申ける公平きいてそれがしが參うへは、へちにゑんりよも有べからずとく〳〵御めにかゝらんといふ、ゆきしげこたへていふやうはなにのきよごん候べし、しんりよをかけてもいつわる事は候わずと、誠しやか

にそ申けるきん平聞て、じしやう此所へはおはせぬかなか〳〵のこと、いや〳〵おのれがていをみるにとうてんしたる有さま也、そくひをおさへてたうならば、さだめておのれはくじやうせん、有のまゝに申さすばめにものみせん、はつたとにらんで申けるいかていになさるゝとても、なからんことを何とかこたへ候はんと申、ことばをもなくしていきたる心ちはなかりけり、公平やがて取ておさへはくぢやうせよとて、にわの大木にしめ付る一もんらうとう、是はといひて立よれば公平はつたとにらんで、やあすいさん也おのれらと四方八めんにあたるをさいわいに、はらり〳〵と切ちらし扨立歸りいかにゆきしげ、よしさだかうをせつがいしたるかさなくば、かたきにわたしたるか有のまゝにはくでうせば、命の程はたすくべしといふゆきしけ聞て、もしもたすかる事やとおもひ命をたすけたぶならば、有のまゝに申上んめんぼくなく候へ共よしさだ公をかまくらへぐし奉り、定長にわたし申候公平聞て其まゝちうしたるか、いまだなからへましますかさん候まづごくやにわたらせ給ひぬと申、それにいつわりはなきかかくはくでう申上は、なにしにきよごんを申べしさるにてもそれかし、つねに存よらざる事此たびのあやまりは、てんまはじゆんのなすわざと存候、あはれ御じひに命の程を御たすけ候へかしと申、公平聞てなんじが申でうしんべう成程にたすくるぞよろこべゆきしげうれしくおもひ、こは有がたき御たすけをかうむる物かなとて物の御じひにはやなわをゆるしてたび給へ、公平聞ておのれ此たびたすかるはくわほうの物、去ながらしたをぬいてたすけんとて、口の内へてを入したのねを引ぬき、すてたりけりむざんやゆきしげ、しゆくんの天ばつたちまちかうむり、あしたのつゆときへたりしをにくまぬ物こそなかりけれ、公平心に思ふやうよしさだ公なからへてだにましまさば、それかしゆうりきをもつて一たび取かへさんはやすかるべし、やあ爰にうれしきこと有いつにても、それかし一人かたきの方へかけいでんとするたびごとに竹つなといふやつがなましいにかんげんだてして、それがしをおしとむる此たびは心のまゝに我一人、かたきのやかたにかけいつてみぢんになさんうれしやとよろこびいさんでかまくら

さしていそぎける、かのきんひらがありさまおそろしかりともなか〳〵、申はかりはなかりけれ

第五

公平ちりやくさるつかいろうしやの事

去間公平はかまくらさしてぞはせにける、ほんみちは人めしげければかんだうにさしかゝりたにもみねもきらいなく、のりこへはねこへいそぐ程にかまくらちかく也しかば、と有こかげに立よりて少やすらい思ふやう、さだめてかたきゆたんなくようじんきびしく有べきに、そこつにかゝりことしそんしてはあしかりなん、とやせんかくやせんとあんしわづらひいたりしが、かゝりける所へいやしきをとこのほほかぶりをして、さるをひいていでけるがかれも木かげに立より、やすらうを公平つく〳〵みておのれ何物なれば、さるにつな付ひきまわるぞととひければ、さん候是はいやしき物のよをわたるしよさにて候、公平聞て扨々其しよさにもいわれが有か、なかなかの御ことまつもつてさるめでたき、いわひの物にて御座候い國本てうのれい、つぶさにかたりなかんづくきうばの家の御いわひは、さるにましたることとなしといさいこまかに申ける、公平心に思ふやうきやつにあふこそさいわいなれ、我此さる引にすかたをかへかたきのやかたへたばかり入、定長を取こに取てよしさだ公の御命を、たすけばやと思ひさだめいかになんち、我此比しうにおくれよになし物と也はてて、しんめうをつくべきたねにせんとぞ申ける、さる引いやしきながら心ばへやさしき物にて、涙をながしいふやうは御ろう人にて望せ給ふと聞は御いたわしく存也此うへはいかやう共しんでうし奉らんといふ公平聞ておゝじつしんなしとはいへ共、なんしはやさしき物かなさあらば出たちしてみんとてやがてすがたをかへにける、去間公平かのさる引がきたる物を上に取て打かけ、そくそづきんをひつかふて、ゆんでにさるつなをひかへめてにむちを持、さるにむかつていふやうはなんぢちくるいなれ共、人間にはとをからんけだ物なれば、よく聞我天下のしつけん四天王の其中にも、さかたの公平とて人におぢらる身なれ共君をうばんはかりことにかくあさましきすがたとは也たるぞ、なんしも三王ご

んげんの御ししやなれば、力をそへよあゝむねんの我すがたやと、泪を流しくどきけるげにまことのつたへ聞、もろこしゑつのしんかにとうしゆ公はんれいは、しうをうばわんはかりことにあぢかにうをゝ入持、あき人にさまをかへあんをめぐらしなんなく、君を取かへし二たびよを取くわいけいのはぢをすゝぐとかや、我はんれいにをとるべきか、其上はうばい共も此たびのつかいに、公平くつきやうの事とすすめしに、もししそんずるものならばまつ代までのかきんなればたとへばよしさだ公を、いわをたゝんで入たり共一たびは取かへさんと、思ひさだめてかたきのやかたにいそぎける、是は扨置すはのはんぐわん定長は、おごりのあまりに鷹がりせんとて、はいたかこたかをすへさせさんざめかして出にける、公平よく〳〵みるに是こそ定長也ねかふ所のさいはい、たばかりよつて取子にせば、吉定公をたすけんはめいわくたな心をあはすべし、立よればせこの物共是をみてそこ立のけとおいはらふ、公平ひざをかゞめ是はめでたき御よろこびのために、罷出て候也いか成き人の御まへにも、罷出申物にて候へば御なぐさみのために、一きよくまわせて、とのゝ御めにかけたきよしを申てたべとぞ申ける、人々聞て扨さるのめでたきいわれを聞、其後かみへ打たへ申さんといふ、公平こたへてさん候さるめてたきといつは、むかしもろこしのていわうしゝかりに出給ふ、さるを三びきいけ取すでにころさんとせし時かのさることはかはしいふやうは、我命をたすけたまはゝ、たからをあたへんといへばさらばとてたすけぬ、かのさるおく山にはせゆき馬を一ひき出し、ていわうに奉ればかの馬に召れ御うんひらかせ給ふにより、御馬やのすみにいわい置給ふ、我かてうにも心有侍は馬やにさるをつなくとかや、取わけぶけの御いわい一きよく御めにかけ申さんと、ことばをつくして申ける御よろこびの折からなれば、此よしかみへ申上んとやかて定長にかくと打たう、其ぎならばめてたき所を一きよくまわせよ、かしこまつてかくといふ公平聞て、とて物の事に御せんちかくにてまはせんといふ、いや〳〵それにて仕れ公平力及ず、さるを引立しなすくなきつくりこゑを、はつたと上てぞうたいける、さるはめでたきいわいの物君の御代

はちよせんざい、めでたし〳〵とをしかへし〳〵二三べんまはせ、すきをみて公平さるづなむちを打すて丶とんでか丶る所をはそはにいたりし侍共、是はといふていだき付其ひまに定長は、こくうをさしてぞにげにける公平物のかす共せず中にずんと引立あまさじとかけ出を、大せいおりかさなつて手取あし取なはをかけづきんをとつてみてあればさかたの公平也、大きにおどろきいましめたりし其上をなをもいたくいましめ、大將の御めにかけんとかなたこなたと尋ねける、やう〳〵に尋ね出し此よしかくと申ける、扨はさやうに有けるかまづ其公平めをろうしやさせよ去ながら、つねのろうにてはかなふましんざうにつくらせよ、承り候とてやかてろうをぞつくりける、むざん成かな公平をたかてこてにしめ付、くびに大づ丶三本までかつかせ、こしにはくろがねにて丸くふとくたくましき、とうかねをしめ付くさり三方へひつはり、あしにもくさりだしを打てつのろうをこしらへ、ち引のかんぜきをもしにかくる、いか成天まきしん也共此らうやぶつて出んこと、かなふべきとはみへざりけり、かのきんひらかしよぞんのほどむね〳〵ともなか〳〵申はかりはなかりけれ

第六

よし家はつかう并さたながさいごの事

扨其後きよみがせきにおはします、吉家の御前にはをの〳〵さしあつまり、承り候へはめらのくらんどゆきしげは、心がはり仕り吉定公を、かたきの方へわたしたるよし申候其上公平いまだ歸らねばうたがふ所候はずと申出せば、君をはじめ人〳〵はつとおどろき泪にむせび給ひける、よし家泪のひまよりも仰けるこそあはれなれ、ふびんやな吉定さんぬるみだれの時、としのぶにとらはれてうきなんぎにとぢられて、すでにしざいに及しがふしぎに命たすかり、此上はちよばんぜいをふるべしと、よろこびし事のゆめと也又ぞやできにとらはれて、きられんことのいたはしやましてやちやうるいちくるい、あるいはかうがのうろくずまで、さいこの時はかなしむにさぞやさいごに吉定が、おさな心に我〳〵をこいしくや思ふらん、あ丶扨ふびんの物かなと御らくるいは

ひまもなし、はんくはいそねむ物共も、共に泪をながさる竹つな泪をおしとゞめ、しやく取なをし申様おほそれをゝき申ことにて候へ共、すへはる一丸それがしには御いとまをたび給へ、きうにかまくらへはせさんし吉定公の御行へを、尋申たく候扨のこるほうばい達も聞給へ我〳〵三人さへぎつて御いとまを申たん、をの〳〵にたいしてはゞかりをゝく候へ共、去ながら公平吉定公の御むかいに、さんせんと御そせう申せし時君御しあん有所を、我〳〵三人が公平つかいに参たんくつきやうの御事と、さいさんしいて申ゆへ扨御むかいに参ぬ、つねにたにかのをとこ火の中水のそこまでもかたきといへばかけいらんとするをぢゝきやうくんしてをしとむるに、此たびは三人の物共ことばを心の内にはうれしく思ひ、はせむかつて有所に思ひの外に引かへし、吉定取子にならせ給へば物をこらへぬ公平にて、さだめてかたきへかけいらん大くんに打かこまれ、うたれてもや有らんもしいけ取にせられなば、我〳〵三人をうらむることも有なまし、ことには吉定公の御ゆくへ心もとなく存也、跡をばたのみ申御いとま申て我か君さまと、三人御前を罷立てば吉家御らんじて、なんぢらが申でうことはうなれと去ながら、都よりのぐんせいおつ付來らん間、待て一所にはつかふせよ三人承り御でうにて候へ共、へんしもこらへかたく候まつさきへさんせん間、君はせひを待うけさせ給ひそう〳〵御はつかう待奉ると、いひもはてずんと立かまくらさしてぞ、はせにける是は扨置かまくらには定長家の子らうどうを近付、いかに方々吉定公平をはまに引出し、はく中にかうべをはねよ其後都へ打てのぼらんといへば、尤の御でうとて吉定公平をごくやより引出しゆいのはまへぞいそぎけるいそぐに程なく付しかば、二人の人にしきかはしかせ西むきにおつすゆる、よしさだ公平を御らんじてめづらしや公平、なんぢからめ取られしんぞうのごくやにをしこめられて有よしを、ろうもり共つたへしが、誠にとられて有けるよな、今こそさいごなれはいふに及ぬことなれ共、心をたしなみきよくしね、さいごにおくれかまいてげんけのなはしくだすな、いきてもしゝてもなこそをしけれ、只念佛こそかんようなれとかへつて公平をすゝめ給へば、太刀取なわ

取けもんじゆもさすが、頼吉の御子也とみなかんるいをぞなかしける、公平心に思ふやうまだちやく年にわたらせ給へば、さいごをかなしみ給ふらんと、心もとなく思ひしにさはなくして、かへつて我をすゝめ給ふよろづけなげ成をみまいらせよろこび入ていふやうはいかによしさだ公、それがしがことは心やすくおほしめせ、たゞ今念佛を申させ給へ、らいせはそれかし御ともしてしでさんずをおひこし、ゑんま大わうとやらんがつみにふせんといふならば、それがしがゆうりきをもつて、ごづめづせつきあほうらせつを、一〳〵にふみちらしゑんまわうを取子にして、ごくらくじやうどへ道引かせかのおとに聞へたる、じやうぼんじやう所たまのうてなのれんだいに、よしさだ公をのせ奉り其れんだいの下にそれがしがすんで君をしゆごし奉らん、らいせは心やすかるべしとあざわらつてぞ申ける、太刀取なわ取一どにとつとわらひ、なにしおふたる公平なれどさいごちかづけば、心をどうてんしてらいせの事を、てに取やうに申おかしやなさ程かう成公平か、わづかのわれらにいけとられ何とてかゝるうきめにあふぞと、手をうちひざをたゝきどよみをつくりわらひける、きんひらこゝぞとおもひをくのちからをいだし、ゑいやつとひきければ、くさり大つなひきちぎり、たちとりなはとりけちらかし、よしさだをかたにうちかけこくうをさしてぞはせにける、けいごのものどもをどろき、きんひらこそをちゆけとてあはて、さはきよばわりける、四きはこのよしをきくよりも、なにおちたりとておとすべきかとて、四人ともにうちつれとぶとりよりもなをはやく、あますまじとてをつかくる、ほどなくをつゝめ四人ともにおりかさなり、きんひらをくみとむるかゝる所へ、たけつなすへはる一九、三人のものまいりあひのかさじととつてかゝる、四き四てんわう四つにわかり、くみあいける四てんわうのものとも、四きをいげどりひとつなわにぞからめける、扨きんひらいふやうはいかにかたかた、にくさもにくし此なわ取をそれかし仕らん、かた〳〵は手をかけたまふなと、さきにおつたて出けるが四きは一どに力をあはせ、かけ出しにげけるを公平にかさしとひかへけれ共、四きはまされる大力にてはんちやうばかりひつ立る、公平さきのこと

ばにかはりやれかわなぬぞ、かゝり給へとよばわれば、三人の人〳〵おかしながらはせよつて引とむる、かゝりける所へ吉家大くんをもつてをしよせ給ひ、御兄弟のよろこびたとへていはん方もなし、去間公平はじめをわりを申上る、吉家御ゑつきかぎりなく、汝がてがら今にはしめぬ事なれ共、此度のちうかうすべてかぞへがたし、先其四きとやらんめをちまつりに打てすてよ、畏て候とやがてかくこそさあらばをしよせんとて、本より城のあんないはよくしつたり、大ぐん一どに城の内に我も〳〵とみだれ入、定長をからめ取君の御前に引にけり、それはからへ畏てりくす、扨本いをとげ給ふ千しうばんせい、めでたしともなか〳〵申ばかりはなかりけれ

寛文二年壬寅七月九日

山本九兵衛板

公平末春いくさろん

初段

扨も其後それ一やうの春なれば冬こもりせしむめがえのにほひもよそにきこへきてやなぎのみどりふぢなみのたそかれにまつほと丶きすあをばのかげにこゑそへてこするゑすゞしき秋風に春のこしぢのかりかねは月をめで丶やわたるらしもみぢちりしく庭のおも□□しろたへの雪ふりてけぬが上にも立かすみめくる月日ぞ面白きされば゠いしやう二年正月はじめの事成に右大將よりよし公の御前にはしよ國の人々あひつめてせんしうらくの御事ぶきめでたふ聞え給ひける扨又家のしんかにはわたなべさへもんのせう竹つなさかたの平太きん平うらべの藏人すゑはるたけちの源太やすもとみうらのわださへもんためむね其外の諸侍（本ノマヽ）あんぢんこつが御いわゐとおの〳〵御さかづきを給り次第〳〵にのみ給ふのとかにめぐるさかづきのじゆんにまはりきやくにとをり大將御きげんあさからず人々禮義おわつてのちみな〳〵おいとま給つてぎよれんにいらせ給ひけるかのよりよしのいせいのほどなに丶たとへんかたもなし是はさてをき其比またはりまの國のあるじをばたち花のさ大將ともふさとぞ申ける此人くわんゐ共におもかるべきしさいはなけれ共いもうとのあさひのまへと申せしをみかどあさからず思召二の宮御たんじやうありて後ささきにそなわり給ふゆへともふさ召上られはりまのしゆごにふせられくらい三位ににんぜられ左大將にへあがつてきんちうの取さたともふさ心のまゝなれはみな人おもくもてなすゆへおごりはひとへにたうのやうこくちうにことならずおごりのあまりにともふさはなにとぞしてせんはらにてわたらせ給ふ一の宮をうしなひわがいもうとのはらなる二の宮をくらいにつけ參らせんとてうほ心にあんじけりある時いゑのらうどうに新藤さへもんゆきたゝとてあんふかきものなりしをひそかにちかづけいかにゆきたゝあの一の宮をうしなひ二の宮をよにあらせ我天下をたな心におさめんと思へ共よりよしといふくせものあるがゆへに思ふまゝに成かたしかれをう

しなふ手だてやあらんと申さるゝ新藤さへもん承り是こそやすき御事なれ今程天下の諸大名わが君にしたがい申とみへたりことさらきくちのだんじやうはをぢのやす村を一とせよりのぶにうたせしゆへ今に其いこん、殘りつゝうへにはかれにしたかへ共下にはやしんもつはら也いそぎかれをめしよせられ御ないだんをしめしあはされたんせうが國にてはたと上させきうしうをしたかへばよりよしはおどろきて四天王のもの共をうつてにくだし申べしそのあとにて一の宮の御事をきさきの宮の御かたよりむほんのよししきり也とざんし申させ給ひなば一の宮は御かんきにおよび給ふべし其時よりよしかなしみてひいきのさた候べし其時てうてきいはいのくせものとて四天王がなきうちにをしよせ打とり申さん事何のしさいの候べきと手にとるやうにぞたくみけるともふさきいてまづもたくみしゆきたいや是に上こす事あらじさあらばきくちへ使をたてようけ給り候とやがて使をたてにけるだんせう聞て何事やらんと使と打つれ參らるゝ右大將立出たいめんしてめづらしのやすかた殿や是へ〳〵としやうじつゝ酒さかなの珍物にていろ〳〵もてなし申さるゝしゆもやう〳〵すき行ばあたりの人をはらいのけいかにやすかたかやうかやうの次第を思ひたつもしも此事かなひなば御へんにはさいかい九か國あてをこなひ申べし萬事は賴むと有ければきくち聞て打わらい思召たち給ふものかななひ〳〵それがしおぢやす村がいこんはなはだしく候へば是さいわいのむほん也さらば國へはせ下りはたをあげ申さんとりやうしやう申おまへをたちとるものも取あへず 三重つくしをさしてぞ下りける本國にし成ぬれば國中へふれをなしやぐらかいたてかきならべほりほりまはしへいをぬりよせくるかたきをまちいたり是は扨をき此事天かにかくれなくよりよしは聞召人々御前にめされつゝいかにかたかた今どきうしうの一らんはださいの少二やすむらがおひきくちのだんせうやすかたつるがさきにてはたをあげうつてをまつときいてありそうもんするにもおよばねば竹ちの源太やすもとわださへもんためむねいそぎうつてに下るべしさりながらいづれもわかきものなればすへはるあいそふていくさ大將仕れとはやうつたてとの給へば其時きん平罷出でたびた

びのいくさにいづれも大将を仰付らるゝがいかなればそれがしはついに仰をかうむらずせひ此たびはそれがし罷むかい申さんことに九州のあんないよつく存候とはゞかりなくこそ申けれ時にすへはるすゝみ出そうしてきん平は我まゝゆひ（ろノ衍）とはいひながらよくふかき人なれ我らに給はる大将をごぶんの所望は何事ぞつね〳〵の我まゝとはばつくんにかわるべしゆみや八まん大ぼさつ命のあらんかぎりはよじんにはわたすまじきといろをそんじて申けりきん平きいてあらうれしやそれがしを我まゝものと名を付給ふなかくいみやうの有なればせひにをいてまいらんといふすへはるいよ〳〵りつふくして御へんの御いとまを申て下り給ふをそれがしはちつともかまい申さすさりながら此すへはるがむかふ城中をせめ給ふ事は成まじきぞ我らに給る大将なればいくさのさし引はそれがし也たゞかせんの次第をけんぶつの望ならばおいとま申て下給へとあざけるやうにぞ申けるきん平はらにすへかね今はとかふの事もなくおいとま申てわが君さま其外なじみのはうばいたち是までぞ人々とずんと立ていせんとす竹つな取ておしとめ又きん平のれいのくせが出候よ今ははやとしたけてわかげとはいはれまじ君の御一ごんはりんげんにことならづ上意をいはいし給ふ事もつたいなき次第也きん平とぞしづめける大将聞召いやとよ竹つなきん平がそこつはちゝきん時がゆづりなれは今にかぎらぬ我まゝ也さりながらきん平よてきと聞ていさむはゆうしのほんいといひながらしよきうはいつわりうちじにすればていゐをちて命をたすかる是皆もつて君のちう也すへはる下りててきをうちしもきん平とまりて我をまもるもいづれかをろかなるべきや誠に一きとうせんとたのもしく思へはこそしばしも身をばはなたじと思ふ心をしらざるややあきん平とぞ仰けるきん平承り御一ごんの有がたさにしゝのはがみをひるがへしとかふの事も申ゐずしほ〳〵と立さりて泪にくれてぞいたりけるさらはうつたてすへはるとて源氏ぢうだいの御はたをあづけられもへぎにほひのはらまきにとけいといふ御太刀をそへられすへはるに給り扨又ためむねにはふしなわめの御よろい竹ちの源太にはひおどしの御はらまきを下されてうてきやすくたいぢしてめでたくきこくま

つぞとてぎよれんにいらせ給ひける人々物ぐちやうだいしてよろこぶ事はかぎりなしきん平是をみてうら山しげに打ながめ扨すへはるに打むかいいかに藏人せんぢんのあらそひ時の大將をのぞむはもとよりゆうしのならひたれどもごぶん我らの其中にてたゝ今のこうろんは返す〳〵もはづかしやしかしながらひころたんきのそこつをば存の事にて候へはかまひて心にかけ給ふなきくちか城をふみおとしせひやすかたがくびとつてめでたくやがてきこくあれとがんしよくとけてぞ申けるすへはる聞て申やうちくばにむちのむかしよりなれしたしみし中なれば何とて心にかくべきぞだんぜうがくび取ていなかづとにさゝぐべしあとにて君をしゆごせられよいとま申てはうばいたちやがてかいちん申さんと竹ちみうらもろ共に人々にいとまをこいつくしをさしてぞ下りける此人々のていたらくあつはれ一きとうせんのつはものよりあひ是なるはと皆かんぜぬ者こそなかりけれ

二段目

さる程に一のみや新王は御けいぼ二のみやのはゝうへよりさま〳〵ざんげんふかければ御ちゝみかどの御かんきをかうぶりてひとま所へおしこめられけいごのものきびしくつきよるはよもすがら御なみだのとこにふしられれうのたもともくちにけりかゝる御あはれの折ふしほり川のさいせうとういんのちうせうはよふけ人しづまりて後けいごの隙をうかゞいしのびきたり給ひつゝなみだをながし申さるゝは宮の御むほんもつはらなりとざんげん頻りに候ゆへ君げきりんはなはだしく則ともふさはからいにてちかき内にとをきしまへもなかし申さるゝかさらずは道にてうしなひ奉らんとひやうでうきはまり候へばこよひ一つうのしよをあそばし御せいしにてせひそうもん有べし然らずばよにまぎれしのび御出ましましてよりよしを御たのみ候て罪なきよしを申ひらかせ給べしはやとく〳〵と申上る宮御なみだにくれさせ給ひみづからいか成むくひにやようせうにてはゝにをくれ今又けいぼにざんせられいとあさましきまるが身の行末とてもしられたりみづからあやまりな

きよしをそうもん申ものならばいたはしや御きさきつみにしづみ給ふべし君のてうあひ深くしておひをなぐさみ給ふなるきさきをいかでかうしなわんちゝみかどへの御かう〳〵にはたゞみづからがしがいして御いかりをやすんぜ奉らんと御はかせに御手をかけさせ給ひければ二のくぎやうすがりつきこはもつたいなき次第かな何とてふかくにはみへさせ給ふぞもろこししんの國にじんせいちやうじとて二人のたいしありけいぼにふかくざんせられちゝのいかりをうけし時じんせいはたうざにじかいすちやうじはのがれ國をさり後にはついに國をたもてりさればじんせいがしゝたるとちやうじがのがれ國をたもち父の跡をおさめしは是第一のかう〳〵としるせりとかくおちさせ給ひつゝ御よをおさめ給へやとさま〳〵かんげん申さるゝ宮はげにもと思召其ぎならば力なしさらばしのび出べきと人々を召ぐしてひそかにだいりを出給ひよりよしたちへみゆきなり程なくたちにもなりしかばひそかにいらせ給ひつゝよりよしにたいめん有はじめおはりをかたらせ給へばよりよし大きにおどろきて扨も〳〵よの中にけいしけいぼの間ほどあさましき事は候はずされ共ざんしやのわざなればいつまでか候べき心やすく思召せとおくにしやうじ奉るそれより二人のくぎやうたち御いとまを給り三重だいりをさしてぞかへらるゝ是はさてをきさ大將もとふさは新藤左衞門近付て汝がちりやくにたがはず宮よりよし君にそうもん申つゝよりよしともにうつべき也急いくさのようういせよはやとく〳〵とぞ申さるゝ行忠承り申やうかく有べきと存つゝ四天王のやつばらをつくしへ下さん其ためにきくちがらんをくはだてしになかんづくにが〳〵しききん平竹つな殘りゐて京とのまもりを仕ればそつじにいくさし出してはかへつてなんぎたるべき也爰にくつきやう一のてだてをあんじ出して候今どすへはるうつての大將かうふりて九しうへ下りし事きん平あとに殘されしを是をむねんに存ると承るさいはいそれがしがいとこにたばやし源内みちかねと申ものよりよしの御内に候がべんぜつかしこきものなればかれをかたらひいひふくめ竹つなきん平が其中をあしくあいさついはせなばきん平もとよりたんきもの無二無三にあらければとかふのしやべつもいはずして竹つな

とさしちがへんはちでう也かれらあひはて申て後は御心のまゝ成べしといさぎよくこそ申けれさ大将大きによろこびあつはれ汝はあんじやかなさらば其もののめせとある承り候とやがて使をたてにけるたばやしは承り取ものも取あへず急ぎやかたへ参りけりもとふさたいめんまし〳〵て是へ〳〵としやうじ入しゆをさま〳〵にもてなし扨はじめてけんざんのしるしとて引出ものをゑさせつゝしふんのはからい申されしはいかにみちかね四天王のやつばらが又人なしとふるまふを御ぶんもむねんと思ひ給はんしかるにかやうかやうのくはだて有しおうせたらんにをいては御みもよに出し申べしばんじはたのみたてまつるみちかねもとよりどんよくの者なればしだい申にもおよばす御心やすくおぼしめせずいぶんはからいみ申へしとはや御前をまかりすぐにそれよりみちかねはさかたがたちへいそぎけるしたくにも成しかばきん平にたいめんしさま〳〵のものかたりよも山のはなしおわつて後いかにきん平殿今ど九しうへの大将は御へんに仰付らるべきを京とにむなしく殘され し事ひとへに是は竹つなの君へつね〳〵我まゝもの也そこつ人なりとあしさまにうつたへ給ふ故今度も大将ならず萬事思ひのかいもなくむねん日々にかさなつて口おしく候らんあの竹つなのおきてやせいたう我々にいたる迄かたはらいたく候としみ〳〵と打かたりやあよしなきものかたりにながいたして候おいとま申とわがやをさしてかへりけるきん平もをくりて出げにもみちかねいふことく扨は竹つながさまたげと覺へたり代々よしみふかければ命にかへて思ひしにざんげんせられし口おしさよ此上はせひをいはせずさしちがへあつたら侍二人しによりよしにことかゝせんと思ひきはめしのびやかにふみこま〳〵とかきしたゝめ竹つなかたへぞつかはしけりたけつな立出狀をみるにごぶん我をざんせらるゝ事君の御うんのつきしゆへ也天しる地しる我是をしらざるべきやさりながら日々にあひなれしよしみふかき中なればひそかにたゝさしちがへてしぬべしそれへ參上申べきか是へきたり給はんや御報承らんとかきてあり竹つなはつとをどろきしばらくしあんしていかさま是はさんしやのわざ成べしと思ひ是より返事いたさぬと使のものをぞかへしけるそれより竹つな

はさらばまづ御てんへあがりふうぶんをきかんと思ひ立出る所へたばやし源内きたりけるやあめづらしやこなたへと内にしやうし此事いろにも出さず人の上はしなどをしたりしが其時みちかね申けるはいかにわたなべ殿あのきん平のすいさんは生れつきとはいひながらたび〳〵の我まゝさぞむやくにおぼすらん我々に至るまでむねん日々に候へば君へうかゞひ申べし竹つな殿とぞ申けるわたなべちやくとさとり扨はきやつめがしわざ也天のあたへと思ひあふごぶん申さるゝことく我もさやうに存る也さらば御身ともろ共にきみへうつたへ申べしさらば二心あるまじきとせいしをかきてみせ給へみちかね大きにどうてんしいやせいしまでも候はずまづかさねての事にいたさんとたたんとするをとつてふせ扨はごぶんは我心をひきみんためかさらずは爰をたゝせじといふ源内つよくおさへられてごめに成ていふやうは何いつわりを申べきさらばかゝんと申ける其ぎならばとて引おこしのぞみのとをりにかゝせけるわたなべよろこびくわいちうし又とつておさへおのれは何のいしゆあれば日本ぶさうの竹つなをきん平とさしちがへさせころさんとはたくみけるぞいで思ひしらせんと首ふつゝとねぢきりしがいをゑんしよへおしのけ首をきぬにおしつゝみたゝ一人きん平たちへぞ參らるゝ坂田立出きつとみてくだんの事にやきたるらんと思ひ是へ〳〵と申ける竹つないなをりいかにきん平ごぶんが心にはいか成てんまが入かわりてさしちがへんとは申さるゝぞさためて人の中こととたるべしよくしあんしてみ給ふべしきん平とぞ申ける坂田きいていや〳〵わたなべたとへ中ことにもせよ人もかたちのなき事は申まじことさら君にもうらみありとかく二人うちはたし國どをやみとなすべき也はやしなんとぞ申けるたけつなにつこと打わらいごぶんのそこつのたんきをはひころいけん申はこゝぞかし是はみちかねめがざんげんにて候ぞや此手跡をみしり給ふかごへんの事をわが前にてあしきやうに申ゆへ扨はかれめが二人をころしむほんをおこすとさとりつゝつゝ口がきをかゝせてきたりたり是みたまへといだしけるきん平ひらきみればみちかねが手跡也大きにおどろきをけし扨はきやつめにたばかられて此間竹つなを恨みけるこそはづかしけれま

つぴら御めん候へいでみちかねめが首ひんぬいて參らんとかけいつるをとつておさへごぶんのいかりさぞ有らんと思ひはやくびとつて參りたりさらばみせ申さんとつゝしみ（顚倒カ）くびをなげいだすきん平あきれはてとかく竹つなは人間とは思はれず人の心をよくさとり扱もしづまりたるはたらきかな誠ぶんぶの侍やごへんをいゑの中ぞんとしすへはるそれがし兩にたたば日本はさてをきらいかうらい（らいノ二字衍カ）はくさい國けいたんごくよりせめきたる共何程の事か有べきやいらいそこつを申なばこぶしをあてゝもせいし給へとがんしよくとけて申ければわたなべきいてあふそこいなきしよぞんのてい一入もつてまんぞくせりよしなき事に隙をゑてきのふよりしゆつしをせずいざや御てんへあがらんと二人うちつれ出らるゝかのきん平がぶたうの程又竹つながちほうのていあつはれたもんぢごくのさいたんやとさてほめぬものこそなかりけれ

三段目

さても其後さ大將ともふさはたばやし源內うたれたるときくよりもやがてさんだい申てそうもん申されけるやうは源のよりよしこそ一の宮の御むほん折をゑたるさいはいと宮を引取奉りきんりをかたむけ申さんとせいをそろへ候よしこときうに候へばいそぎうつてを給るべしとぞそうもんあるみかど大きにおどろかせ給ひ扱はよりよしはちゝにてきする子をかこいあまつさへせいをもよほすきつくわいさよいそぎついばつ仕れとのせんじ也ともふさ大きによろこび御前を能立　ふしのびにせいをぞそろへける此事よもにかくれなくにしきのこうじにもれきこへ人々御前にめされつゝいかにかた〳〵我をかすとがなふしてぎやくしんのさたありすつうのせいしをもつて申ひらくべきと仰ければ竹つな承り仰にては候へ共せいしかず〳〵あけ給ふ共宮をかこはせ給ふ上はげきりんやむ事候まじいはんやゆみをひかん事おそれおほく候へばとかくたゞの庄へ引こもらせ給ひつゝよの有さまを御らんじてざんしやをたゞし給ふべしはや御げかうとぞ申けるきん平きゝもあへず竹つなのかけんはそむくまじとは思へ共此度のいさめ

はむねにほうどつかへて候それをいかにと申に天しをおそれてひきしりぞいたるとは人申さで四天王のもの共あるひは討れ又はつくしへさし下り竹つな金平斗なるがゆへに事もみへぬ其さきに聞おちにをちたるなとゝいはれてはげんけのいゑのかきん也人はともあれかくもあれきん平にをいては一かう御所を出まじきさ大將がくびとつて跡よりをつゝき申べしとく〳〵用意しておそろしくばおち給へ人々といひすてゝかたわらに立よりて大ひざくんでどうといなをりほうつえついてゐたりける其時御前の侍たちなふ先此たびはせひ竹つなのいさめにつかせ給へやとしとやかにぞ申けるきんひらはつたとにらんでやあおちんといへるたんがうはさぞかた〳〵はうれしかるらんたゞ人をさそはずともごぶんらばかりをちゆけとて中〳〵をちんずきしよくはなし竹つな是をみてげにきん平申もことはり也さらばまづてきを一あてけちらかしそのゝちひらかせ給ふべし我君とぞ申ける大將げにもと思召そのぎならばいそぎいくさのひやうでうせよやあきん平參れとのたまへば其時きん平ゑみをふくみそれこそぶしの本意なれと又御前にぞ出にける大將御らんじなんぢがいふもことはりなればはやとくいくさの用意せよかしこまつて立あがりふしおの〳〵したくをしたりけりかくてその後ともふさは大ぐんにておしよせて三重ときのこゑをぞあげにけるされどもげんしのしよさふらいぶせいなりとは申せ共ものになれたる物共にてうわうさわうにかけたてゝふしはなをちらしてたゝかいけるかゝりける所へひとりむしやが一子平井の市丸しやうねんは十六さいぢよあつてたんばの國に至りしが此よしをきゝつたへものゝぐとつてうちかけ我につゝかんもの共はつゞけや〳〵とよばわつてほうしやうよりつたわりしわちがいのはたさゝせしの村をまつすぐにじんきくわんにさしかゝりこまをはやめていそぎけるされどもらうどう五きつゝきしう〳〵六きにてきぢんをかけやぶりほりのきしべにこまかけよせ大おんあげてなのるやうたゝいましう〳〵六きにてきぢんをかけやぶりしろにくはゝるつはものこそけんじふだいのさぶらいにほうしやうがまごひとりむしやほうめいが一子ひら井の市丸しやうねんは十六さいわれとおもふものあらばよつてぐ

めとぞよばゝりけるときによせてのその中より玉の井の太郎きよつぐとてむさしさがみに名をえたる大ちからのありけるが進み出ていふやうはせんねんわかちゝをごぶんがおやのひとりむしやに討せむねんいまにたへやらずいざやくんでせうぶをせん一まる心えたりとおしならべむんずとくむ玉の井もとより大ちから一丸を下めにかけおしひしがんとゑい〳〵とおせ共一丸よろいのきつとしめつけあぐれはかゝみなぐれは飛両方あせをしつはとかいてひじゆつをつくすそのうちにかたきみかたのものともはめいよのけんぶつこれなりとこぶしをにぎりきばをかみかたずをのんでぞけんぶつす玉の井なにとかしたりけん一丸におつふせられおきん〳〵とする所をおさへてくびをかきおとすおとゝの二郎いかりをなし一もんじにうつてかゝる市丸ちやうとうけながしよこてきりにきりければ二つになつてぞうせにける三なん三郎こらへかねむ二む三にきつてかゝるをとびちかへたかもゝきつておとしのつけにかへすところをばほそくびちうに打(あげチ脱スルカ)おとし三つのくびをきつさきにつらぬき大おんげんじかたの侍はとしはびちやくといへどもうちものとつてはおとなししいくさはかうこそするものよとにつことわらふてたちにけるよせてのものどもこらへかね一度にどつとうつて出る時にきんひらすゝみ出そこのけ一丸ごづめせんとうつていでんとすればよせてこれをみるよりもあらもつたいなやきんひらがいでけるはとくもの子をちらすごとくにむら〳〵とぞにげにける〻おくびやうしごくのやつばらや此きんひらにてあればとて手あしの廿もあるならばにくるだうりもことはりよあしも二ほんに手も二つほかにかたはゝたんきなとちからのつよきばかりなりかへせ〳〵とよばはれどもかづく者はなかりけりいまははやせひもなしいかに市丸たゞいまのはたらきはちゝほうめいにもまさりたりいまのいくさのありさまをごぶんがおやにみせたやな是につけてもすぎゆきしほうせうさだかげこひしやとなみだぐんでそのゝちにまづたちいりていきつけとしづ〳〵とつれてひいたるかのきんひらがていたらくまた一丸がてがらのほどおほぢもおやもこれほどはいかでかもつてあるべきとてきもみかたもをしなべみなかんぜぬものこそなかりけれ

四段目

扨も其後さか田の平太きん平はたび〳〵うつて出けれどもきん平とみるからにむかふものゝあらざればかぶとをふかく打かぶりめんほうほうあてをしあてなぎなたを打かたけつくりなしてなのりけるはただ今うつて出たるは平井の一丸がおぢみのゝ國の住人きし田のさへもんためつぐ也我と思ふ者あらはをしならへて首うちせよとらうごの思ひでにうちじにせんとぞよばはりけるよせてのもの共是をきゝ一丸がおぢならばて取にせんといふまゝに我さきにとうづてかゝる所を引よせつゝぬきねぢ首八つぶてあたるをさいはいにはらり〳〵となげすてけるよせては是にきもをけしおぢてさうなくすゝみ出ず新藤さへもんゆきたいさいふりあげいふやうはあのきし田一人に何ほどの事か有べきかゝれや〳〵とげぢすれば爰にみちのくの住人しかまの藏人あり〳〵に下をさの住人とげの七郎さだとし力はつね〳〵じまん也二人ともにうちうなづきおにかみなりともあまさじととんでかゝりむずとくむきん平二人をさうにうけゆんでめてにかいはさみ出いといふてしめければめ口よりもちをはいてたちまちむなしく成にけり新藤さへもんはがみをなし一もんじにうつてかゝるねがふところのやつかなととびかゝりひつゝかみての下におつふすればらうどうのなり時すかさずかけよせきしだがかぶとをつかんでうしろへやつと引ければかぶとめんほう引きれてみればさかたのきん平也やれきし田にてはなきぞきん平なるはとてどつといふてぞ逃にける其内きん平新藤さへもんがくびをかきおとしきん平といくさせまじきとは何事ぞいやといふともせひせんものをと大手ひろげて追かくれば八方へにげちりけりかゝりける所へ竹つなからめてよりきたつてきん平をまねきよせもはや思ふ程いくさせられてあればなにゝふそくのあるまじきにいざ君をいさめてをちゆかんもつともといふまゝにやがて御前に罷出一まづおそれを思召いそぎ京とを御ひらきましませと申上ぐればよりよしげにもと思召さらば出んもの共とておの〳〵打つれそれよりもふしただの庄へぞいそがるゝいつもかはらずごずめにはた

けつなきん平一丸をさきとしてしづ〳〵とぞおちらるゝあとをきつとみてあれば何かはしらずぐんせいうんかのごとくおつかくるきん平是をみてすいさんのをい事や我とゞまつておつちらさん人々はをちられよといふよりはやくそばなる大木ねぢきつていでものみせんとうつてかゝれば金平とみるよりもわつといふてにげゆくをおつかけうたんとすれ共一人もとどまらず我さきへぞにげにけるおゝさもそうずさもさうずと棒振かたげて引たりけり時に竹つな一丸にめくばせしていかにきん平とかなき大木ねぢきつててき一人もうたずしてもらし給ふは何事ぞおかしさよとそうかしける金平聞てあゝたけつなはどうよくしたいないひ事やむかふものこそうつべけれにぐる者をおつかけてゆへなく命とらん事つみのむくひもおそろしやそうしてせい人は人をこらしめ給へ共ものゝ命はたち給はずいらいにをいてもあしきせつしやうし給ふな竹つなとぞ申けるわたなべからゝとうちわらいやれあれきいたか一丸よ扨も扨もなかいきしての一とくのきん平のごしやう心を今きいたるこそおかしけれかまいて〳〵せいじんの心をとくとわすれずしてみたりに人をころし給ふなちか比しゆせうにこそ候へさりながらせい人にも又はいか成けん人にもごぶんほどの大きなかほのあかいせい人はから天ぢくにもなあ一丸よ有まじきとは思はぬかとじやれつじやれられつ三人一同にどつとわらいたゞの庄へぞいそぎける此人々のてらたらく三重いさぎよくこそみへにけれさる程にたゞの庄にもなりしかば宮をかしづき奉りよきにかつがふおわしますしかれ共よの中のさだめなかりしならいにて一まる此方頼よしふうきにおかされたしんじんのうらんかきりなくいれいのとこにふし給ふいじゆつのれうこうくすりをつくしおんようのかみいのりをはげませ給へ共ねつひやうさらにしりぞかす次第〳〵によはらせ給ひたのみすくなくみへ給ふ宮をはじめ奉り八まんに至まで御いのしよ侍あとやまくらに立よりてさま〳〵かんびやう申せ共其かいさらになかりけり今をかぎりとみえし時いたはしやよりよしは竹つなきん平にかいしやくせられおきなをり宮をつく〳〵み參らせ御なみたをはら〳〵とながし給ひよにくるしげなるこはねにてあゝくちおしやそれが

しはしやばのゑんつきはてゝめいどへ赴き候なり是と申もしんわうの御うんのつきと覺へさふらふそれがしながらへ候はゞせひざんしやのつみをたゞし御しんしの御中なをし御とも申て上りつゝ御くらいにあらせ申さんと思ひし事のかいもなくたゞ今むなしく成候いかに竹つなきん平よ誠になんぢらは日比つかへしちうせつをいくばくつくされずとてもの事にきやうこうは我ぞと宮をたつとみてよきにうやまい奉れいかに八まん汝おさなくとも父がゆいごんたしかにきゝ宮にちうこう奉り四天王がかんげんは父がいふぞと心得て少もそむく事なかれさはいひながら八まんがまだおさなきものとして思はぬかたきを引うけて心をつくさんふびんやとふかくの涙をながさるゝ時に竹つなきん平どうおんにこはあさましき御しよぞんや兩三日の御ふれいにかやうにわたらせ給ふ事年ころはおにかみよりたけかりし御大將のかいなき今の御ふせいやせひ御心を取なをされ御代にあらせ給ふをみそなはせ給へやとなみだと共に人々は御力をぞそへにけるよりよしはかた〳〵申はさる事なれ共しやうじむしやうのさかいはたけきにもかぎらずちゑ有とても頼なし今はかなはぬ道なればせひなく思へもの共よいとま申てさらばとて扨一の宮やわか君を御めをひらきなごりおしげにみ給ふかと思へは程なくむなしく成給ふともしびきへてあんやとなるこはそもいか成よの中ぞと人々御しがいに取付てこれは〳〵と斗にて聲をあげてぞなげかるゝをつる涙の隙よりもいたはしや一の宮くどき給ふぞあはれなるあなあさましやみづからはしゆくせんのむくひにや十せんのはらにやどり出生したるかいもなくいとけなくしてはゝにわかれけいぼのざんにてちちにはうとまれ今はひたすらよりよしを父共母共頼しにかやうにむなしくなる上はたれを頼みにたまのおよたへなばたへよみちしばのつゆのうきみのおき所たれにとはましあぢきなや扨も〳〵うきよにはかみもほとけもましまさぬかうきをことはり給へやとくどきなげかせ給ふにぞおにをあざむく人々もせんごふかくにたをれふしうていこがれなげかるゝしよじのあはれときこへけるされ共竹つな涙をおさへげに誠わが君はねつびやうにてわたらせ給へはそつじにさうれいかなはじと又いだき上奉りそせい

のくすりを參らせける中にもきん平はあまりの事のかなしさにやはたのかたをふしおがみなむ八まん大ぼさつはげんけのうち子は皇う百代までもまもらせ給はん此御たくせんはいつわりにてましますかきみをかへしてたび給へさらずばてきはよそにはなし八まんのほうでんにてはら十もんじにかききりざうをつかんでみちやうへなげ一ねんのあつきとなり參りげかうをつかみさき神々たり共申させまじなむ八まんときばをかみふしおがみ又〳〵そせいのくすりを參らせあらかいなしわが君〳〵とこゑをあげよばはり水をそゝぎ奉ればあらふしぎやなよりよしは御いきほつとつき給ひよみかへらせ給ひける人々是にちからをそへいよ〳〵くすりを奉ればなをもつてくわいき有しだいに御きりよくつき給へはげんけのはんじやうするながくばんせいらくは是成べし扨もめでたや〳〵と上下ばんみんをしなべてさゝめきわたりみへにけり一の宮若君の御よろこび又四天王の心のうちうれしき共中〳〵申斗はなかりけり

五段目

去程に右大將よりよし公はじやうごうならぬゆへにより御いれいいよ〳〵へいゆふあればみな〳〵きゑつのまゆをひらき上下よろこび奉るかゝりける所へするはるやたけちみうらはきくちが城をせめおとしやすかたがくびを持都をさして上りしが君たゞの庄にましますときくよりはやくはせ參り人々にたいめんしてやがて御前へ罷出きくちがくびを御めにかくれば大將御らんじて誠九州をてきにうけやす〳〵とたいぢせし事かた〳〵ばつくんのはたらき也と御きげん中〳〵あさからずかゝりける所へいづの國の住人といのなりやす方よりひそかに狀をつかはしける何事やらんと人々はうけ取御前にさしあぐる大將御ひけんまし〳〵にそのぶんにいはく扨もともふさはおごりのあまりにちんじゆふの將ぐんとなり天下のぶしに向つてをのれかまゝをふるまひ候あはれ名ある侍を御代官に上せられくはいぶんのたまはらばざい京の人々みな〳〵したがい申べしなりやすはんとぞかきにけるよりよし御らんじて此比都より心をつうずる人なかりしになりやすがしんていしんひやう

にこそおほゆれとやがて御返事を給り使のものをぞかへさるゝ其後たけちの源太をめされなんぢはいまだ九州のつかれもはれまじけれ共しよこくのぶしとしたしきといひべんぜつかしこきものなればしのびていとに上りしんらのかんぬし圓長にゆきともふさがふるまひ都の取さたきゝとゞけざい京の諸大名へしのび〳〵にくはいぶんをまはしつゝやがてかへれとの給へばかしこまり候とりやうじやう申御前をたちふしやがてしやうぞくしたりけるさる程にたけちの源太やすもとは人めをしのぶ道なれば山ぶしすがたにさまをかへくわいぶんをおひに入しもべのものにもたせつゝ心ぼそげにすご〳〵とたゞの庄を立出て都をさしてぞ上りける日もくれかたに成ぬればこよひはこゝにしゆくかはらかたきにいつかあふたのさと夕立過る山のはにたへ〳〵殘るくもみさかかゝるうきめをみやたのしゆくよきもあしきもよの中はちりにまじはるあくた川げにやさいこ中將のつらね給ひしことのはまであはれにいとゝおもほへてあまのさゝ山さら〳〵にたへぬ思ひのいつの日か山ざきにもたから寺めてをはるかにみあくれはやはたの山にかすみたなびきていはし水にぞやどるらゝ君の行末あんをんにまもらせたび給へとふしおかむよりはやみねのくもきりはるゝ月かげはかつら川にもうつるらんこひづか四つつかさし過て入あひのかね諸共にていとにはやくつきにけりそれよりもやすもとはしんらのやしろに參りつゝあんないかうて內に入圓長立出たいめんしよくこそきたり給ふ物かな扨君はつゝがなくましますやいかに〳〵と有ければさん候君もいよ〳〵御きげんよく渡らせ給ふ我々いづれもけんごに罷有候へば御心やすかれと申圓長きいて先以てめでたふこそ候へさあらは是にとうりうしせけんのやうすをうかゞい給へと奥のまにしやうじつゝよきにもてなし申さるゝさればよの中のしんしとても頼なく兄弟とてもはかりがたきは是かとよ圓長つく〳〵と思ひけるはいや〳〵竹ちを是にをき後日にかたきへきこへなば我みのざいくわのがれましよせんたゞともふさ殿へひそうしてほうび給らばやとあんじすましのびやかに宿を出ともふさやかたへ參りつゝあんないかうて內に入さ大將の御めにかゝりごん上申けるやうは扨もよりよしのらうど

う竹ちの源太こそざい京の人々へくわいぶん持來り都のふうぶんきかんため我らの宿所に罷有候よきにてだてを仕り是へ召つれ參るべしちうばつあれとぞ申けるともふさ大きによろこび天のあたふる所也いそぎつれて參られよ承候とやがてじたくに立歸り何となきふぜいにて源太に近付いふやうはいかにやすもと御みは我らのよしみといひ又はよりよしの御ためなればいかにもてだてをめぐらしともふさをうたせ申さんいかゞはあらんと有ければ源太大きによろこび扨々有がたき御心ざしや何とぞしてうたせてたべ一つは一けのほまれなれば萬事は頼奉ると勇みすゝんで申ける國長しすましたりと思ひされば大將はまい月それがしを頼みやないのきたうに大はんにやをてんどく申が則今日あひあたれりごぶんを大はんのはこに入て參るべしかならずともふさ立出はんにやをちやうもん申也我じぶんをはからいふたをあくべし其時立出給へごへんそれがし二人して思ひのまゝにうつべきとてにとるやうにぞたばかりける源太誠とよろこびくつきやう一の事共かなはや參らんとぞすゝみける國長なのめによろこびさあらばいそぎ參らんとはんにやのはこを取出せば源太立よりてを合せしそくひちうかいしやくねんとくけだつといふ一くのけをとなへみをほそめてぞゐるかんぬしよろこび取もたせふしともふさやかたへいそぎける程なくやかたに成ぬれば先もんぐわいにをろしをきかんぬし立入ともふさによしをかくとぞ申ける左大將聞召いや〳〵其源太と申ものは大かう一のくせもの也とかく取はなしてはかなふましそれがしはこをみるもうるさき也いそぎかんぬしはちうげん共を召つれられかつら川へしづめ給へ三日過て後しゝたるしるしをみ申べしはやとく〳〵と有ければかしこまつて候ともんぐわいへ走り出入々を近付とのゝ御ぢやうにて候へば此はこをかつら川へ持參あれとぞ申けるやすもとはこの内にて是をきゝなむ三ほうとおとろきゐといふてけやふれば二つにさつとさけにける人々是におどろきてわつといふてぞにげにける源太すかさずかんぬしおつかけかいつかみ扨々おのれはにくいやつめかなよくも源太をたばかりて有けるようぬめに思ひしらせんとたかもゝをふまへてやつといふてふみさきかしこへかつはとなげすて

てとぶが如くにをちゆきしは心ちよくこそみへにけれ是は扨をきたゝの庄には竹つなきん平するはる君の御前に參りさだめてやすもとざい京のぶし共にくわいぶんをまばし申さんそれぐんほうのならひさきんずる時は人をせいしおくるゝ時は人にせいせらるるとかんしんがぐんほうのごくいに候也若ゐんにん仕さかよせによせられてはみかたに赴く人々もさ大將にかりたてられかへつてかたきと成申さんはやうつたゝせ給へやとみな一同に申上るよりよしげにもと思召此ぎ然べしいざうつたゝんもの共とて大せいを引ぐしてらくやうさしてぞ上らるゝいそがれければ程もなくあくた川にも付給ふかゝりける所へ竹ちの源太はせ來りざい京の諸大名大方一身のおもむき扨かんぬしがふるまい一々次第に申上れば大將聞召いしくも仕りあやうき所をまぬかれ來りたるもの哉なかんづくしよぐんせい大方一身とうしんのよし是汝がはたらきゆめでたし〳〵かた〳〵よいさめやいさめとの給へば竹つな金平すへはるすゝみ出をろかの君の御ぢやう哉日本國がひとつになれはとて天下ぶさうの我々にけつきさかんの竹ちみうらがくつきやうにひかへて候上は萬りが外へ切はらい御いきとをりをやすんせ奉らんとつよきにいさむもの共いきほひすゝんで上りけるあつはれゆうしのていたらく誠によの中のぶしのてほんは是なるはとほめぬものこそなかりけれ

六段目

さる程に右大將よりよしはいそかせ給へば程もなくかつら川にもつき給ふとある所に御ぢんをめされみうらのわださへもんためむねをめされ汝いそぎだいりにゆき先それがしが所存のとをりを一々そうもん申て參れかしこまり候と御前を罷立だいりをさしてぞ急ぎける程なくきんりになりぬれば事のよしをうかがふにゆふへいもんたいけんもんに至るまでもんもんひしとおしかため物かげにけいごのぶしうんかのことくなみいたりためむねやがてあん内こへばよろいむしや立出何事やらんとこたふ是はよりよしの使のものにて候と申せばやがてをくへ此由申ければけいしやううんかくの人々は事のよしをきかんとて

我も〳〵と出給ふためむねきつとひざまづきかぶとをぬぎてそばにをきつゝしんで申けるは扨も今度よりよし思ひよらざるぎやくしんのなをうけ申候其しさいは一の宮御しんしのふわにならせ給ふ事ひとへに是はともふさのざんげんにて候所にたれとして禁中に宮の御事申ひらく人もなくよりよしがつみなきをもなげき給はんくきやうなしさるによつてせひなくさ大將を罪せんがためてうていに向つて弓ひくにて候哀君しやうらんまし〳〵一の宮の御方へともふさを給りざんしやをたゞされ御かんきを御しやめんあらば一の宮もよりよしもゆづるをはづしかぶとをぬぎてうていふにのちんじゆとなり天下國どのはんせいをおだやかにあふぎ奉らんとことはすゞしく申けるどうざにましますくぎやうたち此由を御らんじ扨々わたさへもんはいなか夷と聞つるにゆう力こつがらぶだうもさこそ有べきごんひ禮義のしんじやうさよ何樣げんけの侍はたけき斗にあらずしてゆうしよくのうるはしさよ〳〵各かんじ給ひけるそれより人人此由そうもんある内よりのせんじにはよりよしがいつはりなければしよまう叶ひかたき也とかく宮を出しつゝよりよしかつみをたゞのがれよとの御返事にて使をかへさせ給ひけるためむねせひなく罷立しが又立歸り申やうあさましの事共やきんしよくをつちくれとし石つぶてをたからとすさかさま成よの中なれば二心なきよりよしはざんしやのためにかんきをえあくぎやくふだうのさ大將はちうしん也ともてなさるゝ君のゑいりよの口おしやとあたりをにらみ付はがみをなして立ければあたりに有あふくぎやうたちどつといふてぞにけ入けるともふさおくにて是をきゝにつくき今のことばかないとれと申さるゝかしこまり候ととのもつかさの下くはん共弓と矢をおつ取かけさん〳〵にぞいたりけるためむね又立歸りから〳〵と打笑いやあくげひくわんのやつばら己れがいる矢は此ためむねにはよもたゝじつよ弓あらばためしにこゝの程をいてみよとむないたをうちたたきそらうそぶいてかへりしをほめぬものこそなかりけれさる程に御ぢんにも成ぬれば大將の御前に參りよしをかくと申上るよりよし聞召其ぎならはちからなし明日は早天いくさのあんひをきはめんと明

るをおそしと待給ふ是は偖置だいりにありあふしよぐんせいかたきむかふときくよりもよりよしにむかつていくさしてはいぬじに也いざをちゆかんもの共とて五人三人うちつれて我も〳〵とをちにけるすでにそのよもあけゆけばさ大将ともふさはらうとう共を召つれてぢんしよをまはりみてあればぐんせい更になかりけりともふさ大きにおどろき扨はみな〳〵おちゆきたるとみへてありゐゝ口をしき事共哉此ていにてはかなふまじきみを一まづさんもんへをとし申かさねてせいをもよほしてぜひのあんひをきはめんと君に此よしそうもんしてあやしきはりこしにのせ奉りくぎやうたち打かこみともふさぐぶ申 三重さんもんさしてぞをち給ふかゝりける所へ一の宮よりよしははたのてを閃かしあとをしたふてよせ給ふともふさをはたゞめ御ともの人々此よしをみるよりもかなふまじきといふまゝに御こしをすてをきてみなちり〳〵にぞをちにげる時にしんわうやよりよしはいそぎかけつけ給ひけるみかど是を御らんしてちんがふとくなるがゆへにかくうんめいつきはてたり此上はいかやう成共心のまゝにをこなへと御なみだにくれさせ給へばしん王よりよし御こしのまへにひざまつきかうべをちにつけ給ふはまつたくそれがしきやくしんにては候はずいそぎだいりへくはんかうなりなを〳〵はんきのまつりことをとりをこなはせ給ふべし是みなともふさが口ゆへにて君をなやませ奉るかみならぬうらめしやと一の宮もよりよしもおんなつかしさかなしさにみな〳〵なみだをながさるゝをつる泪の隙よりも此上はとかふ申におよぶまじさらはくはんかうなし奉らんとみな〳〵かつちうをきなからに御こしをかき奉りやがてたいりにうつし参らせ奉るかゝる所へ竹つなきん平はともふさをいけどりいましめてこそきたりけれよりよし御らんしてつみのむくひはちかきよなまづ竹つなきん平にあづけをくかさねてさたをなすべしかしこまつて候とやがてひつたてかたはらにめしこめてこそをかれけれそれより天下すなをにしてこくどゆたかにとみさかへせんしうばんぜいげんぢいよ〳〵はんじやうめでたき共なか〳〵申ばかりはなかりけり

万治三年三月吉日

山本九兵衛板

公平天句問答

初段

扨も其後古今のへんくわをあんするに上に有ては其政事たゞしく下其法を相守れは國家まさにたいらか也然るに源のよりよし公東國の一亂事ゆへなく大將頼ちかをいけ取都へかいちん有則さんたい有て軍のしだいそうもん有御かとゑいかんあさからず扨よりちかはらいくわうか一子なればまつきんこくせしめ重ねてそうもんいたすべしと御れんさつとおりければよりよしもめしうとを引くしてしゆく所をさして歸らるる御しよにもなれはあたらしくごくやをしつらいよりちかをおしこめきびしくしゆごをおかれける扨きんひらをめされませうのうでを切し事ひつけやうあたをなすべき也と時のはかせあべのすくねを召れうらかたいかにと上意也すくね畏てしばらくかんがへ御でうのことくませうのしうしん殘るかならず七日の內に大事出來いたすべしきんひらには七日か間ろうきよ尤に候といさい申上けれはきんひら聞てこと〳〵しや何程の事か有べきあはれ此たひ來れかしかた羽さて置いきなから手取にせんとそわらいける竹つな聞ていかにきんひらうらかたといふもしきほう有まつ一七日か內はかたくろうきよ有へき也きんひらわらつて又竹つなの物しりかほしよせん切おとしたるうでとはを取持はくろの大せんに立こへくせものにたいめんせんとすんと立を大せうしばしととめ給い如何に公ひらさやうのせんれいなきにもあらすせんそ ただのまんちうへんけのつのを切し時三日の內に取かへされ給いぬ又わたなへのつなもらせう門にておにのかいなを打おとしいはらきらうぼにへんじ取かへす只〳〵一七日が其內は外のたいめんむやく也と仰けれはきんひら上意に力なく此上はとかなききんひらがへいもんあわれみ給へめんめんとやかたをさしてかへりつゝ諸侍に申付大門をさしかため天くのうでをからひつに入おきわか身は五尺三寸のうば切丸きの弓に常にこのむ兩はのほこゆんてめてにたてかけ大きなるつほに酒を入七日のとせんの其內はをのれならてたかなぐさんあつはれ

友やよき友やあたゝか成事はしゆんしよくのことしいさきよき事は秋の月ふかきちきりはかしまなるむすびとめはやひたちおびかみのちかいはおもしろやと今やうをしとろもとろにうたいなし引うけ〳〵のみみけるか夜もしんかうによよび何とはしらずひらりとかけのみゑけれはすわやくだんのくせものと太刀に手をかけよくみれは父きん時けつせんとしていかに金平扨もこのたび天くのうでを切取事ひるいまれなるはたらきいよ〳〵かめいをあらわすべしあらなつかしの昔やとやかてなみたにむせひけり金ひらみてあつはれかのいはらきがつなをたはかりし事も有打てすてんと思ひしが見れはまさしきちゝのかたちもつたいなしすかたをかへん所を打ばやとさるにても只今はいか成所にましますそきんときはつかしながらしゆらのちまたにさまよいしが汝が打取うでとはがいばい返さんとませうこゝうにみち〳〵たりよつてゑんわうにいとまをこいて來りたりそれ取出せとつくとふうしゑさせん公平すはこそと思ひしがさあらぬていにてけにやおやこのよしみとてはる〳〵のしやばに來り給ふ事有がたく候へ共君の仰にて御目にかけん事かない候ましとあいそうなけに申けるほうれい聞てはる〳〵來る某にむかいさやう成事や有此上は七せうまてのかんとそよつくふんへつ仕り公平聞て何かんとうとや某がちゝ金時はさやうのみれんの者になしさつするに御ぶんは矢はぎにて御めにかゝりし大せんの御ほうなるべし心つくしに何とたはかり給ふそやひらにすかたをかへられよほうれい今はことはなく今はのそみにまかせんと忽すかたを引かへとんてかゝるをきんひらすかさす打太刀に又片うてを打おとされくもゐはるかに失にけり公平さもそうす〳〵とそらをにらみ立たりけりためしまれなる高みやうと皆かんせぬ者こそなかりけれ

二たん目

其後金平は重てへんげのかいなを打おとし七日の物いみ事すみて御所をさして上りけり御前に成しかば件のあらまし相のべ切とめたるかいなを御めにかくる頼よし公をはしめ皆人々公平は人間にはなかりけりとしたをまかぬはなかりけり時に竹つないかにき

んひら此たひのはたらきとかふ申にことはなしさりなからませうをてきにもちぬれはかまへてゆたんし給ふなとかんげんす金平しんていには何事かあらんと思へ共君の御前もはゞかりといさい心得候然らば今四五日引こもり申さんとしゆく所をさしてかへりけり是は扨おきよりちかのこくやのほとりにきやくそう二人あらわれいかによりちか過つる比かせいしたるかいもなく思いの外にしそんしたり今一ど天下をくつがへされよされはちくせん日向の大將にら山せうけんゆきのぶゆうのたつしやことにたせいの者なれはわれ〳〵むほんのきざしを付し間身かたにたのまは一みせんこなたへといふまゝにらうのかうしを引はなし壹人はよりちかとけんじどくやにのこり壹人のきやくそうはよりちかをともないくもねはるかに上りけり是は扨置ちくせんひうがの大將にら山將けんはませう其身にのりうつれはにわかによをうらむる心付われは是王氏を出て遠からす弓矢打物たれにおとらんに一國や二國のしゆごとしてくちはてん口おしやあわれよき大將を取たて天うんをはからんと郎等をなみすへ高こゑにはなす所へよりちかはませうもろ共ひうかの國に來り是こそくだんの所よとおしへ申てきやくそうは行方しらず失にけりよりちかすは望たつしたりとあん内なしにつつと入上座になをりいかにわどのはにら山將けんな是こそ源の頼ちか天下に望あるゆへに御へんをたのみ來りたり行のぶおとろき扨はさやうにましますか望所もさいわい此上は君に一命を奉らんまつ門出に竹ちの源太やすもとを軍神にせめんとてかれ是あわせ二萬よき日向の國を打立てちくこをさしておしよする川せの城になりしかば時のこゑを上にけりされは竹ちはもつての外のきやへいにて前後をほうしいたりけりされ共家のかうけん上村源藏友きよ大手のやくらにこと〳〵しのさうとうや其なをなのれとよばはつたり其時よりちか馬のり出しわれは源のよりちか也城をあけて相わたせいぎに及ばゝふみつふさんと大をんあけてのゝしりけり上村聞て何頼ちかは去ぬる東國の軍にいけとられ給ふと聞きつるにはちをすてらうをにけ又爰にさまよい給ふか身ふせうなれとちくせんのたんだい竹ちの源太城也あしくよつてけが有なやあわか者共あれおつちらせ承と大戸をひらき

打て出爰をせんどとたゝかいけり然る所に遠山りつくわいじやうしゆんとて七尺ゆたかなほつしむしやつけのほうをおつ取のべたせいの中へわつて入はらり〳〵なきたをす此いきほいにあたりへ近つく者もなし上村今はこらへかね白ゐのなきなたかいこみあらみ事也遠山とたかいにてうとあわせしがしやうしゆんか打ほうに長刀を打おとされ今は是迄といふまにつつとよつて引くむをしやうしゆんさらに者共せす中に引さけねんぶつ申せ上村と一ふりふつてなけにけりされ共中にて歸り何をするそしやうしゆんとにつことわらい立けれはしやうしゆん大きにいかり只一つかみとかけよるをうしろへはづしさし通し中にて首を打おとし竹ちか家のてなみを見よと城の内へ入にけりかの上村かはたらきあつはれめいよのはやわざとみなかんせぬものこそなかりけれ

三たん目

其後上村はすてに其日もくれけれは大將の御前に參り御心ちはいかゝ渡せ候そと軍のしたい身方打しにをかたりけれは其時竹ち枕をあけ此度のはたらきかんするにことはなしいよ〳〵萬じ頼む也友清さりとてはやまいは心にまかせすやふたいのともからを打せつゝよそにみんも口おししめて木戸くちまても打出んと太刀おつ取立けるを上村たもとにすかり付こはいか成御事そつら〳〵此いくさといつは日かすをかさねたたかはゞ其内都よりごづめのせい參なん然るに君けつきにはやり打死ましまさはつくしは敵にしたかはんいかにも御身をまつとうし都のかせいを待給へ某かくて候上は城をはやふられ候ましとさま〳〵いさめ申つれん中に入申はや夜も明方に成けれは又せめ口に出にけりちん所になればいくさの下知をなす所にきぬ川平治といふものよいより木かけに忍ひねたりしか此よしを見るよりもよつ引てはなすやむざんや上村が物のぐの引合にはつしと立大事の手なれは馬より下にとうとおつるを平治すかさずはしりより首を取て引所を松田の七郎はつといふてかけ出高もゝを打はらいたをるゝ所を首中に打おとし上村か首と一所にもち大將の御前に畏りあらましをあいのぶれば竹ち聞もあへす何上村はうたれ

たるとやあゝ竹ちがぶめい是迄也とてもこの城たもちかたししやいつ迄とちやうたいにつつと入うの花おとしのよろいをき五尺三寸の大太刀はきさゝなみくろといふめいばにくらおかせゆらりととひのりかけ出る家のこらう等こはかろ〳〵しき御事やと馬に取付引とゞむ安元聞て身をつゝしむも時による某都を出し時公平といゝあわせしことばあれは此軍手よはくせいはきても口はかきれましそこ立のけと切はらい敵の中へそかけ入けりいつれも力及はすいかゝせんと待所へさゝなみくろ矢をおいてちしほに成てはせ歸る是をみて人々なむ三ほうはや君はうたれ給ふかや口おしのしたい也此上は御前へかくと申さんとおくをさして參りあやめのつほねを以て由をかくと申北の方は聞召是は誠かかなしやなせめてさいこにめされたる御馬を一めみんとひろゑんに出給いくどき立て泣給ふつほね由をみまゐらせ今はなけき給ふとかいあらしさすか竹ち殿の北の方人手にかゝらせ給らんよりはや御じかいましませとなく〳〵□□に申あわれ成かな五歳三歳の若君に白きしやうぞくきせ申守り刀のひもをとき御前に相ならべ若君の御供と皆ひろゑんに畏るみたい所は若君たちのかみかきなてやあちゝ上はうたれさせ給いたりいかに花市ちゝ上のましますい所へいさゆかんと御手を取給へはをさな心のはかなさはちゝ上と聞召よにうれしけにいつものことく花を折て給はらんつる君もいざゆかんと悦ひ給へは母上思いにみたるれと心よはくてかなはしと守り刀をするりとぬき既にがいせんとし給へはめのとがひさににけ行あらおそろしやとがもなきにいつこへもつれ行とすかり付てなき給ふ母上も今は思ひにみだれ刀をすてゝなき給ふかゝる所へ安もとは大わらわに成てかけ來り給ふみだい夢共わきまへす安もとに取つき有し次第をかたらせ給へはやすもとあつはれあやうき事共やそこつに若共をうしないなばこうくわいせんとかいあらしわれ病きなればとてやみ〳〵とうたれんや何とそ頼近とくまんと心かけぬれとおもてをしらねは其かいなくはむしや共を二三百も切ぬればやまふもはらりとさめたり此上はらくしやうゆめ〳〵有へからすめてたし〳〵とおくをさして入給ふあつはれなをゑしゆうしやと皆かんせぬ者こそなかりけれ

四たん目

其後都には比しも三月三日源家れい年の御かれいとてとうくわを折て水にいけかずのほうらいからくみ日ねもすの御酒ゑん御所中さゝめきわたりけれは君もゑいにくわし給ひ竹つな一かなてと御所まう有畏て候とほうらいの松の枝をおつ取かなでけりたへ也や千とせの松の松のすへかけてゆたかにめくる御よの春東西南北敵もなく弓はふくろにそのまゝにつるきははこをひらかずおさまる國こそめてたけれとおし返しかなでければ頼吉御きけんかきりなく御かわらけ取上させ給ふ所に公平こしのつるきをぬきすんと立てまふたりけるおもしろや弓はつるをはりつめ刀はさやに納めず敵もみ方も諸共に首切流すたきつ川あらめてたやとまいけれは君御けしきかわり一ざひつそと音もせず竹つなみていかに公平かゝる御悦のさしきにてかゝる事や候たしなみ給へと申ける金ひら聞て竹つな殿の御ゑんきんいたみ入候おゝくの御酒にたべゑいふ禮は御めん候へかしさりなからしいかは公けのもてあそび軍さはぶけのわざなれば今日の祝にも首をつみそれをさかなにたべんそ千秋らくにて候らんとゑせわらうていたりける君もあまりにわらわせ給へは竹つなもあきれはて一しほけうに入給ふ然る所にすわうの國の住人くもむら兵ごはや馬にてすくに御所にはせさんし扨もよりちかきやうつくしへ渡りにら山將けんをかたらい竹ちが城に取かけいとみたゝかい候をりふしやすもと病きにて候へは急きかせい仰付られ候へとうつたへける大將聞召ふしきや頼近はいまたこくやに有ものを見て參れ承候と田村の形部はしり行立かへりたしかにごくやに渡らせ給ふと申所へはんの侍はせ來り只今迄のよりちか卿俄に天句となりらうをやぶりこくうに上候と大いきついで申上る大將おゝろき給い此上は竹ちらく城おほつかなしへんしも出陣いそかんと金平は承り此度のけきしん某よしなき曲をまいしゆへに候へはよ人にはいかて手をおろさせ申べし某に仰付られ候へかし大將は聞召頼ちかはよのてきとはかわるへし頼吉むかはてあしかりなん御ふんは先陣有べしはや打立とすてに都を打立なんばの浦より舟にめ

しろかいをはやめおす程にめい所〳〵を打過てびんごの國に御舟よせ暫らくきうそくなされける其中に竹つな公ひら兩人は所のやうかい見んためにあなたこなた行所にみぎの方に大き成池有水の色すましく（本ノマヽ）けれはいかさまゆいしよ有けに覺ると里のおきなを近付ことの由を尋るにさん候是はいにしへしつとふかき女此いけに身をなけ一ねんのどくしやと也つゐにおつとを取ころし其後佛經のくとくにてしづまりしと聞しかど又此比はあれ出てしやいけとなつけやうすをしらぬ旅人あまた取れ候各もあやまちなき其さきにとく御のき候へとかたりすてゝにけさりぬ金平聞ていかに竹つなさやうに國をなみするもの品こそかわれ君のてきかくと聞てかへらんやたとい廿ひろの大しや也と何ほとの事有らんときしより下へ飛ておりやあいかに此いけの大じや人有に何とて出ぬそとよばゝれば俄に風吹水すさましく向の方より牛のことくの頭にて角ふりたてとんでかゝる公ひらさしつたりとむすとくむ竹つなは見るよりもはつといふてとひこみつかもこぶしもとをれ〳〵とさし通すよはれは公平以てひらいて打けれはまん中より二つに成てとひくるふをおさへて兩人とゝめをさし思いの外にほね折と公ひら大しやを打かたけちしほに成て立かへる二人のもののはたらきみなかんせぬ者こそなかりけれ

五たん目

其後つくしには日夜合戰やむ時なくあらてを入かへせめけれは城方の侍大方手おい打死す安もと今は是迄と家のこ郎等近付もはや兵らう矢たねつき口へき方なしこよい大將の陣へかけこまんいつれも打死と定むへし竹ちもつまこをかいし心安打死せんとゐたる所をすんと立爰に村澤庄司か一子花月丸ふりよにかんきを蒙りあいをへたてゐたりしが城ほつらくのよしを聞こはいかに都よりのかせい五三日の内には此所へ下着と聞何とそ此事城へしらせ申さんと陣所を忍ひゆく所を敵のせい是をみてすわ忍ひ者よと取ておさへ將けんにかくといふ行のぶ聞よりも是くつきやうの幸といかにくわしやわ殿竹ちか心さしをわすれ我にしたがい木戸口に立より都のかせいは去る

頃西風にあい皆そこのみくづとなり給ふ何を頼にまいしますそいてせうがいましませ此事しらせ申さんと是迄參候死での山にて待申さんとそらはら切て見せよ其忠せつに國をゑさすべし花月心の内におかしくは思へ共こは有かたき仰やな此上はともかくもとぞう兵をともない敵ぢんへいそぎ木どちかく也しかば大おん上て是は村澤花月丸われ御かんきを蒙れ共只今の忠せつに參り候心ていさつし給へ頼吉ははや九國の地まで御下向にて候そこつのせうかいましますなとたからかによはゝれはかくれもたる二人の者あつはれをのれしれものと打てかゝるをゆんてに切ふせ殘る一人と引組さしちかへふしにけるをしまぬ者はなかりけりゆきのぶ聞て腹を立扨はくわじやめにたばかられたりと大將の御前に參り都せいははやすわうのち迄參と承る某はみち迄敵を舟よりあけぬやうに仕るべしとみかたのせいを引わけぶぜんの國へいそぎける去程に頼吉公早ぶぜんのちになりしかばなぎさに舟をよせ〳〵とするに相待たりしつくしぜい取つめ引つめゐる程にもくぜんに大船二そうゐすくめられそこのみくづとなりにけり殘る舟すゝみかねて有ければ金平此由見るよりも大きにいかりいかなる矢なりと公平が物のぐはよもとをさしと舟そこより馬引出し海にはめゆらりとのりさかなみ立ておよかするす萬のてきは金平を見るよりも一どにくづれ引にけり其中ににら山兵衛同中つかさ兩人は取て返し公平とても同人間と打つてかゝるを馬よりとんでおりゆんでめてにかいつかみきんひらおなし人間も爰に至てかはれりと首ふつつとねぢ切にげ行敵を打詠くはん〳〵としてひかへける公平が有樣かんぜぬ者こそなかりけれ

六たん目

去程に頼吉公舟より上りこまをはやめ玉ふ所に敵むかふの方よりよせ來る公平見てけふのなぐさみ有けりととんで出しがこはいかにてきと見えしは竹ち也やがて打つれ御前にかしこまる頼吉きゝつかきりなくいかに竹ち御ぶん病きと聞しゆへ夜を日についで打たちしに今は心安し扨敵はいかに安もと承りさん候五日いせんに引取よりちかはちくせんのたゝらは

まにましますに由承候頼吉扨はたゝらはまに一所にあつまらん今はせくべきにあらず人馬のいきをやすめれはぬけかけたくきんせいと竹つなは下知をなしをの〳〵ぢんを取にけり其中に平井の清氏うすいの定春一所にあつまりいかに清氏此度のいくさは公平か先ちん也我らぬけかけならては思のまゝのいくさはならし清氏聞ていしくも思いよられたり我もさや本ノマヽうに存也さらは忍へやこなたへと敵ちんに成しかいこきかき所につつ立大音上て是は平井の清氏幷にうすいの定春此木どの一はんかけ我と思はんともからはけんさんとのゝしりけりするかの守國かと此よしを聞よりもにつくきくはじやばらすいさんやとかけちらさんとよる所を清氏以てひらき打けれはめてのそば腹くらつぼかけて切たりけり其ひまに定春敵七八きなぎふせいさや木戸をやぶらんと一どにこそはかけ入けりかゝる所に竹つなはゆんてのそはよりつつと出あら若殿はら某はぬけかけをせいせんためとくよりここにひかへし也両人のはたらきお家の寶はかた〳〵と悦所へ金平は大せい引ぐし來り此よしを見るよりもやあ竹つな人をはぬけかけきんせいとかしこかほにふるまいける事は誠の竹つなにてはあらしきつねたぬきにてましまさん竹つないや〳〵さやうのぎにあらずしさいは此両人に尋ねられよ金平聞てそれも同しあなの古きつねよし何にもせよ先陣は某が承て有足手まといにそこのけとすまんの中へわつて入東西南北打ひしぎ死人の山をつきにけり頼近にら山今は是迄と打てかゝるを公平さしつたりと將けんをまつかう二つにわりつけよりちかがむんすとくむ先年のことくほねはおらしとまつさかさまにけたをしたすけておけはわざわいとくひふつつとかきおとしきみの御目にかけければ大將ゑつきかぎりなくすなわちぢんをひき給ふよりよしの御ゑくわうすへはんじやうめてたしとみなかんせぬ者こそなかりけれ

右者和泉太夫正本をうつし令開板也

正徳六年丙申正月吉日

うろこがた屋三左衛門

八幡太郎誕生記

初段

扨も其後いつけひらけてよものはるのとかにめくるおくるまのときめきわたる御代の空風ゑだをならさす雨つちくれをうごかさす四かいの波かせしづかにておさまる國こそめでたけれ爰にせいわ天王のかうゐん源家四代のぶ將二位の大なごんせいゐ將ぐん源のより吉公どゝのけきしんを事ゆへなく御ついはつ有らくやうにしきの小路に御とのつくり有きんりをしゆこしたまひけり扨御ぢう代のかしんにはわたなへのつながちやくしみたのしゆりの太夫竹つな金時が一子坂田兵ごの守金平ほうせうのわすれかた見平井のきよはる定光かちやくなんうすいのげんば定かねすへたけか一子うらべのごんの少ゆふすへ宗かれらはすどの高名四かいにみちもろこし迄もかくれなき天下に五人のゆうし爰に又みうらの平太夫が一子わだ左衛門爲宗今年十六歳同はたけ山の重もとはつしが一なんちゝふの平太しげなり是もつもる年は十六歳かれらは東國の岩がん石の馬上になれいか成鬼神もあざむくほとの若者たりさてみたい所はくわさんの大なこんため吉卿の御そく女そめ殿のまへと申御方也過し卯月の比より御くわいたいの御心れいならすより吉御ゑつきあさからす諸神へ御悦ひの御ほうへんそくさいゑんめいなんしたん生と様々御きせいつくさるかくて七月八月はや過てあたる御月にも成しかは御さんじやうに三重入せたまふそめてたけれされはにやざい京の諸大名すはや天下の吉事是也と門前に市をなすより吉公は中のでいに御ざをすへさせたまへはおくより事をうつたへる使はたゝくしのはを引がごとし大治二年正月五日辰のこくより御さんしきりにしてよく日のみの刻迄いまだ御さんならされはしや僧神主てんやくのかみその家々のりきをはけみ爰をせんときもけすより吉きちやうまちかくよりたまひさていかに〳〵と御心をくたかせたまへはれいの五人の若者共はあつはれき万國のきわうをあさむく程の者を千き萬き敵にうけたり共せんじやうにてはか程にむねをさはがしものなむ日天日

天とこふしをにきりきはをかみしきりにもたゆる有
様はたとへいか成あくりやう死れうもいかてしやう
けをなすへきとよにたのもしくみへにけり中にも坂
田の金平大のこはねさし上源氏のうぢ神日比あゆみ
をはこびしはいつのためそ御かい力ましませさなき
ものならは神とはいわせ申まし存るむねこれ有なむ
八まん〳〵とはかみをなしてそ立たりける時に三位
のつほね御れんをさつとあけ御さんへいあん若君御
たん生とたからかによばゝりたまへは大將の御悦上
中下に至るまてめてたやとかんするこへしはしはな
りもしつまらすかねてよりの事なれは八まんの神ぬ
し左京の進國久ぎん錢九十九文くわの弓ゑも木の矢
則ちさん仕こしより御へいぬき出し東に向てはいれ
いし御心にはせいとくのしん入かはらせおはしませ
御じゆめうはとうほうさくか長命を御たもち有ぶゆ
ふのほまれは御せんそらいくわうへ御あやかりまし
ませと天ち四方を打はらい〳〵御なをは八まん大ほ
さつの御しんた〻にまかせ八まん太郎とかうし奉る
大將御ゑつきかぎりなくあふみの守かまくらのかけ
もとをめされない〳〵汝にあづけ置し若はいかにと
のたまへは畏候と御前を罷立くたんの若をいたかせ
て出にけりよゝ吉御らんしよくきけかた〻〳〵此おさ
なきものこそさしもちうせつふかゝりしわたみうら
の介としなりか一人のひめに出きしわすれがた見の
まご也尤一もんの中なれはみうらのわだ左衞門こそ
たのまんすれとも若年といひ又は思ふしさい有間坂
田兵ごのかみをゑほしおやに頼也と御さかつきをく
たさるれは金平御さかつきをしいたゝきかゝるめで
たき御ざしきにてぢたい申はおそれ有さらはけいや
く申さんと四尺八寸の岩切をぬき出し我は一生ふぼ
んのおのこなれはとらすべき子なし汝に是をゑさす
る身ふせうなれ其此金平にあやかれきよく高名仕れ
と其身のしやくめうくわいと丸となつけ口口せい人
の後八まん太郎の御家のかのけんとてなをせ上にふ
れたりしかまくらのこん五郎かけ正是也竹つなつく
つくみて是そ若宮の御しんかの初也いて〳〵しうけ
ん仕らんといたる所をずんと立てそまふたりけるめ
てたやな君は舟しんは水みつよく舟をうかむれは七
ッュゥ國土ゆたかに三重たみやすく人のくに迄日の
本のいせいをあをぐ大君のみかげのすへそ久し久し

きと二ばん迄おしかへし本の座敷になをりける諸人あつとかんしける大將御きげんかきりなく八まんが行すへをいわい心さしのうれしさよいて〳〵いわゐ申さんと御太刀馬くら其品々にしたがへ御もくろくにてくだされけるその時五人の者共めとめをきつと見合げに今まで御一人にてたのみすくなく存せしに若君御たん生の上は是ばんせいの御せいとく二代のしんかとあをかれん事のうれしさよ日本の事はもちろんたとへは天ちくしんたんより取かけ候共われわれかくて候上はなに事かあらん千りの外に切はらい國土ゆたかに仕らんとよにたのもしきその有様ま事に天下に五人のまれものやと諸人こそつてほめにけり大將聞召君としんとの心ね少もたがふては國家はたいらかならすい國ほんてうのまれものを五人迄もつたるより吉かくわほうの程のゆ〳〵しさよかまいて二世迄のきゐんぞと御さかつきおさまりけり八まん太郎の御いくはうちとせの松のすへながくついにけんしの大將とあふかれさせたまひけるせんしうばんせいめてたさよ共中〳〵申計はなかりけり

二段目

▲扨も八まん太郎御たん上の後世の中いよ〳〵しつかにてばんみんたのしむ所に一つのわざはひ出來すそのみなもとをたつぬるに過つる明永五年八月十七日に悪ぎやくに身をぼつせし朝日將ぐん橘のもろうぢか三なんうへもんのせう氏ますさんぬる比父もろうぢめつぼうの時はせんじやうをまぬがれひゐい山ひがし谷にゐんゆふざすをたのみせき寸の身をそかくしけるされは人にしのぶ身なれはかみ口口とにおし切よ川のきわうとかいめうし山ほつしのていにもてなしいかにもして一度父かほんもふたつせんとちうやまとろむひまもなく有時ひそかにざすに近付さてもくはらくの有様をつたへうけたまはり候によりて吉若をたん生し上下色めく有様を聞に付ても存念たへかたしとかたりけるざすくはんくはんと打うなつきのたまふことくせけんのていむねんしきりにいやましたりいつ迄かくてましまさんとめうほうだうにしきがはしかせぎ王をなをしたち花のいへのしるしくもにりやうの大はたをひゐいの山風にふきなびか

せたいしゆせんぎの大がねを三重ひゞきわたりて「つきにけりさんかもうごく計也ゐん〳〵たに〳〵のしゆとはたゝ事ならさるはやかねやと我も〳〵とはせあつまるその時ざすこゑたからかにさし上是にわたりたまふはあさひ將くんもろうぢの三なんうへもんのせううぢます公也さんぬる比よりぐそうか坊にまします事せう〳〵は存しのしゆとも有んされは源氏の方には三井寺をきくはんしよとし又立花一家の人々はとうざんの御きたう所とさだめ車の両わのことく成しにもろ氏公めつほうの後三井寺は日にましてはんゑいし我山はしかのふしどゝあれはつる一門のぢよくまゆをひそむる所也そも御山はでんきやう大師の御こんりうゑしんおしやうより此かた四十四代か其内にもつゐに三井寺の下てにたつといふ事なししかるに今初ておとろふる事めん〳〵もむねんには思はすや事に今程は天下に五人のまれもの四王天ひとりむしやせん年みのゝくに大はかの宿にてとくしゆを以ころされし定光すへ竹ほうせうが弟七年のついせんとてきのふていとを立大はかにくたる是天よりあたふるじせつならずや此時だいしゆいてはけみをなさゝらんやいそきより吉打ほろぼし此君を天下の將くんとあふぎひゑいさんのかれゆく木々に二度花さかせん事たいしゆのせんき今に有いかに〳〵とよはゝれは三千のしゆと一とにみな尤〳〵ととうし時もうつさす三千坊にふれをなしつかうそのせいしよする都になれはまつたいりの門〳〵をさしかため御門を□□□□□其後より吉の御やかたあやのかうしにおしよせ三重時のこゑをそ「上にけり御所の内には思ひよらさる事なれは上を下へとかへしけるされ共みうらのわだ左衛門ちゝふ平太たちひつさけ出かくせいひつ成よの中にかんくはをつこかすくせものぶけか公家かなのれ〳〵とよばゝりける時に大將こましづ〳〵とのり出しそも〳〵是はあさひ將くん立花のうちます也うつふんの次第はなのるに及はすめいはくたりすみやかにしやうがいをたつすへしと高せうにのゝしりけるわたちゝふ聞もあへす何たち花のうちますとやさすかふ將の子として一門のさいこをみすてあなたこなたとさまよひよし有かほにせんそをなのる見くるしさよされは四天王を初大かた

御内の侍は定光すへ竹ほうせうのついせんのためで
う州に打こへ殘る者はわつか也され共けんしのなら
ひにてかたきにうしろを見せすかくいふはみうらの
わだ左衞門爲宗ちゝぶの平太重なり兩人共につもる
年は十六歳そこを引なとたせいの中へわつて入てき
みかた入みたれ三重火はなをちらして「たゝかいけ
る然所によせてのぢんより七尺あまりのむしや二人
一ようにくんばいうちは手にもちゆらり〳〵と出け
るは人にかはつてみへにけり土やあいきやう是をみ
てあつはれてきやとはしりかゝつて打をうちわにて
ちやうとうけひつはつしてかいつかみきわのほり
へとう〳〵とすてにけり二ちんにつゞくざんまの七
郎仕りたりとかけよるを一人のむしや又うちわにて
うくると見へしかうしろへぬけたふさを取て引ふせ
おさへてくひをかき切けるより吉やくらの上より御
らんしやあみかたに人はなきかあれ打とめよとのた
まへは二人の者聞て何我々を打とめよとは事おかし
是そおとにきこへたるくはんおん坊せいし坊とて三
とう一の惡僧たり四天王が一どによつてくむ共とめ
ん事はかなふましまして其外の者共をはものゝかす
共思はぬ也とかうけんはいてひかへけるどいの孫六
此由を聞よりも、すいさん成ことはかなと打てかゝ
るをせいし坊はつしと合つけめくりにみつけん二つ
に打はりける大將しきりにいかりをなしるゝ五人の
中に一人是に有ならはきやつはらにか樣にくちはき
かせしものむねん〳〵としきつてもたへたまひける
ちゝふの平太聞よりもまさなの君の御定やな五人の
者なきとても重成是に候ととんて出る大將御らんし
汝は八まんか行すへかけおしく思ふ侍なれ共源氏の
ちしよく此度なれは力及はすずいふんはげめ畏り候
としつ〳〵とちかつくせいし坊きつと見てあつはれ
きりやうの若者をうしなはんむざんやともつてひら
いてうつをゆんてへとびきつさきさかりに打太刀に
せいし坊左右の高もゝ打はらはれのつけにかへすを
くひ中に打おとし源氏のてなみ見たるかとにつこと
わらい立にけりより吉御らんしあゝ仕たり平太扨も
仕りたり重成と御ゑつき中〳〵かきりなし跡にのこ
るくわんおんほうししのはがみをなしはしりかゝつ
てうつをしとゝうけはらへはしさりつくれはかゝみ
すきもあらせす切むすふされ共ちゝふわかむしやの

かなしさはたゞ一いきになくりつくるをくはんをん坊ゆんでへひらき打けれはくひ中に打おとされ十六歳を一ごとしてらくやうのちまたの土と成にけり大將ゑつきの色を引かへ御なみたはせきあへすわだ左衛門見るよりも今迄はちゝふ三うらとて兩はのことく成しにはや一方はかけにけりなむ三ほうと一もんしにくむくはんおんぼうは七尺ゆたかな大のほつし三うらは今年十六歳大木に小鳥のとゝまることくにてすてんとすれはすてられすなくれはひらきはぬれはむすふすまふのて大力のくはんおん坊もてあつかいたゞ一もみにひしきつけんとするをわきの下よりつつとぬけくひ水もたまらす打おとし三うらのわた左衛門年つもつて十六歳源氏のてなみたしかにみつらんとしつゝと引かへすより吉の御悦わだ左衛門かてからの程みなかんせぬものこそなかりけれ

三段目

▲其後にしきのこうぢの御やかたはひらばとはいひながら二ゑのほりまんゝとして水ふかく我そと思ふもの共爰をせんどゝふせけはよせてたせいといへ共せめあぐんてそひかへける大將うぢます此由をみるよりも四天王に一人むしやもはせ來らん先東の方のよせてうぢ橋を扣かためよこもる所のぐん勢とも我さきとはいほくせんときにつまりゝより相待おつふせゝ打ん事何のしさい有へきかやうくはんゐんいなば坊はうぢせたへかためよ畏て向ひける御所にあつまる下郎共此由をみるより上を下へかへしつつ共につれて落にけりより吉御らんしみたい所を近付今はよの中是迄也御身は女性の事成はおとしたく候へ共よもたすからんとはのたまふましと泪と共にのたまへばみたい聞召あつはれきよき仰かなはやとく水からがいしきよくぢがいをとげたまへと若君の御かほゝつくゝと御らんしてなみたはつらぬく玉あられより吉もしきりに御泪すゝめ共心よはくてかなはしと若君を引よせ御はかせをぬかせたまふ所へ（本ノマヽ）わた左衛門みかたのせいおばおいちらして歸りしが此ていをみてはつといふて走よりこはいかにあさましし大將は命まつたふしてめい將とは申へしいわんや君は四天王一人むしや天下に五人のまれ者を持せ

たまふ事成は御うんひらかせたまはんはしぜう也又若年成共爲宗が御供申上は千ぎ萬きの兵也と御頼もしく思召候へとむだい引立奉りむらさきのへとたとらるゝ寺にも成はふしきや寺中に人きれもみへすより吉扨は此度のいくさにおそれ落行て有らんとらい光の御びやうのまへにひさつきらいしたまひておわす所へかたきのせい跡をしたひ時のこへを上にけり爲宗此由みるよりも出物みせんとわつて入はらりはらりとなきたをすかゝる所へ流れ矢來つてめてのひざにはつしとたつ爲宗むねんとあたりをみ廻しとうのてきを打んとしけれ共ぎやうぶ更にかなはす太刀を取なをしあゝくちをしや今は是迄と云もあへぬにかたき東西よりせめ來るより吉公も御はかせぬかせたまいすでにあやうき所に御びやう所の内にこへ有てさかたわたなへと召るゝかと思へば三つのつか一どにわれ何も有しすかたにてらい光はもみゑぼしにはちまきし金のざいを持たまへはわたなへはくろさやまきの大たち天ぐのうちはを持公ときはゆんてに長刀つへに付あたりをにらんて立たりけりおつての者共是をみて五たいすくみてはたらかす立所にすくむも有あるいははんしはんせうにて四方にちつてうせにけりらい光のたまふはいかにより吉政道わたくしなけれ共ゆだんたいてきのごくいをはすれ五人の者共一度に其身をはなち他國につかわすあやまり也今又此なんにあへり扨かの氏ますわ大江山しゆ天とうしがしう心源氏の家をさまたげん爲二度出生したりおろそかにてはかのふましより吉聞たまひ扨は左樣に候なとのたまいもあへすくたけしつかに御すかたたゝ松かせのおと計何もゆめのことくにてもく前のすかた昔の事となつかしく東西くれてなげかるるまつせのふしき是なりとすへたのもしき共中〳〵申はかりはなかりけり

四段目

其後より吉公はうこんのはけみゆへあやうきがいをのかれましまず所へなんさんおせう來り是は〳〵と計也より吉有していをかたりたまへばなんざん聞とかふ申にことはなしく僧も御行へを尋申さんとは存すれ共らい光の御ひやうを打やふるべきとふうぶん

致候間ふかくしのひて有所にこよひふしきのつげ有て只今さんし候まづこなたへと人々をともないよきにしのばせ奉る是は扨置五人の人々はより吉打れたまふと聞よりも一時もはやくはせ上り氏ますめをみぢんになし御きやうやうにほうすべし君の御そばをはなれぬる事一世のふかく是也とおにをあざむく輩も東西しらずになきいたり又三うらわた左衛門ちゝぶの平太は若ねんなれ共ゆうさい有物成はいさめておとし申ても有やらん五人の内一人ていとへしのび事のくりぎをとつくと聞定君御しやうがいひつ定たらは其時こそせいのあんひをきはめん公平聞て然らは某上り申さん竹つな聞て御へんはぐはん來者をこらへぬしん成はかゝるをんひんのうかゝひにはそこつのあらき出へきと心元なく存る也金平聞て何竹つな御へんは某かそこつにてしそんしたる事のさんけいそ承んとてもか様にいわれ申上はそこつ付てにせひに上らんとろくぢにだうと大ひさくみ人のことはをはみゝにも更に聞入す只そらうそふいてそいたりける定かねすへ宗見るよりもこはいかにきん平わとのかふるまいつね〳〵もれいの事と思ひさしおけは時も時によるにか様のじせつ左様にわかまゝは見くるしゝきん平聞てあふ心へたり三せのきゑんの君にはなれ奉る又二世迄とかねたりしめん〳〵にはそこつ也わかまゝ成なんどゝみかきられ申金平がこうの程こそつたなけれといかるおもてになみたをうかめほうばいのなこり是迄そ若も命なからへは又こそめくりあふへしと都の方へはしり出るを取ておさへことはり也去ながら御ふんにもちがい有とつくとむねをしづめよと事の次第りをつくしてせいすれはきん平泪をながしけにあやまつたりま事にほうばいの中ならすはたれかはか程にいさむへき只何事も君のためかまへて心にかけたまふな生れ付たるふれいをは御めんなれや人々としゝのいかりをひるかへしたたしほ〳〵とぞ成にける竹つな泪をおしとゝめ此上はちり〳〵に成て物思はんより五人一所に上らん尤然へしと殘侍をはあなたこなたにしのはせ五人は三重一めがさにて「かほかくしよにすこ〳〵と立出てはやあふみぢにさしかゝりよを日について行程にらくやうに成しかはあなたこなたとうかこふ所におもてのかはをはいてすてちしほにそまるくひ二つわく

にのせてかつかせけいこあまた付源のより吉同八まん太郎此度の一せんにかけまけむらさきのにしのひ有しをさかし出し打取所のくひ也と三重一々したいに「ふれにけり五人の人々是をみて扨ははやうたれさせたまひけるそや御おもかけのみへさるは人にはちをさらさしとおもてのかはを切てすてさせたまひけん五人の内に一人御供申ならやみ〳〵とはうたせ申ましきに日比のちうかういたつらにたかため也しくちをしやとおの〳〵涙をなかしける其中にきん平おつる泪をおしとゝめふかく也方〳〵くへてもかへらぬ事共へんしもはやく都へ上りよには人もなき様におごりにおこるうちますたな心にかいつかみくひ中に引ぬきせめてのむねんさんせんととんて出るをわたなへたもとにすかり付尤也我〳〵五人思ひ定てかけ入はすせん萬ぎのせい成共打ちらさんもちろんたりしかしなからかのうちますはい國の長良にもおとらぬ程のはやわさゆふ力有てあんふかし千に一つもしそんしては千萬くへてもゑきなし君あいはてさせたまふ上はたれか一人殘らんや一めいをなけうつてかたきを打たん計事こそ第一也つく〳〵事をあんするにかのもろこしのけいかしんふやうかしくわうていを取子にせしけいりやくこの度のかたきにさうわうしたるてたて也五人か内二人か三人しやうかいし殘者共くひを持かたきの方へかうさんせはいか成じんへんぎとくの者と心をゆるさて有へきゆたんの所を引くみしやうふせんにやはかしそんす事有んとりをつくして申けるいつれもま事に此き然へし爰は人めもしけけれはかん所をもとめ事ないたんたつせんとむらさきのへといそきけるむらさきのに付しかは一めんにさをならへ竹つな申けるはそれしをさきにするはかたふしてやすく跡に殘て、おもん計をめくらすはやすき様にて成かたしたれの是のといふ共五のぢたいはてましきしよせんかしはうらにしくそなしとそは成木のはをてにてにもちあたりのさはにちかつきいつれにても木のはのしつみたるものさいこをさためんとみなてより一とになかせしに竹つなとすへ宗かなかせし木のはしつみける二人の者共みるよりもしぜうのさかいきはまつたりけりみな見たるかめん〳〵日比のなしみ是迄とさはの水をむすひあけ木のはのさかつきあいたかいにかはしかはすそあ

はれ也しこくうつれは竹つなすへ宗しはの上にむすとなをりいかにめん〳〵申迄はなけれ共ゆうきを上にあらはしかたきに色をさとらるゝな先年むしやしゆ行の時きやくそうかしめせしかんにんの二字ゆだんたいてきのごくいをとつくとしんいにおさめとりゑはすきをあらせすうてしての山にて相まつそかまいてかたきのくひをさけきたり二世のまふしうはらさせよかいしやく頼そ方〳〵心へたりと云まゝに金平定かね太刀引そはめうしろにまはり我々も今明日の内にかたきを打取おい付申さん思へは一やか二やのわかれ也しうしやくするはくちのいたりとはらいきつては申せ共日比ちきりしほうはいのなこりも今かかきりぞと太刀をかしこにからりとすてすかりついてそなきいたり二人の者見るよりもみれん也去とてはなけいてかいのあらはこそへんしもはやくてきを打君しゆらとうの御くるしみすくい奉らんこそ二世あんらくのきゑん也はやとく〳〵と申所へより吉しのひて御ひやうへまいられしか此由を御らんしこはいかに〳〵とのたまへはいつれも君を見まいらせあきれてさらにことはなしはるかに有て竹つな有し次第所存のていくわしく申上れはより吉聞召それはかたきめん〳〵を出さんための計事さるにてもかくあやうき所にてめくりあふ事三せのきゑんつきせぬゆへめてたしこなたへといほりをさしてそかへらるる此人々の心の内うれしき共中〳〵申計はなかりけり

五段目

▲其後それ君にしん有しんにちうある両わのとくきかんするゆへより吉公五人の輩にめくりあい互につもる御ものかたり今一入の其泪やるがたなふそみへにけるより吉なみたをおしとゝめたまひなに事も過しは夢さてかたきめつほうの計事いかゝあらんそも御門は其内の西におしこめ奉りきひしくけいこあいまもるいかゝしてりんかうはなし申さん五人の者共承そのたんは御心やすかれたとへはんしやくをたゝみあけへいとなしすせん萬きのしゆこ候共我〳〵一すちにさん上申上はやはかはしそんし候はんりんかう只今なし奉らんと申もあへす一とにはらりと御前

を立三重らくやうさしてそ「上りける是はさて置うちますは上みぬわしのことくにて其身は御てんに入かはりみかとをはほうをくにおしこめきひしくしゆこし奉るかゝる所へ五人のともからあき人のていに様をかへらうの御所にそ近付けるばんの者共是をみて爰は大事のろうの御所しらぬはい國のもの成かそこ立のけといかりける金平聞もあへすやあそのろうの御所にやう有おとたかし〳〵と一々にさしころしなんなくろうを打やふり君をうはい奉り竹つなかたに引かけ三重とぶかことくに「おちて行いほりになれはより吉待請たまひまつ君をはあたらしきでんにうつし奉りやあかた〳〵軍は事さうになるへしくんりよいかにとせんぎ有時に竹つなすゝみ出御でうのことくてき只今取かけ申へし爰を以あんするにまつかたきの方へわだんの使をたてさせたまひ然へう存候其しさいといつはてきさなたのちりやくにのせられわほくいたし候はゝねがふ所のさいわいいかにもわじゆつとしめしゆたんの所を打申さんまつたてきけいりやくをあい心へわだんいたし候はすはその使の者わうへんの内に近邊の諸侍をあいふれ城をかたくいたしいとみたゝかい申へしいづれにつけても三方の正理是なりとくんほうの其りにかなつてあいのふるより吉聞召あゝきめう成竹つなかなともかくもあいはからへくたんの使には御ふんきん然へし殘るめん〳〵はきへいのせいをもよふしいくさのやうい有へし承候と三重をの〳〵御まへを「立にけりされはにや竹つなきん平は思ひ〳〵のたち刀十文字によこたへらくやうに立出るかたきのやかたになれははんの者に近付みたの竹つな坂田のきん平源のより吉公の御使にきたると申せはんのもの共おとろき内にはしり入由をかくと申せはうぢます聞もあへすくにんなつの虫とんで火に入やつばらかなひつつゝみて打とれとざしきのそなへ相かまへそれこなたへとしやうしける兩人うちにつつと入さしきをきつと見まはせはまつ大將うちますは兵ごくさうの大たちまへさかりによこたへ其左には立花のいゑのりやう二ぢれうのゆうしと聞へたるむねとの諸侍うてをさすつてなみいたりさて竹つな左右のひさをおり左のてをつき畏はきん平めてのひざをおしたて心へや有けん右のてをつき左をくつろげなをりける竹つなしは

ししきだいし只今まいるだんへつぎに候はすより吉申され候はいつせんのはげまんためみかとをうばい奉りては候へ共つく〳〵あんし候にわづかのうちにすどのけきらんひまなくたみのくるしみさこそと存られたりそれ國土をたもつもばんみんをめくまんためなれはたかいのいきとをりをはしんせいをもつておさへほとんとわゆうせしめ昔にかはらす兩人車の兩わのごとくつらなり天下を守り申さんとの御使にて候と相のふる公平ひさ立なをし但軍が御望ならは御返事次第にそれへ參かう申さんとの仰おは何とておとされたか竹つなとはつたとにらんて申ける氏ます聞て是しんしつの使とは覺へずゆだんの所を打んとの今に初めぬ御へんかけいりやくおやにて候もろうぢこそゆいかいなく打れし共此氏ますは打るましたい城のあんないみん爲かそれ〳〵て引仕れきん平聞もあへす御すいりやく少もたかはすと前へしきりにすゝむ竹つなしのひに引とめこはおろか成仰かな都に有てもかたきのこもりたる城おはよく存るがゆうしのほういはんや是はらく中我らかすみかと致せし所成はまつたくあんない望なし重てさん上仕らんとしつ〳〵と立けるはけにゆゝしくそみへにけり公平みて手ににきつたるかたきそとかけいらんとする所を竹つな取て引とむる公平しきつていかりをなし坂たか家のならいにてもく前のかたきを打もらすほうはなしかけ出〳〵しけれ共竹つな更にはなさすむたひに引たて歸りける竹つなかさいちの程きん平がゆふ力ほめぬ者こそなかりけれ

六段目

其後わたなへは氏ますがやかたを出むらさきのへと歸りける道にて竹つな申樣いかに公平てきなからも氏ますわおうほうゆふもそなはつたる大將かな其りをいふにたんちの者成らば御ぶんにあれ程惡ごんせられても何となくざを立しは我がしんじつのてきはより吉公也扨殘る侍共こなたへことばをかけしは我我にいかりをふくみ内へ切て入せんたくみ也それをさとらすして御ふんはかけこまんとしたる間引たて歸りしか城にいか成て立か有けん若あやまつて御へん某打しにせば君は何とならせ申べしとしみ〳〵と

いさむれは公平大きにゑとくし打つれ寺に歸りける
かくてより吉の御前に畏くたんのていを申上るあい
もすかさすかたきのせい時のこへを上にける内にも
時のこへをうけ同あはせんとするを竹つなざいふり
立おしとめ東西のなりをしつめさせくんりよのてき
をしらるゝなよせては是をかつにのり一度にいらん
とするを氏ますいらつてせいする樣あな取てふかく
を取るなさすがめいよのしれ者共かこもつたる所成
はいか成心や有ぬらんとしはらくぢんを引にけり然
る所へむしや一きぬけ出みしほの庄司となのつて出
るわた左衞門是に有定て覺有し過つる比某ひざ口に
受とめたるなかれやの返進いたさんとねかふ折節と
くたんのなかさし引しほりさらはかへし申さんはな
つやさきにあやまたすはつしと立まろぶ所をかけよ
りくひ取てきつさきにつらぬき是そ三うらのわだ左
衞門五十四日持めくり今とうのてきを打取たりとし
つゝと引にけりしかるによせてのちんよりびぢよ
を花車にのせて引出しときにかの女あふきをひらき
一せいをそ上にけりみな人のいかりをあらそふあき
つ國ついにはなびく立花のあさい將ぐんあらめでた
やとまふたりけり定かねすへむね是をみてにつくき
女のちさんかなあの車をとらんとかけよるを車のか
けより引つめゝはなつ矢かひさ口かけてはつしと
たつ物ゝしやと二人のてきかいつかみくひねち切
女もくるま諸共にみちんのことく打くたき二人手に
てを引くんでたつしゝと引かへす公平は是をみて
む二む三に打ふするは只りんほうのかいこをおすに
ことならす此いきをいにきもをけしすてむち打てお
ちて行大將氏ます是をみて市川あら河はなきか畏て
かけ合竹つな一人むしや是に有と云よりはやく取て
ふせ首ねぢ切て立上る其ひまに氏ますわ公平とむん
すとくむさかたゑたりと引かけなげんとすればはね
かへし公平いかつておのれ鬼神とてもあまさんやと
ひしぎ付んとすれ共たゝばんじやくのことく也さし
もの公平をゆんでへかへし打たをす定かねすへむね
かけ付兩のかいなに取付おのれしゆ天とうじかしう
心也とらい光つげさせたまふにうたがいなし日本一
のきん平をかやうにくみふせん者は三千せかいに覺
なしとゑいやゝとねぢあふたり氏ます是を事共せ
す引よせひざにしいたりける竹つな一人むしやかけ

合たぶさを取て引かへせは公平やがておき上りちすじなはをかけにけりより吉御きげんかぎりなく四條かはらへ引出しくひ打をとしくんもんにさらしける天か太平おさまりけるせんしう萬せいの御よろこびめでたし共中〳〵申計はなかりけれ

藤屋新板

渡邊智略討

第一

わたなべちりやく打

さてもその〳〵ち、ひそかにういのさかひをあんするに、ふじんのじんをおこなひ、けいばつみちにあたらざるときんは、そのをんあたにむくう、こゝに源のよりよしこう、ちんせいの一らんをあんへいにつひばつあり、あまつさへ大將かわせのくらんどをいけどり、にんとくぐわん年、うるう十月廿八日にていとへかひぢんなされける、かくてざいきやうのしよさふらひ、のこらず御所にあひつめて、ふしやうのいくさの御物がたり、こまやかにちやうもんしつれは、さんだい有へきとむねちかを引たてさせ、きんりをさしてそ 三重あがらるゝたいりになれはつつしんてかしこまりいくさの次第ことこまやかにさうもん有、みかどゑいぶんまし〳〵て、二てうの大なごんをもつて、つぶさに仰らるゝまことに今にはしめぬ事ながら、けきらんのたいへい、ことにゑいかんあさからず、むねちかがことすしつとうつさす、ばつせらるべけれ共、おりふしこいんのこねんきにあひあたらせたまひ、らくちうらくぐわいのせつきやうきんだん有、七日の御ついせんすてにはや四日過、今三日たり此日數おわつておふぢを引わたし、五けいのつみにおこなふへしそれまてはゑんどうはん官にしゆごいたさせ、頼義は何事も打すていくさのつかれをはらされよ、ぐんちうのぢもくこくぐんの御さた、御とむらい過て有べきとのゑいりよたりと、事念頭にのへらるれば頼義、つつしんで承りよに有がたきちよくぢやうのだんかんるいそでをひたし、いさひ畏て候と則ゑんどう判官に、むねちかを相わたしやかたをさしてぞ歸らるゝされば にやねいじんてうにつかゆれは、必國をみだすとかや其頃のくわんはく、みちうのきやうは源家のはんゑいをない〳〵そはめにかけられしか、しんていにいか成かまへか有けん、れつさのくきやうと御心を合、しやく取なをしそもそもかわせのくらんどかしけいのおもむき、尤のかれがたきざいたりさりなから、むねちかはすが原のおとゝに五代のそん、かうけを出てとをからす、ことに

こいんへはすとのちうせつつかまつり、くわんい六しやうたにこへ今とても、くさの御かげにてさそふびんにおぼしめさるべし、せんぶまんふの御きやうの御ついせんより、かのものかしさいをしやめんあらんこそ、あらまほしくぞんし候、一ざのしよきやう何れも此おもむきにこさ候と其りはつめいにさうもん有、御門ゐいぶんまし〳〵て、うつたへのだん其りなきにあらね共てうてきとなりし物をたすけんほうをおかすあやまり、一つはふしやう頼義かおもはんする所も有、たゞしさいのせんぎ然べきとせんじ有、道ちか承はりよん所なきちよくちやうかへして申はおそれおほく候へ共それさうもくはうろのめぐみ、てんちをもつてふもとあをき、こくどのにんみんは君一じんの父母と頼あいだをもつてあたをつくせばあたつきず、あたをおんにてほうずればてきもみかたと成とかや、たゞとにかくに御じひとそばんみんをほへ奉る所に候と、頼義も大じ大ひの御せひとくをは何とてさみし申べきとかさね〳〵そうもん有、みかどしばらくごしあん有此うへはともかくも、しよきやうのせんぎにまかすべきとせんしもはてぬにくわんばくこう、それこなたへといましめたりしむねちかゝなわをとき 三重やがてるざいにさだまれり、此こと都にかくれなく頼義はやく聞召、四天わうをめされかやう〳〵のしだい也、さていかゝすべきとのたまへば四人の人〳〵てをうつて、あきれはてたるばかりなり中にもさかたのきん平、ひざをしなをしいまたそのむねちかめはみやこの内に候べしたとへはい所へおもむきたり共、日本六十四州をはなれ候まじ、きかいかうらいけいたんごく、おにすむしまのはてまでも、此きん平か命のあらんかぎりはいづくまでもぼつつめ、たな心にかいつかみくびひきぬき、ほうぎもしらぬなまくげばらに一々になげつけ、ほんまうをたつせんととんで出るを竹つなひきとめ、まづしばらくつく〳〵ことをあんずるに、是はくぎやうの中にきみをねたむ物あつてこなたへぶれひをふるまはせんとのはかりことおぼへたり、人事をはかるときんばこなたも斗にしかし、たゞきみは御びやうきとかうし我々を御つかひとして、きんりに罷いで一たんうらみのさうもんつかまつり候べし、それにてことのていあきらかにしれ申べしと、ぜ

ひをたゞして申上る、頼義聞召尤此ぎおもしろしさりながら、四人まではことおほし竹つな公平只二人まいられよ竹つな承りいかにきん平、れいのことときのあらぎを出さるゝにおゐては、此竹つなはあひしにはしんしやくなり、是にてよつく口をかためたまへきん平につこと笑ひ、このたびにおいてはすは八まんも御照覧あれ、何事にてもごぶん次第たるべし、もしそむくにおいては弓やのみやうかたち所にあたるべし、其だんは心易かれ、竹つな聞て近頃しうちやくせしめ候、いざゝらはこなたへと三重つれておまへに出にけり、二人なさだまるしやうぞくし、たいりをさしてあがり、とうの中将しげなりに近付、竹つなゑほしをかたむけしうにて候頼義は、ながぢんのつかれにやびやうきしきりにござ候間、さりながら我われをさしつかはされ候、承はればかわせのくらんどむねちかをはしたい御ゆうめんのよし、らくちうにおいてそのかくれ候はす、聞召ても御らんせよ何れもぎやくしんはおなしことゝは申ながら、かのむねちかはわたくしのしゆくひふかき物にて候、しさいといつは頼義すどのてうてきすみやかにばつせしも、是しそつのはたらきつよきがゆへ、しかるにこのたひのたゝかひに、ことに一きとうせんとたのみしひらいのひとりむしや、むねちかゞはかりことにのせられて、どくしゆのがいにあひ候、さるによつて我我をはしめ源家の侍、きやつをいかにもしていけながらとらんと、ほねをくだき心をもみ望のまゝにめし取、ていとにてひとりむしやがきやうやうに、心のまゝにつかまつらんとはる〳〵と引上りたるむねちかを、ごしやめんとは何事ぞ、そのだんゑいりよのおもむきつぶさに承りたく候、よく〳〵さうもんあつてくだされ候へと申、しげなり聞たまひいやそれははやくぎやうのせんぎ、きはまつておんるにしよせられたり、りんげんなあせのごとし出て二度歸らす、さうもんあつてかなふまし只是より歸られよ、公平聞もあへずちよくせんの返答をいながら申は、扨はごぶんかしよいならんと近付んとすれば、はつといふてにげ入かくのだんのしさいなりいかゝあらんと、色をちがへて申さるればとうざのくげでん上人物のひまよりさしのぞき、誠にさきにみゆるはわたなべのつなか一子三田のたけつな、次成は聞及

たる公平ぞいか成事かいでこんと、うへを下へとかへしけるみかどもおどろかせたまひ、くわんばく公にせんじ有、何とぞしてまづしづめてかへされよ、道ちかちよくせんかうむり下くちに御出有、いかになんぢら賴義のうらみのだんしごくせり、みかども今更ごこうくわいなされ共、こときはまつたるを又物くるはしくそくざに引かへられん事もいかゝなれば、せひなくはい所へつかはさるゝなり、折をもつて望のごとくたまはらんとのせんしなりとのたまひすてゝ入たまふ、公平みて扨は此仁かわざと覺へたりと、とんでかゝるを竹つな取ておさへごへんな物にくるふか、あれこそもつたいなくもくわんみちちかきやうにろうせきはかなふまじ、まづ靜まれとせいすれば、なにとくわんばくのかうべには打物はたゝざるか、おそらくはきん中をじやうやのやみとなさん物をと、む二む三にかけこむを竹つななをもいだきとめ、さいせんのけいやくをわすれられたるかとせいしければ、公平聞ていや此うへはしんはつもみやうばつもあらばあれと、かけ出〳〵しけれ共竹つなしきつていさめ、むたひに引立歸りける、公平が心の内むねん共中〳〵申斗はなかりけれ

第二

賴義東國おち井ろしにてさん門敵對申事

扨も其後竹つな公平は大りより歸り、大將の御前に畏くだんのおもむきを申上る、賴義聞召れあゝよはまつせに及たり、かくまつり事たがふはとうしの公家大臣、れいぎをわすれひきよくをかまへるゆへなり、月きよからずとすれ共はくうんかげをうほふとは、今此御代にしられたりつら〳〵ういをあんずるに、人間は五十年わつか成世中にふとう成、共からにまじはりをむすはんはさりとては人ならじ、しよせんうきよにすめはこそ聞まじきことをも聞け、すつるにやすきみやうもん、いさせきの東に引こもろさんの心いにしへをたのしまん、竹つな承はり御ぢう尤にて候、誠にすどのてうてきをはつし、こつかたいらかにばんみんをあんらくに置ことは、おそらくは源家のぶかうたり、然に左樣の忠をは思召出されず、やゝもすればねいじんのざんげんを聞召入られ、ふぎをふるまはせたまふるいりよの程こそな

さけなけれ、一先御身をしりぞけさせ給へ、よのなり行ていを御らんせんにはしかし、人〳〵いかにと申せば、公平聞てあはれそれがしが所存にまかせば、きん中にみだれ入世をへつらへるやつばらを一〳〵にくびねぢ切、其後東國へも西國へも下り度存れ共、とかく申さはれいの事と人々にさみせられんはひつちやう、只めん〳〵のせんき次第とふきやうがほにぞ申ける、頼義聞召何事もじせつたり、此度はおんびんにはかるべしかまいてあらきのさた有べからずと、扨しよ侍を召れ何れも定めて一所にと思ふへけれ共、たせいにてはせけんのひはんも有なん、まついつくにも立しのび心さしつきせづは、跡よりしたいたまへやと皆御いとまたまはり、扨御供には四天王三うら竹ちをはしめとして、わかての侍卅餘人たびのしやうぞく被成よにしほれたるてうけんめし、ごんずわらすしめはき、すこ〳〵と御出有みだい若君御こしにのせ奉り、御供の人々も有しすかたを引かへて物さひしけ成其有様、よそのみるめも哀成らく中の上下是をみて我も〳〵とはしり出、四天王かまへに畏こはなさけなの御事や、君都を御出有ならば又過する年の如く、悪人共かあつまりていとはやみとなりたみをふびんと思召れは、然べき様に仰上られ御じひあつてたまはれと、聲を上けてそなけきける、公平聞てあれ聞たまへ人〳〵、かくいけの物迄も物のだうりをしるぞかし、にくき兵りの公家ばらかすとのをんをわすれ、こかけにふしながらえだを折悪人共、御ゆるされ有ならは一人も今生にはおかし物、御ゆるしなきこそ口をしと引合よりゑばしを取出し、是は日本大りにて兵ごの守にふせられし時、ちやくしたるゑほしなりきんりの奉公とまるうへは、御をんかうむりても詮なしと二つ三つに引さき、只今よりそれかしは本の坂田のくわいとに成なりかまへて兵ごの守とよひたまふな、ゑゝ口をしや我身ながらも、我まゝにならぬ事こそむねんやとはがみをなしてそ立たりけり、竹つな是をみてしつまりたまへ公平、やあらく中のらうにやく男女しとう心はふびんなれ共、力及ぬじせつなりたかひのゑんくちせずは、君二度きらくの事も有へしかへすかへすも名殘こそおしけれと、たもとをかほに押あつれはすせんのらうにやく一どにこゑもおしますなき

にけり、扨しも有べきことならねはおの〳〵ていとを出たまふ、おにをあさむく人〳〵もきせんの物かなけきをみて、おの〳〵そでをしほらるゝかくてはやあふにさしかゝりおちさせたまふ所に、りうけのふもとをみわたせはは(本ノマヽ)た二卅なかれ、み山おろしになひかせてせいのぶんりやうはしらね共、とうまちくいのことく打かこんで引かへける、竹つなみるよりも一ぢんにすゝみ出、是は源の頼義公しさいあつて東國へ御下向ましますが、何物なればひろうのふるまひ仕る、ろしをさつてけいこ仕れと大をんあけて申ける、其時ゑんゆうきす、高き所に立上りやあかくいふは竹つなか、ろしをされとはすいさんなり何のたつときことあつて頼義かけいこをせん、是こそさんもんの大しゆなり、しよくかんのともからまつすくにとをさんことみかとの御とがめいかゝとおもひ、れいきのためにむかひたり過しむらさきののおくれをは今日こそへんれいいたさんといひもあへず三重ときのこゑをそ上けにける、公平此由聞よりもゑゝそゝろにはらたつてあひてのほしき折から、天のあたへのうれしさよいかにや〳〵たいしゆ共、よしなきあくいをおこしこゝろものうへになわかゝりしは、きのふきやうのこと成にはやくもわすれてありけるな、此たびはおのれら一人もあんをんにはかへすまし、かまいて引なほつしはらと、たせいの中へわつて入おつつまくつつ三重ひばなをちらしてたたかひける、たせいにふせいの事なれば源氏の侍心はたけくいさめ共、あなたこなたにて打しにし四天王三うら竹ちしうじう七きになりたまふ、然所に大しゆの中よりも色〳〵によろうたるむしや四人ゑ物ゑ物をひつさけ出、そも〳〵ちんとうへたぐひまれにすゝみ出たる我〳〵を、其名いかにと思ふらんまづ一はんにはわにの兵へが三なんあくら三郎しけもと年つもつて廿三、二ぢんはひゑいさん東だにてつきのせんじほう、三はんはかたゝの源八むねより、四ばんはよかはのりつしくわいしゆん、以上四人一きとうぜんとゑらみいたされたりなひ〳〵承はり及たる、四天王にけんざんとこへ〳〵にのゝしりけり、公平聞もあへずおう所望ならば御めにかゝらんとかけ出るを、三うら竹ちすかり付わか物共か候にさりとてはおとなけなし、かれらをは我〳〵承らすと立

ふさかつて望ける、殘る三人聞よりも所望のだんおもしろしまつ公平はこなたへと、四人共にたかき所にかけあかりかけ引をけんふつする、時にわた左衞門しつ〳〵と立出三うらのためむね爰に有、かたきのてなみをみぬさきに一きたうせんとかうけんはく人々の、太刀さきちつとひけんいたさんとよばゝりける、あくら三郎聞よりも四天王こそ望なれ三うらことときのしやくてき、あひてにはふそくなれ共、せんじやうの習ひあふもあはぬも敵と聞ばおもしろし只今がさいごかとくわん年いたせ三うらと、はしりかゝつてはつしときるをてうと合、二打三打うけなかし太刀をひらめて打ふせ、むないたをかいつかみじやく年なれ共けんしの侍はいくさはかやうにてなれたり、おのれくわん年いたせやとはるかのたにぞすてにける、てつきのせんじ是をみてつかまつたりわか物と、はしりかゝつてむんずとくむためむねもとより、ゑたるみちなれはうけみになりて敵をとめ、かけつはついつかたきにせいをつくさせ、りき身のあしをはたとければ、あふきをたをすごとくにて、まつさかさまにどうどふすを、やかてうへにのりかゝりくびふつつとかき切そば成こほくのえだにかけ、はるはときにおうするむめさくら今はふゆもなかはなればちしほにそまるほつしのくび、是はなそと御らん候へと四天王にしきだいす、ごぢんにつづく竹ちさらはやすもと一太刀つかまつらん、そこのきたまへと入かはる、かたゝの源八きつとみて長刀取のべうつてかゝるひらりととひ、こむてなくてひらくて、ひきよくをつくしつかへ共やすもと物のかす共せす、うけつひらいつかけこくり、すきをうかかひゆんでへぬけもつてひらいて打けれは、かたさきほろ付よだれかね一つになつてたをれける、跡にひかへしくわいしゆん、あつはれきやつもくせ物やと、よつひきひやうとはなつを、さしつたりとつつと入てひつさけ、みかたのぢんへ取てなけ、おきんとするをくひちうに打おとし、にやわぬそうのうてたてやとむくろにこしをかけ、太刀おしぬくひひかへけるつゞくくんせいみるよりもかれらがふるまひもにんげんとはおもはれず、まして四天王かくるならば一人もたすかる物はあるまじき、もつたひなし〳〵とわれさきにとにげゆくをおいうちに二卅きなぎふ

せ、いくさはもはやこれ迄と、てに手をくんてひつかへす人〳〵いそぎはしりより、さてもかけたりわかもの共、たちのだしやうくみうちのやう、なぎなたのうけひらき、やちがへすかさぬてとりのしな、ほとんとおどろき入たり、たとひ我〳〵しゝたり共めんめんかくてあるなとは、御家はつゞくべしとにもかくにもげんしの御代、まつだいまてめでたかるべきしるしにや、兩人ごときのまれものかまたいでありゆみやのみやうがあんをんなれと、あをぎたて〳〵いさみよろこふ四天わうがていたらく、このものゝいくさのていあつはれけんしのみたからやと、さてほめぬものこそなかりけれ

第三

よりよしみだい御さん并大ゆきの事

さてもそのゝち頼義こうは、さしもあひまちたりしたいしゆ共を御所存のまゝにかけちらし、いづれもいくさのつかれをはらさるゝ所へ、くわんばくくげ大じんのはからひとして、おいてのせい七千よきあとをもとめておつかけ 三重時のこゑをぞあけにける、きん平此由みるよりも是はほくめんのともがらなまくけばらか家のことおぼへたり、さてもしとなきぢんのそなへかな、一やもいさせ候まじ何れも是にてけんぶつあれと、あたりをきつとみ渡せはあをめ成大せきあり、ゑいといふてひつさげ、なにとはしらずてきのかたへゆう〳〵とあゆみより、おいてのせい是をみてすはれいの公平よ、ひとへにきじんのふるまひなりとせんぢんこぢん 三重一どにくずれてにげにけるあさましかりける有様なり、竹つなみてなまぬるき公平や、なにとて打とめたまはぬとおつかけんとするをおしとめ、あるびやうもなし竹つなうでにもたらぬやつばらをさりとてはせんなし、うちとめんとおもはゝ太刀もかたなも入べからず、たた今の石にて一どに五十も百も打ふせんなやすけれ共、只一てうのいかりにおほくのものをうしなひ、さいしに物をおもはせんかふびんさに、わざとひかへ候かまへてあらぎを出さるゝなとぞ申ける、さてもさてもよにはすむべき物にて有、公平の物のあはれをくわんねんし、竹つなをあらきなりとせいごんをうくる事こそきたいなれ、ともかくもかんげんには

もるましき、かまひてそのしんていをわすれたまふなと打わらひてひかへける、時にさだかげすへむね二人かそばに立より、扨も只今のおいてのもの共がていたらくはなにといへること共ぞや、あれほどてきかこばくばはる〳〵と都より是まではきたりけん、あはれそつとてこはきかたきもがなかゝるひろみにおつちらし、おもひのまゝにきりみたしたびのつかれをはらさん物をと、すきし日のいくさ物かたりしいたし、さもくわん〳〵たるそのありさま、よの中のおちうとにはことかはりてぞみへにける、扨都より御こしかきしもものもきのふのいくさに打れつつ、御こしかくべきものもなければ三重おの〳〵しゆごしてたちにける、さきをきん平かきければ跡はすへむねかきにけり、よりよしつく〳〵御らんじてさしも天下にかくれなく、まつだいまでもきろくにとまらん四天王か、かやうのわざに身をやつす、ちうていのほとのとかうことばにのべられず、たゝとにもかくにもくはほうつたなき、頼義か身のうへこそはむねんなれと、ふかくなげかせたまひける、おにをあざむく人〳〵もしばしなみだにむせひけり、

げにやうきよと聞時はうきにはもれぬあみのての、せんせのがうの身につもりきず、なにひかるゝおぐるまのめくるしくれをいといつゝみのにかゝれはかさのはの露、かゝりたるをいと打はらひうら〳〵さと〳〵のしづのわざ、くはいろかへるまつかせのおとはあらしのよそにのみ聞やいせをのあま共か、みるめもしをのたぐひ迄、取あつめたる思ひ草たのしみつきてかなしみのるいくはのともゝおはり成、いとだのはらにぞ付給ふ、いたはしやな北の御方はただならざる御身ながら、都を出させたまひしに日數つもりてうきかなや、ごさんの御心ち付にけり人々おどろき御こしをかきすへ、ひと村松の本にやとし奉りわか君をはさだかげいだき參らせ、さんみのつほねはみだい所をかいしやく申さるゝ、頼義御そば近くよりたまひ心は何とましますぞ、一年あの八まんをたんじやう有し其時は、七るゐ八るゐのきちやうをひき、天下のふしははせあつまりしよししよさんのほうへい、きせんしゆそくをかへせしに、けふはいつしか引かへてあらしをふせくたよりもなく、のばらのさん所のあさましさよ、かねてよりかく有へき

としりながら、心よはくもとゝめかね都をはなれ思ふ所へは行つかず、ちううのたびにうきしづむ、うき身の程こそはかなけれ、今思ひ出せはれいぎの道にはそむく共、うらみのやを一やいてていとの内にてしやうがいをきはめん物扱もむねんの身の行へといかれる面に泪をうかめ、こしかたをかきくどかせたまひけれは六人のともがらも御しんていを相はかり、何れも袖をぞしぼりけり、かくて其日もくれ行は御心もよは〳〵と次第によはらせたまへは、君を初め何れも是は〳〵ときもをけす、やゝあつてかすか成御聲にて、水をと仰出さるれば竹つな畏候と水かめをおつ取出、いづくか水のなかれぞとみきはの方にさしかゝり、やう〳〵さはに尋付かめに水たんぶとくみもつて有し所に歸り是水奉らんと申せば、頼義聞召こなたへと御口へ水そゝかんとしたまへは、なむ三ほうもはやことされはてたまへは頼義夢共わきまへず、是は〳〵となげかるゝ竹つな是をみて、あつはれよはき御有様かな人〳〵は何とて御力をばそへざるぞ、そこのきたまへとそ御そばに參り、みだいの御まくらを上け、それ花は春さき秋みのる人間の生死の道もかくのごとし、御心かいなきゆへ御たんしやう有へき御子をむなしくさんつにかへしたまはんはかなさよこぜん様と大聲上てよははれはほのかに御いき出にけり、竹つな力をそへそれ御かほに水そゝげよ、佛神を頼はかやうの時そそれめんめんきせんを懸られよ何も心へたりと思ひ〳〵にしゆく願す、中にも坂田の公平は大のこはねを指上（本ノマヽ）とうしあつたの大明神は、れいけんあらた成と聞て有しん力をそへたまへごさんへいあんならぬ物ならは、弓や神もせうらんあれしやとうの内へみたれ入明神にしきにたいめんせしめ其うつふんをはさんすべし、かみ〳〵たらは神力をそへられ候へなむ明神明神と、太刀のつかをおしにぎりはかみをなしていのりける誠にしんりよのちかいにや、四天王に餘に聲をそへられよはき御心を取なをし次第に御力付にけり竹つなすはや、りうんをするたるはいのれ〳〵と身をもみて、しきりに御力付けれはござん有こそめでたけれ、みはのつほねはいたき上きぬにおしまき奉る、御せいじんの後□□次第よしむねとなのらせたまひしは此君の御事なり、頼義一のいきをほつ

とつきたまひ扨もくはほうつたなき此若や、世がよの時で有ならばらく中の上下門前に市をなし、いにうかつかうせん物をまつおりかくる此さん所、のへの草木の音ならてことといかはす物もなし、空のけしきをみ渡すに、一てうゆきか雨かふりおちん哀諸神のちかいにて、せめてしのゝめあけ行迄、ゆき雨とめてたまはれと、らくるい袖にうるをして御きせいあるこそ哀なれ、すてにはや、あかつき方に成ぬれは次第によかんはけしくて、ゆきふりくるそうらめしきせんほうつきて人〳〵みたい所と二人の若君を御こしの内に入、頼義公と三はのつぼねをは、松のこかげにすへ申、六人の人〳〵はきたるいしやうをぬぎ、こしの四方にかけまはし風吹方のかきとなし、いたはり申ぞたへももなき、情なや次第にゆきのつよくして打はらう手も力もよはりはて、たけき心もくれ〳〵と猛ゝさすが天下に名をへたる物共が、思もよらぬ雪にあひふゞきにしなん口をしさよ、あけ方も今少にて御さ候御心をみたしたまふな我君様、心みたすなみださしとたがいに力を合つゝ、明行夜半を待いたり此人〳〵の心の内、哀其中〳〵申

斗はなかりけれ

第四

かうせんていとを責芽みかと都を落給ふ事

さてもそのゝち、しのゝめやう〳〵あけ行は、人々御こしをしゆごし、あつたの宮に付給ふ則さたかげを御つかひにて、大くしかたちへ事の次第を仰つかはされるれば、みつはる大きに驚き取物もとり敢ず、おもてに出こなたへ〳〵とれんちうにしやうじ、よきにもてなし奉る、みたい所には御くすりなどを奉り、あたゝめ申にしたかひて、御身のかんきとけにけり何れもあるしかなさけゆへ、此程のりよはくのうさを打わすれ 三重かくて日数をおくらるゝ、是は扨置爰に又、にんわう廿六せふれつわうのばつそん、ひろたの入道がうせんといふもの有、其そうきやうほん人にかはり、せいおくまでたかくして、雙のまなこは百れんのかゝみに、ちをそゝぎたる如くにて、しんいにましやうしんのさしはさみ、ちうやたゝあくぎやくを事とする、さればすきぬるきうし三年、とよのあかりのせつゑのよ、其頃のぞくみやうは、ひ

ろたのちうなごんしげなりといつし時、櫻町の大納言を禁裏において暗討にし、其外、北面のともから卅四にんきりふせ、すせんのかこみをやぶつてぬけせけんをしのぶ身なれば、そのまゝさまをかへらうどう五人あひともなひ、いつみの國ときいの國のさかひ成おにの中山に引こもる、さるによつて都にてさいしけんそくこと〳〵く召取、六條川原にてはく中にせつかひ有、入道此由つたへ聞我身のひきをはいわずして、さすが中納言たるへき物のさいしを、はくちうにてくびを打事や有、せひにおいて此いこんさんぜん物をと、時をまちていたりしが頼義東國へぼつらくを聞よりも、五人のらうどうを近付、すは日頃のいきどうりはるべき、天のじせつ今に有、げんけのともがらてうかをうらみ引こもるうへは、天下に心にくき物はなしいさやぎへいを上、年頃のうつぶんをさんぜんいかに〳〵と申せは、にたるをもつてあつまる、もういぶとうのらうとう共尤にて御ざ候、たとひ頼義都に有とても我〳〵にむかつてごかくのいくさいたさん物四天王はしめけんじのさぶらいにはおそらくはおぼへず、とくより打て出させたまへとたひ〳〵すゝめ申せしに、今迄の御ゑんいんむねんのいたり是なりはやとく〳〵といさむれば、がうせんなのめによろこびいそひでよう仕れ、畏て候とて何れもおまへを立にけり、ことかはりたるしやうぞくなり、まづ大將ひろだの入道はいとひおとしのだう丸、おらいかわのよみひ五れうかさねてざつくとき、四尺八寸の大刀一尺五寸のひるまきしたるだいのけん、あをぢのにしきのはつほうづきんのうへに、しらあやたゝんではちまきし、きんのぐんばひうちわをもつたりけりつゞく五人のらうどうには、ゑまの源内むねひろ、あきがわ藤太みつより、まつしま平藏さだよし、いきりのちうだたねうぢ、なかぎり源六國かど、何れもかみなかばよりするどにきり、一やうにくろかねたうの腹巻、心〳〵のぐそく、かなさいぼうをてんで、に持、あひもおとらぬ其有さま、りつき六下たう、しゆつせうするかとすさまじし、にんとく元年十一月廿一日に、おにの中山を打立ろしにてたておう物共をは、ぢうわうむげにほつちらし 三重すくに都へせめのぼる、此事ていとにかくれなく、やましろのむしや所、とがはのせうじちかひ

で六千よきの大將たまはり、ふせきとめんとすみよし天わうしにぢんを取にけり、時もうつさすかうせんも天王寺に付けるが、てきぢんをみわたせは、きつかうみつかしはまつのこかけにひるがへる、扨は山城のくわんへいたるべしあなあさましのてきのぶんさいや、そつとおひきてみんと打わを上げてまねきける、さきてのせいはみるよりもすはかたきよとせんちん七百よきまつしぐろにかゝるを、まん中へわつていり立さまよこさま八方ぎり 三重くわるんのまひてぞきりみたすさきがけのわか物、四五百きかけたをす、つゝくくわんぐんきもをけし、たゝ人間にてはなきそとておめきさけんでにげ行、らうどう共是をみてあまさしとおつかくるを、かうせんおしとめやあてきをもらすにくんほう有、此物共うをうさをうににげのぼり、たゝ今のいくさのていをかたるなら、くわんらいこなたのてなみはおぼへたり、ひとへにおにゝむかふ心ちして我さきにとにけさるべし、むやうのいくさせんよりも、心しづかに都入せんこなたへと、天王寺にぢんを取 三重しばし時をそうつしけりあんのことく打手の大將、とがはのせうじちかひで、大わらはにてにげのぼり、すぐにきんりにあがり、ちかひで此年まですどのたゝかひに相なれ候か、あれ程はげしきてきはかつて覺へ候はず、いかつちなとのおちかゝるやうにこそござ候へ、ふせぎのくわんぐん皆打れ候、もはやていとちかく迄せめよせ申べし、いつくへもりんかう御いそぎ有べしと、申すてゝぞ立にけり、是を聞てくけ大じん、しゆこのふしこはいかにとあはてふためきおちて行、もつたいなくもみかどの御かいしやく申物もあらされば、ふじゑの中將たゝ一人、りうの御馬にのせ奉り、ひかしをさしてりんかう成 三重うきよのはてぞかなしけれあひもすかさす、かうせんはていとに打入てに立物のあらされば、いそぎ大りにあかりけり、され共人一人もあらさればこんたいのくわとうひのきよけん、其外のみたからきうてんにさんらんす、かうせんみてあゝよくもあわてたりと、あなたこなたと打まはり、百くわんれいぎをのべし、しゝひでんのゆかのうへにむんずとざし、取おとされたる御かむりをそばに置、くわん〳〵たる有さまは、ひとへに天子のふるまひなり、さるほにさしもげんけの人〳〵は、いと脱スルカ

きとをりふかゝりし、川瀬藏人つの國ながらにるざいせられいたりしが、はいしよのしゆこと打つれ一ばんにまいりかうさんす、其外のしよ大名、れいをたゞしてあがり、ゑぼしをたれてとんしゆす、がうせんみてしんひやう〳〵もはや日本は此入道か國なり、もしさまたげと成べきは、とうごくにろうきよする、源の頼義なりかれをもやかて打取、天下いつとうせしめん、めてたし〳〵と上下しゆゑんにおよびける、すへのゑいぐわはしらねとも、がうせんがおごりのほどあつはれぶたうのあく人やと、扨にくまぬものこそなかりけり

第五

頼義上洛并むねちかろしにて行合打るゝ事

扨もそのゝちみかどはおはりの國あつたの宮に付たまふ、是こそおもふ所なれはづかしながら頼義をこそたのまんと、ふぢゑの中將をもつて、大ぐしがたちへことの次第をせんじ有ければ、よりよし承りこはそもゆめかとはしりいでさせたまひ、ぎよくたいの御有さまをおがみ奉り、こぼるゝ泪はたまをつらぬくごとくなり、やゝあつてまづこなたへと內に御とも被成ける、みかどござにうつらせたまひ、いかに頼義なんぢに二たびみゆる事、ぎよくたひちゝむばかりなれ共、くひても歸らぬむかしのゆめなれば、こしよしゝてごこくめつし、はんれいかへんしうにさをさして、ゑつわうたちまちほろひしも、今ちんが身にしられたり、なにとちよくぢやう有べきやうもなし、ともかくもたみばんぜいのせいとくはしんかむねに有べしと、此たびのけきらんの次第こまやかにせんじ有、きよいをしぼらせたまひけり、頼義つつしんで承り申ても〳〵以前の御うらみはつくしかたく候へ共、もつたひなくも十ぜん天子はる〳〵是迄りんかう有、さばかりせんし有をとかうのちよくとう、天のせうらんおそれおほく存候、過にし事はよし、おつ付くわらくへくわんかうなし奉らんと、よきにかしづき奉る、其後かしん共をぞ召れける、八々御まへに畏、たゝ今りんげんのおもむき物ごしにて承はり、我〳〵もらくるい仕て候、此うへはばんしをふりすてぎやくとたいじの御けいりやく尤に候と、皆一とうに申上る、君聞召扨はかた〳〵かしんて

いも、頼義がほつする所にいつちせり、ぎやくとさつそくたいぢせしめん間、いそぎくわいぶんまはし、東國せいをもよふせられよ、竹つな承り御ぢやう御尤にて候へ共、ぐんせいをおして上洛ましまさば、てきもうぢせたのはしを引、いとみたゝかひ申べし然はたみのなけき、こくどのわづらひもつての外に候はん、おそれながらそれがしがぐあんには、たゝ此まゝしのびて御のぼりまし〳〵て、事のていをうかがわせたまひせひぐん兵御用ならは、ていとにて御はたをあげさせたまふべし、五きないのぐんせいは皆御みかたへぞさん上つかまつらん、はる〳〵くわんとうせいを召ぐせられんな、ろしのなんぎはんみんのつかれよしなき所にこざ候、たゞし人〳〵いかにとざしきをきつとみわたせば、坂田のきん平すゝみ出おう〳〵申さるゝごとく、なにのぐんせいか入候はん又みへたる事もなきさきに、君の御上洛もよしなし、まづそれがし一人罷上り事のらくいを承り、其うへのこせんぎ然べうぞんし候と一すぢに申あくれは、頼義聞召あひのぶるだんは尤いちり是有、然共ごぶん一人のほせんは千里ののべに、とらをはなつとやらんにて、かたきはおほしせいする物はなし、いか成くせ事かしいたさん、其うへ思ふしさい有間皆いつしよにのほらんと、其後大ぐしをめされみかどをよく〳〵しゆごつかまつれと、くはしく仰おかれしう〳〵七人あつたの宮を跡にみて物うかりけるいとたのはら、つらきはふりしゆきかなと、過にしふぐきをおもひいて今も身にしむはかりなり、かくてうら〳〵さと〳〵打過あふみの國にも入たまふ、然所にうんつきゆみの、かわせのくらんどむねちか、一ばんにかう人に出ておんしやうに、いふきばんばしかのさとかれ是一萬ちやう、かうせんがあんとのくだし文いたゝき、入ぶのためと心ざしさゝめきわたりて奉りける、頼義御らんじとかく物にはじせつ有、あれみよかた〳〵かはがみをなせしかはせめが、きもゆゝしげ成ふせいかな、いつまでのろいぐわならんかまひてあはてゝことをしそんすな、とつくとしづまれとのたまふこゑの下よりも、公平いらつてつつとぬけ、馬のうへより引をとせば、つきたる物はわつといひてにげにける、やかて有し所にさげ來り、君の御めにかくる、大將御らんしあらめつら

しやかわせどの、ごへんゆへに我〳〵はかやうのすかたとなりはてたり、ふきのゑいくわはうかめるくもとつたへたまひしせいじんのごいづくにかたがはん、それ〳〵とのたまへば四天王四方よりもひつはり、さしも天下に五人のまれ物と五つのゆびのことくあひならひたる其内をどくしてよくもころして有、おのれを今までこんしやうに置事、くさのかけ成一人むしや我々をさこそゆひかいなしとおもふべし、只今たむくるぞひとりむしやよつくうけ取たまへと、いひもあへず一刀つゝと思へ共六人にてきるほとに、身はずた〳〵になりにけり、され共たかきもいやしきも、なすましきはよこしま、つくれるあくはついにのがるゝ所なし、はやくもむくへる天めいやとにくまぬ物こそなかりけれ、よを日についでいそがせたまへはほどもなく、はやらくやうにつきたまふ、しのびやかにかものかんぬしさだひさがたちに入たまへば、さたひさしばしあきれて、こはおもひよらざる御有さまかな、さてもていとへは大あく人かへ入かはりこらいよりもてなかりし、じりやうしやりやうをめしあげ、たみはくせいのさいほうをむさばり取、とがなき物も我身の心にあはざれば、せひもをいわせずくびうち、四方のくち〳〵にくびかけやむひまもなく、萬民たゞ君の御事をのみちうや申出し、ひとへにせきしのちゝはゝを、しとうことくになげきかなしみ候なり、だいじ大ひの御じひは此たひに候と泪をながし、ふた時ばかりぞくどきける、よりよし聞召おう〳〵かのかうせんは、きゝおよびたるあく人なり、しよ人のなげきさぞならん、さてかれがぶゆうのほどはせけんのさたいかゝあるぞ、さたひさうけたまはり、大將がうせんがゆうりきは、いにしへのたんばの國のしゆてんどうじがいきをひも、是ほどこそありつらめとばんみんこぞつて恐れ候、ならびに五人のらうどう共は、いばらき、いしくま、いわどうじ、あらわう、どうわう、ふたたびしゆつしやういたしたるやうに申候、其うへ此度都入のていたらく、すまんぎをたゝ六人にてうちちらし、そくざにしゆごにそなはる事、なか〳〵ぼん人のわざにあらずと、せけんにもさたつかまつり、其身もこくどにはべちに人もなきやうに、かうまんいたすよし承りおよひ候と、ことこまやかにぞかたりける、きん平、き

きもあへずしやつめらが、うてにもたらぬこくはしやばらをてごめにし、ちしんにかうまんいたす共それはあひてによりての事ならん、さやうの事きくに付ても口口しし、かつやまくるやいでちからをためさんと、ずんとたつていつるを竹つな取ておさへ、すわまたきん平の例のあらきのおこりたり、すぎにしころそれがしをあらぎなりとかんげんありしは、はやくもわすれたまふな、竹つなもごぶんのいさめをはうけたまはりぬ、いま又それがしか申事をもいかでそむきたまわん、しばし〳〵と申せばし〳〵ふんじんのごとく、いきをひか〳〵りしきん平も、しごくのたうりにことばなくもとのざしきになをりけり、ときに竹つなひざたてなほしかんぬしの物かたりのだん、あざむくにことやすし、かたきさやうにけつきにいさむこそさいわいなれ、このうへはゑらみうちにつかまつらん、そのてだてといつは我々六人、きじんのかたちに出たち、らくちうのもの共を五十も百もつかみひしかば、くたんのものともおのれがふゆうをかうまんしせひ共へんげをうちとめんと、やいんにならばかならずみやこをめぐるべし、ときにつぢ〳〵にまちうけ、ひつくみ〳〵うたんことなにのしさいか候べきと、そのりにかなひてあひのへければ、なみいたる人〳〵竹つなをみあけみおろしうちながめわとのはにんげんとはおもはれず、八まん大ほさつこぶんがしんていにのりうつりたまひ、かゝるきみやうをしんたくあるとおほへたり、扨もたくみしちりやくやと、したをまひてぞかんしける、頼義御ゑつき限りなくいまにはじめぬ竹つなのけいりやく、かんずるにことばなし扨そのしやうそくはいかに、かんぬしうけたまはりそれこそとうしやにいか程もござ候と、みくらをひらきそのしな〳〵を取いだすきん平みてくろかねのたいのほこのありけるを、是こそゑ物とおつとりさらばそれがしまつそれのさきがけいたさんと、とんで出るを竹つな又おしとめ、こはそもなにことぞそのていにて、らくちうにかけいでば、けしやうのものとはいわて、さかたのきん平とこそいふべけれ、しからはやけいのきじのかしらをかくし、おをいだすにひとしし、さしもそれがしかむねをくたきしちぼうもいたつらこと〳〵なりなん、すこしはひかへたまへやあ日もくれ行に、何

れもしやうそくいそかれよとふゆうをうちにおしかくし、さもあふやう成其ありさま、さゝなみやはまのまさごはつくる共竹つながくんりよの程はよもつきし、日本ぶさうのあんじややと、皆かんせぬ者こそなかりけれ、

第六

がうぜんらうどう四天王に打るゝ并みかとくわんかう

さる程にかくてその日もくれければ、六人の人〳〵何れもきよに出たち、てつしやうらんはをひつさげ、めうじんのはいでんにひがしにむかつてあひならぶ、げにせいたかふしてほねあらく、ちから心ねまことのおに共いつべし、時に竹つな申やう、とかく六人一所にありてはせんあらじ、二人三人つゝてぐみをしてほう〳〵にちり、らくちうをさはがせん、かまひてめん〳〵とかもなき民共の命を取事有べからず、たゝゆきあふ物をはそつとつかみ、此はいでんにこめおき、ことらつきよせは一どにはなちやらん、皆其心へあるべし、きん平聞てさやうにことやわらかならんな、おにとはいわで、人とこそいふべけれ、らくちうのたみ共てきにしたかふやつはらなればもつてはおなしかたきなり、よじんなしらす此きん平にゆきあふ物こそふうんよと、につことわらつていたりけり、竹つな聞てごへん一人はなちやるならは、いか成くせことをかしださん。さらはてわけをいたさん、まづきん平には竹つなともなひ申さん、きん平聞て一とならず二どならず、竹つなのかんけんにそれがしもほうどもてあつかうたり、たま〳〵おにゝなりたるおもひでに、心のまゝにふるまはでこぶんと打つれんなたからの山に入ながら、てを空しくするにひとし、あらもつたひなの事共やと、こくうにこそかけ出る竹つなみてやあきん平〳〵と、よべ共〳〵かなわず、いざさらば我〳〵もむかはんたれにても、公平にゆきあひなばかまひてはなれず付そひたまへ、申まではなけれ共てきをあな取、おもはぬふかくを取たまふな、いとま申てめん〳〵と四方にわかれ、行あふ物をさいわいと、あなたこなたにてばひ取三重みやうじんのやしろにこそはこめにける、おやをとらるゝ物も有、一人もちたる子にわかれ上下

なげきさけびける、あまりやるかたなきまゝに、らうにやくなん女かうせんがやかたに相つめ、そせうのよしを申せは、がうぜん聞もあへず家のこらうどう引ぐし、きろく所に出にけり、時にとしよりたる物共すゝみ出、まつらくちうのへんげの次第、をくはしくあひのべ先年も、うぢのはしひめと申へんげ、わうじやうにきよらいいたし、ばんみんのなやませしを、らいくわうのみうち成、わたなべのつな一でうもどりはしにて打とめたまひ、それよりらくちうのろうせきひしととまり申候、今もつておなし御事にて候へは、何れにてもみうちのしうに仰付られ、へんげ御たいじあつてたまはれと、皆一とうに打たへける、かうせん聞ておう〳〵なげくたんふびんなり、らいくわがうわたなべ程の物をは、それかしは五人も十人も是有、たとひまけいしゆらわうがへんげ來る共なにかはもつてあますべき、こよひの内に必まへんたいししてゑさせん、あんど仕つて罷たてとく〳〵と申せは、きせん一どに有がたしとよろこびいさんでかへりける、其後しんか共を近付、とかく事のひてはふゆう、うすきににたりなにとぞしてこよひの内にへんげたいぢせしめん、ずいぶんはげめかた〳〵我も共に打いでんと、五人のらうどうならひに、くにわう、はちわう、竹わうとて大ぢからのわらは三人しう〳〵九人思ひ〳〵にしやうぞくし、二人三人つつあひ別れ三重かなたこなたとうかゝひける、されはにや三人のわらはゝ、一やうにくろかはおどしのよろひをき、おもひ〳〵の太刀をはき五でうのはしを心ざし、ゆらり〳〵とあゆみ行、此所にはみうら竹ちひかへしか此よしをみるよりも、すはてきこそきたりたれと、たいまつばつとふりたつれば、こたいくはゑんにかゝやき、ひとへにきゝよのことくなり、三人の物きつとみて、くだんのくせ物爰に有と、てんでに太刀をぬき持打てかゝれは、二人もつてじやう取なをし三重ひじゆつを盡してきりみだす、しばしはしやうれつみへざりしに、國わうあまりにいらつてつつと入るを、みうらひつはつし打ければかうべみぢんにくだけける、はちわう是をみて走りかゝつて打を、ぬきうちにはらひければ、こしのつがひを打はなされ二つになつてうせにけりあとにつゝく竹わう、太刀をまつかうにあてむ二むさにかけ入るを、

二人共に、ひらりとはづしさうのてを取、りやうはうへひくほとに、さゆうのうてわきつぼよりもひつはづし、さうへくわつとのけは、たちすくんでぞしにたりけり、二人な打取所のくびこしにはさみ、まつことはしめよしとなをしもかたきをまちいたり、爰にまたがうぜんがいつきとうぜんとたのみたる、まつしま平藏さだとしいきりのちうたたねうぢ、兩人共に物のぐこぐそくさしかため、しらえのなきなたひきつえにし、とうじのらしやうもんを心さし、あはれへんげにあわせてたべと、しんちうにきせいしゆんでめてにまなこをくばつてあゆみゆく、爰にさかたのきん平たゝ一人有けるが、是をみていしだんにあがりてつじやうをつえにつき、ふんぢかつてたつたりけり、二人の物共みるよりも、我等がねがひ是なりと、まつしまなぎなた取のべうつてかゝるを、きん平てつぢやうふり上げおがみ打にうちければ、らつくわのごとくちりにけり、あとにつゝくいきり、きこうるめいじんにてかひくゝつてうしろへぬけ、よはごしをひきつめさそくにかけてはねたをし、こしのかたなをぬかんとするを、きん平兩のうでをてうどとめ、めてのあしをさしこみゑいといふてはねかへす、いきりもかうのもの又はねかへさんと、ゆんでへさしこみめてへはね、ちからをつくしてもむ所へ、なかぎり源六、是もらしやうもへんと來りしか、二人はけむこゑを聞はしりよつてたそととへは、いぎりへんげにくみしかれけり、折合たすけよ心へたりと、きん平がかしらをつかんでくびをかゝんとする所へ、めてのうでをむずと取、まへゝかつはとひきたをし、二人がうへゑどうどのり、おにもおにゝよるべし、我こそしらずや、みなもとの、よりよしの御内成、さかたのきん平といふおになり、じたいげんじのならひにて、おのれらがやう成あく人をは、かやうのてだてをめくらすなり、さいごのねんぶつ仕れとくひ一々にうちおとし、もはや此口へはてき來るましさらば所をかへてみんとて、かみきやうさしてぞはせにけり、さるほどに大將ひろたのにうだう一二のしんかと聞へける、ゑまの源内むねひろ、あき川藤太みつより、しう〳〵三人二でう口のかうじ〳〵を、あなたこなたとめぐり一でうもとりばしへといでにけり、此はしにはうすいのさだかねいたりしか、あはや

とおもひたいまつふりあげみればさきにすゝむは、何とはしらずにわうをつくりそんしたるやう成物はつほうつきんをひきかうであとにつゞくは七尺ゆたかなむしやなり、扨はきやつこそ大將よ、こよひのしあわせは我におゐてとゞめたりと、ぼうひつそばめつつと出れば三人共に心へたりとうち物ぬひてわたりあひ、爰をせんとゝたゝかひける。すさましかりけるあらそひなり 何かばんみんにすくるゝくせ物を、三人てきにうけぬれは、さし物のさたかねもひたいにあせをながしける、しかる所へ竹つなすへむねそのへんのまはりしか、太刀のをとに聞はしりよつてみればさだかねなり、二人ははつといふて一所になり、二人のらうどうゆんでめてへ打ふする、そのひまにさたかね入道と引くみいぬいにかつはとおしふせ、たかてこてにいましめける、かくてしのゝめあけ行ば、のこる三人もはせあつまりたがひのはたらきをあひかたり、本望をはたつしたりと、がうせんをひつたて君の御めにかけける、よりよし御ゑつきかぎりなく、それいとまとらせよ承り候と、くび水もたまらず打おとし扨取あつめたるらうにやくをは、皆々ゆるし、みかとは都へくはんかうなり、天下たいへいにおさまりけるすへはんじやうめでたし共申〳〵申はかりはなかりけれ

寛文五乙巳年二月吉日

八文字屋　八左衛門板

やはぎ合戦

初段

四天王國々の探題に居る

さてもその〳〵ち人かいのしきさうたのしみつきてかなしみありつらきとみるもゆめのゆめた〳〵さためのなきはうき世なりこ〳〵にげんけの人々ほくろくだうのらんげきを事ゆへなくうちしづめきうぢ二年七月十八日にていとへかいぢんあり則二人のいけ取かくひをはねわうぢをわたし世の中せいひつにおさまりたみのとざしもしつかなりある時大將の御まへに人人をめされいかにかた〳〵つく〳〵とばんもつをくはんするにさんぬるめうゐいのころよりも此かたらんげきこくどにたへやらずばんみんやすきにきよする事なし是只よりよし一人かちしよくなりせんする所あらかしめにとうざいなんほくにたんたいをすへせいたうかたく取おこなは〳〵國々ゆたか成へし何も此ぎいかゝと上いありければきん平は〳〵かりなくすすみ出こは御でう共おほへすやすとのらんげきを一とも御あやまちなくふみしづめさせたまふが御ちしよくとはいかにそやには鳥は八こゑをつけいぬはをのれかもんのまもる是それ〳〵のやくめたりまつそのことく侍はいくさをするがやくめにて御さ候はすやいくたひも〳〵せんでうにのそまんこそぶしのほんいなるへけれこくどにいくさたへなはうきよのなくさみなにか候はんいとよしなきかねての御けいりやくよろしからざる御せんきとさしきつて申上る時に竹つなす〳〵み出尤公平の一げん一りなきにはあらね共それらんしけ〳〵れはたみのつかれくるしむたみのくるしみはふ將の御ちしよくまつたいまでのきろくのおもてはつかしく只御てうのことくたんだいを仰付らせ然べうそんし候としいてごん上申上れば公平御いにそむく事なれはいろをちかへしてうつむいていたりけりよりよし聞召兩人のけんぎよいつれをわきていひかたしさうほう共に尤其りそなはれり併此度は思立ぬる事なれはすゆるぎでうせしむへし先九州のだんだいには竹ち源太安元北國へは三浦わださへもんためむね四國へは平井の清氏なんかいだうへはうすいのさたはる東國へはうらへのすへ宗とあ

いきはまりをの〳〵御前を罷立 三重ういをこそはかまへける是はさて置其比源のよりちかきやうと申はけんしのちやくそんらいくわうの御しそくなりされは其生れつき人にすくれせいあくまでたかく大力のはやわざひとへにはんくわい長良もおもてをそはめはちぬへしされはようちのむかしよりあくきやくに身をゆたねしんきれいちしむの五つのみちにはつれ萬みんのそんぼうし天下のわつらいとなりしかはらいくはう深くかんとう有ひたちの國かしまのうらにはいる有ついに御ふけう許されずらいくわう程なく御たかひのきさみ天下をは御しやていよりのふ公ゆつらせたまひそれより今よりよし公迄二代あいつつきねんすすでに卅よ年か間よを秋風のよそにみなしいにしへのあくきやくを引かへ一すぢにむせうしんに心を入れんのふこじとほうめうしかのもろこしのをんほつしかろさんにひきこもりしよりなをふかくおこないすましておはせしにくはんらいうまれつきたかくせはおこるにやすきならいにや有時ていせんのおみなめしかせにしたかいちるをみてはさきてそ花ちるものをわれは一じの春もなくかくむもれ木と成ぬる事思ひまはせばむねんなりさすか家のちやくなんとしてそらにけんいをうはゝれ年月とおくりし事我身なからもさりとてはしよそんの外の事共哉よし何事もちせつとうらい我今年な五十一はしめて天下をしるべき年のまはり今ならめへんしもきうに思ひたゝんとたちまちしんいのいかりたちそばに有ける大木をちうよりふつつとねちきり是よりちかが天下をとるへき打物也とふりかたげ佛前みちんに打くだき 三重それよりつくばをさしてそいそかるゝされはにや其の比みたの源太ひろつなと申はわたなべのつなか弟ふんふ二道のゆうしなりしかせん年らい光御たかいの時あとめの時あとめのろんに付あにわたなへはよりのぶ公へ付ひろつなはよりちかと一身の心一すちにうきよをよそにみなしひたちの國つくばのふともに引こもりいたりしか有時三人の子共をちか付らい光大江山のしゆてんとうしたいぢのはなしに付わとのらもしることくない〳〵よりちか卿に御むほんのすゝむるといへ共さらに御せういんましまさすされはとていたつらに花なきさとのうもれきとくちはてんもくちをしいさやなんちら一すち

に思ひ立一めいをど中にすて末代迄かうめいをとゝめんいかに〳〵といくさせんきとり〳〵なり然所によりちかつくばになれはいづくかひろつなかいへならんとかなたこなたとうかゞう所にしはおりむすふくさのいほによにもたかきこゑにてはなす扨はと思ひゑしやくもなくずんととおり上さにむすとさしたまへはひろつなおとろきこは存よらさる御出や此間はとかくまぎれ御みまい申事も候はず何とやらん御けしきつねとはかはりてみへさせたまひ候か扨いかなる御所存や出來申候れんのふ聞たまひされはこそとよ内々御ふんかすゝめしか共みかとのちよつかん父のふけうをかふむる事一かたならぬいんくはなり何かうきよにかゝはらんとふつうに思ひ切年月せういんせさりしが未あくゑんつきさるにや俄にかうくはさかんにてくたんのあらまし思ひ立て來りたりばんし御へんにまかするなりひろつな聞てよにうれしげ打うなつきま事に某すねんすゝめ候へ共ついに御せういんもなくきみもはやなかばすきさせたまふ又それかしもかくらう人と罷成候事ひとつのざんねん是にすぎすされはらい光御たかいの刻某かあににて候わたなへのつなに君の御事をさま〳〵に申しか共ほうせう公時さた光すへ竹四人のものにとうしんいたし御ゆいこんはそむかれすとついによりのふをふ將にそなへし事今においてさんねんはるゝひまもなくひろつな一門ほうはいとふはになりかくかんきよのすまい仕るもしかしなから君の御ゆへしかるをもつて其御心入もなく打過させたまふ事さりとては御なさけなし年のよるに付ても子共ともをいたつらに其なも人にしらせすくちはてさせん事あまりむねんにそんしせめてわたくしのきやくしん成共おこしこくとを心のまゝに切みたしおや子四人せんせうにまくらをならべんとそんじかふだる所に思召たゝせたまふ事いまたひろつながぶうんなつきす候承れば某かおいにて候みたの竹つなをとうたいふそうのくんしやとかしつき公時か一子さかたの公平と申小くはしやを大力のゆうしと諸人きじんのことくに申ならはし候さつするにしやつはらかぶんさい父共かわかさかりにいかてかおよひ申べき年よりたる共某かさいおつ取子共ともをはなち合てはたらかせんにたれかてにたつものの御さるへき其上君のふゆうにかた

をならへんものおそらくは日本にはそんせす五十日か百日の内には天下いつとうに切したかへゑいくはのまゆをひらかせたまはん事なんのしさいか候らんそれ〳〵御かはらけと君にもいわうて三ごんすゝめ奉我身も三はいさらりとうけなかしはんとうかいとうのふれ状をしたゝめさせいかにかた〳〵此度こそりやうかうじりやうのあらそひ天下わけめのいくさ成へしといさみにいさむひろつなかしんてい上下はんみをしなへんみなかんせぬ物こそなかりけり

二段目

おだはらかつせん

其後かくて國々へくわいふんしきりにまわりけれはうつれはかはるよのならい此年月よりよし公のかうをんにてさいしをはこくみ身をたてしともからもよりちかの時のふゆうにやおそれけん又ふかきよしみをやしたいけんひたちしもおさあはかつさいつさかみそうしてはんとうのはちへいしむさしの七とうをはしめとして我も〳〵とはせあつまりむねとの大名三百よ人したかふくんせい十萬よききらほしのことくくんのなしでしかうする大將よりちかはあかちのにしきのひたゝれにむらさきいとのよろひしらあやたゝんではちまきしこかねつくりのたちあしをなかにむすんでさげざいおつ取しつ〳〵とあゆみ出くんせいにしきたいあれはみたの源太ひろつなはくんはいうちはてにもちゆんでの方にひかへけるま事にきときとう〳〵たる有様よりよしの天下をうはゝんものは此人成へしと諸人いよ〳〵あふきける時にひろつなひさたてなをし承ればすへ竹かちやくしうらへのすへむねとう國のおさへとして此程するかの國へげちやくするとふうぶん仕候まついくさかみのかと出にきやつめをふみつぶさせたまひ然るへう存候とくとくとすゝむればよりちか聞たまひ尤其きよろしかるへしぢこくうつさすうつたてと大てからめて手わけをなし諸くんせいをいんそつし 三重するかをさしてそいそきける是は扨置うらへのすへ宗はとうかい道のたんだいとしてすんしうふちうに下向いたせしか此事を聞よりもいへの子郎等を近付我ゝにのおさへとしてくたる身かけつくきやくしんに城へ取かけられてはきつたい迄のかうなんさきんするときは人

をせいするにり有といふくんほう此時にあひかなへりさかよせにをしよすへしいそいでよういいたせやとつかう其せい二萬よきすんしうをうつ立ひたちの國へとおしよするたかいによする其せいそうしうおた原にてゆきあいすはや是よと兩方そなへを立なをし三重時こへをそ上にける時のこゑもしつまれはみたのひろつなこふしつく〳〵のり出しあふみふんはりつつ立上りそも〳〵是にひかへさせたまふは事もおろかやせいわ天王の五代のかういんせつつの守らい光の御ちやくし山城守源のよりちか公にて御ざ有本ノマヽ末其けめうしつめうはしらね共方々もさためて一けの御けにんなるべしれいきを思ははゆつるをはつしかうさんせよかくいふはわたなへとうのはつそんみたの源太ひろつななり某は本ノマヽちしゆんちよくにあいまもり惣領を惣領にあふぎ奉らんためわが身をすてす年いなかゑひすとなりはて今は春くさともへ出るしんきもしらぬやつはらあにほこさきにおよはんいそきたいさん仕れいかにいかにとよばゝりけるすへ宗此由聞よりも何みたのひろつな殿とやげに承れは事なる御いちげんみゝにとゝまり候なり尤も申さるゝことくよりちか公は源氏のちやくそん我らがしゆくんよりよし公はぢなんのなかれたれしらぬものあらんたゝし惣領にて有ながらちなんに天下のふ將とられたまふ事はよろしからざる事共なのりて我といちをゑるあつはれむやうのかうげんかなまつたらい光の御ゆいこんにまかせいへにつたはるしんかみなよりのふ公へつく所に御ふん一人けんじん立なるふせいにてうきよをよそにみなす事けんにはあらでくにんなり忝くもわが君はちよくめいをかふむりせい本ノマヽる大將ぐんそかしあしくしてはちあたかなとかく物ないわせそけちらせとさいしきつてふりたつればかたきもそなへをたてなをし兩ちん共に入みたれおつつまくつつ火花をちらしてたゝかいけるたつのこくの初よりひつしのこくのおはり迄十一度のかけ合に人馬共につかれはつさうほうよりものみのむしや馬のりまはしたかいゝくさは明日とやくそくしあひ引にさつと引よりちかはいつしきてそはにちんをとれはすへむねはいたはしゆもとにそなへをたてたかいに今日のいくさ物かたりし何もつかれをあいのふるこゝにみたのひろつなかちやくなん平太兵へひろ

のりは力人にすぐれ打物取てのめいしんその身ぶゆうにかうまんし打こみのいくさ一ゑんにこのますひめもすのたゝかいをよそみていたりしかてきみ方引をみてさいわいと悦そつとぬけ出ひつかへしすせんの中へ只一人ゆらり〳〵とあゆみゆきま事に一きと（本ノマヽ）うせんのゆうしたくひまれにそみへにけりてきいんに成しかは高所につつ立上り是はわたなへのつなか弟みたの源太ひろつなかちやくし平太兵へひろのりなり元來生れ付たるくせとしてみかたにつゝくせいの有かきらいにて今日もすかどのかけ合をよそにみて候ひしかあまり人のいくさするかうらやましさに御つかれをもそんせすさんかういたし候心あらん共からはけせういくさにかけいてひろのりかたちさきちつと心みたまへとかうせうによはゝりけるいのちそなへにはあふみけうし山本かしはさ二千よきはや川口のきみはにさうてひかへしか此由を聞よ（本ノマヽ）りもあつはれたるかうげんかなあますなと云まゝに一どにはつとかゝるをすへむねさいふりあけておしとめかたきけせういくさとこのむにひろうのふるまひせんなししんぜうに仕れ承り候とひつ中の守國ひてもよきにをいのはらまきにいか物つくりまつこうにさしかさし物かすならぬ備中の守是に有あまり心ことはのすゝしきにけんざんとうつてかゝるをひろのりつと入よこて切に弱腰を二つにとうとなきすへけるちやくしかつ王此よしをみるよりもわかれの涙そでにみち小太刀かいこみかけよるをすへ宗それせいせよとゝめさせ心さしは尤なれ共おことはふんさいにいかておよはんしはし〳〵とけちすれはかつ王聞てこはなさけなの事共や人のしめいはきはまり有まさしくおやのかたきをよそにのみみてややみなんかつらきの神もせうらんまし〳〵せこゝをはなせとひかへしものを切はらひ一もんにかゝるをめてへひらきあへなくもくひ水もたまらす打をとしむさん成かな此わかは七歳よりひゑい山にてあひそたち三千ほう第一のちご今年な十六歳さかりの春をいたつらにほうしやくふしんのひろのりがてにかゝり一しのらつくはとちりにけり大將をはしめとして何もひたんのなみたせきあへずめのと子のみかけのせんし是をみて二人の主のかたきたとい今生にてはしそんする共一ねんのあつきともなり二世の間にはもう

ねんのさんせんなむ八まん大ほさつとはかみをなしてとうど打を二打三打うちなかしもつてひらひて打けれはかたさきそははらのけ（本ノマヽ）す二つになきすへられゆんでめてへさばけるすへ宗みておゝくま川しまはなきをくれたり〳〵とよはゝれは畏て候とおふくま七郎もりとし河嶋十郎忠光ゑ物〳〵をひつさけひつさけ立出るきりやう骨柄是そうらへの家のかうけんほまれをあらはすむしやならんとなのらぬさきにさつしける二人きつとみてつつと入てひつくみをしふせんとするにひろのりさらに事共せすおのれはらかうでさきに何かはもつておよはんさいこのくはんねんいたせやとさうのわきにかいはさみ力にまかせしめければ五たいちしをにそまりあけになつてうせにけるすへ宗今はこらへかね一もんしにとひをりしを有あふ物共すかり付大將の御身として有べき事にも候はす只たせいを以て打たまへすへ宗聞もあへす某是に有なからかれをたせいにてうつならは四天王と云なはながくすたるへしそこたちのけとしつしつと近付いかにひろのり是そうらへのすへ宗なりおひたゝしきはたらきかんし入て候とてもの事に一たちひけん仕らんひろのり聞て我一人ぬけかけいたせしも御へんにかうがんせしめんためまづのそみはたつし候たがいのせうぶは時のうんにそ候はんすはまいり候とたちを天にひびかせ三重こゝをせんどゝたゝかひけるたかひになをゑしゆうし共しはしせうれつなかりし所にひろのり少上てに成只一うちとなぐりつくるをすへ宗めてへとひよこて切にはらはれのつけにかへす所をすかさすくひをうちおとしたちのきつさきにつらぬきあつはれなんぢ一人にておゝくのものをうたせぬるそむねんなれされ共ほんいはとけたりとみ方のちんへひつかへすすへ宗かはたらき大かうふそうのゆうしやとみなかんせぬものこそなかりけり

三段目

うらへのすへむねさいご

其後兩ちんあいさるそのあいむげにちかければひろのりか打死よせてのちんにかくれなく父ひろつなはやくも聞付しうるいほとんとかぎりなくちなんみたのちくはんもりひろ三なん竹た丸を近付か様〳〵の

次第なり扨てもせひなき事ならずやとなみたをはつら〳〵となかせは兄弟もこはそもいかにとしはしかきくれいたりしかおつるなみたをおしとめそれおなし兄弟と云なからわれ〳〵三人はよになしものゝくせとしてちやうほ一所にあいそたちへんもはなれすもふとうへたつる心なかりしにいかなる所存にや只一人ぬけふかくの打死あたなからもうらめしやよしそれは共かくももくせんあにのかたきを一じもおんとさするは二人のものかおくれなり只今すへ宗かくひひつさげ參けんさんにいれんとはしり出るをひろつなとつておさへ何をはやるそわかもの共是や此なんぢらは五十ほにはしるものか百ほにはしるものをわらふといふにひとし只今兄ひろのりかしにさまをふかく成とそしりしくちの下よりもあいもかはらずをなし樣に物にくるふ事やあるされはこのくさは未まことのかすにてかすならす都に大事のかたき是有其せんとにたゝすしていぬ死するは人ならず然るにひろのりめ某かつね〳〵をしへしくんりよにそむき家のなまてくたす事くさのかけにてもきけ七代かけてかんだうそわとのらも父かけちにそむくにおいてはおやとな思ひそ子と思はじいか樣にもまかせよと大ひけをなてあけ〳〵大いきつい本ノマヽていかりける兄弟のもの共いさむ心の身まかす本ノマヽけにあやまつて候共かくとも仰にはいかてそむき申さんとつつしんて畏れはひろつない本ノマヽろしをなをし扨はふしのちきりつきさりきいこも其むねほつすべしと申所へ大將よりちかてほこついて立出ひろのりか打死只今聞ておとろきたりあつたらしきわかものをあへなくもうたせし事のはかなさよさぞかた〳〵むねんにそ思はんひろつな承そんねんのたん御すいりやうにたがはすいかにもしてかたきをうたんはかりことをくふう仕候なりよりちか聞もあへずくふうとは何事ぞひろのりをうたする上はあすをまつへきいくさにあらすこよひの內に山も川も一めんにむせうみちんにかけこみ其すへ宗かくひ引ぬかずはさんねんなはれましきいで〳〵よりちかさきせんとすんとたつを引とめ今に日本の大將とならせたまはん御人のよにかろかろしき御所存かな何事も只それかしに御まかせ候へつら〳〵明日のかつせんのてたてといつはせん日のかけあいのことくまつそうほうたいじんせしめ一

かせんどつと合よは〳〵と引ならはにくるはおふにしかざるくんほうとかつにのつておつかくべし時にかねてよりみ方のせいをさきにまはしいつくにてもみちせはき山の上にたいせきこほくをならへおきかたきを思ふずへ引よせかまへおきたるいわかんせきをつるべおとしに切てなけたゝよう所をおつ取まはしせめふせ〳〵うたんにやわか事の御さ候らん此ぐん法はこわうのしんかこしよかゑつのぐんせいをくわいけい山へたばかり入一じにもみしはかり事されは某かあにこにて候へしわたなへのつなせん年やまとうちのかうりのいちらんに此うつしを以てすまんのかたきをそくざにくたき大りをゑたるけいりやく今以とうじたり是そねをつよふしてきをもらさぬはかり事いかに〳〵とさもいさきよくあいのふればよりちか大に打うなつきげにこふんかさつするたん時におうしておもしろし某はなん所にまはりしたくをかまへあいまたんかまいてかたきをたばかれやとひろつなか兄弟の子共をさきとして五萬よきを引ぐしうはてをさしてまいらるゝひろつなは其よの明るをまちとつくとあいづをきはめよくじつのみのこくに三重てきちんさしてそおしよするされはにやすへ宗はびめいよりそなへをたてゝあいまつ所へときのこへをそ上にけるたにみねひゝきておびたゝしすへ宗かたよりはかけあはせんとしきりにすゝみけれ共ひろつなよりちかのしたくのたんも未をほつかなしとあなたこなたとしこくうつしぢふんよしとざいふりあけけれは三重一とにとつとそかけ合たゝかふていにてとつてかへし引ければうへより大せきこほくをひつかけ〳〵こんりんさいへとおとしけるたゝりんほうのかいこをおすに事ならすせんちんごちん共にあへなくしをそとけにけりすへ宗みて力なし〳〵此上はあとそなへを以て一せんのはけまんとしたてにひかへしこぢんのせいをさしまねくにたちまちてきにいをのまれ天かける鳥のわしのつはさにかゝりちをはしるけだもののしゝのはがみにあふことくちりちりになりてはいほくすあさましかりし次第なりすへ宗しきりにはかみをなしゑゝいゝかいなきやつはらか有様かなすへ宗が一世のきはまりこゝなりくはんらいをたゞせはおなし一けのしゆくんなれ共今は君のかたきなり大将よりちかゝみ

たの源たひろつなか二人か中に一人はあまさし物とたつなかいくりはせんとするに只今おちたるあをめの石道をよこ切こけて有すへ宗はやる心のはけしけれは是をさらに物共せすらんな天に有なむ日天とこゑをかけてとはせけるにちうにてけしとみまつさか様にたをれ主は馬にしかれけるかもの〳〵しやと馬の両あしむんすと取てきの中へなけければ一どには つと引にけるすへ宗なをもかけいらんとよろひゆりなをし身つくろいする所にみた兄弟大せきを上の上よりなけかけけりさしものすへ宗いぬいにとうど打たをれすてにかうよとみへしか又ゑいやつとをきなをり上の方をきつとみてそはなる石をおつ取とうの石を打かへさんと心はたけくはやれ共馬よりおちし時こほくてむねをつよくつきたいせきにてそはほらよはこしうちひしかれなにかはさのみたまるへきもつたる石をかしこへすてありし所にとうどたをれあらくちをしやさんねん今は是迄ひとりむしややさたかねかさいこをよにいひかひなく思ひしにわか身のはてはなをそれよりはおとりたりさても〳〵此度は天下わけめのいくさならんにやみ〳〵とかゝ本ノマヽんせんどの御ようにたゝさる事のむねんさよよしよしかはねはくつる共たましゐはれい〳〵として君の御馬のさきをはなれし物かたきをうたすしなん事思へは〳〵口をしやとたゝん〳〵としけれ共しだいにせいきみたるれはみゝれんなりいつまてとさしそへするりとぬきゆんてのかたさきよりめてのそはほらまでかきをとし刀を土にゆりたて卅八を一世として秋のもみちとちりはてけるすへ宗かさいこのていきせん上下をしなへおしまぬものこそなかりけり

四段目

公平竹つなこうろん

そののちよりちかはて合のかつせんことゆへなく大将すへむねかくひをまて取ぬれは門出よしとよろこびはやおこる心いやましにたみ百せいの家々におしこみちん取させあをたをからせまくさとしとうしやふつかく打やふりちうほうちう物はい取かいにまかせてふるまへはそうそくなん女此人天下をとりたまはゝわがてうに人あらしとなけゝ共よりちかさらに聞入すかくいふものをはめしとつてくびをはねあく

きやく日々にいやましとかくへんしもはやくていとに上りよりよしめがくひをはねばんししよぞんにまかせんとしよ〳〵んせいにおつつけ上らくとあいふれ三重上下よういといそきけるこゝに又すへ宗がいへの子よしたの二郎たかみつといふものありくわんらいぎをまもる侍なりしがせひなくたせいにへだてられしうのさいごにあはすしてていきうをさへかたしされ共心さしつよきゆへすへむねかくひこくもんにかゝりしを一めいにかけぬすみとりひたゝれにをしつゝみふるさとするがをさしてぞ上りけるくにともなればすぐにやかたにまいりかやう〳〵と申上れは北の方さながらゆめの心ちにてする〳〵とはしり出一めみるよりたをれふし是は〳〵と斗なりおつるなみたのひまよりもくときたまふそあはれなりそれ弓とりはうつもうたるゝもゆめのたわむれなげくましとは思へ共かはらせたまふ御すかたみれは思ひのみたれかみよにゆゝしかりし御よそをいわつかの間に引かへ御めふさかりいろへんしさなからそれ共思はれすあらなさけなのうきよやとくひにひしといたきつき又さめ〳〵とそなけかるゝむさんなる哉わすれかたみのくに王丸今年な九つ物のわかちもしるべきまてにはおはせね共さすかすへ宗か子とてさかしくなう父上はうたれさせたまふなかたきは何と申そ國はいつくてさふらふぞとてまもり刀のひほをときこくうにはしりいつるを母上たもとにとりつきやさしのものゝ心かなさてもやさしのふるまいやけによのなかにもつへきものは子にてありおやならす子ならすはたれかかくはあるへきそ只今の其有様父すへむねのみたまはゝいかはかりよろこひたまはんに今は此よになき人の殘るはかいなき母斗いつしかみなし子と成ぬる事のふひんさよかたきをはは郎等共か打たるそこなたへこよやくに王とて又くひにすかりつき身もたへなんとそなけかるゝ義みつ此よしみまいらせ御なけきことはりなれ共かへらせたまはぬしてのたひ只御けうやうにしくはなしそれかしはへんしもはやく此事をていとへうつたへ奉らんみれんなりまつこなたへとかい〳〵しくもみたいわか君をはかたはらにうつしまいらせ其身ははや馬に打のり三重都をさしてそ上りけるされはにやくはらくにはくはんとうらんげきの次第はやさきたつてきこへを

の〳〵御所にあつまりないきひやうでう有所へ高みつ都にはせつきすくに御所にあかりいくさの次第すへむねのさいこのてい一々したいにうつたへければ大將をはしめいつれもすへむねは打死と申かとみなみなみたはせきあへす中にも行つなは心ほそげなるふせいにてげに弓取の身の上ほとさためなかりし事あらしむさんやなすへむね此度都をいてし時それかしと公平とたゝ三人一しよによりあはれげにわか君ほと御くわほうよろしき御事よもあらしあめかしたに其名をゑたる五人の物をあいならへもたせたまひ其内二人かけぬれば又二人のよつきしゆつたいする竹つなの一子もおつつけ上らくいたすべし只きん平に子のなき事こそしやうしなれそれかしか子も今年九つ此度の上らくにはかならすつれて上り申さん何もぶけいのわさ取かいてたまはれと申せしものはいつしか昔かたりとはや成てのこれるは事のは斗りなりそれかしとう〳〵せしめなはそのくはいけいざんのはかりことなとをはむけ〳〵とうけし物思へは〳〵くちをしやとこふしをにぎりきばをかみとうざいくれてそなきにけりきん平なみたおしとゝめま

事にそのことばいつしかかたみとなりにけりすへむねとあいなしみことかりそめとは思へ共はや廿四年のちなみなり二代のほうばいのちぎりもいつの花ざかりはやちり〳〵になりにけり是もかたきのゆへそかしすてに公平かゆふりきはいつのためのようそやかまいて〳〵竹つな只今御前にて申なり此度のかつせんをはそれかしかぎにまかする間かんげんたてはしたまふなまつ我一人さきに罷下り一あてあてゝみ候はん何もはあとよりおつ付たまへおいとま申候とすんとたつを竹つな引とめいやとよ此度はよのつねのいくさにあらすそのぎいかにと云にみたのひろつなにそれかしかおやわたなへと兄弟弓やのどうかくにて大かたのくんしよつまひらかなり並に其子共ともいつれもふゆうのたつすと聞及候其上大將よりちかきやうぐんにすくるゝ大力はやつてけがはしせらるな某とつくとあいはかりきんげつふいなるやうにさうばついたし申さん先くわいふんをもつて御き内のせいを御もよをし然るへう存候とこん上有きん平は聞もあへずから〳〵と打笑いそのひろつながくんほうも又よりちかか大力も時により人によるべし此き

ん平にあふてはちつとでかね申さんとかく二人のものひつさけきたらねはいふ所くわんこんにたりしはしまたれ候へとさへきつてかけ出れ共竹つなさらにはなさす此度はわとの物にくるう共ゆめ〳〵もつてはなつまし御へんがあらきも人によるべし此竹つなにはむやく口たてふさかつてせいすれは公平あまりはらにすへかねおほへたり〳〵てきの大將よりちかはせんぞのしうひろつなはおちなりさるによつてしんなかたきと一所になりわざとのひ〳〵のせんきしその内にくわんとうせいをみやこへひきいれんとの斗事とおほへたり此公平かみるめはちつ共ちかふましいかにわか君様こんとのいくさに竹つなが申事を御せういんましまさはかならす御あやまり候へしいかに竹つな御ふんな都にのこつて御るすしたまへ某は君の御共仕りきうにはつかういたすなりとあらゝかに申ける竹つな大きにりつふくし事もことによるそ某ほとの侍を一心とみるはあつはれ兩がんなつぶれたりそれ人のうたがひをうくる程よの中のちしよくはなしけにもひろつなおちをい御へんかさつすもことはり也かのゑんの國のてんくわうかけいかゝうたがひをうけすもゝの木にてかしらをくたきしせし事たいこくなれともきたいのけんとつたへたり小國なり共竹つな日本の正ろのみちたゝさんせうはくのあをきいろはしもの後にあらはれんといひもあへすていせんにとんでをり大石を引うこかしこうべをくたかんとするを人々あはてゝおしとゝむるされ共公平はきかぬかをにもてなしそらうそふいてそいたりける大將御らんし天なるかなや〳〵こくどのまれものとなにしあふたる五人の内三人あいはてのこる二人なさやうにわたくしのしゆくいをもつて大事のせんでうをみすつる事是かた〳〵かあやまりにあらすひとへに諸佛神我をはつしたまふ所なりながらへはぢをさらさんよりよりよしめん〳〵かさきにたつぞしう〳〵のちきり是迄と御はかせにてをかけたまへは公平も竹つなもこはいかにと取付御ことはりにて御さ候我々かあやまりとかう申上んやうも候はす世に御もつたいなき御事とことはをつくしとゝめ奉れはよりよし聞召我かた〳〵のかんげんにもよるべきにあらすちかいとゝまらん間兩人へちぎなきよしせいこんいたされよ畏て候すは八まんも御せうら

んましませまつたくへつき候はすよしなきしんいのいかりゆへごきけんをそんじ奉る事天のせうらんもはかりかたなく御さ候と御前共はゝからすこゑを上てそなきいたり大將御けしきをなをさせたまひ近比しうちやくせしめたり某かしんていをよくあんしてみたまへ五人の内三人あいはて今はかた〳〵斗りなれはたかき山ふかきうみ共たのむに二人か中ふはならはよりよしうきよに有てもせんなしと一すぢに思ひさためししてのみち二度此よにかへる事いまたうち神八まんすてさせたまはぬしるしなりかたきたいしせん事うたがひなしはやうつたてとゑいぢ二ねん閏十月廿八日にわつか一万七千よきいんそつしはなの都をうつたちとうこくさして下らるゝよりよしの御所存竹つな公平かしんていゆゝしし共中〳〵申斗はなかりけり

五段目

やはぎかつせん

其後よりちかはさんぬるおだ原かつせんに打かちてのちはなひかぬくさ木もなく只一めんによを日につ

いて上る程にせんぢんはみかはの國をさき今むらにつけばこちんは未やはきおかさきにみち〳〵たりすてに都せいおはりのくにかさてらまてげちやくすときくさらはこゝにてあいまてといつれもやくしよをかまへける時にみたのひろつな大將のまへにひさまつき此度もてきをざんしにくたき申さん其てたてといつはまつはちへいぢのともからはかち立にあいなれたれは是なるしたていかにもひそかにひかへあいすのちこくを待れよ扨某はあれなるたかみにそなへをたて候へしされはよりよしの御内のもの共は何もけつきにいさむものおほきと承れは是へとりかけ某かはたをみるならは我さきにとうつてかゝるへしその時此両方のかやのに火をかけさきをはやきうちにいたしごぢんをはしたてのよこやのせいにてつきくづしあとさき引つゝみたゝ一時にもみつぶし申へし是ぞかふうのしんかせいなんのたせいをほろほせしくはふくりうしやのぐんほうさためて聞召およひたまふへし此度御らん候へとそのりはつめいにあいのふれはよりちかほとんどうちうなつきげにおもしろきちりやくかなとかくくんりよは御へんにまかすな

りいか樣にもあいはからへ畏て候とくだんのことくそなへを立よせくるかたきを 三重今や〳〵とまちいたりけにもはけしきけいりやくより吉の御うんこゝにやまさにきはまらんあやうかりける次第なりあんのことくていとよりの打てのせい二てにわかりておし來るせんぢんはことにはやりきつたる公平あふぎながしのはたをみてすはあれこそみたのひろつながしるしなりすへむねかけうやういまぞほうせんとぐんせいにけちをなしかけいらんとするをたけつなはしりきてをしとめ某都にて御ふんともんとうせしはこゝそかしあのたかみにはた一なかれおし立さゆうにかやのゝみちをかまゆる事かんのしんかせいなんのくんせいをうけたりしくはふくりうしやのくんはう是なりしたての方にはよこやのふせゝい有へしいかにきん平御ふんのゆふ力はいつのためそいわくわんせきをくつしかけしよそんにまかせうちふせたまへといゝもあへすそはに有ける大石をひつかけひつかけうちければらつくはみちんになしにけるちりやくのほとこそゆゝしけれ過しときの小田原かつせんのおくれをはこゝにてまさにしかちけるとかち時とつとあけ 三重しはらくぢんをそとりにけるかたきはうたれて音もせすひろつなおほきにはらをたて扨は竹つなめ此くんほうをさうでんせしをしらすしてもりかへされしくちをしさよ此上はおのれはら一人もあんのんにてはかへすましとくんせいにけちをなし川よりむかいへ引こしやはきのかはのはたにわさとこせいにてしとろにそなへを立殘せいを四方のくほみにかくしける其時竹つなあいちかくかけよりそなへのやうをみわたしあふきを上て公平をまねき此川の水つねよりもてぬるくなかれにはかにかたきのせいこせいにみゆるはいかに公平きいてしらすとこふ竹つな是は川のなかみをしからみにてせきとめこなたのせいなかばわたしたる時くだんのしからみを切てすてどつとつきながしむかいへこしたるくんひやうをはかくしせいにて取こめうたんとのてたてなりあのくもひのとりのすくるようをみたまへふせせいの有上はわきへきれてとひ候兵のにふせばきがんつらをみたるとぐんしよにつたへしはあれなりいこのためよく〳〵みおきたまへの山にてもさとにても鳥のよこ切その下には必かくしせい有しるしな

りといひもあへすたかき所につつ立あかりみたの源太ひろつな殿へちと申たき事有と大をん上てよはゝれは源太聞てひろつな是に有何事成とうちはひつさけ出にけり竹つなみて是はわたなへの竹つなにて御ざ候そも〳〵よりちか卿は年頃思ひ入られたるとうしん只今なにとしてにはかにさめたちまちにんにくしひの衣をぬきしやけんほういつの物のくをちやくしたまふ事こそあさましけれ又御ふんはもはやよはひかたふきあすをもしらぬ身のせんなきあくきやくをつくらるゝ事何樣天まはしゆんのすゝめとこそはそんすれいかに〳〵とよはゝれはひろつな大きにいかりをなし何かく云は竹つなとやなんぢおちにむかつて左樣のぞうごんしんぎの程は思はすや忝もよりちか卿は源氏一けのちやくそんそかしれいぎをそんせはかぶとをぬきかうさんせよ只今までのあやまりをは某ゆるしてゐさせんとく御はた下にくはゝれとかうせうにのゝしりけり竹つなきゝもあへすま事に申さるゝことくおいはなをし子のことしおぢはおやにひとしことはをかへすもつもたいなけれ共身は君の御ゆいこんをそむき一もんほうはいとふはになりりにそむくしんなれはおちにはあらでけとうなり尤よりちか卿はげんけのちやくそんなれは御はた下にまいりたく候へ共みかとのちよつかんの上父のかんとうかふむりたるてんかぶさうのあく人なを聞たにもわれはたゝなげかしきは御ふんよしなきむほんにくみし一もんのなまでくたさん事こそあさましさよとよはゝればひろつな今はことはなくいやとかくのろんなむやく川をわたいて打てかゝれたかいのうつふんをはきつさきにあらわさん口にはにぬきたなしひ〳〵とよはゝりけりたけつなきいて申さるまてもなしもくせんのかたきなれは一おうのもんとうにもおよはすそくさにふみつふすへけれ共少ゐんにんいたす事の有川上のしからみを切てなかしたまへそれへさん上いたすへしかくしおきたるふせせいをもひらにいたされかへ此そなへは某かおやつなの太郎つの國かつら川にていたせしけいりやくよくはわすれすに思ひ出したまひたりさりなから竹つなこなたにあるうへははかり事にはのせられし心つくしにかさねては御むやうなりと一どにとつとわらひ三重みかたのちんへそかへりけるひろつな大き

にはらをたて扨もさてもきやつめに大事のちりやくを二と迄むになされし事をいのちしよく是なり子供はなきか一かせん仕れといひもあへす川うちわたりたかき所にひかへけれは兄弟の物共は一様にくろかはおとしのよろひをき二人共にてつほうをひつさけたくひまれにすゝみたる兵をいかなるものと思ふらんけんしちやくりうのかしんみたの源太かぢなんみたのちくはんもりひろ同三なん竹た丸ひころをとには聞つらん今はちかし慥にみよいかなるふうんのともからめ此ほうにあたりさいしに物を思はせんふびんさよとたせいの中へわつて入いれちかいもみちかい 三重はらり〳〵となきにけりちこくうつさすくつきやうのわか物を二三百きての下にうちふすればさのみはいかてころうへきむら〳〵はつとちりにけり二人な少もてをおはすありし所にひつかへすたとへいこくのはんくわいか生れかはりて來る共たやすくはかなふましと右よに(本ノマヽ)んこゝつてをそれける父ひろつなよにうれしけなるけしきにてあかけたりや兄弟なんちらかはたらきにて父か二度のおくれのちしよくはまさにすゝきたりいつせのかう〳〵是にしかしとて物事によりよしと竹つな公平か首取てわれにみせよ兄弟きひてより吉の内にてたつ物は候はすさかたの公平をおにかみのことくはんみん申ならはし候は鳥なきさとのこうもり我らにあいこは一てもいかて申さん御望のことく只今くひとつて御めにかけそれにてけんふつ候へとさもあふやうにかうけんはきてそひかへける然所へあいさはの源太兵へくにしけとてかんせきおとしのばせうのめいしん四尺あ(本ノマヽ)まりの大たち馬のひらくひにひきそはかたつなにてしつ〳〵とのりいたす竹た丸きつとみていか様きやつか馬ののりやうはよのつねならぬていたらくひつさけ參申さんといゝもあへすつつと入ひらりとのりくにしけかうでそばはらちきれよとかいつかみ馬のよはこしむすとはさみゐいや〳〵とおすほとにたいのめいばほねもにくもくだけつゝろくちにどうとふしけれは主をはちうにひつさけあさわらつてたつたりけり時に六尺ゆたかな大のおのこいろきはめてあかくまなこみすみにきれたるかはつほうづきんひつこみ兩はのほこひつさけさかたの公平是に有みた兄弟の人々にけんさんとなのりけるもりひろ此由

聞よりも是そねかふかたきなれとはしりよつて二うちみうちてう〳〵と合ほうをすてゝひつくみけるもとよりもりひろ大力さうのあしをひつからみゆんでの方へかはとなげくひみつもたまらす打おとしたちのきつさきにつらぬき此比きしんのことく聞へたるさかたの公平をはみたのちくはんもりひろ打とつたりとたからかによはゝりけるおりふしきりのふりけれは物のあやもみへされ共公平をうちとつたりと云こゑを竹つな聞つけこはなむ三ほうときもたましいも身にそはす泪をはら〳〵となかいていかにみかたのぐん兵共公平すでに打死せりいつをこすべきいくさそや竹つなもけふをかきりなり其よし君へ申せとかけいらんとする所へ公平はせ來りやあ公平か打死にとは何事そ竹つな大きにどうてんしか様〳〵とかたれば公平聞ておろかなり竹つな某ほとの兵が左様にむけなる死をいたさんやそれはたうしうの住人市原九郎みつもとにて候はんかた〳〵もそんしのことくのみつもと君の御かんとうをへすでにしさいにきはまりしを某申ゆるしほんりやうまてあんとさするによつて其をんせうばくたいなりしせんの時は我公平となのりなあるふしとひつくみ一めいをきろにかけをんのほうせんとつね〳〵申せしときゝつるか扨はうたれて候かはつかしの物のしんていやと泪をはら〳〵となかし今は是迄と大たちかいこみてきぢんへつつと入むかしは公平一人今は源氏はんせうにつき公平こそは二人有いつれにてもかたきはきらいなしとかけ出るもりひろきいてはつといゝてわたりあいうつつひらいつくはゑんのましへてせめたたかいしかやゝ共すれはもりひろたゝき立られうけたちになりにけり竹た丸こらへかねわきをつとふてうしろへぬけ公平かよはこしむんずとたき引たをさんとするを心へたりといぬいにとうとすはりまへよりかゝるもりひろをこしのつかいを二つになししたにしきたる竹田丸を引よせくびふつつとねぢ切ま事の公平がはたらきをみよとよばゝりみかたのぢんへ引かへす公平かふるまい只やくじんもかくやらんとみなおちぬ物こそなかりけり

六段目

よりちかひろつなさいご

さる程にみた兄弟の物共うたれけれは父ひろつなおいの泪たへかたく大將の御ちんに畏てあらましをくわしくあいのへ今日は一すちに打死と存定め候こん生の御なこり是迄にて候とよろひの袖をひたしけれはよりちか聞兄弟かうちしにのだんほいなしといふもあまり有此上は某かかうへをはくぢんにさらすより外はなし必しでの山にてあいまつそはやうつたてと申所にきやくそう三人こつせんとげんし我々は是はくしうたいせんの方より來りたり定ておほへ有へし御へん十一の春より十八のくれ迄我々かほうをたつとみにはやのきせいおこたらすさるによつてゆふ力天下にしらせんと相まもる所に天りにそむく事あつてふりよに父のかんとうかふむりすねんはいしよのすまい有事我においてしんさらにはれやらす此度のきやくしんも我々かすゝめたり然はけふのかけあい必くにのわけめたらん間かせいのためにあらはれたり心やすく思はれよ此きやくそう共か兩ちんのあいにはせむかいたといなん万きにて取かくる共てきと云物を一人もらくやうにはかへさしいち〳〵に引さき木々の枝にさらさんと云かと思へはすかたもゐ本ノマヽへすなりにけりよりちかうれしさ限りなく扨は我としし比ねんせしほう力のしるしは正にかうむりける此上はしんりんのいくさせんなし日本ないなからてに入へしめてたし〳〵と大つゝたいへいかきすへ悦のしゆゐんはしめ 三重よにうちとけてそいたりけりさる程によりよしの御かたにはすとのいくさに打かちしよ人いさみのいろをなし其日のせんちんはさかたの公平てい兵三千よきいんそつしもみにまふでうつ所にをさきのかうと今村との間にて俄につちかせはつとふき來りさしもの大木共くんせいの中へ三重一どにこそはふきたをすすさましかりける次第なりたちまちそくさに打ひしかれはんしはん生のやからも有されともきん平はつたへをきしひしよのふち馬をゆんでへとはせあんかんとしてひかへしかさもあれきたいの事共なり何様しさい有へしとこまのたつなを引むけんとするにまへひさおつてどうどふしうてどもひけ共はたらかすこは天めいつきはてたりといそき馬よりとひおりむかふをきつとみはたせは山ふし三人おのまさかりをひつさけうへと下と二ぎやうにみちをあいはさみあたりをにらんたあり樣

は身の毛もよだつ斗りなりちよの物是をみばたちまちきへもうすへきに大かうふそうの公平少もさはくけしきなく扨は只今の天ぐたをしはきやつはらがわさにて有けるよと大をんあけなにものなれをのれらはかくわうらいをはさしふさぐぞしさいをのこさすはや申せとたちのつかにてをかくるきやくそうみてむやうなりむやうなり何とはたらく共かなふまし是ははくしうの住人なりなのるにおよばすよりちかへのかせいとしてていとよりのうつてのせいをふせかんため只三きにて此所をかためたりいくまんきにてとりかくる共一人もこゝをはとうすまじてなみの程をは只今よつくみつらんいつけのめつほ此度ならんとよばゝりける公平きゝあへす何はくしうの住人とや扨はほうきのだいせんにすむしやまんがまんの天く共にてあるらん人も人によるそこれこそはげんし二代のしんかさんかをめくる山うはに三代のばつそんさかたみ川の守きん時か一なん右京の大ぶ公平とはわが事なりつう力しさいも我にあふてはよもいでしとゝめてみよとはしりかゝつてきらんとすれはこくうにこそはうせにけるこはしそんしぬるとはがみをなしてたつたる所にうしろよりたふさをとつてひきあげんとするをさしつたりとはらひければ何とはしらすとひのはなとのことく成ばかいなかば切おとしたり二人のきやくそう是をみて兩方にとひちかいうつてかゝるをむ二むさんにゆんてめてを切はらへはかたうではがいうちをとされはんし半生にてにけゆくをあまさしとおつかけれとも其ゆき方もしれされば力及ばず切をとしたるはがいとうてを取持きたなしかへせ〳〵とのゝしりこくうをにらんてひかへけり公平か有樣大ゑ山にて石くまとうしを一みとめなを一天にあけたりし父きん時かふるまいにみぎはまさりのはたらきやとほめぬ人こそなかりけりあいもすかさす竹つな大將をしゆこしす萬きにてをし來る公平やかて立向くだんのていをかたれば君をはしめ何もきいの思をなしにけりさらはすかさす取かけよとよりちかゝ本ちんへ我さきにとをしよせ時のこゑをそ上にけり山かもひらく斗りなり時のこへもしつまれは公平打おとしたるくたんのうてとはがいとなぎなたのさきにつらぬきたかくさし上ごふんたちの一きとうせんと頼つるませう共をはさか

たのきん平切とめたりましてしんりんのふんとして
某かほこさきにいかて及はんすみやかにたいさんい
たされよとかうせうによばゝりける諸ぐんせい是を
みてま事にしんりうほうへんの大天くたにかなはす
いわんや我々たいしせん事とうらう車をさへきるに
にたるべし只はちをすてゝ命をつけと一とにとつと
くづれける竹つなみて思ひまふけしさいごこゝなり
と四尺三寸の大たちをひつさけしつゝといてわた
なへとうのかういんみたのひろつなけふをかきりの
いくさなり心あらんす弓取はかけよつてくびをうて
と大をん上てよはゝれはかはちの國の住人さき原源
六みつ重あつはれ望かたきやと打物まつこうにさし
かさしうつてかゝるひろつなみてやさしのやつはら
やとみけん二つに打はりけるなんばの八郎是をみて
あゝきつたりとかけよるを竹つなしきつてせいし年
よりたり共さすかなをゑしゆうしそかし御へんたち
かたちさきにはかなふましとする〳〵と立出ひろつ
な殿にてましますか是そわたなへの竹つなりかう
げん所存にあいかなへりと云もあへすつつと入てひ
つくむされ共竹つな心きいて大力らうたいのひろつ
なを物のかすともせすかしこへとうどくみふせくひ
をかゝんとしたりしかさすかへたてぬおちおいの中
かなしみのなんたまなこにみち打たちもよはりはて
いかにひろつな殿所存今は是迄そいさとをり（本ノマヽ）へんし
かうさんあれ某か一めいにかけても此度のあやまり
をは申ゆるし奉らんひろつなきいて此ていになりこ
うさんなちか比以てはつかしけれ共た人にくみし
かれたる身にもあらすしてより後はあくいをひるか
へし一すしに誠の道に入打死したるこ共かごせほた
いをとふらいゑさせん間ばんしわとのを頼なり竹つ
な悦其ぎならはこなたへと取てひつたてよろいに付
たるちり打はらいそはなるくろにこしをかけしはら
くいきをつき竹つなさらばみかたへ同道いたさんと
めてのかたへむくひまにひろつなたふさを取て引
たをす上にのりかゝりくひをかゝんとするをさしつ
たりとさうのてをてうどとめあしをからんてはねか
へしげにもごふんなとんよくふ道の侍かな其心てい
にてこそは兄弟とふはになりすしなきむほんおこ
したりおぢをいのきうりも今は是迄そげんさいのお
いのてにかゝるいんぐはのちのよ迄もなむ三方とく

びふつつとかきおとしきつさきにつらぬきみ方のちんへ引かへす竹つなか心ていげになさけ有侍やとてきもみかたもかんしけるよりちかみて今は何をかこすべきとたせいの中にわつて入はらり〳〵となきにけり時もうつさすべう〳〵たるの原にし人の山をつきにけり此せいにをそれちかつく物はなし公平みてこと〳〵しの有様やとはしりよるを竹つな取ておさへよりちかのゆう力はかねて聞たることくなりそこつによつてけがするな先しはらくとかんけんす公平きいて左様の人をくみとめてこそ公平とはいわれめよもしそんしはいたさしかまはておちあひたまふなとはしりかゝつてむすとくむ互になにおふ大力をしかへれはおしもとしはぬれはひらくすまふのてとうくはのせちゑには鳥のはをあはするにことならすかくれははつし両方の力あしは只ちしんなとのことくなりされとも公平まさる力のしるしにはよりちかの上てになりてうくあしをゑいといゝて引とめまつさかさまにけたをしちつ共さらにはたらかせす是はいかゝ仕らんと申せは大将をはしめあゝせられたりせられたり其まゝ都へ引申さんとろうこしに打のせていとへかいちんなされ天下一とうにおさまりけりとにもかくにもよりよしの御くわほうすへはんせうめてたや〳〵とてみなかんせぬものこそなかりけり

勇金平

第一葉一枚欲く

しゆんのまひに何なり共一きよくつゝと御しよまう有わたなべじするにことばなくあふぎおつとりたち上りげに君か代の春なれや松のみとりも色そへて世かいゆたかに民やすくめてたきはるとかなでつゝ有しせきに立かへりいざきん平と有けれはれつざのめんめん一同にはやとく〳〵とさへそく有きん平もとよりむげいにてほうど是にとうわくして此坂田めが此しやばへからだをとんで出てより、きじんやへんげがう敵は何百萬ぎかたまつて天地にみちてきたる共かたはしつかみひしかんにはふわ〳〵しこむたまごよりまだいとやすく思へ共是はあたごそこまつたりしかしあんでもおなぐさみ大こくまひをかなでんと鬼もおびへるつらかまちめをほそめつゝ立おがり此大こくといふ人は色ががひにおかうてひげつつらめがのうには一にてきをふみころし二にはにぎりこぶしでかたはしづかうをぶつくだき三に酒をはかるは水ため桶をさかずき、四つよこ紙やぶりで敵をひしぐがるて物五ついつもてつのほうならく迄とぶつこめはこんりんざいのやす小屋で是は地しんかしんどうかまんざいらくとさはかせ六つむいはにかゝつて首ねち切るもお上ず七つ名だいを公平ときけは鬼がおびへて三年此かたをちかねた鬼神のおこりもをちる也八つにやく神屋しやらせつ此きん平にこなさせては鹽からなんどの如く也九つこくうをはねあるくへんげけしやうのいちや〳〵をにらみをとすはいちもつ十ヲでとつておつふせ大六天のましうもうん共すん共いはせはこそきん平まひは是迄ともとのせきに座しけれはまんざの人々けうに入よし家御かんのあまりにそれ〳〵さかたに新盃と有けれは八斗入のなんきんはち坂田がまへにさし出すきん平につこと打わらひ大こくまひの大あたりと五はいかさねてさらりとほしおの〳〵いとまを給わりわがや〳〵にかへりけるおさまる御代のめでたさと上下萬みんおしなへてかんせぬものこそなかりけれ

二たんめ

其後さかた兵庫頭きん平は座をかさねたる御酒ゑんに少もともちらつけはわがやにかへりまくらしてかゝるきげんの折からにあわれいくさが有ならはきのやうじやうにもなるへきにさてもさびしきよの中やねうでになつて此ころは力こぶもかさびくになりはせぬかとつぶやきせんごもしらすふしにけりかかる所に山〳〵の天句共きん平がちかきころゆう力武勇ならびなくちとかうまん見すかして正たいなきをさいわゐと大せい爰へとびきたりたゝみと共に引上て目なさまさせそとうなつきてくもいに上りそれよりもこくうをかいてとび行しがあまりおもさにうでもなへおもはず山に取おとし大あせかいてとびちりけりきん平やうやくめをさましそろ〳〵おきてねこてうずあくびなからにうでをのべあたりをきつと見てあれは大木しげりしん〳〵とおもひの外成所なり扱心得ぬ事哉ともくねんとしていたりしにいづく共なくふゑたいこつゝみのおとの聞へけりいよ〳〵きいの思ひをなしかゝるみ山のおくにして松ばやしこそふしきなれとよく〳〵きけはかたわらの三かゝひ程な大杉のこすへにおとの聞へけりさかた心に思ふやうさては此山のてんぐ共と覺へたりわれを爰までいざなひしきやつばらにうたかひなしにくきやつらがしわざやと彼大杉をひつかかへいかりにまかせてゆりおとすさしもの大木なりけれ共きん平が心にははいはらひふるここちして尾花のそよぐにことならず何かはもつてたまるへきよりあつまりし天句共ふいにゆられし事なればつばさをのばすまもなくて秋の山ぢのこがらしにしゐやこのはのちることくばらばらとをちにけりこのは天句と申事此みよよりも申也がんぜき岩をにおちけれはあるひははなつきはしを折、羽をかく天句もおほかりけりされ共しゆ領のまかい坊ときんのゆがみおしなをしきん平につかみつく坂田むし共思はゝこそとつておつふせひざの下にひつしき一疋斗はめんどうぞや、みんながかゝれはな共と大手をひろげ待かけたり此いきほひにおそれをなし大小のぐひん共各かうべを地に付てまつひら御めん候へしあたごのかんどうかうむるほう此以後あだに存まじ和國のせがいとあがめんとはねをすほめて平ふくすかのきん平か有さま人間のわざな

らずとかんせぬ者こそなかりけれ

三たんめ

そののち天句共山かいのちんみに國土の美酒をさゝげつゝきん平をもてなせは坂田是になくさみてかくて數日をいたりける有時きん平天く共に向て汝らは國〳〵所々を飛行してめつらしき事やみるかたれきかんといひけれはまじゆつがまんのくみがしらとびのすのぞんくわい坊すゝみ出て申やう世上ひろしと申せ共さしてけうなる事もなしけつくまちかき此おく山おにがほらといふいわやにきくわいのものゝすみ候鬼神の大將をばがんくつげとうとがうしけんそくにらんまけとうてつくわつけとうなんととてあまたのあつきかすしらず人もかよはぬ谷かけを鬼神のだいりとなを付て近國へはいくわいし民のさいしをかどはかし是をふだんのしよくとしていくとせふる共しれぬなりやゝもすれきやつばらがわれ〳〵をもかすめつゝ此山をおひ出さんとたくむゆへよほどむつかしくもてあつかひ候とかたりければ公平くわんじと打ゑみてそれこそさかたがかうぶつなれよくこそかたり出したれあまりの事のうれしさに物も、のどへ入らぬそやゆづけを出せから口をはやくかんせよ天しうと、かた地にはつたひの木笠まだ笠をだに付ざればべくさかつきとなを付てつゝけて七はい引かたふけそゝろ立てよろこべはまか大天句のじやまん坊御前にかしこまりくすみ切て申やうくだんの鬼神と申は神べんのくせものにて爰はと思ふ其時はてき一ばいの力を出しこんがうりきにて候へばよのつねのおにならす其上つきそうあつき共つうれいの邪みにてなし此御かぶとをめさるべしそも此かふとと申は大六天のまわうを明王たいぢまします時めされたる甲にてこんがうほつしやうと申めいきにてきつさいもよく候とてつゝしんでさし上るきん平きいてから〳〵と打わらひ心さしはしうちやくせりしかし鬼神か年をへてたながへをせぬすなり共大かた山のしれた事たゝきあつめて大かたは五十萬か七十萬つかみつぶしてすてんにはそくいをおすよりいとやすしかぶともずきんもいらばこそきづかひなしに道筋のあんなひせよと有けれは天句共申様かの岩やと申

は至てしんこく成ゆへにがんせきいわほそびへつゝ神代此かた人倫のつうろとては候はずししさるさへもかよひゑずそれゆへれうし木こりだにゆく事さらに候はず是に召れ候へとて玉のこしをさしよせきん平をうちのせてす千の天句こしをかき雲をふんでとんで行山また山のみねをこへとべば程なくをそろしや鬼神のだいりにつきにけりこしをかしこにかきおろせは兵庫頭いふ様はそへかたおほしと云なから四時のはやうちもおひてにまほのはや舟も汝らに及ふましもとよりわれは鬼ずきにて手つだいもいらぬ也こするにひかへ汝らは、くもぢのつかれをはらしつつ坂田がしよさをけんふつせよとこしよりおりて小をどりしうでをさすつてひかへしはあつはれふてきのふるまひやとかんぜぬぐひんはなかりけり

四たんめ

其後さかたのきん平は鬼が城につきけるか雲間をはやくかゝれたるのり物心か何とやらめまひ心ちの有けれはまづ〳〵しばしやすまんと門のぢふくを枕としてゆたかにこそはふしにけれ番の鬼共是をみて扨もふしぎなま物哉いかさま是は大それた極悪人ゆへ人がいよりとうけんせめの心にて鬼のゑじきに至るらんとしよくにたんきな鬼共か引さきくわんとさはぎよりきん平少めをさましねかへりさまにこゑを上うんとあしをふみのぶれは鬼共おびへてとびあがり三間あとへとびしりぞき色ちかひしてためいきつきいや〳〵きやつは此まゝにそこつにはくらはれしかしらを切てすしつけかてつぼうそろへやわらかにたたきひしくにしくはなし此ぎ尤しかるべしとてんでにてつほうひつさけ我おとらしとかけよる時公ひらむかとおき上りまだしにもせぬ此からだまうあつまるか青はい共はい打是に有やとて両のこぶしをさしのへてかたはしよりもはりたおせばそくじに死ぬが十五人せつじをする鬼七八人殘りはめをこそまはしけれ此物おとを聞よりも有あふ鬼共いかりをなしうんかのことくとび出れば是でやうやくめがさむると鬼共のなげすてたるてつほうを取あつめ五六本づゝねじかためもとをは取てより合せ両手にもつてうつ程につのやら、かたやらどうせなかとらのかわこし

四つのゑたあたる所をさいわいにくわらり〳〵となぎたをすはつみかさねたるかきらをかけやでくだくことく也さすが鬼神もきもをけし命有ての鬼しよざいいきたしやうきは是ならんとわだ〳〵ふるへてにけこめは坂田はいよ〳〵いさみたち一二の門や三の木戸岩をうがつて立たりし石の戸ひらをふみくつしげんくわの内へみたれ入ほら中のきぢん共今日がせつたいせつめいぞや脉はきれぬか出あへと大おん上てよはゝれはらんまてつくわつ兩げどうきんひらかゆんでめてより組つくを心へたりといふまゝにてつくわつをけたをしこうべみぢんにふみくたきらんまげどうをひつつかみこふりふつてなけけれはあはらぼね打おられ其まゝいきはたへにけり大將がんくつはらを立手をおろさではかなはしとたけつてわめく其聲は大地にひゝきしんとうしゆるき出たる其けしきたけは二丈斗にていかるまなこはしゆのことくひけもまゆけもかみの毛もみなそら様にはへ上り公平をにらんて抑わごれは何者そ是こそ大將がんくつなれたゞ今じやくめついたさせんといかり立たる有さまは身のけもよだつ斗也きん平是を見るよりもから〳〵と打わらひぬかつむ舟にもせんどうかな汝が爰の大將か扨もきよしやうながきめやれあまりの事のおかしさにわきつ腹がいたひはと大聲上てわらはれてがんくつ大きにせき上りたた一もみとくみつけはきん平は下てにくみゐいや〳〵とせりあへ共げどうもとよりこんがう力大ばんじやくのことくにてちつともさらにうごかねばきん平が力にもよ程手ごたへしたりしに殘る鬼共かけよりてきん平か兩あしに大せい手をかけ引程に日本一の公平も今はかうよとみへけれはなむ八まん大菩と心の内にくわん念しめてのあしにてけはらへはげに神力のおうごにやけんぞく共けちらかされがんくつはひざをつきあふのきにたおれけり公平わきへとびちがひ太刀ひんぬいてがんくつが首ちうに打おとせは殘るけんぞくおぢおそれ今より以後我々か大將とあかめんとみなかうさんをしたりけり其時に天句共木々のこするをとんでおりさてもゆゝしき御手からと羽うちわにてあふき立、すみかのま所へ供奉しけるかのきん平か手なみの程ぼん人ならぬ有さまやとかんせぬ鬼こそなかりけれ

五たんめ

其後ひろいせかいに身せばの小袖みじかいうきよになが
かたなしやんとふりよくさしこなしふかあみ笠にあさきの
をだてをせんやのそめはをりふつてふりだすふうりう君しん
ら三郎よしつみは春めきわたる都のそら世ものどかにてもろ人の
心うきたつ櫻狩しのびやかに御出たち御供少々めしつれらんぎをん黒谷嵐山きよ水やさかおむろへんはなある方へ立こへてひそかに御ゆう有けるが、にわかにはるさめふりくれはとある木かけにたちよりてけに歌人のなみたかと、ながめし事もことはりやとしばしやすらいおわしますかゝる所にそのふせいしづにはあらぬあまほうし年比六そじ斗なるが御そばちかく立よりてわか身はていせいと申てあれに見へたるあんじつのあるしにてさふらふかよし光公と見まいらせて候雨も次第につよけれは見くるしうは候へ共いほりへ入らせ給ひつゝはれまをまたせ給へかしといとねんごろに申にぞやがて立より給ひけるてい清申ける様はわか身ももとは大内にみやつかひさふらいてより吉も御存也御さかつきと手をうてば二八はかりの上らうのさくらもはづる御かほはせ柳をもどく御すかたしなしけかく引つくろひてうしかわらけたづさへていとはつかしけにうちゑみてさしうつむける其ふせいとうのやうきひごのせいしそとをり姫吉じやう天女と申共及ぶべしとは見へさりけりよし光つく〳〵御らんして當時名ある御かたをかすをつくして見しか共かかる人をは未た見すせかいひろしと申せ共又有へし共おもはれすと心ときめきまもりいておなはいかにと有けれはあるし申様お尋が幸なれはさいわゐ姫共申さんや今はやうすを申へし是はさらしなの中なこんのぶただきやうの御そく女花君と申て九重のその内にならぶかたなき色ぞとてゑんをもとめてしたへ共父さらしなのねかはくはにようごきさきと思召露もうけひき給はねはいとゝもだへて戀しつむ人も世上におほけれといかなるしゆくせのゑにしにや此程はなみのにわにしてそのかたさまのとめふりを見初給ひて此かたはわすれ給はてあけくれに戀に御身をやつしつゝなみだにしつみ給ふゆへあまりの事

のいとしさにけふ此邊へ花見とて君御出をある方よりしらせしものの候ゆへ姫をまねきまいらせて御通りを待ちけるにまつにかひ有さいわいかな御盃と取もてはよし光公聞召是はふしきの御ゑんかなひとへに神の引合それが誠の御しんなら是をいもせのさかつきと姫君にさし給へは姫はにつこうちゑみてふびんにおぼし給はらは此身は君にまかせんとむつましくいひかはしゆくするえんの御盃めくるちきりぞたのもしきかゝる所に門外より大おん上て此内にさく花姫の有ときくたゝ今こなたへわたされよいかにいかにとよばゝりけるよし光是は心へすいか成者ぞとの給へは播州の住人大くま大藏宗とら也年月姫をしうしんし文を遣れ共返事なし父へ望めはせういんせすけふうでさきで手に入れていやでもおふでもあすからは此大くまが妻ぞかし急いで渡せぐぢつかはうきめをみせんとよばはりけるよし光公聞召すいさん成やつばらやより吉か三男新ら三郎是に有ととび出んとし給へは姫君袖にすがり付しはらくまたせ給へかし君もろ共に切て出叶はぬ時はわが妻の御手にかかり來世にて一つはちすにちきらんとこし帶取てたすきかけ長刀を引そばめすゝみ出たる御有さまげによし光のみたひにもはづる所はなかりけりてい清はきもをけしふるひわなゝく所に兵庫頭きん平御庭に畏り此節ま所に候ひしに天句共つう力にて此有さまを存つゝせつなに是へ遣りたりもはやおち付給ふへしとしばかきごしに立上りいかによせてのなむし共よつくがうはつきたりや日本國はまだせまし大千せかいの其内にせさへならぬきん平が一疋ものこさぬぞとやがておもてへとんで出あぶか同意のいちやいちや共汝らごときのへろ〳〵にお手をよごすはりよくわいとて兩足上てけちらかしせばねをふみ折かうべをはかぶとゝ共にふみくだけば此いきほひにおそれつゝ大將宗とらいづく共なくにけゆけは殘る者共おつちらし御所へ御供したりしは誠に源家の寶やとほめぬ者こそなかりけれ

六たんめ

其後宗虎は本國へにけ下り郎黨共を近付かやう〳〵しだいにてむねんたくひはなきそかし數年源氏をは

ろほさんと心がけしに時至り今度の首尾こそ幸なれいさうつたてや者とて近國をもよほし都合其せい五萬よき都をさしておしよするよりよし此由聞召四天王を始めとしてむねとの兵引くし急き都を打立てばん州さして下向有兩ちん道にて行むかひ時の聲をぞ上にけり時の聲もしつまれはよせてのちんより波原兵藤となのつて大せいにわつて入はらり〳〵となきたをせは源氏の先陣かけちらされしとろになつてみへけれはさたかね見てとんて出兵藤にわたりあひたゝかふとみへけるがさしもいさみし兵藤か首は前にそ落にける竹つな是をみるよりも今にはしめぬてきわ哉と大たちぬいて切て出四天王のずい二竹つなかてなみを手本にせよやとて四方八面切まくれは何かは以たまるへきいろめき立てよせてのせいはむらむらはつとにけちれは大將大くまこらへかねあさましの者共やとてつほうひつさけ打て出くもて十文字になきふすれはさしもいさみし都せい味方のちんへ引かへす公平是をみるよりもあれていの小くわしやめにこわげはなきそみたのせい打物やめて見物せよととびかゝつてくみけるか大くまも大力爰をさいごとせりあはひしにせかいぶさうのきん平が物の數共思はゝこそかしこへかつはとなけたをし九のいの下をふまへつゝうんと云てふみ付れは手足のゆびもはだかりてのめりをかへす所を首ふつつとねち切かち時を行ひ君の御供仕都をさしてかいちん有源氏はんしやうめてたし共中〳〵申斗はなかりけり

右此本者大夫直之正本を以うつし令板行者也

正徳六年申正月吉日

駒込あさか町　西村傳兵衛新板

渡邊三田合戰

第一

よりよし公かまくらせめ子四天王關破り

それひやうしよにいはく、しやうのまさにはかりこともるゝときんば、たゝかいにりなし、外内をうかゞふときんば、わざわいせいせずと、こゝをもつてとを本ノマヽきを、おもんはかりなきものは、ちかきうれへにあふとうん〳〵、こゝにかわちのかみ源のよりのぶ公、天下のふしやうたりし時、むさしの國のぢう人、わたなべの源五つなとて、ここんぶさうのゆうしなり、せんぞをくわしくたつぬるに、とをるのおとゞより五代のそん、みたの左衞門もとつなが一子なり、やうしやうにてちゝにおくれ、はゝかたのおばにやういくせられ、つの國わたなべにありしが、ふりやくさいのふよにたかく、まんぢうの御代に、十一さいにてはじめてめされ、ちやくしらいくわうへめしつかわされ、すどのかうみやうひるいなく、其けんじやうに、本國なれは、むさしの國にて、すか所のりやうちをたまはり、ゑいぐわに 三重さかへおはします、御子二人もちたまふ、ちやくしみたの源次郎竹つな、かれはちゝのたいくはんとしてざい京す、次はせいしのまへとて、代にたぐいなきびぢよなり、扨又家のしつけんに、くまざは兵ごかねみつとて、一きとうせんのつわ物なり、同ちやくしはく王丸、父におとらぬかうのもの、其外杉山藤内ありくに、しのざき兵衞まさ時とて、何れもおとらぬゆうしなり、日々にしゆつしはひまもなく、みたのしようにいちう有、いせいの程こそ三重ゆゝしけれ、是は扨置爰に又、かいするが兩國のくわんれいに、高はし左京の大ぶきよしげとて、よご將軍十代のゆいしんたり、然にきよしげめいけのながれおくみながら、あくぎやくぶたうにてうくわして天めいしらぬおのこなり、同ちやくししゆりの大ぶきよあき、次男さこんのぜうやすきよ、三男しげ王丸とて何れもけつきのゆうしやたり、あひしたがふらうどうには、竹川たん正さだとも、あらきほんまたかひさ、せき口次郎もりとし、あいはらくらんどうぢはる、あしがら源太もりながとて、い國のしぼうほうゑつをも、さみする程のゆう力たり、有時かれらを

召集め、日頃方〳〵にふちをしぶゆふを、たしな事（本ノマヽ）、一ゑに天下をうばゝん望たり、さいわいわたなべのつなはむさしにさいこくす、まづかれをいくさかみのちまつりに打とらんと、おもふはいかゝあらんとないたんす、中にも竹川たんしやうすゝみ出、御ぢやう尤くつきやうのおりから、ひた〳〵〳〵とおほし召たゝるへし、かれたに御ついばつあらは、ばんとう八か國はたうもかうも皆御みかたにさんずべし、それせんけんの事わさにもおよそさがみ一國のせいをもつて東八か國にたいし、八か國をもつて日本のせいにたいすと申せば、其いきをいにて都をせめらるべし、然らば天下は君のたな心におつへしとさもいさぎよくそいさめける、爰におかだの十郎ひてつぐ、ばつざより進み出、これはゆゝしきいさめにて候去ながらかの渡邊はおにをあざむくふりやくめいよの物なれは、弓やをもつて打とらんはゆゝしきさうとうたるべし、一まつちりやくをもつておんひんにうたるべしとぞ申ける、大將尤とたうじ、然らば渡邊を是へよひよせたばかつてうつへきか、いかゝあらんと仰ける、ひでつぐかさねて、爰によきて立の候、しげ王殿の御けんふくにことよせ、いわいのいとなみにどくまんちうをしたゝめあたへ候はゝ、たちまちじめついたさん事たな心の内に候と、手に取やうにぞ申ける、きよしげかんるつかぎりなくさあらば此きにあいきわめん、則なんぢむさしに行よろしくたばかり歸るべし、畏候とても八四五人引ぐし、むさしをさしてぞ 三重いそぎける、程なくたちに付しかはあんないかふて渡邊にたいめんし、只今まいり候だんへちぎに候はず、きよしげ申され候は、來十八日にしげ王丸にげんぶくいたさせ申に付、かつうはおまへのみやうがにあやかり申やうにとの事にて則かのちへ申入たき由と、おそれながらそれがしを遣はし候と、いんぎんにぞ申ける、渡邊ふしきに思へ共、何となきていにて日頃のよしみとて、よくこそ御ししやにあづかり申たんへつしてしうちやく致せしなり、其ささみさんにうもつていさい御れい申さんと、つかいの物をかへし扱くまざはを近付、きよしげが方よりかやうに申來しが、きやつとはつね〳〵ふあいくち成にしみ〳〵とのつかい、何とやらんやう有げに覺るなり去ながら、侍の頼といふにいなといふ

も道にゐらず、一はしかれかたちに行事の次第をうかゞふべし、よういせよとのたまふ所へ、きよしげが侍、みたの平次とて本はわたなべにつかへし物成が、大いきついてはせ來り、きよしげかくは立一々次第を語りける、渡邊大きに打うなつき、扨はそれがしか思ふにちがわずよくこそしらせて有物かな、扨〳〵なんぢはいにしへのよしみをたがへぬ事こそしんびやうなれ、それ〳〵とてしやきん百兩たまはり、まづなんぢはいかにもをんみつに歸るべし、平次ほうびをちやうだいし、おいとま申歸りけり、かくて渡邊はかねみつに打むかい、いかにや此わたなべ程の物が、かれらていがはかりことにおそれ行ぬはむげにいゝかいなし、それがしもはかり事をめぐらし、きやつを是へよびよせて打べきなり、まづ此度はかれが望にまかせ立こへんと、扨よういのまんぢうをくわい中し、とも人あまた引ぐしてするがをさしてぞ 三重いそぎける、去程にきよしげは、さたまる日にもなりしかはしゆ〳〵のほうらいかざらせ、しうぎのいとなみあいかまへ、くだんのどくまんぢうをよういして今やおくり〳〵と待いたり、然所に渡邊あんないこはせ入たまふ、きよしけ立出よくこそ御出候、まつこなたへとをくへしやうじたかいにしきたいおはり其後しげ王時のしやうそく引つくろいさしきに出る、渡邊ゑぼし取上ちやくせさせ少立のき、則御なをしゆめのぜうしげつなとなのらるへし、誠に我等ていをゑぼしおやに仰らるゝだん、へつして代のめんぼくと存なり、御くはほうは御しんふ、きよしげ殿に御あやかりたまへ、扨ゆうりきの程物のかずにはあらね共、此渡邊にあやかりたまへと、れいぎたゞしくことおはれば、其時ちんせんのつくしさま〳〵もてなしやう〳〵本ノマヽほんごに及、かねてよういのくはしを持出る、渡邊すはれいの物とおもひ、何となく取てくわい中す、本よりれつざの人〳〵かねてあいずの事なれば、一〳〵取てしよくしけり、其時渡邊をしなをつて、かねてしたゝめくわい中せしに取かへ、大へしにへし付むまさうにした打をしてむじ〳〵〳〵とくひにける、きよしげかく共しらずしてなをもひかうを取かへ、しゆをさま〳〵にそすゝめける、其時渡邊れいならぬていにもてなし、今はおいとま申さんと、さしきをずんと立、きよしげしすましたりとゑみを

ふくみ、誠にゑんろはる〳〵との御出よろこひ入て候と、れいぎをのべてそかへりける、たがいにたばかりたばかりぬと、おもふ心ぞおかしけれかゝる所にさいせんしやにきたりしかたおの十郎はせ來り、渡邊のこしのまへに畏、何とやらん御心くるしげにみへさせ給ふ故、きよしげ心もとなくおもわれ、それかしをさしつかい候何とか御入候と、誠しやかに申ける、渡邊こしより立出よくこそ御念入たる御つかいやと、いふやいなや取てふせ扨御へんなしんていのとゞきたる人かな、日本ぶそうの此渡邊を、まんちうのきれにてたばからんとや、おつこやきおのこかしないたり、なんじが申ごとく中〳〵五たいのふらんしてたまられない、びやうちうの間は頼み申ぞこいさ、こなたへとたかてこてにいましめ、かねみつにひつたてさせ、むさしをさして歸りける、かの渡邊かちりやくの程、あつはれめいよのゆうしやとてみなかんぜぬものこそなかりけれ

第二

きよしげさいこ并渡邊ぐんほう物語

むさしのかみ渡邊のつなは本國に歸り、ひてつぐを引出しいかにひでつく、なんぢがしうのきよしげは、いか成いしゆにそれがしを打んとはたゝむそや、有のまゝにかたるべしやうすによつてなんぢをば忠の物となすべし、それ〳〵とてまづなわをゆるさるゝ、ひてつくさあらぬていにて、いやそれかしは何のしやへつも存せす候所に、かやうにあらき御ふるまいかつてしんいにつうぜずとべんぜつかしこくちんしける、渡邊聞もあへず、やあさやうのひやうりはちよの物に申せ、此渡邊はもちいぬぞ、ひつぢやう今度のはかり事、なんぢしらぬか誠ならば是をしよく致へしと、くだんのくはしを取出しひでつぐに與へける、ひでつぐよくみればてつから造りしちんどくなればさしうつむいてせきめんす、其時かねみつこかいな取ていかにやわとの此頃の御しんらうぶんに、本ノマヽちんぶつとたまはる所に何とてしんしやくせらるゝぞ、いやてもおふてもあたへんと、本ノマヽこしのさしぞへひんぬいてそくびにおしあてせめくる、せんかたなく其儀にて候仰にしたがい申さんとふるい〳〵そ申ける、さあらばとてひつ立る、ひでつぐ心に思ふやうよ

し〳〵てつからつくり事（本ノマヽ）なれば、たれをうらみんかたなしと、思ひながらもおつ〳〵取てしよくすれば、何かはもつてたまるべき、五ぞう六ふにしみわたり、たちまちちをはきむなしく成、渡邊みたまひ扨も扨もきよしけめはからだににやわぬきものふといおとこめかなとから〳〵と打わらい、いかにかねみつなんぢはかれかたちへ行、それかしいれいのやうに申なし、たばかり是へつれ來れ、かしこまり候と三重するがをさしてぞいそきける、いそぐに程なく付しかばきよしげにたいめんし、扨も渡邊國にかべりしよりいれいもつての外に候、かやうにしたしく成うへは、なきあとまでもべつして頼み申さんため、おそれながらあれへ御こしあつてたまはるべきとのことに付、それがし參り候とさも有さうにぞのべにける、きよしげしすましたりとおもへ共、おどろきたるふせいにて供人少〳〵ひきくして、渡邊やかたへいそぎけるやかたになれは、かねみつ心へおくへつツとしやうしける、其時つないぎをいはせすとつてふせ、ひさしう候きよしげ殿、扨も御ぶんは我をうたんはかりことに、わかれて二たびあいがたきくひをうしないたまふこと、近頃しやうしせんばんにこそぞんすれ去ながら、此渡邊がてにかゝる事ごせの打たへにせよと、まつかう二つに切わつたり扨ながひつにをし入れ、せうをおろしかねみつおもてに出、きよしげが侍共を近付、いかに方〳〵きよしげ公は、渡邊のいれいに付、是に五三日もたうりうあらんとの御ことなり、是は則渡邊よりきよしげとのへおくらるゝ御ゆいもつなり、則御しそくたちへのしよ狀も有まつ方〳〵はかへられよとあれば、畏候と侍下べに至まで本國さしてそ歸りける、國にもなれは人〳〵の御めにかくる、兄弟の人々それこなたへとふたをあけてみてあれは、ち〻をかいして入おきたり、はつとおとろきやあおのれらは、しうをかやうにせさせおめおめとかへる事のはら立やと、一〳〵くひをそうつたりける、此上はじこくうつしてかなはしと、兩國にふれをなしつかう其せい三萬よき三重むさしの國へぞおしよする、なをも此事かくれなく、みたの城には敵おそしと待いたり、渡邊申されけるやうは敵を待も程久し、いで〳〵ぐんほうの次第をかたつ（ヽ）聞せん、まつかやうのひらばのかけあいには、つくりせい

をまへにたてすきまにせい兵をかくし置、かたきに馬を立させしと、こまのひつめをうつて取へしやだねつきばぬきつれて切て入、敵かひかばなかをひせな、其引しほに大じ是有、引共かく共一どにひつかけひつかけ いろまばらがけして打るゝな、むかふて敵にあふ時はあいのむちをてうと打ておつさまに切ておとせ、ゆんでへめぐる其敵をば、しのびのたつなをかい取て、かくのひやしをばつくりどん、かつし〳〵しつとゝあをつてめてへこさせ、大將のみばひつくんでくひをとれ必々敵か上手で有ならば、かたきいらんとさへぎるべし、其時やりを取のべ中だんにかまへてみせ二のいきをほつともつて、はつしとはつて其まゝ入てくみあふべし、きよりんくわくよくしんしよの次第うむのたんち、かたきちうつもりごくごくりん〳〵、七よう八よう九ようのほしのさたまでも、其て〳〵にふんのわけ一時あまりにのべたる渡邊かこうせき、日本一のべんせつやとかんせぬ物こそなかりけり、あいもすかさずよせてのせい、南本ノマヽ方より打かこみ時をどつとぞ上にける、城の内より我も〳〵と切て出、ひ花をちらしてたいかいける、もとよりよせては大ぜいにてあら手を入かへせゃければ城のぐん兵殘りすくなく打れけり、くまざは兵ごかねみつ、しやいつまでとたせいか中へむ二む三に切て入、殘らうどう杉山藤内、しのざき兵衞、思ひ思ひに切て出る敵の方より、竹川だん正、あしがら源太をしならべてむんずとくむ所へ、敵大ぜい折かさなり、二人共にいけ取本ぢんさしてひつかへす、はく王丸是をみてのがさしと打てかゝる、竹川取てかへし本ノマヽてむんずとくむ、兩方さ物でうずにて、しばしせうぶはつかざりけり、はく王ゆんてのあしをつよくふみすきまを取てひともみにつよくもみかくれば、竹川かさにおしかゝりなげん〳〵とする所を、はく王大力なれば、まつにからめるふぢのごとくくるり〳〵とついてまわり、下てになつてゆんでのあしをはたとけて、めてへどうとなけふせおこしも立ずくびを取、竹川たん正さたともを、はく王丸か打取たりと引所を、あしから源太取てかへしおしならへてむんずとくむ、はく王こと共せず取ておさへ首をかゝんとする所を、あらきほんまかけ來り、はく王がゆんでのかいなを打おとす、心はたけくいさめ共たした

しとする所を、おさへてくびをかきおとし心よげに引所を、渡邊はしりかゝつて本まかうはおひかいつかみ、そばに有ける大石へ力にまかせて打つくる、源太すかさずむずとくむ事共せず取てふせ、首ねぢ切ててすててんけり、跡につゝきしやつはら東西へおつちらす所へ、かねみつむかふきずをおひなから、打とめたるくひきつさきにつらぬき來る、つなみてなんぢはつまやこ共をしゆごし、三うらのたちまでおち行べし、かねみつとこふに及ずうら道よりおちてけり、其時渡邊つねにこのむ、一丈五尺のかなさいぼうをひつさげ出る、てきの方よりかいの國のちう人川村源藏、かん原藤太、たて石新五かけ長とておとに聞へし大力我々三人かゆう力を心みたまへ渡邊と、こゑ〳〵によばわつたり、つな聞てす萬の中よりたた三きぬきんで、此渡邊に出合てくびをうしない、後に我等をうらむるな去ながら望にて候はゞ、さらば一力ねぢあい申そうと、さきにすゝみし源藏が、こがいな取て四五けんくはらりとなげた、新五藤太、さゆうよりむずとだくさあしつたりと三人共に一所になけ付、こしひざいたみうぢめく所をさらば是からはちつとてつぼうをいたゝかせんと、さん〳〵に打程にみぢんになつてぞうせにけり大將御らんじいさ渡邊を八方より打とらん、それあますなとほう〳〵のよせて共うんかのごとくをしかくるむかふをみれば、大將きよあき八百よきにてひかへたり、うしろをみれは二なんやすきよ五百よきにておつ取まく、ゆんでをみれば三なんしげつな七百斗て打かこむ、めてはかいするがのせいうんかのごとく取まいたり、今ははや渡邊ももれて出べきやうぞなき、上はうてうの天、下はならくのそこまでも、其名をへたる身がやみ〳〵と打れんことはよその聞へもはづかしく、南無八まんとくはん念し、大將なれば淸秋をめにかけ、む二む三に打てかゝれは、さうぢん共にくもの子をちらすごとくに八方へにげさつたり、せんかたなくも渡邊ひとりしするにあらされは、誠にひをかけむりにまぎれておち行けり、かの渡邊がいきをい天下ふさうのゆうしやとて、皆かんぜぬ者こそなかりけれ

第三

わたなべのみだい落給ふかねみつさいご
しゆりの大ぶきよあきは、みたのしようをせめおとし、かまくらに座をすへ、ばんどう八か國のせいをもよふほすに、從はざるはなかりけり、きよあき、きろつの眉を開き、しよぐんぜいに打むかい、さだめて都より打て下らんはひつぢやうなり、かねあらいざわまでくん兵をさしむけ、あとさきよりもひつつゝみ一きものこさず打取、すぐにていとに上るべし、其だんよく〳〵心へたまへとしよぐんせいのてわけをして、扨其身は大くらのやつにたてこもり、ほう〳〵の口〳〵にくん兵さま〳〵せいくばり、ていとよりの打手をば今や〳〵と 三重待いたり、是は扨置爰にあはれをとゝめしは、渡邊のみだい所やひめ君にて、しよじのあはれをとゝめたり、かねみつ一人御供にて三うらのたちを心がけたどり〳〵とまよはるゝ、一めもしらぬいわまをつたいびやう〳〵たる山ぢにさしかゝり、ひめきみの手を取ておもひそめぬ三うらがた、つまにはわかれあとに心のひかされて涙のかはくひまもなく、かせにもまれてこのはのおとがさゝんざとふくかせだにも、もしもつまかとうたかはれ心ぼそさはかぎりなし、立歸りこきやうをは今一度みたの庄、あはれうぢしんのちかいにも我〳〵が行へをは、あんをんにまもらせたまへとふしおがみ、まよひ行こそ物うけれ、あなむざんやなかねみつは、あまたふかてをおいければ、次第にしやうねはみだれつゝ、其まゝそこにだうどふす、みだいひめ君おどろきたまひ、やれかねみつよ心は何にとくるしきか、いかに〳〵とのたまへ共とかうの事をも申さずし、いきもはやきれ〳〵にまなこもくらむばかりなり人々あまりのかなしきに、やれくまさは何とて心をくるゝそ、今にも敵來らんにあらうらめしの有さまやと、こゑをあげてなきたまふ、今をかきりのかねみつ人〳〵のなけきに心を付、くるしげ成いきをつき、みだいひめ君御かいしやくせられ、やう〳〵にをきなをり、あな口おしやかやうにいたでおい候へは、あいはてんはひつぢやうなり、此度の御せんとをみとどけず、あまつさへ山中にてうきめうきめをみせたてまつらん事よみぢのさはり、みやうがの程のおそろしやと、さしもにかう成かねみつもそゝろに涙はせきあへず、みだい涙ともろともにげにだうり

なりことはりや、すまんの敵を引うけて、いくさにはつかれかくまでふかでをおいければ、心くるしきはことはりかな、せめてあれ成こかげにて少やすらい行べきは、いざここなたへとのたまひてみだいひめ君、さゆふの手を取やう〳〵引たて二あしみあしあゆみしが、あうなむ三ぼうもはやおいとま申とて、其まゝかしこにどうとふしなむあみだ佛ともろ共に、ついにむなしくなりにけり、人〳〵さゆふに取ついてやれくまざはよかねみつと、よべどさけべといきたへて其かいさらになかりけり、是は〳〵と斗にてしばしきへ入たまひける、みたいあまりの物うさにむなしきしがいをおしうごかし、扨も〳〵なんぢは一めもしらぬ山中に我〳〵はかりすて置て、かくあさましくはみゆるぞや、おここにはなれ我〳〵はたれをたよりにいづくへかゆくべきぞ、同しよみしにつれ行や、やれかねみつとのたまひてすがりついてはなきたまふ、しよじのあはれと聞へける、かゝるあはれのおりふし此山にすまいする、かりうと三人仕合あしく歸りしが、此由をみるよりもする〳〵と立より、是はふしきの次第かな、いづくの物ぞ、みれば

あたりにしにんも有、ふしきさよととふた、みだい聞召されさん候我々は三うらのかたまでまいり候が是成物を頼みにて、是までまいり候所にかくなりはて候はあはれ御じひに此物のかげをかくしたまらば、せう〳〵せゝの御をんならめと泪をなかしのたまへは、かりうど聞いて扨もふびんの次第とて、しかいをこかげにかくし置、かたはらに立よりさだめて是は渡邊方のおちうと成へしいさめし取、たかはし殿へつれ行ほうびにあづからんといふ、尤〳〵然べし去ながらことのやうすをそとたつねんと、あたりへ立より方〳〵のていたゝならす、必里はいつくの人にて候ぞ有のまゝにかたらせたまへ、おぼしめさる方へおくりとつけてまいらせんと、誠しやかに申ける、みだいなゝめにおほしめされ、かくとはゆめにもしろしめさず、はづかしなから我〳〵は渡邊がつまや子にて候かこんとらくじやうに付三うらがたまておち行候、あはれ御なさけにおくりとつけてたまはれと、泪と共にのたまへは、かりうど聞もあへず、扨こそねがふ所とよろこび、我〳〵は高はし殿の物にて有、渡邊かたのおちうとをとゝめんための物共

なりこなたへ來れとひつたつる、みだい所もひめ君もゆめうつゝ共わきまへず、是は〳〵とばかりにてたおれふしてぞなきたまふ、みたい心におほしめしはたとへは女成共、さすか渡邊かさいしたる身かやみ〳〵と敵の手にわたされんも口をしや、しよせんきやつはらなり共さしころし共（本ノマヽ）ならばやとおほしめし、いかに方〳〵今はなげきてかなわぬ事なれは、とてもたすけん物ゆへにはや〳〵かたきの方へ引わたせと泪と共にのたまへは、おゝよい思ひ切哉じこくうつるにはや來れと、すでになわをかけんとす、みだいまもり刀をするりとぬきいなやに及ずきものたばねをさしとをし、やあおのればらさすが渡邊がつまや子をやみ〳〵といけとらんとや、中〳〵おもひもよらずと、くひふつつとかき切たまふ、のこる二人が是をみて、扨も〳〵やさしき女のふるまひやと、とひかゝり太刀をうばい取、命もうせよとさん〳〵に打ふする、ひめ君あまりのかなしさにのふなさけなや母の命が有へきかや、わらはを打母をたすけてたまはれとすがり付てはなきたまふかり人大きにいかつてなにおのれもつえが望かとて、なさけなくも打ふする、いたわしやおや子の人さすが女しやうのことなれは、大のおのこに打ふせられさけはんとすれ共こゑ出ず、やう〳〵ひめ君母のまくら本に立より、のふいかにはゝ上さませいしのまへにて候御心は何とわたらせたまふぞや、今がさいごにて候は御念佛をわすれさせたまふなよ、あらな無あみだ佛みだ佛とすかりついてはなきたまふ、いたはしや母上はくるしげ（本ノマヽ）成こゑを上、やあ御身はいまた命もうせざるかおとうたるゝ其時は、たゝんとすれ共めもくれてふびんながらも立ゑさる、母か心そおもひやれこはそも何のむくひそや、あゝさて世の中にぶつしん三ほうはましまさぬか、あらうらめしの次第やと、きへ入やうにぞなきたまふ、かり人おゝきにいかりおなし、なにおのればらか罪とかをたれかしるべきやれこんじやうぼねのふてきゆへおもわぬせめにあふ事よやあ源六しよせん口をあかせんより、はや〳〵からめひつたてよと、いたはしやおや子の人たかてこてにいましめてころのぼうをおつ取のべ、あゆめあゆめと跡よりしもつとあてけるは、一ゑにごくそつのかしやくの責もかくやらんとをつ立〳〵それより

も敵のやかたへ　三重いそぎけるかゝる所に、渡邊のつなはみたの庄を切ぬけ、三うらをさして來りしか、ふしぎや山中に女わらべのなきさげぶふしんさよとみねにあかつてみたまへはみたいひめ君なり、はつとおどろきはしりかゝつて二人共にひつつかみ、おのれ何物なればかくらうぜきをなす事ぞ、おゝみればよひわかいおしうだ、扨はおのればらは此邊にすまいをし、ゆきゝの物をせつとうするさんぞくめらな、むざいがきめを手にかけころさんなむげにふかくたるべし、出望のたにへおとさんと二人共にひつくゝり、かうまのちからを出しゑいやつとなげければ、みぢんとなつてうせてんけり、扨人〳〵をさきに立あやうき仕合かな、まつ〳〵こなたへ〳〵と人々を引たて、みうらをさしていそかれける、かの人のよろこび、渡邊かゆう力ここんふそうのまれ物やとて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

第四

ため宗都へ注進并子四天王いくさ立の事

渡邊父子の人〳〵は、ここうのなんをしのぎみうらのたちに付たまふ、ためむね立出まづこなたへとをくへしやうじ、今度それかし君のごだへくはんとしてあつたへさんけい仕、ろしにてうさを承り、おどろきやぜん是へ罷付、はや打たゝんとせし所に、ろうじやくの由を聞、何とかなされ候と心もとなくぞんぜしに、つゝかなくわたらせたまひまつ以めでたく候と、ゑつきはなはたかぎりなし、渡邊承りさればこそとよ此渡邊程の物が、かれていのやつばらにうしろをみする事、人のひはんもめんぼくなく方々におもてをむくる事、近頃はづかしく候と泪をながし申さゝる、ためむねかさねてあゝおろか候渡邊殿、いくさは時のうん心のまゝにはなりがたし、きはうなればこそたせいのかこみを切ぬけ、あんをんにはおはしませことにきよあき、御へんを打たんくはたて是わたくしにあらず、天下をうばゝんためなれはきでん一人の敵にてはなし、かへつて天下のさはぎたり、此上は都へひきやくをもつてかせいをうけいくさのてだて然べしとそ申ける、渡邊聞もあへずいや〳〵其だんは然べからず、はうばいのあざけりめんぼくなし、すでにそれがし三田の庄にて打じにと

おもひさためて候へ共、敵ちかづかねば力なし、只それかしはかたきの城へみたれ入たゝ打しにと申きつてぞいたりけり、ためむねしごくにあまり尤かな去ながら一つは君のためなれば、此たん都へしらせ申さんと、一つうの狀をしたゝめ、もり本太郎に申付いそぎ都へのほせける、扨もしも此城へよする事もやと渡邊をはしめ、家のらうどう五百よき、ほりふかふかとほらせ所〳〵にやくらを上けよせくる敵を 三重待いたり、去程に都にはとう國のらんげきかくれなく、四天王をはしめざい京の諸大名を召れ、此事いかかあらんとないけひやうぢやう取〳〵有所に、もり本太郎はや馬にてはせ來りいそぎ狀をさし上る、みれはさかたの公時殿へと有、則きん時にわたすやがてひらいてよみ上る、其狀にいはく態しさつともつて申上るいしゆは、今度するがの國の住人高はし左京の大ふきよしけ、きやくしんをくは立はかり事をかまへ、渡邊をうたんとはげむ渡邊ふりやくをもつて、かへつてきよしげをちうばつせしむるがゆへにきよあきやすきよ兩國のせいをもつて、渡邊たちにおしよする、みかためいをがうもうになけうつてふせぎたゝかふと申せ共たせいにふせいかなはず、きよ月廿七日よみたのじやうぼつらくせしめ、則それしがしがたちに罷こされ候是わたくしのしゆくいに候はず、天下をみだすげきしんたり、是らのおもむきよろしく上ぶんにたつせられ、いそぎかせいをたまはらば、きやくとちうりやくくびすをめぐらすべからす、よつてしつたつくだんのごとし、ゑいぐはん二年極月二日、さかたのみんふ公時殿へみうらのわだ左衞ためむねと、たからかによみ上る賴信聞し召れ、扨はくはんとうのさうとうじつせつたり、へんしもきうに打てを下さん、則よりよしを大將にて公時ふし、其外子四天王共、五きないのせいをもよふしいそぎむかへとの御ぢやうなり、かゝる所に渡邊源次郎竹つないれいによつて、しゆつしもせすいたりしか此事聞と一しくいそぎ御所に上り、おそれながらそれがしには御いとま申うけ、へんしも早く罷こしたく候と、つゝしんで申上る、君聞し召れ其だんはことはりなれ共、いまだいれいも本ふくせざるに、はけみのいくさおほつかなし、きん日打てをさしむくるは、なんぢはとゞまりかん病せよとの御ぢやうな

り、竹つな承りこは忝御ちやうかな去ながら、父か事心へなく候へば此だんはごめんなされ候へと、すくに御前を罷立、門外よりも馬に打のり、さがみをさしてぞ三重いそぎける去程に君は御らんじ、以上はじせつをかへずはや打立との御ぢやうなり、畏候といそぎ御せんを罷立、おの〳〵よういを三重したりけりすでにこくげんきはまれば、先一ばんは源氏の御吉れいの御はたまつさきにおし立る、二ばんにほうせうの一子あさぎのはたに平井のほうめいひとりむしやとはたのおもてにかきあらはし、うの花おとしのよろひきてつきげ成こまに白ふくりんのくらをかせ、ひやゝのかはのあをりをかけ家十代のいわ切といふ長刀持せ出にけり、三ばんにさだみつかちやくしもへぎのはたにうすいのくはんじやさたかけとしるし、ふしなはめのよろひきてひばりけのこまになしぢまるのくらをかせくまの川（本ノマヽ）のあをりをかけ、打物とうくにはひねりのぼうと、まさかりを打かづかせて出にけり、四ばんにすへ竹のちやくし、あかはたのそのべのくらんとすへはると、はたのおもてにかき付、こんいとおどしのよろひきてれんせんあしげのこまにかいくらおかせ、打のり、五人ばりの大弓持せ出にけり、五番に公時のちやくしこんのはたに坂田あく平田公平（本ノマヽ）と、きんしをもつてかきあらわしくろかねとうの大よろひ一両かさねてざつくとき、七尺三寸の太刀十文じにはくまゝにくろき馬にいかけぢのくらおかせ、とらのかはのあをりにあをかいすつたるあぶみをかけ、八尺あまりのてつぼうじしんゆんでに引さげ、馬ざゝめかいて出たるは山のくずるゝごとくなり、扨次には御大將頼義公一きはすくれて花やかに御きせなが打物馬くらに至まであたりをはらひてりわたる、あつはれ大將軍やとほめぬ物こそなかりけり、扨しつはらいは、こらうの大將として坂田のみんぶ公時、くろかはおとしの物のぐちやくしぢんかさまぶかにひつかうてくろき馬のふとくたくましきにせいしつのくらをいて、家につたはる兩ばのほこ下人に持せ、こちんをしゆこしいてらるる、扨五きないのせいをそろへつかふ三萬六千よきていとを打立それよりも、さがみの國へぞ三重いそかれける、是は扨置三うら方には敵左近のせうやすきよ、二千よきにてためむねやかたを二ゐ三ゐにお

つ取まはして時のこゑをぞ　三重上にける、城の内には渡邊ため宗をさきとして我も〳〵と切て出ひ花をちらして　三重たゝかいける本よりよせては大せいなればかつにのつていろめく所へ源次郎竹つなしうしう五きにて敵の中をかけやぶりはせ來り、大おん上にて都よりかせいのさきがけ三田の源二郎是に有と、大せいのぐん兵をむら〳〵はつとおつちらし扨城中へきつと入やすきよ是をみて、取まかれてはかなふまし、まつ〳〵此ぢん引やとてかまくらさしてぞ　三重引にける、扨竹つなは父わたなべためむねにたいめんし悦事はかきりなし、竹つな申けるは都せいおつ付はつかう仕候、此城にては敵にへだてられ思ふやうにはいくさなりかたし、道まで出むかい一所にかまくらへむかはせたまひ候はゞ然べしとぞ申ける、人〳〵尤とてはや打立たまふ所に都せいよを日についで打程に、ふしさはのしゆくはづれにて兩方行合、御前に畏る賴義御ゑつきあさからずいかに渡邊、をもはさるげきしんにさゝへられ、さぞむねんにおもふらん、渡邊承り誠にそれがしふせうの身を持、東國のたんたいをかうむるかいもなく、かやうにて下よりむほんのおこし候たんきみの御まへは申に及ばず、ほうばい達におもてを合るも近頃めんぼくなく候、公時聞もあへずいやさ渡邊、我かふくちうよりしゆつしやうしたる子にても、たいがかはれは心の内はしれかたしいはんやた人のしやうがいに、十人よれは十にかはる人心、たれか是を存べき御へんなれはこそ敵をたばかりあまつさへ、清重をて取にし打たまふ事こそしんひやう〳〵、まづ〳〵ちんばにいきをつかせ明日たつの一天に取かけん、何も此ぎ然べしとておの〳〵ちんをぞ　三重取にけり、是は扨置敵しゆりの大ぶきよあきは、諸ぐんせいを近付聞は都より賴義を大將にて子四天王ともむかいふしさはにぢん取て有と聞、何十萬ぎにてよせたり共、此かまくらへは思ひもよらず、こしこゑまで出むかい、少あいしらいちぶんのうかゝひ切て出、只一もみに打つぶさんはたな心の内なりと、しやてい左近のせうやすきよに、一萬よきをあひそへあねあらいさはに、やぐらを上ゑびらやなぐいおつ取そろへて、よせくる敵を　三重待いたりかゝる所に、坂田の公平敵こしこゑまでむかふたる由を聞よりも、何樣こよひ

ぬけがけをしせき所をふみやぶりかうみやうにせんと、人をもつれず只一人しづ〳〵と行所に竹つなも敵のぢんのはりやうをみんため、一人ぢんやをしのび出こしころにおもむく道にてはたとあふた、竹つなみて是は公平いづくへか、公平聞て御へんの行所へ參、是〳〵公平それかしはもしみかたのわか物共かぬけかけせん事もあらんと、せひせんために出て有、公平聞て其事に候、我ももし若物共がぬけがけ致ば同心の心がけなり、御へんの心とさのみちかいはなきは、あゝきやうたくしや竹つなとふり切てゆかんとす、竹つなしばしと引とゞめ、ぬけがけもさきがけも事によるひらにとゝまりたまへ、又此金平かことにおいてはおかまい御むやう〳〵、いやさひらに〳〵とたがいにあらそふ所へ、ほうめいさだかげすへはるこよひぬけかけをしほまれを取らんと三人打つれしづ〳〵と行所に、竹つな公平に行あい是は〳〵して〳〵方〳〵もぬけがけ成か、公平おどろきはつ扨も〳〵我一人のほまれをとらんと思ひしに、竹つなにあひつれがおほくなりたると、一どにどつとぞわらいける、よし〳〵ことのたとへにつれあれは三里まわると、げれつのことばに申なりいさもろ共にぬけがけせん去ながら、つれあまたにてはぬけがけにはあらず、つれがけにてこそあれよし何がけにもせよ、我〳〵五人かゆう力にて只一もみに打やぶらんと、五人打つれそれよりもこしころさしてぞ三重いそぎける、程なく城にも付しかば、竹つなせき所に立より内のていをみてあれば、いまたよぶかなりけれは、す萬のぐん兵かふとのしころこてすねあてをまくらとし、せんごもしらずふして有時に公平先此門をおしやぶらん尤とて、五人一どにころをそろへもんのとびらにてをかけ、ゑいやつとおしければ、何かはもつてたまるべき山のくづるゝ斗なり、おしに打れしする物其數をしらず、ねおびれたるぐん兵共、あはてふためく所をはむら〳〵はつとをつちらす大將やすきよ肝をけし、それあますなとげしすれば、我も〳〵と切て出る其時渡邊大おん上にて、四天王かぬけがけよつくてなみをしらせんと、あく所なん所へおつつめ〳〵切ふせ殘りしやつばら四方へばつとおつちらすやすきよかなはしと思ひけんかまくらさして引所を、渡邊をつかけむんずとくむ、ら

うとう共おちかさなり、竹つなをてこめにせんとせし所を、公平はせ來りかたはしよりもこくびやくみぢんに取てなけ、扨やすきよをひつしばり、さきにおしたて五人手に手をひつくみ、みかたのちんへ引て入たる此物共か有樣、むるい、きたい、めうふしぎのでけ物かなとて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

第五

竹綱公平ぬけがけ井きよおきさいこの事

かくて五人の物共、やすきよをからめ取大將の御めにかくる、賴義御ゑつきかきりなく、それ〳〵とてかたはらにてくびをはね、さあらば敵おくびやうかみのさめぬ內にはや打立との御ぢやうなり、畏候とて我も〳〵とかまくらにおしよせ、二ゑ三ゑにおつ取まはし時のこゑをぞ上にける、城の內にもかねてよういの事なれは我おとらしと、きと口におりあいて敵を入じとふせぎける、中にも大將きよおきこしごへにてかいなくみへし、み方のはちをすゝかんと、うでをさすつて引へたりける所に內よりせき次郎もりとし、あいばらくらんどうぢはる、ゑ物〳〵をひつさげいで方〳〵をもうけのため、城をよういに致たり、是へ御入候へと大せいの中へわつて入、はらり〳〵と三重ないだりけり手本にすゝむつわ物を、其數あまた切ふせゑゝ物ぐさき軍やと、あたりをにらんで立たるはすさましかりける次第なり、爰によせての中よりもみのゝ國の住人おやまの源太、らうどうに長井の新八とて大力の物を引ぐしいかに新八それがしさき成くせ物とくまん、なんぢは跡成さまたげ物とくむべし、と二人共にはしりかゝりいなやに及ずむずとくむ、さあしつたりともみあいしがさすか敵は大力にて、二人共に取てふせくびふつつ〳〵とねぢ切、何と都ぜいにたてかたきはおはせぬか、なまくげばらをなぶつたるとはばつくんちがい申さんと、かふげんはいて引かへす、金平みて是〳〵なにとことばにもあはぬ人〳〵かな、爰になまくけの事存たるかのこつたり、ついでにくび取たまへ、次郎もりとし立歸りしれたる若物かいゝ事や、扨なんぢはいか成物ぞ、金平聞もあへずおゝさそれは力くらべの後なのつてきかせんと、はしりかゝつてむずとくみ、こし車にひつかけ取てなぐる、あいばらすかさず金平か

たぶさを取引のけんとせし所を、めてにてこがいなな取て引ふせ、うはおひ取て二人共にひつくゝり、何となまくげのはたらきもちつとてごはき物なり、それがしがなをめいとまでもわするな、くげの中にもさかたの金平くげといふ物そと、ふりかたけてそかへりけり、大將きよあきこらへかね、大だちひつさげかけ出、我こそよこ將軍に十代のかうねんたかはしさ京の大ぶきよしげがちやくし、しゆりの大ふきよあきなり、我と思はん物共はかけよてなみをみせんとて大おん上にてひかへたり、爰に川内の國の住人石川きやうぶきよ正となのつて、おもてもふらず打てかゝるを、まつかう二つに切わつたり、二ばんに山城の判官つねきよ出げんさんとかけよるをほそ首ちうに打をとす、三ばんにおはりの國の住人きぬがさ左衞門もりとしあますましきと切てかゝる、車切と云物にずんと切ておとしける、四ばんにさがみの國の住人かねこの八郎そこを引なとかけよるを、から竹わりと云物にざつふと切ておとしける、五ばんにいかの國の住人はや島太郎となのつてすきまもなくかけよるを、もろひざずんとなぎすへのつけにかへす所をほそくびちうに打をとす所へ竹つなはせ來り扨もいさぎよきはたらきないかにきよあき我こそは渡邊のつなかちやくしみたの源次郎竹つなと云物なり、いさせうふをけつせん清秋につこと打笑ひ、おゝ千ぎ萬ぎの敵より汝おや子を待うけたり、いざ〳〵くまん尤とて押ならべてむんずとくむ、竹つなかうの物なれ共、清秋事共せず内がらみにひつしめ四五間ぐはらりとなくるひらりとかへり中にずんと立たるは、ひてうなんとの如くなり、あしふみなをす其ひまにほうめいすかさすむすとくんだ、是をも事ともせずかたをこさせ大もたしになげたをす、渡邊とびとりゆんでのかいなをむすと取、ほうめいめてよりしとゞだく、清秋二人共にゆんでめてにひつはさみ、城中に入らんとす所へ、公平はせ來りきよ秋かたぶさを取てうしろへゑやつと引ふせ、たかてこてにいましむる、定景すへはる二人の物からめてよりもはせ來り、しけつなをいけ取いそぎ大將の御めにかくる、大將御ゑつきかぎりなし扨一々に首打をとし、今は本望とけたりとて都をさしてかいぢん有、せんしうばんせいめでたしともなか〳〵申はかりはなかり

けれ

寛文三癸卯年九月吉日

菅原親王

きんひらみやくろんの事

第一

すがはらのしんわう

さてもそのゝち、それおもんみるに、君かみにあつて、まつりごとすなをなれば、國とみたみやすし、きみしものれいたゝしからざるときんば、かならずこつかみだるゝなり、爰に源のよりよしこう、あさひ將軍もりずみがざんげんゆへ、天子のちよつかん身のうへに、むじつのつみをおはり成、あつたのみやに、す月をくらせたまふといへども、くもらぬかげのいさぎよく、ついにさんにんもりずみを、御心のまゝにつついはつあり、こたひ花さくみよのはる、つきせぬ御うんぞめでたけれ、いくさしづまつてよくしつ、みかたのうちじにできのくひかずさきがけぶん取其しなじな、御ぎんみ有ちやうめんに、かきしるさせつまびらかに御らん有、まことにこゝんのめいしやうやと三重かんぜぬものこそ三重なかりけれ、しかる所へはなそのゝさいしやうゆきふさ、都よりちよくしとして、卯十一月二十五日に、あつたに下ちやく有、大くじがたちに入せたまひ、よりよし公にたいめん有、げきしんちうばつ天下そう〳〵のたん、今にはじめぬちうきんとはいひながら、ことにゑいかんあさからず、いそぎしやうらく有べきとの、りんけんなりとちよくせんのだん、いとしづかにのへさせたまふ、頼義りんげんつゝしんで承はり、かしこまつて候去ながら、ゆきふどの事をしづめて聞たまへ、それ君はかみにあつて、しんのめぐみしんな下にあつて、ちうをはげむ是天ちつがふふうう、時にしたがうだうりなり、然に君ふ將のねいじんをちか付させたまひ、天下のためにかめいをなげうち、さんやがうがをすみかとし、ちうやにせきをやすんせず、ろうをつくし頼義を、ひぶんの御ちよつかん有、ぶんにもあらず、ぶにもなく、ほういふたうのもりずみを、あさひ將軍ににんぜられ、天下のまつり事をゆるさせたまふゆへ、しよ人のなげき國のついへ、申もなか〳〵おそれ有、すべからく頼義なましいに、國のふ將のやくとして、ばんみんをすくはんと存ゆへ、にんじかたき力をはげ

み、どくしんすでにめいほうたり、只かんきよしてしよくとばしからんと、ふつつと思ひ切て候へ共、かさねてりんげんのおもむき、とかうのぢさんもつたいなし、時をうつさず罷上り申さんと、ちよくとうあればすへみつくわんゑつかぎりなく、ていとに歸らせたまひけり、かのもろこしのしゆばいじんな、たいふのせんじをかうむり、にしきのひたゝれを、ふるさとのゑいもんにかゝやかし、我かてうの頼義公はためしまれ成ちよくをうけ、すみなれたまひし花の都に、二たび歸らせたまふ御いくわうのめでたき 三重うらやまさるはなかりけり、くはらくになれは、御しやうぞくはなやかに、きんりをさしてぞ上らるゝ、しよきやう大じん御上洛めでたう候と、何れもしやうくわんはなはだしく、おくよりもいでの中なごん國長をもつて、此たび上洛のだん、きみもあさからずおぼし召ざんねん少もあいのこさず、いよ〳〵てうかのまもりたるべき物なり、いつもながらのちうきんとかうりんげんにつくされがたしと、右大將にんせられ、あさひ丸といふめいけんのくだされゝ、しかのみならずよしいへをばむつのかみにふせさせたまふ、頼義たぐいなきちよくじやうのだん、かんるいきもにめいじ、とかうのちよくとうにもおよはれず、ありかたし〳〵と 三重ごせんのたゝせたまひける、其頃またあはさぬき兩國のしゆご、むら川ぎやうぶの太夫あきすへとてしよくぶたうのあく人有、さればさんぬる頃、あさひしやうぐんもりずみぎやくしんをくわたてし時、天下いつたうせしめは、四國中國のたんだいにふすべきとのやくだくの下しふみをうけ取、一門家のこいんぞつし都へ上る所に、もりずみははやさきだつてびしうあつたへうつてくだり、そくさしやうぶにかけまけもんやうのこりなく打とられぬるときく、こはいかにせんとあんしわつろう所に、ほどなくけんしいつたうしやうらくありけれは、今ははやひくもひかれずいるもいられず、つるなきゆみはぬけとりのごとくにて、たちい心にまかせず、とやせんかくやあらましとあんしわづろう所にげんし方より使はせきたり、あんないかうてたいめんし、是はふしやうよりよし公のかうけんさかた兵ごのかみ公平よりのつかいにて候、あきすへどのはとくよりのさい京たりと聞へ候か、御所の御禮をばなにと

ておそなはりたまひ候ぞきつとさん上有べきとの仰にて候と、あらかに申せばたごとはつと驚き、其だん秋すへに申聞せ候はん、是に御ふち候へといそき奥に入、よしをかくと申せば、あきすへすはやとどうてんし、扨いかゝせんとひしめく時に、家のおとなみなせの兵衛進み出とかゝ御ひやうきもつてのほか成ゆへ、ゑんにん是有よし、それがしつかいと打つれ、御所にまいりふるなしこうのべんぜつ、ずいふんちんほういたし申べし、しかしなからかさねてつかい來らんもぞんぜず、其内に成ほど御身を取みだし、おもき御ひやうきのやうに御みせ候へといたる所を罷立、おもてをさしてかけ出つかいのものにしきたいし、扨もしうにて候あきすへはあくびやうにせられぜんごをみだし候ゆへ、御れいぢさんいたされ候、此おもむきりよくはいなからそれがしさん上せしめ申上候はん、いざ御とも申さんと使と打つれ、みなせは御所へぞいそぎける、其後に秋すへは、家の子らうとうを近付、病中のていにさをかへよと其身はおくに入けれは、家の子侍共是ぞ誠に一大事とたゝみを二でうかさねしき上さも有そうに取つくろへは秋すへは大わたはうしにてかしらをつゝみ、いかにも取亂したるふせいにてよう〳〵と立出、たゝみの上にむずとざし、うたがいもなき病人によくにたるべし、さるにてもみなせ何とかしたるらん、おぼつかなしと相待所へ、大いきついてはせかへり、まづわにの口をはのかれ參候、御病きのよしを、さま〳〵ちんし申候へは、頼義をはしめ殘輩はそれはさもあらんこつにくあれはやまふ有人かいの、四百四病はいつさし出べき共しれぬは、人の身の上と、取〳〵さる其中に、れいのさかたの公平さらにうけつけず、もろこしひしよのちりやく物かたりを引出し、せひそらわつらいたるべし、むかいに打こせと既にあらきに及しを、色々へんぜつをつくし、まつ一ぎをは申ぬけてかへり候が、かさねてのせんぎにはなにとかあらんも存せす、誠に公平は物いふこゑたに人にかはりてすさましくぐんぢんにておもてを合物なきはことはりなりと大あせ流しことつぶさにあいのぶれは、あきすへ聞て、あつはれ御へんなよくもたはかり仰て歸られたり、重ねてのせんぎを相またばこそ、けふの日たにくれ行ば、五十き三十きつゝせいをくり出

し、こよひ都の内を引はらい、ない〳〵いひ合し九國中國のせいと、一しよになり、天下のとうらんつちをかへしくもをたて、すきし頃あつたにて、うたれし輩が、かばねのはちをきよめ、身の本くわいをもたつすべし、とくして日のくれよかしと申もあへぬに、兵ごのかみあんないなしにつッと來る、秋すへは身のうせはてと、にわかにまくらを引よすれば一門家の子は色をへんして爰をせんと、かひんやうす、公平ゑしやくもなく御めんなれ方々と、ねめ付〳〵とをり本ノマヽ大びざくんてうとなをり、いかに秋すへ殿、いれいのよし君聞召され、御みまいの爲に公平をつかはされ候、げにも以外とみへたりいてさらはそつとみやくをうかゝい申さんと、よにもあらくてをむすと取、ゆんでめてやゝしはらくかんがへ、くはん〳〵と打うなづき、おゝ取て候村川殿、それみやくの次第といつは、三ふきうかう、こぎうそくしや四きのみやく、なん女はんみやく七びやう八りくどうやしのみやくなどゝてさま〳〵は有とはいへ共、我は只物のふの斗事、人のしんていの誠いつはりのみやくをよつく取おほへたりそも〳〵御ぶんが煩はもりすみといひ合かせの爲都へのほりぬれ共、もりすみうたれぬ、我我はていとへ入、なましいひくもひかれず、まついれいとかうし時をのべげんし方へゆたんをさせじせいをうかゝい國に歸り、一せんをはげまんと、てきをたばがるそらわつらいと取たるか、ちがいたるか、ぎばへんじやくにもまさりたるみやく取の大めいじん、さかたの公平と云くすしがけんし方に有内は、にせ煩はむやう、かやうの病には御所にめいよのくすり有、一ふくのみてみたまへとこかいな取てひつたつる有あふもの者共是をみて、こはろうせきなり去とてはかんしよくのおとろへ樣にて誠いつはりはみへ候べし、さすが兩國の大將をいかに、てうしなれはとて余り成事共なりと、一どにはらりと取つく、公平につことわらい、それがしがてににぎつたる物は、天かさかさまに打かへる共、はなれましそれ人のかんしよくは、一日しよくせす一やまとろまず只ひたすらに酒をのみけつきを上に引あくれば、こたいのちづに上りまなこすじはり、かんしよくおとろへる物なり、日本ぶそうの公平が一たび取たるみやくはたがうまじ、びろうなりおのれらと、四はうへばつ

と取てなげ、むら川をさきにおしたて、御所をさしてそかへりける、公平かふるまい、きせん上下おしなへみなかんせぬ人こそなかりけれ

第二

よりすみゆうれい并あきすへさくびやう

其後兵ごのかみは、あきすへをひつたて御所に歸りまつ其身一人御前に畏、それかしは村川かたちへ打。こへ、斗事のさく病ひつぢやうみなし候間、ひつたて參候ぢこくうつさず御前にてくびねぢ切てすて申さんとずんと立を、君しばしとおさへさせたまひ、そらわづらいはともかくもかの村川はもりすみ一身の者なればとかくちうばつすべきなりさりながら、かれをそくさにせつがいせは、中國西國にいまだのこりしもりすみ一身の輩、扨は我も〳〵とかくのがれぬとがなりと、みな城くはくに取こもりなば、國のさはきとなりぬべし、せんずる所かれがとがをかろくし、一たんたすけおくならばきうしうのぞくと共、村川すでにゆるさるゝ上は我〳〵もべちぎはあらじと、みな〳〵都へ上るべし、時に、一どにめし取のこさすうんきをはね、諸人のみこりにさらさん事、ばんみんのさはぎせいたう是にしかし、いかに〳〵と御ぢやうあれば、公平承あつはれ道にあたりたる御けいりやくにて御ざ候、か程の御ぢりよにてこそは天下のぶ將共そなはらせたまふと、ふかくかんし御前を罷立、かたはらにおしこめ置たる村川を打つれ、御前にひざまづく、ぶ將御らんし、いかに村川、賴義天子のげきりんかうむり、てうてきとなりぬる事なれは、めん〳〵ももりすみに心をつうし申さるゝ事、うらみ共存せず、其上御ふんのせんぞは代々打つゞきたうけゑちうしんの家なれはせんかうのよしみを以、しやめんせしむるなり、いこをはたしなみ申されよ、かつうはじよのおきても有百日が間は、しゆつしをやめ、かたくへいもんいたされよ、とく〳〵と有けれは、あきすへ二のいきほつとつきさん候それがしもりすみに一身とは皆人の申なしにて候、御悦びの御禮におそなはり候事、ぎやへいもつての外にてせんごふかく候ひし間存ながらぶれいに罷立候とかく有かたきは御かうをんと御前を罷立、ひとへにゆめのさめたる心ちにて 三重やかたをさしてそ歸りける、

宿所になれば、家の子らうどうこは存の外成御きたくかなと上下さゝめきわたりける、秋すへ聞てさればこそおもひの外成仕合にて、かやう〳〵の次第なり此うへはおきてをふかくあいまもれと、四方の門をかため、かまいてみたりにしゆつにういたすなと人をも入ず出もせず、引こもつてぞいたりけるつねにもとう物とてはそらはう〳〵とふく風まど打よの雨ならでおとづれかはす物もなくあまりにわびしき折からなれは、らうどう共を近付、かくむもれ木と成事は身より出せるざいとはいゝながら、思へばあまりにむねんなりと、又おくしんの引おこし、そば成びはを取上是こそもりずみのかたみなり、されはしていのゑんなおやよりもふかきとかや、かの天ぢくのしゆば大じんなししやうのために八つざきにせられ、もろこしのどんらんな、しのめいにかはり、とらのゑぢきとなりためし有、我も十四年が間ひわのひきよくをならいたるもりずみのしおんをば、かばねはやぐはいにさらす共、一たひはほうぜん物なむゆうれいとんしやうぼたいと、ゑかふしりうせんたくほくやうしんそうの三きよくを、かんにたへてひきならす、誠につたへしばちのおと三重心もことばも及ばれず、さもしん〳〵とすみわたりたるにおもより、よにあやしけ成物、すご〳〵とあらわれあらなつかしのひきよくやな、我そすぎにし頃あつたにてほつせしあさひ將軍もりずみかぼうこんなり、いちねんのまよいにて、しゆらのちまたにちんりんする身くるしみ思ひやられてたまはれ、よくもしていのよしみをわすれずたむけたまふびはのきよく、しんいをやすめ候なり扨も此度頼義が御へんをたすけおく事しんじつと思ひたまふ、あさましさよそれかしに一身せし、四國中國の輩をすかしのほし皆一とに都の内にてのこらすちうばつせんとのけいりやくにて、しはしかくてさしおくか、ついにはのかれぬしめいぞ、されば明日はげんし一とうやはたのやしろへさんけいせしむるなり、其間ていとをおち身のがいをのかれたまへあらなごりおしやとひたんのこゑはれい〳〵としてすがたはみへずなりにけり、あきすへすぎにしむかしのいまさらに只まう〳〵として立たりしがぼうぐたり我心らうどう共を近付、只今のを聞たるか、扨はかたきふかき斗事にて我をはか

くさしおきたり、とてもしせんず命明日やはたさんけいの其るすに、頼義のたちにおしよせ、みだいを人しちにばい取九州へはせ下りきう國のせいと一所になり、今一ど天下をとうらんせしめん何もよういれと、つがふ其せい二千よきひし〳〵と出立すでに其よもあけければ、あやのかうじへふたてになりて取かけ三重時のころおそ上にける、さればにや御所には頼義ふし四人むねとのかうけんのこりなく御供にてやはたのやしろへ御さんけい有、御るすの事なれは上を下へとかへしけるされ共みたい所の御めのと、くり原の庄司弓ひつさげ立出、何物なれは御門外へこまのひづめをけかけほうにそむけるろうぜき、けみやうしつ名あきらかに、なのれ〳〵とよばはりける其時あしけの馬にのつたるむしや、こまたじたじとあゆませ、そも〳〵只今はつかうの大将は村川きやうふの太夫秋すへなり、しいしゆのたんなたかいのしんていにあきらかなれは、事あたらしくのぶるにあたはず、只すみやかに此でんをあけてのけとぞのゝしりける、くり原此由聞よりもから〳〵と打笑い忝も天下のぶ將の御やかたをあけてのけとはいか成事そ、聞もなれさることば哉、いかにあきすへ御ぶんなぢうざいのとかをしやめん成し其御かうをんをざんしわにすれ物まふでの御るすを心がけ、又あくきやくをくはたつるだん我とひに入なつのむし、天めいいづくにまぬかれん、かく云何がしはみだい所の御めのと、くり原の庄司といふ物なり、なんぢかやう成あく人は天よりはつはるとくのやうけてみよといふまゝに、三人ばりに十三ぞく取てから本ノマヽと打つかいもとはつうらはつ一つになれと、きりきりと引しおりひやうとはなつ、其やまつさきにすゝみたるさかいの九郎がくひのほねをふつつといきり、あきすへが馬の三つにはつしと立、是をいくさのはじめとしてさし取引つめいたりけり、其ひまに庄司かちやくし傳内兵衛かつみつは、物のぐかためはしり出父の庄司をしのけ、一もんじにわつて入ぎよりんくはくよくに三重ひ花をちらしたゝかいける、いくさ中ばの事成によせてのぢんよりも、七尺ゆたかの大男、あらいかはのよろひをきぐんばい打はひつさけゆらり〳〵とあゆみけるかみ方のせいをはたとにらみ、よになまぬるきいくさかな、しごくうつさ

はやはたさんけいのげんけのぐんせいかけ付すこふる大したるべし出〳〵それがしたゞひともみにふみつぶし、みだいをそくざにばい取西國下向をいそかん日頃ことばをはなせし國山がはたらきみよといひもあべず、もつたるうちはをかしこへなげ、下人にかづかせたる長刀おつ取むかうてきをさいはいに三重はらり〳〵となぎにける時もうつさずはやりおのわか物共三十六きまくらをならべうたれければ、今ははやおもてを合物もなしすでに御所中色めきたつたりけり、くり原せうし是をみて、あゝしなしたりと太刀ひつさけはしりかゝりかけつはづいつ時をうつしてたゝかいしが、國山なにとかしたりけん長刀のえをまん中より切おられあわやとみゆる所につつとくゞりむづとだき、ゆんでへ、どうと打たをしくび水もたまらずかき切けり、ちやくし傳内兵衛父かさいこをみるよりもはつといふて、一もんじにかけいつてむづとくみ、おのれおやのかたき成物をほねはみじんにくだくる共、くんだる手をはなさしなむうちのしんぞいや〳〵とせいきをもんではげめ共、力まさりの國山にて物のかず、めてへひつかけまつさかさまにけたをしくびねぢ切てかはとなげと有所へさつと引もはや人はなきぞかけ入〳〵とげぢをなす、いまはげんしの御うんこれまでとみる所に六十斗のにかうつげのぼうひつさげ、すいさんなりおのれらさかたの公平が母が、是に有はしらざるか、出てなみの程をみせんとつげのぼうを水車にまはしむかう物のまつかうにくる物のおしつけほろつけくさずりのはづれあたるをさいはいに三重はらり〳〵となぎにける、いまだ時をうつさぬまに、くつきやうの兵其かずあまた打ければむら〳〵はつと引にける、國山みてすいさんなりとおがみ打に打をちやうとうけゆんでへくゞりたぶさを取てくびふつつとねぢ切ける、せらだ兄弟あつはれ己は女の身としてしれ物やととんでかゝるを、心へたりと一しよに引よせ力にまかせしめころし女も女によるへし我と思ふ物あらはかゝれ〳〵とよばゝれとおちてそうなくちかつかす、只一人にてみだいのごなんをすくいける、にかうの力げにも日本ぶそうの公平が母かなと、てきもみ方もおしなへて皆かんせぬ人こそなかりけれ

第三

あきすへむほん并しんわうをすゝむる事

其後あきすへは御所をそくざに打やふり、みたいをうばい申さんとたくみしちりやくそういして公平が母にさん〳〵におつ立られ、まばらになりてひかへしが、かくてぢこくうつらば、やはたさんけいのげんしの輩はせ帰りなば身の大事に及へし、とてもかなはぬ物ゆへにいくさはもはや是までなり、かさねてくわいけいのはぢをきよめんと馬引よせ打のり、殘くんせい引ぐし三重九しうさしてそおちて行、是は扨置つくし大名べつきちくごの守みつあき、これとふひごの善次まさのりは、村川しやめんのよしを聞、扨は我〳〵もしさいはあらじとはやく上洛せしめとがをしやしてかうさんせんとよを日についてのほる所にびつちうの吉村にてはたとあい、たかいに是はと一しよにより、まづあきすへ都のしだいをつぶさにかたれば、いつれもよこてをてうとうち、こは聞しにたがいたる事共かな、ごぶんもりずみ一みせしとかをゆるされほんちあんどのよし聞へしがしからばわれ〳〵もべちぎあらじとないだんしいちづに是までのぼり候、あきすへ聞て、もつ共さやうにきかれたるこそことはりなり、それはめん〳〵を都へすかしのぼせ、いつしよにほろぼさんとのはかりことにて、それがしをはすこしか間わざとゆうめんいたしたり、とにもかくにももりすみ一身のともがらをは、ねをたつてはをからさんとのせんぎなりと、大いきついてかたれば、二人の者扨はのかれましと本ノマヽ身にきはまつて候な、此上は天下をくつかへさん斗事、たかいにほねをくだくべし去ながら我〳〵斗にてはしこくのせいつくましきあはれねかはくば然へき大将もがなとしんいをくだきせんぎす、あきすへすゝみ出爰にくつきやうの事こそ候へ、せんてい一のわうじすかわらのしん王御力はん人にすぐれさせたまふにより、うんしやうのもてあそびをばよそになし、ひたすらきうばの道を御けいこ有し御とがによりはうきの國なはのみなとにる人ならせおはしまず、いざ此君を御大将とあふぎ奉らん人々いかにと申せば、何れも誠に御位と申御きりやうといひ是にましたる事あらず然共かやうのぎにくみなさるべきや御しんていの程計がたし、あきすへ聞て其だんを

ば村川にまかせられよ、いざやへんじもきうにおのおの打つれ 三重はくしうさしてぞいそぎける、なはのみなとになりしかば御ざい所はいづくやらんとあなたこなたとたつぬる所に、爰に有はまかげにまつの一村しげりあいたる其中にしばをりむすびよにもあやしき竹のかきくさばう〳〵とすす内よりもことのねかすかに聞へける、村川はつと思ひ立より聞ばうたがいもなきしんわうのつまおとなりよはさまさまにへんくはすれ共かはらぬ色はひきよくかなとしばしのとぼそのあれゝより（本ノマヽ）、さしのぞきみればいにしへみ奉りし御すがたとはばつくんにかはり、御かみそらさまにはへ上り、ひげまう〳〵たるふぜいにてこと引ならしおはします、其時あきすへこしよりよこぶえ取出しことに合て 三重せいかいはをこそふきにけれだい一第二のけんのこゑさく〳〵としてうなばらまでもきよやかにしんわうゑいかんかぎりなく（本ノマヽ）、かくすぎぬればあみどをさり〳〵とおし開きあきすへを御らんし、こはゆめかうつゝか扱たゞいまはなにのためぞ思ひよらざるふえのおとつれ、あらむかしこいしやいかに〳〵とのたまへは、あきすへつつしんでひざまづきさん候何事も皆むかしと成はて候、すべてよのさだめなき御事今にはしめぬ事ながら、御すかたをおがみ奉にうつゝとのみ存候、扱只今さん上仕だんべちぎにて候はず、もりずみがさいごより此間の都のてい、一々次第にあいのべ、君はばんじやうの御あるし十せんのていゑにもそなはらせたまふべき御身の、さしておかせる御とがなくかゝるゑんりにうつされさせたまひ、よにもつたなきしまのゑひすとなりはてたまふだんむねんとは思召れすや、それげんざいのくわをもつてみらいの引となればか、かくむもれぎとくちはてさせたまはん事、のちのよまでもつたいなく存候、いそいでぎへいを上させたまひ候へ、是にまかり有候ともがらは、きくちちくこの守是とうひごの善次まさのりとていづれもすだいきうせんの家としてぶゆふのほまれ其なをあらわし候、両人さん上仕候うへは中國両國はみな御はたしたにて候、すべからく天のしゆんくはんたゝ今なりはや〳〵思召立せ給ひ候へと。じんづうほうへんのべんせつより、なをあきらかにことはをつくしすゝめける、しん王つく〳〵と聞召はかなやもりず

みはそれがしときんししゆのともとしてす年のよしみなりけるに、うたれぬるこそふびんなれ、我此四五年が間は、佛道に心ざししやばのまうしうをばむちうのたはむれと心のあかを一すゞにうちみがきむじやうぼだいとくわんねんする所によしなきいまの物がたりにてまたあくしんむねのけふりとたちのぼる、つら〳〵ういをあんずるにほんのふそくぼだいしん、あくといふもせん、おにあればこそ佛もあれ、三がいむあんゆによくわたくのちのよのかしやくのつみはともかくも、一つはもりずみがきやうやうといひ、又は御へん是まではる〳〵とおとつれ來る心ざし、いかでむなしかるべきや、にんにくじひのしんていを、じやけんほういつのしゆらのちまたに引かへし、けんしの者共がゑいくわのまゆを打やぶらん、我思ひ立上は、頼義がいせいも公平がゆふりき本ノマヽも風のまへともし火ならんそれ日本なしんこく、何事もしんれいにたつせずといふ事なし、然ればしんわうとううらにうつされて候此間せんあくにつき此國はつさきごんけんを深くあふぎ申なり、かのしんせんにてはたを上ぐわんしよをおさむべしと、御もんのはたをしたゝめさせ三重はつさきさしてぞいそぎたまふ、はつざきになりしかはごもんのはたをおしたて、へつたうをうを御まへに召れ、しんりよにかなふやうにずいぶんいのり申されよまつよろこびのはしめに、しやきんひとふだたまはれば、べつたうゑつきかぎりなく、しんじつの御きねんなどかはのふじうなからん、こなたへ〳〵としん王の御とも申三重しんせんさしてそまいりける、おのづからにやにこりゑのしゆらのちまたをいのるにぞ、おりにふれたるかふとぐさ、みなみの山はやはぎがたけ心ならずも物のふの、引やひかずやしらいとの、みなぎりおつるたきつせは、いはにくだけてちるみつのなかれのすへはかめかいけ、西はよろひかみねつゝきこずへ誠に物すごく、ましやうのすみか大せんも程ちかし、北はなかぬまそこふかくこてさしばらやゑびらがいけ、みこしにみゆるまつさきこすへにさきのとびかうはげんしのはたかと、うたがはゝひがしはばだいじたてがたにした行みづもこほりとぢ、そらふく風もすさましゝ、身にしみ〳〵とかみ心、かずのらいはい奉るゟキしん王あふぎ取なをし、そも〳〵此

御神のらんしやうはいかに シテへつたう承日本かい
ひやくじんむ天わうだい三のわうじとくらのないし
ツキさて此所へのくわんしやうはいかに シテちうあ
い天わうのきようみづのへたつ三月十七日 ツキげに
ありがたしいか成人のこんりうぞ シテたち花のうだ
いしんみつあきの御こんりう弓やかみのしゆごじん
たり ツキあふあおくべし〳〵さらばくはんしよをさ
さけん 二人 発 にしきりの年より此方けんしの一とう
四かいを我 せめ ゝ〳〵におうりやうし、ばんみんをくるし
めもろこしにも、我てうにもさらにれいなきせんだ
いみもんのあく人なり、さるによつてしん王國の
ため人のため此大事を思ひ立、しんめいわくはうの 本ノマヽ
御まなこせんりばんりにかゝやかしかつ事をいやく
の内にみせしめたまへ、然においてはとうしや日本
だいりやうごんげんとみやいをあらため申べし、ま
づ此とうざいの山〳〵たに〳〵引たいらげ、二百よ
ちやうにちをひかせ天ちくのもんしゆ、せんたいと
うのわしのみやまをうつしつゝ七だうからんたまの
くうでんしつほうのまきばしら、しやつかうのゆき
けたるりのとひら、あさやかにはりのかうらんやつ
わたし、玉のたるき五しきのてん上さんがうのけた
うつばりあやのみちやう、にしきのれんだいこがね
のとうろう、三百六十二六じちうにたへまなくあや
のはたほこ、百ながれじやうらくがじやうのかせに
まかせてひるがへしあんやうせかいをまなぶべしめ
のうのとりい、しろがねのし、こまいぬ、いがきはか
うやうらんけいし、しゆろうくわいろう四のもん、し
やうごんしつほうちりばめて、みきはのいけにはほ
うらいさん、四せつのしきをまなびつゝ、さんここ
はくのはしをかけ、ごくらくじやうとはまのまへに
むねのはちすくうにひらき、五百よ人のねぎかんぬ
し、八十四人のみこをそへ、さつ〳〵のすゝのおと
かぐらおのこのふくふるに、こずい三ねつたちまち
に、むみやうのゆめをさますべし、あふきねかはく
はかたきをはんりにきりはらい國土安おんぶうんち
やうきう、さいはい〳〵うやまつて申す、すがはら
のしんわうなむきみやうちやうらいと、くる〳〵と
まきおさめないじんにこめにけり、しん王のひつせ
いすへのゑいくわはしらね共、時に取てのふんしや
うやと皆かんせぬものこそなかりけれ

第四

ちかとし心がはり并女房じがいの事

そのゝちすが原のしん王はぎやくとう共がすゝめにより、むほんを思ひ立たまふ、国〳〵のそうとうもつての外成よしすでに都にかくれなく、頼義聞召れむねとの御かうけん御まへに召れ、かうべをはぬべき、村川めをてのひにし國のらんとなすことよしなかりけるけいりやくと、めん〳〵頼義がしんていをさつしたまはん口をしさよ、さればかのしん王のぶゆうはもろこしのこふうにもおとるましきやうに聞及たり、其うへ天子のわか宮なれば、御位と申じよのぎやくしんとはかはるべし、おの〳〵とつくとないだんいたされよいかに〳〵とぢやうい有、時に公平すゝみ出こは御ぢやう共存ぜずや、尤しん王はせんていし第二の宮とは申せ共、あくきやくてうくはたるにより、をん國にながされたまふ上は、只ひとへにいなかゑびすにあいおなし、又ゆうりきの事は天ぢくのいた天わうもろこしのしゝめい、日本のあら神將ぐん一どにしゆつしやういたし、とうざいなんぼくよりせめ來り候共、此公平を持せたまひ候うへは、さのみ御どうてん有べき事に候はず、たゞ〳〵ふひんに候は又此たびの一らんにも、いくらの物がそれがしがてにかゝりひがうのしにお仕らん、むざんさよ是皆いんぐわれきぜんのどうりてんなるかなやしん王のくびも今五十日か三十日か内にむくろと成たまはれんせうさよにくしと思召さるゝ村川め、て取に仕て御めにかけ申さんはやとく〳〵といさめ奉る、大將御ゑつきかきりなくげにたのもし、さらはよういいたされよ、都の御るすにはちやくなんよしいへ公に、三うらのわだ左衛門、かまくらの權五郎を相そへのこしおかせたまひ、御ともには公平國つなをはしめ、つかう二まん五千よき、其日のむまのこくにくはらくおん立あり三重せんようだうへ急がるゝ、是は扨置其頃又、みまさかの國のちう人、おくのゝこんの太夫ちかとしとて、るいたいげんけへちうをつくせし侍有、然にしん王よりふかくたのまれ、事らきよせばいづも、ほうきみまさか、三か國さうい有ましきとのあんどの下しふみをうけ取たちまち心へんじ、家のかうけん吉田の源内ひろつぐを人なき所へまねき

よせ、めでたき事もあれ、是〳〵はいけんいたせとくだんの下しふみを取出し、つら〳〵よの中をかんかみるにげんしのいせいもはやきへ方のともしびとおほへたり、それ弓取ぱとにもかくにも身のりつしんこそまつたいまでもほまれなり、さればげんけの人々いつもの吉れいとしてそれがしがたちに打より（本ノマヽ）しゆつぢんの御門出あらんなひつぢやうかさねてよりどくしゆをしたゝめ置頼義公平國つなをはじめむねとの輩のこりなく、とくの酒にてもりころしいつもほうきみまさか三が國をしん王よりたまはり、ゑいくわをながくしそんにつたへんと、おもふはいかゝあらんとかたりける、ひろつく承何共御返事も申さずさしつふいていたりしが、ややあつて扨も扨も御しんていには天まはじゆんが入かはりて候か、よくあんしても御らんせよ、せん年らいくはうはくしうふなの上にあらきの入道がこもりしを、御たいぢ有しより此かた、吉れいとして二代三代今においても相かはらずせんやうたうつくしへの御しゆつちんには必是へよらせたまひ、御門出いはゝせたまふこと、しよ人のうらやむ所なり、それ弓取のりつしんと申はさきかけぶん取のちうをつくし、國こほりをゑたるこそせんぞへのかう〳〵ならんよまてのほまれとは申せ、すねんのよしみふかき君をどくしゆにてせめころし、其ほうひに三か國をくわんりやうに有、ゑいくわにほこりたまはらんとは、おそれながら弓やのみやうがつきはてさせたまひたり、されはかうしのきんげんにもふぎにしてとめる物はうかめるくものことしとかや、よく〳〵御しあんましませと、（本ノマヽ）はゞかりなくかんけんする、され共ろうにやく口ににがしとかや、あくにんのくせとしてぜんをはさらさら聞入ず、あつはれわとのは物しりがほ成ことばかな、そうじて侍のぐんほうにかうしろうししやかなどのかきずて、更に入べき事なし、なんぢすいさんがましきしゆ行を引入のうへをはいさむれ共、身のめいをそむくはきつくわいなり、少もいきに及なら、まつたくきよ所をさらせしと、刀のこいぐち二三寸ぬきくつろげ、いかに〳〵とつめかくる、源内すこしもさはがず、御ちやうにては候へ共、ぐんほうと申ももつてはひとしきせいじんの、御しんきれちしん、五つの道にたかうては、何事もはか行べきとはぞんせ

ず、そうじてしうのひをなすとき、したがはざるはしんかの道、さればひかんないさめにむねをさきごしよはみづからつるきにふす、たとへ身は八つざきに成とてもかやう成悪きやくよしとはいかてか申候はん、御先祖へのかう〳〵すへ〳〵までの、はいへのちじよくを思召たまはゝ、まつひらとまらせたまへ、かく申だん、にくしとおぼしめされなば首を召れ候へと、たち刀をなげすて西に向てがつしやうし、命をおしまずいさめける、ちかとしみておのれが望までもなしそむくにおいてはいかてかたすけん、あつはれぐにんなつのむしやと、くび水もたまらず打おとすはなさけなかりし次第なり、爰にちかとしがさい女は、しやうじをへたて、はしめよりの次第をつく〳〵と聞、こはなさけなの思ひそやとむね打さわぎおはせしが、らうどうかうたれしにおとろきあいのせうしをさつとあけ、これはいか成事ぞちかとし殿、只今ひろつぐが申せし事皆御ためにて候に、かへつてあしく聞召ちうたいのおとなをせつかい有は、御うんのすへとおぼへ候、此つる若か行すへまての事を思召たまはゝ、思ひとゞまりたまへとなみだをなかしくとかるゝ、ちかとし聞てはらをたて、誠に女はぐち成物かな、其つる若か事を思へばこそかゝる大事をくわたつる、やがて三か國のぬしとなり、御身もゑいぐはのまゆをひらかせん、家のはんじやう何か是にしかしと、そゝろにいさみをなしにけり、女房此由聞よりも三か國のあるじとならせたまはん事誠の道にて候はゝいかはかりうれしかるへきにちうたいのおしうを打、よこしま成ゑいくわ此よはわつかゆめまほろし、後のよのかしやくのせめのおそろしさよ、むかしよりしうとおやをほろぼし其身の立たる事は候はず、此ことにおいてはひらにとまらせたまへやと、たもとにすがりなげかるゝ、ちかとしいよ〳〵はらを立、女さかしうしてうしをあきのふ事かたしとは、是げれつのいへることはなり、たてに行か道やらん、よこに行か道やらん、何としてかしるへきむやうのすいさんいたし、我ばしうらむるなとはつたとにらみおくに入、どくしゆのようにをかまへける、女ばうつまのうしろすがたをつく〳〵打ながめ、扨もしやけんのことはやな、我つまながらかたきとは今こそ思ひしられたり、此上は、何とせい

する共かなふまじ、そもわらはかせんぞは多田のまんぢうより、けんし代々の御下人なり、其上みつからは九つより頼義のみだいさまにかしつき、年月の御おんそうかいよりもなをふかしいかにとしてか、ぢやけんのおつとゝいつしよになり、君の御命をとるべきやとは云ながら又此事をちうしんせば二せとかねたるつまのそ人となりぬべし、とにもかくにもはかなかりけるうき身やと、ひとりくどいてなくばかりおつる泪のひまよりも、よく〳〵物をあんずるにしやばはかりのやどなり、たれかちとせをたもつべき、むかしの人もなのみ殘て今はなし、かくつらきよの中に、いつまでゝさのいつまてか、ながらへ物を思ふべき、しでのたびちに赴かんしする命はつゆちり程もおしからず、いまだちぶさもはなれぬ此わかをふりすてゆかんむざんさよ、か程にうすきえんならばなどたいないにてゆ共水呉成ならば、か程に物はおもはじ物、すでにみそしに及まで、子のなき事のかなしさにとかもあらじのよそにふく、かみや佛をうらみはび、さま〳〵のくはんをたてまうけし時のうれしさ、あゝいま〳〵よしなき此若やと、おもふもつまのあくぎやくゆへ、君をうしないよにあらんと思ふ共、のかれぬてんのはちを請、我身もほろびたまはんはかなさよ、おこともながらへ有ならばおさなしとは申共、ちしよくのやいばにかゝらんこと、かゝみにかけておぼへたり、たにんのてにかゝりかばねのはぢをさらさんより、母がてにかゝりきよくよみちにおもむけよ、たま〳〵人がいにしやうをうけ、いまだ三歳にもたらずしてむなしくさんつに歸らんふびんさよげに何事もさだまるがう、みつからばしうらむるなと、ふところよりまもり刀を取出しするりとぬきがいせんとすれば、あいすると心へにつことわらう時にこそ、めくれ心もきへはて、ひし〳〵と抱き付せんごふかくになげかるゝ、はるかに有てつるわかゝ、かほつく〳〵と打ながめおさなき物とてはかなやな、只今がさいご成によみぢをしらぬあはれさよ、とてものかれぬ道しばの、日かげにきゆるつゆの命、母ばしうらむなつるわかと取て引よせ心もとを二刀つゝけさまにさしとをし、あけに成しかいに打かゝりきへ入やうにぞなげきける、せきくる泪をおしとめたゝ何事も〳〵うつればかはるよのなら

い、をさな車のゆめの内、あすまてたのむ身にてなし、うきよのまうしうはらさんと、もつたる刀を取なをし、口にふくんでかつはとふせば、きつさきはびんのかみをわけつばは口にとまり、三十を一せとしあしたのしもときへにけり、かの女房かしんていまつせのけん女是なりと、みなおしまぬものこそなかりけれ

第五

頼義九州下向并ちかとしさいごの事

其後ごんの太夫はどくしゆのようういかまへ、ありし所に立歸りみれば女ばう同つるわかあけにそまりてふして有さすがぶとうのちかとしもこはそもいかにとたゝばうぜんとたつたりしが、みよりいだせるざいなれはたれをかこたんやうもなく、おのれと物にくるいとんでひに入いんぐは八、今に三が國のみだいとあをがれん物かなり行ていのあさましさよと、しかいをひそかにかくし、さしてうれいのけしきなく、さしきのていをかざりたて、頼義の御下向を今や今やと待いたるを 三重にくまぬ物こそなかりけれ、去程に頼義公、ちうやのさかいもなくいそかせたまへは程もなく、みまさかの國おくのゝしやうにつかせたまふ、ごんの太夫は兼てようういの事なれは御向に罷出、やかたにしやうじ奉り、まつ以せんれいあいかはらす御立よりなされ候だん、かもんのめんぼくとかう言上仕にげんぎよつくしがたく候となかへのてうしかはらけ出し、さま〴〵にもてなしける、ふ將御さかづき取上させたまひ、次第〳〵にまはりける、あるじすはやじぶん今成と、いたる所を罷立、ないせうに立入御吉れいのだいにしたゝめおきたるどくしゆを取そへ、ふ將の御前に畏、頼義御らんじぢんでうなりとくだんのだいを三どいたゝかせたまひ、かはらけ取上たまへば、れいのどくしゆをたつふとつぐ、御命のあやうさ、風のまへのともしひ、すはやとみる所に、國つなあゝ御もつたいなししばらくとおしとめ、ふしぎやな此酒は、其色きはめておうしきにして、ちやうしよりつきし時、むらさきのいとのことく成かけ、御さかつきにうつりたり、さればおやにて候竹つなそれがしにかたり申せしは、しう國のろば將軍が、ゑいの國のりきし、三十六人を一じにもり

ころせし、おうしきしゆといふどくの酒は其色きにしてむらさきのすち有とつたへたり、よつてせん年ひとりむしやがつくし合戰にせん人のちりやくにて、もりころされしどくの酒に心を付てみたりしに、つたへ聞しおうしき酒にあいたがはず、若き者はかやうの事よつくみゝにあいたもてと、つね〳〵しめし候はぬちかとしは代々御かうおんのいへなれは、左様の事は有まじきなれ共、きめいへ奉るものなれば、そつと心みしん上いたさんと、ざしきを立ていきたるくもを取てかへり、くだんの酒に入ければ、くるり〳〵とまいめぐり、次第〳〵にくろくなり、づたづたにちぎれける、ちかとしあらわれぬるとこしの刀をぬかんとするを、公平ちうにかいつかみ、やあ何をするぞこくわしやめ、か程なみいたるざしきにてなんぢか太刀かたな物のやうに立べきやと、たぶさを取て引上、それ〳〵國つなと申せば心へたりとくだんのどくしゆを、殘なくつぎこみ取てひつ立、のんだりやていしゆ、公平も酒のまんそれにてしやく仕れ、めづらしき酒よういのだん、しんびやう〳〵と打わらいてぞいたりける、ちかとしとかうのことばなくたゝんとしたりしが、はやあしもすくみてはたらかすみる内に色へんし、あらたへがたやくるしやとはんし斗身をもんであかきじにゝぞふしにける、公平みてきみやう成や國つなと云もあへず、ないせうさしてつゞと入けらいのものを二三人かいつかみおのれら此くはたてまつすくにはくじやういたせとせめければ、有のまゝに申ける、公平聞もあへず、扨はしん王よりたのまれて有けるな、身にもおゝせぬ三が國のよくしんかへつておのが身をはみにけり、ひとりこへ行しでの山さこそろしのとせんたるへきになんぢらおつつき供せよと、くび一々にねぢ切あつはれ國つななかりせは、さし物めい將おにをあざむく物共がむさ〳〵とあいはて末代までのそしりにあはんあやうさよ誠にわたなべとうのかたみのちゑは殘たり、かまいて〳〵むさしのかみ年わかきとてゑんりよなくばんたんぐんほうつくされよ、たのもしたのもしとみ上みおろし喜ぶ事はかぎりなし、君聞召げに〳〵竹つなうたれし後は、一はうのつばさおちたるやうに思ひしに、あいもおとらぬ國つなかちほうのだん、是ばんせいのもといかたきたんめつうた

かいなしと、御ふきなか〳〵あさからさる所へ、いつもの國のぢう人高田の十郎むねひろはや馬にてはせ來、すぐに御前に罷出、とつくさん上仕ことのたんちうしん申たく候へし、かたきに道をさへ切れ、ちさん仕候、扨もきやくしんしん王は、ふなの上にようかいきひしくろう城いたし候、したがう所のくん兵はつくし侍、十七くみせんやうたうさんやうたうの大名七くみ、其外たいいせんの人ゆと國〳〵のあふれ物共かずをつくしてこもり候、すへて其せい十五まんよき、いきをい天のひゞかし候とつまひらかに言上す、其時國つなすゝみ出誠にかのふなの上は、日本ふそうのなん所北は大せんにあいつゝき南はさるをとしかたに、西と東はちさかりにしてちう〳〵のさる、しかたにもかよいかたきあく所に十五まんよきのくんせいけつせんとあいこもらばはなはだなんぎに候はん、よく〳〵くんきの御せんき尤に存候と申上る、公平聞て何か程の事を大事とはあつはれおくしたる事ばかな、かたきは五百まん三百萬もあらはあれ、べちにことの有へきや、なましいにぐん法ちりやくだてにて時をうつしせんなし軍は、只一いきにもみつぶすこそ心ちよけれ、其うへ御ふんないまだ、みもせぬふなの上をあく所のせんきはさらさらもつて心へがたし、國つな聞てれいのあらぎ又、さしおこつて候な、されは年よりたる竹つなが申せし事をたによこかみをやぶるやうに申されし間、ましてわれ〳〵などが申事をはさだめて左様にあくこん有へきと存、今迄はすいぶんあいひかへ候へ共さき程申されしことはといふ、かつうは君の御大事と存所存のだんをあいのべ候、尤ふなの上はそれがしみたる事は候ねどよく存たる道の候、其しさいといつはおやにて候竹つな日本六十四しうの山々なん所〳〵てきの城に成べき程の所をはるつにいたし、それかしをひそかに近付爰にはいくまがりの坂有、こなたは沼、かなたは谷からほりがんせきとせめやうのくん法こまかにしめし候ゆへ所〳〵のあんない大方存候、さればせん年らいくわうくだんのふなの上をせめさせたまひし時にこそ、御身のしんふ公時は、ひざの口をいさせそれかしかおふちつなは右のかいなに、流矢をうけとめ其軍殊の外なんぎにてわだんの事をめくらし、ようやくかたきを御たいじ有しな

ん所なりと、たび〳〵かたり候ひし竹つなかせんけん今此時にあいあり候、同はてきをひらちへたばかり出し、事やすく打ほろぼすべきちりやくこそあらまほしく候とへんぜつ其りにあたつてあいのぶる、公平くわん〳〵と打うなつき、扨も竹つなはなからん跡までをあんし、左様に心をくたきし事、誠に人間にてはなかりけり、なに、仕てもむかしの事が思ひ出されなつかしや、是よりいごは御へんを竹つなと思ふべし、只今のはそれがしかあやまつたり、かまへて心にかけらるゝな扨かたきを引出すべきけいりやくはいかに、國つなひざ立なをしさん候ちりやくといつはみ方のせいを五百も三百もかたきの方へかうさんさせ、大將をはしめむねとの輩ちかとしにとくの酒にもりふせられはんしはんしやうにてぎやうぶさらにかなはず、都へ引てや歸る、又やうかいに取こもらんかいかゝせんとはかゆかさるせんぎとり〳〵なりとたばからば大將しん王をはしめ付そう物かしらけつきかちにしてしりよなき、たんちの輩なれば、扨はちかとしたばかりすましたり、都へひつかへさぬさきに、よはみにのつてほつつめ、うてと我さきにと此所へ（本ノマヽ）しろになり取かけ申べし時にみ方にはそなへをとつくとさだめ、あとをよこ切一人も殘さず打とめん事たな心をさすかごとし此度いかにと申せは兵ごの守つく〳〵と聞、はつめい成ちほうのだん、近頃おどろき入たり、げにも是へたばかりよせて、手まかせにぼつつめ〳〵打ふせんな、うきよのなくさみ是成べしそれ〳〵よう い仕れと、ぬまたはね川をはしめくつきやうの侍七百人、御前にめしなんぢらはかたきの方へかやう〳〵にたばかり、よきじぶんのみてこなたへそう申せと事つふさにあいしめし、いかに國つな御へんのけいりやく父竹つなにあいもおとらぬあんじやかな、ちりやくは御ふん又かたきあいてのあらきわさは此公平がうけ取なり、是天ちわかうてき何とおこる共ひとへにこ鳥共かわしくまたかにむかはんとするににたるべし、さんしの内に取ひしき國とゆたかにすべし、ばんせいらく〳〵おとりあかつていさみをなす、公平がゆうりき國つながけいりやく、御家のたからは是なりと皆かんせぬ者こそなかりけれ

第六

あきすへさいご并公平國つなしん王をいけ取奉る

去程にすでに其よも明ければぬまだの與一國かとはねかは源太みつとし公平國つなか下ぢにしたがへ、はたおしまき、七百よきのくん兵を引ぐし、ほうきの國へといそぎける、ふなの上にも成しかばあいをへだてゝけんし方よりかう人のよしたからかによはゝれる、城の者共聞付大將の前に參よしをかくと申、しん王聞もあへずけんけの物共がかうさんとは心へかたしとかくまつ大將ぶんの物斗こなたへめせ、畏て候と、とがはにはしり出、二人の大將を共ない内に入、時に兩人つゝしんて畏、我〳〵はみのゝ國のちう人ぬまたの與一國かと、はねかは源太みつとしと申物にて御さ候さればみかたのよはみをみすてかうさん仕候たん、ちか頃めんほくなくは候へ共、侍はねたり物、たが身の上にも有事にて候然はけんしの一とうせん年よりの吉れいとして、みまさかの國おくのしやうに下ちやく有所に、こんの太夫心かはりをいたしどくの酒をすゝめ賴義をはしめむねとの輩何れも皆、ざやうふもかなはぬていになられ候、され共ちかとしをは一門けらい殘なく打とめ候によつて、此ていにてはかなふまし都へひつかへすか、さなくはなん所をもとめ、あいこもらんかと更にはかゆかざるせんぎげんけのうんめいすへになりたるとみへ候間、はちをすてかうさん仕候と、さも有そうにあいのふれば、大將しん王をはしめ何れも皆扨はおくのが斗事其身はむなしくなりけれ共、かたきをはしふせぬるちんてうさよ、左樣のよはみの所をすかさすうつこそぐん方の第一なり、今ははや此ようかいもいらばこそ、はやうつたてめん〳〵と、木戸さかもきを引やぶり、上を下へとひしめきける、其時また、はねかはすゝみ出、此度のちうしんと申、一つあんないしやのためと申、せんぢんをは我〳〵にたまはれかしと望ける、しん王聞たまひ、所望のだんしごくせり、さらは一ぢん仕れ、畏て候とまつさきに進めは、我おとらじとあいつゞき 三重もみにまふでぞ 三重いそぎけるされはにや、ぬまたはね川は、てせい引ぐし其せいはるかにかけぬけ源氏のごぢんにまいり、なんなくたばかりすまし候、しん王をはしめ城の內の

物共のこらず、只今取かけ候、ごよういあれと申せは、公平聞てしんべう〳〵いかにむさしの守、きみやう成けいりやくかんし入て候かくてまづもとせん成に、それかしは道まで出そつとみて歸らんとはしり出るを、國つな取ておさへ、是程にあいかないたるちりやくを、ざんじにやぶりたまはんなおとなげなし、今少の内成にとつくと引よせ、所存のまゝにはたらきたまへ、しはし〳〵とせいすれは、公平聞て誠にあやまつたり、てきちかつくと聞、そゞろに心うきたち、只一時の間をちとせもまつごとくにおもはるゝ、はやりすぎてかたきをしろへ引かへさせ、わとのかしんいを下さし斗事をむにせん事のほいなさよ、さらはとつくと近付、思ひのまゝにひしぎつけん、みなこなたへ〳〵と三重なりをしつめていたりける、あんの如くしん王すまんきをいんそつしこまをはやめてかけ來、とうざいなんぼくへてはけをなし三重時のこゑをそ上にける、され共内にはおともせす、やゝあつて、公平かみおしみだき、よろいの上にめゆいのこそで打はをり、たち〳〵とよろほい出、いかにもこゑをふるはかしあゝむねくるしやいかにかたきの物共、さすが天下をのぞむ輩か弓やをもつてはあらそはて、日本一のきん平を、どくの酒にてせめころすたるはひとへに女のしはざなりみらいで思ひしらせんと、さもよは〳〵ときぬ引かつきどうどふす、村川此由みるよりも、天のあたへぞあれをみよ、いできやつがくび打をとし、もろずみのけうやうにほうせんとたちぬきかざし、公平に打てかゝる、公平まくらをそつと上そでのすきまよりきつとみてよき時分とかつはとおきてむずとつかみ、おのれめをてのびにし思ひもよらぬせんやうだうへはる〳〵と下りたり、なんぢらがたくみたりしどくの酒、今少殘て有、そら煩のくすりぞ御前にて一つたまはれまづ望をはたつしたりとちうにひつさげやかたをさしてつッと入、つゞくゞくん兵おとろき、あのていにては公平よはりたるはおもはれず、そこつに近付けがすなと、はるかにこそはひかへける、又公平よろほひ出、ゑゝ口をしやおのれらを一人もあまさしとは思へ共、じやけんのどくの酒、つぎめ〳〵をはなれてのけとせむる上せいも力もきへ〳〵と、日本ぶさうの公平がうきよのかぎり是までぞ、何事もせんせのゑん我くび取

たるものはござせとむらいてゐさよなむ日天〳〵と長刀のゐろくぢにつきたて、たちすくんでいたりけり、つくしせい是をみて、かうの者の立じには、いにしへよりも有ならひなにしあふたる公平を我くび取らんとあらそいよる、公平敵をおもひのまゝに引よせ、まなこをくわつとみひらき、方〳〵あまりにさはがしきゆへ、しでの山より歸りたり、なごりに一いくさして、つい出でもあらばかさねてしに申さんと、打わらい長刀取なをし、はらり〳〵となぎたをせば、一どにどつとくずるゝを、いつくへかあまさんと 三重跡をもとめておいかくる、さればにやしん王は、敵にたばかられ、むねんたぐいはなかりけり、たのみ切たるらうどうにまさきの源藏あね山せんじを引ぐし、かたはらにかくれいたりしが、公平がこくうにかけ出たるをみて、すは天のあたへ頼義をあますなと、二人のらうどうをさきにたてもんの内へ切て入、むさしの守本ノマヽ國つなはおもん斗をふくみめ、御そばなれずひかへしが、それがしさつせしたんこゝなりとたち引そば本ノマヽめつゝと出、二人の敵にわたし合、おつつまくつたゝかいしが、まさきいかゞしたりけん、よはこしを打へられ二つに成てたおれける、あね山はがみをなし、む二む三にうつ太刀に國つなくさずりのはつれたかもゝかけてきり付られ、うしろへたおれんとしたりしが、おしふみなをしあね山が、二の太刀をちやうと請、付入につゝと入、つゝけさまに三刀さしくびかきおとす、其ひまにしん王是にはめもかけず、たゞ頼義とくまんと一もんしにかけ入を、國つなうしろよりむんずとだけは、こは物〳〵しやとまへゝ引よせんとする、國つなてをはおいぬれ共つよくくみしめはなさず、爰をせんとゝもみにける、然共しん王國つなをつひたて、上へ〳〵へとかけこむ所を、公平はせ來、それはなすなとまへよりむずとだき、めてへかつはと打たをし、くひねち切らんとするを、國つなおさへ、まつ君の御げんざんに入たまへ、けに尤と中にひつさけ、大將の御めにかくれは、頼義御きげんかぎりなく、わたくしにはからひがたし、其まゝ都へ引と、惣ていけ取八十よ人くびかず八百もくろくにしるしくはらくにかいぢんなされ、天下本ノマヽおだやかに納たまふすへはんしやうめでたさよ共中〳〵申斗はなかりけれ

寛文三癸卯年正月吉日

公平つるきのりつくわ

初段

さても其後爰にせいわ天王五だいのかういん源のいよの守よりよしこうすどのげきらんの御たいじ有天下おたやかにおさめ給ふ御きんたちには八まん太郎よしいへとかうし御とし六歳にならせ給ふ御心御かたちぼん人にあらずとて上下ばんみんにいたるまでおもくもてなし奉る家のかうけんにはいつもかはらぬわたなべむさしの守竹つなさかた兵庫のかみきんひらするがのかみうらべのすへむねとう〳〵みの守うすいのさたかけさてほうしやうが一子ひらいのきとう丸とて三國ぶさうのかうの者是を四天王ひとりむしやととてじんぎもつはらにして君にかしつき奉ればいよ〳〵こくどゆたかにて此御大將の御世長久なれといのらぬたみこそなかりけれこゝにまたくわんむ天わう七代のかうゐん平の兵衛てるもととてそのなをゑたるあぶれ者ありさて郎等にはあく二郎より方あら川入道らいけん此らいけんと申は出羽のくにのちう人あら川がんくわうが子にて有是ぼん人の子にてなければまなこすぢかいにきれ口のひろき事きじんのことく也かれがすがたみる人さく人おぢぬものこそなかりけれ有時てるもと二人の者をちかつけ今日はなにとやらんものさびしく有いざしゆゑんしてあそばんとてさま〳〵のちんくわをもようしゆきやうにちやうしてあそびけるかゝりける所へ山人牛を引てやかたのまへをとをりしかてるもと是をみて扨もよくこへたるうしかなあつはれよきさかな成べしといへばらいけん聞てそれこそやすき御事とていそきおもてへはしり出うしのもゝたぶらをひつつかんでずんどそげはうしはしきりにはね上る山人是をみてこれはろうせきかなとうしをひいてぞにけにけるらいけんやかて立かへりてるもとのまへにおけは方〳〵もくゑやととてひつ取〳〵くつてはのみのみてはくいさま〳〵のおごりをなしている所へひの大なごん殿より御使立て申けるはきのふよりみかと御なふおもく以ての外にわたらせ給ふ間いそきさんだい有へしとありけれは畏て候とて取物もとりあへ

ずやがてさんだい申さるゝよりよし公をはしめとしてざいきやうの諸大みやう殘らずきんりにつめらるるかくて大なごん人々にむかつての給ひけるは天子やせんより御きしよくもつての外にわたらせ給ひつるがさき程よりこゝの外御なふきなをらせ給ふ間みな〳〵よろこひ給へさてそれに付おくよりのせんしには御なふきはらしにめつらしき事あらば御しやめん成ぞてうしをたかく申上候へと有しかば何もあつとよろこひける其時中なこん高なをきやうしやく取なをし申されけるは爰に一つめつらしき事の候則是なる頼義の郎等に坂田の公平とて上にもしろしめさるゝことく日本一のあらものゝ候かの公平某が所へつね〳〵出入仕候がやせん參てりつくわを一へん仕たるよし申候あの樣成あら物のりつくわめつらしく候とそうもんあれは君よりのせんじにはなんちが申ことくよじんのはなのあそひはつねの事公平が花のあそびめつらしき事は是成へしいかにより吉其りつくわ公平に持てまいれゑいらんあるへきとのせんし也承候とて公平がもとへりんげんのおもむき申つかはされければ畏て候とてきん平はかのりつくわをもたせやかてさんだい仕り御てんのばつさに畏るよりよし御らんじていかに金平なんぢりつくわ仕たる由上に聞召およはせ給ひ御らん有へきとの御事なるぞいそき御まへゑさゝけよとありしかば畏て候とておめずおくせすはゐからず御前にりつくわをさゝけもとのさしきになをりける天子をはしめざちうの人人きやうざめて御らんするにまづしんに十もんし小しんにやりなかしには大弓しらはのや一手あひしろふてぞさしにけるさて又をしうけにはしらへの長刀まへをきにはくわつとひらいたることじのゑなしみこしにはさすまたつくぼう扨したくさにとりてはこかたなこうがいこわきざしなとをさしにけるやゝしばしをくにも御らん有て金平が花ならばかくあらめとこそ思ひしに心にまかせてはいしくも仕たるものかなと御かんはなはたかきりなし人々一どにどつとぞほめにけるかゝりける所にははかき空かきくもりくろくも一村御しらすにまいさかる人々あやしとみる所にくろくもの中より三面のきつねししいてんのひろへんにとび上りみよりひかりを出し御てんをてらす事日月のことく也人々きもをけす所により吉御

らんじてくわひんにさしたる弓取給ふ其ひまにてるもとそばちかくあり合たちひんぬいてとびかゝりあつはれおのれのかさじとおぎはをてうとうつておとすへんけ是を事共せずしらすのひさしにとび上りくものうちへ入らんとする所を頼義よつきひやうといたまへばへんげのみつけんにはつしとたつへんけこらへすおつる所をきん平はしりかゝつてかいつかみ三かたなにさしころし御前にやかてさゝけるおくよりのせんじにはきんひらがりつくわのはたらき頼義かゆみのたつしや何れとやいわんと君をはしめ御まへなる人々も一度にどつとそほめにけるその時てるもとせき心になり御前に向て申けるは只今のへんげのものそれかしのしとめて候之れをいかにと申にまつせんたちをうつて候故へんげつうりきうしなふ所により吉のやあたりたれはとて高名とはいはれ候ましまつたく某がしとめて候と申上ればその時きん平ばつざにありしが罷出てるもとをはつたとにらんでして只今のへんげを御ぶんがしとめたると申か玉かたまならぬゆへにあはててをぎはをうちながら少はつりそんし某がしとめたりなんとゝ申はしつかいとうぞくには事ならずやなんぢか様成ちまよい者いけてをきて何かせんくびねぢ切てすてんととんでかかる所を御せんなるはとて人々両方おしとゝむる其時より吉はいかにきん平何を申ぞあれていのけだものをしとめたしとめんのせんぎは何事ぞてるもとのしとめられたるとならばしとめられたるにせよ御せんをもはゞからすすいさんなりといかり給へばさしもにたけき公平もあつとこたへてしつまりしれいきの程こそしゆしやうなれてるもとめんぼく失ないきばをかみてぞいたりけるその時大なごん卿の給ひけるは只今のへんけ物両人して打とめたる所君御らんじとめられたり其うへへんけのものしとめたる故にや御なふすきと御ほんふく成ぞ此上はよろこひの折なれば何事も両人共いしゆなかれと御さかつきを給はればいよ〳〵さしきはしつまりける其後より吉はおくへ御いとま申きん平を引つれ御やかたにそかへらるゝより吉のいくわうの程きん平かあらきのていすさまじ共なか〳〵申斗はなかりけり

二たんめ

▲去程にてるもとはわかやにかへり二人の郎等を近付て御てんにてのしたいきん平がぞうごんのだん事こまかにかたりければらいけんきいて某御供申たらばそのより吉金平めかくびねちきつてすて申さんものをとてきばをならしのゝしりけるかけかた聞て御へん御ともし給いたらばさためて事しいだし給ふへきに御供し給はさりしはわが君の御うんつよきゆへとそれかしはよろこび入てこそ候へとひころのおこりを引かへておとなしやかにそ申けるてるもときいてなんぢか申所ことはりなれ共それかしは御てんにて打はたさん思ひしか人々取付ば力およはず是迄はかへりけるぞやとかく只今をしよせ此そんぐわいをはらすへしいそきやういをせよとあるらいけんきいて御いきとをりしこくせりはやうつたゝせ給へやと申ければかげかた聞てはやりすきたりらいけんかな左様なるふるまいはいのゝしむしやと云者なりそれぶしのもてあつかうぐんほうにもかたきをほろほし身をたすかるをほんとこそ仕候へまつ〳〵御心をしづめじせつを御まち候へと申てるもと聞ていやとよかけかた物をきけたうじは源氏日々にさかんにして平けはしたいにおとろふそれによつてしよこくの大みやうもげんしに心をかよはするによりしたいによりよしはいくわひすしからばなにとてか時きたるへきそやたゞてきの思ひかけなき間におしよせてあはてふためく所へみたれ入てよりよし四天王の者共に腹を切せんはやすかるべしはやうつたてや者共とてより吉の御やかたへおしよせてときのこゑをそ上にける時のこゑもしつまれは五人の人々はしり出なにものなるぞなのれきかんと申ける其時よせての方よりもこまかし〳〵とあゆませ出只今是へよせたるをたれなるらんと思ふらんくわんむ天皇より七代のかういん平の兵衛てるもとなりいしゆはさためて覺へあるべしう〳〵共にはらをきれと大おん上にのゝしりける人々きいてさては御てんにてへんけの者をうちそんしたるがむねんなるとててるもとかよせ來るとやだうり也〳〵まつわれ〳〵から腹きり申さんかいしやく給へてるもとて五人の人々一ようにたちならびはらり〳〵と切にけるてるもと是をみていかにみかたのぐん兵共一引ひきて四天王をつりよせ大

せいかなかに取こめうちころせとげぢすれはぐん兵下ぢにしたかいさつとひいた五人の人々はざんじにてきのひきやうをみてやかて心へいや〳〵それ迄はきのひきやうをみてやかて心へいや〳〵それ迄は参しましそのほうにはかによせられ候ゆへよろひをちやくせず候へばまづしばらくそれにひかへられよものゝくをかためつゝ又こそさんくわいいたさんとみかたのぢんへしんつ〳〵とひいて入それより両ちんいりみたれ火花をちらしてたゝかいけるがしばしせうぶはなかりけれときにあら川らいけんはてるもとの御前に畏申やうわが君の思召たるにははらりとちかい申候此上はそれかしきんひらとひつくんでくび取つて君の御はらいさせ申さんときん平を待所に金平やうじをくわへのさ〳〵いでゝ申けるは聞ばこんどよせられたる中にでわのらいじゆんかまごらいげんが有ときくひごろそれかしと力ためしありたきよしきいて有よきついてなれはちと力をためされぬかとよはわつたりらいけんきいてはしりいで金平殿かめつらしやなひ〳〵より少力をもくらへみ申たき所にかやうの事いてき候こそさいわひ也いささらくみ申さん金平きいてなんぢはてはの國あら川けんくわうか子なればじやのまこよそれかし事も聞およばん山うはのまこにて有きしんとじやとのまごどしのくみ打はためしすくなき御事也人々み給へと云まゝにおしならへてむんすとくんたたかいに一しめしつとゝしめたしめ様にきん平らいけんがさしたるたちをうはおひ共におし切てかしこへからりとなげすて力はしれたといふまゝにもろてをはなつてにわう立にずんと立て打わらいてぞゝたりけるらいけんむねんに思ひうしろへくるりとまはりてさしあけんとする所をさうのてをのべらいけんかほうかいをしつかとつかみてあしのかうをしつとふまへてゐいやつとひきければどうはうしろにのこりくひはまへゝそ來りけるよせての兵是をみて公平あますな打とれとて大せいおめいてかゝれはけんしのくん兵是を見て公平うたすなもの共とて發をさいことたゝかいけるかかりける所に大なこんとしひろきやう中なこんたかのり三百よきにて両ちんか中へわつて入ちよでうなるそしつまれ〳〵と大おん上てよはわらせ給へはさしもあらきくん兵共ちよくちやうと云こへにしつまりしわういの程こそありかたけれ其時ちよくしの給

ひけるはか程たいへいの御代にかやうのふるまひらうせきなり両方しつめよとのちよくによつて両人是まて向て有そとてるもと方をは大なこんおしとゝめさせ給へは力およはすさつと引よりよし方をは中なこんおしとゝめさせ給へはきん平いかつていかにやちよくてうなれはとてかやうのときつにあひなから大将のくひねちきらてはひいたるれいなしかたかたは引給へそれかしはかたきのちんへかけ入てるもとかくひ取てみせ申さんとてかけいてんとのゝしるを人々取つきちよくをそむけばもつたいなしひらに〳〵にととゝむれは力およばす金平もやかたをさしてそ引にけるかのてるもとかふるまひを上下はんみんをしなべてわらはぬ人こそなかりけり

三たんめ

▲去程に大なこんとしひろ中なこん高のり二人だいりにかへらせ給ひいくさのたんを殘らず申上られけれは君は大きにけきりん有てそのてるもとめせとありしかは畏て候とちよくしをこそはたてらるゝてるもとちよくをかうむりやかてさんだい有けれはおくよりのせんしにはいかにてるもときのふの軍のいこんへんけをしとめたる時のことばのろんといふかたたし又申ふんあらばよりよしを召両方たいけつの上にてせんきあらんとのちよくちやう也てるもと承りさん候へんけの者をしとめ候ろんにより公平あまりなるそうごん申候に付むねんに存いくさにおよひ候とそうもん申せはさておくよりのせんじには其時両いろたつたるによりわよのさかつき迄仰付られたるをわすれたるかたとへいこん是ある共まつ此度はたかひにひたし(術カ)くなるへき所にかみをかろしめ申つゝかゝるらうせきいたす上はきつとおんるにふせらるべけれ共源平は両わのことし一方かゝすれはときの王のめんほく也重て源平わやうに申付へしそれ迄は大なこんとしひろにあつけおく也とのせんしなりてるもとむねんに存すれとちよくちやうなれば力なくとしひろ殿とだうしんしやかたをさしてかへりける是はさて置御てんにて頼義しとめさせ給ふきつねの一るいおのがひか事もちなからより吉へあだをなすこそうたてけれ有日の事なるにかの一るいのきつね

とも四天王の者共にばけ一まなる所にこそりよりまことの四天王の人々のたんかうするていにもてなしてちりやくの程こそおそろしけれかゝりける所により吉公の御こしもとさらすのたけ王丸なにとやらんかんきんして人おとあやしく思ひしやうじをへたて立よりきく所にきとう丸きつね申するはいつれもなにとおもはれ候ぞ君此比さもなきものおほく近つけわれ〳〵をばそゑんに思召さるゝとみへたりと申けれは四天王きつね共是をきゝわれ〳〵も左様に存候へと申ければたけつなきつねこれをきゝ左様にも思はれ候はゝなきためしにはあらずそれゑんのちう王はあくによつてしんかのふわうにうたるゝ是みなたみのあはれみなりいざわれ〳〵もよりよしを打奉りよをおさめんと申けるを竹わうきいて大きにおとろきいそき君の御前にまいりかやう〳〵と申上ればより吉聞しめしふしきなる事を申ものかなと立よりきかせ給ふ所にきんひらきつね申けるはひやうでうきはまりてより吉をうちたてたてまつらは某がうちたてまつるへきぞやけふはまつ〳〵たいさんしてかさねてのそうだんにきはむへしと申ければ此然べしとてわがや〳〵にかへるていにもてなしかきけす様にうせにけり去間より吉是をまことの四天王とぞ思召おどろかせ給ひ只はう〳〵として立せ給ふを竹王御てをひき御ざにうつし奉れはいたはしやなより吉つく〳〵ものをあんしさせ給ひあゝさてよの中はうつれはかはるならひとてあの四天わうの者共にはいかなるてんまか入かはりなにをうらみてそれがしにぎやくしんのいできけるぞやよし〳〵是もさきのよのゑんぐわの程のあらはれて今しう〳〵と生れあいかくはなりぬる物そよと思へはうらむる事なかれたとへ四天王の者共かわれにこそぎやくしんあり共忝もせいわのいゑをなにとしてかはたやすべしそれかしはみやこをたちのかば四天王の者共があとにて若を取たてゝげんじのいへはつがすべしわかみ一つをすてぬればししそん〳〵のかうぎやうたりそれ人間の一生をかんすればきんくわ一じつのゑいくわ也ちとせもかくのことく萬年にも切ありふしやうふめつのくにゝいたらぬ事をねがふべしと只一すぢに思ひさだめてもと取切て西になけ身をすみそめにひきかへてなみだにぬるゝたびのそでいざ出たゝん竹わうと

てたひのしやうぞくなされける身はすみぞめにわげさをかけ人めしのふのたひなればあみかさふかくひつかうですゝみ出させ給ひける竹わうが出たちにはあさきのきぬをきてしろきやつふをこしにまきあみかさふかく是もきて御供申て出にけるさすがわかれの事なればみたい所や若君のねすかたなり共今一めみてゆかんとやおほしけん立かへらんとし給ふがいやまてしばしわが心つまや子供かみつけつゝしたいかなしみなけきなばわかれの程をいかゞせん心よはくてかなはしとなみだ共に御やかたをまだよをこめてしのびいてあふみやとをりにさしかゝり四でう五てうを行過てこゝははやとうじのまへいかにたけ王それかしが十歳のとしつなが此らしやうもんへぐして來ておにとくんだりし時のあり樣をしかたにしてみせけるをいまのやうに覺るはとなみだと共にかたりつつはや四つつかをさし過てさそや都にのこしおくつまやたつねん子がなはてさいしはいつのよにたへてくさほう〳〵とはへしけりつゆしん〳〵とむしなきてものあはれなる寺の跡かやうの事をみるからによに有人もたのみなしゐんぐわはうしのおくるまのめくりきにけりとばのさとたれを思ひのこひつかやあきの山かぜふきおちてなみやたつらんかつら川よといもあらひをゆんでにみてゆく山さきやたから寺こいぢにつらきせきとのいん八まんの山をふしおかみなむや八まん大ほさつわれはか樣になり行共のこし置たるつまや子をみはなさせ給ふなとふかくきせいをかけ給ひいもせのあはれとゝめたるおとめつかにきてみれはさかり過たるおみなへしかせにはもろくちり行と又くる秋にあふべきかたゞむもれ木のわが身ぞとうらやみつゝもゆく程にこうないかちおれ打過てけい〳〵ほろゝのきじのおとに立かへりみるさんやのさとうどのゝはらになくひばりくりかへしなけいとたのはらくぼつのわうし是とかやおはれさかを過行天王寺にさしかゝりしやうとく太子に參りつゝごしやうせん所とふしおがみ是からあれへはあべの原是成はそとは小町のきうせき也かの小町が歌にごくらくの內ならばこそあしからめとよみてこしかけたるそとばはくちてうせぬれとなのみは今に有明の月すみよしをなかめこしそれよりも大ゑのきしにさかりつゝなにわのうらより舟にのりつく

しをさしてくたらるゝより吉の御心ざしあはれなり共なか〳〵申斗はなかりけり

四たんめ

▲去程にみだひ所や若君はより吉かくなり給ふとはゆめにもしろし給はすしておくのさしきに出させ給ひ床にふみ有ければなにとなく取あげさつとひらいて見給へばつまのかたみにのこさせ給ふ御ふみ也なふいかに女ばうたち此ふみをいかなるふみとおもひしに四天王の者共がぎやくしんのおこしたるによりとんせいしゆぎやうに出ゆくとの御ふみなるはとの給ひてわつとさけはせ給ひつゝしばしきへ入給ひけるやゝあつてみたい所はすこし心を取なをしくとき事こそあはれなれきのふひるの比よりも君のすがた何とやらん物あんぢけにみへ給ひしをおほそらに思ひしかさてはかやうなる事を御心に思召入させ給ふゆへにこそかくはみへさせ給ふをは夢にも更にしらずしてたつね申さゝりし事のかなしやと又ひれふしてなき給ふ御なみたのひまよりもまつ四天王の者共めせとある承り候とてやがて使そ立にけるなに事やらんと四天王五人の者共御前に畏るみたい所は御らんしてさても〳〵かた〳〵にはいかなる心の入かはり君をいづくへ出したてまつるぞうらめしのなんぢらやとのをかゑせもの共とてりうていこがれ給ひける五人の者共是をみてこはそもいかなる御事やらんときやうさめてそいたりける御そばの上郎たちかの御かきおきを四天王のまへにおきにけり竹つな何なるらんと取あげひらいてみれはより吉のしゆせき也あやしやとよみてみれはかきおく狀の事今度それかし都をひらく事べちきにあらす爰に四天王の者共われをほろぼさんときやくしんのくわたつるにより然りといへ共わが身に少もくもりなし是みないんぐわのあらはれ也かゝるうきよの物うさに身をすみそめに引かへてござせたすからんがそのために都をはいづる也あひかまへて此上は四天王の者共もぎやくしんのひるかへし殘しをくつまや子共をもり立てげんじの家をつかせとかきとゝめさせ給ひつゝいつかたへとの御あてもなくかた〳〵へとこそ書おかせ給ふなり五人の人々是をみてあきれはてゝぞいたりけるた

けつな申ける樣はいかなるもののざんげん申たるをまことゝこそ思召入られてか樣の身とはならせ給ふ物かなとおにのやうなる人々もしばし袖をそしほりけるその時若君五人の者共をはつたとにらんでなんちらか有樣は母上やそれかしをうたんためのちりやくにぞそらなきするとみへてあり左樣にはたはかられしと御はかせをするりとぬきとびかゝらんとし給ふ所を御そばの女ほうたち是は〳〵ととびつけば力およはずわか君は大いきついてはぎりをかんでそ立給ふそれよりも女ほうたちみだい所や若君の御手をひきまつ〳〵こなたへいらせ給へとておくの一まへうつし給ふひやうごの守は是をみてあつはれたのもしき若君かなせんだんは二ばよりかんばし五つや六つの御心にてかゝる御きしよくをおがむ事よ是に付ても我君はなにとかならせ給ふそととうざいくれてそなきにける其時たけつな泪をおさへかくてはかなひ候まじいざや君の御行へを命かきりにたつね申さん此き尤然べしとうざいなんほくへてはけしてわれもわれもとたつねける是は扨置あく二郎かけ高はより吉みへさせ給はぬよしを聞つけて君の御まへにまいりより吉てんまにさそはれいつく共なくゆきかたしらすなり給ふ爰こそうかごふおりなればはや〳〵せいをもよふし給へてるもときいてそのきならばまつまつはたをあけよ平家に心あらんかたははせ來るべし畏て候とてやかてはたをそ上にける是はさておきより吉かたのくん兵共あつまつて申やう今度より吉うせ給ふ事是たゝ事にあらずげんしめつほうとぞんするなりより吉の御なさけふかきゆへにこそげんしにつかへ候へより吉うせ給ふ上はたれをしうとたのむべきや若君の御ざあればとていまたおさなき御事なれば是又水の上のあはなり四天王あればとて大將ありての四天王其うへあのきんひらがやや共すれはねめきめらるゝもむねん也此度平けへつかへんとて一度にひやうぢやうあいさだめてるもとのはたもとへ我も〳〵とはせあつまるてるもと大によろこびさらはうつたて者共とて上を下へとかへしける是はさておき四天王五人の人々はよりよしの御行へをこゝやかしことたつぬる所にてるもとせいをあつむる由聞つけ方〳〵よりもはせかへるまづ一ばんにたけつなかへつて御やかたにかけ入てみれはげんくわ

に人一人もなしひろまをみれとも人もなしたけつなおとろきおくへかけ入てみてあればみたひ所や若君を女ほうたち二三人殘かいしやくしてありし所へ竹つなかへり候と申けれはみたひおくよりはしり出なんぢは今迄いづくにありけるぞや君にはたつねあはさりしかもはやかたきは是へ來と云みづからや八まんをはやさしころせたけつなとふししつみてぞなき給ふわたなへ是をみてたとへ千ぎまんきよせきたればとてそれかしかくてあるうへは一方をうちやふりそれかし御とも申のけたてまつらんと心はたけく申せ共たゝ一人の事なればとやせんかくやせんとおもふ所に四人のもの共はせかへればたけつな是をみてよろこびなにとしておそかりけるそやかたきはもはやよすると云われ〳〵ばかりにてあるならばたとへ百萬ぎにてよせたり共たやすくやかたをわたすましけれともしせんわれ〳〵うちじにして有ならばたれあつてわか君をよにたて申べきいざまつ此たびははりまの國これゆきどの迄みたい若君の御供申おち行てせいをもようしせめのぼつてるもとをほろぼしほんもうをとぐへしと思ふはいかにとありければ三人の人々は尤此ぎしかるべしとく〳〵と申ければきんひら聞ておの〳〵ははりまへなり共さつまへなりともおちゆき給へそれかしはおちゆくすべをぞんせねはいまさらおちならふべきにもあらすとてゆみなぎなたとひしめけばわたなへきいてそれ〳〵かたかたれいのぢひやうがおこりけるはおの〳〵はきんひらをひらをひつたておち給へそれかしはみだひ若きみのけ奉らんとてのりものにのせたてまつりうらもんよりつつと出けれは三人の人々はきん平がさうのかいなに取つきひらに〳〵とうしろよりおしたつればいやそれかしは一すんもおちじといへ共ひらにひらにとひらをしにおしたて〳〵おちゆけばきん平も力およはすおちゆきけるむねんたくひはなかりけり是はさておきてるもとはよし吉の御やかたを二ゐ三へにおつとりまわして時のこゑをぞ上にける御やかたにはみな〳〵おちゆき給ひければ人をとさらになかりけりよせてふしんに思ひみたれ入てみてあれば人一人もなかりけりよせてのぐん兵是をみてしすましたりとよろこんで時をあけてそかへりけるかのてるもとか所存のていあくぎやくふたうのさむらいや

とみなにくまぬものこそなかりけり

五たんめ

去程に四天王の者共はやう〳〵きん平をなぐさめとうしのへんにてわたなへにおつ付てすへはるきとう丸はたけつなさたかげにかはり御のりものをまはしつゝたとり〳〵といそきけるはや山さきおもてをすきゆく所にしゆんれい三人つれにてとをりしが竹つなにむかいのふものたつね申さん何事そ都のらんはしつまりて候かといけれはたけつな聞ておふ都ははやしつまつて候ぞけんぶつならば都へ御ざれ候へとかたりすてゝそとをりしが竹つな思ひけるはかれらはしよこくをまはるものなればもし君の御ゆくゑをしりたる事もやと思ひ立かへり是〳〵じゆんれいたち只今たつねられし都のうんにつきより吉おちゆかせ給ふが若御ゆくゑばししり給はぬかとなにとなくとひければじゆんれいきいてあふされはそのより吉とのはつくしかたへくたられしがつのくに兵ごのうらにふなかゝりしてい給ひしを所のぢう人ひやごの介とやらんがより吉を見付生取らうごしにしうじう共にのせ奉り都へひきわたす只今是へまいり候ぞとかたりすてゝそとをりける五人の者共是を聞さては君の御命いまだあんおんにましますなはちこゝは八まんのまへなれはうぢ子ふびんと思召正八まんの御引合なるべしといつれも八わたの山をふしおかみそれよりかたはらに立よりきやつはらをいちいちにいけ取て御のりものかゝせはりま迄ゆかんものをと思ひ人々ははやつな共をこしらへいまや〳〵とまつ所にさきはしりの者共人をはらいのけより吉竹わうしう〳〵らうごしにのせ奉りくつきやうのけいご十人はかり取まかせ兵このすけはむまにのりろうごしのあとにひつそうてきたる所を五人の人々是をみてまづはしりをやりすこしらうこしを取まきたるけいごの侍一人ものこさしと五人の者共ちかつく所に兵ごの介四天わうをよくみしりかなはしとにくる所をきんひらひらつつと出おつかけ馬のおづゝをつかんで引すゆれば馬は大りきにきめられまへあしおつていじりになるやかてそのまゝ兵ごの介をたかてこてにいましめたり人々はけいごのものをこと〳〵

くひつしばりあたりのこぼく共にからめ付たそのひまによりよしたけわうろうこしをひきやぶり出させ給へばする〳〵とはしりより御たもとにすがりつき是は〳〵と斗にてよろこびなみだはせきあへずさて五人の人々は御まへにひざまつきいかなる物かざんけん申われ〳〵に御やしんをふくませ給ひつゝか様にはならせ給ひ候そと申上るより吉聞召みきのした本ノマヽいをかたらせ給へは五人の人々かけをうつてさてはきつねめがしやうけをなしくんしんのなかをさまたけ申にうたがいなしさて〳〵くちをしきしたいかな此うへはへんしもはやくはりまへくたりせいをもよをしてるもとをほろぼしほんまうをとげ申さんと扨みだひ所やわか君を御のり物にうつし奉れば公平やがてめしうとのそばにゆきいかになんちら命をしくばたすくべしと申ければ兵ごの介是を聞ておろかなる仰かな此かいへしやうをうけ命のおしからぬもの丶候へきか御たすけ候はゞありかたかるへし公平殿と申ければやあ御ゐんきん成すけ殿のおあひさつにめいわくいたし候とうちわらつて申ければ時にさたかけすへしけきとう丸つゝとよりそれ〳〵きんひらひつはり給へと兩ほうのてあしを四人して四ほうへゑいと引ければあしてはきれてぞのきにけるのこりしめしうと是をみてあらをそろしの御事やわれわれはやとわれものゝ事なればなに事も存せず候へばたゝ御ゆるし候へとこゑを上てそさけびけるきん平きいてそれかしがげぢにしたかはば命をたすけんと申けれはめしうと共是を聞御たすけのうへはいか様共御はからいいかてかそむき申べきといへば其義ならばたすけんとていち〳〵なわを切ほときこなたへまはれと引ならべなんぢ二人御のりものをまはすべし又なんぢ二人は御馬のくちを取べし殘の者共はやくなければたゝつれてくたらんもせんなしみればなんぢらも五人ありわれ〳〵も五人なればさいわひ人しゅもあふて有われ〳〵もくたひれたれはおり〳〵はおいてはりま迄下れとてのりもの御馬さきにたてあとにひつ付おの〳〵おはれてくたりしは心ちよくこそみへにけれいそくに程なくはりまにもなりしがばまつ〳〵これゆきとのへすへしけをもつて御つかい有ければ是ゆきなのめに思召やかて御むかいに出させ給へば御たいめんありてみたひ所や若君をばま

つ〳〵おくへしやうじ奉りしゆ〳〵の御ちそうかきりなしより吉みぎのあらまし御物かたりありければ是ゆき大きにおとろき給ひさては左様の御事にて御下向有けるかやさらばせいをもようしてるもとをせめほろぼし御うんひらかせ申さんと郎等のとしみつをめされそれ〳〵こくちうのせいをもようし仕れ畏て候とていち〳〵しだいにふれにけりこくちうのぶし共は申におよはすその外りんこくの大みやうせうみやう此由をきゝつけしん上の物をこしらへせいをもようしわれも〳〵とはせまいる一ばんにひせんのくにのぢう人さたけの八郎成すみ五百よきにてはせまいる扨又しん上物にはらいくにさだがうちたりしやりのほ八寸つゝありけるをほぎはをきん〳〵にてひたりまきにまかせたるけやり五十すぢぞさゝげける二はんにはさぬきの國のぢう人たかばやし源六兵衛まさとし四千よきにてはせまいるさてしん上にはしげとうの弓廿ちやうにわしのはにてはいたる中くろの矢をそへてたてまつる三ばんにはいよのくにの住人にましほのこんない太郎ひろさだ五千よきにてはせまいるしん上ものにはきんぶくりんのくらをき馬十疋のりをきはめてたてまつるさて又四天王五人の人々にはためしぐそく五れういろ〳〵のいとをもつてとうせいようにおどさせべつして是をしん上す四ばんにはきいのくにのぢう人しんぐの太郎正かつ二千よきにてはせまいるしん上にはなみのひらがうつたる長刀をしやくどうつくりにこしらへ十ふりそへてたてまつるさて又五ばんにはあはぢのくにのぢう人さかわた藤内ひろつな三千よきにてはせ來るしん上物にはめいさくのうちものをこそろへたりさてうち物に取てはよしみつむねちかさだみつ此たちをはしめとして十こしそろへひときはあらせてこしらへたりまつめぬきにはのほりうをきんにて一ようそろへほらせうちにけるつばには色〳〵の生類やくさばなをしやくこうにてすかさせてぞかけにけるさてかの外の大みやう小みやうわれも〳〵とはせあつまりいろ〳〵のたから物をそへてさゝくれば是そたからの山なるへしさてはせあつまりしぐん兵共つがうそのせい三萬八千よきにちやくとうつけ御大將の御めにかくれば御悦はかぎりなし此せいをもつてときをうつしてなにかせんはやうつたてやもの共とて

おして都にのほられけるより吉公のいかうの程ゆゝしかり共なか〳〵申斗はなかりけり

六たんめ

去程によりよしうつてのぼらせ給ふ事都にかくれあらさればてるもと大きにおとろきかけかたをちかつけてより吉たせいにてうつて上るときいてありたせいを引うけみやこにていくさせばりをゑん事はかたかるへしたゝにしのおかに出むかいやまさきおもてにてせうぶをけつすへしとてそれよりもにしのおかにからほりほらせようがいきびしくこしらへてかけ方はこたかき所にかけあかりてるもとをまねきよせそれよきちりやくを一つ思ひ出して候あれにみへたるもりのまはりをおとしあなにほらせもりのなかにくん兵二三百人かくしおきてきよせばやりすごしよこやにうつていでより吉をうち取へし若又てきがかくしせいをみ出したらばさだめて大せいかけよすべしその時〳〵たんのおとしあなのふたつくりたるつなをきりおとしぐん兵おゝくころさん事あんの内にて候とてに取やうにぞ申ければてるもと是を聞あつはれたくみしちりやくかなと扨おとしあなをほらせもりの内にはくんせいをかくしおきよするかたきをいまや〳〵とまちにける是はさておき頼義はいそかせ給へば程もなくやまさきおもてにつかせ給へばふしきやな八まん山のかたよりもしらはとつかひとびきたつて御はたの上にとまりければ御大将をはしめすまんのくん兵共にいたる迄いか様是は八まんぐうの御らいげんぞとみへたりとていよ〳〵いさんでよせんとすれば此はとしきりにはたをあとへ〳〵とけもとしけれは御大将こまをとめさせ給へばはとは八はたのかたへとひさりぬたけつなふしんに思ひのびあがりてあたりをきつとみわたして是にみへたるもりの中にてき有とみへたりそれをいかにと申にいつもあのもりにはしよてうおほくありけるに一つもなきはふしん也あれに向てみよやとてこまのかしらをならへもりをめあてによせにけるあんの如くふせゝい有其時竹つなぐん兵共に向て申けるはふしきやかたきわつかのせいにて此大せいを引うけのかぬはいか様森のまはりにおとしあなをほりぐん兵共をちかつ

けよせころさんための斗事とみへたりかまへてかまへてぐん兵共一人もちかつくなたゝとをやにいたて城の内へおひ入一所にうちとらんぞと下ぢすれは畏て候とてほこさきをならべやさきをそろへさしつめ引つめいたつれはもりのなかのくん兵共こはかなわしと一どにざつとじやうのうちへにけ入てきどをうつてぞこもりけるさてそれよりもきんひらはまつさきかけてにしのおかにはせむかひてみれば木戸いまだひらかざれは公平是をみて此もんをそのまゝにおくならばたひ〳〵にあけよ〳〵と云もむつかしか様のためのぐんだうぐそれ〳〵もんくづしもちてまいれと申ければ畏て候とてかないかりのつめ八つあるをもんくつしとなつけ大つなつけたるを十人斗にてもち來るきん平やかてちうにひつさけゑいやつといふてもんのうちへなけ入とびらにひつかけゑいやつと引ければもんはしら迄戸びらにつれてひきたをすじやうの内のぐん兵共かなふまじきと思ひつゝみなちり〳〵にぞおちにけるかけ方是をみてきたなしくん兵ども命はうんにありたち打においてはわれにまさらぬもの日本にはおほへすとてなきなた水くるまにまはしてかゝりけるを公平てつぼうひつさげまつ所へかけ方きんひらをのせんととんでかかるをとびちがへ長刀のはゞきもとより打おればかけかたかなはじとはしりかゝつてくみけるをゑゝもの〳〵しやといふまゝにこかいな取て引もとしかしこへどうどなけくびねぢ切てすてにけり公平てつぼうひつさげ身方のちんへそ引にけるかゝりける所にすへしけきどう丸二人つれてかけ出いかにしやうのうちのぐん兵共いつ迄命したふぞや五十も百も一どに出合くまんとよばわつたり殘し兵の是をきいてかやうの時のためにこそやうなきとらをばかいおきたれと大てのもんのわきなるとらがらうのくちをあけあれ引さけとてはなしける其たけ八しやく斗成とら一文字にかけ出とびかゝる所をすへしけひらりとのりければきどう丸たちよつて兩のまへあしむんずと取てをしつくるすへ重うへよりてくびをおさへたかいに力を付あいゑいやつといふてすねをおればさしもにたけきとらとはいへ共大力共におし付られ大ぢへどうどたおれしをこしのかたなひんぬいてこぶしもとおれとさしころすきどうはとらがくひをかいつかみひ

らりとかたけければ時にすへ重城のかたきに向て申けるは何よりもつててうほうのとらを給はりくわぶんにこそ候へやりをこしらへさやに仕らんといふすてみかたのぢんへ引にけるは人間のわさにてなかりけり扨又竹つな定かけ二人打つれかけ出いかにてるもともはやかなはぬいくさなるに何とて命をしまるるぞみれんにみゆる大将かな出あへくまんとよばわりけりてるもと今は是までと一もんじにとびかゝりわたなべとむんすとくむされ共竹つなかうのものよはこしをひつかゝへかしこへとうとなげければこはくちおししとおき上る所をさたかけ立よりそくびを取てめてへけたをしおこしも立ずくひちうにうちをとし君の御めにかけ申せはよりよし御ゑつきましましてみだひ若君引くして御所にかへらせ給ひけるなを〳〵げんじの御はんじやうせんしうばんせいめてたし共なか〳〵申斗はなかりけれ

うろこかたや新板

公平武者執行

初段

さても其後つら〳〵世の中をかんが見るにへんくわ時にさかへきよきもかならず、あくにはかすむ、ういてんへん定めなきこそ浮世也、その比みかとをば御れんぜんゐんとぞ申奉る又天下のぶ將をは源ちんじゆふの將ぐんいよの守よりよし公と申ける、御家のかうけんわたなべむさしの守竹つな坂田兵ごの守金平うすいの形部定かげ、うらべのすへ宗ひらいきどうむしや清氏とてかれら五人は天ふ此かたのゆうしやにてらいくわうの御時よりより吉公迄三代四天王と申つゝ君をしゆごし奉るかのより吉の御いせひめかぬ草木もなかりけり、有時の事成しによりよしの御前に四天王くわいがう有酒ゑん茶のくわい事おはり、よもはなしに成にけるよりよし仰ける様は世おだやかに國か正にゆたか也かゝる折からにより吉もやすき心の思ひでにかはりたる事あらば語給へめん〳〵と御枕まいらせよと御しやうぞくをぬぎかへられ打くつろぎはなしと成、四天王おの〳〵もしやうぞく御しやめん有ければすわう大もんぬき給ひ長はかまにてあいつめける其中に公平はしやうぞくもたかへずひたゝれの袖引そろへ相つめたるよりよし御らんしいかに坂田御へんも打とけよも山の物がたり然るべしはやとく〳〵と上意有竹つなみていかにきん平上い也しやうぞく御しやめん殊にやけふの日もくれ行御なぐさみの御はなしひたゝれ取給ひ打くつろぎて然るべしと申ける金平はへんしもなさてわざと大もんのゑもんつくろひいため付てぞひかへけるよりよし御らんしいつれ坂たはすねもの也人せいする時にははくたいなるしやうぞくしてきんり共はばからずゆるすと有時はゑぼうしひたゝれしやうぞくしていんぎんなるていたらく何れ心すねがましくなきならばぶんふ兩道の兵ならん武はばくたいにつよけれ共文はつゆもなし竹つなと上い有わたなへ承り上いのことくいか様にもよこぢ人にて候と打わらい申ける公平は何に腹の立つやらんくすみ切ていたりしがやあ竹つなわとのは御前のよきまゝに君はき

み共思はれずさすか將ぐんの御ざ有へき御てんにて天下のじつけんたるべき身がひやくゑいにて打くつろぎいかゞ心へがたき御かろう御しあん此比國か太平にしてうき世のていなだらかなれはゑしれぬ御前のていたらくそうしてしういとら大かめまむしによつくにたる物にて心やすくみゆれとも一たひはてをしたゝかにくはれぼうまひする事もくせん也かたかたは君としての御中よき事なれば長はかまもいらぬ物君の御ひざ枕然べし坂田は存しのむね有てしやうぞくあらため罷有と更にくつろく事はなし竹つな打わらひいつにはじめぬ公平の御いんぎんほとんどいたみ入て候とさらぬていにてよも山の物がたり大名あまた打よりて御前に咄初まりけりひせんの國の住人さいの判官申様さても此比都にてきたいのさたもつはらにて御ざ候、そのさたはたんばの國どうしが岩やに又きじんすみ近國の者共を大きになやまし候よしかくれなく候人々もきかれても候やらんと申上るよりよし聞召れそれはおぼつかなき取さたかないか様にもさ有事も有ぬへしそうしてあの大ゑ山どうじが岩やにはらいくわうの御時うちもらされし子鬼ども今はせいちやうして人をなやまさん事もや候らんと上い有爰にはりまのひめぢの大將せきはら將げんたゝもと罷出て申やうそうして世の中にかげなき事は申候はずひめしの城主なくあれて候にばけものあまた候と人の申にたがはずきたいのへんげ候也男山とて候によな〳〵ひかりものかのあき城にとびうつると見申よりかならずひめぢに一丈斗の女さまざまへんげ申由もくせんに僞りなく候とりくぎはつめいに申上る竹つな聞てひめぢのばけものかくれなく聞及ひて候也誠に三がいひろくして日本のそのうちには様々の事あらんと人々きいの思ひをなす其次にあふ州の住人大野のはんくわん是高申されけるはされは國はひろくちはひさしくころうのへんげきつねたぬきのばけものはいくらといへるかぎりなしかはれるきたいふしぎのはれざるはつくも川のひかしにあたり何共たいはみもわかす百千萬のいかづちのなるにひとしきこへ有てきたれたいめんしてもの云はんあら腹立やとつぶやくこゑ天ちにひゞき候也かかるじせつにたれ有て行べきと云者なくうちすておけは今とてもふしぎはたへず候とはゞかりなく申上

る竹つなうすいうらべひらいおの〳〵ぜんだいみもんのそのふしきさてもかわれる次第やと君を初みなみなきいの思ひをなす其中に公平きかぬがほにてゐたりしか大のまなこにかどをたてやあかた〳〵はちんせつをよつく申上るかな何れ天ちの間にかはりたるばけ物よゝなこにさへたるへんげとかねてよくしるめん〳〵はなどはせ向てしやつばらが正たいを見あらはかしくびねし切てぢさんしてか様〳〵と申御前にてはなしは有へき所也なんぞ國取たるへきめんめんが女わらんべのことくきつねたぬきかなく聲をおくびやうさきにたつうへ時のこゑとはみゝに入空ふく風の音までもへんげのわざと思はるゝしよぞんの程こそくちをしけれしかるにれき〳〵四天王ともよばるゝ身がおくひやう一のやつはらおのか心にたくらへておそろしげにわざとはり程なりしきつねめを十丈鬼のことくにはなしなす御前の御きげんよろししと誠しかほの物かたりをしたをまきこくびひねりそれは是はとおそるゝは人々にはいかなるやまいのつきぬらんそうしてよいよりわが君もかた〳〵もゑほしひたゝれ御めん有天下の將ぐんたるべき御前にて打くつろぎたるていたらくゑしれぬ小歌の出べしと兼て坂たはぎやうぎやふらすひかへし事爰のどうりにあたりたりか程大平におさまり此比いくさ事やみて國〳〵の民百せいやすき思ひなす所にぶ將の御前にて國〳〵にへんげさせう大じやあまた出たりとふうせつあらばおさまりしくにや都又そうどうはなしのばけもの様々のつのをはやしおゝ付て天ちくにはひこる程のはけ物めにもみへずかけもなく國もしらすあとかたなきうそと云はけ物いでんしやうしさよとにか〳〵しくぞ申ける竹つな聞ていやとよ公平それ人間はつう力あしたをしらず我かのぶしを集めてひやうでうとし國の仕置よのあんないはきくもの也然にれき〳〵御前のはなし何いつはりの有べきぞ御へんかたかはやぶりの御あいさつ近比しやうし千萬也たしなみ給へと申けりきんひらかふりをふつていや〳〵れき〳〵の御前のはなし誠しからすかたきせいもんにて承らんいかに〳〵と申ける君を初きん平わがまゝなることば人々せいもんたてゝりくつにつめ給へはや〳〵と申ければ有あふぶしわが國のはなし一こんいつはるものならば正八ゑんの御ばつ

とうけ八まんならくにだざいせんまつたくいつはりならず候とおの〳〵せいこんたて給へは金平につ事打笑い其せいもんをきかんためおもしろし〳〵左様のふしき望也君御いとま給はつて事のせうれつたゝしつゝやがて罷歸候はん公平むしや執行と御そせう申上るよりよし聞召れとても申かかりきかぬきざしの我まゝもの御いとま給はつて然べしとわたなべ御みゝにさゝやけば其ぎならばうすいの定かげ坂たの公平一つは國のめつけのためむしやしゆ行仕やがてかへれめん〳〵と御太刀一ふりしやきんそへて給はれば二人うれしげに御前を罷立やがて御めにかゝらんと諸國執行と聞へけりかの公平うすいが心の内うれしき共中〳〵申斗はなかりけり

二たんめ

▲其後爰に又天下に一のわざわい有ひのくま大臣あきかせとて大あくのくぎやうちくごちくぜんぶんごぶせん四か國の大將にて日比我十ぜんにそなはらんとたねんぎやく心くわだて大力のくせ者を聞及使をたて我いへにめしかゝへ日やてうぼう軍ひやうでうおこたらずよるはひるとないだんす一の良等岩やか崎のれんまん坊てつへき入道八がんくらまが谷のくわいさん杉の森かんれん坊岩がみしくわいしとてかれら五人ははんくわいかいせいをあらはし長良かひせしほうをうそむきおのがくんりよすくれてたいかう坊になをまさるぐんしやよりよしか四天王ひとりむしやを打とらんとたねんかうげんのはき軍事はしまるにおいてはなん時も公平をは我々打とらんと心かけ御前さらずあいつめけるその外たて岩龍馬さへもんすへかつあらなみ大しやざへもん國たけあらくましゝへもん時なが大とう龍こざへもん平大山明王四ろにたてぬき天まの介重是あらくもいなつま村雨の介くろくもたつへもん光よし大ばの惡一大かせ小なみかつだ岩にしそがいなめとてみな〳〵日本一のあぶれものつねに大たちよこたへてやへは引てうでさすりかうまん第一の兵くるまざしきにいながれていくさひやうでうなしにける然るにひのくまん中しとねをしかせぜんござゆうに郎等あまたならへ事のせんぎをきはめける先その中にとつてもくらまが

かたにのくわいさんすゝみ出て申様さても此近年いくさたへ都のていゆたんおびたゝしく候所にさつそくはたを上させ給ひ然べく候承れは諸國のきんみとてあんないけんみのそのためにうすいの定かげ坂たの公平國〳〵をめぐるよし承り候也きやつを待ふせ打取ていくさ神に奉り其後君つくしださいにたてこもらせ給ふへし我々都にあいささへ花といろめく都をはらつくわの春と打ちらし申べし此ぎいかにと申ける秋かせ聞てゑみをふくみあふいさきよし〳〵先其あんないの公平定かげを打取べしたれか打つてにさしこさんと云所に大とら龍こさへもんすゝみ出二人をそれかし一人にて仰付られ候へとすゝみ出て申ける龍馬さへもん罷出いや某仰かうむらんと申もはてさるに明王四郎つゝと出それかし上いをかうふらん我も〳〵とあらそひける大ばの惡一すゝみ出あれていのはむしやに二人三人あらそひて打とらんなおとなげなしそれかし一人に仰付られ候へと四人望をかけにける秋かせ聞てそのぎならばうらみこいなく四人打こへ公平定かけ打取かへれとげぢをなす四人の者共ふせう〳〵に申様あれていのやつばら二人に四人のうつて口をしく候へ共上いのうへは力なし打取てかへるべしそれに待給へと思ひ〳〵の出立にてうすい坂たを今やおそしと待にける是をばしらできんひらは重代のたちをはきてつぼうをつゑにつきすげの小がさでかほかくし定かげ二人うちつれてひそかに都を立出る心の内こそうれしけれ公平定かげに申様是よりあつまのかたにやくたるべき又つの國大もつのうらより舟にのりてつくし九か國めぐらんやいかがはせんと申けるうすい聞て先あづまにくたり其後つくしに打こへ然べしとあつまじさしてくだりける心の内こそゆゝしけれ大つなはてを打過てくさつの宿に入ぬればむかふよりせいたかきおのこ二人さゆふに立わかつてあやしげに待にける公平みてこはふしき也きやつのつら玉しいたゝものとは見へず此比軍たへ人をきらねば心むつましく太刀のはかねもわすれたりかやう成くせものをきつてこそほねためしとはなりぬべし御へんなさぬていにてとをられよ我はきやつを門出にちをあはしどうろく神にたむけんと立とゞまればうすい聞てこはふかくなるきんひら日本をめぐつて國のしをきをなすへき身がとが

なきわうらいのもの共つぢ切せんとはふかく也あれがそなたにてきたいせば尤共いわるべき御へんがきにいらざる人のつらはうき世にいくらといへるかぎりあらじそれをむたいにころさはん天下のじつけん坂た兵ごの守公平は近比にあい不申たしなみ給へさりとては大き成むふんべつ〳〵ととてを取てあふみぢにさしかゝれは公平つふやき〳〵坂たにはとかく一人づゝふんべつくさきかんげんしや付そうこそきのどく也ゑゝ我一人ならは心のまゝのたびならんに御身は大き成金平がにやまい也と打わらいの中にこそ出にけるかゝる所にさいせんの二人のおのこ四人と也又むこうより來りける定かげはつと思ひゑゝきやつはしにがうまねくざい人さいぜんだにぜひきらんと云きん平殊にあしばたいらかなる原中の事なればむたいにけんくわ出きなんぜひに及ばず坂田人をあやむるものならば定かけ二人うけ取べしと太刀おしくつろけとをりける四人の者共めくばせして二人をまん中に跡よさきよと取こむる公平みてすは申さぬか定かけきやつはらはしさい有やつばらとかねて坂たが見うへに打てすてんと申たり是は正しく君の御前にていつはり事を申たる大名共かのふしきのなき時はおのがきよごんのはつかしさに道にてわとのときん平をよみ人しらずにしまはんとのはかり事すは八まんも御ちけんあれ坂たにおいてはゆるすましとつか〳〵とそはへよれは四人一度に太刀ひんぬきいかに金平定かけ御へんにむしん是有てくびをかゝんとて其ため大つの宿よりねらいたりくびをわたせと申ける公平から〳〵と打わらい誠にふつていなる借用かな尤坂たがくびかすべけれとりをくひにつくる也御へんたちかくびりそくに先わたすべし其後きん平がくびを入用があればかしぬべしそのけ名あらはし給へむしや執行のかど出にぢんじやうにせうぶをけつし候はんとてつぼう引さけ待かけたり四人の者共是を聞事もおろかやかく申は天ちの間にむ二むさん大とう龍こさへもん兼平たて岩龍馬ざへもんすゑかつ大山明王四郎正のり大ばの惡一忠宗と云者也二人はかねて聞及まいりそふと龍馬太刀ひんぬき切てかゝるを公平ゑたりやあふと持てひらいてうとうてばかうべどうの中へみぢんと共に何のてもなく龍馬打こんたりきん平わらつてあゝいたはしや大とう

のも龍馬もてつぼうにあいてたまり給はぬせうしや又ふり上打てかゝるたいさんの明王四郎あゝしたりや坂田あますましとはつしときる公平みて心へたりとてつぼうにてはねぬればたちをこくうにはねとばせさしぞへぬかんとする所をとひかゝつてかいつかみねぢくひつゝぬきかのそめ〳〵とふりまはすそのひまに定かけは龍馬と悪一にわたり合さん〳〵にたたかい龍馬がくび打おとせば大ばの悪一かなはしと後をも見ずしてにげて行さだかげあますましとおつかくれはきん平みてなかおいはむやう〳〵と明王四郎を高てこてにしめいか様しさい有げのくせもの竹つなよつくぎんみいたされよと一通のふみしたゝめ近江のさと人共をめしあつめきやつを都に引へしと申付てきんひらうすいは二人打つれあつまをさしてくたりけるかの公平がはたらき日本一の兵とおそれぬものこそなかりけり

三たんめ

其後大ばの悪一たゝ宗は思ひの外にうちそんじほうほう命たすかりてひのくま大臣秋かせにかやう〳〵と申ける秋かせ大にりつふつくしせんなきおのれ原かしはざかな此うへはうつたてやもの共とつかふそのせい三千よきとちやくたう付しのひ〳〵にいくさのやういと聞へける是は扨置あふみの國の土民共たいさん明王四郎になわをかけ天下のめしうとさきのけと五百人にておつ取かこみ二條の御所にまいりかやう〳〵と竹つなに一通をあいわたせはわたなべうらべ平井立出うけ取ていか様しさい有へしそれ〳〵かうもん仕れとぞうしき下人あつまりてむさんやな明王四郎を十二のはしごにからめ付申せ〳〵とせめにけりむさんやな明王四郎あまりにつよくせめられ我々むほん一身の者也と斗はくせうしてつゐにむなしく成にける竹つなおの〳〵さてもゆいがいなきとが人かなぎやくゐのもの丶事なれはいそぎこくもんにかくべしと龍馬龍左衛門くび明王四郎以上三つ四條かはらごくもんにぞかけにける札のおもてにいわくこの者きやく心の者成うへ近江の國にて召取加此と書しるしきせんぐうじゆにみせにけるひのくま聞ていかりをなし此上はとてもあらはれたる物故にて

いとをせめやふつてつくしなんかの城にたてこもらんはやうつたて者共とつかうそのせい三千よき二月中旬にくれないのあかはたをかゝやかし二條の御所におしよせて大てからめておつ取まき時のこゑをそ上にけるされ共わたなべもんの矢くらにかけ上り弓とやつがいよせての大將は何と申人やらんむほん人のけみやう承らんとよばわつたよせてのちんよりうのはなおどしの大よろひみの時とかゞやかしくろなるこまにきんふくりんのくらおかせしつゝとのり出し事もおろかやふぢはらのあつそんひのくまの大臣秋かせ也我世の中のていかんが見るにてい王始みなみちにたがへる國かの仕置諸天のかごいかでまぬかれん我十ぜんに立かはりせかいあんおんならしめんためあくいのともから事ゝくせめほろほさんため只今馬を出す也より吉がくびきつてかふとをぬぎてかうさんせよとよばはつた竹綱から〳〵と打わらい何秋かせとやなひゝこなたにも御へんぎやく心とはさつしたり御身てうてきと見るからは天ちの内にあんおんにおくべきやと五人はりに十五そくきりきりと引しほりさし取引つめいたりけるいまた時もうつさぬにくつけうの兵卅八名枕をならべていふせたりよせては是にはいぐんする所を城の内の兵共もんをひらき切て出いくさははなをそちらしける両ぢんたがいに入みだれうたるゝものをのりこへ〳〵爰をさいごとたゝかいけるいくさ中ばの事なるによせてのぢんより八尺ゆたかの大ほうし二人一人はうちはのたて物一人は水車のたてものかしこにおしたて大おん上てなのる様いかに四天王はおはせぬかひのくまのかうげん大力の悪僧有とはかねてしろしめさるべしかく申は岩やがさきのれんまん坊同てつき入道八かん也四天王にげんざんせんとよばはつたり城の内よりせらた兄弟七郎八郎太刀引さげ一もんぢにかけ出るおびたゞしのけむりかなまいりそうと打てかゝる二人の悪そう物もいわず一もんしにわたり合てつぼうにゑしやくもなく引かけみぎはのほとりにざんぶとなげ入かやう成へろ〳〵むしやにてをおろすもむつかしや四天王はなにとてはやく出ざるぞあ待ひさしやとよばはりけるこゝにはつせきたてわき、かどぬま九郎は大力のもの也しか櫻の花の立ものかとぬま一本の竹をさし二人けめうをかへうらへ

のすへはる平井のひとりむしやとなのつて一もんじにかけ出るれんまん坊悦びそれこそ望也いかにてつへき坊先我々は平井殿のさくらのはなのさきかけて今をさかりのたてものは此れんまん入道か大うちはのさしものにて御山おろしの大あらしあをぎちらしてすてぬべし又大竹のさゝのはのすへ竹かしそく竹のうらべのすへはるとのよゝをいわひてみへ給ふ共此水くるまのくる〳〵とめぐるうちのせうぶなるべし殊にや以て此てつへき入道がらつくわみぢんと打くだかんいさまいりそうとわたりあいさん〳〵にたたかいけるれんまん入道いふ様はいかにてつへき入道両人と申合ていざくまん尤と四人たかいに入ちがへむすとくみ上をしたへとかへしけるされとも悪僧二人は聞ゆる大力はつせきかどぬま両人はかしこに取ておしふせ、くびつばと引ぬきゑゝ聞及程はなき四天王しやうし成有様と大おん上城かたの四天王うらへひとりむしやをはれんまん坊てつへき入道打取たり竹つなにけんざんとかうけんはいて立たつたりけるかゝる所にうらへのすへはるひとりむしやはきんりに君をしゆこしたいりを守り有けるが御使をかうふり二條の御所にひしや香車といへる立ものして來りしがれんまん坊てつへき入道がうらへひらいをうつたるかうけんはくを聞よりゑゝ城内よりわれわれと名のつて出うたれたると覺へたりこゝは我なをすゝかん尤と二人一もんしにかけ出何をうろたへ御坊はしれぬねごとをの給ふぞうらへひとりむしやとは我事也本よりきやうしやひしやのさし物は敵と見るよりてきぢんさしてとび入る也とむ二む三にとびかくればれんまんてつへき扨は我名ちかいて候な尤と引くんておしふせんとするにさいせんとは大きにかはり聞しにまさる四天王あしく取そんしてかなはしとひたいにあせをなかしつゝゑいや〳〵とねじあいけるうらへみていて〳〵いとまいらせんとゆんでひねりめてかへしにはたとけたをしすかさすくびかきおとせばひとりむしやはてつへき入道をかしこに取ておつふせくびふつゝとねち切二人たちのさきにつらぬき四天王ひらいうらへのてなみにててつへき坊れんまん二人を打取たりと城の内へひいて入をほめぬなかりけり秋かぜいかつてきたなしやみかたのせいかゝれ〳〵とさいをふる大ばのあく一すぎし

ちしよくをすゝかんと大たちまつかうにさしかざしむらかる中にわつて入くつきやうの兵十三き切ふせ四天王はおはせぬか忠宗せう〳〵なれ共くび十三ぶん取して引取也我と思はん人あらば出てとゝめ給はぬかとこうげんなす所にくろ皮のよろひきたるむしや大長刀をちらして出悪一に打てかゝる大ばみてくつきやうのむしやけめうをなのつてせうぶせよと云もあへす太刀八そうにおつ取ちらし出たる長刀はつしとうつて入らんとするかのむしやさそくをふんでひらりととびしさりひつ取太刀付入て大ばのあく一がゆんでのもゝをかけおとす悪一心はかうはたらけ共いぬるにどうとたをれけるやがてくびを打おとし長刀につらぬきてきぢんへなげ入るひのくまみてきやつは正しく四天王にて有けるそ二人かゝつて打とれとざいふれはくらまか谷のくわいさん杉のもりかんりやう坊岩がゝしくわいし三人の悪そうおもてもふらすかけ合まんなかにおつ取こめみぢんになさんと切かくる此むしや事共せず二人を左右に相つけ一人をまへにうけ三方ちらし八つからみくもてかくなは十もんし水車と云者にひらりとくるりとうけながしまへにたつたるしくわいしがくびはいつしかころびおちのつけにかへしたをるれば左右にたつたる杉のもりくらまが谷のくわいさんつゝと入て二人両方よりむづとくむ此むしやわらつてもの〳〵しやゆんでにかゝるがんりやうがくびのほねちぎれてのけとかいつかみかしこへなげ跡にのこるくわいさんをひだりのわきにねぢこんでちうにはしりおき上らんとするかんりやう坊がまつかうらつくわみちんとふみくだくひたりにいたるくわいさんはかみをなしてしめぬればむさんやくわいさんはうんと斗をさいこにて両かんたちまちぬけ出ちをはきてむなしく成をかつはとすてかぶとはづし扇をひらきあせを入るゝをみてあれは男にてはあらすして公平がいもふとこんがふひめ生年としは十七歳父きん時がひそう娘きん平が名代に罷出たりおのれはらそのぢんひいておち行や今しはらくやすみ大将にげんざんせんとのゝしつてそは成石にこしをかけしはらくいきをつきにけるかのこんがうひめ平井うらへかはたらき誠に四天王なりけりとほめぬ者こそなかりけり

四たんめ

其後きん平定かけは都のいくさは夢にもしらすの道山道打過てたんばちにかゝりけるおりふしさと人たき木をこりてとをりける定かげ近付大江山へは此道をつたい上り候かおしゑてたへと申けるさと人聞てかた〳〵はたびの人にて候かそんしなくは此山にはいらぬものどうしが岩やにきじんがすみたび人のふみまよひ行くれたりしその人の一人もいきてかへる事候はすとく〳〵さとにおり給へとかたりすてゝそとをりけるきん平聞てゑみをふくみかゝるとせんの折からによきなぐさみぞうれしけれこよひは日もはやくれければいづくにか一夜をあかさんと見る所に向のたにゝともし火かすかにみへにける定かけ悦びたとへ鬼の岩や也共あれにて一やをあかさん公平こなたへともないてしばのとをはと〳〵と打たゝけば内よりたそとこたへける定かげ申様我々は山道にふみまよふ者也こよひ一やの宿をかし給へと申ける内よりかのしやれかうべか申様なに人かいたはしさよ我も昔はさ有なんぎにあいたる事も有はや〳〵是へとしば戸をおしひらく定かげ公平に申様必はやつて事をしそんじ給ふな萬事は我にまかせ給へとおくのでいに入ぬればていしゆはおくにかくれいる公平一人のおのこをよび御てい衆に御めにかゝらんはやはやと申けるかの男きん平かきしよくをみてあるしは少かたはにて候へは人々の御めにかゝる事成かたし御用の趣候へはそれかし仰かうむらんと申ける定かけ聞ていやとよこよひ一夜もふかきたせうのゑんかたはゝ人によりてつゝみ給へこよいは殊にさびしくして我々持合たるさゝへをひらき候へば御てい衆にまいらせんはや〳〵出給へとたつて申せはあるしはかしらはしやれたるこうべにてはつかしなからたび人のめさるゝに出ざらんなぶれいと存罷出て候定かげ公平げうをさましさてもかはれる御てい衆やいまだおわしますその人にも是へ〳〵と申けるあるし聞て一人は某がそく女にて候又ばんしかぎりと見ゑしはさい女にて候と申けるきん平ふしきはれやらすこぶしをにぎりいたりける定かげさゝへ取出しいかにていしゆゑんろ持合たる此さかつき一つくんでさゝんと云あるし聞て禮ぎをなし誠さんりんに取こもり

ひさかたにて酒を給はる也我らい光の御代の時よりのふにかしつき奉り都に有し其時は日や公時などにさんくわいして度〳〵大酒仕それよりたへてこの方はさんりんなればくたさるゝ事をゑすあらなつかしの昔やとしやれたるかうべが物をいふ公平いよ〳〵ふしぎを立きやつへんけのものなれば我々がせんぞをさとりさへつる者と心へいかにてい衆先その酒ほし給へとさかつきをあいわたせばしんきたゝしおしいたゝき一つくんでそれ成たび人ゑくわんたい申さんと金平にさしにける坂たうけて少のんでひかゆればなにがな御さかな申べし山中なれば心の斗御さかなむかしわすれぬ一ふし一つうたひ候はんとおん上たかくうたひける君か代はさかゆれ共我は山ぢのむもれきや花さくはるはいつか見ん花さくはるはこよひ也所は山ぢのきくの酒なにかはくるしかるべきぞと今一つとぞすゝめける公平うすい是を聞あつはれきよきうたひかな扨ていしゆふしぎの一つ候あれ成なべのうちに人のかしら候也是はさかなに然るましやと申けるてい衆聞て誠に御ふしん尤也あれは人のかしらにて候はず年ふるさるのかしら也是成それかしが娘いか成事にやした、もとをらず候へはろれつのくすりにさるのかしらめう也と承薬のためにもちい候しさいを聞給はすば人のくびと御らん有も斷也又それがしどうはにんげんにてかしらしやれたるほねなる事是もふしぎのたつ所あら〳〵かたり申べし某わかきむかし召仕の下女に心をかよはしよな〳〵かよひ候へば是成女ぼうしつとふかくくびさし出す所をあいの戸だてはさみそばににへゆの候をむたいに打かけ雨かんにくはやきうせてくちのうち成した斗相のこつてふしぎの命たすかり人ぜんかなはずかくさんりんにとぢこもつて候へは見る人へんげばけものよとおそる事こそうたてけれあはれみ給へたび人とかたりける公平よこてを打つてから〳〵と打わらい誠にいわれをきけばしこくせり世の中にか程かはれる事あらしとあるしもうすいきんひらも友にどつとぞわらいける定かげていしゆに向先程申されたるらい光よりのふきん時などはいかゝしてしり給ふ御身のむかしは家名は何と申せし人やらんかたり給へと侍けるあるし聞てはつかしながら名のるべしかく申それかしはまん中公代々の御かしんまふぢめかたと

てすどの高名なをあらはせしめがたの十郎ひで光おとゝにめかたの萬八ひでかね也つな公時すへ竹定光ほうせう其子にみたの源二郎すくねのあく太郎うすいのあらどう丸平井のきどう丸とは竹馬の昔今見るやうに候と袂をかほにおしあてゝ心斗のなみだ也公平定かげ大におどろきこはそも御身はめかたのまん八なりけるか我こそ坂田の惡太郎うすいの一丸成けるはとたがいにてとてを取かはしすがたかはれば中中にみそんしたるも斷也かく名有兵のかゝるふせいとなりはてうづもれ給ふぞあさましけれしかしながらわれ〳〵都へがへるならよりよし公に申あげ都にきさんの花ひらかせむかしかたりの友とせんあらなつかしのめかたやとおさなきむかしそれは是はとかたるにしたがい公平も打とけてみな〳〵悦ひはなしけるあるしは定かげに打向ひさてかた〳〵の此國への下ちやくは此おく山のきじんたいじにきたるべしゑゝむかしならは此めかたも共に打こへ高名して都へきさんのみやげとなすべきに思へば心斗也あすにもならば是なるわかきものはめかたの大藏國のぶとて我がちやくし成けるぞあんないに召つれ給へさびぬれ共此太刀はまん中公よりわが父定光ばんてんになをあらはし御ほうびに給はつたるちすいといへるめいけんものゝやくにはたゝね共むらさきすそごの御きせながそへて給はるとたはらに入てはりにつるし置たりとこもの内より取出す金平めかたは左樣なるすがたとなれ共むかしわすれぬぶ道たのもしくこそ候へとよもすがらの昔かたりによはほの〳〵と明ぬれば宿のあるしにいとまをこいめかたの大藏あんないにて大江山にとわけ入けるふしぎのゑん共中中申斗はなかりけり

五たんめ

▲其後公平定かけはめかたの大藏あんないにてそばをつたいみねにのぼりはるかにたにを見おろせは千でうのへきたんあゆにそみ見上れはくもがみね空たつきりの立かすみいつれを山共見もわかず谷にくだれはちり〳〵水いわもるし水にのんどをうるほしたにをわたりの丸きばし橋かとみれはいくとせふる共しれざりける大ぢや也あなたのそはのはしの道わた

りてみればかしらをぬつとさし上くれなはのしたをまきつのふりたてゝおいかくるまなこはしやりんのことく也公平みてにつくき大ぢやがていたらく日本一の我々にふまれて有もみやうか也おのれてきたいする物ならば此おに切にてほそくひはねて事かかせんと待掛たり定かげみてそれはむり也公平きやつがはしとかゝるうへあの谷より此たにへ心やすくはわたりたりおんにてほうずる所をかへつてあたと成へきは道にたかへり公平とひたすらにとゞむれば公平聞てそれはうすいの余りなるかんけん也此あくじやは人かいのあたと也人をくらうくせ物たすけ置てつみつくらせ諸人のなげきとなさんより只きん平が一太刀にゐんどうしてぶつくわをゑさせなんあみた佛〳〵と云ながら大じやに向へば大じやはあたゝかな成ほのをゝふきかけ坂田をのまんとゝひかゝる公平いさんでなげくるくびをつんとはらへはむさんやなくびは大ちにどうとおちと有木のねにくらいつけばむくろはたにゝおちてのたをかへして草木をまきたをすすさましかりける次第也公平たちをおしぬぐひむやくの事ともさしおこしきんひらをのまんとしたるたくみゆへふへのくさりのきれおちてくびととうとの中たがいせうし千萬〳〵と三人とつと打わらい大江山に聞へたるおにか岩やに着にけるみれは人の申にたかはず人をさいなむと見へてこゝのこぼく岩のはさまにかけちらしつなまぐさき風ふきてみるもうるさきていたらくさしもにかう成定かげ大藏も身ふるいしてこそ立たりける公平はいつとてもいさぎよく都を出て此かたはすきの道におもむきいつもきげんはよかりける定かげに向ひ御さきにまいる也後よりつゝき給へ誠にらい光の御時に父きん時御へんが父の定光は此岩やのうちへこそ來り給はんいか様しるしのなき事はあらしとかしこの岩をみればあんの如くつな公時ほうせう定光すへ竹てん〳〵のじひつにてはん形をほりらい光の御手跡にて御はん有々と岩にほりぬく文字の有何〳〵源のらい光せんしをうけて此山に五人の郎等つれて酒天どうしをうつじひつ殘てのちのかたみ又有時はせうこのためかくのことく書印者也と殘はむかしのふての後めくりあいたる心ちぞと金平定かけ三度らいはいしておくをさしていらんとすれば何とはしらすあなの内よりす

さまじきつらを出しのぞく所を公平とびかゝつてつのをとらへ引出さんとなしぬれば何共物もいわずかふりをふつて後しさりをなしぬれば公平みて坂たがてににぎる此つのはうてはきるゝとはなすましいかに定かげ余りあなのくらくして其のしよみへかたし先おにをは一疋とらへて有けるぞ二人なから外へ出られ候へとうんといひてこんがう力を出しぬればいかでばんじやくもたまるべきのろ〳〵と引出しあかるへき所にてみてあれば鬼にてはあらずしてたじまうしのしたゝかなるをつかみ出す公平みてゑゝおにかと思ひせんなきほねをおつたりおのれはよくもあなにねて此山のそゝ共がたづぬへきにおのれがやう成ぬす人くさきうしをはうし共への見せしめにくびをはねんと太刀をぬかんとするを定かげおしとめ先つもりても見給へうしのくび切ものは日本には有ましはなちたまへととむれば公平聞てむしや執行して國かの仕置なすものはうし馬にかぎらすあやしき物をたゝすこそ國めつけかいわるべきぜひくびをきらんと云定かげ聞ていや坂たねかふにさいわい此うしこそくつきやうのたくみ有第一あなのくらくして道みへす此うしのつのにたいまつをくゝり付後よりむたいにたゝきたてゝあなの内に入ぬへしはや〳〵たいまつくゝるべしと大藏やがてたいまつ二本左右のつのにくゝりつくれは公平大きに悦ひあつはれ定かけのちりやく大に見上申たり此うしのおいてに此公平成へしとそばにかしの木一尺まはり有けるをねち切てむ二む三にたゝきたつる此うしたいまつのもゆるにおどろきたけつてこくうむりやうにかけ入たり爰にうち成くせ物共すはや事のいできたりとみれは人も有人かとみれはおにめんをかふり夕部のようちにくたびれせんごもしらずふしたる所にれいのうしとび入てこくうむりやうにつきちらせはあまたの鬼共あはてふためきあるいははだかはだのおび斗にてかけ出るやからも有又はうろたへどうはおにのしやうぞくにてめんをうしないなべをかぶりとび出るおにも有きん平はおきつころんすむねをさすりか程おかしき事公平一代に覺へなし扨もかはれる鬼共かな爰にはおのれ原が様なるにせおにをからめ取はくた王の公平定かげひかへたり口〳〵くちのせうしさはぬけあなくてはいもふせらるゝしやうしさよと三

人太刀ひんぬき仁王たちにつゝたつてはがねを引て待かくれはうしはたいまつやけきれてつのに火のつくくるしさにいよ〳〵たけつてとびくるいあまたの山ぞくふみころされちをはきしするもおゝかりけるかゝる所にぬす人の大將あまつはやくもきらるゝ事をかなしみうしのしたはらにいたき付一さんにかのうしをあなのうちよりのり出す公平太刀ふり上ちやうどきれはうしはこくうにかけ出すはやくもはうしの下腹にしがみ付て出にける公平うすいとび來りおのれいかなるものぞとたつぬれはそれかしはぬす人の大將あまつ空のはやくもと申山ぞくにて御座候きじんのすかたにさまをかへさと〳〵に罷出人のざいほうたからをうばい世をわたり候也命をたすけ給はれと泪をなかし申ける公平聞ていかに大藏是をみやけに都にいそき引給へ我々ははりまの國つくしにうちこへやかてかへらん尤と狀したゝめめかたにわたしそれより二人はつくしをさしておしわたるかの公平うすいが武者しゆ行おもしろき共中〳〵申斗はなかりけり

六たんめ

其後きん平定かげはたんばの大江山を立出て大もつのうらよりつくし舟に打のりはりまの國に行てかはれるへんげにたいめんせんといそく所にとうせんの順禮申けるはさても都にはぎやくしん有てむほんのくわたつるといへ共朝てきうんのひらきかたくひのくまの大臣あきかせ都のいくさに打まけつくしだざいふおんかの城に立こもり近國の大名小名をかたらいつくし九か國は大かたむほんの一身と成きけば四天王はていとをうつたちきのふ大もつのうらにてせいそろへけさあけぼのにふねをうかめ今はむろ高砂にや上り給はんぶしの上程おそろしき事あらしと二人はなしていたりける公平うすいはつと思ひかたかたは四天王か立たるをかたく見給ふかやじゆんれい聞ておろか也たび人てうてきたいぢのいくさ立に我斗ぞんじたるに候はす此とうせん人たちもしられて候たび人とねんごろにかたりける公平はやいくさと聞てそゝろに心打うきいかに定かげわれ〳〵つくしをもあるくべきやくにて此てにあはぬものならは後

日に口はきかるまし此舟こよひよもすから公平ろかいをはやむへししからば我々は竹つなよりさきたつて先ぢん成へしうすいいかにと申ける本より忠かう第一の定かげ尤然へしと申ける公平聞てそのぎなら は我舟をこくへしとせんどうろかいうばい取て力まかせにおす程にいるやよりはやくなんなくださいしどぢのうらにこぎつくる公平うすいはやがてくがにとびあがりださいをさして行所にむしや三ぎぐそくはこをもたせいそかはしげにうつてとをる公平うすい袖をひかへ是はいつくになに事のおこり候へて何れもいそがはしけなる御ふぜいおほつかなしと申けるむしや聞てかた〳〵はいつく人そつくしにはださいに秋かぜ公らう城有我々は御しうにたてこもり候かた〳〵もるろうの身にて候はゞ今度ぶれいをさいわいにおんかの城にたてこもり高名をきはめ所領のぬしと成給へとかたりすてゝとをらんとする所を公平二人をかいつかみ敵ならばゆるすましおのれいかなる物といへば某はまつらとうのけらい松田川くらと申者にて候ゆるさせ給へと申けるうすいやがて跡にひかへしくそく箱をかつきたる下べがくびうちおとせはきんひら二人かくびふつつとねぢ切ま事にぢゆうなる浮世の中けつかう成くそく三両もとめたり殊にきやつはらが大ひやう成こそ御へんと我が仕合也いざ〳〵ちやくしかたきの城にたてこもらん尤と二人よろひをちやくしおんがの城にいそき大おんあげ是はまつらとうが郎等松田川くらにて御ざ候御もんのひらき給はれとよばはればうちよりぎんみのぶし立出二人をみていかにもよろひのあいしるしさういなし御とをり候へかた〳〵は仕合かな今一時おそかりせばらう城なか〳〵かなふまじ明日は都せいせめよせうのこくより矢合せ有と木戸をひらき入にける公平うすいしすましたりと二のきどに行てさいせんのことく名のるもんの内より松らとうの御こやは本城の内也こよひはとてもかなふましそれにひかへてあけなば高名をきはめ本城に入給へと中〳〵きびしくまもりけるきん平定かげそのぎにて候はゞ御ぢん所をかり申候若よじんよまはりとかめ候はゞ御ぞんしの由御申ひらき給はれと事はれば何かくるしかるへし城の内の身かた也とがむる人是有においては大たちはんくわん存しのものとなのり給へまつらと

うと大たちは一家にて候御ねんの入たる斷やとさしてとがむるものはなしすでにひかしのよこくもも引はなれくもまもしらむ比なればらう城の兵大かせのふくにひとしくどよめく事しきり也又竹つなうらへよするやらんよせての方にはよせだいこと〳〵とひゝきなりかいをたてかねをならしせめよするきんひら定かげにそゝやき我々かくとちこもり有とはわたなべゆめにもしらすさぞぐんりよをくだくべしこよひいちやの此城を大事とこそせめぬへしずいぶん心をつくし大將ひのくまをめしとらん尤とやくだくしてあくるよはをまつ所にはや都せいせんぢん一つ木戸にさしよせて大てからめてもみ合ときの聲をぞ上にける城の内にもかねて待へし事なれはおなしく時を三度合大てのもんをおしひらき一もんじにきつて出雨ぢんたがいに入みだれいくさははなをぞちらしけるよせてのぢんよりうらべのひとりむしやみうらたけち四人一どうにかけ合つゝぬきねぢくび人つふてめをおどろかしたゝかいける大ての大將はらださへもんざいふりあげ身かたはなきかあれうちとれとよばはれば秋かせが郎等たてぬき天まの介しげもとくろくもたつゑもん光よしいなつま村雨の介大かせこなみかつだ岩にしそがいなめおもてもふらすきつて出四天王みうらたけちにわたりあいいざくまん尤とおしならべ引くんで兩ばがあいにどうとおつるいくさになるゝうらべ平井みうらたけちゆんでにおいつけめてへひねりかしこにおしふせくびいち〳〵にかきおとし太刀のさきにつらぬき城のうちへなげ入引取せいにつけ入する大將ひのくま大きにいかりきんのばれんの馬じるしまつさきにおしたて一の木戸をやぶられしと大將馬をいたす所をきんひらうすいは是にありとうしろよりとびかゝつて馬よりしたにひきをとしきんひらたかてこてにいましむればうすい大おんあげ大將ひのくまをば坂たのきんひらうすいの定かけ打とつたりとよばはれば竹つな聞てすはきんひら城に有さかたうたすな都せいとげちなせは五まんよきのつわものの公平といふにちからをゑわれも〳〵とみだれ入さん〳〵に打ちらせはなんなくうすい坂たはひのくまをいけどつて城より外へたちいでたりたけつな馬よりとんでおりいたされたりやきんひらつかまつられたりさたかげとあふぎたてゝ

ぞよろこびけるされはにやしろがたのぐんせい大しやういけどられて有けれはみな〳〵おちゆき殘るぐんびやうはかぶとをぬぎゆつるをはづしかうさんするたけつなはいくさは身かたのりうんとかちどきどつとつくりあげきんひらうすいをうちつれてみやこをさしてかいちん有かのきんひらうすい四天わうのはたらきせん上下をしなべてみなかんせぬものこそなかりけり

右此本者太夫直傳之正本を以一字一點不殘書うつし令板行者也

貞享二歳丑の正月吉辰

大傳馬三町目　うろこかたや新板

公平入道山めぐり

初段

さても其後それ人間はとんよくぐちにまよひ馬ぎうはおのれがちにまよふ、やこゑにほたされ命をうしなふことかや、たゞつゝしむべきは人間の四よく也、されはれいせんゐんの御宇とかや、源いよの守よりよし公は天下のぶ將取おこなはせ給ひ二條の御所に御ざいゐ有、然るに四天王ず一わたなべむさし守竹つなかれはちぼうすくれていこくのはいこう口長良にばつくんこへたるぐんしや也二ばんは阪田兵ごの守きん平かれはきん時が一子山うばのまごとして大力成事いこくのはんくわいあんろく山にもこへぬべしそのうへ心みじかき兵にて四天王のあら人とみなみなおそれうやまひける次はうすいの形部定かげうらべの兵衛すへはる、平井はりまの守清氏みうらのわだ左衛門ため家竹ちの源太やすもととてだい〳〵ふだいのちうきん又つぎはめがたの大藏くにのぶかれは代々まん中公よりふだいそうでんの兵ふぢはらめがたとて三人のもの也しが打じにしてその祖たへし所に公平むしやしゆ行の折ふしたんばのくににてめぐり合大江山より山ぞくの大將はやくもをめし取御め見へ申此比きさんの兵也ことに金平が高名そのほまればくたいにてひのくま大臣あきかせめし取御前に引出す、よりよしたいめん所に出御有いかにひのくまとんよくにおぼれおのれが身の程をかへり見ず、つくし四か國をふそくにして朝てきと成天ばつ、なはめのはぢに及びて都入のはづかしくはあらざるかいかに〳〵との給へばひのくまいたけだかにのびあがりそれ人間の高口口のぞむはしゆつせ也我ふぢはらのあつそんかまたりがばつようぶさゝきよりつ本ノマヽ（くノ術カ）り有そもとは王ぞんたり我こそ天下のぶ將と也なんじをこそ此ひのくまさいわいのてしたにつけんになんぞやわれはつくしにかすめられゆへなきげんじに國かのさいはい給はる事是みなみかどのよこしまなる御おこないきつくわいさに天子をかすめ我十ぜんにそなはりれいせんゐんにかはつて道すぐにせい道を取おこなはんと思ひてうてきとは成たる也わがう

んの程こそ口をしけれ我天めいつきずなんじがこうべをはねくはらくのちまたにかけ置四天王いろ〳〵にめし取やつざきとなすべしと思ひかけたる一念の程こそあさましけれとことばをはらつて申ける竹つな聞もあへずやあおのれすいさん也おこがましや汝がぶんとして世をくつがへし十ぜんの御くらいをのそむ事誠にゑんかうが月にてさしとうらうがおのをふりあげりうしやに向がごとく也さのごとく天のせめ立所にかうぶりくびすをめぐらさず終に五たいにかゝるはふどう明王のばくのつな年をこへずめしとらるゝ事天めいきする所也おのれしに口るいにちまよいあくごんはむやくくちと心とはそういならんすいさん也とはつたとにらんで申ける秋かぜ打わらいそれうんな天に有かばねは本よりちやうもんのつちのしたほねははつこつと成て石かはらにすたる共人げんの望はつねにしゆみせんにこへべし又なんじらこそいつもよりよしがひくわんとしてかにはこうらにせてあなをほりたま〳〵人かいに生れかうくわんにのぞまずはひとへに地のそこにすめるめみずにおなじくいつもつちをくらつてあかるき所をしらず此秋かぜはぎやく心をくはだつるより此かた一めいをきんくわのつゆにひとしく野ぐわいにからだをなげうち日本をうばはんとすされ共天のきす所をゑずかくめしとられかうゐのくらゐをあだにすておのれ原が様なる下官ひくわんの輩にかへことばをかはしろんずる事みなうんめいのなす所我づた〳〵になるとてもこんぱくは土にとゞまり必十ぜんを始よりよしおのれ原がくびのほねにくらい付かならず思ひしらせんぞはやくびうてと思ひ切てぞ申ける公平もくねんと打聞いたりしがいたる所をずんと立誠に人はよくにまよひ馬はちにまよふと聞ぬるに申にたがはずおのれ十ぜんのくらいに望をかけことに天道のどうりにかなはざる事断也人間のかたちに生るゝ牛馬也しさいはさいごにおよびちにまよいむやうのあくごんおのれ今生にてだにかなはず此公平におのかかまへる城の内にて四つ五たいをしばられいきながらていとにひかれむやうのべんぜつ人がましやおのれが様なるあく人をば四條がはらにしてうしざきとなしぬべしそれ〳〵はからへとげぢなぜはぞうしき下人畏て候と御前を引たつるむざんやなあきかぜは公

平に一ごんのどうゝにつめられせきめんしてすごすごと引たてられらく中さして引わたさる又大ゑ山のさんぞくあまつ空のはやくもうすい定かげか召取てめがたしゆごし都に引わたし候とつつしんで申上るよりよし聞召れせんだいみもんの物がたり其者は先ろうしやせしむべしと頓而ごくやにおしこめける扨金ひら定かげには御馬一疋づゝ御太刀一ふりゐいそへられいつもとは云ひながら此度のはたらき御ゑつきはなはだ也と竹つな承て二人ものに相わたせば公平さだかげ悦て御前を罷たつ去程にあきかせをば四條がはらに引出し牛馬二疋さゆうのあしにくゝりつけ二疋が中にてくわゑんをくわつとやきたつれば牛馬はさうへとびわがつてさしもの秋かぜ二つにさつとさかれける天ばつのどうりとにくまぬものこそなかりけり

二たんめ

▲其後坂田の兵ご金平はすぎしむしやしゆ行のその時めぐりのこせしはりまのひめじ又はあづまのおにぢやいけつくも川のふしぎさら〳〵もつてはれやらずそれ一天せかいをめぐりさま〳〵うき世のていさゝかまなこにさへぎるふしぎもなし我つく〳〵あんずるにみな大江山のきじんのごとく山ぞくをおにといひきつねむじなのことばけたるをみておくびやう第一のやつばらがみないひはやす取さた也われひそかにあづまにくだりひめしに行正たいを見あらはしそのついでに國〳〵のていぎやくゐ有を仕置してそせうのものにかたうどしせんをたゞし御代あんせんとなしぬべしかくて此由御いとまと申上る又竹綱あしてまといに定たけ同道と仰付是有べししうせん一通の書おきして浮世をめぐらばやと思ひすまし此ていにてはいかゞ也さまをかへてくだらんとかみおし切ぢうだいのおに切丸にあいそへ其身はわざとすみそめのあさ衣をちやくしつゝ二尺九寸のどうし切たけのつゑにつくりこめすみなれたりしあやのかうしをはとんせいしゆ行のていとなしくもいの空と心ざしけふ九重を立出てやへたつくものそなた成うき道のくと心ざししよ國しゆ行ぞしゆしやうなれ心にそめぬすみぞめを人は誠とみよしのゝ山のかすみは

はれゆきてよしの山の花さかり雪かとぞ見るいろなれやうきめはすへに大つのうらつゆの宿かるくさつのしゆく名所〳〵はあふみの國しがからさきの一つ本ノマヽ松いそにたぐいなきみにてしほにはくちぬちくぶ島べんざい天女をふしおがみかしこを見ればかゝみ山わがおもかけをうつしみんかしこはおとにきこへしむかで山たはら藤太ひでさとがなをばんてんにあげたるやまいか樣にも此さんかのむかで一るい殘いてのちは人のなげきと成ぬべし一見のついでにくさふみつけてむかで山にのぼりけるこそふてきなれそもむかで山と申は十町四方にくさもなく木もなければみなはげ山と申つゝてう〳〵には人のかよひたへぬればしよ鳥はましてとまらずけだものたにゝすまいたりきんひらみて誠にきゝしにまさるむかで山ととと有かれ木にこしをかけよもをながめて有所にふしぎや此かれき坂たをのせてあゆみ行公平ゑゝきやつをかれ木と思へばむかで也よし何にもせよ公平二尺九寸のどうじきりすはと引ぬきどうなかにつきたつればしきりにあゆみ行事みつばのそやいるごとし坂田みてだう中ふたつとなしすつべしとづんときつておとせば二疋と也跡さきにあゆみ行公平いかつてゑゝしやうのつよきあくちうかなこんがうみちんにねぢつぶしすてんとはしるむかでをかいつかみゑいといふて引上れば何とはしらず向の山よりまなこは日月にひとしくひかりわたつてかしらをみればわにぐちにひとしきむかでくびをこくうへさしのべ坂田をめがけたにをこす公平とらへたるをゝ見れはきやつがどう扨はくわうだいなるくせものくびうちおとしすつべしと二尺九寸のどうし切はかねをひいて待所にはや坂たがまへにかしらをふりたてとび來り公平てうどきれば太刀はねかへつてはもたゝず事共せずとびがゝる公平みて太刀に及ばぬものならば力まかせのうでのほねときやつがみゝをむんずと取こうべにさゆうのてをかけ上よりかさにかゝつてゑいと云ておしぬればさしものむかで兩がん忽ちおし出されかうべはかにのかうらをひしぐごとくひしや〳〵とおしつぶす坂たみてなにむかでいにしへのひでさとはばつくんにかはらんまづ此山のあくちうはたいぢしたり此きんぴらにはうへこすものはよも有ましと、こうまんきざしいたる所に十二三なるわらんべかご

にかまもちたきゝをとりにとほりける公平みてやあわらんべ此あたりに人さと有や是よりさとに出る道はなきか山かにすむとてなんじがつらはむさきものかなさるか人かとわらいけるわらべ聞て山家大かい野谷たくりん森川とているいのものはかずおゝきになんじが様なるほうずは三がいにまれ成先衣をちやくしさきほどのせつしやうことにはほうしにはさるつるぎをよこたへこうまんのきざし我ひとりと思ふせばき心ぞわがつらのむさきよりほうしがしよぞんこそおかしけれなんし我ひとりたへなりと思ふ心の上からは人にとはずとあしのつまさきのむきたるかたに行べしとあいそうなく申すてしづ〳〵ととをりける公平大きに腹を立にくきせがれがりくつつめあたまはりのめしすつべしとはしりかゝつてしたたかにはりぬれはわらんべこびんおしさすりそつと力は有けるよないでへんほうかへさんとかごをしたに置かまをおつ取むかいける公平そつとおどさばやと思ひ太刀ひんぬき打かくればひらりととび中〳〵つるきに及はず坂田いかつてきやつこそ此山の天句ならん切てすてんとちをはらへは天ゑとびたゝいなづまのごとくなりさしもの公平あきれはてゝ立ぬればかのわらんべが申様地あれは中天有中天に上こす天有小あれは大有きん平に上こすわれ有とかまのさきに引かけくるり〳〵とふりまはしはるかのたにかつぱとなげ行方しらず成にける公平大きにいかりみぢんになしてすつべしととくはやくかけ上り四方をみれども行へなし公平つく〳〵しあんしてさるにてもたゝ今のくせものは何成べしとかくうき世にはさま〴〵ふしぎはれやらず此山の道をたつねて見んと思ひなをおく山にぞ入にける公平が心の内むねん成共中〳〵申斗はなかりけれ

三たんめ

其後坂た兵ご金平は思ひの外におくれを取しゝのはがみをなし我一生のおくれかゝるきたいのくせものさら〳〵ふしぎはれやらずいか様にもきやつにたづねあはずと云事有べからすとあそこの山こゝのみねたにゝくだりさわをつたへ行く程にみかみ山の東のしん山にぞ出にけるかしこをみれば其たけ一丈斗の

大入道たにより水をにない山にあがる金平みて扨こそくせものの柴のいほりに付たり何にもせよさきのへんほうなすべしとそつと山上につたい上りまづおどろかさばやと思ひ五百人斗にてたやすくうごかしがたき大石みちんになれとおとしければなにかはもつてたまるべきかのしばのいほりらつくわみぢんにくずれけるうちよりすはやれいのくせもの來りと出るを見れはせいは八尺九尺にあまる大人まさかりないがまひつさげちいさきいほりの內より二三百人山のごとくのくせものども我も〳〵といでにける公平みて誠にひやうたんよりこまの出るとはか樣成事なるべしわづかちいさきいほりよりきやつばらいかがして有けるぞ是もふしぎのはれやらず一まづかげをかくし事のやうをみぬべし（本ノマヽ）と大木のほらのうちにかくれ入事の樣を見る所にみな〳〵山の上にかけ上りてはけなし（わノ術）四方にわかりたづねける公平みて日本一の坂たがきやつばらにかくれあらんな中々くちをしかるべし出〳〵ててなみをみすべしと二尺九寸の大だちづばと引抜こゝに坂たの入道金平ひかへ有ける也かけよてなみを見すべしと一もんじにうつてかかれはかずの大ひと山のごとくおつ取まきなはあみをはりまはしひとへに公平をきつねむしなをなすごとくうしろへまはつておへをいなばあみにかゝるべしと小てふなどのごとく申ける公平いよ〳〵腹を立につくきやつばらがふるまひかなと一もんじにはしりかゝつて一ばんすすんだるくせものをてうときればまさかりにてはつしとうけ公平がまつかう二つと打付るをひらりととべば三十人程おりかさ也ゆんでよめてよとせめたりけるさしもにがう成きん平もてあつかいすでにかうよと見ゆる所にくろくも一村まいさがりみればそのたけ一丈ばかりのはくはつたる山うばてつぼう引さけとんで出大ぜいのやつばらさん〳〵に打つぶしのこるもの共四方へはつとおつちらしいかにあく太良是へ〳〵と打招くきん平あまりのうれしさにさてにかうはいかなる人にて候ぞひとへに三ぼう諸天とらいしける山うば聞てあふなんしがしらぬこそことはり汝がためには大うば也父公時か母なるぞ我はこれ三がいむぁんによせくわたく人界をはなれてませうのうちにすみかをなし三十三天が內をめぐるとみれば有時は山又山をめぐりつ

つ山ぢにかへりさとにおりくもを平ぢとはしるじんつう第一のまほうをゑて三千せかいをめぐり山まはり山〳〵つゞくくものはたでのあまつ空いつてんこくうにとびめぐる鬼女と云もの也然るになんじ一世の大事今にきはまりいのちとられんかなしさにくもわけつゝ遙々爰にあらわれたりさて只今のくせめは（本ノマヽ）山かにすめる山びこ山を小山の神とて大ゆう力のこう力つよくひとりと見ゆれと神力の汝か力うへをこさんあまたかけより〳〵力をそへておのれにあまる人をさいなみ爰のこぼくかしこのほらにかけさらし人がいのめを驚ろかしきれどもたいなくきへて有かと見ればかげろうの此山うばのごとく也然るになんじ父公時に生れましほんぶのはたらきばつくんにこへたり去ながらあく太良我斗と思ふまじこうまんにまどうつゝしむにあくじおそれて千里が外にさる十ぶんたるはかならずかくるならい天道のみせしめさとるべし心へよくもいをてらす月りんもいとよりほそき二か月のしだいに半月と也て三五にゑんげつと丸し是十ぶんにみつばかくる月いざよいには又しだい〳〵にかげきへてもとのやみぢにかへる也人間にも生死の初としかさ也ておいの身の若きむかしをこい衣ひとへに佛神をいのつてつゝしみを第一とせよ汝人かいにしやうしにくしんのうけたるとくによつて心にかなはぬ浮世にすむめにはみへねどあさかかみかげをはなれすうしろにつつたち汝大力をあらはす時には此うばがしゝのいかりをはげみ力をそへ守りの神と立ぞかし汝がわざと思ふまじさればなんじが父の金時其はばんてんにふれ山おとこと成べきを此姥が思へばむざんの次第としなのゝ國にてらいくわうをたのみ奉て人がいにまじゑてくらいにつくるそのこなればわどのも第一つゝしむべしわがままはかならずほうかくやぶつてげきしんにたりあらむざんのまごやと打おをぎててうあいなすさしもにたけき公平も大きにこまり只さしうつふきちりをひねりていけんのきく山うばはうれしげになんじは天せいをうけず日本には子はなしたゝかうかうにはゑんをもとめてなんじのたねをつぐべし一代いつせはせんしやうならす是のみ心にかゝる也いつまでくさのいつまでも付そい有度身なれ共まどうにすけるあさましさは又山にめぐりかへる也汝は是より山め

ぐりしてあづまにいそぎかへりにつくしに行てとくとく都にかへれかならすもさらばかへるといふかと思へばたちまち鬼女と成てこくうにひかりをはなつてうせにけり公平御跡三どらいし是もふしぎのゑんにひかれてあやうきかこみをのがれたりさらばあづまにくだらんと山ぢを出て道のくにいそぎけるかのきんひらが有様ゆゝしき共なか〳〵申斗はなかりけり

四たんめ

▲其後坂田の兵ご金平はあやうきかこみをのがれつつみかみ山に立出めぐる山つたへ山また山を打こへていそぐに今ははやうきたびするがの國あし高山に着にけり公平山をめぐりて山げをさしておりにける所にわらんへ共あつまりてすまふ取てあそびける公平と有岩やにこしをかけあつはれよく取子共哉とれやほうびをとらせんとあなたこなたにげじをなしとうざいわすれて見物なすかゝる所にせい高き鬼とひとしきおのこ共左右に立わかりけんぶつしてゐたりしがいつとなく子共のすまふはことはりかのおのこ共立出てしだいに大せいなりかさ也やかてすもふを始けり西のかたよりせい高きおのこ四人四天王となのつて出ひがしの方の大ずまふさん〳〵になげたをすきん平うれしげにゑみを含みよねんなく見物なす所に又ひがしよりそのたけ一丈斗の大山ぶし四人しつ〳〵とあらはれ出より吉の御内の竹つな公平うすいうらべをなのる御すまふ出てひねり給へとちからあしをどう〳〵とふんでまちかけたりにしの方より我は竹つな我はきんひらうすいうらべと立出て同力あしをふみそろへうすいとなのるすまふあく道坊とやつとて合なしとつたりける公平心の内におかしく爰に誠の四天王公平有をしらすおんこくとて我々をまなび名のるこそおかしけれ此にせ四天王が取なすすもふ見物おもしろけれとさらぬていにてみたりけるあく道はおなしく定かげと取くみ二人よつがいに入くんでうすいはあくどうがむないたにおのかくびをとつくとおし付四つてながしにひねらんとなしぬれはあく道はかさにかゝつておしつぶさんと二人ゑいや〳〵とねぢあいしがついには定かげなけられ

けるそれよりうらべとなのつて又とつてなげらるゝ竹つなとなのつて出是も取てなげらるゝ今は公平となのるすまふ只一人ありける坂たは是をみてわがなをなのるすまふおぼつかなさよとかたずをのんでけんぶつする所に公平となのるすまふれいの山ぶし二人つゝけさまになげ出す坂田ゑみをふくんでうれしげに誠にわが名のる程有けるよと心のうちにたのもしくさらぬていにて見る所になむ三ぼうにせ公平一人の山ぶしに其まゝにもなけらればこそ二三間けとびをくいよろり〳〵とれんとびしてまつさか様にふみたをさるゝけんぶつの子共を初みな〳〵聲をあげ公平はめをまはされたりさん〳〵ふしゆびの公平何公平もやくにはたゝぬものかなとこへ〳〵にわらいける坂たは大きにせきゑゝにくきやつはらかなわがなにおくれをつくる腹たちさよ此うへは我いづへしと衣も太刀もぬぎすてゝ大ぜいか中に出けるかの山ぶし此由を見るよりもゑゝ是なる執行者はさきより見物して有けるがすきの道とていらぬ御ほうがうでたてかなめのまはる程なげ出さん四天王はなげられたり今出る御ぼうは一人むしやとも申なんといへば坂田聞ていや〳〵我は百千のいかつちぼうと合給へと云山ぶし聞てかみなりのなげられ給はゝ今の公平よりおかしからんさそいかつちぼうを物見せんとやつとてあはしてむずとくむかの山ぶし事共せず公平すでにあやうくみゆる所にさかたこんごう力を出しゑいやつとこゑをかけれいの山伏まつさか様になげたをしふみつぶさんとする所に殘三人とびかかりて取あしとりくみあいける公平さいぜんの力をゑきをはからつておしたをせは二人いつ所におのれが力にのまれひやうぶをかへすに事ならすまあをのけにたをれける公平大きに悦いかにあくそうにせ公平とはばつくんにかはらん我こそ誠の坂田成と大きにかうげんはいてたつたりける四人の山ふしきもをけしそのぎならはしん山きた谷のさる丸大太夫をよびてきたれ此さるだ王にはかなふましとさる王をよひつかはすきんひら聞てたとへは仁王成共よひぬべし手なみのほとを見すべしとうでをさすつて待かけたりかゝるまにさるだ王と打見へつらはさるのごとくせいは九尺ゆたかにして大小十もんじによこたへふぢのねを持てはちまきして坂たがまへにぞ出

にける公平みてきやつはいか樣さるのとしをかさねしくせ物ならんつかみひしぎてすつべしとんでかゝれはさるだ王む二む三にたぐり付ゐいや〳〵とねぢあいけるきんひらはゐしやくもなく引つかみかさにかゝつておしつくれはさるだ王はちつともうごかずよこ樣になげんとさしもの公平を二三どふりまはしすでにあやうくみへにけるされ共公平はすどの軍になれしくみ打の上ずにてかしこにひねりよこさま十方うちからみにゐいと云ておつふせけるさるだ王はがみをなし下より金平がみゝをとらへむしりつく坂田みてこはかはれるすまふかなさらばてなみを見すべしとくびのほねちぎれてのけとおしつくれはまなこをみだし口をあきせつぢし今をさいちうなるれいの山ふし共是をみて今のはわれなり取なをせとむたいに取て引わくればさるだ王かふりをふつてすまふはもはやいやと云きん平きゝもあへずそのぎならは太刀わざのしあい然べしと申せはうちうなつきさるだ王は五尺斗の大たち引ぬきかくばしらをふることく坂田まつかうくだしにきりかくるきんひらはよう〳〵二尺九寸の打刀どうしきりをひらめかししこらんほしやとう御てんにつらなるほしやとう小太刀めぐるゐんりうのゐんひに取てゐんくわいちやうたんのいちみとふみこんでづんとはらへばなにかはもつてたまるべきさるだ王が大たちうけたる物打の中ふつつと切おりまつこうから竹はりとなしぬれは有あふもの共きもをけし此ほうしはたゝものにて有ましと一度にくづれにげちりける公平いまは只ひとり今迄とうざいをわすれたびそ共覺へず有ける只一人と成て誠にとまり定めぬうかれからすのふせいにて日は山のはにかゝりやうこくをてらし道もしだいにため〳〵しくいづくはしらずさしもあれにしふるてらこそみへにける是にてこよひをあかさんとあしにまかせていそきけるかの公平か心の内うれしき共中〳〵申斗はなかりけり

五たんめ

▲其後ひやうご入道きんひらは都を出て此かたはそのたよりとてあらざればよりよしの御前には竹つなをはしめおの〳〵四天王あいつめてせんぎひやうで

うとり〳〵也よりよし上い有けるは此度きん平がとんせいいかゞおもはれ候ぞ誠よりきざずほつしんなるましめん〳〵思ひあたる事あらばつゝまず申給へ又かれがたねん我にふそくをふくむ事人々ぞんしなきしさいゆめ〳〵あるべからずらい光の御時より三代家につたはりし四天王よりよしがよにあたり一人かくるその時はよものひはんもいかゞ也かた〳〵いかにと上い有竹つな承上いのことくきんひらほつしんの心にて候はずそれかしさま〴〵あんのめぐらし候にすぎしむしや執行のその時めぐりのこせしはりまのくにひめしの男山あづまぢにくだり候はん一人ほつしんと心ざし出たるは又定かけを相そへられて候はゞろじのわがまゝ心にまかせぬそのうへにとんせいに事よせむしや執行におもむき候也此うへはおのおの御いとま給はつてあづまぢとはりまにてわけをなしたづねて候ものならば必めぐりきたり候べしとぞ申けるよりよしげにもと思召はりまの國へは清氏あづまぢ中せんどうはうらべとうかい道へはうすいとせんぎ一づにきはまりてみな〳〵すげの小がさにて行へもしらぬ公平をたつねめぐるそうたてけれ去程にきん平あしたか山を立出てそこともしらぬふじのすそのに出にけるげにふるてらのもんの杜はたちながらとびらたをれてほりのはしのきかはらもこぼれおちむぐらはかべをあらそいてにはのうちなる一もとのすゝきがうへを吹風も物さびしくそつと身にしむ斗也くわう〳〵たるふるてらにすむ人なければおのづからころうやかんのすみかにてたけはたゝみをはへぬきてやぶにひとしく見へにけるうちに入てみてあればあるじなき寺にはびしゆかつまのつくりたるざぞう佛たゞ一たいひかりくちぬははくぶつ也あれすぐれしまばらやの月もるかげにかゞやきていとゞしゆしやうに見へにける公平入道誠にこよひのあるじはみだ如來我も衣をちやくし佛たいをゑたる佛ぞ平のきん平なればこよひのあるじみだに念佛申て奉らんとそば成しもくおつ取かね打ならしたか〳〵となむあみだ佛〳〵としゆしやうげにゑかうしていたりけるかゝる所にうすいの定かげ公平をたつねとうかい道をくだりしか日もはやくれてするがなるふじのすそのに聞へたるせいけんしにぞ付にける定かげかねのねを聞よりこよひは爰に一夜の宿

をかりぬへしと門前に立より大おんあげ是は都よりあづまへとをるたび人也此寺のぢうじのなさけにこよひ一夜のやどかし給へとたからかによばはりけり公平聞てげに我もたびのやどりのぶつていねぐらにまよふふくらすゝめの竹の一よをあかしかねやどをこうこそふびんなれしかしながらわれさきにきたれは此寺のあるし也おんにかけてとまらせはやと思ひいかなる人にて候ぞ御らんことくひんそうのことなれはまはらがきなる此寺に今宵一夜もいかでかはあかし給はんいづれへも然べからんそのかたへ御やどをめさるべしともたせかほにぞあいさつなす定かげ聞てりよしゆくの事に候へばあれたる宿との御ひげしほとんどいたみ入て候たゞ願くはゑんの上になり共こよひ一夜はせひにおいてかし給へと奥をさして入にける入道聞てゑゝ我まゝなる旅人かなそつとおどさばやと思ひそばに立たる切石かいつかんでわざとはるかこなたにあたらざる様になげ出す定かげみてこはなさけなきあるじ哉とても給はらん石ならばまつとこなたになげ給はでひかへ給ふは心みがましく候旅のつかれに候へ共かやう成小石の十や廿はものゝかずにてかずならずとおいかさ成にはしりかゝつて中にて取それに返上申ぞとゑんのうへなる入道になけつくれは公平は定かげと見つけ物もいわずおくをさしてにげ入うすいはほうし我におそれにくると心へいづく迄御ぼうせひ御めにかゝらんとくうでんらうがくはしかゝり佛前のほうじやうきらいなくあなたこなたをほつかけたり物もいはずきんひら道なき所にほつつめられ取てかへし定かげをゑんよりしたになげ出し又おもてをさしてにげ行は定かげあつはれつよきおてらかなせひにおいてげんざんとひらりとおきゆんてのうてをとらへかほみんとさしのぞけば入道は衣の袖をさしかざし見られじとあらそひける定かげやかてさし心へさては大かたすいし申たり公平入道にておはすべしうすいの定かげ君の上いをかうぶり御へんを尋て廻るなりとむたいに衣の袖を取ぬればあんにたがはず公平也是は〳〵と二人一度に打わらいせんなきほねをおつたりと火うちつけ竹取出しあたりの木のはかきあつめぬしなきいろりに火をたきてたゝ二人しん〳〵と都あたりの物がたりそれは是はといふ所にさもいつくしきち

ごこつせんとあらはれ出あらめつらしのこよひのきやく我も昔は都なる四でうあたりの物なれば都かたりしてむかしを今になすよしもがなと入道うすいかいたるまんなかにおめづおくせずなをりけり公平定かげきつとみて扨もしれたるくせものや此大寺のたいてんしてふるてらと成事みな是おのれがわざならんしかしながら日本一の我々にこよひむかしかたらんとや尤聞とゝけ有ぬればはやくかたれきかんとて公平ほうつえついてぞひかへけるかのちご兩人に申樣某は都四でう通しめやのせうしがひとり子にきく千代丸と申せしを此寺のぢうし都に來りわが父にかくもんのそのためと此せいけんじにくだりきてがくもんをとぐる所にあまたのほうし心をかけ文たまづさのつもる事あたかも山のごとく也あなたこなたの玉づさをかへさぬうらみのつもり〳〵て今ははや心のおにとなりなんとこの寺にはんにやのめんの候を取てかむりかよひくるやつばらを一夜二よとおいちらし有時おもてをとらんとすればかなしや此めんかほゝはなれずせひなくかゝるすがたと罷成とさしあをのくとみてあれは今までうつくしかりしめんそうたちまちべんしよくかはつてすさましくくち耳のきはまできれさばけちごかとみれは女也公平定かげからゝ〳〵と打わらいそれに心をとられつゝあまたものの命をうしない有ぬべし此坂たうすいは腹の內よりおにを食して出生して鬼めづらしくもあらぬ身にせんなきおもてのうへ事よと金平にきりこぶしていかれるき女がおもてをくたけてのけとはりぬれはそのおとくわしとなりて大ちにひゝきかげなくきへてうせにけるげにあきのよのかりまくらよはほの〳〵と明ぬれは公平定かげ悅てさるにてもゆふべのへんげはつらはみぢんと成てしにぬらんたつねて見んとかしこを見れははんにやのめん二つにわれてちしほにそみていたりけるさかたうすいせんだいのふしぎ是ならんこれまさしくのおもて也先めでたしとそれより此はんにやのめん二つにわれて今か世迄もせいけんしに有とかやかの公平うすいか心の內うれしき共中々申斗はなかりけり

六たんめ

其後うすい坂田兩人は夜もほの〳〵と明ぬれはせいけんしに立出る公平申ける樣は我是よりむさしの國にくだるべし御へんはかへれと申ける定かけ聞ていやとよ公平われ是迄きたる事べつのしさいにあらずわとのを尋てくだる也然るに御へんをあづまぢにおもむけわれ壹人都へはいかゞいひてかへるへしこゝをあんしひら更都にかへり君に御いとま申つゝ其後あつまに下着あれ思ひもよらずとせいしける公平打うなつき其うへは力なしさあらばはりまに打こへひめしのへんげにたいめんしてふしきを見とゞけかへるべし殊には清氏はりまへさきだつてまつときくいざ〳〵いそがんと申けり定かけ聞てそれはいなとは申ゝし御へんが心にまかせよと二人うちつれはりまのくにゝいそきけるむかいをみれはうらぺのすへはるなんかい道にて坂田うすいにめぐりあいよろこぶ事はかぎりなし公平みていつもの事といゝながらめん〳〵に此度なんぎをかけし事めんほくなくあらず一つはじつふをたゞし世のかたりつたへになしぬべしはりまの國ひめしよしや寺にいそぐなるたいぎながらすへ宗も同道あれとぞ申けるうらへ聞て尤也のぞみてもまいるべき所也いさ〳〵いそがん尤とはりまの國へといそきけるいそくに程なくはりまになれば三人の者共ひめぢの男山にぞ上りける心のうちこそふてきなれすでにその日もくれはてゝふゆのはしめの事なるに秋かせさへも身にしみてぞつとするかと覺ゆれは山かげより十丈斗の女のくびかねまつくろにつけたりしがつらをぬいとさしいだししとわらいて見へにける公平扇をひらき出られたりやばけものどの是へ〳〵とうちまねく二ばんにつらのながき三間斗の大入道おなしくあらはれ出こてまねきして待かけたけ定かげ見てよ（本ノマヽ）にこくにいるひいぎやうのかたちかないまだかはれるおもての有ならは所望〳〵とよばはれば山のあなたにおつとこたゆるこへ有てたゞみみもなくはなもなく眼二つくちみみぎはまでさけたりしくせものその外ほうしちこ大入道山ぶしのくび十丈斗有けるがかずあまた入かへ〳〵出にける、公平みて是へといふにきたらすはいざやそれへまいらんと三人打つれ行所にひらいの清氏かた〳〵はいつくへいそぎ候ふしぎなりとたづぬれは定かけ聞てあの山かけにへんげあまた有うへ

に生たいをみんために扨こそいそくと申ける清氏尤也我もかた〳〵がごとくあれにてみたる時にはいるいのへんげみへしうへさてこそ山にめぐり生たいをたゞすにいさゝか以てかたちなし爰にふしぎの有はなんかい共なきしたいふかき岩あな有若此内にやすみぬらんとちかづきよれはかげきへて其たいなきこそかげろうと云ばけ物よと一度にどつとぞわらひける公平聞てさすが四天王ひとりむしやといはるゝ身がそのあなの内を見ずして都にかへりては何とかはなしとなしぬへし我かごに入てさがるべし人々は上よりおろし給へかならずもとあなの内にさかりしはあやうかりける次第也公平はあなのうちにおりたちあなのていをさしのぞけは岩のとびらひやうぶのことく立ふさぎさきへ行べき道はなしさてはいかゞなさん去ながら此岩力にまかせおしてみんとゑいといふておしぬれば何とはしらずいかつちのことくなりわたつてさゆうへはつとひらきけるさてはしすましたりとみれは二八斗の女良のうつくしかりける硯に向ふでをそめてならいしていたりけるきん平つつとよつてやあ汝は□□□すまひかな公平むかいに來りいざいけと申ける女せう聞ておゝよくこそ來れ誠になんじきめうの者ぶゆうばつくんにすくれ大かう成事ひとへにいこくのはんくわいにまさるわれはませうにもあらす人をなやます事をせす其いへを守て世をあんおんとねがふ也はや〳〵かへれと申ける公平聞て尤也併なにぞせうこをとらずしてかへるへきにあらすいかにいかにと申けり女性わらつてせうことや是〳〵これをなんしにとらする也と一つの手ばこをさして出す金平何ぞとおしあけみれはめんかうふはいの玉にひとしき火ようの玉と云もんし有さては此へんげと云はいなり五しやの大明神と心に思ひ火ようと有はにより（本ノマヽ）ほうじゆの玉成か女せうわらつてやみぢをてらす玉ならはくわやうとこそゆふべけれのべにやかんのたつる火は此火ようをてに取てもあつからず火ちうしてもやくる事なし去によつて火用ほうしゆの玉也はや〳〵かへれげんじはんしやうに守べしいかに〳〵と有けれは公平おしいたゝきかはる御しんたいを見んと云尤也見すべしと忽すがたかはるを見てあればめんていは女人にてしろきやこにのり給ひこんしきのひかりをはなつてみへ給

へはきん平かんるいきもにめいしひとへによいりん
くわんおんぼさつと三度らいし立出やくそくのつな
をうこかせはみな〳〵よろこび引あげ事のしたいを
聞てせんだいみもんのふしぎ是なり〳〵と都をさし
てかへりける今が代までもはりまのひめし此女性と
きときあらはれ給ふとや有がたし共中〳〵きせん上
下おしなべてかんぜぬものこそなかりける

右者太夫直之正本也

大傳馬三丁目　うろこかたや新板

いかつち論

第一

さてもその〳〵ちじょそれかんかほんてうのこれきをかんがみるにふはこうをたてゐをおらそふことこらうのごとしつゐにかんその心をふくむこゝにせいわ天わうのかういんたゞのしんぼちまんぢうの御すへちんじゆふのしやうぐん八まん太郎よし家と申たてまつるは天下のぶしやうにてわたらせたまふしかるによし家こうのわかぎみ御たんじやうおろしましまして（下ふし）御よろこびはあさからず地さて御まへには御しやていかもの二郎よしつなおなじくしんら三郎よしみつ御はゝかたの御おぢにほうでうの三郎これかた扱又大みやうにはみたちのこん太郎きよひらかさくらのごん五郎かげまさおなしくしそくあく平太かげひさこのかけひさと申はかげまさのあにかげみちの子なりしかかげまさやうしとしてかまくらのかげひさとなのらせたまふ心あくまでこうにしてふゆう人にすぐれわきて御すがたもいつくしければきみてうあいあさからず御とこをゆるさせたまふこれかぢはらとうのくはんそたり扱其つぎにざしけるはかまたの小四郎まさうぢかねこの次郎家もり其外のしよ大名さゆふにわかつてれつざあるきみ仰出さるゝはいかにかた〳〵われいとけなき時いわしみづにてげんぶくし八まん太幡となのりしよりうぢかみとあがめ奉るされば此わかをもわかれいにまかせやはたの御うぢことなすべきなりいかにかげまさわかをぐしてさんけいせよさいわいけふは吉日なりとく〳〵と仰ければ承はり候とれうぢやう申ごぜんを立ろしのけいゑいはなやかに 三重やかたをさしてぞ上参られけるさる程に地ころはしもつき廿日あまりのことなりしにゆきかきくれてふりければかげまさかさをさしかけさて御とものみちすがらかなたこなたをみたまふによものけしきもふゆがれてそのなばかりはさくらぎのこずへにつもるしらゆきははつはなよりもめつらしやかげまさ心におもはるゝには時もこそあれわか君の御みやまいりのかどいでにきぐさもなびくゆきはたゞしらはたなりと思ふにぞまことに

げんし一とうのみよと成べきずいさうかないさぎよし〳〵このわか君の御ゆくすへばんぜいらくと打いはいりおくいさみにいさみてゆりしやさん有みやゐにも成ぬればかずのほうへいことおはつてすでに御下かうのおりふしにはかにしんどうらいてんし百千のいかづちは三重とうざいさしてぞ上とびわたるその時かげまさはそらのけしきをきつとみあげてあらふしきやときならずふゆかみなりのなりたることいまたきひたることはなしいかにかんぬしこの山にはかゝることいつも候かいや承りおよばず候ましてみにとりてもおぼへずと申せばこん五郎打うなつき扨は日本のふ將となりたまふべきわか君はしめて御さんけいあるによつてゆくすへめでたくゑいぐわのはなのひらくべきずいさう天よりつぐるとおぼへてありそれらいのこゑにはなさくことにこくにおゐてたのしありたうのげんそうくわうていははなおそくさく時はかつこをうつてはなをもよふす是いかつちのまなびなりおゝめでたし〳〵さりながらかみなりめよおのれ天ていのつかひなるにわか君のおはしますへ〳〵のあたまのうへをおのがきまゝになりわたるはれいぎもしらぬくはんたいものやあおさないきみのおびへたまふにとつくなりやめおのれながなりせばかみなりとはいはせまじかげまさがゆんぜいにてたゝなかをいぬくへしといひもはてぬにいかづちたちまちにおちけるがそばなるまつのき二つにさつとひきさひてくもいはるかにあがりけり爰にふしぎのことこそあれさけたるきにもじすはれりかげまさ立よりみたまふに天ていしゆごしみなもとのよつぎ丸とかきてありかげまさひの思ひをなしやがて此木をきらせつゝ三重みやこをさしてぞ上かへられける御所にもなればはこと御まへにひざまづきみぎのあらましをごん上あるよし家大きに御ゑつきあつて是天のさづくる名なりとてそれより御なをよつぎ丸と付たまふせいじんのこにいたつて六でうのはうくわんためよしと申はこのわかぎみの御こと也かくて御みや參りのことふきとてしよこくの大みやう小みやう御まもりかたなにて家〳〵のぢうほうを御うぶぎぬに取そへ思ひ〳〵にあけらるゝは三重めでたかりけるしたいなり扨そのゝちにぶ將御出まし〳〵ていかにめん〳〵かた〳〵のぢうだいをよつぎ丸にたまは

ることよろこびいつて候なりなかんづくゐちごの五郎左衛門たゝひろがゐさせしいかづち丸といふ太刀ときにあたりてさうおうの名なりわかゝゆくすへを思ふて一しほよし家てうほうせりさだめてゆらひあるべきかたれきかんと仰ければたゞひろすゝみ出てさん候それがしがせんぞほくめんのやくをつとめはんべるにさがのゐんの御時せいりやうでんのひろびさしにいかづちおちて候をすかさずおつふせみかたなさして候さるによつていかづち丸とな付てたいたいにつたへ候があつきをとめし太刀なれば御まもりかたなにあげ参らせたるにて候といかめしがほにぞ申けるかけまさきゝもあへずいや〳〵そのたちは御まもりかたなにならじとを〳〵もつてかへられよそのしさいはまづ大とのは八まんにて御げんふくあり御しやていよしつなはかもの宮にて御げんぶくありしんらどのも又しかなりされはかもの明神はほんぢなるいかづちのしんげんしにふかくたつとむなりそのかみのけんぞくをつきとめたるはふきちなりまたこのたび御みや参りのらいしん御名をつくる是わかぎみのゆゐんありかゝるしいしゆをしりながらそのたちあぐるはけんじの御家をのらうとみへたりいや〳〵ごへんがぶんにてはそれほどのことばよもゐせしたゞきみのぎよかんにいらんとあとさきしらすのくはんせなしつくりなをしていでけるか下いやれろあしきいけんは申さぬぞ其たちのなをかへよときやうになしてぞわらはるゝ時にゐちのひざたてなをしなんでうきみのおんまへにてすぢなきことを申さんやぢうだいのけいづに是をかきとゞむる家につたへし太刀なれば御たづねにまかせて申なりそのかものみやうじんのしさいはいさしらずと申けれはなに御ぶんか家のけいづにあるとかや下いさては御ぶんはたい〳〵のうそつきよなして其つきとめたはみづかみなりかひがみなりかみづがみなりならばつく共きるともしやうたいあらじ又ひがみなりならばかたなまつてようたゝし地たゞうちおりてわか君のつりばりにすりたまへとふしゐつぼにいつてぞわらはるることはたゞひろきしよくかはつて思ひつめてみへけれどもごせんなればしのびて太刀に手をかけはがみをなしていたりしを君御らんしていかにかた〳〵かげまさがいふ所はことはりなりさりながらそれいか

づちにしな〳〵ありあめをふらし五こくをみのらするは是じひしんらいといふ又大まわうのけんぞく共はたけございにすんで人をつんざきだうとうをやぶるは是くわらいといふされば〳〵ひろかせんぞきんていをおとろかし奉るをつきとむるといへば是まをしづむるたちぞかしなんじが家のちう代またよし家かぢうほうわか〳〵まもりかたなにとらせんと御きしよくよげに仰ければたゞひろ此御ことばに色をなをしたうざのいしゆはなかりけりよし家こうの御ことばあつはれたぐいなきふ將やと偖かんせぬ者こそなかりけれ

第二

偖そのゝち地すでにとし月すぎのまどわか君も今ははや三歳にならせたまふ御かいしやくの人〳〵あまた付そひ參らせもてなしかしつき奉るある時わか君御なぐさみの其ためにていしやうにはとりをあつめ是をあはせてみせ參らするは時ならねともはるめきてふしけにきやうありてぞみへにけるはこゝに又いつくより來りけんふりたるむしなあまた子共を引つれてつきやまのかげにむれいしをよしいへの御そばさらずのかうのものにさかわだの三郎むれまさ是をみ付なふあれ御らんせよ人〳〵おりあらばかけよせ此には鳥をくらはんとたぬきのおほく出てありにくさもにくしいころしてみせ申さんとそば成ゆみをおつ取てかけ出ればむしなは四はうへにげちりけるされ共三郎四五ひきはいとめしが爰に一ひきいはかげのとあるほらにかくれしをむれまさおつつめやあおのれいかにしのぶ共いかで命をたすけんとゆみのはつおつ取のべてかのあなをさがせはたぬきはあなにこらへかねとんでいづる所をさかわださそくきたれればはしりかゝつてひつつかみ二つにさつとひきたきける御かいしやくの人〳〵此よしをみるよりも一どにとつとうちわらふておゝきやうありやむれまさとのわか君のよき御なぐさみとたはふれて三重みな〳〵内にぞ上入たまふさる程に地すでに其よのこと成に比は七月七日のよ都にはけんぎうしよくしよせいをまつるよいなりとてかみはおほうちしもはみんかんに至るまで五しきのいとをかけならべ思

ひのことをいのらるゝに三とせがうちにかなはずといふことなしされば(下ふ)よしいへの御かたにも是をまつらせたまひける取わけ月もさやかなればぎよしんでんの御かちやうを打あげさせたまへはかげひさ(本ノマヽ)一人御そひぶしにぞおはしけるよし家公よりうつゝなき御そでをかげ久のそでに打かけまし〳〵て(下いろふ)したゝもろ共によもすがら(はるふし)にはのけしきをみたまふにくれ行そらのよそほひもげにや誠に折ふしの ふしうつるに付ておもしろや(下ふし引)心なき〳〵さうもくなくといひながら(下いろおろし)四きをわすれぬやさしさよ(はしふし)はるさくはなのゑた〳〵はあをばとしげり今は又ふゞきばかりのはつもみぢはぎがかきねにかずちるは ふしくすのうらがれならんかし(下ん)をつたあさがほにはへまじるまさきのかづらなか〳〵とひきはゆるけふこよひしも ふしかくるねがひのいとすゝき(下もろふし)われかねがひはなんぢと(引下)さてちよもと思ふ心さへほにいでそめていつのいつおはなとなにやたちなましたゝこいゆへにたつなこそ人のうへだにいかばかり ふしつゝましさよとのたまへばかげ久そでをふりきりて御ことのはをきく時はかずならぬみづからゆへにもしも又あだに御なの立ことをけにせんなくやおぼすらんとうらみかほにぞたちにけるよし家たもとをひかへたまひおゝあやまつたりさりとては下ゆるしてくれよたはふれのあまりてかこつことのはをつゝましやとはなにはゑのあしくも心へたるよとてすかりたまへばもとよりもよそにあらざる御心またとてともに御(下な)しとねのうへなきなかの御契りは(下がし)ふしあさからすとこそ思はるれゆりかかるへだてもなき中になにをくねるとをみなへし色をもかほもしる人ぞしらんの花はさかりにてかよふかほりもよしやよしあしのはのふへによりしかなぐさとよやれあれをみよまつのけふりかゆふぎりか上おんふしおほろ〳〵と立のほりみへみゝへすみくもまゆくかたはれ月のかたはれはうたひぎんおちてもみづにあるものをあるかとみへてなきものはふしづみさほべにのこるほたるびはいなづまのかげおさゝのつゆをきふししけきおきのはのそよともか世のおとせねばのこるあつさをしのぎかねくれをおそしとまつむしや(本ふしまたすゞむしにくつはむしかうろぎはたをりきり〳〵すつねになかぬはたからむしおのがさまざ

ますたくにぞ ふしものゝあはれは秋こそといにしへ人のつたへしもげにさることとおもほへてなをもみわたすかさゝぎの橋なかれもはてしなき ふしあまのかはらをみるに付 うたい ふし 思ひぞいづるもろこしのりさんきうのさゝめこと天にあらばひよくの鳥ちに又あらばれんりのえだとちかひのすへもたのもしくやれそのかねこともこよひとかやそれは過にしむかしのことよとしこそかはれ我も又 ふしたれにしらせんそでさくら 下ふし もつ なにをはづるそ打よれとかみかきなでさせたまひつゝ御心のそこもかたりむつばせましませばかげ久かほを打かたふけにつことわらひたまひつゝおもはゆげ成そのすがた何にたとへぬいとはぎの露をふくめるふせひよりなをあたなればさしもけに御心をよせられしは ふしことはりすぎてそおほへけるそらすみわたる月もはやにし山にかげほのめけばふくるをつぐるかねのねによし家おとろかせたまひつゝかげ久に御手をひかれ おく り かちやうの内へぞ ゆり入たまふ こと は 其折ふし其よはさかわだの三郎御とのいにあかりしが御つぎのまにせんごもしらずふしにけるうしみつはかりのこと成に夢うつゝ共なく其さますさまじき女一人むれまさが枕もとに打そひてうらめしげ成ふせひにていかにむれまさ僭もけふのていせんにてわが子共けんぞくかあそひしにしゆ君の仰にもあらさるにあのれがちから持だてにとがなきものをいころしひきさきしはなにことぞそのうらみをはらさんため是まてきたるぞ時はすこさし只今思ひしらせんといふこゑにおどろきむれまさかつはとおきにつくきくしやうめがいひごとやと太刀ひんぬいて打て出る此女さはくけしきもなく御まへのかたへゆきけるがかちやうのうちにてみうしなひ御かや取てうちあげおつかけていらんとすかげひさこはらうぜきものとむれまさをとつてふせみかたなさしてくびをかくそのひまけしやうは天じやうへとびあがり ふしわらふこへしてうせにけりことよしいへも御いでありなにものやらんと御らんずれば御きんじゆのさかわだ也やあきやつはさけにゑいてのすいきやうかたゝしはきばしちがふたかむざんのものゝありさまや僭かけ久はよくもつかまつたりさすがごん五郎が子なるぞかししたりやかげ久うつたりやあく平太としばしかんじておはしましや

がて御さしそへをくださるゝかたじけなしとてうだいしよろこぶことはかぎりなしかのかげひさか手がらのほどあつはれかう成わかむしやと偖ほめぬものこそなかりけれ

第三

さるほとに 地すでにそのよもあけければ此ことらくちうにかくれなしことはこゝにゐちの五郎左衛門たゝひろは一とせきみの御まへにてこん五郎とのこうろんこつずいにとをつていこんいまにさんせずいかにもしてほんまふをたつせんとなひ〳〵しりよをめくらしこの三かねんをおくる所に此よしをきゝ付よひかなや〳〵是くつきやうのざんのたねごん五郎が子なればかげひさをなき身となさばおやのかげまさなどかそのつみをのかれんや是ねをほつてはをからすもとひなりと地あんしすましてたゝひろはおく御所をさしてぞゆうあからるゝ御まへになればことよし家御らんじていかにゐちの偖もやせんことをきかざるかかやう〳〵の事ありしをかげ久しんびやうなるふるまひならすやと仰いださるればゐちのさあくつきやう一のひまと思ひたゝひろかしこまつてそれに付かね〳〵承りたること候へ共御てうあひのかげ久なれば御きしよくをはゝかり申あげす候又申あけねばきみの御ためふうせんのともしひよりなをあやうく候也せひにあたり候とつゝしんでぞいたりけるよし家聞召いさゝかもつてくるしからずいか成ことぞと仰けるたゝひろ御そばちかく参りこゝへになつて申あぐるそも〳〵やせんさかわだをかげひさがうつたることもつとももきみのちうかうにはにたれともまことはおのがみのなんをのかれんためにて候へし之れをいかにと申に忝もかげひさ御とこをゆるされながら御てうあひのほとをわすれむれまさとみつつうけ仕り候よし承りおよび候されはぐあんをめぐらし候に此みちには上下のへだてなきものにて候ゆへなひなひにむれまさきみを打奉らんとぞんずる所にたち所に天めいつき君ぎよしんならざるそのうちに参りうちそんしたてまつつてはこにちにいかゝとぞんじせひなくかげひさがうつたるにてあるべく候まづ御しあんあつて御らん候へむれまさと申ものはちから

よにこへばんとう一のあらものをなんぞやかげ久としにもたらぬこくわじやにやみ〳〵と打れ申べきか此うへは御しあんあつて御はからひ候へと申上る君つく〳〵と聞召れぐはんらいあのたゞひろはかげまさととうざのこうろんもあればかゝることをや申らんされ共かやうのことをきゝながらまずそばちかくつかふべきにあらすしばらくせけんをきかばやと思召ふしみの大ぶきよ介をめされ思ふしさいあればかげ久をあづくるぞきひしくけいご仕れ偖又たゞひろにはあく平たがやかたにむかひかけ久か郎等共まばらにちらすな是又なんぢけいこせよとござをたゝせたまひみれば兩人承りかしこまつてたゞひろはふしわかやをさしてそかへらるゝ偖其後にきよ介はかげ久やかたへやがてつかいを立らるゝかくてかげ久はかゝることゝはしりたまはず御所にあがりたまひしをじやういなるとおしとゞめ三重ふしみのさとへぞ上いそよける是は偖置たゝひろはつく〳〵思ひめぐらすにたゝやかたをけいごせよらうどうちらすなと承るはのび〳〵なる御さた也しせんらうとう共しのびいでちきのそせう申上はみのなんとなるべしとかくしやういをかろしむるとひろうしてうちころすにしかしとしあんしけるがいや〳〵かげ久かかうけんには山長兵衛のせう竹さとゝいふものはこゝんふそうのゆうし也かれとかせんのしやうぶはなかなかにかなふましよせんたばかりよせ是にて手ごめにせばやと思ひやがてじやうをしたゝめてさぶらい共に申付おくりたけさとかたへぞゆりおくりけるその折ふしたけさとはなにとやらんれいならずむなさはぎしけるはしゆくんかげ久なにごとかおはすらんと御所をさしてあからんともんぐわいに立いづる所につかいのものはゆきあひてたゞひろよりのふみなりとさゝげければなにごとやらんとひらいてみるにしゆくんかげ久きみの御かんきをかうふりでんちうにてせつふくいたさるゝとのじやうにてありもとよりは山四さうをさとるおのこにてやがて心へなふ御つかいひころかげ久とゑちのどのとはいしゆふかき中成に御念比の御心付とかふ申におよはれずいでいでまづごへんへひきでものを奉らんと太刀ひんぬいて水もたまらずくび打おとし此うへはとかふ申におよぶまじもはやてきはよせ來るらんやういせよやか

た〳〵と三重うへをしたへと上かへしける此ことなをもかくれなくゑちのはあんにさういしてこのうへはゆよすべきにあらずとて三百よきをひきぐしてかげ久やかたを取まはし時のこゑをぞ上にけるやかたのうちにもかねてごしたることなれば兩ぢんたがいに入みだれ三重ひはなをちらして上たゝかいけりされ共せうぶはみへざりけり（ことは）かゝりける所によせてのぢんよりもかたのゝ四郎となのつて出竹さとゝむずとくむ長兵衛のせうほゝゑみてやあこゝなやつは何をするぞすもふばしのぞみか此は山はとしよつておくれずまふのことなれ共てはひとておぼへたりならひたくはおしゑんとゆんでのかいなをさしのべよろひのあげまきをかいつかみちうにひつさげみかたのちんへひかんとすあにのたかはるおとゝをてきにとらせしと太刀打ふつてかけ出るは山うちわらいやあごへんはすまふのきやうしせんためか取くみたるすまふにぎやうじはいらぬ也是か御所まふならば參らんとさし出せばたかはる太刀なげすてゝふともゝをおしにぎりゑいや〳〵とひきければ山ちつ共さはがず是はめつらしやくび引といふことこそあれ是はもゝひき候なさあひきたまへ〳〵とあふきをひらき打あふき（ふしさらぬていにていたりけり（ことは）かゝりける所にとやまのやけんしかけいでいかにとのばら人ひとりとらまへどちへもらうかもらはるゝかとかくそれがしわけて參らせんとよはこし二つに切はなせばさうへもつてぞのきにけるなをもとやまするかさずかけ出るを竹さと取ておさへあゝふかく也やげんしわか君の御はゝやかまくらへしらせ申さすしてながいくさはせんなしこなたへ〳〵と引つれてかしこにひを付のこりしやつはら四方へばつとおつちらしけぶりにまぎれうせにけり此もの共が有さまあつはれゆゝしき侍やとみなかんせぬものこそなかりけれ

第四

かくてそのゝち（地は）山長兵衛のせう竹さととやまのやけんしみちざねは一つ所におちのびて（ふしはるしばらくいきをぞつぎにける竹さととやまにむかふて今はは やせんかたなし我は是よりかまくらへ下るべしご

へんはつの國すみよしにおはします御は丶君へ申されよ御おば君と申ながら誠はかげ久の御は丶うへにてましませばしらせ申さぬみちならずとく〳〵と申つ丶おくなく〳〵わかれてゆりそれよりもすみよしになりしかばやげんじやがて内に入人〳〵にたいめんしかやう〳〵の次第也とはしめおはりを申上れは母うへひめ君聞召やれこは誠かかなしやとみな一どうにこゑを上なきふしわつとさけばせたまひつ丶ふしはしきへ入たまひける下おんつる涙のひまよりも母うへ仰けるやうは偖ははやかげ久めしこめられてあるなれはあすをもしらぬ身となりぬ命の内に今一どみ申みへたく思ふ也そのふしみとやらんへはわらはをぐしてゆけやととてなきふしりうていこがれなきたまふみちざね承り仰にては候へ共はる〳〵御こし候へてもわか君への御たいめんはなか〳〵ゆるし申まじかへつて是は御ゆかりとうきめにやあはせたまはんたと丶おほし召と丶まらせたまへとす丶め奉れば母うへかさねてのたまふはたとひゆかりのものよとておなしつみにしづむ共心づよくも思ひきり此まゐいかであられんやいろあ丶なさけなし彌源次よひらにつれてゆきあはせよとなきふしすがりつひてぞなきたまふみちざね今はいさめかね此うへはちからおよばぬ仕合也さあらば御とも申さんとて三重くり上しのびて出させ上たまひけり上いろふしあらいたはしやおやこの人みちざね一人御ともにてふししのびいでさせたまひけりかくうきくさのたね〳〵をいつのよにかはまきをきておくりなかしもにすむふしむしのわれからと下いろおろしなくねこととふ人もなく只いたづらにすみよしのやどのなごりもはやつきて一よとまりのうきねこそ下ぎんふし夢かうつ丶かねてかさめてか下ふしあら〳〵うつ丶なき露のよにふしきへやらずしてなからふるけにおいのみのうらみこそくずはの里のゆふべなれ思ひもよらぬたびごろもたちねに付てくるしきはのべのきゝすにあらねどもふし子ゆへのやみにふみまよひかくすへのよをかけてぞたのむはしもとのゆんでをみれば山ざきやうどの丶あしのふしのまもわすれぬむねのくもきりをふしはらしたまへとふし拝みおとこ山をも打過てよどのかわせのふなをさや下いろもろふしさすてひくてにほしあへぬふしもすそによそへわかそでも涙にくれておきもせすふしねられぬとこに

よもすから（下ふしみのさとにぞ付たまふそれよりも母うへはきよ介がもんぐわいに立よりてばんの侍を近付てかやう〳〵のものなるがかげ久にたいめんいたしたく候おくへこのよし申てたひたまへ（ことは）侍共聞よりもいやおくへ申までもなしかなふましとつきいだしもんをたて丶ぞ内に入（地母うへもんをたてられて ふしせんかたなげにみへたまふがもんのとびらに立そひてなふなさけなしはんの人御かんきかうむるかげ久かゆかりのもの丶ことなればとがめたまふもさることなれどもその子がとがにあふならば一所と思ふみづからをあはれみ合せたまはれやあ丶なさけなの人〳〵とかど打たゝき〳〵（なきふしたをれふしてぞなきたまふ（ことば）きよ介此よし立きゝしてやれば御有様のいとおしさ又は女しやうのことなればひそかに合参らせんそれこなたへと申ければ（地承り候とやがていざない奉り（なく）有し所に（ゆりせうしけるや有てきよ介はかげ久ともなひ出ければ母うへひめ君御らんしてやれなつかしのかげ久といだきつかんとしたまふをきよ介おさへちかふのたいめんかなはしとおしへだつれは母うへあまりにたへかねてなふきゝたまへしゆこのとの今までつゝみ候へ共このうへはなにをかつゝみ申へき爰なるひめもみづからもつねのゆかりのものならずあの子がおばとはいひながら誠はたいなひをわけし母ぞかしあのかげ久五つのとし父かげみちよをはやくさりたまひぬおぢかげまさ子のなきゆへひたすらもらひたまふによりやうしに参らせ候也せいじんするにしたがいきりやうも人にこへ君の御おぼへもよろしくてときめきぬると聞時はわらはが心はうれしくてみのおいゆくをも打わすれとし月をおくりしにとがはなにともしらね共おもはずかゝるなんにあひめしこめらるゝときしよりあるもあられずかなしくて是なるひめをともなひてたづねきたるは兄弟や又ちをわけし母なればいかであやまりいたすべきゆるしてそばへやりたまへとなきふしすかり付てぞなきたまふひめ君涙をおさへたまふ是御らんぜよあにうへさまこゝなるとのこそたにんにてそばへよせしとのたまへ共母うへ是まで來らせたまふになにとてそばへはよりたまはぬぞせめてはものをのたまはでいろあゝうらめしのあにうへやとなきふしこゑを上てぞなきたまふ（ことは）きよ介み

参らせおんあひのあはれさは思ひやられて候ぞさりながら君よりの御せいとうきびしく候へばかほどまでの御たいめんもはゝかりおほくぞんすればそれかしも子をあまた持て候へば身つまされていたはしさにかくは合せ参らするぞそばをき御ことはをもひ切たまへいかにかけ久殿都の聞へも候へはとく〳〵御いとまごひおはしませ地景久はきゝたまひせきくる涙ともろ共に手を合たまひつゝあゝもつたいなや母うへさまかちやはだしのふせいにて是まで御入候ことおゝそれおほくそんする也身にあやまりはおぼへねと君の御かんきかうふれはこよひの命もはかられずかゝるなげきの御有様み参らすれはなか〳〵にさいごのさはりとなりやせんいつまでも御なごりは同し事にて候ぞやなきふしはや〳〵かへらせたまふべし又花よのひめもことの心をよく〳〵きけ我母うへにさきだち参らすれば御なげきふかゝるべしおことは女のみ也ともかひ〳〵しく心をもちてな母うへなぐさめ参らせよ此はだのまもりをはおことにかたみに参らするぞ我こそ此よのゑんつきてらいせをたのむくはんせをんおことおかまんおり〳〵は兄がかたみと思ひつゝ下ふおねぶつ申てゑさせよ引ゑゝ此くろかみは母うへさまおほそれながら奉る又こなたへもはゝうへの御うはぎぬをたまはるへしさいごにちやくし申さんとのたまふこゑのしたよりもなきふしなみたにくれさせたまひけるふしよしのくり上あはれと聞へけるしゆごの侍立よりかたみを取つぎ参らすれば母うへ涙にかきくれてなんぢにわかれ露のまもながらへあらんみならねとわれもめいどのみやげにしはしはあづかりおくぞかし又母もかたみを取かへんと御うはぎぬをたびたまふかげ久御こそでを手にかけたまひかのもろこしのはんくわいが母のころもをきかへしをほろとな付しいにしへもいま身のうへにしられたりそれはいくさのかど出也是は又くわうせんのたびにおもむくかど出のわかれは同しことなれどなげきはかはるかたみやとなきふしせきくる涙はひまもなしことはじこくうつればきよ介もはや御入候へと景久ともない立ければ地母うへは御らんして今しはしきよ介殿おやといふも子といふも是が此よのみはて也またせたまへとのたまひて母うへひめ君一どうにさらばかげ久あにうへとたがひにすがたをみあけみ

おろしめとめをきつとみ合せて（なきふし）わつとさけばせたまひける（ことは）しゆごのもの共立よりなふ歸らせたまへとひつ立れは地ひめ君もろ共母うへはなふあのかげ久にわかれつゝいきはていかでかへるべきさしころせよやしゆこのものやれさしころせ人〳〵と（なきふし）こゑをはかりになきたまふ傍あるべきにあらされはなく〳〵わかれてかへらるゝとにもかくにも此人〳〵の御有樣是ぞ誠によのなかの物のあはれはこれなりたゝこれなるはとみなかんせぬものこそなかりけり

第五

さる間地かまくらにおはしますごん五郎かげまさはこの事夢にもしりたまはずなに心もなくおはす所へ（ことは）山長兵衛せう竹さとやう〳〵としてかまくらに下りいそぎ君の御まへに參りつゝわか君の御有樣かつせんの次第一々に申あぐるかげまさ聞もあへずやあおのれはおいにほれたるよなかつせんしたとは何事を申ぞ其うつてのやつばら千や二千きつたればとてもし景久にけかあらはなにのゑきかあらんそのあづかつてめしこめをくきよすけがかたへゆきかけ久をひんぼうてなどめしぐしてはくたらぬぞ手のび也傍も〳〵はかゆしいや〳〵かくいふうちにもかげ久が打れなとしてそのゝちはくゆとも〳〵かひあるましやれそこなるものゝぐおこせ我ゆきてぢきにつれてこんかげまさをかげまさとおもはんものはしたくしてともせよとて三重みやこをさしてそ上のほらるゝ是は傍置おはりの國のちう人たんのとうないしげゆき此よしをきくよりもかげまさをすぐにとをすは都へのおそれ有と手せい二百よきをもよふしかさでらにぢん取てみちをさへぎり待いたりかゝりける所に景正もみにまふでのほらるゝしげゆきむかふて此所は藤内がかためてそうへこそはとをすましきといふ景正きゝもあへず是ほどいそぐ京のほりのみちのじやまするやつめをあれ馬よりひきおろせさめがはましま承り二人つつとはしりより其まゝ取てたをさんとす藤内二人をかひつかみ八たんばかりなげすてゝあれていのものをたのみにして京のぼりはあぶな物只是より歸られよとあさむけばかげまさ馬よ

りとんでおりしげゆきをひつとらあへたりにたてたるかねつきだうへつれゆきつりかねにてをかけゐといふて引たまへはりうづのくさりふつときれかねはひゞいてちにおちける儀藤内をかねのうちにおし入のこるやつばらとうざいへおつちらし□□かへつてみたまへばしげゆきも大ぢから内よりかねをはねかへしかけ出んとする所を又其まゝに取てふせ（いろこと）はむじやうのかねに入たればじやくめつせんと思ひしにはねのけて出るはまがさいたるかしけゆきとそばにありける大そとばをめてにてゐいとひきぬき藤内かだうばねとならくへとをれつきとをしいろおゝ只今まではしげゆきとなのられしがはやくもしにゆきにならればしないらざる所へさしいでひごうのしにをしつるよとから〳〵と打笑ひ三重おして都へ上のほらるゝだいぶかたちにも也ぬれは門共いはずおしやぶりひらおしに亂れ入折ふしきよ介は御所にあがりやどに有あはせずのこりし郎等共立出こはらうぜきとかけいづる所を一々に取てなげすて儀かげまさは奥をさして入たまひかげ久のおはします一ま所へつつと入やあいかにかげ久是ほとのこいゐ一つなどけやぶりて下らさることこそふかいなけれそれにてはかけまさか子とは中〳〵もつていはれましそれかし是までむかひに來るぞはや〳〵出よとのたまへは地かけ久涙と共にのたまふやうあらもつたいなき父うへのふるまひや物か付てふしくるはせたまふかかなしやな君の御かんきかうむりて御ゆるしもあらざるにいかてかおして下るべきとく〳〵かへらせたまふへしふし父うへいかにと申さるゝ（ことはかけまさ聞もあへずやれ御ゆるされなきとはたかことぞとかのじつふもきゝさだめずしておしこめたまふ八まん殿をしゆくんとはまだ思ふかや儀も汝は御てうあひもたにこと也誠に此かげまさか一子なれはせうせうのとか有共一どや二どは御ゆるしなからで有べきにかゝるむたいの御せいとうさら〳〵もつて心へずいらざることをいはんよりひらに下れと申さるゝ地景久たもとにすかり付父にむかひてかく申はおほそれおほく候へ共まつ御心をしづめられよく〳〵きかせたまへとよそれくんしんのならひにてたとへは君々たらず共しんはしんたる道ぞかしましていはんやそれかしは御てうあひもよにすぐれいとおしみた

まふ身をかくおしこめたまふこと身にはおぼへぬことながらふかきとがこそ候らめ其御心もはゞからでせひみにおぬてとがなしと申わけんはしもとしてかみをはゞかるにたるべし是天たうにも又そむく也そのうへ御てうあひ有とてもそれをたのみにぞんずるははかなきことにて候也それいこくにもためしありむかしゑいのれいこうと申みかどひしかといふちごをてうあひしたまひしか有時もゝぞのにみゆき有御ゆふゑん有し時かのひしかにもゝをたまはりくいけるが其あちはひすぐれたりとて其くいさしたるももをれいかうへ奉るみかどしよくしたまひてひしかかふかき心さし誠に是にあらはれたりわがしよくしたき物をのこしておたへけるよとぎよかんはなゝめならすそのゝち御ゑんやつきたりけんかのちご御てうあひおとろへはておひうしなはれ参らするにかのもゝを奉りしことかみをかろしめ申ととがのうちの第一にきはまれりかれをみ是をきく時はそれかしも其ごとく御てうあひの折からにおほへぬあやまりもやしてかゝる御かんきかうふらんとにもかうべをはねられんみか今まで命をながらへ父の御めにかゝるも御ゆふめんのゆへなれは是又君の御おん也たゞおんをしらざるはちくしやうにことならずたとへかうべをはねらるゝと我はしゆくんにうらみなしなにと仰候共かまくらへは下らしとりをつくしみちをたていろなきふし涙にくれてぞ申さるゝことはやあごへんはいつのまにそれ程しよをばよみたるぞ去ながらいはれぬこうしふうをださんよりちゝにまかせてたゞくだれよそれしそんのなきをもつて第一のふかうとす汝やうしとはいへ共我か一せき成にすでにかく也ぬればかげまさが家はたへはてんはひつでう也しからは是おやへのふかうの第一也所せんわれと打つれかまくらへ下られよ君の御心もなをつて召出されば其とをり又うつてたまはる物ならばなん十萬ぎ有とても一方を打やぶつて日本國におらばこそやくたいもなきよし家をふしやうよしうよとあがめもせめ其かひかうらいけいたん國にも打こへ國一つのわうと也わかしそんをばたやすましとく〳〵ちゝかいさめに付汝はくんしんのぎはまもれ共ふしのれいにそむけりたゝししうへはみちをつくせおやにはふかうをせよといふしよばしあるかとせめかけ〳〵のたまへは

景久今はいさめかねいや只それかし命有ゆへにくんしんの道ふしのれい二つに付てなげき有よし〳〵じがい仕らんとこし打さぐつてはあなむ三ぼうかたなはなし其御はかせかしたまへととびかゝり取たまへはさしもの景正どうてんしてやれ心はやき物かな父が是まできたるのもおことが命たすけんゆへおひくるひをもするものを地さほとに思ひきるならば此うへはちからなしなんぢが心にまかすへしちゝはこきやうへかへる也さらば〳〵とのたまひてさしもにたけきかけまさもたゝしほ〳〵として（なきふし）なみだと共にかへらるゝあらむざんやかけ久は父うへのうしろすがたをつく〳〵みてなふもはや歸らせたまふかやをよはかりのわかれ也おや子は一せと申せ共かなはす〳〵後のよはめくりあひ參らせんとたがひにみをくり立歸り（なきふし）さらば〳〵と（くり上ふし）のなみたのわかれぞ（ふしあはれなる九つゆり三重くり上）わかれ〳〵に上なりにけり是は儲置（こと は）こゝに又ほうでうみたちかまだかねこはかげまさの郡入らうせきあらばしづめんときよ介がやかたをうちかこみいられしがよそながらおやこのわかれをつく〳〵聞て思ひのほかのちうしんぞとみな〳〵涙にむせばるゝ（こと は）なかにもほうでうのたまふはかげ久かしんていい一かうきみにやしんなしおやのみなればかげまさものにくるふもことはり也此うへはみたちとそれかしは御所にあがりかげ久ふた心なきよし申あぐべしとかくかげまさそつしなきやうにかまだかねこはなかよければいそぎゆきてとめたまへ此ぎもつ共しかるべしとおの〳〵ひやうぢやうあひきはめとうざいへわかれたまふ此人々のしんていたのもしかりともなか〳〵申斗はなかりけれ

第六

儲そのゝち地かまくらの權五郎かげまさはちからおよばず立わかれつち山のしゆくに付たまふ（こと は）かまたかねこはやゐんにはせ付みたまふに誠にようじんきびしくみへにけり兩人かやう〳〵と申いれらるれば承り候と侍共かくと申あくるかげまさ心へたりとなぎなたおつ取てもんぐわいにつつと出やゐ打てにきたるかかた〳〵と長刀をふりあぐればかまだとび

しさつてそつしはししたまふなこへんがために來りたり只兩人に打まかせ都へのぼりて御しそくのとがなきよしをそせうあれひらに〳〵と申さるゝなにそれかしかためをおほし召て御いで候とやおゝそのてもやがてすいしてありたはかつてうたんとなはうこうをひきたれはいひわけすべきしうもなしへだげにほうばいをたのみにしてけがまくりたまふなといふその時かねこすゝみ出なふたばかると申さるゝは御へんにはにあはぬことば也侍かなにいつはりをいふものそ只かまだ次第にしたまへといふかげまさ聞てまづかた〳〵も思ふてみよわれじやくねんのむかしよりすとのちうこうかずをしらずさだとうぜめの其時は君の御ちゝよりよし公のやをもてに立とりのうみに此まなこをいつぶされあやうき命を助けまいらせし此かげまさが子なんどをかくむたいなる御せいとうあにうれしからんやかねこきいていやさあしうのいのちにかはりちうをつくすことはさふらいのわざなりきそのちうしやうゆへ御おんしやうをたまはつてゑやうにはほこれといふいろおゝしよりやうをもらふてよろこぶは御へんていのはさぶらいのことよ此かげまさにおゐてはおんよりもなさけのしうこそほしけれとふしそらうそふひてぞいたりけるはかねこ大きにきしよくかはつてやあはさふらいとはきつくわいとたちのつかに手を掛るかまだおしとめこはいかにけうぐんにはきたらすしけんくわをしにきたらるゝかふかくなりとせいしいかに景正ほうばいの其中にかげまさかねこかまだはなかよきと人もいふことに三人はいつれによらず何事もあらば命をくれんといひかはせしをわすれすはたとひ我々かたばかるにもせよ御へんがくひを兩人にくるゝとだにおもへはなにのきづかひあるべきぞいかにいかにと申かげまさから〳〵と打わらひいろおゝさあそのことはをばおぼへてありかた〳〵に所望せられ此すゝ非カくび一つおしまんやなによりもつてやときこと也いそひでとれやかた〳〵とくびさしのべて待たまふかまだしすましたりと悦びまづ以て大事の御くびさつそくにたまはることまんぞくいたして有いざかねこ此上は都へともなひゆかんとひつ立ればかげまさきつとみて是はなに事ぞ都へはゆかしといふ是は儲さいふはとのはなに人ぞ一たんもらひしくびなれは命

ははやなきものを都へのほらしといふ人はおぼへずたゝし又そのくびはや取かへすかと申されはかげまさこのりにふくしつゝ偖も〳〵ごへん立はよきことばじちを取たまふとたがひにどつと打たわふれて三重みやこをさしてぞ上のぼらるゝ偖其後にかくてたたひろはこのことはやくもきゝ付やがて君の御まへに參りやぜんかげまさふしみにてのらうぜき其うへかまたかねこがともなひ下ること一みのむほんにて候へしとう〳〵うつてを下さるべしとあらぬさまにそ申ける君聞召いかゝはせんとおほしめす所へほうでうみたち參られれば君御らんしていかにかた〳〵かまたかねこか一みのこときゝたるかとぞ仰けるほうてう承りさん候かまだかねこか下り候はかげまさふしみまてくだるよしうけ都にいらんとするならばけちらさんが其ため四人が手せい一千よき大ふがやかたを取かこみて候にかげ久かしんていかやう〳〵の次第ゆへさんしやのためごかんきかうふり候かとふひんさにまづかげまさそつしのじがいなきやうにと兩人はわれ〳〵かさしくだし候偖みたちとそれかしはこの事申あけんため罷出て候とつつしんで申さるゝ其時ゑちのすゝみいで偖兩人はこへんたちがはからひならばさも有なんかけひさがこゝはさかわだとみつつうせしにうたかひなしなにと申なをさるゝとかなはぬことゝぞ申けるほうてうきゝたまひ偖はだいじの御さた也去ながら人にしらせぬ道なれば此ことはさかわだもかたるましましてかげ久もいふまし又うきよにもさたあらは我々きかぬことよもあらしして又こへんにはたれかはきかせぬるぞおぼつかなしと申さるゝあゝおろか也ほうてうとの天しるちしるわれしるあくし千里をはしるといふことをしりたまはすやそのうへわれじきにみたることもありすてにさかわだよふけ人しつまりて後君の御しん所へぬきたちにて參りしこと是程たゝしきせうこよにはなしたゝしべちのしさひばし候かほうでう殿とあざわらつてそ申けるさしもの北條も一くのたうりにつめられへいこうしてぞおはしける其時みたちまゆをひそめふしん也たゝひろきみ御てうあひのかげ久をこふんていのとさまものかみる事はよもあらしかげ久をしらすしてさやうのことみたるとはおぼつかなしと申さるゝゑちのいたけたかになつてわとのはい

われさるひいきだてかなつかいしことばある物をとちつともおくれぬふせひ也ほうでう聞てそれはたしか成ことよ此上はごぜんにてかげ久とぢきのせうれつ有へし景久かあやまりあらば御前にてきつてすてんそれ〳〵景久よびたまへ清平やがて心へ景久にあひまかふちこをそ出さるゝたゝひろもとよりみしらねば景久と思ひいかにあく平太いつぞや北山にてさかわたとしのびあふ其時つかいしことばわすれたるかいかに〳〵と云ければ此ちごかねてあひづのことなればわざと打しほれてそいたりけるなにと〳〵かた〳〵是にても申ぶん候かといきをひかゝつて申ければ御まへの人々そでをひきつゝわらはるゝ君もしばらく御しあんあり偖はたゞひろかげ久をみしらぬうへはさんけんにうたがひなしとおほしめさるゝ所へかまだかねこかげまさならびに郎等の竹さと御まへにつつと出まづ竹さとはたゞひろをはつたとにらんでひさしく候たゞひろどのいつそやは御しやうにあづかり候へ共御へんしをいまゝでゑんゑんいたせしことありよぐわいながら御めんなされ候へ是〳〵心ゆくんかげ久はぎやくしんか忠しんか御らん候へと北條の御まへにさしいだす北條取上よみたまふ偖かげ久君の御かんきをかうむらせたまひ只今でんちうにてせつふくをとげらるゝそれに付御へんことぶかうのほまれよにこへかねて上ぶんにたつし此たび御しやめんなされことに景久のゆいせき一心にごぶんに下さるゝ其しいしゆ某に仰付られ候てうはやく是へ參入致るへき物也山長兵衛の尉殿へゑちの五郎左衛門たゝひろはんとかいて有義家聞召偖はしつふきはまつたりたい〳〵はくたいの忠かうをなせし景正をいひかいなき物の申せしことを用ひつゝ景久をかんだうせしこと義家か一せの不覺是に過ず此たびのていたらくゆるしてくれよ景正と忝も御手を合させたまひけれは景正かんるいきもにめいし偖々めうがなき御上いかな只今の上いのだん承り候うへはとかふ申はおそれ有と泪をなかし悦ひし ふし禮きの程こそしゆせうなれ其後の御諚にはたゝひろを景正にとらするぞ心のまゝにそれはからへ畏てたゝひろを取てひつたてうはあご下あごおし切此口ゆへにおほくの人をなやますとほうぼね懸てゑいとひけばかうべはめてにぞとまりける頓而首を打おとす其後景

久を召出されいよ〳〵てうあひあさからずなを〳〵
けんしの御はんじやうめでたかり共なか〳〵申斗は
なかりけれ

鶴や喜右衛門板

殿上闇討 女袖鑑

第一

扨も其後序それ三がいはくるしみつきず、さいしは身のてきひんよくは心のあた、まことなりけるきんげんかな、こゝに本朝七拾三代ほり川のゐんのじてんにあたつて、天下の武將八滿太郎おろし義家とて下ふるいたい源氏のとうりやうたり地御子一人をわしまず、つしまのかみ源のよりちかとて、きりやうよにこへきうばにたつしたまふにぞ、義家としおいたまふゆへ、なにごとも此よしちかのはからひにて、けんひいしのべつたうにふせられ、ぶいを天下にあらはしたまふ、さればうゐてんべんのよの習ひ、すきし年の春のころ、きたの御かたにおくれさせたまひふしひたんの泪とゞまらず、されどもふうふの御中にかつ若殿と申て、十二歳になりたまふ、若君一人おわしまず、これすなわちほうけんのとき、六條のはんぐわんため義と申せしは、此若君の御事なり、扨又家のこうけんにははだのきやうぶとしかづ、ちやくし五ろうとしひでとて、大ちからのがうのもの也、其外天下の諸さらふい、よしいゐこうの御よつぎとて、いつきかしづき奉れば、御いせいひゝにいやましして、三重あかしくらさせたまへけり、是は扨置ばこと其比又山しなのうたいしやうたゝしけとてくきやう一人おはしまず、外にはじんぎまさしくもてなし、うちにはをごりをふくみ、いろをおもくすぶとうしんなりしが、其比中宮の御方に、すはうのないしとていとあでやかなる女くはんの有しを、かいまみてより人しれぬこひと成、おり〳〵しよまふすれどもかなわず、さればとて玉づさ一通のたよりもあらずいかにもしてぬすみ出さんとさま〴〵あんをめくらしけ地頃はやよいのはしめつかた、いとゞ心も浮立て、思ひくらすも物うきに、心ゆかしにさんだいせん、もしもことばのよすがもやと、三重きんりをさしてぞ上あがらるゝ、去程に地扨もたいりには、げつけいうんがくことことくめされ、ぶがくのぎよゆふときこへけりかことはかりけるところにゐんの御所の勅使として、さちうべん參內あり、扨も御ていぜんのさくら花、色かもす

くれ候へは、中宮をはじめ、によゐ女くはんを御供にて、みゆきあるべき旨ゐんちよくのよしそうもんす、みかどゑいかんあさからず、誠によろしきゆふけうや、さ有らば、よう い仕れと、つしまのかみよしちかを召れ 地汝はしら川殿に參り、花ぞのけいご仕れとのりんげん也、よしちかちよくめいかうふりて、れうでう申御前を立 ふし花ぞの山にぞつめらるゝ、扨こくげんになりしかば、しゆしやう中宮諸共に、をなじ車にめしたまへば、其外の女ゐ女官、おの〳〵くるまにぜうじたまひ白川御所へのみゆきのてゐ 三重心もことばも上およばれす ふし御所にもなれは、上皇をはじめ奉り、しゆじやう中宮諸共に、花園にしつぎよあれば、御とものの女官たち、十二ひとへのつまを取、袖をつらねて木のもとを、色めき給ふありさまはふし何れを花そとあやまたる、すでに御ゆふもなかばすぎ、しゆしやう中宮はつき山のおくり御てんに入せたまひけり、爰にすはうの内侍は、櫻の枝をたをりつつ、げにやたかきもいやしきも人の心は花ぞめの、うつろいやすきよの中の、人の盛りはいつまてと、思へばしたふ我すかた がいたうくこよひは 爰にかりまくらふしいろ さそふ花ともろともにいろふしちるや心なるらんかはりと、たはふれゐめる其すがたなかしふしたとへていはんかたもなし、其折ふし右大將はすはうのないしを心がけ、花園に出られしが、此有さまをみるよりも、いよ〳〵まさる思ひのたね、ことばをかけんもおもはゆく ふしあきれはてゝぞゐられける こと かゝりける所に、ざとう一人びはをもち、わたくしは西國にかくれなき、びはのじやうづにて候、此程都にのほり、かゝるぎよやゆふにすいさんして、一曲を仕り、ゐいぶんにそなへんとぞんし、是迄參りて候、若殿上人にてましまさば、御ひろう有てたまわれとぞ申ける、ただしげ大に喜び、是こそくつきやうのたよりなれ、御まへちかう召つれ、けやうをもようし其ひまに、ないしをうばい取べきと、ざとうを召つれやがて御まへに罷出、有ししたいをそうもん有 地帝ゐいぶんましまして、さあらは一きよく仕れ、畏て候と ふしやがてきよくゑゆをたんじけり 引第一たいこのげんはさつさつとしてまつをはらてそいんをつ、第三第四のげんはれい〳〵としてよるのつるの おん子を思ふ ふしをもしろや 引此四つのをは、ふどうのもてるばくの

なわ、ちすい火風をいましめられしを、しらぬぼんぶのおろかやと、をし返し〳〵、ひやうしにあへる一きよくは　ふし心ことばもをよばれず、しゆしやうほうわう一ざのくぎやう、此をんぎよくのおもしろさに、せひをうしない　ふしかんにたへさせたまへけり　ことは然る所によしちかは、さいせんより此ざとうをあやしみ、物ごしに立かくれゐられしが、びはのしやうがにおどろき、する〳〵と罷出、をゝそれなから只今の一曲心へがたく存候、そも此曲と申は、しんの平公ばくすいのなかるゝこへをがく人に仰て、ことのきよくにうつしたもふ其曲さつせいにして、聞人涙をもよほし、かんにたへたる曲なるゆへ、へいこうをはじめ、代々のみかどほろびずといふ事なし、我てうのがく人か、もんのかみ定とし、もろこしに渡り此曲をならゐつれ共、ふきつの曲なれはとて、一手をりやくし候に、なんぞや今日の御遊に、ほんてを弾するいぶかしさよ、そおしてかやうにすじなき物を、御前ちかく召出したもふは、そもたれさまの御さしつにて候ぞ、いや是なふそれかし召つれたり大しやうたるべきものにくわごんがましきいひ事やとあれは、やあ心へぬ仰かな、身ふせうなれ共今日のけいごを仰付られたり、おゝそれわともかくもまづ〳〵此ざとうめは、へんげのしよゐと存る也、おのれ本性をあらはせ、さなくは此よしちかく（本ノマヽ）あらはすべしと怒りたまへは、まうじんすはあらわれたりと、其丈け一丈斗りのふるにうだうとあらはれみぢんになさんととんでかゝるきよゆふの折から、妨けをなす曲者やと、走り懸つてゆんでのかいなを打落す、され共ひるまずはだのをつかんでこくうにあからんとするを、心もとをずんずんに刺通せば、よしちかさつしたりと、首ちうに打落せば、首はこくうにあがりけり、其時よしちか大音上、やあ大しやう殿はいづくにぞ、かやうなるくせものを召つれ給ふは何事ぞ地是々見よとよばはつて、四方をにらんでおはせしをふしほめぬ者こそなかりけれ、帝ゐいかん限りなく、扨々ゆゝしきはたらき、せん代みもんのちうこう也、先此たひのけんしやうとて、いつもの國を賜り、其上汝はさい女におくれたるよし、さそ頼りなく思ふらん、則すはうの内侍しをゐさする也、それ〳〵とのせんじにて、關白も

ろみちは、ないしの袖を取、三のきざはしだんすの石のあまおちにて、すはうのないしをわたさるゝ、有がたし〳〵と、ないしの手おとり、御まへを退出せられけり、よしちかのいせいの程上下萬民おしなべさて、うらやまさるこそなかりけれ

第二

扨其後地右大將たゞしけは、むねんなからもじたくに歸り、扨もすはうのないしを、うばいとらんとおもひしに、あんのほかなるよしちかに、たまわる事こそきつくわいなれ此うへはよしちかにいしゆ有こと、家のらうどうたはらの藤内はるちかを近つけ、はしめおわりお語りつゝ、むげにくちおしく思ふなり、とかく義ちかおほろほし地此いきどうりをはらしるさすべしやあ藤内いかにと申さるゝことはるちかつく〳〵としあんし、御いきとをり御もつともに候さりながら、此おこりと申は、よしちかにいしゆは候はす、君ないしをこひかねたもふゆへなれば、それがしくつきやうのてだてを存よつて候、此ほど中宮さま御いたわりにつき、ないしおり〳〵とのゐ申さゝるよし、さいはひ中宮の御かたの、あわのつほねと申は、それがしがをばにて候、内々いひふくめ候へは、つほねを召れ御頼み候はゞ、何とぞたより有べきと存よつて候と申上れば、たゞしげ大るつかぎりなく、あつはれなんじは、しあん深き物かな地さあらばつほねを頼まんとおくりひそかにつかいゆりをたてにけり、つほねもとよりはるちかゞみゝをうちたる事なれは、つかいと打つれきたりたり大しやうよろこひまつ〳〵こなたへとしやうし、小こるになつて申やう、扨すはふのないしをせひわがつまにこひうけんと思ひつめたる所に、よしちかにとられ候事、それかしが心のうち思やりたまふべし、きけば中宮の御いたわりとて、内侍よな〳〵御とのゐ申よし、何とそ御身のはからいにて地ないしがねやへそれがしをしのはせてたひたまへひとへに御身を頼ぞと、さま〳〵のひきで物をるさせつゝふしよにしみしみとぞ語らるゝつほねじすへきやうもなく、さりとてはかなわぬこひに御心をつくさせたまふいとをしや、みづから心をあわするうへは、しのばせ申

は安けれ共、中々なびき申まし、此うへはみかどの御すがたにまなひ、御しのひあれ此ぎはいかゞと申けり、たゞしけ何のしりよもなく、誠にこれはよろしきてだてかな、さりながらみかどのぎよいかんふりをいかゝせん、なふそれこそわらはに御まかせ候へと地やがてきよいを取よせ、さあらは是に召れ候へ、心得たりとてもつたいなくもおくへんしか間にゅりそくたいしてはやあはるちか何とみかどによくにたかつぼねいかにと立さはぎ、すは此こひはしやうじゆぞとよろこひあふ事かぎりなし、つほね是を見て上いろあわたゝしや何事ぞや、人にしられてせんはなし地さあらばこなたへ〳〵とのり物にのせ申て、きさきの御殿にしのひける三重心の内こそ上ふかくなれ、さる程に地かくてたいりには中宮の御いたはりとて、御まへちかき女ばうたち、中にもすはうのないしは、御いとをしみふかきゆへ、つまのよしちかはからいにて、御とのゐにあがらるゝ、中宮御きげんはなはだしく、夜ふくるまで御物語あそばされ、ないしは是にてとのゐあれとよるのまのまふけ迄、念頃に仰付られ ふし御まへちかふぞやとらるゝはすでに其夜もうしみつ斗の事成に、あわのつぼねは忠重を、帝のことくに出立せ、ないしのまくらもとにみちひきて、立よりひそかにともし火打しめし、みかどゝしらせん其爲に地中宮さまの御いたはりゆへ、ないし是に御とのゐ申され候、君御心をつくさせたまふうへは、とかくゑいりよにしたがへ申さるべし、わらはは御いとまたまわるとて下ふしかたわらにぞ入にける地はことないしいまだめもあはで、此よしを聞たまへ、こはみかどぞとむね打さわきかつはとおき地あらなさけなやをつほねさま、もはやぬし有みづからに、御道引はなに事そとあれば いろあゝおとたかし心なや、たれあつてまろが心にしたがわさらんや、思ひくらすも物うさに、局に心をあはせつゝ、是迄來りてありけるぞ、ないしいかにとありければ、こはもつたいなきせんじかな、よこそまつせに及ふ共、日月はちにおちたまわす、御いらへ申あけんもおそれ也、十せんの御くらゐをたもたせたもう御身にて、かくはしたなき御ありさまわなに事そや、はや〳〵くわんぎよなりたまへ、それ〳〵人音のきこへ候 いろふしなふ歸らせたまへとありければはことおゝことわりやさりなか

らたとへ事にはあらねとも地むかしやふめいてん王は、玉代の姫をこひかねて、いつしかていをふりすて、心つくしに身おやつし、さんろがくさかりぶるとて、よのことわざになりたまふは、こひゆへにてわあらさるやしへ思ひいりろのこかれふね、ささのをさゝの一よはさて、此こひかせになひけおふなの花心ふしひらに〳〵とのたまへばないし承り、ろいりよをそむき申さん事、おゝそれおゝく候へ共、君の仰は皆いつわりにて候そや、誠さやふに思召は、年月御みやづかへ申せし時、かことばかりの御なさけも有べきに、其時はさもあらで、今よしちかに給りて、ものゝふのつまとなりしみづからを、かゝる仰は何事そや、せいけんの君として、かゝるふ義は有べからず、あゝもつたいなや、上にかゝるふぎあれば、下のみだれさぞあらんとふし大にはぢしめたまへけるこたうりにつめられことばなく、げきりんのていにみせ、此上はまろがふぎをふるまいて、天うんまさにつきはて、國はやみともならはなれ地あまのいわとのあけくれに、思ひにたへなばいかにせん、我十ぜんの身と成りて、こまもろこしの人をこひなばせひもなし、我ちやうのうちにして、わういにまかせぬ事やある、あまりつれなきふせいやな、いざこなたへと、ないしのそでを引たつる、ないし今はせんかたなく、まもり刀をひんぬいてたゝ一刀ととひかゝる、たゞしげ大きにどふてんし、ゆるしたまへ申さじとふしあとをもみづしてにけにけり、内侍なおもあまさじとおつかけしが、其行方をみうしない、おゝさも候はん、よのつねの女と思へたふなよ、いかにみかどのぜんじ也とて、ひとたびぶしの妻となり雨ふにはまみゆまじ、よし此上はとてもゆるしたもふまじいろおんかん

あゝうらみありやさりとては、まづ我つまにないだんし、とにもいかにもなるべきと、ひそかにしゆく所に歸られけり、あつはれ女人のかゝみやと、きく人ごとにをしなへさて、かんせぬものこそなかりけれ

第三

去程に地かくてすはふの内しは、すこ〳〵とやかたにかへり、つまのよしちかにたいめんしきん中にてのみかどの御不義、一々に語りたまひ、いかゞはせん

あさましやと（なきふしなみた）をうかへたまへけり（ことは）義近大にをとろき、扨も〳〵たうぎんは、けん王とこそ思ひしに、かやうのふぎはなに事そ、たゝそれがしおいいかひなく思召さるゝゆへなり いろ〳〵口をしやてきたいせんやうもなし、只はらかき切て思出にせんと仰けれは地なふふかくなり義ちか殿、わらわもたうざにきん中にて、とにもかくにもならばやと思ひ定め候へども、たいりにてむなしくならば、とやかくとさたをとげ、もつたいなくも我々ゆへ、みかどの御ふきをあらわさんは、みやうがもいかゞ恐ろしく、罷帰りて候也、何と御しあん有へきぞや（ふしはるよし）ちか殿とそ申さるゝ（ことは）義近たふりをしごくして、あつはれ御身は女とはいひながら、りにかないたるやさしさよ、のたまうごとく都にてしがいせは君の御不義かくれなく、ぶどう不義のみかどと、いやしきしづのみんかんの、口すさみになし奉んは、かへつてちうなし、此うへは何とぞみかとの御ふぎをつゝむ事こそちうせつなれ地うや〳〵しくもみかとの御ため（本ノマヽ）に、たとへば此みをきめはとて、おしむへき道ならず、なまなか都にありては、けきりんの上、いかなるなんだいをか仰付られん、ひそかにりやうないへまかり下り、せけんのさたおうかゝふべしと、扨かつわかをはしめ、はだの親子けらいせう〳〵ひきぐして、しのびやかに都を出三重いづもの國へぞ上くだらるる、是は扨をき地あくじせんりをはしるならい、たれそうするとはなけれ共（ことは）よしちかの都出、きん中にかくれなく、八まん太郎よし家を召れ扨も義ちか御いとまもこわで、りやうないへ下ること、きやくしんにうたがいなし、しんしの間知ぬ事はよもあらし、ぎやくしんのいしゆきつとそうもんあれとのせんじ也、義家元より思ひよりなき事なればさん候義ちか國へ下り候事、かつて存せぬ御事にて候御いとまを仰たまはらでかいにまかせて候上は、けきしんにうたがひなし、ちよくじやうにて候はゝ、がうべをはねてぞきりんを安んじたてまつらんと、つゝしんでそうもん有、おふ〳〵扨はじつふきはまつたり、いそぎうつてを下さん、よし家はしんしの事なれは、先此らつきよ迄へいもんおいたさすべし、扨うつてには平家の大将いなばのかみに仰付らるゝ地正もうちよくいをかうむり、くわんぐんを引くして三重うんしう

さしてぞ上くだらるゝ、扨其後に地むざんなるかな義ちかは、うつてむかふよしをきこしめし、もとよりねがふ所也、きやくしんにとりなし、それがししがいをとくべき也、しかるうへは世上のとなへべつぎなし、御身は命をまつとうして、あのかつわかをやうゐくし、じせつをまつてうんをひらき、我が名せきをつがせてたべとかんなみだながらにのたまへば、きたの御方聞召仰はさにて候へども、是皆わらわがゆへなれはみつから一人むなしくならば、わけてしさいも候まじ、御身さまをさきたてゝいかでわらはが長らへん、うらめしの御事やとなきふしくときなげかせ給ひけりは時にかつわかおとなしくも、なふ心へがたき仰やな、こなたにをかせるつみなきに、いかにせんしのうつてなりとも、命をかぎりにたゝかいて、かなわぬ時のじがい也地おちさせたまふな母上さまとふししきりにちからをそへたまふこと よしちかりつふくかぎりなく、やあこさかしやかつ若、汝いまたをさなくして、物のだうりもわきまへず、父がことばをいはいするでういはれなし、又御身もよつく心得たまへ、それがし都を立のきしは、君のふぎをつゝまんため也地我とだうりをあらはしなば、みかどの御ふぎかくれなく、ひだうの君とよはれたまひ、まつだい天下のあざけり、かつうはこなたのちじよく也、其身をすてゝおゝそれながらみかどのふぎをつゝむ也、かくあきらけきだうりをもしらて時をうつすは何事ぞといろ大にいかつてのたまへば地みだい力およばずしてけにあやまつてさふらふ、誠にけいしの中といひ、かれ是のかれぬ御事也、其うへ御身さま命をすてゝみかとの御ふぎをつゝみたまふ、此上は心安く思召せ若もろともにおちゆき申さんなきふしさらば〳〵との給へばことおふ〳〵たのもしや、さらばとふ〳〵出給へと扨はだのおやこをめされ、わとのとしもおひぬれば、某がさいごをみとゞけよ、五郎わいまだとしわかく、すへたのもしきものなれば、ともなひておちゆくべし、天たうまことを照したまはゝ、よもやすてはてたまふまじふしはやとく〳〵とそ仰ける、おやこともにしごくして、いぎに及ばんやうもなく、おうけを申立ければ、よしちかなゝめならずして、さあらばともなひ立出よ、何とぞうんをひらきつゝ、こせをともらへかつわかよ、ちきりくちずは後のよはなきふしかな

らずむまれあふべきそ、みだいはとはうにくれたまひ、こはそも何のゐんぐわにてかゝるうき身となる事そ、又かつ若にとりついてなきふしたをれふしてそなきたもふ、はだのおやこも、さながら涙をとゝめかね御ことはりやさりながら、時刻、うつしてゐきなしと、さま〳〵いさめ奉れば、せひなきあかぬわかれのてい三重あはれとはぬ上人ぞなき、かくて其後いなばのかみ正もりは、ぐんせいを引くしてうんしうにおしよせはときをとつとぞあげにける、され共じやうちうにはしつまりかへつてゐたりけり、正もりふしきに思ひ、一ぢんにかけだし、そも〳〵爰元へ押よせたる大將は、かつらわらのこうゐん、平の正もり也、せんしをかうふり、まかりむかつて候、じんしやうにしかいあれとかうしやふによばゝつたり其時よしちか、いつ〳〵よりもはなやかに出立て、はだの一人御供にてもんをひらかせ出たまへはよせてはあきれてゐたりけり、よしちかとちうにかしこまり、先以て是迄の御はつかう、ちよくちやうとはいひながら、御くらうせんばんに存候したがつて某此たびのろうじやうは君をうらみ奉にもあらすいさゝかくあんにかなわぬ事有てわさときやくしんに取なし、うつてを相待候なり、天たうあやまりなくんは、思ひ合させたもうべし我身におかせるつみなければ、いくさをせんやうもなし、たゞ〳〵是にてせつふくいたし申さんとあれは、正もりおとろきたまひ、是はあんのほか成御事や、御身にあやまりなきならば、先々しかいをとゝまりたまふべし、きよいかたしけなく存候さりながら某、うんめいつきはてゝ、しなでかなわぬ本ノマヽちにて候、侍はなこそおしけれ、是皆君へのちうせつなれば、あゝおしからぬわが命やといひもあへすはら十もんじにかき切て、はだのいかにとのたまへは、やがてくひを打おとし、其まゝ御くびを正もり公へ相渡しおの〳〵たのみ候とおなしくはらをぞ切にける地此人々のさいごのていふし口おしかりけるしたいなり、正もりちからおよはず先此むねをそうもんせんと、諸ぐんせいを引くして三重都をさしてそ上のほらるゝ是は扨置、地こゝにあわれをとゝめしは、北の御方かつ若殿にて下ふしよじの哀れをとゝめたり、夢共わすうつゝ共、わかすをさらにわきまへず、ひせんのこまにしる人有てふし暫く月日をいろかわりおくら

るゝ、ある時かつ若仰けるはいかに母上さまたとへ父ごのゆいごんなれはとて、思へば〳〵口をしや、此上はしのびて都へ上りつゝ、まさしきおやのかたきなる、みかとを一たちうらみ申、とにもかくにも成べきと、思ひさだめ候そやふしおいとまたべとそ申さるる、母は此よし聞召、尤なりさりながら、父よしちか君のふぎをかくさんため、命をすてさせたまひしを、みかとをあやめ奉らばけつくこなたのひぎならんことはいや〳〵此比人のの語りしは、むかしいんのちう王とやらんはあく王成しをほろほしよをおさめたる物語りを聞て候地わが身ぶわうにあらねとも、おやのかたきのあく王を、うつてすて、今のむねんをはらすべしとのたまへは、おゝいさきよしかつ若よ、一てんの君をかたきにもつうへは本よりとげん事かたし、わらはがためにはつまのかたき、いざや都に上りつゝ、共にうかゞひ申さんと、おやこすゝませたまふにぞ、としひともせんかたなく、とゞめ申さんやうもなく、さあらば御供申べし、とてもくちにしこの身なれば、都にてはな〳〵しく、思ひのまゝにうち玄にして、なを後のよに殘し申さんとたがひにいさめいさめられ三重くり上たびの玄やうぞく止なされける道行上いろふし、あらいたはしやみたい所や若君は下としひで一人御供にてやう〳〵わひてすみなれし、こしまを出てはる〳〵と都のそらにおもむきたもふいろおこゝろのふし内こそさつまふしあわれなるよの、それよのつねのならひには、おやのかたきをうちおふせ、ほんまうとぐるとも、かくはふし二たひいろおんよにも出るとやもろひわれらはいか成因果にやし下ふ身にも及ばぬいろおくものうへ十せんていゐを心がけのかるべきやうあらさればいろをいとゝ思ひや増るらん、かく立いろ出るも夫のためひとへにむじようのたび衣下いつきてこゝをうしまどゝ、聞に付てもうらめしく下一玄ゆはかふぞ聞へけるふしなみまより引下ふしみゆるり中くり上こしまのふし島かくれふしゆくそらもなし君にわかれてと申ゐいしすてつゝゆく程にふしやたのうらにもつきしかは是そぐせひのふなよばひ下いつかうきよの望とげ、こがねのきしに至らんと下思ふ心ははる〳〵とふしみれば上ふし四國の下山つゞきいろふしきりにまじわりあから島、にかふでそめてうつしたりけんゐしまをも下心ほそくもうちながめ下こゝやじつさうむろのみな

と上おくり出いるふしふねゆりのかす〳〵に、いそくたびぢの道すがらいろふしまず玄よ玄や寺をふしおかみ、ひめぢをゆけばいなみのや中う八丸づかをあとにみて、思ひぞ出るくものうへひろ其まじわりの引有し時はたつねもとめしきうせきも地今はくるしき心の月の下ふしかきくもりふしみもわかすあかしと聞ば夢さめて引取三重すまのうへのにな上ふしくつるのん上が子を思ふ下道にまよふなる、我はまさりてふしこがれこがるゝいろかわり身のゆくゑ、たれにとはれんいそのかみ下ふりにしやとを尋れば上ふしこれそけんしのふしわりなく引上下きんもおほろ月よになを立て、みとせさすらふなみまくらいろふしよをうら風にさそはれて下我はよすからねを立てふしなくからさきくり上かん引やはやしざきいろすこしはつみもかるも川下ついにはめいど黄泉の、みつせ川ぞと打渡り、ひやうごのうらやあくた川、いくたこやのにすだく蟲ふし是もうきよをいろうらみてやなくかのふ下ふしなかむればあのぬのびきのたきのしらいとくり返しふしたぎりておつるろ引い玉水は袖にあまれるいろ涙の露よ下かんふしあゝほさじやつまのいろかわりかたみなり、なには入ゑのよしあしも下むかし語りになりはて、へがたくみゆるよの中になき引ふし美やましくもすみのゑのあけのいろ玉かきあさやかに、いかにかつ若あれを見よ、四しやのおまへのかみ松のひらくふしゑたもさかゆるわかみとりふしいくはるあきをいろかはしかさぬらん下ふしゑぐちかんざき打過て、袖に浪よるなきさのゐん下又あふ事はかたの、原、けふを限りと思ふにぞなきふしなみだはさらにとゞまらず、山ざきせんけんせきとのゐん扱いわしみつのかたをふしおかみ、こゝ我等が心すみいろにこるにこらぬか引取三重神ぞしるらん上ふしおとこ山もろふししよ神しよふつもあはれみて、かつ若かゆくすゑを、よきにまもらせたまはれと、ふかくねんじてゆく程にひかはやこゝの下へにそふしつきたまふしとにもかくにも此人々の御ありさま、是ぞ誠によの中の、ものゝあわれは是なり、たゞ是なるはとみな、かんせぬかんいろものにそなかりけれ

第四

かくて其後地きん中にはくげ大臣を召れ聞は此頃らく中に、めつらしきけいしや有て院の御所へも召れ

たる由、ちんも所望に思ふ間、こと〳〵ぐ召よせよ、もろみちちよくちようかうふりて、六ゐの臣に仰付られ　三重一々次第に上ふれにけり、是は扨置きしうしう三人の人々は、五でうあたりにやどを取事のやうすをうかゞひたまふが、此御ふれを聞召（こと）いかにとしひで今の御ふれこそ、本望とぐべきずいさうなれ、何とぞちりやくをめぐらして、御もんの内へいらん事を、あんの内と思ふなり、きよくてんにみたれ入、おゝそれながらぎよくたいを一たちうらみ、此しうしんをはらすべし、としひていかにと仰ける、こはいさきよき仰かな、其ぎにて候はゞ、いそぎ御出候へ、みだいさまはにによきの御事なれば、御供申てあしかりなん地しのびて出させたまへやと、しうじうひそかにないたんして　三重だいりをさしてぞ上あがりける　ふしきんりになれば（こと）番のさふらいに近付、我々はかるわざひじゆつのめい人、おふれによつて参り候、ときのふぎやうくらんどのかみ是をみて、さあらばたち刀を是にをきてとほり候へ、心へたりとあひわたし、御もんのうちにぞいられける、爰に又らう人一人罷出、某はせんじつのめい人しんへんきどくをあらはし候、くらんど聞て、それこそときの御なぐさみとてやがて、御まへに出しつゝ、有ししだいをそうもんす、其時らうじん、てい上にかしこまり、折節ていせんにかれたるこほくのありけるを、ゐんをむすんでかければ、たちまち花こそ咲にけれ地みかとをはしめくげ大臣、是はきたいのためしやと　ふし一どにかんじたまひけり（こと）其後らうじんかさねてそうもん申やう、只今のせんじつを、ふしきに思召さるゝかや、是よりふしぎの御さ候は、召よせられしげいしやの中に、みかどにやしんのもの有て、ぎよくたいをねらひ候、よつく心へたまへやと地たちまちしんたいをあらはし、われは是わうじやうのしゆごじんわけいかづちの神なり、とて　ふしこくうにあがらせたまひけり、くげ大臣大きにおどろき、みかとをしゆごしにけ入たまふ（こと）かつ若としひでこはあらわれたりと、御まへしこうの侍を取ておさへやがてたちをうばひ取、くひ一々に打おとし、たゝ今みかとをあやまつぞおりあへやつとよばはつて玉でんさして切て入地きん中にはかにしんどうして　三重うへをしたへと上返しける、され共爰に（こと）しゆごの

大しやう、いなばのかみ正もり、此よしをみて、やあらうぜき者は二人なり、しかもじやくはいなるやつばらなり、てがらしだいにうち取べし、承り候と、さきをあらそひ打て出る、其中にほんまの三郎諸人にすぐれはせ出て、やあらうぜき者はいつくに有そ、いでいでしやうぶを決せんと、大ごへ上て切て出る、としひで是をみて、人多き其中に一人なのつて出るこそ、あつはれゆゝしきさふらいかな、しさいあればなをばつゝむぞ、参りそふとついぢのかげよりつつと出、すきまもなく切てかゝる、ことばにはさういして、御めんあれといふまゝに、取て返しにげけるをおつふせ首を打をとされ、あしたのつゆとぞきへにける、此いきほひにおそれをなしふし一どにさつとぞ引にけるまひめされ共爰にあたちのさへもんときしけとなのつて、いてそも一てんの君にゆみひくくせものに、けんざんと打て出る、かつ若つつとかけ出て、くせ者こそは是にあれ、てなみの程をみせんとて、とひちがへはたときる、ゆんでのかいなを打おとされ、御もんの内へぞ入にける、二番にはおふしうむしや、すとうげんないありしげは、としひでにわたりあひ、こしのつがひをうちはなされふしさうへさつとぞたをれける下ひろひ二番にはたくまの兵衛、いさぎよしひくなかへせと打てかゝる、やあかゝり有はたらきやと、ゆんでにあいつけ、かいくぐつて、おかみ打にてうど切、まつかう二つに打われ、かしこへどうどたをれけり、四番にはたき口ひごのぜんじ、かつ若にわたりあひ、やあこざかしきわかものやと、ほうおつ取のへてぞなひてかゝる、かみをうては下へぬけすそをはらへはとひあがり、つつと入てはたと切、ゆんでの肩先より、めてのちの下まで下はらりづんと切ておとす、五番にはむらゐの太郎となのつて、大だちをさしかさしふしつちも木も上ふ皆大君の國なれば、天ばついかでのがるべき、あますましと打てかゝるとしひで是をみておふ御へんはよつくだうりをわかつおとなしさよ、かくみだれたるよの中に、御身かやう成だう人はし引ふなか〳〵人がきらふなり、いとまをとらせん是みよと、大だちをまくりたていきをもつがせずほつ立る、むらゐたちをはらひかね、うけだちに成てしりぞくを、たゝみかけ〳〵大ぢへどうと打ふせて、たちに引かけなげければふしみぢんに成てぞうせにける

六番のたひにはたゝの九郎となのつていかにかたがたすでに日もはやくれがたの、ものゝわかちもみへわかぬに、ばんしよ〳〵のてうちんあげよとよばはつたり、心へたりとて我も〳〵と出しけり、只日中のことくなり、かつわか御覧じてゐゝにつくいきやつめがいひ事やと、そつとかけより、うしろよりほそくびちうに打おとせば、やあみかたにもてき有ぞ、ゆだんするなといふまゝに、どじ討してこそはてにけれ七番には川のの四郎となのつて、としひでにわたりあひ、ゆんでのたかもゝ打おとされ、たかばひしてこそにけにけれ、八番にはあんまの六郎たゞずみ、かつ若に切てかゝるを、うけながしうけはらひ〳〵みたれ入て取てをさへ、くびかききつてぞすてにける九番のたびには正もりのこうけんおがたの三郎これよしとて、大かうのつはもの、打ものとつてのはやわざなりしが、此ていをみるよりもいろゐゝなまぬかつたるはたらきや、たとひかたきははんくわい成共、某一人にはよもこへじと、くわうげんはいて切て出る、とし秀是をみてあらぎやう〳〵しやこれよし汝がはたらきもかねては聞て有けるぞ、又某かはたらきみよと、たがひにことばをかけかはし、さんをみだしてたゝかひけり、され共おがたはあらてなり、としひではつかれむしや、ひかけにたちのいろをみそんじ、とひかへつてうつたちを、うけはつしまつかうに討こまれ、たちまちまなこ暗んでみへわかす、なむ三ぼう口をしやと、心はたけくいさめ共、次第にしやうねみたるれば、せんかたなくもたをれふし、おきあがらんとせしところを、やがてくびを打おとす地つもるとしは十八歳ふしおしまぬものこそなかりけれ此いだはしやかつ若は、はむしや三ぎにへだてられ此由を聞召、今ははや是迄と、玉殿さして切て入、いつくが玉ざて有るやらんと、むこふをきつとみればみすの内にとうみやうほのかにうつりけり、やあこれこそ玉ざにうたがひなし、みかどの御うんも是迄ぞと、みすのうちへ入らんとすれば、はくはつたる老人一にんあらわれ、かたじけなくも玉でんなるぞ、是より歸れと有ければやあすいさん成いひ事や其玉でんこそ望なれ、うろたへけがしてこなたをうらみたまふなと、つきのけきつて入らんとす、むかうさまにはたとけたをし、すがたを引かへにらみ付たる有様は、

身のけもよだつ斗なり、かつ若こは口おしやと思ふにひとしく、五たいすくんではたらかず、おふさぞ有らん、我はこれけふの御番、とがくしの明神なり、らうぜき者をくみとめたり、おりあへやつとのたまひて ふしけすがごとくにうせたまふ、若君力およばず、扨々せひなき仕合かな神りきにからめられたりと、ぼうぜんたる所へ、大ぜいやがておりかさなり、てどりあしどりなわをかけ、くわんはく殿へぞいたりける、神りきのふかしぎ、きたいせんはん中〳〵に扨かんせぬものこそなかりけれ

第五

扨其後地思ひの外成さうとう有てきん中大いにさはきしが、神力のおうこにて、やす〳〵とからめ取、ていしやうに引すゆるくわんはく御らんして、いまだじやくはいの身として、いかなるゆへに君をうらみ奉り、かくらうぜきをふるまひけるぞ、きつとそうもん申上よ、さん候某は、つしまの守よしちかが一子かつ若丸と申者にて御ざ候、おやにて候よしちか、其身におかせるつみなきを、むたいにきやくしんとごうし、うつてを下され候ゆへせひなくじがい仕候、よしちかいやしくも、けんひいしべつとうにふせられ、天下の事を大せつに存る身が、何の望有てぎやくしんをおこし申さん、おゝそれながら玉たいに御覚へ御ざ有へく候、ふたうふぎの御君そと萬みんさみし申なは、彌口おしかるへし、せひをかんぜす都を立のき、しせつしだいにくらさんと、しのひていつもへ下り候、まつたく是きやくしんにあらず、みかとのふきをつゝまんため、御ちうせつに都をひらき候所に、御なさけなくもきやくしんに取なし、御せいばつは何事ぞや地しかればみかどはげんざいのおやのかたきなり、おゝそれながら一たちうらみ奉りうき世の望をはらさんと存つめて候へ共、君の御うんつよきにや、神力にからめられ、あへなくいけとられ候、神力のおうごなくんば、玉たいを一たちうらみはらかき切てしなん身の、なんほう口おしく存候とふし涙をながし申さるゝみかとゑいふんましまして、ちんかふきをなしけるとは、さら〳〵もつて覺なし、いしゆをつふさにさうすべしとあれば、かつ若聞てそ

れりんげんはあせのごとしの御ことはに、にあはせたまはぬそらことや、母にて候すはうのないし、五ていせやと申りよしくに罷有候召よせられ御たづね候へ、しからはじつふあきらかに候べし、くわんはく聞召、それ〳〵急て召よせよ、地かしこまつてやどにゆきりおくやがておまへに引出すばくわんはく御らんじていかにないし、かつ若玉たいをあやめ奉らんと、らうぜきをふるまひしに、召取て事をとふに、みかどの御ふぎましますの由、たつてさうもん申せ共、玉躰に御覺なし、いか成事ぞすみやかにきつとさうもん申されよ、其時内侍涙をはら〳〵とながし地あゝ御なさけなきせんしやな、一とせ中宮さま御いたはり有し時、みづから御とのゐに參りしに、あわのつぼねのみちびきにて、わらわがねやにしのはせたまひさま〴〵かこたせたまひしを、おわすれさせたまふかや、みづからぶしのつまと成、とても兩ふにまみへじと御いらへも申さゞりしに、むたいのゑいりよちからなく、さしちがへんと存ぜしに、あはてゝ立のきたまふとて、御まもりをおとさせ給ひしを、後日のしやうこと存、ひろい置て候なり、是々ゑいらんにそなへたまへ、かやうのふぎをなしたまひ、とがなきものをうしないたもふ、かゝるうらみのかず〳〵におやのかたきとあのわかゝ、ねらひ申はことはりやとふしうらみ有げに申さるゝばみがとふしきに思召それこなたへと召よせたまひ、はあもつたいなや、此くわんおんはせんていよりつたはり、れいげんあらた成本尊なりしを山しなのう大將、しきりにしよもういたせしゆへ、たゞしげにゑさせしか、内侍か手にわたせし事いかさましさい有べし、それ〳〵たゞしけを召出せ、畏てやかて御まへに出るゝ、いかにたゞしげ此せんしゆくわんおんは、せんていよりつたはりてうほうのみほとけなりしを汝ふかく所望ゆへゑさせしか、内侍が手にわたりしふしぎさよ、有のまゝにそうすべし、たゞしげはつと思ひしかさはがぬていにもてなし、されば此御ほそんは、あわのつぼねしきりにしよもういたされ候ゆへ、あづけ置て候くわんはく聞召いや〳〵たゞしけ殿大事の御ほぞんをあつけたまふは何事ぞ、其上中宮のつほねの方へさやうのつうろいわれなし、それつぼねを召出せんぎあれとぞ仰けり、つぼねかくとはしらずして御まへに出ら

る丶、もろみち仰けるは、此守り御ほぞんすはうの内侍の手にわたる事、みかどふしきに思召れ、御せんぎの上にて、御身たゞしけ殿より所望いたされ候よし其つうろさへ憚かりあるに、あまつさへ内侍の手に渡り、みかど御不ぎのしやうこなりとて、たつてそうもん申ゆへ、ゑいりよ何共もだしがたし、其ゆへあらばきつとそうもんいたされよ、つほねは思ひよらされば、なふたゞしけ殿、何事をのたまふぞや、みつからにおいてふつうに存せぬ御事なり、いつみつからにあつけたまふぞ、いづくで所望いたしけるぞなふ大将殿とぞ申ける、扨々こさかしきいひ事や、あづけたるにまがひなし、今さらいへんはかなふまじ、其時内侍申されしはいやとにかくに御ふぎのしやうこは、あのおつほねにて候、なふつゝまずそうもんしたまふへ御身みかとの御供申、わらはがしんじよに來りたまふを、きよくもなやとことはをかはせしを、何と忘れたまふか、なうこは何事ぞおそろしや、たゞし夢にばしみ給ひたるか、わらははさようの覺なし、くわんぱく聞召、いや〳〵せんぎはむよう、兩人の内にひと方ならぬとが人有、先みかとの御ふぎ、まつたく玉たいに御覺なし、いかさまわかきぐぎやうの内に、内侍に心をかけ、玉たいに其身をまなび、しのびたるにうたがひなし、このしやうこ有うへは、たぶんは大将殿成べし、扨みちびきはあわのつぼねにきはまつたり、こひにうき身をやつす事、いきとしいけるならひとはいひながら、一天の君をひだうのさたになし奉る事、せんだいみもんあくぎやく、てうてきてんまのわざならずや、某がさつする所はちがうまじ、さあまつすぐにはくでうあれと、めんがくすしをいらゝげ、はがみをなしておはします、こは仰とも覺ぬものかな、某におゐては存もよらぬ御事なり、又此御ほぞんはめいさくにてましませば、もしとばせたまふもいさしらず、もつたいなやとそ申さるゝいや〳〵ちんじたまふもかひあらじ、かやうにりひあきらかなれ共、あらそふうへは力なし、先きはまつたるとが人はつほねなり、それ〳〵てい上に引出しがうもんせよ、畏て引立る、其時つほねせん方なく、いや此うへはがうもんにおよばず、くわしく申上べきなり、誠は是成たゞしげ殿、ないしをこひかねたまひ、わらはをたのみたまひ、みかどのていにもてなし、しのびたまひ、

ひて候地其しやうこはみつからなり、女のぎにて候へは、とがをゆるしたまわれとなかしふるひはなゝき申さるゝ、みかとをはじめくわんぱくこうはしんつうじざいの御ちゑやと、一とにあつとぞかんじける、みかとけきりんかぎりなく、夢にも知らぬ事共を、ちんがふぎに取なし、さしもちうこうのよしちかを、うしなひし事、せんだいみもんのくせものなり、さりながらかうゐといひ、又は女の事なれば、しざいをなため、きかいがしまへながすべし、承り候と、やがて御せんを引立る、天ばつこそおそろしけれ、其後八まん太郎を召れ、よしちかゝしやうがいくゆるにかひなし、ちやくそんなれば汝か家をつかせよとて、六條の判官ためよしとめされ、天下のぶしやうにふせられける、ためよしの御いせい、なをけんじの御はんじやう、せんしうばん、せい、めてたしとも中〳〵申斗はなかりけり

延寶五年十一月吉日

以正本新板行也

第一

治承宇治橋合戰賴政最後

さてもそのゝちこゝにほんてう八十せたかくらのゐんのきようかとよらくやうこのゑかわらにひやうごのかみよりまさとてゆみとり一人おはしますせんぞをくはしくたつぬるにせいわてい第六のわうじさだずみしんわうに二代のべうゐいたゞのまんぢうかちやくなんせつつのかみよりみつに三代のこういんみかわ守よりつながまごひやうごのかみなかまさか子なり七十五にて三ゐをゆるされしゆつけして源三位入道とてことし七十七也ゆみやうち物かだうのたつしやそのなのほまれよにたかししそく二人もちたまふちやくしいづのかみなかつな次男源太夫のはんくわんかねつなとてきりやうこつがら人にこゑかたをならぶるものもなしさてもその頃ちやくしいづのかみが下人とう國に有けるか八ヶ國たい一の馬とてかけなるむまのふとくたくましきかきよくしんたいにしていつもつ成をいづのかみにまいらせたるが所々にほし有けれはほしかげといひけりなかつな是をひさうしてぶしたるものゝたからにはよきむまにすぎたる物何かはもつて有べきとてあだにも引出る事なければ木の下といふなを付てしにひしたてかひける程に其頃又平家の大將さきのう大將むねもりきやうは馬の事を聞およばれ使をもつてこはれけれ共いづの守ふかくおしみて出さゞりけりおしむもことはりなりぶしのたからにはめいばにすぎたる事あらじとおよぶもおよばざるも皆のぞみをかけぬはなかりけり扨も其頃う大將むねもりきやうと申は平のあそんあきのかみきよもり入道の二なんなりちやくしにてわたらせたまひしこまつとのせいきよならせたまひて後むねもりのそうりやうとなつて天下のせいむをつかさ取にきあるとき御前にはざい京のしよ大名其外家の子らうどう共をめしよせられいかに方〳〵扨も此頃いづのかみなかつなかもとには東國よりのほりたる一もつめいばの有よしを聞つかひをもつてこいけれ共いなかへ下してなきよしを返事しけるか何とめん〳〵其馬は見たまはざるにや方〳〵いかに

と仰出されたりとうざ有あふ人〳〵ふしきや其むまはおとついもゆあらひいたしきのふはにはのりしけるが又つぼの内に引出して候ひつるなどくち〳〵に申さればう大将是を聞大きにいかつて扨はつよくおしむとおぼへたりにくしさらばこいとれとて日の内に二と三ど五と七どすきまもなくしきりにこそはこはれたれ然ればいづのかみ我だにもなをみあかざるにふとくしんなりと思へはあしくおしみてついに出さつ一しゆかくこそよみおくりけれ◎こひしくはきてもみよかし身にそふるかげをはいかゞはなちやるべきとかやうによみてそおくりけるきの下かけの馬なり我か身のかけにそいけるにやいとやさしく聞へけれ共一門ほろひてのちにそはなつましきかけをはなちてかくほろびにけりうたによみまけたりと皆人ことにぞ申ける去間父の入道なかつなをよびて何とて其むまをはつかはさゞるぞあの人のこいかけたらんには金銀をまろめたる馬なり共参らせてはいかが有べきたとひこいたまはずとても世にしたかふならひはついしやうにも参らすへき事なりましてさやうにこいたまはんをおしむべきやうや有其上馬といふはのらんがため成にかやうにかないにかくし置ては何かせんの有べきにとく〳〵其馬を参らすべしときやうくんしけるはなかつなも力及ず父入道のめいにしたかひ木の下を大将の方へぞおくりける去程にむねもりきやうかの馬をみたまひあつはれ馬やよき馬哉され共あまりになかつながおしみつる心ねのにくければしよせんぬしめがじつみやうをよべとていつの守なかつなと云かなやきをさせ馬やにたてかひそれなかつなをこはくはうてそれ中つなかお引入（本ノマヽ）てしたゝかにつなきをけなとさま〳〵あくごんせられけるはおとなげなくぞ聞へける此こと猶もかくれなくいづのかみかくと聞より大きにおとろきりつふくして父入道のもとにゆきなみだをなかして申けるは口をしやなつなこそ（か脱スルカ）京都のわらひぐさに罷成て候きの下をはおしみとけんとぞんせしを御めいにそむきがたくして馬をはつかはし候ぬたとひむねもり心のそこにはおもはず共一たんれいきの有べき所にてさはなくしてあまつさへとうけたけのしゆゑんのせきにてなかつなにくつわかけよなかつなこはくはうてのはれなとゝあの宗盛の申けん事こんじやうのちじ

よく弓取の遺恨何事か是にすぎ候べき今は世に立廻りてもいひかいなししよせん宗盛かしゆく所にゆきむかつてかばねをさらすかさらずはもと取切てさんりんにかくれこもるか此外はたしあらしとてはらはらとなきいたりしはけにことわりとぞ聞へける三ね入道是を聞ことの外きしよくをそんして何條ことの有べき平家の物共かさやうのしれごとしける事こそやすからね命いきても何にかはせんびんぎをうかかふこそあらめと大きにいきとをりけれ共私には思ひもたゝすよしやすべきやうこそあれかまひて色にいだすなとてそれよりもしのび〳〵にむほんのけいりやくをこそめくらされけれ爰に又一ぬん第二の御子以仁の王と申は御母はとうぐう太夫公實のそくなんかゞの大納言季をのきやうの御むすめとかや三條たかくらにまし〳〵けれはたかくらのみやとぞ申けるさんぬるゑいまんぐはん年に御年十五と申しにこのゑかはら大みやの御所にてひそかに御げんぶく有けるしゆせきもうつくしくして御くもゆう（本ノマヽ）におはしますされば太子にも立御位にも付せたまふべかりしか共こけんしゆんもんゐんの御そねみによつてしこめられさせたまひつゝはるははなの下にてかたむく日かけをなげきくらしあきは月のまへにてあけゆくそらをうらみあかししいかくわんげんに御心をなくさめなを〳〵きり（さカ）に年月をすごさせたまひける程にすでにはやぢせう四年には御年卅にぞならせたまひける同卯月九日夜ふけ人しづまつてのゝち（し誤添カ）源三位入道頼政ひそかに此宮の御所に參てよしも山の物語を二ッ三ッ出しさて申されけること共こそおそろしけれたとへばきみは天せう太神四十八世の御へうゑい太上法わう第二のみ子にてわたらせたまへば太子にも立ていゐにも付せたまふべきにさはなくしてしんわうのせんしをたにも御ゆるしなくすてに御年卅まで宮にてわたらせたまふ御事御心うしとはおほしめされ候はすや平家はゑいぐは身にあまりあくきやうとしひさしく成てうんめい身にのそめりしそんさうそくしてうにつかへんことかたくみへ侍り當時いか成御はからひもなくはいつをかこせさせたまふべきつゝしみすこさせたまふ共ひにはあんをんにはてさせたまはん事も有かたかるべしはや〳〵（本ノマヽ）御むほんをおほし召たゝせたまひ候へさみりうしをは

なし下したまひなばよろこひをなしてはせさんすへき源氏共こそ國〳〵におほく候へとてゆびをおつてぞかそへける先京都には出羽のはんぐはんみつのぶが子共にいづのかみみつもとではのくらんどみつしけではのくわんじやみつよしくまのには六條のはんくわん入道ためよしか子にしんぐうの十郎よしもり是は平治のらんよりくまのにかくれいたりしが折ふし上らくして此頃京都にまかり候扨せつつの國にはたゝのくらんとゆきつな同次郎ともざね同三郎たかよりやまとの國にはうの丶七郎ちかはるが子にうのの太郎ありはる同次郎きよはる同よしはる同四郎平はるあふみの國には山本のくはんじやよしきよかしはぎのはん官代よしやすにしこりの判官よしひでみのおはりには山田の次郎しげひろあべの太郎しげなふ同三郎しけふさいづの太郎しげみつうらの丶四郎しげとをあしきの次郎しげより其子太郎しげ介同三郎しげたかきたの三郎しけなかせきたの判官代しげ國八しまのせんしやうた丶介同二郎時きよかいの國にはへんみのくわんじやよしきよ同太郎きよみつたけ田の太郎のふよし同弟にか丶みの太郎とをみつやすだの三郎よしさだ一條の二郎たゝより同弟に板がきの三郎かねのぶたけ田兵衛有よし同弟にいさわの五郎のふみつおかさはら小次郎なが清しなの丶國にはおかたの官者ちかよし同太郎しけよし平かのくわんじやなりよし同太郎よしのぶたてわきせんじやうよしかたが子きそのくわんじやよしなかいづの國にはさまのかみよしともか三男右兵衛のごんのすけ頼朝ひたちの國にはためよしか子よしともがやうしにした太の三郎せんじやうよしのりさたけの官じやまさよししそく太郎たゝよし次郎よし宗同四郎よしたか五郎よしすへむつの國にはよしともばつしに九郎くはんじやよしつねとて是らは皆六そん王のべうゑいたゝのまんちうがこういん頼義よし家かしそんなり家の子らうどうかりぐせは日本國にはたれかはあひしたがはて候べきそれにむかしは大衆をもふせきけうとをもしりぞけをんしやうにあつかりしやくまうとけしことは源平何もせうれつなかりき然に當時はうんていのましわりをへだてしう〳〵のれいよりも猶ことなりわづかにかひなき命ばかりいきたれ共國〳〵のたみ百しやうと成て所にかくれいて侍るか

國にはもくだいにしたかい庄にはあづかりしよにつかへてくじさうやくにかりたてられよともいるもやすき事なし何かは心うく存候はんに君おほしめし立てうやうしをたに下させたまはゝかつうは奉公の忠を存かつうはしやくまうをとけんかためによろこひをなしよを日についてむらかり上ておごる平家をほろほさん事時日をめくらし候はしさる程ならは入道七十ゆうよ八しゆんに及年たけては侍れ共子共家人あまた持て候へは一方の御かためたのもしくおほしめされ候へしなげかしくも清皇のいつとなくとは殿におしこめられてきみも又御位に付せたまふべし是ひとへに御孝行の御いたりにてこそ候はんそれいせ太神宮も正八まん宮もしん〳〵めぐみをたれさせたまふべし天神ちぎもいかでかおほし召すつべきとしなをあらしあいをなしことばにはなをさかせて申上られたりけり心の内こそおそろしけれされ共宮此事いかゝあらんすらんと思召わつらはせたまひてしばしは御せういんもなかりしが其昔あこ丸大納言むね道きやうのまこびんごのせんしすへみちか子に少納言これなかとてすぐれたる相人の上手にて時の人相少納言と申けるか其人此宮をみ參らせ御位に付せたまふへき御相のましますと申たる事の有そ(れ)を今おほしめし出させたまひおりふし三位入道もかやうにすゝめ申されければされば然べき天せう太神の御つけやらんと御心ならすもひし〳〵と思召立せたまひけり御めのと子の六條のすけの太夫宗のふ御まへに有しかそも〳〵りやうしの御つかひたれかあひつとむべきと申されければ入道おつ取てほかの人ははかり有べししんぐうの十郎よしもり折ふし在京に侍れはかれを召れてしせつを仰ふくめらるべきかと申然へしとてやかてよしもりを召れことの次第をくはしく下知せられけれはよしもり畏て平治年中(本ノマヽ)よりしんぐうにかくれこもつてよるひるやすき心いかにもしてそくわいをとけ二たひ家門のはぢをきよめんと存る所に今けんめいをかうむるでうしかしなから身のさいわいに侍り一門たれかしさいを存申べきすみやかに東國に罷下て同姓の源氏年頃の家人共をもよふしのぼり候べしとつつしんで申上る時又入道りうじの御使つとめ候はんものかむくはんにては其おそれ有べしと申されけれはげにもとて當座にくらんど

になされてよしもりをかいみやうし十郎くらんとゆき家となのるゆき家家のめんぼくとよろこび則はやおいとま申てたちければ三位入道よりまさも一まづしたくに立歸りてしきりにむほんのけいりやくをぞめぐらされける誠以よりまさ源家に取てはちやくちやくなれは氏といひけいづといひたれかさみすべきなれ共よしなかりける御むほんを宮へすゝみ參らせけるしよぞんのほどのなげかしきともなか〳〵さて申はかりはなかりけれ

第二

三井寺へおちたまふ並のぶつらふせぐ事

其後かうし門を出ずあくじせんりをゆくとかやくまのゝべつとうたんそうひきやくを以て平家の事をつげ申やう扨も今度たかくらの宮の御むほんによつて源氏とうをさいそくして平家をほろぼし奉らんとてしんぐうの十郎義盛みやのりやうしをたまはつて東國に下り候なちしんくうよしもりにどういのよし承大ゑのほうげん御方としてしんぐうの渚におしよせ一日一やせめたゝかひ候へ共御方りなくしてすでにいくさやふれて候御ようじん有べく候とことのよしをつげたりけり清もり入道う大將大きにさはきいかつて其ぎならば時日をうつさすたかくらの宮をからめ取てとさのはたへうつすべしとて上けいには三條の大なごんさねふさしきしにはとうのへんみつまさとぞ聞へしふしには又源太夫の判官かねつなでわの判官みつなかなり此源太夫判官は三位入道の二なん成しを此人かずに入られし事は此たひ宮の御むほんを三位入道のすゝめられしといふ事を平家いまだしらさるによつてなりかくてはや兩判官仰をかふむりよもすがらうつてのようゐを三重したりけりされ共宮はかく有へきとはしろしめされずさつき十五やのくもまの月をなかめさせたまひて何のゆくへも思召よらさる所に三位入道のししやとてふみ持ていそかはしげに來りける御めのと子の介の太夫狀を請取御前に參りひらいてみるに君の御むほんすてにあらはれさせたまひてとさのはたへうつし參らすへしとて官人共かべつとうせんを承て御むかいに參り候いそぎ御所を出させたまひて一先三井寺へ入らせおはしまし候へ入道もやがて參り候はんとぞかゝれける宮

は此事いかゝはせんと思召わづらはせたまひて御心ならずたゝあきれまよはせたまひける爰に宮の侍に長兵衛のせうはせべののぶつらといふもの有折ふし御前ちかく候ひけるがすゝみ出て申やういたくな御さはぎ候ひそべちの事候まし只女ばうのかたちに出立せたまひておちさせたまひ候へはやとく〳〵とすすめ申せばさらばとて御くしをみたりかさねたるきよいにいちめがさをぞめされける介の太夫宗のぶはからかさを持て御供に參るつる丸といふわらわにうはさししたるふくろを持せてたとへはあを侍か女をむかへてゆき樣に出立せ是よりによいごへに三井寺へおちしのばせたまひ候へひころはそれかしもいつくのうらまても御供と存候ひしか共只今官人共か參りむかひ候はんに物一ごん申ものも候はざらんはむげに口をしく存候其うへ此御所にのぶつらが候と申事は上下皆よく存たる事にて候にそれも其よは有あはさるかをくひやうしてにけたる物よなとゝいわれんはべつして口をしかるべく候弓や取みはかりそめにもなこそおしう候へ官人共のよせ候はんにしばらく是にてあいしらい一方打破つて跡より參り候べしはや御いそき候へとかひ〳〵しくぞ申けり宮聞しめされて誠に申所はさる事なれ共なんぢにはなれてはいたくたよりなかるへしのゝすへ山のをく迄も來らん事こそほんいなれと仰下されたりけれ共のぶつらいつくにても今は君に參らせ侍るべしなからん跡まても君の御ため我ためよきなこそのこし度候へとしいて申たりければ宮も今は力及ばせたまはず我とてもいつまでもおほしめせば二たひ御覽ぜられん事も有がたし來世にてこそゆきあふべけれと仰もあへず御涙にむせばせたまふぞ有がたきのぶつらもたゝきへ入斗におほゆれ共かく心よはくてはかなふましと思ひ切何事かさまて有べく候ととかくいさめ奉りとくとくとて四五町か程おくりまいらせそれよりもおいとま給はり立歸りけりかりそめなからくんしんのながきわかれとなりにけり心の内こそむさんなれ去程にのぶつらは御所に歸てはしりまはりみくるしき物共を取したゝめ扨しやうぞくをぞしたりけるうすあをのかりきぬの下にもへぎにほひのはらまきをきゑふの太刀のみをは心へてつくらせたるをはいてくらき事もなき大かうの物なれば只一人中門の内に引

かへてあつはれ官人共か何百きよせ來共おそらくてにはためまし物をと思へは心もすゞしくして三條おもての惣門をもたかくらおもてのこもんをも供にひらひてよせくるかたきを今や〳〵と三重まちうけたりあんのごとく源太夫の判官かねつなでわの判官みつなか只今御むかいにまいりて候とう〳〵御出有べしとよはわつて引かへたりのぶつら大床に立て當時はしのびの御所に入らせたまひて此御所は御るすなり何事そそのしさいを申おかれよとそいひたりけるみつなか聞て何けに此御所ならでいつくへか渡らせたまふべき其儀ならば下へ共さかし奉れとぞ申けるのぶつら是を聞てきくわい成いなかけひいし共か申やうかな我君今こそかくおしこめられておはしませ忝も一いん第二の王子にて渡らせたまふを馬にのりながら門の内へ入をたにふしきの事とみる所にあまつさへ下へ共にさかせなど下知する事こそらうぜきなれ長兵衛のぜうはせべののぶつらか候そあしう參てあやまちすなとぞ申けるみつなか聞もあへずやあのおとこに物ないはせそたゝさかせと下知しければ承とて大せいのぶつらにめをかけ大ゆかにとびのほるのぶつらやがてかりきぬのおひひほ共に切てすつるまゝにゑふの太刀ぬき合やあおのれらは聞及びたるかうたう共にて有へしにくいやつはらすいさんなり引なといひてたせいか中へわつて入ゑしやくもなくくもてわちかひ十文しに火をちらしてぞ三重たたかひける時のまにくつきやうの兵を廿よ人切ふせ門くわいはるかにおい出しはしりかへつて大にわにつつ立あがつて引かへたりかゝりける所にぬしはしらすや一つきたつてのぶつらか左のもゝをしたゝかにいさせたのふつらやかて其やをぬいてすてたればのはかりぬけてやしりは猶とゞまりけり物〳〵しやとて打かゝめはしらにあてねぢぬきかくて。はもはやかのふましいぬじにせんよりは只てきにくんでしなんと思ひ太刀も刀もなけすてやあいかに官人共のふつらかせんにしつかれ今は一かう力なし打とつてかうみやうにせよとかうしやうによはゝり小門のわきへおとり出た爰にかなたけといふかうの物長刀にてとめんとしけるをのふつらゑたりととんでかゝりしか長刀にのりはつして又みきのもゝをさゝれつゝ爰にてついにいけとられにけりかくてそれより官人

共御所の内へと三重みたれ入我も〳〵とさがしけり天井をやぶり板敷をはなしてさかしけれ共宮も御渡りなし人一人もなかりければ此うへは力なしとて官人共のぶつらはかりをいましめ扨六はらへとてぞ三重參りける去程にう大將宗盛のきやうは大ゆかにさしてのふつらを大にはに引すへさせむほんの次第宮の御さ所ならびにらうぜきのやうかうもく（本ノマヽ）にかけてめしむかふべしと仰ければのふつらもとよりすくれたる大かうの物なれはちつ共をくせずいなをりあさわらふて申やうあまり御まへのそう〳〵成にさう人共をのけられ候へがうもんにあつからず共御尋に付て所存のとをりをは申べしいかにすいもんにあづかりほねみをみぢんにくだかるゝといふ共そんぜさらん事は申まし但こんやのらうぜきの事身においてあやまりなしまことの御使と存せはいかでか忝もぜんしをこしよし奉るべき宮は此間しのひたる御出とて三條殿をは出させたまひぬ御るすのまにて侍るをよる〳〵がうたう共かうかゝふ由を承りし間さつきやみにては有のぶつらまいやようしんしてふかくをせしと御所中をみまわり候所にいまたあかつきかけて物のぐしたる物共か數をしらす御所中へみたれ入候程にらうぜきなり何ものそととがめ申て候へは是はせんしの御使ぞとつくりこゑしてなのる程に宮は御出にて當時此御所御るすなりと申ししか共さないわせそ只打入候とてみだれ入し間只今何事に此御所へせんしの御使とてかゝるすかたにては參るべき一ちやう是はがうだうめらがことはをへてたばかり入るにこそと存所にたゝ入りに打入し間扨こそと存かたのことく切ふせきをい出して候いしか今こそ誠の御使共承候ひつれ大方はせんしの御使に參たるけんびいしとうしりよなかりけりか程の御事に侍うへはせんしの御使たれかしとなのつてこさいをのべ候はんにいかでからうぜき仕べき其うへ只一人有のぶつらにおいたてられて度〳〵にけ出〳〵しけるも又いひかいなしさふらひけかしといひ御をんふさげ成に一人成共こじつの物をこそ召つかはれめとはゞかりがたなく所存のとをりをあざやかにこそ申ける大將聞たまひて此うへはとかくのちんたうにも及ずとくとく川原に引出しくびをはねよとそのたまひけるのぶづら又かほふり上けいだけたかに成て申やう是は

それかしめいをおしみとかを申ひらかんとにはあらずたとへは此御所へせんしの御使にてもあれ又はよ打がうたうにてもあれ思ひかけなき夜中に物のぐしたる物共か是はせんしの御使ぞといふてみたれ入候はんをそせんしといふことばにおそれておめ〳〵とをし入たまはんや若又侍共がふせぎたゝかひおい出してがらなど仕らんをはふかくなりとてくびをも切御かんたうも有べきや只有のまゝの事侍と申ければ大將殿もことはなくおとし兼てぞみへたまふ爰に平家の侍共の中にかづさのあく七兵へかけ清かすゝみ出てげにも是はたうりなり誠にわかぬしのもとへ物のぐしてあやしき物共がやいんに大せい打入たらんをはたとひせんし共いへいんせん共いへ後はしらずゆみや取のならひなれば一たんはふせきたゝかはんずるそかしそれを又みながらにけうせたらんをはほむるぬしはよもあらじ我等も左樣にこそはふるまはんずれと申けれはなみいたる侍共皆げにもとぞ申けるかげきよかさねてじたいあののぶつらは心きははつかしき男にてしかも大かうの物にて有度〳〵はかねをあらはして一度もふかくせすとこそ聞中にも本所に有し時はつさの衆ことをし出してらうせきなのめならさるゆへ一郎二郎もせいしかねさを立さはける程にのぶつら一たんしづめけれ共猶さん〳〵の事なりければつさのしう〳〵二人をのぶつらさゆふのわきにはさみ一しめしめて罷出其さのらうぜきをたちまちしつめたりけれは時に取てかうみやう第一といわれき又おほいのみかと京極成ときは殿の御所へ山とへんのかうたう共か打入て家内のしさいをぬすみ取あまつさへおほくの人を切ころして出ける程に家ぬしこゑを立てよはわりさけひけれ共出あふもの一人もなし大はん衆もおはざりけるにあののふつらさうのこてにはらまききて太刀をぬきたゝ一人出合京極大ちにておつつめさん〳〵にたゝかひがうたう四人手の下にて切とめ一人をはくんでからめんとせし程につらをつきつらぬかれけるかつかれなからついにそれをもからゆとめたり今あのおもてに有きずは其時のつかれたる刀の跡なりひるいなきてがらなりとて其時なされたる左兵衛のせうそかしされは度〳〵なをあらわしたる大剛の物のたちまちにきられんずる事のむざんさよのぶつらていの物をこそ御所中にも召つかはれ度物にてあれあはれおしき侍やと泪をながして申けれ

ば尤なりとておの〳〵皆おしまさるはなかりけりされはにや大將殿もけにもとやおほしけんさらばとてしさいをなためてしばらくかげきよにあつけおかるるかげきよ時のめんぼくとよろこひのぶつらをあつかり一先たいしゆつしたりけるのぶつらあまりにかうなればゆみや神におうごせられたる侍かなとみな取〳〵に申けるかくて平家めつぼうのいちはうきの國にしのびたるをかまくら殿聞付たまひかうの物のたねつかせんとてゆりの小藤太かごげに合て召つかはれのとの國すゝのせうをそたまはりけるぢせうのむかしは平家に命をたすけられふんぢの頃は又源氏にをんをかうむれりふようのめいはう有がたしためしまれ成かうの者あつはれよき侍のかゝみかなとて上下はんみんおしなへみなかんせぬものこそなかりけれ

第三

大しゐ軍ひやうちやう井きおふ手からの事

其後よく日十六日の夜に入て源三ゐ入道頼正ちやくしいづのかみなかつな次男源太夫の判官かねつなひたかぶと三百余騎にてたちにひをかけやき立三井寺へとてそ三重參られける此こと猶もかくれなく宗盛大きにおどろきたまひ扨いかゝはせんとて内義ひようぢやう有ける所に侍共きおふのたき口は供せざるとみへてさりげもなく宿所に罷候といへば大將聞召ふしぎや其物は入道の内には一二の物共成にといまりけるこそふしんなれいそぎつれて參れとてめさる扨もきおふたき口といふは渡邊ことにみのたの源氏つながはつようのほるのたき口が子なり弓や取ておそるゝ物なく心もかうにてはかりこともいみしくしかも王城一のひなんなりかくてきおふ使と供にそ參りける大將きおふにのたまうやういかにしうの入道は三井寺へと聞に汝は何とて供せさるぞと仰けれはきおふかく共つけたまはねばいかでか存べきとこたふさもあらずとよ入道の内には汝らこそ身にもかはり命をもすつべき一二の者とさたするにつげざる事は大きにおほつかなしとのたまふきおふ承てそれもやうこそ侍らめ但此間はうらみ申子細の候に付て心をおかるゝ事も侍りたとい入道殿こそつげたまはず共したしき物共おほく候にかく共しらせ申さぬは

よく主人のかんたうのふかけれはこそなれか樣の御大事には人一人も大切にこそ侍るへきにさすかきおふなどを打すてたまふ事はおほろけの所存にはあらしかく有うへはなまなかしたふにも及ず當時は扨こそ候はめと誠しやかにそ申ける大將打うなつひてよしさらはきやうかう宗盛をたのめよかし三位入道のおん程の事はなとかなかるへきとそ仰けるきおふ心にはあらはかなののたまひ事やたとい命はうしなふ共宮ずかへはすまじき物をさりながら只今いなといふへきおりにあらすと思へはきおふ身におゐてさせるあやまり有共存せす身にも命にもかわり奉らんとずいふん存候へ共入道殿此間心をおきたまふ程にそれかしも又心がおかれて奉公をも仕らずない〳〵は申入候ばやと存候ひつれ共主に中たがひていつしかと人の申さん所もはつかしくそんししせんの次而をと存る所に今此仰こそ身のさいわいにて候へそれに付てはそれかしさるむまを持て候ひしを此頃したしきやつめにぬすみとられて候あはれ御馬一ひき下したまはり候へかしいづかたにても一方を承てかけやぶり手いたくはたらき入道殿に思ひしらせ候はばやとことばすゞしく申ければ大將なのめならずうれしげにて誠に年來ほし〳〵と思もひしに然へき折ふしなりよき侍まうけて有王城一のひなんなり心もかうにて弓や取もよし渡邊とうのさいちうなりごも有けると悦びそれ〳〵けんさんのはしめなれはとてずいふんひさうしたまひたるなんれうといふめいばにかいくら置くろいとおどしのよろひをそへてぞたまはりけるきおふ是をたまはつてあつはれ御馬や此馬に打のつて一ばんにかけやぶり思ふまゝにはたらかんあんの内にて候とそゝろにゑつきし一先おいとま申それよりもわがやをさして立歸りきおふ心に思ふやう是程の大事を思ひ立たまひなからつげたまはざる事はしんじつにいこんなり大將のかく打たへかたらひたまふもいなみがたし時の花をかさしの花にせよといふ事の有扨も有べきかと思ふが又あんしけるはつげたまはぬもやう有らん六はらちかき家なればぶこつなり中〳〵に共おもわれすらん忠臣二君につかへずてい女二夫にかせすといふ本もん有我いかてかさうでんのしうをすて奉て今さら平家にうでくびをにぎらんやまつ代までもなこそおしけれとおも

へは夜に入るまゝにきおふまつしやうそくをそ三重したりけれ家につたはるよろひをきぢう代の太刀をはきう大將よりたまはつたるなんれうに打のつて家の子らうどう四五人引ぐし三井寺へとて打立けるが先大將の惣門のまへをとをるとてたづなかいくりあふみふんばりつつ立あがり門の內をさしのそきかうしやうに申やうきおふこそ只今御まへを罷とをり侍れきのふの御馬物のぐよろこひ存候へは尤宮づかひ申度は候へ共年頃のしうくん入道殿をこひしく思ひ奉れば三井寺へこそ罷こし候ひつれいとまこいのため是迄立より申て有にくしとおもはゞとめても見よおそらくてにはためましそといひすてゝそれよりはやむちにあぶみをもみそへ〳〵三井寺へとてぞ三重いそぎける六はらには侍共があつまつてきくわいなりきおふめをおつかけ打とめんとひしめく大將しばらくとおさへてやあ方〳〵にくきしかたなれ共とゞむる事はいかゝ有べきなんれうははやばしりなり一町共のひなはおつ付がたし其うへきおふは弓やの上手てもきいたればなましいにおつかけんとてあやまちすなさるしれものにはゆきあはぬにしかしおとなせそとせいしたまへは共かくも御はからひとてとゞまりけり將も兵ももろ共におくひやうの程あらわれて云かいなくそ三重聞へける去程に三井寺には三位入道一門其外寺法師共集まりていくさひやうぢやう有ける所へきおふ參りたるよしを申されはこそとてちかふめしいかにきおふは何とておそかりけるぞと仰ければきおふしたしき物共にむかい口をしくも殿原は是程の御大事かく共つけたまはずしてよくすてはおはしけるぞとうらみ申たりけれはされはこそ我〳〵つけんと申けるをきおふか宿所は大將のむかいなれはつけては中〳〵ぶこつなりいつれの所にもおちつきぬと聞なばつげす共時をさして參へき物そと仰られする程に扨こそと申けれはきおふ打うなつひて扨はうれしや何事に御へたてあらんと心元なく候ひつるにつげす共聞なば參へき物そとたのまれまいらせけるこそうれしけれそんせしにたかはずとて泪をながしかんしける扨六はらへよびよせられて大將ともんとうしことたばかつて馬物のぐをこひうけたる次第大將の門前をなのつてとをつたる事共一〳〵かたりてわらひければいつの守は又かのなん

れうをこいうけ木下丸がへんほうせんとてやかておがみを切むかしはなんれう今は平の宗盛といふかなやきして先一あたり當たりとて一どにどつとわらひ扨夜中に京へそ三重おいやりける扨其後に大しゆ殘らずあつまりかさねてせんぎしけるやうそも〳〵山門はふぢやうの返事なれはたのまれずなんとは又どういたりといへ共いまたまいらすいかゝはせんとのせんぎなり三位入道申さるゝはとかく此ことのび〳〵にてはあしかりなん又こせいにてよのつねの如くに合戰せん事もゆゝしき大事たるべししよせん今夜打立て六はらへおしよせ夜打にせんと申されば皆此ぎ然へしと同ず入道かさねてさらはらうきやく二手にわけて先らうそう共はによいかみねよりからめてへむかふべしあしがる共をさきに立て白川のざいけにひをかけやき上けはさい京八六はらの武士共あはやとてはせむかはんすらん其時いわさかさくら本のへんにしばしさゝへてふせきたゝかはんまに大手は又まつ坂よりいづの守を大將としてわか大しゆ惡そう共六はらにおしよせ風上にひをかけてやき上け一揉もふで攻んになとか太政入道う大將も皆やき出してうたさるへき方〳〵いかにと申されば皆尤とぞどうじけるこゝに平家のいのりしける一にようぼうのあしやりしんかいは弟子同宿す十人引ぐしせんぎのにわに出けるがいかにもしてさまたげよをふかしことをのばさばやとおもへはすゝみ出て申やうそも〳〵佛法王法はきみをたすけ法をまもり文官武官は又國をおさめ亂をしつむ其中に源平兩氏の將軍はてうかせんごのしゆごとして國土をおさめくんわうをまもり奉りたがいにこかくたりき然につら〳〵きんらいのていをみるに源家はうんおとろへ諸國にれいらくし平家は又いさかんにして一天をくはんりやうせり是によつて五き七道其めいにそむかず百官ばんそ其いにしたかふしゆりうのうみに入るごとく萬木の風になひくにたり一寺のしゆとの力を以て一ぞく大勢の兵をかたふけん事たやすからし但たうらう車をかへずといふ事の侍れはそれにはよるまし き上しん王の御入寺は寺門のはんじやうとのめんぼくなり此時にあたつてたれかなをざりを存いさむ心なからん然れはそつしのようちをとゝめよく〳〵はかりことをめぐらしせいを東西にもよふしていくさせんはよろしかるべきかく申せばとてまつたく平家

の方人にはあらずいかにも寺門のあんどしゆとのかうみやうこそまつ代迄も存事なれとことばと心と引かへて時をうつしよをあかさんとしつゝ長々とぞせんぎしたりけるこゝに又せうゑんぼうのあじやりきやうしうはころもの下にもへきにほひのはらまきちやうけんけさにてかしらをつゝみ打刀まへにさしすゝみ出て申けるはいくさにかつ事せいにはよらすしやうこを外に引べからず我が寺のほんぐわん天武天王いまだとうくうにて渡らせたまふ御時大友わうしにおそはれさせたまひてよしのゝおくを出大和のうだをすきさせたまふには其せいわつかに十七きされ共いかいせに打こし又のおはりのくん兵を以てついに大友のわうしをほろぼし御位につかせたまへりむかしを以今を思ふにふせいにはよるべからず十七き猶いくさにかついはんや三いんのしゆとをやいはんや源氏のよりきをやなかんづくきうてうふところに入る時じんりん是をあはれむといふ本文有いはんや宮の御入寺をやいけいをめぐらさんとていたづらに時日をうつすならはてきに上手をうたれてこうくわいゑきなからんなりじよはしらずきやうしうが弟子共はいそぎせんぢん仕てたしかに太政入道父子かくひ取てしん王の御代になしまいらせよやとそひしめきけるゑんまんいんの太夫源學是をうけてしゆとのせんぎはしおゝし只よのふくるに急けやすゝめと下知しけれは是尤〳〵とて先からめてにむかふらうそう共の大將くんには源三位入道頼正せうゑんばうのあしやりきやうしうりつしやうばうのあじやりにちいんそつの法師せんちが弟子にきほうぜんそう其外同宿わらんへかりぐして一千よ人てゝにたいまつ持てによいかみねへそむかいける扱又大手の大將いくさにはいづの守なかつな源太夫の判官かねつな大しゆにはゑんまんいんの太夫源學りつじやう坊のいがの公法りんいんのおにさどじやうきいんのあらとさびやうとういんのいなばのりつしやすみの六郎はう島のあしやりつゝ井法師きやうのあしやりあく少納言あら太夫北のいんにはこんくはういんの六天ぐ太ゆうしきぶのとかゝさとひんごとうなりほつしばらには一らいほつしをさきとしてたうしゆにはつゝいのしやうめうめいしゆんおくらのそんけつそんゑいじけいらくしうかなこふしのげんゑう是らは皆ち

からのつよきゆみや打物取てはいか成おにには神にもあはんといふ一人とうぜんの兵なり扨又ぶしには渡邊のはふくはりまの次郎さつくさつまの兵へ長七となふきおふたき口あたう右馬のぜうつゝくの源太きよしすゝむをさきとして一千五百余人はや三井寺をぞ打立ける寺には宮御入寺の後ようじんのためにとて大ぜきこぜきほり切かいだてさかもきかまへたれはそれらをも取はらひほりにはしわたしなどする程にさつきのみしかよをしうつりすでにはやせきぢのにわ鳥こゑ〳〵なきあへりいづのかみのたまひけるは爰にて鳥のなくを聞ては六はらへよせばはくちうにや成なんよ打にこそさり共と思ひつれ晝いくさにはいかにしてもかなふましゑゝ口をしやほいなき事やぜひにおよばぬ事それ〳〵よひかへせとて大手は山しなより取てかへせばからめては又によいがみねより引かへしむなしく夜をぞあかしけるわか大しゆあくそう共是はひとへに一によばうがながせんぎにこそ夜はあけたれくちをしやきやつめにおめ〳〵とはかられさまたげられぬるむねんさよいざかれがばうへおしよせしんがいかくび切ていくさがみにまつらんといきどをれはけつきさかんのわか大しゆ共げにもといふこそおそかりけれ我も〳〵とおしよせ一によばうへと三重みたれ入おしやぶりせつはうにこそ及けれされ共しんがいはさき立てちくてんしはうにはかつて人もなければあくそう共ちからおよばすそれよりまつたちかへつてもとのことくさかゝ木引きかいだてかいてみやをしゆこしたてまつりなをいくさひやうぢやうひまなかりけり寺法師のしんていたのもしき共やさしき共中々扨申斗はなかりけれ

第四

一らいじやうみやうかうみやう并宮なんとおちの事

そのゝち六はらのなんれうは三井寺よりおいはなされみちしばのとをわけあさつゆにしほれつゝもとの主の家なればう大しやうのもんくわいにかへりたかいなゝきして立にけりあやしみおもひ立出みればなんれうなりこはいかにとて引まはし〳〵よくみれはむかしはなんれういまは平のむね盛とかなやきしてぞありけるやかて此よし申上れば大將大きにりつふ

くし給ひにくひしはざかなきおふめを切てすつべかりつる物をさて手のひにしてたばかられかゝるはぢをみけることこそやすからね是木下がへんほうとはいひながらひとへにきおふめがなせる所なりこんど三井寺へよせたらんする物共いかにもしてきおふめをいけ取にせよのこぎりにてくひを切んずるぞとておどりあがり〳〵はがみをなし身をもんで時こくうつさすおしかけふみつふせよといかつてせいをもよふしちやくたう付いくさひやうちやう取〳〵にてうへを下へと三重かへしけるみやはしばらく三井寺に渡らせたまふが京よりはよする聞ゆ國〳〵の源氏共はいまだまいらす山門は又まいるべきよし申ながらたちまちにへんかいしぬ寺ばかりにてはかなはしとて廿五日におんじやうじを出させたまひなんとをたのんでおちさせたまふ御うんの程こそかなしけれ是をかぎりとおほしけるにや先こんだうに御にうだう有せみをれといふ御ひさうの御ふえをもつてばんしうらくのひきよくをあそばし御ゑかうありなむ大じ大ひとうらいだうしみろくじそんかいせんのよくんつたなくしてこんしやうこそむなしく共りうてきのけちゑんを以てごしやうをたすけたまへとてなく〳〵佛前にさしおかせたまひけるこそあはれなれけいごの大しゆも御供の人〳〵も皆心ぼそくも打しほれけるすでにはや御出寺のよし申けれはちご大しゆぎやうぶかなわらうそうまでも此程の御なごりをおしみたてまつてすみそめのそでをしほるばかりなりみやも此由御らん有てかりそめのなしみ成にかやうに思ふやさしさよとおほし召やらせたまへは御涙そゝろにこそはすゝみけれかくて時こくもうつりけれは宮御しやうゑにて御馬にぞめさせ三重たまひけるさて御供には三位入道の一るいならびにわたなべたうし法師二百余騎にはすぎざりけりすでにはや寺を出おはしましし〳〵んらのやしろの御まへにては御心斗にさいはいしたまひ大せきとをりに御出有ひかしをのぞめばこすいばう〳〵としてなみきよくにしをかへりみれば又れいせううつ〳〵としてかせすさましせき寺せき山うちつゞきゆくもかへるもあふさかや一むらすきのもとよりかけひのしみづたへ〳〵なりくゞひざか神なしのもりたいごちにかゝつてこはたのさとをつたいつゝうぢへ本ノマヽぞ入らせたまひけるうちと寺との間かうてはわづか

三里ばかり成にその間にて宮六どまで御らくはあ
りけり御むまにがう□せさせたまはざるにや又此
程うちどけ御しんならぬゆへにや是もしかるべき
御うんのきわとは申ながらか程の御大事の中にね
ふりおちさせたまふもいひかいなしかくてはかな
ふましけれはしばらくやすめ入まいらせて御しん
ならしめ奉りその間にうぢはし三げんひきてしゆ共
ふしももろ共にみやをしゆごし奉る扨六はらには此
よしを聞すはやみやこそなんとへおちさせたまふと
なれおつかけ打奉れとて大將くんには左兵へのかみ
とも盛とうの中將しげひらさつまのかみたゞのり侍
大將には上總のかみたゝきよその子太夫のはんぐわ
んたゝつなひだのかみかけ家その子太郎判官かけた
かたかはしの判官なかつなかわちのはんくはんひで
國むさしの三郎左衞門有國ゑつちうの次郎兵へかづ
さの五郎兵へをさきとしてつがう二百はち十よきう
ぢよりなんとをさしてをつかけしがびやうどうゑん
にてきありとみければ平家のぐんびやううんかのご
とくはせちかつきはしの東のつめによするとひとし
くいまたよもあけさるに時のこゑ三どつくつてはし
のうへをおめきさけんで三重すゝみけるわれおとら
しといやがうへにこみ入る程にいまたあかつきの事
なればうへはかわきり立てくらさはくらしせんぢん
にすゝみしもの共はしをひきたるぞとくち〳〵によ
はゝりしか共さしとゞめて中なりしかばたゝわれさ
きに〳〵にとはせこみ〳〵しける程にせんぢん二百
よきをは川へぞおしをとしけるけんきゆへなりふか
くなりそんのうへのはぢなりとて是又わらはぬ物こ
そなかりけれすでにはや夜もほの〳〵とあけけれは
寺法師につゝ井のしやうめうめいしゆんといふもの
ありじもんたもんにゆるされたるあくそう成かはし
のてにぞむかいけるめいしゆんがしやうぞくは事を
このんでしたるとみへたりまつしかまのかちんのよ
ろひひたゝれにこんのづきんにくろいとおどしの大
あらめのよろひの一まいませ成をくさずりなかにゆ
りくたしおなしけの五枚かぶとをさてくろぬりの太
刀のさんじやく五すんあるにねりつは入てはいたり
けるさてくろぬりのゑびらにぬりのにくろつはをも
つてはいたるやの廿四さしたるをかしらだかにおい
なし七もちり成まゆみのしめぬりにぬつたるにぬり

つるかけてまん中取三尺五寸の長刀をわらはに持せてくそくしはしのうへにすゝみ出て大をんあげとをからん物はおとにも聞ちかゝらん人はめにもみたまへをんじやうしにはかくれなしつゝ井のしやうめうめいしゆんとて一人當千のつわ物ぞかし我とおもはんひと〳〵はよりあへやけんざんせんとて廿四さいたるやをもつてさしつめひきつめさん〳〵にいたりけれはやにわにてき十二人いころし十一人に手をおふせや一つ殘してゐひらも弓もからとすてつらぬきぬいではたしになりはしのゆきげたをさら〳〵とはしりけるはたゝ一でう二條の大ぢをはしるにことならず是をみて平家の大勢あますないとれ打とれとて我も〳〵とすゝみける源氏方にも此よしをみてしやうめううたすなつゝけやとて我も〳〵とおつすが（本ノマヽ）ふためうしゆん是にちからをへてすはまいりそうといふまゝにおもてもふらすわつて入〳〵いのちをかきりに三重たゝかひけるはしめより人にまきれすはたらきしはじやうめうばうにてとゞめたりあまりにつよくうち合ければ長刀もをり太刀もおれてたのむ所はたゝこしかたなばかりなり猶こしかたなぬき持て平家爰をよせよやよせよとあざむひてこそ立たりけれかゝりける所にせうゐんばうのあじやりきやうしうがめしつかいける小ぼうしにいちひとてしやう年十七せいきはめてちいさけれ共大力のかうの物きもたましいのふときこと萬人にすくれたるがみやうしゆんかうしろにつとよりいかにしやうめうばう爰をは我にあづけられしはらくいきつぎたまへとてゆきげたはせばしそばとをるべきやうはなしあしう候しやうめうばう御めんなれとてみやうしゆんがかぶとのしころにてをかけうさぎばねといふ物にかたをつんどおどりこへたてきも身方も是をみてあゝはねたりやはねたりこへたり〳〵よくこへたりとしばしはなりもしつまらず一らいいよ〳〵きにのつてあら手なりまいりそうとて大せいか中へわつて入おもてもふらす命を限りに馬人のきらいもなくあたる物をさいはいにはらり〳〵と三重切まわる時の間に一らいじやうめう二人の法師かてにかけて百よ人うち取てきをはるかにおいしりそけさらは一まづひけやとて又ゆきげたをさら〳〵とはしりかへつて猶はしつめに引かへた此兩法師かふるまひ誠に一人當千の兵

とは是らが事をやいふらんと上下萬みんおしなへて皆かんせぬものこそなかりけれ

第五

宮御さいご幷よりまさ父子じがいの事

其後じやうめう一らい兩法師か渡つたるを手本として三井寺の大しゆ入道の一るいわたなべたう我さきにと皆はしりつゞき〳〵はしのゆきけたをこそわたしけれあるひはふん取してかへるも有あるひはいたでおふて河へとび入しぬるもありはしのうへのたゝかひはひ出る程にそみへにける爰に平家の侍大將かつさの守たゞきよ大將ぐんの御まへにまいりて申やうあれ御らん候へはしのうへのたゝかいは手いたくみへ申べく候今は川をわたすへきにて候が折ふしさつき雨の頃みづまさつて候へはわたさば馬人おほくほろび候なんよど一口へやむかふべき又かはちゞへやまはり候へきいかゝ有べく候といふ爰に又しもつけの國のちう人あしかゝの又太郎たゝつなしやう年十七さいにて有しがすゝみ出て申やう何とよと一口かわちゞへは天ちくしんだんの武士をめしてむかはされ候はんずるかそれもさためて我らこそ承てむかい候はんすれめにかけたるてきを打ずして宮をなんとへ入參らせなはよしのとつかはのせい共はせあつまつていよ〳〵御大事にてこそ候はんすらめむさしとかうつけのさかいにとね川と申大がかそふあしかか中たかふてつねに合戰仕にわたさてはりをへかたし爰をわたさずはながき弓やのきず成べししかるにおぼれてしなばしねとて馬いかたをつくつてわたせばこそわたしけめくわんとうむしやのならひてきをめにかけ川をへだてたるいくさにふちせをきらふやうや有いわんや此川はなみはやしといへ共そこふかからすいわたかしといへ共わたりせおほし川を渡しきしをおとす事はあふみのふみやうたつなのあやつりに有馬のあしをかぞへてなみまをわけよしさいはあらじそれがしさきがけせんずる間つゞけやとの原とてまつさきにこそ打入たれつゞく兵には大こ大むろふかす山かみなはの太郎さぬきのひろつな小野寺のぜんし太郎をさきとして三百よきそつゞきけるたたつな大をんじやうを上げて下知しけるはよはき馬をは下てにたてつよき馬を上てになして水ふせかせ

よ馬のあしのおよばん程はたつなをくれてあゆませよはづまはかいくつておよがせよさからふ者をは弓のはずに取付せよとに手を取くみかたをならべて渡すべし馬のかしらしづむとみば引あけよいたく引て引かづくなくらつぼによく乗さためてさうのあぶみをつよくふめ水しとまは三ずの上にのりかゝれ川中にて弓引なてきはいる共あひ引すなつねにしころをかたふけよいたふかたぶけててへんいさすな馬にはよはく水にはつよくあたるべしかねに渡しておしながさるゝな水にしなふてわたせやわたせと只一人の下知によつてさ斗の大かなれ共二百よきか一きもながれずむかいのきしへさつと打上あくるとひとしくあふみふんはり大おん上げむかししゆじやくいんのぎようせうへい年中にてうてき正門をほろぼしてけんしやうかうむりなを上げしたわら藤太秀さとに十代のかういんしもつけの國のちう人あしかゝの太郎としつぐが子に又太郎たゝつなしやう年十七さいけふうぢ川のせんぢんそとなのつてひやうとういんの門の内まてせめ入たり大将ぐん左兵へのかみとも盛是を見たまひて殿原渡せやわたせと下知したまへは承とて二萬八千よき皆打入てわたしければさしもにはやきうぢ川も馬人にせかれて水は上にそたゝへけるさう人ばらは馬の下てに取付〳〵わたる程にひさより上をぬらさぬ物もおほかりけりよきそわたせや渡せとてたがいに力を合つゝ川一文じに 三重わたしける今ははや宮方にもてきの大せいになんかをこされてふせくべきやうなかりけりされ共せめて宮をおとし奉らんとてなんとの方へおとし參らせ其間に命をすてゝふせく程に爰にて入道の一門渡邊とうもおほく打じにしたりけりなかにも入道の二なん源太夫判官は父入道にじかいをすゝめ只一きふみとゝまつてふせぎけるをかつさの判官がいけるやに源太夫判官内かぶとをいさせてひるむ所をかつさのかみかわらは次郎丸といふ大力のかうの物はせちかつひてかねつなにおしならべてむずとくんだ源太夫判官はすぐれたる大力なれは次郎丸お取ておさへてくびをかき立あからんとせし所に平家方の兵物共十四五きおちかさなつてついにかねつなを打てけり又いつのかみなかつなもさん〳〵にたゝかいいたであまたおふたれはよのなか今は是までなりとてやかてびやうど

ういんのつり殿に入はりまの二郎はふくを近付入道殿へとく〳〵しがいをすゝめ申せとてはらかき切てふしたりければはふく其くびを取て大ゆかの下へなげさて入道殿へまいりていづのかみ殿もかねつな殿も皆〳〵打じにしたまひて候いそき御しがい有べしといへは三位入道打うなづいて渡邊のき七となう法師をめしてやあ我すてに八しゆんにおよんでおいをとろへたるくびをとられ是こそ三位入道かくびよとてできの中にて取わたされん事心うく思ひつれは心しつかにじがいせんとおもひ是へたちのき申てありかならずわかくびてきにばしとらするなとていけの水にててあらひ口すゝぎなどして西にむかひ念佛廿へん斗申さてさいごのことはそあはれ成むもれ木の花さく事もなかりしに身の成はてぞかなしかりけると是をさいごのことばにて刀をはらにつき立たまへはとなふなく〳〵くびを打なく〳〵石にくゝり付うぢ川のふかき所にしつめさてはふくとなふ二人はいざ是迄なり御供せんとてさしちがへてしんだりけりむざんなりける次第なり爰に平家の侍ひたのかみかげ家は古兵にて有けれは此まきれにみやはさだめてなんとへやおちうせたまふらんと思へばひたかぶと五百よきにてむちあふみを合ておつかけ奉るあんのごとく宮は卅き斗にておちさせ給ふと宮はくはうみやうさんの鳥いの前におつ付雨のふるかことくいり奉りけれはいつれかやとはしらね共や一つ來て宮の左の御そばはらに立けれは則馬よりまつさか様におちさせたまふを平家の大せいおりかさなりやかて御くびを取てけりあさましかりける次第なり扨もきおふのたき口は人〳〵のさいこのやうをみとゞけ今は我身のさいこと思へはてきにむかつて大おんあけ渡邊とうにきおふのたき口是にあり打取て高名せよとよはゝつてひかへたり平家の大せい是を聞すわやれがふ所のさいわいなり我打とらんとすゝみけるをとも盛のきやうせいし給ひてやあきおふめが事は大將殿もやすからすおもはれけれは別て仰わたされて有はいかにもしてきすつけすいけ取て參らせよと下知を加へられけれは口兵共其いをへて弓を引ず太刀をもぬかずほとりにめくりてうかゝひけるきおふはやかて是を心へ思ふまゝにいめぐり切めぐりける間又は打れておいけれ共きおふかみはつゝかなし平侍共

是をみて今は只打とれよかれ一人いけとれとておほくの兵をうしなふべきにあらずとて中に取こめ打んとすきおふも又太刀をぬきおもしろし平家のともがら参りそふといふまゝに大せいか中へおもてもふらずわつて入〳〵命をかぎりと切まはるおつちらし猶もてきを招きよせやあ方〳〵のふるまいをみるにいかにもしてそれかしをいけ取大將殿へ引參らせたきとの所存とみへたり尤心ざしはせつなれ共此きおふかいけくひとらん事はとてもかのふまし程にせめてはしにくびを成共取て京都へのみやげにせよさらばおしけれ共とらするそよつてとれといひもあへずはら一もんしにかき切其刀を取なをしのどぶへにさしあてつきつらぬかれてしんだりけり心もかうにてもきゝ力もつよく殊には又王城一のびなんなれはすくれし中にもすくれたり尤おしき侍やないきてのめんぼくしゝてのかうみやうほめぬ物こそなかりけれかくて平家のぐんせいくひ共を取て太刀につらぬきさし上け〳〵いかめしけに上らくしけるためしすくなき物語きせん上下おしなへかんせぬものこそなかりけれ

寛文五年乙巳五月吉日

鶴屋喜右衛門板

賴朝三嶋詣

第一

下ア中 さても、下ヂ ン そのヘンへんち中 は ことそれこつかのちらんをみるに道のみちたるものはおのづから家をさまり、理にくらきものは一たんさいわひありといへどもふうぜんのともしびついにきゆる、ほんまつたゞしきものをじんせいのほうといふ也、爰に人王八十一代、たかくら のゐんのぎょうにあたつて、へいしやうこくいろきよもり、中こう持として、おろしかうけへ下一人、こいおはしますさん地ぬる、へいぢのみだれにはことのぶよりよしともをほろぼし、天下をたな心の内におさめ、くらゐあくまでへのぼり、いろこ とはわか身のゑいぐわをきはむるのみならず、しそんのはんじやう、めてめてしつたふしおくきん引だち、下あまた、引おはしますはことまづちやくし内大臣のさ大しやうしげもり、ぢなん中なごんのうだいしやうむねもり、三なんさんゐの中將ともゝり、ちやくそん少將これもりすべて一もん三十よにん、いづれも御前にしかうある、さて國をまもるしつけんには、あく七兵衛かけきよゑつ中の次郎兵衛もりつぎ、其外とざまのしよさふらい、地にちやのしゆつしひまもなく、地うくきみをうやまひ、うく奉る引大三重下いせい引上ゆりの、かんほとこ、そ、上ゆゝしけれ、ゆり地ふし然る所に、ことはよしともの三なんよりともこうは、平家の方にいけどられ、御命あやうくみへし所に、いけのぜんにのなさけゆへたすかりたまふぞめでたけれ、かくてぜんにはよりともをともなひて、きよもりのやかたにこそは出らるゝ、御所にもなればぜんに仰けるは、此度よりともをたすけましますことなによりもつてうれしけれ、ことに我子馬の介によくもにたる子なるゆへ、いとどふびんに思ふなり、なごりおしくは候へ共いづの國へ下るならは、おさなき人のことなれば道すがらよくゝいたはりいろましませとうれいふしなみだにくれてぞ、仰ける持こととはきよもりこう聞召、よきにはからひ申へし、御心やすくおぼしめせぜんにはよしを聞召うれしう候いろ人々とはるおとし御てんの、さしてぞ入たまふ、ことは扨其後彌平兵衛をめされ、なんぢはよりと

もをくそくしいそざいづに下るへし、それ〳〵と有ければ、むねきよかしこまつて候と、地よりとも公をうくともなひておくりやがて引下御前を引立にけり、ことはかゝりける所にゐつちうの次郎兵衛もりつぎは、御前のみ合申上る此比らく中にもんがくと申しやもんほしいまゝにがいをふるまいきんりせんとうをもおそれずほういつむざんのあぶれもの、其まゝさしをき候はゝ國どのさはぎと成べし、いそぎ御ざいくわ然るべしとぞ申上る、きよもりこう聞召、それはゐんどうむしやもりとをが入道してもんがくといひしなり、さやうの物とはしらざるにほうにそむきしあくそうかな、いそぎめせとの上いなり、地うけたまはり候とうくやかておくりつかいを引立らるゝ、ことはもんがく何ことやらんと、つかいと打つれ出らるゝ、きよ盛こう御らんしていかにもんがくなんぢは出家の身としてらく中らくくわいの人をなやまし、あまつさへいんの御所にてのらうぜきいさゝかもつてかくれなし、いかに〳〵と上い有、もんがく承はり是は思ひもよらぬ御じやうかな、それがしらく中の人をなやまさんやうもなし、其うへいんへ参りしことさらさらもつておぼへなし、たれ人の御さたぞとさしうつむいてぞ、おはします、其時もり次すゝみ出、いかに御ぼう、人もなけにのたまふな、御へんほうぢう寺どのにてのらうぜき、天下にかくれなきことなり、くわんじん帳をぢさんしさま〳〵のあつかう、其外のひがことひとかたならぬこと共なり、ちんしたまふな御ぼうとてはつたとにらむて申ける、もんがく大きにいかつて、いかにもり次、一々しやうこもなきことをなんち一人すゝみ出、法師にちじよくをあたゆること、いきては何のせんあらぬ、いで〳〵おのれめに物みせんと一もんしにとんてかゝる、御せんの人々取とゞめこはらうぜきとせいしける、もり次きつとみてゐゝゐせたるほうしのふるまひやときをいかんら〳〵といろぞわらひけるもんがくいよ〳〵たまりかね、につくいおのこのことばぞと、かけ出〳〵したまへ共、人々にへだてられ、せんかたなくもひかへけり、きよもり公御らんして、扨もおこの法師かな、それがしがめのまへにてかゝるしわざをするうへは、らく中のらうぜきおしはかられたる事共なり、いそぎざいにしよすべしとて、國ずみをめされ、なんぢ

はもんがくをめしつれいづの國へ下るべし、それそれと有ければ、かしこまり承はり候ともんがくをうくひつ立はるおいづの、國へぞ下りける、地扨それよりもきよもり公、地御ざを立せたまひければ、おの〳〵おいとま、うくたまはりて三重やかた〳〵へ引上歸らるゝ、ゆり引ふし是は扱置、地國すみは、もんがくをともなひて、わたなべよりもふねにのり、ともづな切ておし出し、きびしくけいごをかためける、四方のうくうらさと打すぎて、やう〳〵こがれ行程に、こと遠江のなだをすぐる折ふしに、あくふうしきりにふきたて、かなみにふなばたたゝくこゑ、引きもたましゐも身にそまずすいしゆかんどりこゑをあげいかゝはせんとさけべ共、ことばもんがくはさはがすして、ふなばたをまくらとしはるをたかいびき、してぞおはしける、ことはかん取あまり腹をたて、いかに御ばう、かなはぬまでもかやうの時はぎやうりきいだしつゝ、我々をたすくるやうにしたまへと口〳〵にぞ申ける、もんがくやゝあつておきあかり、何を申そなんぢら、たゞおほようにやすめ〳〵といひすてゝ、かり又ふなばたにぞふしたまふ、日のくるゝにしたがつて、風はいよ〳〵ふきしきり、よせくるなみはふなばたを打こへて、只今かいていにしづむとみへてはるをいくる、心ちはなかりけり、かりふねはすこしもゆきやらず、おなし所にゆられつゝ、引なみにまかれめぐること、しやりんのことくにみへにけり、せんちうの人々はみな一どに手を合せたすけたまへやなむあみだ、おたすけあれやうく御ばうとてはるおおめき、さけんでいたりけり、かりもんがくはおとろきたまふけしきもなく、いろあらおもしろのいろかいしやうとはつよくしばしはやしておはします、ことせん中の物共是を聞、扱〳〵にくきほうしのいひことや、ぜんゑの身にて有なればじゆずおしもんできやうをよみ、いのりたまふべき人のさはなくて、おもしろとはやしたまふは何ごとぞ、あの心にてこそながされたまふはことはりやと、皆一どうに申けり、其時もんがくおきあがり、いかになんぢら、あまりにたへかねがなしむに、いで〳〵風をやめてゑさせんと、ふねのへさきに立あがり、かりまじゆひせめずさら〳〵とおしもふで、引にうをだいがいけしこくふう、すいごせんほうひようだらせつ、きこくごちうにやくうないし、一人しやうくわんぜおんと、たつ

からかによみあげ、こと（は）いかにりう神たしかにきけ、このせんちうにだいくわんおこすもんがくかのりたるをしらさるかわれようせうの比よりも毎日せんじゆきやうをどくじゆし、くわんおんのひぐわんをたのむなり、さればもんがくをしゆごすべき所に、あまづさへなみ風を立、人をくるしむきつくわいなり、もし〳〵きかぬ物ならはそれがしが行りきにて、かいていの其内をひしほになさんとのたまひて、かいしやうをにらみ付大きにいかつて申さるゝ、かゝり（り）もんかくの一しん、引天道にやつうじけん、なみ風たちまちしづまれば、こと（は）くわう明かくやくたる日りんのふねのへさきにけんしたまへば、たゞはく中のことくなり、其ひかりをみ奉ればどうし一人まし〳〵たり、もんがく是を御らんしていか成人ぞといたまふ、有がたやたへなるみこゑのきこへつゝなんぢ大ぐわんをおこし人をすくわん心ざしこそしゆせうなれ、一たんの事によりるにんとは成つれ共、やがてきこくうたがひなし、なを〳〵行すへまもらんと、かゝり（り）たちまちくはんせおんとあらはれ、はくうんに打のりてくもいはるかにとびさりたまふは有がた、かりける次第なり、かゝり（り）せんちうの人々は、此よしをみるよりも、扨々もんがくはたゞ人ならぬ御そうと、いつれもきいの思ひをなし皆〳〵らいはいいたしつゝ、すいしゆかん取よろこびてかんおもかぢ（とめぶし）、とりかぢこぎ行は、ふねはいつにそ付にけるかの、もんがくのきやうりきふしき（引）なりける次弟やと、上下ばんみんおしなへみなかんせぬ、いろものこそなかりけれ

第二

さる程に、こと（は）兵衛の介よりともはいづの國のるにんとなり、いとうの入道介ちかにあつけられ、いろかい（ふし）なき月日をうくおくらるゝ心の、はるを（とし）内こそむねんなれ、こと（は）かくていとうの入道すけちかは平家につかへ奉り、いせい國中にふるいかたをならぶるものもなし、され共げんし代々の家人ゆへ、むかしを思ひ出しつゝよりともをよきにいたはり奉る、然る所にすけちかはこんど都の大ばんにあたりつゝ、たひのよういをしたまいて、よりともにうくれいきをのべ都を、さしてそ重引三上らる（ゆり引）ゝ、是は扱置、こと（は）爰にすけちかのそく女にわかのまへと申せしは、なさけ有ける

ひめなるが、いろ詞父ざいはんの其内によりともになれそめて、地ひよくのちぎりあさからす、地二世のゑんとぞなりたまふ、ことさる程によりともはわかのまへもろ共に、地ひろゐんに出たまひ、にはのうくけしきをみたまふに、きゝのこずへもうくはるめきて持いろ花かにしきか持くれなゐか、本ノマヽぬつてうめむの花がさに、てる日をいとふ、つきこざくらの地いとあいらしき花のかほ、みるに心もうくわかくさの下いろつまもこもれり、下地われも又、ふかきちぎりをうくすみれぐさ君といもせはかはらじと、下いろちかひを立て、下筆つばな、いろもにほひもうくぢんてうげ、のきばをひつさそふ、上はる風に引ゐた先うごく、地あおやぎは、いろなふみ事やといはつゝし、につことわらひうくわかのまへはしはしなかめておはし、ます、よりとも御らんしていかにわかのまへ我ひなのすまいといひながら御身にうきをなぐさめられうれしくは思へ共、いろこけにやうき世のならひにはあだなる年のうつりきて、地きのふの花は、けふの夢つなはかなきうきみなからへて、地さとらざるこそおろかなれ、ことわかのまへは聞召君の仰はさる事なれ共、わらはかくて有うへは、御みやづかへ申さんと、地さもたのもしくのたまひて、よりともをうくともなひてん中さしてぞ上三重入たまふ、かゝる所にことはいとうの入道すけちかは大ばんやくをつとめつゝ、本國にかへりすぐにやかたに立入、みだい所にたいめんし聞はよりともわかのまへふうふのゑんのむすびしこと、道にてほのかに聞て有、誠にて有けるかいかに〳〵と申ける、北のかたは聞召さすがけいぼのことなればよき折からと思ひつゝ、されはそのことわかき人のことなればたれしる人も御ざなくて、いつその比よりなれそめて今はしたしき中となり、はや一年もいろすぎ過とみはついと念比にそかたりけれ、ことは介ちか聞て今の代におほき其中にけんしのるにんをむこに取、平家のかたへ聞へなはかうくわいす共かいあらし、とかくより朝をしのびやかに打てすてもしも都へ聞へなは、びやうしとひろういたさんとことともふしなげにそたくみける、ことはきたのかた聞召尤仰はさにて候へ共、かやうにふかき其中をむけにうたせたまふことさりとはなさけなき事共なり、ひらにとまらせたまへかし介ちか聞てなに命をたすけとや、

中〳〵思ひよらぬことそこのきたまへとさを立て家の子せう〳〵よび出しかやう〳〵の次第なり、かまいてあまし申なと、かゝ念比にいひ付て其日のくるゝをうく待けるはきをはかな三重かりけるゆり上しだいなりさるふし程に、ことはわかのまへ此由をつたへ聞、いろことより朝にしらせんと立出たまふぞあはれ成ひめ君入心にいろ思召すは、はるかん此こと君にしらせなは父にむかふてふかうのふものゝ、はる又しらせすば、はるちぎりをきつる下かねことの、はる皆いつはりとなりやせんかんあゝうらめしのわが身やとゆりしはし、中なけかせ入たまひ引ける、けにまことおや子は一世のちぎりなり、ふうふは二世と聞なれば、はる君にわかれ参らせてかんあとにながらへ何かせん、はるせう有物はしのもとひ、あひへつりくのことわりをおとろくべきにあらされば、地きみのめいにかはりつゝ父うくのしんゐもはらさせんと、思ひさだめてひめきみはなみだながらにそれよりもよりともこうのうくおはします、かは御まへを、下さしてそ引出らるゝ、ことはよりとも御らんしてこはうつゝなき御ふせいいかに〳〵と仰ける、わかのまへはかほふり上、かんいろあゝ扱々はつかしき申ことにて候へ共、かんいろことはわか多介もかはいか成天まの入かはり、いろかん君をこよひ打奉らんくわだての候へは、色つゝむにあまる我思ひろふし何と成なんかなしやとうれいふし涙と共にのたまへはへ持はことはより朝大きにおどろかせたまひ、よくこそしらせたまふぞや、介ちかにみはなされかゝるごにおよぶこと、思へは思へはうらみなし御身共に打しにしながきちぎりをむすぶべしと色涙をはら〳〵〳〵〳〵とぞなさるゝ地ひめ君は聞召かんあゝ、おろかの君の仰やな、はるいかにも命をまつとふして、地はるひそかにおちさせたまふべし、はる君は天下のぬしと、なるべき御身にて、打じにせんとおほしめす、はる御心こそ下いおろかなれ、はるわらはふだひのものなればいろことは君のせんどに立事はねがふ所のさいわひなり、ことはひらさらおちさせたまふべしさりながらわらわがしやうぞく召れつゝ、女のすがたにさまをかへ、おちさせたまへと申さるゝ、より朝は聞召いやとよ御身をのこしをき、さらにおつべきやうもなしたゞ、打じにと仰ける、ひめ君は聞召かんのふいかにわか君さま、はるいひかいなき御心、はるみづからふびん下に思召、ことはいろ打

しにと有事は忝は候へ共、我身のためとおぼすなら、へんしもはやくいろおちさせたまへとはるをことばをつくして申さるゝ、こともりなかも大きにあきれていたりしが、扨も〳〵ひめきみの御心中申も中〳〵おろかなり、いかに我君御なげきは尤なれ共、ひめ君の仰にまかせ一まづ御しのびしかるべしと申上る、頼朝今はせんかたなく、さ程にすゝめたまひなば、さあらばしのびおちゆかん、かんあゝさりとてはうらめしや、はゝこよひわかれて又いつか、かんあひみんこともかたいとの、はゝよるべなぎさのすてをぶね、かんとまりさだめぬ、うき世やとうれいしばし、なけかせたまひ持ける、扨地有べきにあらざれば、袖とそでとの露なみだ、おちさせたまふ、うく心の内いろをあはれと、下引いはんかたもなし、地それよりもわかのまへ、ことは頼朝公を思ひのまゝにおとしをき、今は心やすしとて、かゝり御すかたにさまをかへ、よせくるてきをうく待たまふ心の内こそきをい三重上ゆゝしけれ、ゆり引是をはしらで、地介ちかはことらうどう共を召ぐして、よりとものおはします、やかたへこそはよせにけり、まひかもかりとよりひめ君、かねてこしたることなればより朝にさまをかへ、なきなたをかいこふて、ひろゑんに立いでゝ、よせくるてきを、下きまち引がいろつむりたまふ、介ちか是をみるよりも頼朝と心へて、あれあますなと下ちすれば承はりて候と我も〳〵と切てかゝる、ひめ君なきなたふりまはし、八方をかけやぶり、とうなか、ひやうしほそくびさうのこて、あたる所をうくさいわいにはらり〳〵と三重きりゆり引たまふためしまれなる、地次第なり、かゝされ共てきは大せいにて、入かへ入かへせめければ、かなふへきやうくあらずしてはるをついに、打しにしたまひける、ことは介ちか是をみるよりも、しすましたりとよろこひ、たいまつふつてみてあれば、頼朝にてはあらずしてひめぎみがくびにて有ければ、介ちか大きにおとろき、より朝をたすけんため身かはりに立けるかな、にくき女の所ぞんかな、げんざい父をそむきつる天はつ発にあたつたり、扨〳〵せひなきこと共かないかになんぢら、頼朝いまだとをくはおつまじき、はや〳〵おつかけ打とめよと、かゝりらうとう共に申付、あとをしたふておつかくるかの、介ちかゞ心の内、ふとうなり共中〳〵申斗はなかりけり

第三

かくて其後ことよりとも公はわかのまへのちりやくにて、あやうき所をしのひ出、よはにまきれておちたまひもんがくのおはしますひるがこしまに立こゑ、すぐに内に入せたまへは、もんがくやがてたいめん有、只今のらいりんふしきさよとぞ申さるゝ、頼朝は聞召誠に是までまいる事べちのしさいで候はず、きはうはほうでうの四郎ときき正とこんしのよしを承はる、しからばそれがしをときまさに合せてたべ、ばんしはたのむとのたまひて、介ちかゝむほんの事、わかのまへの有さまを、はしめおはりをうくかたりつゝ、涙にくれさせたまひける、持こもんがくもくねんと聞たまひ、扨も〳〵介ちかは道をしらぬくにんなり、又わかのまへは女しやうとはいひながら、しゆ君のゆくゑを思ひつゝすてがたきめいをすて、御身かはりに立ことは扨〳〵やさしき心かな、ふしおやにまさるうくしんていとながさるゝ、ことよりともは聞召き方ののたまふことく、介ちかは代々けんしの家人なりおつとの心をもつならはそれかしを打はたし平家へちうしんいたさんとの其くわだては有ましき物をわかのまへは女と申せ共、一やのなさけを思ひつゝ、我身にかはり申こと介ちかにはるかまさりし心ばへ、思へば〳〵ふひんなり、我も一所に打じにと申せしをせひにとゞめ申つゝ、命かはり申事露ちり程もおしからし、ふだひしゆ君にかはる事扨もくわほうの我身やと、ひとりいさみし心さしいつの世にかはわすれんとしれいはし、なげかせ、たまひける、もんがくはみたまひて御なけきことはりなり去ながら、もはやせんなきことなれば此うへはそれがしに御まかせ候へし、ほうでうへ立こへ何とぞ頼申へし、地いざこなたへと申つゝ頼朝公をうくともなひてりくほう條、下へやかたへいそがるゝやかたになれば、ことあんないこふて入たまひ、時まさにたいめん有、其時もんがくいかにときまさ殿かやう〳〵の次第なり、き方を御たのみなさるゝなりとはしめおわりを申つゝ、ばんしはたのむと申さるゝ、ときまさかうべをちに付扨も〳〵みやうがなやかゝる折からならずして御ら

いりんは候はし、三代さうおんのしゆくんと申、それかしごときの者をたのむとの御ことは、何しにそりやくに存へし、御心やすくおぼしめせとさもたのもしく申さるゝ、其時頼朝扨々たのもしきしんていかな、われようせうの時よりもおやのかたきを扨おふせ、ほんもうとげたく思へ共時いたらねはちからなしさいわいときまさにたいめん申此うへは、すいぶんちりやくをめぐらし、平家をほろほす手たてをはよきにはからひたまへ、ひたすらたのむと仰ける、ときまさ承り、誠に上いのごとくおごる平家をほろほし、よしとも公御きやうやうにほうせんと思召さる御しんてい、尤こふこそ有べけれ、くわん八しうの其内は皆々せんぞの御家人なり、君思召立せたまはゝはたれかいはひ申へし、さあらはもんがくは京都のあんないよく存のことなれは、是よりひそかに都へのぼり、折をうかゝひねんせんを申うけ、いそき下ちやくましませいかに〳〵と申さるゝ、もんがくは聞たまひ是はよろしき御はからひ、いかにも都にのぼりつゝねんせんをちやうだいし、やかて下り申さんと、地いろ頼朝公に御いとま申上、ときまさにうくしきだいして都を、さしてぞ引三重上らるゝ、地しつ是は扱置、こと爰にときまさの御そく女さくらのまへと申せしは地げにやうきひの花のかほ、りつきうのふんたいも、かんしよくなきがことくにて、地うせいしの二女とうく申共是にはいかでまさるべき、ことある夕ぐれの事成に、上ろうたちを召あつめ、御ひさうの手がひのとらをめしよせ、地こひによるべのいとふかく地心をそむるくれなひの、つなをうく持せたまひつゝ、しばしたはふれたまひける引いろきやうをとりあいはせにすむとり木にとまる人はなさけのこんぎやら〳〵あつきやらこんぎやらこ、下にすむをとりなみにゆられてあなたへざらり、こなたへざらりとみつくとらをめでさせたまひける、ことはいかに女房たち、此からねこと申は戀ぢのたねとなる物ぞ、地かのかしはぎのゑもんのかみ、女二人の宮をみそめつゝ、うたこひぢにまよふうたかたの、ふるき思ひを引つなのながきちぎりをむすひしも、此からねこのゆへぞかし、いろあゝかはゆらしやとのたまひてみつしはしたわむれたまひける、ことはかゝりける所に頼朝は北條のなさけゆ

へ、しのびてやかたにましますが御さびしくやおぼしけん、こゆみにこやをうく打つがひまとをいてこそ上三重おわしけれ、引ゆりかへり地ひめ君まがきのそともより此有様を御らんして、ことはめのとのむめがえ召れつゝ、いかにむめがえ、只今あのやかたにてやうきうあそばす少人はいか成方ぞと仰けるめのと承はりいまだしろしめされずや、あれこそけんじの大将よしともの三なん、兵衛のすけ頼朝公にてましますが、此所のるにんとなり、父上様を御たのみ候と有のまゝにぞ申ける、ひめ君は聞召、扨はさやうで有けるが、地其まゝ思ひをかけたまひ、かくいつくしき若君の、かゝるひなの御すまひ、さぞ物うく思召さん、さよのねざめのひとりねに、たれなぐさむるうく物もなくはつさこそさびしくましまさんいとおしのうく御事みやといろしばしなかめて、おはし持ます、ことはひめ君あまりにたへかねていかにめのとせめての御なぐさみに地この花をうくまいらせよとりをくさくらの、下ゑだを引たおらせて、ひそかに御ふみあそばして、ことはなのきとめをおしつゝみ都のきみさまいるちらぬまにとかきたまひ、めのとにこそはわたさるるむめがゑはなをうけ取て、地よりともの うくおはしますりをくやかたを引、下さして引そいそきける、地御そはに成ぬれば、ことはいかに申さん都の殿、かゝるはいしよの御すまひ御つれ〳〵に、ましまさんとひめ君の御かたよりはなを一本こされたり、是〳〵御らん候へとやかて御前にさし出す頼朝は御らんして何時まさのそく女より御いんしんと候か扨々あづまのはてまてもかく心有上らうの御しんていこそやさしけれ、それこなたへと取ておそしとみたまへば、花に御ふみそへて有、頼朝はつとおぼしめし、御ふみをみたまへばさもじんじやうなるふてだてにて、おもひのかずをかきたまふ、かんいろたまさかに一め見しよりこひぐさの、露もおもひもみだれがみいろこいひかいもなきしづのめにせめてなさけはありそうみ、こかるゝおもひをといたまへみやこのとのとかきとどめ、ちらぬまにとするゑに有、よりともは御らんしてさても〳〵いつくしきしゆせきやな、ちらぬまにとあそばせしはとくおれといふことか、やさしのひめの心かな、かへしをせんとおぼしめすが、いや〳〵かやうのくやみにこそ、おもはぬなんぎにあふぞと

て心で心を取なをし、いかにめのとかへりて申さりやうは、御かへしいたしたくは候へども心にふかきのぞみあり、其うへはいしよのことなればよそのみるめもつゝましや、かさねてきたりたまふとも中々たいめんかなうまじとさもあらゝかにのたまへばむめかへめんぼくうしないて、地すご〳〵とうくそれよりもはるをやかたに、こそはかへりける、ことはひめきみはまちかねさせたまひつゝ、はしちかく御出有、いかにめのと御かへしはと有ければ、むめかえなにともことはなく、中々ならぬこひゆへに心つくさせたまふなとはしめおはりを申あくる、ひめきみは聞召さて〳〵かゝるわか君の、こひぢをしらせたまはぬかや、よし〳〵さやうにのたまふ共、またこそふみして参らせんと地よにうらめしくうくうちながめはるをやかて、内にそ入たまふ、ことさる程によりともはひめきみの御ふみをとり出し、さても〳〵はつかしやかゝることのあるよしをとききさにきこへなばいかなるやしんかいできなんとしばしあんじておはします、かゝりける所にめのとの藤九郎もりながおもはずしらずきたりしが、よりともの御ありさまを見まいらせ、君は何とやらん御物おもひのいろみへさせたまふ、ふしきさよとそ申ける、よりともきこしめしつゝむにあまるわが思ひ、何かかくし申べき、かやう〳〵の次第にてときまさの息女よりふみをいつつうこして有、さいぜんすけちかに中たがひ又此そくぢよのなさけゆへときまさにうとみられてあるならば、なにとなるべきいろふしわが身ぞといろふししばしあぐませたまひける、持こともりながきいてこはめでたき御こととかないかにもしのばせたまひつゝひめ君と一所にならせたまへかし、またすけちかと時まさのしんていは中〳〵もつてさういなり、君ひめきみとふうふにならせたまひなはときまさきえつうたがひなし、其うへそれがしはこよひふしぎのれいむをかうふりさふらふ、きみはやぐらがだけに御こしをかけられなりつなはこがねの御さかつきをすへ、もりながはしろかねのてうしをもち、御酒をすゝめ申せしに、きみ三度きこしめされてのち、三しまへ御さんけいあり、ひだりの御あしにては、そとのはまをふみ、右の御あしにてはきかいかしまをふみたまふ、さて左右の御たもとには月日をやどし奉り、こまつ三本かし

らにいたゞき、南へあゆませたまふと見奉る、ふしきなりとそ申ける、よりともはきこしめしそれかしもふしぎの夢のつげ有し、たとへはこくうより山ばと三ばとび來り、よりともがかしらにすをくひ子をうむとみつるなり、いかに〳〵と有ければ、もりなか承はり、さて〳〵めでたき御れいむ、まづそれがしかゆめにそとのはまよりきかいがしままてふませたまふ御こと、是六十よしうをたな心におさめさせたまふ御すいさう、又山はとの子をうむ事是御しそんはんしやううたがいなし、かゝるおりからに御ゑんをむすばせたまふこと、かへす〳〵もうれしけれ、ひらにいろ〳〵御しのび候へとことばをつくし申ける、よりともゝさすがいわきにあらされば、地もりなかにいさめられひめ君のおはしますいろ〳〵くり下やかたへ、しのばせたまひけるやかたになれば、ことのとのむめがえよび出しいかにめのとさいぜんひめきみより御ふみたまはりしを其まゝさしをき申ことおもへば思へば後くわいなり、それゆへしのび參りたり、よきやうにはからひ、ひめ君に合せてたべとのといかにと仰ける、こと承はりさいぜん御かへり事なかりし事、ひめ君うらみさせたまひしなり、さりながらかやうにたのませたまふうへは、ずいぶんよきやうに申つゝ、やがてあはせ申べし地こなたへ御入候へと、よりともをうしともなひてつほねをさしてそ入にける、地おりふしひめ君は、地物さひしくおほし召いとによる物ならなくに、地うわかれしの心ぼそくもことのねの、地おつとを思ひこふとよむさうふれんといふきよくをしはし引てそおはし、ける、むめがえよき折からとおもひつゝ、なふいかにひめ君さま、たゞ今みやこのとの様よりさいぜんの御かへりこと參りたり、是々御らん候へとまことしやかに申ける、さくらのまへふり歸りみたまへば、よりともこそはきたらせたまふ、ひめきみ色はつとおぼし召さしうつむいてそおはしける、よりともは御らんして御うらみもつ共なり、とくに御かへりこと申たく候へ共、われはるにんのことなれば人めをつゝむばかりにて、御かへしもせざりしが、おもへばきみの御心身にあまりてのうれしさに、むめがえをたのみつゝ是まで參りさむらふに、地せめてなさけはあかしがた、しほひにみへぬおきの

石、かわく　うくまもなきわか袖の、地ほす日をいつとしらなみの、地よるべのうきをうくといつみたまへなふ上らうと仰ける、ことさくらのまへはきこし召おろかのきみの仰かな、地ほそたに川の丸木ばし、地ふみかへされてうさつらさ、たれにかたらんもしほぐさ、かきあつめたる身のはぢをいつの世にかはほし月よ、あけなば人のとがめんにみはつおかへりあれとぞ申さるゝ、ことはより共もめんほくなくもおほし召、御かこちことはりなり去ながら、身にあやまりのあればこそかやうに心つくしこと、地ねもせでよはを只ひとりやみはあやなしつきゆりむめかえを、地ひたすらたのみ申つゝ、是まて参り候ぞ、何と仰有とても、こよひ一やは御そばを、はなれ申事あらじとみはつただしほ〳〵とそぬれかくる、ことはひめきみはきこし召おかしの殿のことばやなこよひばかりとのたまふはあけなばはぢをあたゑんと、おぼしめさるゝ御心おもへば〳〵はらたちや、はや〳〵歸らせたまふべし、地さだめなきよのむらしぐれ、よそのこずゑのならいして、つれなくうらみたまふなよ、又と御めにかからじとみはつそらめをしてこそおはしけれ、ことはよりとも今はことばなくいかにむめかえ何といひよるべきたよりもなし、ばんじはたのむと仰ける、其時むめがえなふいかにひめきみさま、みやこの殿のしのびぢもうはのそらにてさらになし、地ふたばのまつの千代かけて、かはらぬ殿の御心、あさくはおぼしめさるなよみはつひめきみさまとぞ申ける、ことはむめがえの中立にてさくらのまへも、御心打とけがほに、地いろほやりとわらひたまひける、地ことはよりとも是を御らんじて、地世にうれしくぞみへにける、ことは其時むめがえはぢぶんはよきと思ひつゝ、御そばを立ければ、姫君そでをひかへつゝ、何とてかへり申ぞや、ひらにこよひはよもすがらなぐさみたまへと仰ける、むめかえ聞ておろかのきみのおもはくや、まだよひならば中立の是に相つめ申べし、もはや君と殿様はみづもらさじの御中に、わらはざしきにながいしてさまたげなさんやうもなし、地あすこそ御めにかゝらんと、さもおかしげにうく申つゝみはつめのとは内にそ入にけることは其時頼朝はひめ君の袖をひかへ、扨々つよき御心、かくなり申此うへは只何事も〳〵打とけたまへとのたまへはひめ君は聞召我らことき

の身のうへにかゝる御ぎよいの有うへは、何しにそむき申へし、いさこなたへとのたまひて、やがて手に手を取くみて、み内をさして入たまふ、是そ誠の世の中の、戀のそめきぬ是成はと皆かんせぬ者こそなかりけれ

第四

かくて其後、都もひなもこひにはなるゝ世のならひ、兵衞のすけよりともはさくらのまへになれそめて、あさからざりし中となり、今はうきことうちわすれ、もりながもろともに平家をうたんはかりこと、さま〴〵かたりおはします、かゝりける所にもんがくはことゆへなく都にのぼりゐんせんを申うけ、よを日についではせくだり、よりとものおはしますすぐにやかたに參りつゝ、みやこの次第を申上ゐんせんをさし出し、よろこびたまへと申さるゝ、よりとも是を御らんじて、こはありかたき次第とて、てうずうかいで身をきよめ、いくわんたゝしくひきつくろひ、ゐんせんをうけ取三どちやうたいなされつゝ、おひらきみたまへば、きよもり一るいをついたうし、しんきんをやすめ奉り、げんしの御代となすへしといさいこまかにかきおさめ、兵衞のすけへと有けれは、よりとも是をはいじゆして、こは忝き御こと家のめんぼく世のきこへ、もんがくの御ほうし是にすぎたるうく事あらじとはるをよろこび、たまふはかぎりなし、こと其時もりなか申やう、誠にめでたき御事かな、このたびもんがくのはたらきとかふ申におよばれず、ゐんせんちやうだい有うへはくわん八しうの諸大名、みな〴〵きみにつきしたがひ、御代ばんせいのはんじやうはたゞいまのこと共なり、さりながら我君にいまださだまる北のかた御さなくて、おぼつかなく思ふなりすいさんなからそれかしぞんする次第をもんがくへ申へし、北條殿の御そく女さくらの前と申せしは、なさけ有けるひめと聞、しからはきはうのはからいにて北條殿にのたまひて、君と御ゐんの有ならはいよ〴〵ぐんせいつきしたがい、ほんもうをとげたまはん、此こといかゝ有べきとひそかにこそはかたりけれ、もんがくは聞たまひ尤きはうのしんていじう〴〵の御よしみおもひたまふはたうりなり、ぐ

そうもない〳〵其むね存候へとも、いまだゐんぜんなき内は四方の聞へをはゞかりおもひながらもゐんにんす、もはやゐんぜんいたゞきし此うへは、たれにはゞかり申べし、いかにもこのたんしかるべし、さりなから我はほつしのことなれば、何とやらんにあはぬやうに思ふなり、御へんはめのとの事なれば此むねだんじたまふべし、其時それかしもよきにはからひ申べし、定めてときまさも一たんいはひのことも有べきがたつてしいなばしゐびよく同心いたさるへしいそぎめしよせたまふべし、もりなが大にゐつきして、さあらは北條殿を是へ呼よせ申さんとやかて、下つかいを持立にけり、こと時まさ何事やらんとつかひと打つれしゆつし有、御前にかしこまりもんがくにたいめん有、さう〳〵の御下ちやく都の次第いかにいかにと申さるゝ、よりとも御らんしていかにときまさ、君よりゐんぜんをちやうだい申たり、是〳〵おがみたまへやと世にうれしくも仰ける、時まさやがてはいしつゝ、こは有かたき次第かな、かゝるせんじの有うへはへんしも早く都へのぼり、おごる平家を打はたしけんしの御代となすべし、さて〳〵もんがくの御ちうせつあげてかぞへむやうなしと、よろこびたまふはかきりなし、もりなかももんがくよき折からとおもひつゝ、北條にうちむかい、今我きみの御いせいは出る日のごとくなり、されどいまだきたの御方御座なくて是のみ心にかゝり候、はゞかりながらわれ〳〵のそんし候は、さいわいときまさとのの御そくぢよさくらのまへとわがきみと、御ゐんのむすばせたまひなば、君もよろこびおほし召我々までもたいゐつ是にすぎたることあらじと、さも念比にぞ申ける、ときまさは聞召、仰もつともしごくせりしかりとは申せとも、われらごときのむすめをはきみへさしあげ申こと、あまりみやうがなきことゝもなり、此ことにおひてはゆるさせたまへと申さるゝもりなか聞てきはうの御じたいもつともにては候へども、君かやうにならせたまひひとへにきでんを御たのみなさるゝうへはせひにおゐてわかきみをむこきみになしたまへ、ひらに〳〵と申ける、北條もないしんにはとび立程によろこべとも、一たん御じたい申せしが、とかくはきみの御ためと、はんたん其方たのむなり、君の御前をよきやうに御はからい候へと

さもゆゝしくもれいき有、もりながなのめによろこびて、君にもつぶさに申上る、頼朝もさくらのまへとはないく〳〵になれそめさせたまひければ、一しほきゑつかぎりなし、かゝもりなかやがて内に入、ひめ君をうくともなひてはるを其まゝ、おもてに出にけり、地さくらのまへも頼朝に、一世とかけての中なれば、わるびれたるけしきもなく、心にゑみをうくふくみつゝはるをやがて、なをらせたまひける、其時に女房立地てうしかはらけ取出し、地千代萬代のかめの酒、地うくむ共つきぬ御中と、のふづうたふつさいつさゝれつ、しうげんのうくぎしきをはをくやがて下とゝのへ、引たまひける、ことよりともは北條に打むかひ、かく一所になる上は御へんひとへにたのむぞと、御かはらけを下されば、時まさつつしんでちやうだいし、こは有がたき上いかなと、三ごんほして其後に、かくそれかしの有うへおつ付君を御代に立、ほさのしんとなり申さんと、かゝおどりあがりとひあがりよろはるをこび、たまふぞだうりなる、ことよりともかさねて仰けるはいかにときまさ、平家ついたうの其ためににんしじゆをあつめ申べし、東國のものともは何れもさいそくにしたがはんや、いかゞあらんと仰ける時まさ承はつてこはおろかの御ぢやうかな、とう國はとうもかうけも君の御家人ならぬはなし、されども平家を取てよりしはらく命をつかんため、一たんしたがふとは申せ共、君おぼし召立せたまはゝ、東八か國の其内にいぎにおよぶ者あらじ、先々くわいぶんを御まはししかるべしとそ申上る、よりとも聞召、其だんしうちやく申たり、かゝるじせつにあふこともひとへにしんりよのめくみといひ、其上おもふしさいの有間、さくらのまへもろ共に、しのひて三しまの明神ゑさんけいせんと思ふなり、それ〳〵と有けれは、時まさ承りはつてともかくもとのたまへば、さあらはさんけい申へし、去なから人あまたにてあしかりなん、かちゞにまふで申いろさんと、地さくらのまへをうくともなひてやかて引中三重かんしやうぞく上ゆりなさ行れける、地しつさて其後に、地よりともは、地うひめ君に打むかひ、ツキこいかにさくらのまへ、かりそめながら御身とはちよもかはらぬ中となり、世にうれしくも思ふぞや、大夫こひめ君は聞召いろこわらはゝあづまそだちにて、いろこ

くなさけ有御ことば、何しにへだて候べき、其うへわらは御道しるべ仕り、御心をなくさめんと地世にうれしけにたはむれて、地つれ立出させうくたまひける、地ひろいふし心の内こそ、たのもしき、地神にあゆみをはこぶ身の、地かくもらぬ日かげ持のどかにて、地心にかゝる入くもゝなく、はやくも代には、いつの山、下ふもとの花のさきそろひ、はろつれなくみねの持松かえはみひとり春をやおくるらん、地ふるいの持もりにうぐひすの、折しり持かほにこゑ立て、うくあさいもならぬたびまくら、ならべしすへは、つき長坂や、地こまのあしなみしどろにて、しるもしらぬもたび人の、袖持打はへてあまさかる、ひなにもこひのうくあればこそはつはつねが原ときくから、に、地心うき立うすがすみ、地うはるのなごりにうぐひる花の七つかれ木坂をも打過て、地中しつむかふをはるかに、上ながむれば、はしめて、ハルみほの松ばら、本ゆの、きうつみどりの、いろ色もせいたいに、地くものおびかと残るゆき、つもるめい所のうくかず〳〵は下つみげにおもしろきふな、よばひ、地たごの入うみうくうらゝかにつなしほ木のさくら折持て、地たれにかみせんしおり山、いろをもかをもたまつばき、八千世むすばん、うく我々がみっゑんなおかしき物もふて、地神にねがひもきみのため、つねにするがの山道に、まてこと持問んかりかねのうく引はるくるふし歸るも入おしき夕まぐれ、地月のひかりは清見がた、心をすましかく斗本ふきよみりかた中なみの、せきもりとめず共、下月をみすてゝるぐへきと、口すさみ持つゝそれよりも、四方の山〳〵うちながめ、つまもろ共入に爰ははやいろはつみ今ぞ三しまに付たまふ、地太夫かゝり扮神前にさんけい有、數のほうへいさゝげつゝ、心しつかにふしおかみいろねかわくは、いろ引しんりきにおごる平家をほろぼし、げんしのいろ中御代となしたまへ、それ神は人のうやまふによつてなをまし、人はしんのとくによつてうんのそふ、ひとへにじんぎくわう大のじひをあをぎ奉る、いろ南無引きみやうちやうらいと、いろきん一心にきやいをかけさてんしんぜんを、うく下かう有、とめふしやかたをさして歸らるゝ引頼朝の御有様、たのもし共中々申、いろ斗はなかりけり

第五

かくて其後、ことよりともは三しまより御下かうなされつゝやかたに入せたまひければ時まさ夫婦御むかひに罷出さう〳〵の御下向めでたきよし申さる、頼朝一しほけうにいらせたまひばんしはふうふたのむとてゆたかにくらさせおはします、かゝりける所にうさみの三郎すけもち、はや馬にてはせ來りつゝしんで申上るは、たう國のぢう人いとうの二郎助近は、せんぞの御おん打わすれ大ばの三郎かげ近を一身になり、君を打奉らんとほう〳〵せいをもよふし候、其まゝすておかせたまひなばすこぶる大事に候と大いきついで申上る、頼朝は聞召、扨々にくき介近がふるまひかな、さいせんそれがしをうたんはかりこと、それさへ道をしらざりし、ぐにんなりと思へ共時いたらねはさしおきぬ、此たび大ばにくみすることぶだうといふもあまり有、かれらがおしよせ申共何程のことかあらんとたゞ大やうにそ仰ける、時まさ承はつて、尤いくさのならひせいのたせうによらず、ひとつは將のはかりこと〳〵は申せ共、大てきをみてあざむきすこしきにはおそれよと申ほんもん候へは、先ゐんぜんにみげうしよをあひそへ御まはし候はゝ、國々の御家人共そくしにさんにう仕らん、此ぎいかにと申上る、頼朝公聞召、尤此ぎ然るへし、さあらはせいをあつめんと、御くわいぶんのあそばしゐんぜんの相そへ、もりなかを召れつゝ、右の次第を仰付られはやとく〳〵と有けれは、かゝり承はり候とて、やがてみげうしよをうけ取うく御前を立みうらをさしてぞ三重いそぎける、ゆり引扨それよりも大助は、御ふれを聞よりも、一もんの召つれて、頼朝のやかたをさしてぞいそぎける、こと御前になれはめしにおふじて參るよしつぶさにこそは申けれ頼朝きゐつかぎりなく、よしあきらはらうたいのこと、成に時をうつさす來らるゝこと、悦び入と、のたまひて、御かわらけを下さるれば、大助やがてちやうだいし、御そんがんをはいしつゝ扱も〳〵御父よしとも公によくもにさせたまふ物かな、いかに一もんの人々よ、おごる平家をほろぼして源氏一とうの御代となしぶ將にあおぎ奉れ、あつはれゆゝしの御大將と大きに悦ひ申ける、かゝりける所にとう國のげんし共御くわいぶんをみるよりも、我おとらしとそれよりも、かゝり皆〳〵

御前に下相つむる、（まひつめ）（いろをん）先一番にいづの國の住人、くどうもちみつがちやくなん、かの丶五郎うさみの平太、同しく平六とをかげ、につたの四郎たゝつね堀の藤次ちか家、七郎むしやのぶ近、そがの太郎助のぶ、うつの宮の彌三郎ともつな、さがみの國のぢう人、といの次郎さね平同しくしそくとを平おかさきの四郎よしざね、さなだの與一よしさだ、つちやの三郎むねとを、同次郎よし清、つゝゐの二郎しんがいのあら四郎、やすだの三郎はる近をはしめとして名有大名卅き、其外の諸侍、何れも御前にうくしこうしてみつれいぎをつとむぞゆゝしけれ、（こと）（は）其時頼朝人々にたいめん有いかにかた〳〵、せんぞのよしみを思ひつゝ此度のさんちやくしんびやうの至りぞと御きけんよろしくのたまへば、何れもかうべをちに付て、（かり）君をうやまひうく奉る（はつじんぎ）（みの）程こそたのもしき、（こと）（は）頼朝かさねて仰けるは、かた〳〵をあつむること別のしさいに候はず、平家の一るい打はたしたねんの本望たつせんと思ふなり、きけば大ばの三郎かげちか、いとうの二郎助ちか頼朝をうたんため、是へよすると聞て有、平家をほろぼす其はしめいくさかみのちまつりにかれらをうたんと仰ける御前に有し諸侍、この由を承はり、かげ近や助近かゞ何事（本ノマヽ）かしいださん、去ながらかれら二人のふみつぶし、門出いわひ申さんと、（かり）何れも御前のうく罷立さかみを、さしてぞ三重よせにける、（ゆり）（に）是は扨置、（こと）（は）さかみの國のぢう人大ばの三郎かげちか、いとうの二郎介近は東國の大名共、日々に頼朝へはせあつまる由つたへ聞、らうてうのことくにて一身のさはぎとなり、いかゞはせんとぎやうてんす、助近申けるやうは、かやうにせいの付うへはのび〳〵にては成がたし、こなたよりもおしかけいまたせいのよせぬまに一いくさいたすべし、いかゝはあらんと申ける、かげちか聞て何のさうだんまでもなし、このぎ尤然るへしさあらはせめかけ申さんと、（かり）下〳〵までに申付、思ひ〳〵の出立にて、あかはた風になびかし大手は助近か二千よき、からめてはかけ近一千よき、つがう其せいうく三千よきいづの國へぞよせにける扨頼朝の御かたにはみうら北條ちはかづさといの二郎をさきとして家々のはたさし物其せいうんかのごとくにてさかみをさしてそよせたまふいづさかみのさか

い川に兩ぢんたがひにゆきあひ時のこゑをぞあけにけること時にといの二郎さね平一ぢんにすゝみ出只今よせ來る物共はかけちか助近とみ申たり、なんぢらけんしの家人にて君にゆみを引ことはぜんだいみもんのくせ物なりいのちつがんと思ひなばかぶとをぬいてかうさんせよ日比のよしみには御前よろしく申べしいかに〳〵と申ける、兩人こまかけ出しつゝ立あがり、扨々にくきざうごんかなむかしは昔今は今、平家ぢうをんのあきみちて頼朝打て參れとの仰をかうむりむかふたり、一人もあまさしとさもくわんたいにぞ申けるさね平聞ておのれ上をおそれぬぐにんなり、しゆくんのまへもはゞからずでしやうでむかふきつくわい者あれおつちらせと下ぢすれは、かゝりはやりおのくわんとうぜい、われおとらしとうくみだれ入いくさは花をそ三重ちらしけるゆり引かう、いくさなかばのこと成に、こと平家方より只一きひをどしのよろいに梅の花をうしろにさし、一ぢんにすゝみ出是は大ばの景近がらうどうに、いなげの二郎ともきよといふ者也、げんし方の侍に我と思はぬ物あらばげんざんやつとよばはつたり、又みかたの中よりもくろいとおどしのよろひをき、大長刀をかいこふでまつさきにすゝみ出、人おほき其中になんぢ一人罷出、かうみやうがほになのりけるはおゝゆかしくも思ふなり、其うへ御へんがさしものに梅花を一もとさしけるは、花やかなるといわせんためか、とも清聞て、さればむめは花のあにともいひ、又はてきにあふとひとしくさきがけいたすしるしなり、扨きでんはいか成物ぞ與一聞てなんぢいまだしらずや、おかさきの四郎よしざねがちやくし、さなだの與一よしさだとしつもつて十八歳、其方がばいくわをはあらしとなつてちらすべし、いざしやうぶをけつせんと一もんしに打てかゝる、かゝりいなげも聞ふるつは物にて引、ゑんにかゝれはやうにうけおふつまくつつしばししやうぶはなかりけりこと、いざくまん尤とてうへになり、下になり、いまたしやうれつみへざるか與市もとより大力わざとしたてに成けれは、とゝもきよしすましたりと悦びちからあしをふむ所をゑいといふてはねかへし、やがて上に打のりかゝりいかに友清あらしは花のとかぞとてくびふつゝとうちをとし太刀のさきにつらぬき是みよみやかた〳〵日比かうけ

んはきつるいなげの二郎ともきよをさなだの與市がうつたると、かゝり大おんじやうによばはりみかたのぢんへぞ引にける、ことはかゝりける所にふしきやてきぢんの方より其せい五百きばかりにて御ぢんの中へ入にけり、人々いかにとみる所に大將一人すゝみ出、是ははたけ山のしやうししげたゞ、御みかたに參り候とうく本ぢん、さしてぞ入にける、ことは大ばがぐん兵是をみて、いかにかた〳〵か程せいの付うへは、いかでかなひ申すましいざ〳〵はやくのがれんと我も〳〵とおちにけり、かげちか今はちからなく、扨々おくひやうしごくのやつばらとはかみをしてぞいたりける、さなたの與市是をみて一もんしにきつてかゝる、かげちか心へたりと、しばしかほどはたゝかいしがてきのせいにきをのまれさかをくだりににけゆくを、與市いかでかのかさんとうしろさまにてうどきる、のつけにかへす所をやがてくびうちおとし、けふのかうみやうれなりと、しんづ〳〵とぞ引にける、いとうの二郎もかげちか打じにときくよりも今はのがれんやうなしと、おもひさだめてうつて出るとをひら是にありやととはしりかゝつてむずとくむ、みかたの大せい是をみて一どに、とつとおりかさなり、地手取あしとりなわをかけ、はるを君の御前に引すゆる、よりともこれを御らんじて、扨々にくきくせものかな、それ〳〵とのたまひてさなたの與市にあづけらるまことにいくさのかどんてよしとよろこひいさみかいぢんまし〳〵てさかみになをらせたまひけるよりともの御いせいせんしうばんせいめでたしともなか〳〵申はかりはなかりけり

延寶六年午正月吉日

太夫直之正本屋　山本九兵衛板

ごばん忠信

第一

さてもそのゝちあふしうのぢうにんにさとうしやうじかじなん四郎びやうへたゞのふはよしの山にてしゆとたちの心がはりのありしとききみのふせぎやつかまつりすなはちそこにてそらばらきりみやこをさしてぞのほらるゝみやこにもつきしかば是よりいつかたへなりともおちゆかばやなとゝおもはれしがここにまたあはたぐちにりきじゆのひめと申てそれかしがすねんちぎりしゆうぢよのありけるがかれをたのみてひとまづをちばやなとゝおもひつゝかのりきしゆかやかたへたちよりもんほと〳〵とおとづるゝうちよりたそとこたふるいやくるしうも候はずたゞのぶなりとぞこたへけるりきじゆ此よしきくよりもなのめならずによろこひていそきもんをひらきてたたのぶをおくのざしきへしやうじさんかいのちんぶつにこくとのくはしをとゝのへてしゆをさま〳〵にもてなしけるたゞのふ心におもふようげにま事わすれたりをり〳〵きみの御ぢやうには七人のこはなすとも女に心ゆるすなとあるものをとおもひつゝけにのむまじきとおもひてのむてひにてはさつとすてのむてひばかりにてさけをはさらにのまさりけりりきじゆ此よしみるよりもひとま所へたちしのびはやあくをぞたくみけるげにま事わすれたりいまのよははうぐはんとのゝよとてはさらになしとききまさの御よなりそのうへまたときまさのおほせにもはうくはんかたのものあらばうつてからめても六はらどのへまいらするものならばかずのたからをのぞみにまかせてゑさすべしとのおほせなりみづからもよにきたゞのぶをつまとたのみてなにかせんたゝ六はらとのにまいりつゝ此よしを申あげたゞのぶをかたきのかたへわたしつゝかすのたからをたまはりてうきよをらく〳〵とをくらばやなどゝおもひさだめてまたたゞのぶのまへにちかづきてなふいかにたゞのぶどのなにとてさけをまいらぬぞや四こくさいこくのごかつせんにも人あまたうたれたるときく時はさとうどのにてましますかたゞのぶどのにてやましますこくとのくはしをとゝのへてしゆをさま〳〵

かとあんじすまひて候におもひのほかにひきがへてめてたくしやうらくまし〳〵て二たび御めにかゝる事なによりもつてうれしうさふらふわれ人をおもへとも人さらにわれをおもはざりけるなみたゝぬまにいそにつくあわびのかいのかたおもひと申たとへの候にはづかしながらもをしやくにまいりてまいらせんとひすいのかんざしあをやぎのそよとゆりかさしひとつのふてはたゞのふに三ごんまでこそしいたりけりさしもにかうなるたゞのぶもくちのすぎたるりきじゆめにやみ〳〵とたばかられ五ど三どさしうけ〳〵のむほどにみしんつもりてやまとなりいさごちやうじていわとなりさかづきのかすだにもかさなればゆんでのざしきかめてへまはりめてのさしぎがゆんでへまはりてんじやうもおほゆかもひらりくるりとまひければざしきにもたまりかねはんじをたのむりきじゆとてごばんをひきよせまくらとしてせんごもしらてそやとられけるりきじゆなのめによろこびてたちもかたなもとりかくし申さんとおもひしがげにまことにわすれたり大かうのつわものはそらねむりし人のこゝろをみるときくひとまづをこひてみんとてしやうじのひきてにかつはとあたりのふいかにたゞのぶどのなにとてさやうにしいふしたまふぞやをきさせたまへたゝのふとのと二三ど四五どをこしけれどもせんごもしらでやとられけるりきじゆなのめによろこふてあらうれしやないまははやときまさへまいらんとてたゝのふのたちもかたなもとりかくしてそれよりもときまささしてそいそきけるときまさの御まへにまいりつゝいかに申さんときまささまそれおうしうのたゞのふこそみつからかしゆくしよへゆふべきたりて候なりいそぎうつてをたひたまへはやとく〳〵とぞ申けるときまさ此よしきこしめされよくこそ申てきたりたりじりきじゆかなんちはちうのものなれはよきにはうびをとらすべしまづ〳〵それへとのたまへはうけたまはり候と申てしやきん十りやうにまきゞぬ百ひきりきじゆにこそはくたしたびにけるりきじゆなのめによろこふていそきをんまへをまかりたちたゝのぶうたせぬさきにさへかやうなるものをたまはるにましてたゞのぶをうたせてのそのゝちはさだめてくにの一かこく二か國のぬしにもならぬうれしやとよろこぶ事こそはかな

けれ

第二

さてもそのゝちときまさのおほせにはぢこくうつしてかなふまじはや〳〵うつたちたまへや八〳〵いかにとおほせけるうけたまはると申てゐまの小四郎ながの三郎かねこの十郎つちやの三郎もりたかこの八〳〵に三百よきをさしそへてはた一ながれさゝせつゝりきじゆかたちへといそぎけるこゝにまたものゝあはれをとゞめしはさいこく八しまのかつせんにうたれさせたまひたるあにのつきのふはたゞのぶのまくらがみにたちよりていかにたゞのぶたしかにきけなんじがたのみしりきしゆこそかたきのかたへそせうをしたゝいまうつてのむかふそやおちんとおもはゞはやをちよまたうちじにせんと思ふならばかくごをさためよとうたまひてかきけすやうにぞうせたまふたゞのぶゆめさめかつはとをきあたりをみれどもかたもなしこはくちをしきしだひかなさてはりきじゆめにやす〳〵とたばかられたちかたなまでをとりかくされたゞのぶほとのゆみとりかやみ〳〵としていけどられてきやうしら川をひきわたさるゝものならばさとうがいゐにきずをつけんむねんさよとてこゝかしこをはしりめぐりてみれとそのかひさらになかりけりむねをさすりたゝ一すぢにおもひきりてぞいたりけるそのゝちよせての八〳〵はりきじゆかやかたへをしよせて二ゐみへにをつとりまはしてときをとつとぞあけにけるそのゝちよせての八〳〵はこゐ〳〵によばはりけるいかにや申さんたゞのぶどのときまさよりのおほせにてこれまでうつてにまいりたりとく〳〵はらをきりたまへとたからかにぞよばゝりけるたゞのぶこのよしきくよりもいかにや申さんかた〳〵よゆふべこのところへおちきたりてありけるがなさけもしらぬりきじゆめにやみ〳〵とたはかられたちもかたなも候はずたのみしものはこぶし也われとおもはんものあらばいそきをしよせたまふべし八々いかにと申されけるそのときよせてのかたよりもぬしはたれともしらねとも六しやくあまりのだいのをのこくろいとをとしのよろひをきすんののびたる大たちをまつかうにさしかざしたゞの

ふか事ならはそれがし一人にまかせられ候へとてをめきさけんでかゝりけるたゞのぶこのよしみるよりもこはなにとかせんとおもひつゝあたりをきつとみてあればまくらにしたるごばんあり あつはれこれこそたゞのぶがさいごのたちよとよろこびてごばんおつとりさしかざしよせくるかたきをまちかくるこれをはしらでかのをとこがかうみやうがほにてかかりしをたゝのぶきつとみてこゝろへたりといふままにもつてひらいててうとうつてはかうべみぢんにうちくだきたゝのふなのめによろこびてやがてかたなをひんぬうて大せいにわつて入きつてのへうこそおもしろけれやなきさくらまつかいで四本がゝりのにはのうちひらりくるりとをひまはしよきつはものを十七八ききりふせてのこりしものともを四はうへばつとをひちらしいそぎ内に立かへりびやうぶしやうじに火をかけてんがかすみとやきたてうへなるかもねに手をかけとびあがりはふせきいたをけやぶりいゑのむねにとびあかりてうとんぼうのごとくにひらりくるりととびこへてそのよにあはたぐちをにげのびて四でうのあんじゆかたちへとしのばれけるみる人きく人をしなへてほめぬものこそなかりけれ

第三

さてもそののちたゝのぶは四でうかはらのあんじゆ本ノマヽかたちにつき門のほとりにちかつきてあんじゆこそことはりまてしばしわかこゝろあんじゆをたのむべきかりきじゆと申によばうはすねん契りをこめたれともかたきのかたへそせうするましてやあんじゆは此ほどたづねよりたる事もなしかれが心もたのまれずとやせんかくやあらんとあんじゆかもんのほとりにあんじくらしてそたちにけるかもののつげかやふしぎやなまさしくあんじゆがこゑとしてによばうたちをちかづけていかにや申さんによばうたちかたらばものをきゝたまへ一とせみつからはあうしうのただのぶとちぎりをこめてさふらひしがいつそやよしつね十二人のによばうたちをめしつれさせたまひあやしのうらよりおふねにめし四こくをさしておちさせたまふかそれがしも十二人のによばうたちをかへ

させたまひてしづかばかりをたゝ一人御ともにてよしのをさしておちさせたまふかうきよはさだめなきならひにてなにとかならせたまふらんたゝのぶどのの御事をおもひいだしてあらものさひしきこよひやとてことひきいざやなぐさまんとがくはさま〴〵おほけれと中にとつてもこかうのつぼねのつまこひかねてひかせたまふそうふうれんといふがくをおしかへしてはをしもどし二三どまでこそひきたまふたゝのぶなのめによろこふでもんほと〳〵とぞをとづれけるうちよりたそとこたへけるいやくるしうも候はずたゝのぶなりとぞこたへけるあんじゆなのめによろこびもんをひらきたゝのぶをおくのざしきにしやうじつゝさんかひのちんぶつにこくどのくはしをととのへてしゆをさま〴〵にぞもてなしけるたゝのぶはあんじゆかこゝろのほどはおほへたりさしうけひきうけのまむとするあんじゆこのよしみるよりものふいかにたゝのぶどのあまりさけをまいりたまふなよ御身はゆんでもめてもみな〳〵かたきの事なれはさけをひかへたまへとてさけもしいすしていたりしかかのあんじゆのひめかこゝろのうちのたのもしきとも中々申はかりはなかりけれかくてときまさにはたゝのぶを打もらしてうへをしたへとかへしけるされどもりきじゆ申けるはいかに人〳〵なにをさはがせたまふぞやたゝのぶをちゆき申ともてんをかけてもよもゆかじこゝにまた四てうへんにあんじゆのひめと申てさふらひしがさだめてかれがかたへをちゆくべしとおもふなりしからばいよ〳〵はらたちやいそぎをしよせたまふべし人〳〵いかにと申ける人人げにもとおもひつゝりきじゆをさきにをしたてゝやかて四でうがはらのあんじゆがたちへとをしよせて二ゐ三へにおつとりまはしてときのこゑをぞあげにけるたゝのぶこのよしきくよりもすはおもひつる事よとてまくらなるかたなをするりとぬき既にいでんとしけるかあんじゆ此よしみまいらせふかくなりとよたゝのぶどのなをゑたるゆみとりのものゝぐめさではふかくのいたりなるべししばらくまたせたまへとてひとま所へつつと入もへぎにほひのはらまきをたゝのぶにまひらせて此よろひ〳〵申はいつぞや御身のあづけたまひしよろひなりめしたまへと申されけるかけとまるそのひまにうはをひとつてまいら

するうはをひしむるそのひまになぎなた二えだとりいたし中にもすんののびたるなぎなたのさやはづしたゞのぶにまいらせて此なぎなたと申はそもいつぞや御みのあづけたまひしなきなたなりかねほどはしらねどもいま此ときのためそかしとたゞのぶにこそまいらせけるたゞのぶ此よし御らんじてかほとやさしきあんじゆにこれかわかれかくちをしやなさりながらふうふは二せのちぎりとなれば此よのゑんこそうすくともかならずらいせはめぐりあふべしいとま申てさらばとてひろゑんさしてそいでらるゝあんじゆ此よしみまいらせ二せのちぎりとのたまへばみつからも御とも申て二せのちぎりとなるべししばらくそれにまちたまへとてひとまところにたちよりておなじくもへぎにほひのはらまきをくさずりながにきるまゝになしうちゑぼしをつかふでしらあやたゝんではちまきにしたけなるかみをはつとみだして長刀をつとりひろゑんさしておりひろゑんさしてぞおどりいでよするかたきをいまや〳〵とまちいたりあんじゆのひめのしんちうをみる人きくものをしなへてほめぬ人こそなかりけれ

第四

さてもそのゝちよせてのものどもはこゑ〳〵によばはるやうたゞのぶどのはみるときくにはちがふぞやこゝかしこへにげのびていくほどいのちをなからへんこのうへはてんをかけてあがらんとも大ぢをわりていらんともなどかうたではをくべきぞはや〳〵いでゝうちじにせよたゞのぶいかにと申けるたゞのぶ此よしきくよりも大をんあげて申されけるはみなみなもさためてしろしめさるべしあはだぐちにてよひよりちようとさかもりしゑひぶしいたりしところをばなさけもしらぬりきじゆめにやみ〳〵とたばからなた脱(カ)れたちもかた本ノマヽをもとりかくされはこぶしをちからにめん〳〵にまいりあふそのときぬしはたれともしらねども六尺ゆたかの大のおのこのくろいとおどしのよろひをきて四尺あまりの大だちをまつかうにさしかざしそれがしをめにかけてすゝみにすゝんでかかりしをかの大たちをちうにてうばひとりめん〳〵にまいりあふそのときにてたつかたきもあらされは

ひとりはしなれぬいのちにてこれまでまいりて候なりいまははやてなみをおぼへし大だちまたなきなたも候へばたゝのぶかなきなたにてきりのこされし人人はごせをとふてたびたまへとて大なぎなたをみづぐるまにまはしつゝそれなぎなたのきつてにはこむているてひらくてしゝのほら入とんばうぎりよせてかへすはさゝなみぎりやなぎさくらまつかいで四ほんかゝりのにはのうちをひらりくるりとをいめぐりあんじゆのひめもたゝのぶをうたせしとゆんでめてにつきそひてかたきよすればきりはらふふうふの人びとかさらり〳〵ときりめぐるあんじゆのひめが手にかけてよきつはものを七八き手のしたにきりふするそのゝちたゝのぶはかたきのつはものを三ちやうばかりおひめぐるかあんじゆのひめはたゝのぶをみうしなひこゝかしことたづねけれどもさらにあたりにみへざればいそぎやかたへたちかへりまたたゝのぶ〳〵とよばはれどもをとするものもなかりけりあんじゆこの由みるよりも今ははやうたれさせたまふかかなしやなしなば一しよとおもひしにさきだちたまふかうらめしやおもふつまをさきにたてあとにのこりてせんもなしみづからもともにゆかんとおもひてちぶつだうへさしかゝりひころたのみし御ほぞんなればらいせをたのみたてまつるなむあみだふつみだぶつと是をさいこのことばにてそのとしつもつて十八さいと申にはかたなをくちにくわへつゝうつふしにさしつらぬきあしたのつゆとぞきへられしがあんじゆのひめのさいごのていあはれなりともなかなかになにゝたとへぬかたもなし

第五

さてもそのゝちたゝのぶはかたきを四はうへをつちらしいそぎやかたへたちかへりあんじゆのひめとよびけれとをとするものはなかりけりふしぎさよとおもひつゝぢぶつだうをみてあれは人一人きぬひきかづきふしてありたちよりてきぬひきのけてみたまへはあんじゆのひめにてありこはあさましきしだひかなわれがゆくへをかなしみてかく成けるかやいたはしやいまははや手にたつかたきもあらされはあふしうへ下らんもわがまゝなりとはおもへどもたゝのぶ

このまゝおちゆかはくさのかげにてあんじゆのひめがおもはん事のはつかしやさりながらはうぐはんどのゝ御ゆくへをみとゝげざるこそくちをしけれよしそれとてもちからなしこゝそしぬべきところなりいまぞさいごのかうげんとまたひろゑんにはしりいで大をんあげてぞよはゝりけるいかによせての人々たちくもをわけてゆかんとも大ぢをわりていらんともまたよせきたる人〳〵を一人ものこさずきつてすてんもそれがしがまゝにてありさりながらかたらばものをきゝたまへうらみのしにはあらねどもなさけのしにはあるぞかしそれをいかにと申にりきじゆと申せしによばうはすねんちぎりをこめけれどもかたきのかたへそせうしかやうになるこそくちをしけれまたおなじ女といひなからあんじゆのひめと申はそもこのほとのうすきちぎりにて候へどもわれがゆくへをかなしみてじがいをするこそあはれなれかれかこゝろのほとのはづかしさにたゞのぶこれにてはらをきるかうなるものゝじがいのやうをみならひて手ほんにせよ人〳〵ゑいといふまゝにこしのかたなをするりとぬきはら十もんじにかきやぶりざうをつかんでくりいだしぬんふつを申せどもこうなるもののくせとしてしぬるふせいはなかりけりそのときただのふ申されしはいかによせての人〳〵よちかふよつてくびをとりてさてほうこうのそのちうにはごせをたのみたてまつる人〳〵いかにと申けるそのとき人々はしりよりてくびをとりときまさへそあげにけるときまさもひろゑんまでいでさせたまひてさたうがくびを御らんじてこれみたまへや人〳〵たちつぎのぶたゞのぶとてかれらきやうだいのもの共はもろこしまでもなをあげしそのものどもがいまかくなるこそはかなけれさふらいとある人はかれらきやうだいを手ほんよとのたまひて何事もきみにちうこうをはげみたまへとて御そでをしほらせたまへば御まへなりし人〳〵もことはりなりとぞんじつゝともになみだをながしけるかゝるあはれのをりふしにりきじゆと申せしによばういづくよりかはきたりけんときまさの御まへにまいりて申けるやうはいかに申さんときまささまたゞのぶはうちとり申て候へばかゝるめでたき御きげんもたれゆへとかおほしめすひとへにみづからかゆへぞかしわすれたまはんそのさきに

御やくそくのじよりやうをたべとぞ申けるときまさ
このよしきこしめしよくこそきたれるりきじゆかな
さりながらいまこれにありける人〳〵のたゞのふが
くびをみてゆくへもしらぬ人々まであはれをもよほ
すはかりなりいはんやなんぢはふうふのみにてしよ
りやうといふはこゝろへねかたちは女とうまれきて
こゝろのうちはおにぞかしやくそくのしよりやうに
はしゆくたうはひろきところときひてありこれをな
んぢにとらするぞそのかどいでにはいそぎざうぐる
まにうちのせみやこのうちをひきわたしてそのゝち
は六でうかはらにてたけのこぎりにてくびをひきを
とすべしとの御ちやうなりうけたまはり候とてやが
てひつてざうぐるまにとつてのせわたすところはど
こ〳〵ぞかみは一でうやなぎはら二でうほりかわ三
でうあぶらのかうじ四でうしめや五でうのはしをう
ちすぎて六でうかはらへひきいだしこしよりしもを
ほりうづみたけのこぎりをくびにあていまぞさいご
よなむあみだぶつといふまゝにそろり〳〵とひきに
けるさてそのゝちにはゑいや〳〵とひきければあら
むざんやなりきじゆくびはまへにそをちにけりみる
ものきく人上下はんみんをしなへてかのりきじゆか
こゝろの中をにくまぬ人こそなかりけれ

延寶四丙辰年卯月吉旦

八文字屋　八左衛門板

義經地獄破

第一

それおもんみれば、ゑしやぢやりならひ、しやうじやひつめつのことはり、さかりなるひとはいちどはおとろうると、ふるきほんもんにあり、こゝに此ごろの事かとよ、ぢごくはめつして、むびらくじやうこくとなる、そのいわれをくはしくたづぬれば、せいわてんわう二十だいのかうゐん、みなもとのよしつねのはかりことによりて、あるときはうぐわんむさしをめされ、いかにべんけいうけたまはれ、しやばにての、しんいのほむら身をこがすによつて、今しゆらどうにをち、まん〳〵かうのくをうくることやむ事なし、いかにもしてこのくげんをまぬかれ、あんらくの身とならんや、べんけいうけたまはつて御でうもつともにて候、いそきあんひを廻らし、此事をはかるに、しよせんむほんをとげて、ゑんまのじやうをうちやぶり、一まん三せん六ぢごくをよしつねのため、心のうちにおさめたまはん、御たくみこそしかるべくぞんし候へとも、はゞかるところもなく申上ける、はうくわんしはらく御もひあんしあつて、是はわれらが一大事なり、そつじにしてはかなふまじ、承わればへいけのちやくそん、こまつの三みは、さいかくぶそうのにんときく、しやばにてこそげん平れうかとて、そのくらゐをあらそうといへども、いま此どにては、たがいにくげんをまぬかれんこそめてたけれ、此人とわだんして、かつせんのいけんをもとはやとて、いせの三郎を使ひにて申つかはれけるは、われふりよにこの一大事を思ひたつ事、まことにてんのめいずるところかとぞんし候おなじくはぢたのこゝろをひとつにして、たかいにしゆらのくけんをも、のかれたまへと申つかはれける、こまつどのきこしめし、なひなひへいけにも此ぎとくる所に、ねがふところのさいわいなりとて、やかてさいのかはらにて、へいけとけんじくわひしゆして、かつせんのひやうでうまちまちなり、はうくわんあふせけるは、むほんくわたつるといへとも、ぶぐなくしてそのせん有べからす、いかにもして是をもとめんはかり事をあふせられけれ

ばこ松どのきこしめし、けんげきをもとめんことといとやすかるべき、まつかぢどもをめしあつめ、そのやうをこのみうたせんに、なにのしさいの候へき、いそぎめせと仰ければ、べんけい承はつてめしふみをふれて、そうそくまいるべきよしをぞふれられける、べんけいかはやわざほめぬものこそなかりけれ

第二

刀かぢ井ぬす人かまのふたをぬすむ

さるあひだ、まいりあふかぢともはたれ〳〵ぞ、さんでうのこかちむねちか、まさむねさたむねなみのひら、よしみつながみつとうまのせう、しんさんなれどもまさつねにうだう、そのほかひしうのぢう、なをゑたるかぢとも、かずをつくしてみな大ゆかにぞかしこまる、ほうがん御覧じて、なんぢらを是へよふ事よのぎにあらず、しゆらのくげんをのがれんため、むほんをくわだつるといへども、どうぐなければちからなし、いそぎやりなぎなたをうちていだせ、いかにいかにと仰ければ、かぢどもうけたまはつて、御諚かしこまつて候へ共さりながら、くろがねなくしてなにをもつてけんけきをつくり候べきと申あげければ、はうぐわんきこしめしくろかねこそあれ、ぢ獄にをゝきかまふたを、ぬすみとつてうちいだすべし、さりながら是をぬすまんはかり事、いかゞせんとありければ、よしもり承てそのぎいとやすかるべし、きみの御かんどうかうむりて、むげんぢごくにすまいする、くまさかのちやうはんに、仰せつけられ候はゝ、とりゑんことはなにのしさいの有べしと申上る、是はよしもりやけじたの小六と申し時、たび〳〵の手がらみたるゆへに、今あんじいだしたると申候よしもりむけんにはしりゆき、ちやうはんをかたらひいだし、御まへにこそまいりけるそうかしらぬす人には、かいつかみのわし四郎、まどをのぞくはにらめく郎、ともを迷わすきつね三郎、てんひいなづまはたたがみ、せめくちの六郎わかたちなれども、石川五ゑもんまめいた、そのほかのこぬすひと、數をしらず皆御まへにかしこまる、はうぐわんあうせけるはぢごくにおゝき、かまのふたをぬすみとりて、かぢの手まへゝわたせよ、もし此ぢんにうちかちて、ぢごくをおさむる物ならば、いまよりいごわがまゝに、ぬすみを

せよとはうぐわん、じひつの御はんを下されける、ぬす人承はつて、此うへはならひしところのひじゆつをめぐらし、とりてあげんというまゝに、わが手したを三十人すくり引ぐして、ぢごくをさしてしのび入、おもふまゝにぬすみとり、かぢどもにこそあたへけれ、かぢはくろがねうけ取て、やりなぎなたわきざしを、うちていたすもとよりかぢは、上ずなりくろがねはまたぢごくにて、としひさしくたいたるくろがねなれば、かのもろこしになをゑたる、はんくわひちやうりやうがもちたるつるきにもおとるまじ、はうぐわん御らんあつてひやうくはしゆつたいしたり、かたときもいそぎ、ぐんひやうをとゝのへべしとの御でうなり、あべのなかまるをめして、吉日をゑらひぐんばいをくらせて、すでにうつたちたまひける、いせひほどこそゆゝしけれ

第三

ゑんまわうへよしよする事

さてそのゝちに、まづ大ての大しやうぐんには、九郎太夫はうぐわん、あく源太よしひら、うすひの御ぞうしきそよしなか、本ノマヽしんたよしさだきやうだい、さふうひ大しやうには、くすのきまさしげ、わだのよしもりひらやまのむしやところ、あかまつ本ノマヽとのそのせい以上十まんよき、つるきのやまのふもとをめぐり、ゑんまのじやうのひしがのもりにぞ、よりたりける、さてまたからめての大しやうぐんには、こまつのさんみしげもり、本ノマヽのとのかみのりつね、さつまのかみたゞのり、むくわんの太夫あつ盛、ひらのたかときさうまのまさかと、へいまのすけおたののぶなか、これらをし本ノマヽうていの大しやうとして、そのほかめん〳〵のともから、本ノマヽいゑ〳〵のはたおもひ〳〵のかさゑんを、本ノマヽ四でのやまおろしにふかせたるは、たゞりうしやのひるがへすかごとし、ゑんまのじやうのひがしにしへおしよせ、ときのこゑをぞあげにける、大山もくづれてうみに入かとをびたゝし、このこゑをきくよりも、一まん三千六ぢごくに、あるとあらゆるおにども、ゑんまのじやうへはしりあつまるは、たゞうんかのごとし、ゑんまわうのたまひけるは、ゆだんしてかなふまじとて、四ほうのもんをとぢ、かのよしつねはござか

しきものぞ、うつけてかこみやぶらるゝなと、いかりける所にかくてよせての大せい、弓てつほうをいてせむるといへども、百人千人のてつへきなれば、中々くにもせざりけり、はぐうわん御らんじて、さうしうのあさいなはなきか、此門やぶれと有ければ、たをるべきとはみへざりけり、おに共此よしみるよりも、あさいなは門をやぶるが上手なり、よつてかゝへよ物共とて、手にてを合ておさへけり、よせてのせいは是をみて、おりあふ物はたれ〳〵ぞ、あく七兵衛かげきよ、むさしぼう辨慶、あねはのへいじみつかけ、扨御所がたの五郎丸、うきしま太夫御ないきみをのや、しのふかわづとのをさきとして、をとに聞ゆる大力、ここをせんとおす程に、さしもにつよき門なれ共、ひやうぶをたをたすごとくに、天地にひゞきてたをれける、内にておさへしおに共はたゝしやばにてのすしのことくになりにける、ふびん成共中〳〵申はかりはなかりけれ

本ノマヽ

第四

しゆ天どうじらいくわうとくむ事

さるほどにのこりしおにども、ちからおよばすしもつてつでうかなひばし、ひつさげ〳〵わたしあふ、よせてのぐんびやうも、けんけきをそろへ、こゝをせんとゝたゝかう、兩ぢんにつくる時のこゑは、もゝてのいかづちのおつるかとあやしまる、かふうかふそのたゝかい、はうげんへいじのだいのみだれは、たゞきうぎうが一もうなり、しのぎをけづりつばをわり、きつさきよりもくわゑんをいだしこゝをせんどゝたゝかいける、かゝりける所に、そのたけいちぢやうばかりなる鬼、あくがうしんゑのよろひをきて、十のりけんをひつさけ、まつさきにすゝんでなのりける、そもそも是は大ゑ山にすんだりし、しゆてんどうじとはわか事なり、さだめてをとにもきゝつらん、てなみのほどをみせんとて、まつさきかけてみへにけり、つゞくおにどもたれ〳〵ぞ、てんちてんわうの御ときに、ふぢはれのちかたの御内にてなをゑたる、金おにかせおとおにをさきとして、もんぐわいさしてうつていづる、よせてのつわものども、此おにともにきりたてられ、ひきいろめになりにけり、こゝに身かたのなかよりも、むしや一きすゝみいでゝ大をんじやうに

てなのりけり、そも〳〵此ぢんにすゝみいてなをあげし、たむらのしやぐんとはわかことなり、てなみのほとをみせんとて、さきがけしてこそかゝりける、つづくつわもの誰々ぞ、みなもとのらいくわうさだみつすへたけ、つなきんときひとりむしやをさきとして、くつばみをそろへかけにけり、かゝりける所にどうじと、らいくわうわたしあふ、どうじ此よしみるよりもかたきは是ぞといふまゝに、らいくわうをひつさげたり、もとよりらいくわう、心のきいたるものなれば、うへさまに三かたなさす、ひつくみてどうどをつ、されどもどうじうへになり、おに一くちにくはんとす、つなきんときをりあいて、そのまゝどうじをうちたりけり、これをいくさのはじめとして、おにゝてなれしつわ物ども、おつつめ〳〵うつほどに、いかなるきじんもたまらずして、かせにこのはのちるごとく、みかたの陣へそ引にける、かゝりける所に、平三みのちうじやうしげひらさへもんともたか、みんぶしげきよ、かたきの陣やにひをかけ、三せんよきが、一しよになつておめきさけんでかけたりけり、をりしもかせはむかふかせ、ふせぐにかいのあらされば、すまんぎのおにども、一せんになつて、いつほうをうちやぶり、さんづの大川をうちこして、はしを引てぞいたりける、よせてのぐんぴやう川ぎしにうちのみ、本ノマヽわたらんとすれども水は深し、はしはひいたりふねはなし、向ふの岸には、ごづめづあほうらせつ、ゑんまだいわうしゆらかるら、おにこぶしをふつてぞひかへたり、かゝりけるところに、かぢはらげんだかげすへ、駒をなみさ本ノマヽにのり入て、大をんじやうにてなのりける、むかししやばにて、うぢ川のせんぢんのあらそひし、かぢはらげん太かげすへなり、しやはにてさゝ木にたばかられ、まうねん今にはれかたし、今此川のせんぢんするそといふまゝに、さゝめかいてぞわたしける、つゞくつわものたれ〳〵そさゝ木の三郎もりつな、おなじく四郎たかつな、田原の又太郎たゞつなをさきとして百まんぎ馬いたをくみて、たかいにゆはづをそろへ、あふそのゝはなにて浪をわけ、さゝめかいてぞわたしける、さしもにひろき三づの大がなれども、八馬にせかれて、したはかはらになりにけり、おにども是をみるよりも、川ぎしにうちかさねて、こゝをせんとゝふせぎけり、さすがになを

ゑしつゝわ物なれば、うてどもつけどものりこゑ〳〵かゝりけり、すでにおにども、ひきいろになりたる所に、てづかの太郎みつもり、おかべの六彌太たゞずみ、くまがへの二郎なをざね、さいとうべつとうさねもりおつつめ〳〵くむほどに、いかなるきじんもたまらすして、川ぎしにそひわれさきにとにけにける、此人〳〵のてがらのほどかんせぬものこそなかりけれ

第五

ちごくはめつ井ゑんま王とんせいの事

かゝりけるところにまたせつしうのぢう人、すいたの太郎さへもん、ゑたりやかしこしとせつのくに、かはちのひと人をひきぐして、つまり〳〵にをりあいておつ詰〳〵剌だりける、はぎとるとる物はなにになにそ、がうのはかりにくろがねのばう、しもつてつちやうかなひばし、よぼんのかゝみ、こしにまいたるとらのかわのひつしき、まてあまさすはいたりけり、そのときせつきやうのよ七郎、太郎ざへもんかわばしらに、一しゆのうたをぞかきにけり うた▲しやばにてもそのなをゑたる太郎左衛門、すいたみちとていまもはきけり、こゝにまた物のあわれをとどめしは、せうづかわにすみたまふ、うばごせにてとゝめたりぢごくはめつして、ものゝふひがしによりおしよせて、しやうづかわのすまひもたまらせたまわずして、たけつえにすがり、いづちともなくまよひいでたまひける、かゝりけるところに太郎ざへもんいであい、すでにはがんとしたりけり、うば此よしをみたまひて、われらうたいの身なれば、ゆるさせたまへとて、てをあわせたまへども、かつてみゝにもきゝ入ず、のこらずはいでとりたりけり、うばこゝろにおもわれけるは、かくあさましきすがたとなり、つれなきいのちながらへ、うきよにすまんもくちをしとて、ひだりのゆびをくひきり、あたりのいしに一首のうたをぞかゝれける▲いにしへははなのふきにしうは玉のかくなりはつる身こそつらけれと、あそばして三づの大がへ身をなけて、そこのみくづとなりにけり、是をみる人きく物、そでをしぼらぬものはなし、そのときゑんまわうはもといをきり、しゆつけしてかうさんなされていられける、よしつね御らんじて心に

しまぬだうしんかな、おそれながらそれがし、ゑぼしおやにならんとて、ふ正ぼうとぞ付られける、あまりにとしひさしき、ゑいぐわにあそびいたりける、ゑんまわうなれども、しやうじやうやこくそくのことはりをば、のかれたまはぬにや、すみのころもに身をそめて、あさましかりけるしたひかな、ゑんまわうのひ本ノマヽんほく、よしつねのゑいくわ、よもあしこゝにきはまれり、此ありさまをみるよりも、いにしへ一まん三千六ぢごくのありしとき、そのくらひしかいにきこへし、身のかくあさましきすがたとなり、いきてはなにのせんなしとて、ゆひさしわろう人おゝかりければ、ゑんまわうのうたに、しやくそんも、あみたもわれもおなじこと、いにしへはわういまは入道と、よめりけるとかやことに、ゑんまわうのくちすさみには、にあいたるといふ人もおゝかりけり、かくてはうぐわんうちとりしくびともを、じつけんあつて三づのかはらにかけさせ、しでのやまにあかり、ゆうくんあまためしあつめ、まふつうたふつさかもりし、まことにゑいぐわとなつて、あさゆふらくなきばかりなり、そのときしでのやまのなをかへ、それよりもしけりやまと申とかや、ちやうせいでんの内には、しゆんしうをとゝめふろうもんのまへには、日月おそしと申も、いま此ときをや申べき、めてたかりけるみよとかや、此ものがたりいかにして、しやばにながれをすると、たつぬればくらまのをくにすみたまふ、大てんぐおほしめすは、このあひだははうぐわんどのへ、ぶさたしてついにみまひを申さぬとて、さんせうの木のかはをはきあつめこのは天ぐにかつがせ、しゆらぢごくをさしてそ行たまひ、はうぐわんどのゝすみたまふ、門ぐわいにやすらひ、くらまより御見まひに參りたりと有ければ、ときは御ぜん聞召よしつねたゝ今はるすにて候へ共、こなたへ入らせたまへとて、女ぼうたちを出したまひ、なかのていへしやうしつゝ、めのとのぢじうにしやくとらせ、さけをさま〳〵にすゝめたまふ、ときはのたまひけるは、しやばにてよしつねを、くらまのてらにおく所に、なにかつけて、御ぼうのしなん有しゆへにより、おごるへいけをほろぼし、なをかうたいにのこす、みずからしやばにありしとき、御れいをも申さんを、御まへとくみのゝ國、やまなかじゆくにてことにおいまいうせしにより、の

こりおゝくおもひし所に、是迄の御見まひ、ま事にま事にくわぶんなり、しやばばかりにてもあらず、こゝにても又大將と罷成、ゑんまのじやうを打やぶり、むびらくと成ことも、是みな御ぼうの御をんなりとて、御ちそうなのめならざりけり、いとま申てさらばとて大てんぐはくらまにかへりたまひけり、ある人くらまへさんけいし、大てんぐにたいめんし、かくのこときの物がたり、承はると思へばゆめはそのまゝさめにけり

寛文元年巳九月吉日

山本九兵衛板

あさいなしまわたり

第一

こつかのせいすいを、くわんするに、そのしやうちよく成ときんば、まねかざるに、らいふくし、きよ成ときは、もとむれども、たいさんす、さるによつて、めんばんたる、くわうてうも、きうぐに止まるといへり、こゝに人わう、八十三代、つちみかとのぎやうに、あたつて、其ち天下の、ふしやうは、かまくらう大将、よりともきやうの、ちやくなん左衛門のかみ、より家こうとそ申ける、しかるに御ちゝよりともこう、げんりやく年ちうに、をこりしへいけを、ほろぼしたまひ、みかとのゑいかんあつうして、六十六か國のそうついとうに、ふせられ、あまつさへ、せいしやうぐんの、ふ將にそなわりたまひしより、天下一かうに、おさまり御子より家こう、あひついで、四かいたな心に、おさめたまへば、あめかしたのしよ侍、かまくらにらいふくして、きみをしゆごし奉る、有時大將、しよ大みやうこと〳〵く召れ、きん年はこつか、たいへいにおさまり、ときつ風もふかさるは、ひとへにめん〳〵のゆふりき、つよく天下をたいせつに、おもわるゝゆへにて有、一は大ほさつの御かごたり、つるがをか八まんぐうにさんけいいたし申べし、やういあれとの御でうなり、みな〳〵でうい承り君の御とも仕り、上下さゝめきわたりて、わか宮さしてぞ三重參らるゝ、御まへになれば、こくどあんをんちやうきうに、まもらせたまへと、さま〳〵御きせいまし〳〵て、御ざになをらせたまへば、わだちゝふさゆふにして、其外の、大名小名花をおり、もみぢをかさねし、しやうぞくにて、二ぎやうにひつしと、なみいたり、かくてかんぬしまさうぢは、へいはくを大ゆかにさゝげ、かぐらをの子はとびやうし合、をとめのたもと、ひるがへし、すでにみかぐら三重はじまりける、あら有がたや、しんれいおとめにのりうつり、こゑを上てしんたく有誠に、ふ將の身として、あゆみをはこびたまふ事、しんりよもなとかのふじうなからんや、こゝに一つのなんぎ有、是よりいづのをき八でうのしまよりす百里みなみにあたつて、大山一やが内に出來す、かのし

まはせいなんきまん國よりつゞきたり、きわうがけんぞくあまたきよぢうし、あしわら國をせめとらんと、ひやうでうす、少もゆたん有ならば、ちかき内のさいなんたるべしと、あらたにしんたくまし〳〵て神はあからせたまひける君をはしめ奉り其ざに有あふ人〳〵はこはそもいか成ことやらんとあんしわづらう折ふしにわかにそらかきくもり時ならぬ大ゆきふりはん木せんそうしろたへにふゆのけしきと三重なりにけりかゝる所に其たけ一丈あまりの大ゆきひびきわたつてどうどおつるわだちゝぶ君をしゆごし申されしがいかに若侍其ゆきわつてみたまへそれそれと有ければいつの國の住人お山のはん官きよたか心へたりと太刀ひんぬいてかゝりしがふしぎや此ゆきしきりにうごくとみてさきへはすゝますしりまいして立にけるあさいな一もんしにかけ出たとへ此内に十丈百丈のあつ(本ノマヽ)すみてあればとて侍ががんせんにてじこくうつすはをとなげなしそこのきたまへきよたかと太刀ひんぬいてをどりかゝつてちやうと切ゆきの内よりもはくはつたるきぢよあらわれあさいなにとんでかゝるゑたりやあふととびちかへむんずとくんだをりあふ物共それあますなと立よるをあさいなが手にかけとつたるをみすましあますなうてとは近頃おこかましきふるまいかなとて物の事にしやうぶの付までけんぶつあつてたまはれと四かく八めんにいかりをなしるいや〳〵とねぢあいしがすきをうかゝいたゝ中をつゞけさまにとをしひるむ所をはねかへしのどぶへ三刀さし只今のくせ物あさいなの三郎打取申て候とたからかによばわつたり君をはしめ諸侍あつはれかう成よしひでやと一どにどつとぞほめられける扨其後人〳〵我も〳〵と立よりみればせいたかく色しろく両がんは日月のことくかゝやきさもすさましきけしやうなりつたへ聞ゆき女とはかやうの物にて有べしとしたをまいてぞおわします大将ぎよかんあさからすせん代みもんの高名かなそれそれとのたまへば承り候と源氏重代すいげつといふ御はかせを下されける其時しげたゝ申されしは誠にふうはたいらかにしてかんくわをふくろにおさむる所にかゝるふしぎ出來する事是只ことにて候まし然共我てうは神國としてしよじんちをしめしたまふなかんづく大ぼさつは忝も其すいしやく三所にちうあ

いしんくうおうふじん三くわうのぎよく體たり三ゐのをもとをあらはしたまひ百くわうでんこのちかいをおこして一天せいひつのめぐみましますかるがゆへに本てうのそうひやうたりけんせゐんをんのはうべんはくわんをんせいしじんりきをうけたまふごせうせん所のりやくはむりやうしゆ佛のちかいをほどこしたまふゐふぎてもしんすへきは此御神にて候取わけげんしをまもりたまかばなどかのふじうなからんいそきしんちよくにまかせけとうついとう成さるべしとつゝしんで申されける君聞召然べきうやにはからいたまへとのたまへば其時判官きよたかすゝみ出申上其ぎにて候はゝむかしもためしの候い國のむくり此國をとらんとはせ渡り候時にゆり若大臣ちよくせんのかうむりたまひすまんぞうのびやうせんをさしむけどうと日本のしほざかいちくらが沖にてたたかいついにはいくさに打かち給ふかゝるれいきも候へばすまんぞうの舟をもよほしつわ物ともをさしつかはしそくしについとう成さるべしとはゞかりなくこそ申けるあさいなもくねんとして聞いたるがつつといて申けるは尤判官の申されでう然べうは候へ共其物語はそれがしも少承り及候其時いこくのゐびすまわうのほうをおこないこくうにどろをふらしじうやの闇となせし時大臣日本の方に打むいいせ大神ぐうをはしめ奉り六十よしうの大しやうのじんぎにきせいをかけしんりきをもつてついとう成され候とこそ承れいわんやかの嶋はせいなんごくにつゝきたると候へば日本國のせいをそろへす千萬ぎにてよせたり共ぼんぶの及へきともおもはれず候なかんづく程もしれざるふうはゝげしきかい上にあまたのぐんさしむけられ候事もつての外の御だいじ只一人なりとも神力をひたいにあてうんを天にまかせ力をねむにおさめ一しんをほぞの下におとし付はせむかつて候はゞすまんのげどういかりをなすとも何程のことの候べしとさもいさぎよくぞ申ける判官聞て扨も扨もかい〳〵しきしんていかなして御へん一人はせむかいきわうをしたがへたまふべきかとあさけるやうにぞ申うけるあさいな聞も敢ずおゝこうでにおぼへか有御へんのやうにたにしか尻まいすることくおとりやうは存ぜず候あはれ此よしひでに仰下さるゝ物ならばかのしまへはせわたりをとに聞へしきまん

國のきわうと力の程をためしびんぎよくはいけどつてかまくらづとにいたすべしうんめいつきはてうたれ候とも少もうらむることらあしひに入水にてはつるもみな是さだまるごうにて有おそれおゝくは候へとも此たびの打てにはそれがしに仰下れ候へとさいさんしきりに申けり判官もことばをつかんとおもひしがなにしあふたる荒物なれば悪かりなんと思ひきかぬかをにていたりけり一さの人々もあまりに大ぎやう成事なればめとめをみ合とかふ申人もなしやゝあづて大將の御詞にはさ程におもひ立ならばごにちのあんないしやのためしまのやうをみて參れとの御でうなり忝と御前を立君御らんじしらく〳〵かど(本ノマヽ)ん出いわふてゐさせんと御さかつきにあいそへこかねさねの御よろいを下されけるあさいな三どちやうだいしつあはれみやうがなき御事かな是みたまへ人人きうばの家に生れ來りし方々は此あさいなにあやかりたまへかゝるくわほうのせんびやうなればかのしまにわたつてきじんをやす〳〵したかへ二たび御めに掛るべしをいとま申て我君さまいとま申てはうばい達をの〳〵御めん候へといそぎ御前を罷立我やをさして歸りけるかのあさいながふるまいじんありぎありゆふありとてみなかんせぬものこそなかりけれ

第二

判官むほん并あさいなてがらの事

あさいなの三郎よしひではぢこくうつしてかなわしと君より下したまはつたるこかねさねのはらまき四尺八寸の大だちはきしげとうのまん中にぎり我にをとらぬらうとうにかみばらこ藤太ため久とたの平六くもみの源藏いわさきひやうごみつしげとて一きとうせんのつわ物思ひ〳〵のしやうぞくにて一めんになみいたり去間よしもりは一もん兄弟引ぐし中のていに出給ひ人〳〵にたいめん有いかにあさいなこんどの大將給はる事一ゐに家のめんぼくたりずいふんちうをぬきんでめでたくがいぢん致すべしと御さかづきを下されけるよしひで三どちやうだいしきよいのごとくそれがしかやうの打てにむかふ事正八まん大ばさつの御かごと存候身にあまり忝候と三ごんく

んでさらりとほし扨なみいたるろうとうにも次第にさかづき給はりおいとま申てさらばとておや一もんにいとまをこひしう〳〵すぐつて十三きけんじん二年五月三日にかまくらをうつたつていづの國へぞ三重いそぎける是は扨置お山の判官きよたかは本國に歸りしがらどうともを近付こんどそれかしかまくらにてあさいなにあざけられ口をしくは思へ共君の御まへをはゞかりむねをさすつてひかへたりかれかこんどの打てを望はせむかふはひとへにぐにんなつのむしおのれとひに入かごとしいきて歸らんことは萬が一つもよもあらし然共我てふは神國なればしんりきほうべんにてかの島にわたり千に一つもりをへて歸る物ならばいよ〳〵君の御きしよくあつうしてなを一天にふるまわん其時はそれかし大名かうけの付あいにもきやつめにせばめられんも口をしかるべししよせん此たび道に待うけじんしやうにや一ッいかけはら切てしぬべきなりやういせよとぞくるいけるらうどうの其中にさは村傳次ともみつすゝみ出て申やう御上にては候へ共君のおぼへめでたうして罷むかふあさいなにやをいかけ給ひなばかれにいしゆ有とはしらずして一ゑに君に弓引給ふぞと人の申べし只此事においては思ひとまらせたまへやとりをつくしてこそせいしける判官おほきにいかつてやあおくれたるともみつ命をしむ時にこそ君にもしうにもおそるべけれ一命をすつる上は天下におそろしき物はなし思のまゝにし仰しゃて跡にてむほん人といわれんは侍たるみのほんいなれなんぢらたのまれ申さずはそれかし一人待うけ本望をたつせんとかけいでんとしたりしをともみつたもとにすがり付しばらくとゞまりたまふべしさ程に思召さるゝ物ならば年頃御をんゑたるみが何とてそりやくに存べきとかう申も君のためぎよいにしたがい申べしひらに〳〵とをしとゞめやう〳〵になだめ申けるはさすがにあさいなは天下になをゑし物なればちりやくをめぐらし打申さんさいわいかのしまはたう國しまだのうらよりあんないしやをもつてわたるよし承る然らばかのうらのしやうじか本に一しゆくいたしあか月のあらしを待うけんと何心もなくあらん所へ時分のうかゞいふためかん其時あし本より鳥の立ごとくはた〳〵もとみ合かたはしより打取らんに何のしさいの候べ

きと手に取やうにぞたくみける判官聞てゑみをふくみやあをとたかしともみつ是に上こす事あらじいそぎやういをいたすべしとくつきやうのつわ物八十よきひそかにせいをもよほして今や〳〵と三重待いたり是は扨置あさいなの三郎よしひではしもだのうらに付しかばしやうじが本にぞ入にけるあさいな申けるやうはいかにしやうじ明日そうでんにしゆつせんいたし申べし其心へ有べし承り候といそぎやういをしたりけりすでに其よもやはんばかりの事成にかたきのぐんびやうをしよせ二ゑ三ゑにおつ取まわして時のこゑをぞ三重上にける思ひよらざる事なればうへを下へぞかへしける五藤太おもてにかけ出何者なればらうせきやなのれ聞んとよばわりけりよせてのかたよりぬしはたれ共しらね共むしや一きかけ出ことあたらしきといことやいしゆあればこそよせてはあれなのるまで有べきかたう〳〵はらを切べしと大をん上にてよばわつたりあさいな聞もあへず定めて是は判官めが御前のいしゆをはらさんためによせつらんゑゝやさしきおのこかな先それがしあらごなしてゑさせんとてつのばうをつ取のべほのくらき所よりてきのうしろへまわり門ぎわへつめかけたるやつばらかたはしよりはた〳〵とみちんのごとく打ふする此いきをいにみかたのせい我も〳〵と切て出で花をちらして三重たゝかいけるさしもよせて大せいとは申せともみかたのつわ物一きとうせんの物共なりことに天下むるいのあさいなに切たてられおもてを合物はなし爰に判官かろうどうさわ村傳次ともみつしやていみつひろ兄弟いかにもしてあさいなを組とめんとかなたこなたとかけまわるあさいなも大将判官をいけとらんとおもひしのび〳〵にたつねける兄弟みてすはあさいなとはしりかゝつてむんずとくんだよしひでみてこは何するやせかれのふんさいにてみたくもないやつばらかな八まんぢごくが望かと取ておさへひざの下にひつしきそれ〳〵たいまつたいまつ今宵のきやくしんのおもての様をみしらんたいまつふりたてみてあれば判官がらうとうなりゑゑすし（本ママ）なうぬしが此あさいなをとろうやゑゝたいきなやつたひとへにおのれはとらとねつみがくび引するよりもつとちがをいさこぶしを參らせんと二人共にくびふつつ〳〵とねち切跡にのこりしやつばらた

うざいへばつとをつちらしきじんたいじのかどん(クマヽ)でよしとよろこびてつわ物共を引くしせいなんごくへそいそぎけるかのあさいなか有様あつはれこゝちよき有さまやとみなかんせぬものこそなかりけれ

第三

あさいなまこくにわたりきじんを打事

よ打いつてみだるゝをこと〳〵く打したがへきつきやうめでたき次第やとみな〳〵舟に取のりて風にまかせていそきける日かずやう〳〵かさなりてくだんのしまに付にけり舟より上りみわたせはせきがんがとそひへさもすさましき有様なりみねにわけ入さかりみてあれは白うん跡をうつんではゆきかふみちもさだかならずせいがんゆめをやふつては其をもかけもみへわかす誠に佛もとわせたまひししよあしゆらたうこざい天かいへんとてしゆらの三あく四しゆはふか山大かいのほとりに有とのへたまふがもしも我〳〵其三あくたうにまよい來て有けるかとさしもかう成物のふもむね打さわぐばかりなりされ共我れ我れにをいてたとへ十丈のあつきなり共などか取ひしがて有べきかとなを山ふかくぞ入にけるかゝりける所にきわうがけんぞく其かずあまたいてむかつてあらふしぎや此間はなかれ物もなかりしにいて〳〵さかなたくわへんと我も〳〵と取よつて手ごめにせんと取ひしくよしひでしう〳〵ちつ共さわかすめとめをきつとみ合いできやつばらをたゝ一はねにはねちらさんとれいの大だち大長刀ゑ物〳〵をおつ取のへ三重こゝをせんとそないたりけるてもとにすゝむあつき共其かすあまたなけちらしと有所にさつと引さあらぬていにてひかへたりけんそく共あきれはていや〳〵此物共は人間にてはよもあらじ上へ此よし申さんときわうの御まへに參此よしかくとぞ申けるきわう聞てそれはいか成物やらんこなたへめせかしこまつたりとてあさいなに近付此由かくと申よしひで聞てあふたとへよばずとゆかふず物をとらうどう共を引ぐしきわうのまへにぞ出にけりきわう是をみていかに方〳〵此しまは人間かいにあらずたやすくわたる物はなし只今けんぞく共が物せしは力においてははしかり(ヤヽ)がたしとなおふ聞に付てもおそれ入て

候へ但はきわうが打てのためにわざと是まで來か有のまゝに申されよきじんにわうどうなければせいきのむねをたゞしたまへなどこなたよりしやあくのしよいの有べきやとことばをたゝして申さるゝあさいな聞てあふよいすい〳〵それがしはあしゆら國にかくれなきあさいなの三郎よしひでと申物なり我此所に來事よのぎにあらず此しまにげだうのきわうすまひをなすよし聞しめされもの有さまみて參れとの上いをかうむり是までわたり申なり誠にあしわら國にうしろを合てゆみをひかんとの心ざしやましますかそなたより申されよさあらんにをいては一〳〵ちうばつのじせつはくびすをめぐらすべからずとあらゝかにぞ申けるきわうをはしめけんぞくどもしたをまいてぞおそれけるやゝあつてきわう扨〳〵御ぶんはけなげにみゆる物かな此きわうがまへに來つてすみやかに物いわん物はおほへず今のことばのやさしきにそれ〳〵ひきいで物を參らせよ承り候といしのかろうとけんそくあまたにてかき出るきわう申けるはいかにあさいな其かろうとの內にほうじゆとかうし我等が國にならひなきてうほうの玉有只今のかうけんにそれよつて取たまへあさいな聞てあふてうほうならばたまはるへしそれ五藤たよつて取かしこまつてため久つとより右のあしにてゐいやつとふみければみじんにくだけて其中にあたりもかゝやくほうしゆ有やかで玉をぞ取たりけるきわうあきれていふけるは又爰にとううんけんとてりうのこまを持て候是たぐいなきめいばなり所望ならば參らせんよしひできいてそれこそ望所なりそれ參らせよかしこまり候とけんぞくあまたにて引出す　きやうよのつねの馬にかはりきわめてふとくたくましくしゆみのかみはあく迄ながくせなかはりやうのごとくにて四十二めひきけをまきりやうのみゝは竹をそぎしきに矢をさすがごとしさうのまなこはあさひのかゝやくにことならすたつなにはくさりをゐつて付たりあさいなきつとみて我をきやつにはませんため成べし一ばんのつてみせんとたづな打かけひらりとのつたあぶみふみしめまへゝすこしのりすかして馬のかしらをもたげさせみたる所は兩のみゝは九ほんのとりいとくわんじひやうし馬の心と一しんにしつ〳〵とのりいだしたづなひつかへしわのりをくるり〳〵と二三へ

んめぐりかさね〳〵の御ゐんしんよろこび申候と有こかげにしつ〳〵と立歸るきわうせんほうつきはてけんぞくす丶み出あしわら國の物共は女にふけり申事よのつねならずきわうのびぢよと身をへんしさけをしいてやす〳〵と取ころさせたまふべし尤此ぎ然べしとそれよりもあさいなをおくのていにぞしやうじける其後びんづらゆふたる大女房しろかねのだいにこがねのさかづきすへるりのちやうしに酒を入あまたの女房にけまんやうらくさしかけさせあさいなのまへに出いかにとのばらきわうみづから立出御しやくをも申べきか御きうそくのためなればわざとみちかき女房をさしこされて候あはれ一つこきしめされて御つれ〳〵をはらされよあさいな聞てまさしく是ははかりこと丶おもへ共をくしたりとおもわんとさもうつ丶なくもてなしてすでにしゆゐんぞはしまりけるかくてぢこくもうつりければさすがにたけき物のふもむみやうの酒にゑい來りとろり〳〵とねむりけるあやまたずまくら本に立よりあらうつ丶なやといふよりはやくあつきとなりあさいなにとんでかゝるさつ（ママ）しつたりとむんずとくみ太刀ひんぬいてきじんのまんなかさしとをせばたふさを取てあからんとする所を四人のらうどうはしりかゝつてずだずだに切たりけりそれよりをくにみだれ入のこりしけんぞく四ほうへばつとをつちらし國もとさしてをもむきけるかのあさいながてがらの程いこくはしらずほんちやうにためしすくなきゆふしやとみなかんせぬものこそなかりけれ

第四

あさいな歸國致し舟中にてこくうニうする

あさいなの三郎よし秀はま國ゆしゆつのげだうばらおもひのまゝに打したがへみな〳〵をくり舟に打のりをいてにまかせほうを上ほん國さしてそわたりけるこぎゆく舟のならいとて跡はかすみにへたゝりて入日をあらうこれやこのおきつしらなみしつかにてせんちうの人々みなばんせいをぞつらぬけるあさいな申されけるやうは我身ふ將（ママ）なからこんどの打てにまかりむかいしそんずる物ならば我みのことは申に

及ずおや一もんにもちじよくをあたへながき家のきつな（本ノマヽ）共成べきにしんのはたらきゆへおもひのまゝにし仰（本ノマヽ）あまつさへ我てうにるいなきちやうほうをゑたる事是みなぶりやくのたつせしゆへにて有かた〳〵いかにと仰けるらうとう共承り仰のごとくたうじ天下に弓取あまた候共君にましたるゆふしや又一人も候ましい國ほんてうになをあらわしたる田村としひとよこ將軍まさかどすみとものゆふりきもいかで君にはよもまさしと口をそろへ申けるあさいな聞てげに〳〵たうけにをいてわれにうへこす弓取はよもあらじとが慢の心ぞいでにけるあらふしきやにわかにそらかきくもりなみ風しきりにあらふして船をゆり上ゆりおろし船中の人々あはてひしめく折ふしくろくも一むらまいさがりいづく共なく大の山ふし三人來ていかにあさいななんぢ此たびのはたらきひるいもなき所なりとて物ごとに我等がすみかに來つゝかふりきをはけむべしといふよりはやくひつつかみくもにまぎれて三重あかりけるせんちうの人々是は是はとばかりにてあきれはてゝぞいたりけるあゝさてしなしたり〳〵さしもたけきおにかみだにもしたがへさせたまふみがいか成天まのあまくだりいつくへか行けるぞ扨も〳〵口をしやとさしもにかう成物共もたがひにめとめをみ合てこゑを上てぞなくばかりをつる泪のひまよりも君をうしない申つゝへんしもながらへ何かせんいざ我々もはら切てしでの山の御ともせんと太刀のつかにてをかくる五藤太是をみてしばらく〳〵かた〳〵よ心をしづめてたしかに聞我我是にてあいはてなばたれあつて君の御事申上ん物もなくたゝいたつらにはてたりといわれん事もむねんなりまつ本國にかへりしゆくんのおまへに參嶋のていをも申上かたみなとを奉りはら切てしぬべきなり是にてはつるはいぬじになりひらに〳〵とりつくしてこそせいしけるのこりしらどう（本ノマヽ）さしあたるりに力なくむねんながらもじがいをやめられ惜からざる命をなからへ本國さしてぞ三重かへりける國にもなれば一もんの人々めつらしや方〳〵さてあさいなはとのたまへば四人物共とかうのへんとう申かね泪にくれていたりしが扨も〳〵めんぼくなき仕合にて候かやう〳〵の次第にて君は行方しらずうせたまふ我〳〵もだうしよにあいはつべく候へ共此事申上げ

んため是まで参候ときじんのくびならびにりうばをさゝけ今はおいとま申とて四人一所にはら一もんしにかき切あしたのつゆとぞきへにける人〳〵ゆめの心ちにて是は〳〵とばかりなりしばしきへ入なくばかりよしもり泪のひまよりも扨も〳〵あさましや此たびの打てにむかいいきて歸るはふ(ママ)將なりとかねては思ひさだめしがおもひのまゝにおにかみをも打したがへおもわぬあくまにとられしことのあさましや扨もほいなき次第やとたをれふしてぞなけかるゝけにことわりとぞ聞へけるおつる泪をおしとゞめあゝ扨みれんの我心ぶしたる物のかゝる所にて命をすつるはならいなりことにきじんを打したがへかゝるめいばをはんてうへわたすこと是たぐいなきかうみやうなりたとへぬしこそかへらす共家のたいけい是にすぎずまづ〳〵君へごん上せんそれこしらへよとのたまひてせきくるなみだをおさへつゝともあまた引ぐしてかまくらさし御所へぞ三重いそぎける爰にあわれをとゞめしはあさいなの母上にてしよじのあはれをとゞめし(ママ)たり其折ふしは風のこゝちとのたまひて折ふしなやませたまひしが此事聞と一しほにきもたましいもきへはてゝふししづみてこそおはしますやう〳〵心を取なをしのふいかに女房立(ママ)あさいなは此よをさりて有とのふ扨〳〵ふびんの事共や何れのかたにはあまた子を持たまひしがあさましやわらははかれ一人を天共ち共頼しに今よりのちはあさいな共よしひで共たれをかさしていふ(ママ)なぐさまんあらうらめしのうきみやところを上てそなげかるゝよそのたもともぬれぬべしあまりの事のかなしさに人めもつゝますころを上かれにはなれて今ははやつゆの命もをしからじなむ十方の三せ佛ねがはくは今一どあさいなにめぐり合てたひたまへわらはが命を取たまひおやこ一所にむかへとらせたまへとくどきなけかせたまひつゝふししづみてこそ三重おばしますしよしのあはれと聞へけるあらいたわしやなよしもりは御前にもなれば其日のたうばん高はしごん太兵衛をもつてきじんのくびならひにりうばをさゝけ事の次第をごんす君をはしめ奉り御まへしこうのしよ侍はつとをとろき扨もかう成ゆうしかな扨も〳〵ならひなき侍をうしないけるこそむざんなれとみな〳〵そでをしほらるゝ君御なみだのひまよりもいかによし

もりあさいなは行へしらずなりさぞふびんにおもはれん去るしやでうりのならひなればおもひ切たまへつきてはきじんたいじの其上天下にむるいのりうばさゝげしだん一しほしうちやくせりあさいな歸りて有ならばくわぶんのをんしやうるさすべき何れかさねてさたすべしまづ〳〵とうざのしるしなりといづの國にて五百よてう下されける忝と御せんを立人人にいとまをこいみうらをさしてかへられしかみちすがらくどきことこそあはれなれかく有がたき御なさけあさいなもろ共承る物ならば今のおもひはよもあらじあはれぶつ神三ぼうも是をふびんに思召あさいなうきよに有ならば今一度本國へ歸してたべ抑々なむいせ大しやう太神ぐうわか宮八まん大ぼさつこゝとにはうぢ神はこねのごんげん日本六十よしうの大小のじんきとふかくきせいをかけたまひなく〳〵三うらへ歸られけるかのよしもりの心の内たゝよの中の物のあはれは是成はとみなかんせぬものこそなかりけれ

第四

あさひな本國に歸り敵判官をうつ事

お山のはんがん清高はらうどう共を近付こんどあさいなあくまにとられ申せし事われ天たうにかのふゆへとおぼへたりかれがぶじにて歸りなばみの大事と成べきに思ひの外成仕合かなしかのみならずをしよせしことようちかけの事なればたれともぬしはしれざればこそ今にさたもなき上は君にちうをつくしをりをうかゝひざんげんし三うら一もんの物をなき物になし日頃のむねんをはらさんとも人あまた引ぐしてかまくらさしてぞ三重いそぎける御所にもなれば君の御まへにつゝしんで申上こんどあさひな行へしれずなり候に付よしもり君をうらみ申よし其かくれ候わす御ゆだん有ましく候とちうしんがをにて申上より家頼聞召誠によしもりはす代のちうしんたる物なればさやうの心は思ひよらぬ事なれ共去ながらかはりやすきは人の心まづしばらくはしゆつしをとめさせよとの御でうにて御ざを立せたまひける判官しすましたりとよろこひて三重我やをさしてぞ歸りける是は扨置あさいな三郎よしひではこくうをかける心ちしてゆくへもしらずまよいけると有せきざん

にやすろうとおもひし時きやくそう申けるはいかにあさいなよく聞こんどだどうしたがへしなんし一人のふりやくにあらすそれ日本はしん國たるによつて忝もしよ神なんじかかげみにつきそいまもりたまひしくりきによつてさし物のあつきやす〳〵とほろびしをいかにや我一人と思ふ大がまんの心有其あくしんをしつめんため是までひつたて來たり今よりのちはかまん心を打すてきうばの道をみがくへし今はこきやうへ歸るべしといふこゑともろ共にこくうをさしてとびさりぬあさいなはゆめのさめたる心ちしてたゝほうせんとあきれとほうにくれていたりけりしばしあつて心を付こはいかになむ三ぼう此頃つねならぬ物と付そいたりとおもへば扨は天ぐにとらわれて有けるなよし〳〵是とてもそれがしががまんの心をしつめんとのほうべん成とや是八まんの御かごたり扨いづくてか有らんとかなたこなたとまよひしかともしひかすかにみへしかば此ひをたよりにゆきみれはひたちの國つくばさんにておはします扨は日本のちに付けるなあら有かたやとふしおかみとふかことくにそれよりほん國さしてそ歸りける是は扨置いたわしやよしもりはねいしんのざんによりしゆつしも今はとをくなり一もん兄弟めしあつめいか成ことにか扨も〳〵君の御きしよくそんじけるそや是ざんしやのゆへ成へし是に付てもあさいなうきよに有ならはか程まではよもあらじ何とか成て有やらんあゝらこいしのよしひでやとなけきくらしたまいけるやはんばかりの事成に門ほと〳〵とをとつるゝ番のもの共たそとたふいやあさいなにて有けるは爰をあけよと申けるばんの物共きもをけしこはいかにあさいなどのはけしやうにとられむなしくならせたまふみが何とて御歸り有べきぞへんげの物にて有べしとふるいわなゝきいたりけりあさいな大きにいかつてやあをのれればらよしひで歸りて有に何とてもんをひらかぬぞと大のこゑにていかりけるばんの物共いよいよおそれ物をもいわずあきれはてゝいたりけるあさいなはらにすへかねゑゝこはいか成ことやらんとそうのとびらをゑいやつとをしやぶりやがて内につつと入あさいな歸りて候とたか〳〵によばわりける一もんの人々ゆめうつゝ共わきまへずする〳〵とはしり出ゆんでめてに取付てなきふし是は〳〵とばかりにて

よろこひ泪をなかさるゝよしもり泪のひまよりもをことにはなれ物うきよ君の御まへもよからず此ごろはへいもんして有けるはあさいな承り扨はさやうで候かこれざんじやのゆへにて候べし御所に上りざんじやうの口をためし申べしさいわい此たび寶珠を持さん仕りて候とくわい中より取出し人々にみせ奉り此めい玉を君にさゝげ御まへにてとがなきむねを申上ざんじやを申うけんと御まへを罷立取物も取あへず三重かまくらさしてぞいそぎける御所にもなればくだんのほうしゆを持いそぎ御せんにさんぜうす君をはしめしよ侍是は〳〵珍らしのあさいないつくよりきたられしぞ扨もめでたきこと共やとをの〳〵れいきをのべらるゝよりいへおゝせけるやうはまことにあさいなはなき物とおもひしに二たひ歸るうれしさよさてよしもりが喜ひ申さん中〳〵のうきなんにあひ心くるしくおもふらんきうそくせよとの御てうなりあさいな承りおそれながらごんじやう申候おや一もんの物共を御まへにめされん由いか成御しんていにて候君聞召御へんが歸らぬに付よしもり我にうらみをふくむときゝつるあひた此頃へいもんさせてありけるはあさいな承りさてざんじやのわざにて候なまつおほしめしわけ候へわれらの家と申はせんぞ三うらの平太夫よりあいつゝいてけんしにつかへ申候ことにせんくんよりともこうさうしういしばし山にてはたを上させたまひし時我等の親おうぢ忠をぬきんで候こと是かくれ候わす然るを今わつかのざんけんを御しやういん有こそなさけなけれ其ざん者はいつくに候たゝいま御せんにめされじつふを聞召分られつみにふせられ候へとつゝしんて申上るをりふしはんくわん御まへにありけるがすゝみいていかにあさいなとうけに忠をつくせし物は御へん一けにかきらすあまた候其中にことあたらしき申でうかなさてよしもりのしんていもなきことは人も申まし親の心子しらすといふこと有よつくせんぎあつてみたまへあさいな聞て扨かくのたまふはたれ人ぞやあお山のはん官成か御へんは今までなからへ御前に有よな近頃命みやうがなおのこかなと大のまなこにかどをたてにらみ付てぞ申けるはんぐわんきいて我御ぜんに有がふしき成かあさいなきゝもあへず御へんもたれにむかつて申けるぞいつれも御聞わけあつてたま

はり候へそれがしでういをかうむり罷むかふ所にしもだのしゆくへよ打かけにをしよせそれかしをうたんとせしをそくしにかけちらし候へばよとうやまたちのていにもてなしにげさつて有けるをはやくもわすれて有けるか其むねんをはらさんとおもひそれがしが歸らぬをさいわいに思ひ親一もんの事をざんげんして有ける扨も〳〵よつくたくみし物かなやあきよたか一ごんなり共へんとうあらは申てみよやれ判官とたゝみかけてぞ申ける判官もごんくにつめられとかうのへんとうにも及ずたゝしほ〳〵としていたりしか今はのかれぬ所とおもひ太刀ひんぬいてあさいなにとんでかゝるをゑたりやあふとひつつかみひざのてに取てふする君御らんじてせんだいみもんのくせ物なり心のまゝにおこのふべしかしこまり候とてくびねぢきつてすててんけり扨此たびのくんかうにいづの國にて三千丁をくだされける忝と御せんをたち一るいついとうしてすへはんじやうとさかへけるせんしうばんせいめでたきともなか〳〵申はかりはなかりけれ

寛文二年壬寅六月吉日　　太夫直正本

新群書類從第九終

明治四十年六月二十日印刷
明治四十年六月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會代表者
編輯兼發行者　市島謙吉

東京市本所區番場町四番地
印刷者　本間季男

東京市本所區番場町四番地
印刷所　內外印刷株式會社